

# 西野々遺跡Ⅱ

高知南国道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ  
(高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ)



2011.1

高 知 県 教 育 委 員 会  
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター







# 西野々遺跡Ⅱ

高知南国道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ  
(高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ)

2011.1

高知県教育委員会  
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



## 序

財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターでは、平成16年度から高知県教育委員会が国土交通省四国地方整備局の業務委託を受けた一般国道55号自動車専用道路(高知東部自動車道)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施しております。この事業には高知南国道路と南国安芸道路の二つの自動車専用道路が含まれ、今回報告する西野々遺跡は南国市大埴字西野々・竹中に所在し、高知南国道路計画路線上に位置します。

高知南国道路は高知ICから高知空港ICを結ぶ全長15kmの自動車専用道路で、工事路線には西野々遺跡を始めとして多くの遺跡が所在し、平成16年度から発掘調査を行っています。平成19年度には『西野々遺跡Ⅰ』の報告書を刊行しました。今回の報告書が高知南国道路関係では2冊目に当たります。

遺跡は縄文時代前期前半までに形成されたと考えられる沖積扇状地および自然堤防状の高まりに立地する弥生時代から近世にかけての複合遺跡で、今回報告する調査区からは弥生時代から中世に至る灌漑用水路とみられる数多くの溝跡が確認されております。また、古代の官衙関連建物跡や中世の屋敷跡さらに周溝を持つ土坑墓なども検出されており、西野々遺跡を評価する上で、貴重な資料を提供しています。

本書が地域の歴史解明や考古学研究の資料、さらには埋蔵文化財の保護に繋がれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたっては、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所、南国市そして地元の関係者の埋蔵文化財に対する深い御理解と御協力を賜ったことに心から謝意を表すると共に、調査、報告書作成では関係各位に多大な御指導並びに御教示頂いたことに心より厚くお礼申し上げます。

平成23年1月

財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター  
所長 小笠原 孝夫



## 例 言

1. 本書は、(財)高知県文化財団が高知県教育委員会の委託を受けて平成16・17年度に実施した西野々遺跡の発掘調査報告書(『西野々遺跡Ⅱ』)である。
2. 発掘調査は高知東部自動車道高知南国道路建設に伴うもので、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが調査主体となり実施した。
3. 西野々遺跡は高知県南国市大桶字西野々・竹中に所在する弥生時代から中世にかけての集落遺跡であると共に古代の官衙関連遺跡で、今回報告する第Ⅲ調査地区(Ⅲ区)から第Ⅴ調査地区(Ⅴ区)の発掘調査延べ面積は19,681㎡であった。
4. 発掘調査・整理作業は次の体制で行った。

平成16年度

総 括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 川村寿雄

総 務：同次長兼総務課長 久川清利，同主任 池野かおり，同主幹 長谷川明生

調 査 総 括：同調査課長 横山耿一

調 査 担 当：同調査第四班長 廣田佳久(Ⅲ区担当)，主任調査員 曾我貴行(Ⅰ区担当)，同調査員 小野由香(Ⅱ区担当)，田中涼子(10～2月Ⅲ区補助)，技術補助員 坂本憲彦・大原直美・大野大，測量補助員 大賀幸子・西村譲二・宮澤学

事務補助員：渡辺暁子・奥宮千恵子

平成17年度

総 括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 川村寿雄

総 務：同次長兼総務課長 湯浅文彦，同主任 池野かおり，同主幹 長谷川明生

調 査 総 括：同調査課長 森田尚宏

調 査 担 当：同調査第四班長 廣田佳久(Ⅲ区担当)，同専門調査員 田淵瑞代・曾我貴行(Ⅴ区担当)，主任調査員 小野由香(Ⅳ区担当)，技術補助員 坂本憲彦・大原直美・大賀幸子・大野大，測量補助員 西村譲二・宮澤学

事務補助員：奥宮千恵子

平成22年度

総 括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 小笠原孝夫

総 務：同次長 森田尚宏，同総務課長 里見敦典，同主任 弘末節子

調 査 総 括：同調査課長兼企画調整班長 廣田佳久

事務補助員：奥宮千恵子

5. 本書の執筆、遺物撮影・調整等は廣田が行い、調査日誌抄と現場写真は調査担当が執筆、撮影したものを使用した。編集は廣田が行い、整理作業員の補助を得た。
6. 遺構は、ST(竪穴状遺構)、SB(掘立柱建物跡)、SA(塀・柵列跡)、SK(土坑)、SD(溝跡)、SU(畝状遺構)、SX(性格不明遺構)、SE(井戸跡)、P(ピット)とし、遺構番号は調査区、遺構ごとに通し番号とし、Ⅲ区は301～、Ⅳ区は401～、Ⅴ区は501～のように表記している。なお、遺構数が調査区で100を超えるものについては最初に調査区番号を付し、四桁とした。掲載している遺構の平面図の縮尺はそれ

## 例言

ぞれに記載してあり、方位(N)は世界標準座標方眼北である。なお、掘立柱建物跡や堀・柵列跡などの模式図はS=1/200で掲載している。

7. 遺物は原則として弥生土器をS = 1/4 それ以外をS = 1/3 で掲載し、各挿図にはスケールを掲載している。遺物番号は調査区ごとの通し番号とし、挿図と図版の番号は一致している。なお、遺物番号は、Ⅲ区が3001～3549、Ⅳ区が4001～4135、Ⅴ区が5001～5143で、掲載遺物の総点数は827点である。

8. 現地調査及び本報告書を作成するにあたっては、下記の方々のご指導並びに貴重なご教示、ご助言を頂いた。記して感謝の意を表したい。

趙哲済(財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所)、辻本裕也・辻康男(パリオ・サーヴェイ株式会社)、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターの諸氏

9. 調査にあたっては、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所、南国市のご協力を頂いた。また、地元住民の方々には遺跡に対する深いご理解とご援助を頂き、厚く感謝の意を表したい。

10. 整理作業は下記の方々に行って頂いた。記して感謝する次第である。

中西純子、内村富紀、元木恵利子、小林貴美、松田美香、田島 歩、岡宗真紀、川添明美、大賀幸子、大原直美、西内広美、岩貞泰代、横山めぐみ、黒岩佳子、澤田美弥、川谷文香、西山麻美

11. 出土遺物は「04-2NN」、「05-2NN」と註記し、高知県立埋蔵文化財センターで保管している。

# 本文目次

第I章 序章	1
1. はじめに	1
2. 調査の契機と経過	2
(1) 契機と経過	2
(2) 調査の方法	3
第II章 調査の概要	5
1. 調査の経緯	5
(1) 調査の経緯	5
(2) 調査日誌抄	5
2. 調査区の概要	15
(1) III区	15
(2) IV区	24
(3) V区	27
第III章 遺構と遺物	37
1. III区	37
(1) 弥生時代	37
(2) 古墳時代	51
(3) 古代前半	58
(4) 古代後半から中世	64
(5) 近世以降	137
2. IV区	145
(1) 弥生時代	145
(2) 古代	155
(3) 中世	160
(4) 近世以降	185
3. V区	188
(1) 弥生時代	188
(2) 中世	194
(3) 近世以降	204
第IV章 自然科学分析	207
1. はじめに	207
(1) 分析目的	207

(2) 試料.....	207
2. 西野々遺跡の古環境復元.....	207
(1) はじめに.....	207
(2) 分析方法.....	207
(3) 結果.....	211
(4) 考察.....	222
(5) 小結.....	235
3. 西野々遺跡から出土した土器の胎土分析.....	237
(1) はじめに.....	237
(2) 分析方法.....	237
(3) 分析結果.....	238
(4) 考察.....	250
第V章 総括.....	257
1. はじめに.....	257
2. 遺跡周辺の古環境と地形発達史.....	257
3. 遺跡の出現と消長.....	258
(1) 概要.....	258
(2) 溝跡について.....	259
4. 弥生時代の様相.....	259
(1) 概要.....	259
(2) 溝跡について.....	260
5. 古墳時代の様相.....	260
(1) 概要.....	260
(2) 溝跡について.....	260
6. 古代の様相.....	260
(1) 概要.....	260
(2) 掘立柱建物について.....	261
7. 中世の様相.....	261
(1) 概要.....	261
(2) 方形区画墓について.....	261
8. おわりに.....	262
遺物観察表.....	263
遺構計測表.....	299

## 挿図目次

図1-1	西野々遺跡位置図.....	1
図1-2	高知南国道路(伊達野・西野々・関地区)グリッド設定図(S=1/25,000).....	2
図1-3	西野々遺跡グリッド設定図(S=1/5,000).....	3
図2-1	Ⅲ区の調査区と地山の堆積層(S=1/1,500).....	15
図2-2	Ⅲ-1区北壁セクション.....	16
図2-3	Ⅲ-4区南北バンク西壁セクション.....	17
図2-4	Ⅲ区第I層出土遺物実測図.....	19
図2-5	Ⅲ区第Ⅲ層出土遺物実測図.....	21
図2-6	Ⅲ区第IV層出土遺物実測図.....	23
図2-7	Ⅲ区第VI層出土遺物実測図.....	24
図2-8	Ⅳ区の地山の堆積層(S=1/1,500).....	24
図2-9	Ⅳ区南壁セクション.....	25
図2-10	Ⅳ区第I～IV層出土遺物実測図.....	26
図2-11	Ⅴ区の調査区と地山の堆積層(S=1/1,500).....	27
図2-12	Ⅴ-2区北壁セクション.....	28
図2-13	Ⅴ区第I層出土遺物実測図1.....	31
図2-14	Ⅴ区第I層出土遺物実測図2.....	33
図2-15	Ⅴ区第IV層出土遺物実測図.....	35
図2-16	Ⅴ区第V層出土遺物実測図.....	36
図3-1	SB-301.....	37
図3-2	SK-301.....	38
図3-3	SK-302.....	38
図3-4	SK-301出土遺物実測図.....	39
図3-5	SK-303.....	40
図3-6	SK-302～304・307出土遺物実測図.....	40
図3-7	SK-306・318.....	41
図3-8	SD-3001・3002.....	42
図3-9	SD-3002.....	42
図3-10	SD-3002～3004.....	43
図3-11	SD-3001・3002出土遺物実測図.....	44
図3-12	SD-3003・3022.....	45
図3-13	SD-3004・3025.....	45
図3-14	SD-3003・3004出土遺物実測図.....	46
図3-15	SD-3007.....	47
図3-16	SD-3007・3008出土遺物実測図.....	48
図3-17	SD-3008・3009・3071.....	49

図3-18	SD-3011～3013	50
図3-19	SD-3014～3017	50
図3-20	P-301出土遺物実測図	51
図3-21	ST-301	52
図3-22	SD-3018・3034・3072	52
図3-23	SD-3018出土遺物実測図1	53
図3-24	SD-3018出土遺物実測図2	54
図3-25	SD-3018出土遺物実測図3	55
図3-26	SD-3018出土遺物実測図4	56
図3-27	SD-3019～3021	56
図3-28	SD-3019・3020, P-302出土遺物実測図	57
図3-29	SB-302	58
図3-30	SB-303	59
図3-31	SB-304	59
図3-32	SB-305	60
図3-33	SB-306	61
図3-34	SB-307	61
図3-35	SB-304・307・308出土遺物実測図	61
図3-36	SB-308	62
図3-37	SB-309	63
図3-38	SB-310	63
図3-39	SB-309・310出土遺物実測図	64
図3-40	SB-311	64
図3-41	SB-312	64
図3-42	SB-313	65
図3-43	SB-314	65
図3-44	SB-315	66
図3-45	SB-316	66
図3-46	SB-317	66
図3-47	SB-318	66
図3-48	SB-319	67
図3-49	SB-320	67
図3-50	SB-321	68
図3-51	SB-322	68
図3-52	SB-323	68
図3-53	SB-324	69
図3-54	SB-325	69
図3-55	SB-326	69

図3-56 SB-327.....	70
図3-57 SB-328.....	70
図3-58 SB-329.....	70
図3-59 SB-330.....	71
図3-60 SB-331.....	71
図3-61 SB-312・314・316・319・320・325・329～331出土遺物実測図.....	72
図3-62 SA-301.....	72
図3-63 SA-301出土遺物実測図.....	72
図3-64 SA-302～304.....	73
図3-65 SK-310, SD-3024.....	73
図3-66 SK-311, SD-3003.....	74
図3-67 SK-312.....	74
図3-68 SK-313, SD-3067.....	74
図3-69 SK-314.....	75
図3-70 SK-316, SD-3069.....	75
図3-71 SK-320.....	75
図3-72 SK-322.....	76
図3-73 SK-323, SD-3022.....	76
図3-74 SK-327.....	76
図3-75 SK-331.....	77
図3-76 SK-332.....	78
図3-77 SK-347.....	80
図3-78 SK-348.....	80
図3-79 SK-349.....	81
図3-80 SK-310・311・315・328・329・331・335・339・340・342・347・349出土遺物実測図.....	81
図3-81 SK-351, SD-3002.....	82
図3-82 SK-355.....	83
図3-83 SK-356.....	84
図3-84 SK-357.....	85
図3-85 SK-355～357出土遺物実測図.....	85
図3-86 SK-362.....	86
図3-87 SD-3003・3022・3031・3069.....	87
図3-88 SD-3023・3024.....	88
図3-89 SD-3022～3024出土遺物実測図.....	89
図3-90 SD-3008・3025・3071.....	90
図3-91 SD-3026～3029.....	91
図3-92 SD-3030～3032・3071・3072.....	92
図3-93 SD-3025・3028～3030・3032出土遺物実測図.....	93

挿図目次

図3-94	SD-3033.....	94
図3-95	SD-3023・3034・3035.....	94
図3-96	SD-3004・3018・3024・3025・3034.....	95
図3-97	SD-3007・3008・3018・3024・3034.....	95
図3-98	SD-3034出土遺物実測図1.....	96
図3-99	SD-3034出土遺物実測図2.....	97
図3-100	SD-3034出土遺物実測図3.....	99
図3-101	SD-3034出土遺物実測図4.....	100
図3-102	SD-3034出土遺物実測図5.....	101
図3-103	SD-3036～3038.....	102
図3-104	SD-3039～3042, P-351.....	103
図3-105	SD-3043～3047.....	104
図3-106	SD-3048～3052.....	105
図3-107	SD-3053.....	106
図3-108	SD-3036・3050・3053出土遺物実測図.....	107
図3-109	SD-3054・3056.....	108
図3-110	SD-3055・3086.....	109
図3-111	SD-3057.....	110
図3-112	SD-3054・3058・3061～3065.....	110
図3-113	SD-3054・3058・3061・3093.....	111
図3-114	SD-3054・3055・3058出土遺物実測図.....	111
図3-115	SD-3059～3062.....	112
図3-116	SD-3065・3091・3093.....	113
図3-117	SD-3066～3068.....	114
図3-118	SD-3053・3069・3070.....	114
図3-119	SD-3072～3075.....	115
図3-120	SD-3054・3076・3077.....	116
図3-121	SD-3070～3073・3076出土遺物実測図.....	117
図3-122	SD-3080～3084.....	118
図3-123	SD-3085・3086.....	120
図3-124	SD-3055・3058・3088～3090.....	121
図3-125	SD-3080・3082・3084・3086・3088出土遺物実測図.....	121
図3-126	SD-3091～3094.....	122
図3-127	SD-3095～3099.....	123
図3-128	SD-3098・3101～3105, SU-312.....	124
図3-129	SD-3107～3110.....	125
図3-130	SD-3111・3112.....	126
図3-131	SD-3113～3115.....	127

図3-132	SD-3097・3102・3104・3115, SU-311 出土遺物実測図	127
図3-133	SD-3022・3116～3118	128
図3-134	SU-302	129
図3-135	ピット出土遺物実測図1	132
図3-136	ピット出土遺物実測図2	133
図3-137	ピット出土遺物実測図3	134
図3-138	ピット出土遺物実測図4	135
図3-139	ピット出土遺物実測図5	136
図3-140	SK-364	137
図3-141	SK-366・367	138
図3-142	SK-369	139
図3-143	SK-364・367・372・377・378 出土遺物実測図	140
図3-144	SK-378	141
図3-145	SK-379	142
図3-146	SK-381・382	142
図3-147	SD-3119・3120	142
図3-148	SE-301	143
図3-149	SE-302	144
図3-150	SD-3120, SE-302, P-379 出土遺物実測図	144
図3-151	SD-401	145
図3-152	SD-401 出土遺物実測図1	147
図3-153	SD-401 出土遺物実測図2	148
図3-154	SD-401 出土遺物実測図3	149
図3-155	SD-401 出土遺物実測図4	151
図3-156	SD-401 出土遺物実測図5	152
図3-157	SD-401・402 出土遺物実測図	153
図3-158	SD-402	155
図3-159	SD-403	155
図3-160	SB-401	156
図3-161	SB-402	156
図3-162	SB-403	157
図3-163	SB-401・403 出土遺物実測図	157
図3-164	SB-404	157
図3-165	SB-405	158
図3-166	SB-406	158
図3-167	SB-407	159
図3-168	SK-401	159
図3-169	SK-401 出土遺物実測図	159

挿図目次

図3-170 SB-408.....	161
図3-171 SB-408出土遺物実測図.....	161
図3-172 SB-409.....	161
図3-173 SB-410.....	161
図3-174 SB-411.....	162
図3-175 SB-412.....	162
図3-176 SB-413.....	163
図3-177 SB-414.....	163
図3-178 SB-411～414出土遺物実測図.....	163
図3-179 SB-415.....	164
図3-180 SB-416.....	164
図3-181 SB-417.....	164
図3-182 SB-418.....	165
図3-183 SB-419.....	165
図3-184 SB-420.....	165
図3-185 SB-421.....	166
図3-186 SB-422.....	166
図3-187 SB-416・422出土遺物実測図.....	166
図3-188 SB-423.....	166
図3-189 SB-424.....	167
図3-190 SA-401.....	167
図3-191 SA-402.....	167
図3-192 SA-403.....	167
図3-193 SK-403.....	168
図3-194 SK-402・407出土遺物実測図.....	169
図3-195 SK-409.....	169
図3-196 SK-410.....	169
図3-197 SK-412出土遺物実測図.....	170
図3-198 SK-415.....	170
図3-199 SK-417.....	171
図3-200 SK-419.....	171
図3-201 SK-422.....	172
図3-202 SK-423.....	172
図3-203 SK-419・421・423出土遺物実測図.....	172
図3-204 SK-427.....	173
図3-205 SK-429.....	173
図3-206 SD-405～407.....	174
図3-207 SD-408・412・415.....	175

図3-208 SD-417~420.....	176
図3-209 SD-421.....	177
図3-210 SD-423~425.....	177
図3-211 SD-427~429.....	178
図3-212 SD-430~432.....	178
図3-213 SD-432・433.....	179
図3-214 SD-435~437.....	180
図3-215 SD-440~442.....	181
図3-216 SD-443~445.....	181
図3-217 SD-415・432・444出土遺物実測図.....	182
図3-218 SD-446・448・449.....	182
図3-219 P-401~405出土遺物実測図.....	185
図3-220 SK-432.....	186
図3-221 SK-434出土遺物実測図.....	186
図3-222 SK-435.....	187
図3-223 SK-436.....	187
図3-224 SK-501.....	188
図3-225 SK-501出土遺物実測図.....	188
図3-226 SK-502.....	188
図3-227 SK-503.....	189
図3-228 SD-501・502・504・533.....	189
図3-229 SD-501出土遺物実測図.....	189
図3-230 SD-502~505.....	190
図3-231 SD-502出土遺物実測図.....	191
図3-232 SD-504出土遺物実測図.....	192
図3-233 SD-501・503・504・506.....	192
図3-234 SD-508~510.....	193
図3-235 SD-509出土遺物実測図.....	193
図3-236 SK-506.....	194
図3-237 SK-507.....	194
図3-238 SK-509.....	195
図3-239 SK-511.....	195
図3-240 SK-511出土遺物実測図.....	195
図3-241 SD-502・511・512.....	196
図3-242 SD-513~516.....	196
図3-243 SD-511・513・514出土遺物実測図.....	197
図3-244 SD-517・518.....	197
図3-245 SD-519・520.....	198

図3-246	SD-519出土遺物実測図	198
図3-247	SD-521・522	199
図3-248	SD-523～526	199
図3-249	SD-528～531	200
図3-250	SD-521・524・526・529出土遺物実測図	201
図3-251	SD-532～536	202
図3-252	SU-501	203
図3-253	SX-502出土遺物実測図	204
図3-254	SK-513	204
図3-255	SD-538・541・543	205
図3-256	SD-540・543出土遺物実測図	206
図4-1	Ⅲ区及びⅤ区の試料採取地点	208
図4-2	Ⅲ区堆積物累重状況の柱状模式図と分析試料採取地点	209
図4-3	Ⅴ区26・29地点の花粉化石群集の層位分布	215
図4-4	Ⅲ区14・15地点および溝埋土の植物珪酸体含量	216
図4-5	Ⅴ区29地点の植物珪酸体含量の層位的変化	217
図4-6	粒度分析結果三角ダイアグラム	219
図4-7	粒度分析結果グラフ	220
図4-8	軟X線写真および試料写真	221
図4-9	西野々遺跡調査区柱状模式断面図	223
図4-10	調査地点位置図	225
図4-11	西野々遺跡周辺の地形(『高知県1966』を一部改変)	225
図4-12	西野々遺跡東西方向の層序模式柱状断面図	226
図4-13	介良野遺跡周辺の層序と年代	227
図4-14	調査区周辺の地形分類図	228
図4-15	SD-3008・3029粒度分析結果グラフ	233
図4-16	各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(1)	244
図4-17	各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(2)	245
図4-18	胎土中の砂の粒径組成(1)	245
図4-19	胎土中の砂の粒径組成(2)	246
図4-20	胎土の砂粒・基質・孔隙の割合	246
図4-21	西野々遺跡出土試料のSiO <sub>2</sub> -Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 散布図	248
図4-22	西野々遺跡出土試料の長石類主要元素の散布図	248
図4-23	西野々遺跡出土試料の有色鉱物主要元素の散布図	248
図4-24	西野々遺跡出土試料のRb-Sr散布図	249
図4-25	西野々遺跡出土試料のZr-Ba散布図	249
図4-26	胎土の粒度組成三角ダイアグラム	251
図4-27	9世紀後半～10世紀前半の試料器種・器形別の粒度組成	251

図4-28 甕およびそれ以外の試料の粒度組成.....	251
図4-29 杯・皿の砂含有量の時期別変化.....	252

## 表目次

表4-1 放射性炭素年代測定結果.....	212
表4-2 暦年較正結果.....	212
表4-3 V区29地点の珪藻分析結果.....	213
表4-4 V区26・29地点の花粉分析結果.....	214
表4-5 植物珪酸体含量(個/g).....	215
表4-6 樹種同定結果.....	217
表4-7 III区粒度分析結果.....	218
表4-8 粒度組成解析結果.....	218
表4-9 胎土分析試料一覧.....	237
表4-10 薄片観察結果(1).....	239
表4-11 薄片観察結果(2).....	240
表4-12 薄片観察結果(3).....	241
表4-13 薄片観察結果(4).....	242
表4-14 薄片観察結果(5).....	243
表4-15 土器胎土の蛍光X線分析結果(化学組成).....	247

## 遺物観察表目次

III区 遺物観察表1 (3001～3025).....	265
III区 遺物観察表2 (3025～3050).....	266
III区 遺物観察表3 (3051～3075).....	267
III区 遺物観察表4 (3076～3100).....	268
III区 遺物観察表5 (3101～3125).....	269
III区 遺物観察表6 (3126～3150).....	270
III区 遺物観察表7 (3151～3175).....	271
III区 遺物観察表8 (3176～3200).....	272
III区 遺物観察表9 (3201～3225).....	273
III区 遺物観察表10 (3226～3250).....	274
III区 遺物観察表11 (3251～3275).....	275

Ⅲ区 遺物観察表12 (3276～3300) .....	276
Ⅲ区 遺物観察表13 (3301～3325) .....	277
Ⅲ区 遺物観察表14 (3326～3350) .....	278
Ⅲ区 遺物観察表15 (3351～3375) .....	279
Ⅲ区 遺物観察表16 (3376～3400) .....	280
Ⅲ区 遺物観察表17 (3401～3425) .....	281
Ⅲ区 遺物観察表18 (3426～3450) .....	282
Ⅲ区 遺物観察表19 (3451～3475) .....	283
Ⅲ区 遺物観察表20 (3476～3500) .....	284
Ⅲ区 遺物観察表21 (3501～3525) .....	285
Ⅲ区 遺物観察表22 (3526～3549) .....	286
Ⅳ区 遺物観察表1 (4001～4025) .....	287
Ⅳ区 遺物観察表2 (4026～4050) .....	288
Ⅳ区 遺物観察表3 (4051～4075) .....	289
Ⅳ区 遺物観察表4 (4076～4100) .....	290
Ⅳ区 遺物観察表5 (4101～4125) .....	291
Ⅳ区 遺物観察表6 (4126～4135) .....	292
Ⅴ区 遺物観察表1 (5001～5025) .....	293
Ⅴ区 遺物観察表2 (5026～5050) .....	294
Ⅴ区 遺物観察表3 (5051～5075) .....	295
Ⅴ区 遺物観察表4 (5076～5100) .....	296
Ⅴ区 遺物観察表5 (5101～5125) .....	297
Ⅴ区 遺物観察表6 (5126～5143) .....	298

## 遺構計測表目次

西野々遺跡Ⅲ～Ⅴ区 遺構・遺物総数表 .....	300
遺構計測表1 Ⅲ区 竪穴状遺構 (ST-301) .....	301
遺構計測表2 Ⅲ区 掘立柱建物跡1 (SB-301～328) .....	301
遺構計測表3 Ⅲ区 掘立柱建物跡2 (SB-329～331) .....	302
遺構計測表4 Ⅲ区 塀・柵列跡 (SA-301～304) .....	302
遺構計測表5 Ⅲ区 土坑1 (SK-301～326) .....	302
遺構計測表6 Ⅲ区 土坑2 (SK-327～369) .....	303
遺構計測表7 Ⅲ区 土坑3 (SK-370～382) .....	304
遺構計測表8 Ⅲ区 溝跡1 (SD-3001～3025) .....	304
遺構計測表9 Ⅲ区 溝跡2 (SD-3026～3068) .....	305

遺構計測表10	Ⅲ区溝跡3(SD-3069~3111)	306
遺構計測表11	Ⅲ区溝跡4(SD-3112~3120)	307
遺構計測表12	Ⅲ区井戸跡(SE-301・302)	307
遺構計測表13	Ⅲ区畝状遺構(SU-301~312)	307
遺構計測表14	Ⅳ区掘立柱建物跡(SB-401~403)	307
遺構計測表15	Ⅳ区掘立柱建物跡(SB-404~424)	308
遺構計測表16	Ⅳ区塀・柵列跡(SA-401~403)	308
遺構計測表17	Ⅳ区土坑1(SK-401~406)	308
遺構計測表18	Ⅳ区土坑2(SK-407~437)	309
遺構計測表19	Ⅳ区溝跡1(SD-401~407)	309
遺構計測表20	Ⅳ区溝跡2(SD-408~450)	310
遺構計測表21	Ⅳ区畝状遺構(SU-401~411)	311
遺構計測表22	Ⅴ区土坑(SK-501~513)	311
遺構計測表23	Ⅴ区溝跡(SD-501~514)	311
遺構計測表24	Ⅴ区溝跡(SD-515~543)	312
遺構計測表25	Ⅴ区畝状遺構(SU-501~506)	312
遺構計測表26	Ⅴ区性格不明遺構(SX-501・502)	312

## 写真目次

写真2-1	Ⅲ-4区発掘調査風景	7
写真2-2	Ⅲ-1区発掘調査風景1	8
写真2-3	Ⅲ-1区発掘調査風景2	9
写真2-4	Ⅳ区W発掘調査風景	11
写真2-5	Ⅴ区W発掘調査風景	13
写真2-6	趙氏による現場指導	13
写真2-7	現地説明会風景	14

## 図版目次

図版 1	Ⅲ-1区 調査前全景(東より)	SB-303・322(南西より)
	Ⅲ-4区 調査前全景(東より)	図版18 SB-305(北西より)
図版 2	Ⅲ-1区E 遺構検出状態(東より)	SB-306(北より)
	Ⅲ-1区E 遺構完掘状態(東より)	図版19 SB-307・308(北より)
図版 3	Ⅲ-1区E 遺構検出状態(西より)	SB-308(北より)
	Ⅲ-1区E 遺構完掘状態(西より)	図版20 SB-312・313(東より)
図版 4	Ⅲ-1区E 遺構完掘状態(南上空より)	SB-313・314(東より)
	Ⅲ-1区E 遺構完掘状態(西上空より)	図版21 SB-314～316(東より)
図版 5	Ⅲ-1区E 東壁セクション(西より)	SB-320・321(南西より)
	Ⅲ-1区E 下層確認トレンチセクション(南東より)	図版22 SK-356(北より)
図版 6	Ⅲ-1区W 遺構検出状態(西より)	SK-356(南より)
	Ⅲ-1区W 遺構完掘状態(西より)	図版23 SD-3023・3034(西より)
図版 7	Ⅲ-1区W 遺構検出状態(東より)	SK-304, SD-3004・3018・3024・3025・3034(西より)
	Ⅲ-1区W 遺構完掘状態(南東より)	図版24 SD-3007・3008・3018・3024・3034(西より)
図版 8	Ⅲ-1区W 遺構完掘状態(上空より)	SD-3054・3084(東より)
	Ⅲ-1区W 遺構完掘状態(東上空より)	図版25 SK-302(北より)
図版 9	Ⅲ-1区W 下層確認トレンチセクション(北東より)	SK-303(南より)
	Ⅲ-1区W 下層確認トレンチセクション(東より)	SD-3001(西より)
図版10	Ⅲ-3～5区 遺構検出状態(東より)	SD-3002(東より)
	Ⅲ-3～5区 遺構完掘状態(東より)	SD-3002・3069(東より)
図版11	Ⅲ-3・4区 遺構完掘状態(上空より)	SD-3002 弥生土器甕(3090)出土状態
	Ⅲ-3～5区 遺構完掘状態(東上空より)	SD-3002 ミニチュア土器(3097)出土状態
図版12	Ⅲ-4区E 遺構検出状態(西より)	SD-3002 石製品石庖丁(3098)出土状態
	Ⅲ-4区E 遺構完掘状態(西より)	図版26 SD-3003(西より)
図版13	Ⅲ-4区E 遺構検出状態(北東より)	SD-3003・3004(東より)
	Ⅲ-4区E 遺構完掘状態(北東より)	SD-3003・3022(西より)
図版14	Ⅲ-4区E 遺構完掘状態(西上空より)	SD-3003・3022・3069(西より)
	Ⅲ-4区E 中央バンクセクション(東より)	SD-3004・3005(東より)
図版15	SK-301(南より)	SD-3004・3025(東より)
	SD-3002(西より)	SD-3008(西より)
図版16	SD-3002・3003(東より)	SD-3008・3009(西より)
	SD-3008・3025(北西より)	図版27 SD-3018 土師器甕(3127)出土状態
図版17	SB-302(南より)	SD-3018 土師器甕(3132)出土状態

- SD-3018 土師器甕(3133) 出土状態  
 SD-3018 須恵器杯蓋(3141) 出土状態  
 SD-3018 須恵器杯身(3149) 出土状態  
 SD-3018 須恵器杯身(3150) 出土状態  
 SD-3018 須恵器提瓶(3155) 出土状態  
 SD-3020 須恵器椀(3161) 出土状態
- 図版28 SB-325 土師質土器小皿(3183) 出土状態  
 SA-302~304(東より)  
 SK-311, SD-3003(西より)  
 SK-311 土師質土器杯(3192) 出土状態  
 SK-314(北より)  
 SK-322(南より)  
 SK-331(東より)  
 SK-342 土師質土器杯(3202) 出土状態
- 図版29 SK-349(東より)  
 SK-356(南より)  
 SK-356 土師質土器小皿(3208・3209) 出土状態  
 SB-307, SK-356(東より)  
 SK-356(南より)  
 SK-357(北より)  
 SK-357 土師質土器杯(3211) 出土状態  
 SK-358(北より)
- 図版30 SD-3022(西より)  
 SD-3023(西より)  
 SD-3024(東より)  
 SK-310, SD-3024(西より)  
 SD-3026~3029(北西より)  
 SD-3026~3029(南より)  
 SD-3024・3034(東より)  
 SD-3018・3034・3072(西より)
- 図版31 SD-3034 土師器羽釜(3274) 出土状態  
 SD-3034 須恵器椀(3285) 出土状態  
 SD-3034 須恵器高杯(3289) 出土状態  
 SD-3034 須恵器短頸壺(3290) 出土状態  
 SD-3034 土師質土器小杯(3302) 出土状態  
 SD-3034 土師質土器小杯(3305) 出土状態
- SD-3034 土師質土器椀(3326) 出土状態  
 SD-3034 土師質土器椀(3327) 出土状態
- 図版32 SD-3034 土師質土器椀(3341) 出土状態  
 SD-3050 土師器高杯(3351) 出土状態  
 SD-3053(西より)  
 SD-3054(西より)  
 SD-3054(東より)  
 SD-3054・3056(西より)  
 SD-3054・3058・3061(西より)  
 SD-3055 須恵器杯身(3380) 出土状態
- 図版33 SD-3055(西より)  
 SD-3055(西より)  
 SD-3055・3086(東より)  
 SD-3055(東より)  
 SD-3055・3088(西より)  
 SD-3058(東より)  
 SD-3059(西より)  
 SD-3067(南より)
- 図版34 SK-316, SD-3069(西より)  
 SD-3069(南より)  
 SD-3070(北より)  
 SD-3031・3071(北西より)  
 SD-3076(東より)  
 SD-3086(北東より)  
 SD-3089(北より)  
 SD-3091(西より)
- 図版35 SD-3093(東より)  
 SD-3102・3103(東より)  
 SD-3107・3108(西より)  
 SD-3111(西より)  
 SD-3112(西より)  
 SD-3113(南より)  
 SD-3114(南より)  
 SD-3116(南より)
- 図版36 P-307 土師質土器小皿(3478) 出土状態  
 P-322 土師質土器小皿(3475) 出土状態  
 P-365 土師質土器杯(3447) 出土状態

- P-371 土師質土器椀(3506)出土状態  
 SK-364(西より)  
 SK-365(北より)  
 SE-301(北西より)  
 SE-302(西より)
- 図版37 土師質土器(杯・小皿)  
 青磁(皿), 肥前系陶器(碗)
- 図版38 肥前系磁器(碗・皿・稜花鉢)  
 能茶山焼(広東茶碗), 近世陶器(碗)
- 図版39 弥生土器(壺), 土師器(甕・杯)  
 土師質土器(杯・小皿)
- 図版40 青磁(碗・皿), 青花(皿)  
 須恵器(杯蓋・杯身・提瓶・短頸壺・甕)
- 図版41 土師質土器(杯・椀・小皿), 瓦器(小皿)  
 弥生土器(壺・甕)
- 図版42 弥生土器(甕・ミニチュア土器)  
 弥生土器(壺・甕)
- 図版43 弥生土器(甕)  
 弥生土器(壺・甕)
- 図版44 土師器(甕)  
 土師器(甕)
- 図版45 須恵器(杯蓋・杯身)  
 弥生土器(甕), 須恵器(高杯・甕・鉢)
- 図版46 土師質土器(杯・椀・小皿), 瓦器(小皿)  
 土師質土器(杯・小皿), 瓦器(椀)
- 図版47 土師質土器(杯), 瓦器(椀)  
 須恵器(壺), 土師質土器(椀), 瓦器(椀)
- 図版48 土師器(羽釜), 須恵器(杯身), 土師質土器(杯)  
 弥生土器(甕), 須恵器(高杯), 黒色土器(椀)
- 図版49 土師質土器(杯)  
 土師質土器(杯)
- 図版50 土師質土器(杯・小皿・椀)  
 土師器(甕), 須恵器(甕)
- 図版51 土師質土器(杯)  
 土師器(甕), 須恵器(杯身・甕), 瓦器(椀)
- 図版52 須恵器(壺・甕), 瓦器(椀), 瓦質土器(壺)  
 土師器(甕)
- 図版53 土師器(甕)  
 土師器(甕・羽釜)
- 図版54 土師器(羽釜)  
 土師器(高杯・羽釜)
- 図版55 須恵器(杯蓋・杯身・甕)  
 須恵器(甕), 黒色土器(椀)
- 図版56 土師質土器(杯・小杯)  
 土師質土器(皿・小皿)
- 図版57 土師質土器(椀)  
 土師質土器(椀), 黒色土器(椀)
- 図版58 須恵器(杯蓋・杯身・壺)  
 土師質土器(椀・小皿)
- 図版59 土師質土器(椀)  
 須恵器(高杯・台付長頸壺・甕)
- 図版60 須恵器(台付長頸壺), 土師質土器(杯),  
 瓦器(椀), 瓦質土器(三足鍋), 青磁(碗),  
 石製品(磨石)  
 須恵器(杯蓋・杯身), 土師質土器(杯・小皿),  
 瓦器(椀), 瓦質土器(羽釜)
- 図版61 土師器(甕), 土師質土器(杯), 石製品(磨石)  
 須恵器(杯身・杯・椀・高杯)
- 図版62 須恵器(壺・甕・鉢)  
 土師質土器(杯)
- 図版63 土師質土器(杯)  
 土師質土器(杯)
- 図版64 土師質土器(杯)  
 土師質土器(杯)
- 図版65 土師質土器(杯)  
 土師質土器(小皿)
- 図版66 土師質土器(椀)  
 土師質土器(椀)
- 図版67 瓦器(椀)  
 瓦器(小皿)
- 図版68 土師器(甕), 土師質土器(椀), 肥前系陶器(皿)  
 肥前系磁器(皿), 肥前系陶器(壺), 近世以降陶器(碗), 石製品(砥石)
- 図版69 弥生土器(壺・甕・鉢), 土師器(甕), 石製

- 品(小型蛤刃石斧・叩石・磨石)
- 図版70 弥生土器(壺・甕), 土師器(甕)
- 図版71 土師器(甕), 須恵器(提瓶・甕), 石製品(叩石・磨石)
- 図版72 土師器(高杯), 須恵器(椀・高杯), 石製品(扁平片刃石斧・投弾・叩石)
- 図版73 土師器(甕・甗), 須恵器(杯身・高杯), 瓦質土器(三足釜), 石製品(石臼), 木製品
- 図版74 弥生土器(壺・甕), 東播系須恵器(片口鉢), 青磁(碗), 石製品(叩石・磨石)
- 図版75 弥生土器(壺・甕・ミニチュア土器), 石製品(投弾・磨石)
- 図版76 弥生土器(壺・甕・鉢), 須恵器(高杯), 瓦器(椀), 白磁(碗), 石製品(磨石)
- 図版77 土師器(甕), 須恵器(高杯・長頸壺・短頸壺), 土師質土器(杯), 灰釉陶器(椀), 瓦器(椀), 石製品(叩石・磨石・砥石)
- 図版78 土師器(甕・皿・甗), 須恵器(杯蓋・杯身・高杯・壺・甕), 土師質土器(杯), 黒色土器(椀), 瓦質土器(羽釜), 土製品(土錘)
- 図版79 弥生土器(壺・甕・鉢), 土師器(小皿), 須恵器(皿・短頸壺), 土師質土器(椀・小皿), 瓦器(椀), 石製品(石庖丁)
- 図版80 弥生土器(壺・甕), 須恵器(杯蓋・杯身・壺・甕), 金属製品(刃鎌)
- 図版81 土師器(甕), 須恵器(鉄鉢), 土師質土器(杯・椀・小皿), 瓦器(椀・小皿)
- 図版82 土師質土器(杯・小皿)
- 図版83 弥生土器(細頸壺), 須恵器(杯身・椀), 土師質土器(杯・椀・小皿)
- 図版84 須恵器(椀・高杯), 土師質土器(小杯)
- 図版85 土師質土器(小杯・椀・皿)
- 図版86 弥生土器(甕), 土師器(羽釜), 土師質土器(杯・椀・小皿), 灰釉陶器(椀), 瓦器(椀), 東播系須恵器(椀)
- 図版87 土師器(甕・皿), 須恵器(杯身・皿), 土師質土器(杯・椀・小皿), 瓦器(椀), 白磁(碗), 青磁(皿)
- 図版88 土師質土器(杯・小皿)
- 図版89 土師質土器(小皿)
- 図版90 土師質土器(椀), 瓦器(椀), 東播系須恵器(片口鉢), 白磁(合子・小壺), 青磁(碗), 肥前系磁器(碗・瓶), 奈半利焼(蓋), 近世磁器(稜花皿)
- 図版91 IV区E 遺構検出状態(東より)  
IV区E 遺構完掘状態(東より)
- 図版92 IV区E 遺構検出状態(西より)  
IV区E 遺構完掘状態(西より)
- 図版93 IV区W 遺構検出状態(東より)  
IV区W 遺構完掘状態(東より)
- 図版94 IV区W 遺構検出状態(東より)  
IV区W 遺構完掘状態(東より)
- 図版95 IV区E 遺構完掘状態(北上空より)  
IV区W 遺構完掘状態(北上空より)
- 図版96 SD-401(西より)  
SD-402(西より)
- 図版97 SD-401(北より)  
SD-401 弥生土器壺(4019)出土状態
- 図版98 SB-401(北より)  
SB-402(北より)
- 図版99 SB-403(北西より)  
SB-404(西より)
- 図版100 SB-405(北より)  
SB-407(東より)
- 図版101 SB-411 土師質土器小皿(4108)出土状態  
SB-409・410・420・421(北より)
- 図版102 SK-419 土師質土器小杯(4123・4124)出土状態  
SK-421 土師質土器杯(4125)出土状態
- 図版103 SK-423 土師質土器杯(4126)出土状態  
P-402 土師質土器小皿(4131)出土状態
- 図版104 IV区E 下層確認トレンチセクション(西より)  
IV区W 下層確認トレンチセクション(東より)  
SD-402(東より)

- SD-402 (西より)  
 SB-415 (北西より)  
 SB-416 (北より)  
 SK-410 (南より)  
 SK-423 (南より)  
 図版105 SK-426 (西より)  
 SK-427 (南より)  
 SD-405 (南より)  
 SD-411 (南より)  
 SD-415 (南より)  
 SD-418 (南より)  
 SD-421 (南より)  
 SD-425 (東より)  
 図版106 SD-432 (南より)  
 SD-432・433 (南より)  
 SD-440 (南より)  
 SD-446 (南より)  
 SD-446 (南より)  
 SD-448 (南より)  
 SU-408 (東より)  
 SU-410 (東より)  
 図版107 土師質土器(杯), 青磁(碗), 肥前系磁器  
 (皿), 瀬戸・美濃系陶器(皿), 近世陶器(碗)  
 弥生土器(壺)  
 図版108 弥生土器(甕)  
 弥生土器(甕)  
 図版109 弥生土器(甕)  
 土師質土器(杯・椀), 瓦器(椀)  
 図版110 弥生土器(壺)  
 図版111 弥生土器(壺・甕)  
 図版112 弥生土器(甕), 石製品(小型両刃石斧・太  
 型蛤刃石斧・磨石)  
 図版113 石製品(叩石・磨石・砥石)  
 図版114 弥生土器(甕), 須恵器(短頸壺), 土師質  
 土器(杯), 瓦質土器(羽釜), 石製品(石鎌  
 ・石帯)  
 図版115 弥生土器(壺)  
 図版116 弥生土器(壺・甕)  
 図版117 弥生土器(壺・器台), 瓦(丸瓦), 石製品  
 (打製石鎌・投弾・叩石・磨石)  
 図版118 弥生土器(壺・甕), 須恵器(高杯), 須恵  
 質土器(播鉢)  
 図版119 弥生土器(甕), 土師質土器(高杯・小皿),  
 石製品(石庖丁)  
 図版120 土師質土器(杯・小杯・椀・小皿), 瓦質土  
 器(羽釜)  
 図版121 V-1区 遺構検出状態(東より)  
 V-1区 遺構完掘状態(東より)  
 図版122 V-1区 遺構検出状態(西より)  
 V-1区 遺構完掘状態(西より)  
 図版123 V-1区 南部東壁セクション(西より)  
 V-1区 東部北壁セクション(南より)  
 図版124 V-1区 北部下層確認トレンチセク  
 ション(西より)  
 V-1区 北部下層確認トレンチセク  
 ション(東より)  
 図版125 V-2区 上面遺構検出状態(東より)  
 V-2区 上面遺構完掘状態(東より)  
 図版126 V-2区 下面遺構検出状態(東より)  
 V-2区 下面遺構完掘状態(東より)  
 図版127 V-2区 上面遺構完掘状態(上空より)  
 V-2区 下面遺構完掘状態(北西より)  
 図版128 V-2区 西部南壁セクション(北より)  
 V-2区ヒノキ出土状態(29地点分析試料)  
 図版129 SK-501 (南より)  
 SD-501 (北西より)  
 図版130 SD-501 (南東より)  
 SD-501 (西より)  
 図版131 SD-501 網状流路(東より)  
 SD-501 網状流路(北東より)  
 図版132 SD-502 (西より)  
 SD-503・504 (北西より)  
 SD-502 弥生土器甕(5115)出土状態  
 SD-509 弥生土器甕(5119)出土状態  
 SK-504 (北東より)  
 SK-506 (南東より)

- SD-511・512(南東より)  
SD-512(南より)
- 図版133 SD-514(南より)  
SD-515(南より)  
SD-516(南より)  
SD-518(西より)  
SD-519(西より)  
SD-519(西より)  
SD-519(西より)  
SD-520(南より)
- 図版134 SD-522(南西より)  
SD-526瓦質土器三足鍋(5136)出土状態  
SD-529(南西より)  
SD-536(西より)  
SU-501(北東より)  
SU-502(北より)  
V-2区 西部下層トレンチセクション  
(北西より)  
V-2区 西部下層トレンチセクション  
(北より)
- 図版135 須恵器(杯蓋・壺)  
東播系須恵器(片口鉢), 白磁(碗)
- 図版136 肥前系磁器(丸碗・広東茶碗・猪口), 瀬戸・  
美濃系陶器(広東茶碗)  
金属製品(煙管)
- 図版137 須恵器(杯身・杯・壺)  
瓦質土器(鍋・羽釜・三足鍋)
- 図版138 肥前系陶器(碗), 肥前系磁器(碗・皿)  
瀬戸・美濃系陶器(菊碗), 近世陶器(碗・  
皿), 近世陶磁器(碗)
- 図版139 弥生土器(壺・甕)  
弥生土器(壺・甕)
- 図版140 弥生土器(壺・甕), 土師質土器(杯), 瓦  
質土器(三足鍋)  
須恵器(杯身), 土師質土器(杯), 瓦器(椀)
- 図版141 弥生土器(甕), 土師器(焙烙), 肥前系陶  
器(皿), 石製品(石斧・叩石)
- 図版142 弥生土器(壺・甕), 土師質土器(杯), 瓦  
質土器(三足鍋), 近世陶器(丸碗), 近世  
陶磁器(天目茶碗・播鉢)
- 図版143 弥生土器(壺), 土師器(羽釜・焙烙), 土師  
質土器(小皿), 肥前系陶器(皿), 肥前系  
磁器(紅皿), 瓦(平瓦), 石製品(石庖丁),  
古銭
- 図版144 弥生土器(壺・甕), 土師質土器(杯・小  
皿), 青磁(碗), 近世陶磁器(皿), 近代磁  
器(皿), 金属製品(煙管)
- 図版145 植物珪酸体(平成16年度実施分)
- 図版146 炭化材(平成16年度実施分)
- 図版147 花粉化石・植物珪酸体・珪藻化石(平成  
17年度実施分)
- 図版148 動物遺体(平成17年度実施分)
- 図版149 木材(平成17年度実施分)
- 図版150 胎土薄片1(平成17年度実施分)
- 図版151 胎土薄片2(平成17年度実施分)
- 図版152 胎土薄片3(平成17年度実施分)
- 図版153 胎土薄片4(平成17年度実施分)
- 図版154 胎土薄片5(平成17年度実施分)
- 図版155 胎土薄片6(平成17年度実施分)
- 図版156 胎土薄片7(平成17年度実施分)

## 付図目次

- 付図1 西野々遺跡第Ⅲ調査地区(Ⅲ区)弥生時代遺構平面図(S=1/300)
- 付図2 西野々遺跡第Ⅲ調査地区(Ⅲ区)古代遺構平面図(S=1/300)
- 付図3 西野々遺跡第Ⅲ調査地区(Ⅲ区)古墳時代・中世遺構平面図(S=1/300)
- 付図4 西野々遺跡第Ⅲ調査地区(Ⅲ区)近世以降遺構平面図(S=1/300)
- 付図5 西野々遺跡第Ⅲ調査地区(Ⅲ区)遺構平面図(S=1/300)
- 付図6 西野々遺跡第Ⅳ調査地区(Ⅳ区)弥生時代遺構平面図(S=1/300)
- 付図7 西野々遺跡第Ⅳ調査地区(Ⅳ区)古代遺構平面図(S=1/300)
- 付図8 西野々遺跡第Ⅳ調査地区(Ⅳ区)中近世遺構平面図(S=1/300)
- 付図9 西野々遺跡第Ⅳ調査地区(Ⅳ区)遺構平面図(S=1/300)
- 付図10 西野々遺跡第Ⅴ調査地区(Ⅴ区)弥生時代遺構平面図(S=1/300)
- 付図11 西野々遺跡第Ⅴ調査地区(Ⅴ区)中近世遺構平面図(S=1/300)
- 付図12 西野々遺跡第Ⅴ調査地区(Ⅴ区)遺構平面図(S=1/300)

# 第I章 序 章

## 1. はじめに

本書は、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター（以下「埋蔵文化財センター」という。）が平成15年度に国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所から業務委託を受けて実施した高知東部自動車道埋蔵文化財試掘調査の結果を受け、平成16年度と平成17年度に高知県教育委員会が国土交通省四国地方整備局から業務委託を受けた高知南国道路外1件埋蔵文化財発掘調査のうち埋蔵文化財センターが実施した西野々遺跡(Ⅲ～Ⅴ区)の成果をまとめたものである。

この調査は、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所が計画し、実施している高知東部自動車道(一般国道55号・高知南国道路/南国安芸道路)の内、高知南国道路建設工事に伴って影響を受ける埋蔵文化財について事前の発掘調査を行った上で、出土遺物等の整理作業を行い、遺跡の記録保存を図ることを目的としている。

西野々遺跡は、平成15年度に実施した事前の試掘調査で、弥生時代から近世にかけての遺構・遺物が周知の茶田遺跡を含めた西野々地区の約88%で確認され、さらに地元の要望もあり、大字を取って名称変更した遺跡である。遺跡は、物部川とその支流によって形成された扇状地末端部に立地する弥生時代から近世にかけての複合遺跡で、弥生時代中期後半から後期前半の集落、奈良時代後半から平安時代中期にかけての官衙関連遺構、室町時代の屋敷跡と集落に特徴付けられる。

今回報告するⅢ～Ⅴ区は西野々遺跡の西部に位置し、遺構・遺物は西端のⅤ区に行くに従って徐々に減少し、最終的には低湿地となり、遺跡の西端に至る。その中で、Ⅲ区では弥生時代から中世にかけての用水路とみられる溝跡が重複して検出されており、弥生時代以降綿々と灌漑された様子が看守される。また、弥生時代の溝跡の中にはⅢ区からⅣ区を横断し、Ⅴ区に至る全長400m以上のものも確認されており注目される。

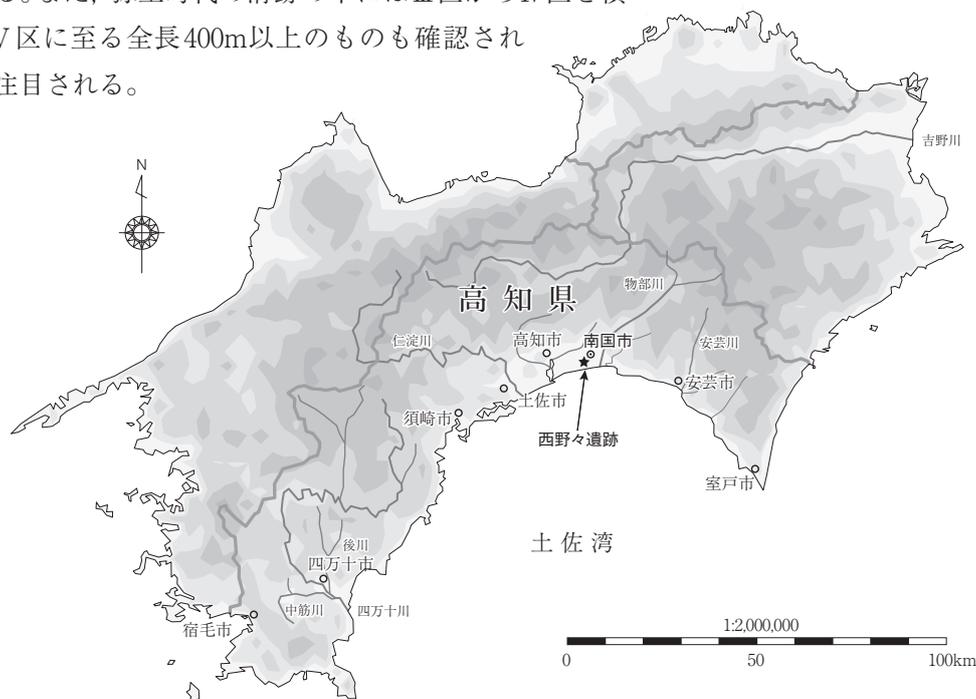


図1-1 西野々遺跡位置図

## 2. 調査の契機と経過

### (1) 契機と経過

高知南国道路は、高知市～安芸市間36kmを結ぶ一般国道55号の自動車専用道路である高知東部自動車道の一環として高知中央生活圏の連携強化を図るほか、四国横断自動車道、南国安芸道路と接続し、広域交通ネットワークの形成を目的とする道路で、昭和62年、国の高規格幹線道路網計画に組み込まれている。東部自動車道は延長36kmと長く、かつ県内最大級の遺跡である田村遺跡群など遺跡の集中する高知平野を横断する路線であり、平成16年度以降発掘調査が実施されている。

埋蔵文化財について埋蔵文化財センターを交え具体的な調整を開始したのは平成15年度からである。まず、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所と埋蔵文化財の取り扱いについて高知県教育委員会を交え調整を行った。その結果、当面の工事予定区域について周知の遺跡も存在するものこのれまでに発掘調査が実施されておらず遺構の遺存状態が全く不明であるため土地の買収が完了した箇所から順次試掘調査を行うこととなった。なお、試掘調査は、平成15～18年度が埋蔵文化財センター、平成19年度からは高知県教育委員会が実施すると共に調整業務も行っている。

西野々遺跡については、平成15年度の試掘調査の結果、当面の調査対象地(県道仁井田竹中線以西)が38,000㎡(東西約700m)と広範囲に及ぶため3パーティーで平成16年度と平成17年度の2ヵ年をかけて発掘調査を実施することとなった。また、平成17年度は東隣の竹中地区の確認調査を行い、弥生時代から近世にかけての多数の遺構・遺物が確認され<sup>(1)</sup>、それについては引き続き平成18年度に発掘調査を行うこととなった。

発掘調査は平成16年度にⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区の東半分、平成17年度にⅢ区の西半分、Ⅳ区、Ⅴ区の調査を実施し、Ⅰ区とⅡ区については『西野々遺跡Ⅰ』(平成20年3月)で報告している。Ⅲ～Ⅴ区につい

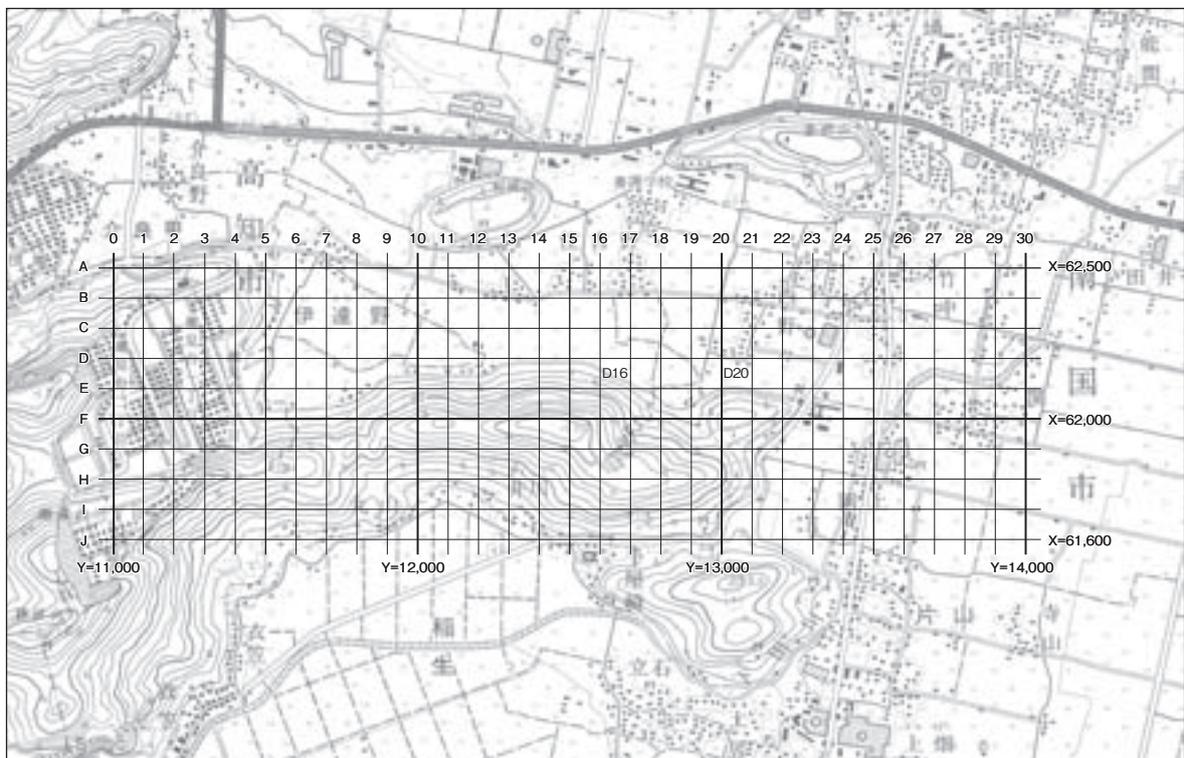


図1-2 高知南国道路(伊達野・西野々・関地区)グリッド設定図(S=1/25,000)

ては本書(『西野々遺跡Ⅱ』)で報告する。平成17年度に確認された竹中地区については、Ⅵ～Ⅷ区に分け平成18年度と平成19年度に発掘調査を実施した。その成果については『西野々遺跡Ⅲ』で本年度報告する。

また、発掘調査は、埋蔵文化財センターが国土交通省四国地方整備局と業務委託を締結した高知県教育委員会からの委託を受け、平成15年度以降継続的<sup>(2)</sup>に実施しており、高知南国道路関係では、西野々遺跡(平成16～19年度)、向山戦争遺跡(平成20年度)、関遺跡(平成20～22年度)、田村遺跡群(平成22～24年度)、田村西遺跡(平成22年度)の調査を実施している。

一方、整理業務も並行して行っているが、報告書の刊行は平成20・21年度はなく、これまでに刊行したのは『西野々遺跡Ⅰ』(高知南国道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅰ)平成20年3月のみで、本年度、本書の『西野々遺跡Ⅱ』(高知南国道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ)と『西野々遺跡Ⅲ』(高知南国道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅲ)を刊行する。

## (2) 調査の方法

試掘調査の結果、西野々地区では約88%から遺構が検出され、当面の調査対象地が東西約700m、南北約55mとなったことを受け、まず世界測地系の基準点を設置したうえで航空写真測量を行い1,000分の1の地形図を作成することから開始した。なお、各調査区に設置した先の基準点(4級)には4等水準点も併設すると共に各基準点からの方位標も設定し発掘調査に備えた。

測量は世界測地系第4座標系(Ⅳ系)の基準点を使用し、西の伊達野地区の調査<sup>(3)</sup>に備え、 $X = 62,500\text{m}$ 、 $Y = 11,000\text{m}$ (北緯 $33^{\circ} 33' 49''$ 、東経 $133^{\circ} 37' 07''$ 、真北方向角 $-0^{\circ} 03' 56''$ )を原点とし、A0(100mグリッド：大グリッド)を組んだ。調査区域が狭いX軸(南北)にアルファベット、調査区域が

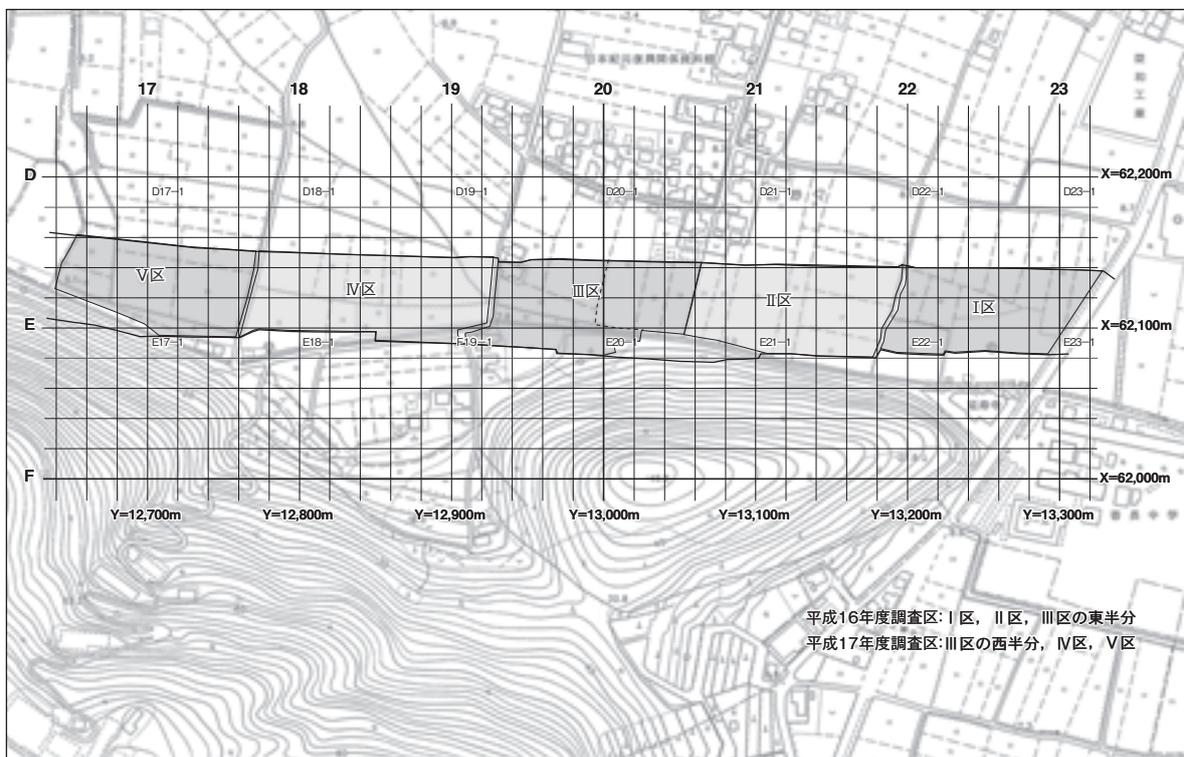


図1-3 西野々遺跡グリッド設定図(S=1/5,000)

## 2. 調査の契機と経過 (2) 調査の方法

広いY軸(東西)にアラビア数字を配し、物部川までの高知南国道路区域の調査に対応できるものとした。100mグリッド(大グリッド)の下には20mグリッド(中グリッド)を設定し、A1-1と枝番を付し、実際調査で使用する4mグリッド(小グリッド)にはさらに枝番をA1-1-1と付した。なお、遺構図にはグリッド名ではなく座標値を表記している。

調査は、原則として遺物包含層直上まで機械力を導入し、遺物包含層以下は人力で行った。なお、遺物包含層でも遺物量が少ない部分や薄い部分については作業効率を考慮し機械力を導入した。調査区は東西に長く、排土置き場の関係上それぞれ東半分(E)と西半分(W)に分け、Ⅲ区-E、Ⅲ区-Wのように呼称し調査を行った。

また、考古学成果のみではなく、遺跡の成り立ちを含めた古環境復元にも重点を置き、地質学や土壌学等関連分野の協力を得て、自然科学分析を積極的に取り入れた。平成16年度までは大阪市自然史博物館故那須孝悌元館長、平成17年度からは大阪市文化財協会(現財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所)趙哲済氏に現地指導を仰いだ。

測量は、先の基準点を基にした人力での実測と共に産業用ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影測量を行うことにより効率化に努めた。

調査の最終段階には、調査成果の記者発表と共に一般の方々を対象とした現地説明会を開催し、発掘調査の成果を公表して埋蔵文化財の普及にも努めた。

なお、発掘調査終了後には埋め戻しを行い現況に復し、引き渡しを行った。

### 註

- (1) この試掘調査によって遺跡の範囲は東西約1.0kmに及ぶことが判明した。また、南にある香長中学校でも南国市教育委員会の発掘調査で遺構・遺物が確認されており、南北は100m以上はあるとみられ、遺跡の規模は少なくとも100,000㎡に及ぶものと推測される。
- (2) 平成20年度は道路特定財源が一般財源化される問題で4月当初には契約できず、契約が締結されたのは平成20年6月6日であった。また、平成19年度からは高知西バイパスについても高知南国道路外の事業の一つとして高知県教育委員会が業務委託を受け実施している。平成21年度は高知南国道路が一時凍結路線(平成21年3月31日に凍結発表)となり、凍結が解除され再開したのは7月からであった。また、この間、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所から報告書の印刷部数について問題提起され、高知県教育委員会との間で協議を重ねた結果、決着したのは平成22年度経費積算段階であった。
- (3) 平成18年度に確認調査を実施したが、遺構は確認されず、本調査には至らなかった。

## 第Ⅱ章 調査の概要

### 1. 調査の経緯

#### (1) 調査の経緯

西野々遺跡は、平成15年度に行った高知東部自動車道高知南国道路に伴う事前の試掘調査によって遺跡の範囲が大幅に拡大した茶田遺跡について、大字の「西野々」を取って名称変更した遺跡である。平成15年度の試掘調査結果を受け、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所との間で本発掘調査についての協議を重ね、当面の工事予定区域である西は明見と西野々地区の境から東は県道仁井田竹中線までの間について、2ヵ年で本発掘調査を実施することとなった。Ⅰ区、Ⅱ区、Ⅲ区の東半分については平成16年度に行い、2年目の平成17年度の調査は、国土交通省四国地方整備局と高知県教育委員会との業務委託を受け、平成17年4月1日付けで高知県教育委員会と(財)高知県文化財団との間で業務委託契約を締結した上で、準備に入り、5月の連休明けから開始した。埋め戻しが完了したのはⅢ区が平成17年11月29日、Ⅳ区が12月5日、Ⅴ区が平成18年1月16日であった。

本調査は、調査区が東西に長いことからⅠ区(第Ⅰ調査区)からⅤ区(第Ⅴ調査区)に分け、それぞれ排土置き場の関係上東半分(E)と西半分(W)に細分し、平成16年度にⅠ区(第Ⅰ調査区)、Ⅱ区(第Ⅱ調査区)、Ⅲ-1区(第Ⅲ調査区)の東半分(Ⅲ-1区E)、平成17年度にⅢ区(第Ⅲ調査区)の西半分(Ⅲ-1区W・2~5区)、Ⅳ区(第Ⅳ調査区)、Ⅴ区(第Ⅴ調査区)の調査を実施した。報告書の刊行については、前述のとおり平成18年度も引き続き西野々遺跡東側(Ⅵ~Ⅷ区)の本発掘調査を実施したことからⅠ区(第Ⅰ調査区)とⅡ区(第Ⅱ調査区)を『西野々遺跡Ⅰ』として平成19年度に行った。Ⅲ~Ⅴ区(第Ⅲ~Ⅴ調査区)については当初平成20年度に刊行する予定であったが、前述の理由により、Ⅵ~Ⅷ区と同じ平成22年度の刊行となった。

#### (2) 調査日誌抄

##### Ⅲ区(第Ⅲ調査区)

平成16(2004)年9月13日~平成17(2005)年3月5日

##### Ⅲ-1区E(実働62日) .....

- |  |                                  |
|--|----------------------------------|
| 9.13 Ⅲ-1区東側の発掘調査を開始する。土層掘削を行い北東部から遺構検出を行う。 | 9.24 雨天のため現場作業は中止する。             |
| 9.14 水汲みと土層掘削を引き続き行う。併行して杭打ちを行う。           | 9.27 土層掘削と遺構検出を行う。               |
| 9.15 土層掘削と遺構検出を行う。                         | 9.28 引き続き土層掘削と遺構検出を行う。           |
| 9.16 雨天のため現場作業は中止する。                       | 9.29 雨天のため現場作業は中止する。             |
| 9.17 土層掘削と遺構検出を行う。                         | 9.30 水汲みと土層掘削を行う。                |
| 9.18 土層掘削と遺構検出を行うが途中から雨天となり現場作業を中止する。      | 10.1 土層掘削と遺構検出を行う。               |
| 9.21 引き続き土層掘削と遺構検出を行う。                     | 10.4 残りの土層掘削と遺構検出を行う。            |
| 9.22 引き続き土層掘削と遺構検出を行う。午後は雨のため現場作業を中止する。    | 10.5 雨天のため現場作業は中止する。午後から土層確認を行う。 |
|  | 10.6 遺構検出状態の写真撮影に向けて全面精査を行う。     |
|  | 10.7 残りの精査を行い、遺構検出状態の写真撮影        |

1. 調査の経緯 (2) 調査日誌抄

- を行う。
- 10.8 雨天のため現場作業は中止する。
- 10.12 南西部から遺構の調査を開始する。
- 10.13 溝跡を中心に遺構の調査を行う。
- 10.14                   〃
- 10.15 引き続き遺構の調査を行う。
- 10.18 南西部の溝跡を中心に遺構の調査を行う。
- 10.19 雨天のため現場作業は中止する。
- 10.20                   〃
- 10.21 水汲みを行う。
- 10.22 南西部の遺構の調査を行う。
- 10.23 南西部を中心に溝跡の調査を行う。
- 10.25 引き続き南西部を中心に遺構の調査を行う。
- 10.26 雨天のため現場作業は中止する。
- 10.27 南西部の遺構の調査を行う。
- 10.28 引き続き南西部の遺構の調査を行う。
- 10.29 南西部の残りの遺構の調査を行い、北西部の遺構の調査に移る。
- 11.1 北西部の残りの遺構の調査を行う。
- 11.2 北東部の遺構の調査を開始する。
- 11.4 引き続き北東部の遺構の調査を行う。
- 11.5                   〃
- 11.8 南東部の遺構の調査を開始する。
- 11.9 南東部の遺構の調査を引き続き行う。
- 11.10 残りの遺構の調査を行い、上面の遺構の調査を終了する。
- 11.11 雨天のため現場作業は中止する。
- 11.12 水汲みの後遺構のバンクの取り外しと遺構の精査を行う。
- 11.15 雨天のため現場作業は中止する。
- 11.16 完掘写真撮影に向けて、水汲みと掃除を行う。
- 11.17 完掘状態の写真撮影を行う。引き続き、バンクの取り外しを行う。
- 11.18 バンクの取り外しを行うが途中から降雨のため現場作業は中止する。
- 11.19 バンクの取り外しと新たに検出した遺構の調査を行う。
- 11.22 弥生の遺物包含土層の掘削を行う。
- 11.24 引き続き、遺物包含土層の掘削を行う。
- 11.25                   〃
- 11.26 遺物包含土層の掘削完了後、遺構の精査を行う。
- 11.29 古墳時代以前の遺構検出写真撮影に向けて現場の掃除を行う。
- 11.30 古墳時代以前の遺構検出状態の写真撮影を行う。
- 12.1 弥生の遺構の調査を行う。遺構の大半は溝跡である。
- 12.2 引き続き、溝跡を中心とした遺構の調査を行う。
- 12.3 引き続き遺構の調査を行う。
- 12.6 水汲み後、遺構の調査を行う。
- 12.7 竪穴状遺構の調査を主に行う。
- 12.8 残りの遺構の調査と完掘状態の写真撮影(空撮)に向けた掃除を行う。
- 12.9 引き続き空撮のための掃除を行う。
- 12.10 本日も掃除を行う。
- 12.13 昨日の雨のため空撮を明後日に延期し、再度水汲みと掃除を行う。
- 12.14 現場の掃除とパリノ・サーヴェイとサンプリングの打ち合わせを行う。
- 12.15 最終の空中写真撮影と航空測量を行い、調査を終了する。
- 1.12 パリノ・サーヴェイと打ち合わせとサンプリングを行う。
- 2.9 下層の土層確認調査を実施する。
- 3.1 埋め戻し作業を開始する。
- 3.2 引き続き埋め戻し作業を行う。
- 3.3 天候不順のため埋め戻し作業は中止する。
- 3.4 埋め戻しを行う。
- 3.5 埋め戻しの後、整地作業を行い、埋め戻し作業を終了。

平成17(2005)年5月9日～11月29日

Ⅲ-1区W, Ⅲ-2～5区(実働129日) .....

- 5.9 安全柵の設置と橋の設置を行ってからⅢ-4区E土層掘削を開始する。
- 5.10 橋の桁部分を溶接する。引き続き土層の掘削を行う。
- 5.11 土層の掘削と遺構検出を行い、東西方向の溝跡などを検出する。
- 5.12 土層掘削、遺構検出、杭打ち、Ⅲ-4区東側の略測図作成

- 5.13 Ⅲ-4区西側の土層掘削並びに遺構検出, 杭打ち, 遺構略測図の作成を行う。
- 5.16 明日の写真撮影に向けての準備と土層断面の実測を行う。
- 5.17 遺構検出写真撮影後, バルコンを設置して遺構の調査に移る。
- 5.18 本日は雨天のため現場作業は中止した。
- 5.19 溝跡の調査を行う。断面箱形を呈し, 幅に比べ深度が深い。
- 5.20 溝跡・土坑を中心に遺構の調査を行う。
- 5.21 溝跡を中心に遺構の調査を行うと共に調査区の拡張を行う。
- 5.23 溝跡を中心に遺構の調査を行う。
- 5.24 引き続き溝跡を中心に遺構の調査を行う。
- 5.25 溝跡並びにピットの調査を中心に行う。
- 5.26 溝跡のバンクの取り外し, 柱穴の調査等を行う。
- 5.27 溝跡を中心に建物跡, ピットなどの調査を行う。
- 5.30 柱穴を中心に遺構の調査を行い, 東側の調査をほぼ終了する。
- 5.31 溝跡を中心に遺構の調査を行う。
- 6.1                         〃
- 6.2 本日は雨天のため発掘調査は中止し, 室内作業を行う。
- 6.3 東から続く溝跡と方形の土坑など遺構の調査を行う。
- 6.4 中世の溝跡, 土坑, 古代の柱穴の調査を行う。
- 6.6 中央バンクの除去を行う。
- 6.7 Ⅲ-4区西側の遺構の調査を行う。
- 6.8 残りの遺構の調査と明日の空撮のために清掃を行う。
- 6.9 遺構完掘状態の写真撮影並びに航空測量を行う。
- 6.10 補足測量, 下層の土層確認, 次の調査区(Ⅲ-2区)の設定などを行う。
- 6.13 本日から埋め戻しを行う。
- 6.14 埋め戻しを行い完了する。
- 6.15 本日は天候不順のため現場作業を中止する。
- 6.16                         〃
- 6.17 土層掘削並びに遺構検出を行う。
- 6.20                         〃
- 6.21                         〃
- 6.22 土層掘削並びに遺構検出を行い多数の溝跡を確認する。
- 6.23 本日は雨天のため発掘調査は中止する。
- 6.24 引き続き土層掘削と遺構検出を行う。
- 6.27 残りの土層掘削と遺構検出を行い, 明日遺構検出状態の写真撮影を行う。
- 6.28 遺構検出状態の写真撮影並びに遺構調査のための器材の設置を行う。
- 6.29 本日から遺構の調査を開始する。東端から続く溝跡などを調査する。
- 6.30 遺構の調査並びに中央バンクの除去作業を行う。
- 7.1 井戸跡, 溝跡, 柱穴の調査を行う。
- 7.4 本日は雨天のため現場作業は中止した。
- 7.5 柱穴, 溝跡を中心に遺構の調査を行う。
- 7.6 雨天のため現場作業は中止した。
- 7.7 ピットを中心に遺構の調査を行う。
- 7.8 遺構の平面測量等を行う。
- 7.11 溝跡, ピットを中心に遺構の調査を行う。弥生の土坑も一部で確認する。
- 7.12 弥生の土坑を中心に調査を行う。
- 7.13 弥生の土坑, 古代末から中世の溝跡を中心に調査を行う。
- 7.14 溝跡を中心に遺構の調査を行う。
- 7.15                         〃
- 7.19                         〃
- 7.20 本日は, 残っていた溝跡及びピットの調査を行う。
- 7.21 井戸の調査と遺構の再精査を行う。
- 7.22 調査区の精査と明日の撮影準備を行う。
- 7.23 完掘状態の写真撮影並びに空中写真測量を



写真2-1 Ⅲ-4区発掘調査風景

1. 調査の経緯 (2) 調査日誌抄

- 行う。
- 7.25 補足測量を行う。
- 7.27 下層の土層確認と埋め戻し作業を行う。
- 7.28 埋め戻しを行う。
- 7.29 埋め戻し作業を行い、ほぼ完了する。
- 8.1 仮設橋の撤去とⅢ-3区土層掘削作業
- 8.2 土層掘削並びに遺構検出作業を行い、古代の建物跡などを検出する。
- 8.3 引き続き土層掘削と遺構検出を行う。
- 8.4 土層掘削と遺構検出を行い、弥生から中世の溝跡を確認する。
- 8.5 本日も土層掘削と遺構検出を行い、溝跡などを確認する。
- 8.8 引き続き土層掘削並びに遺構検出作業を行い、多数の遺構を検出する。
- 8.9 昨日と同様土層掘削並びに遺構検出を行い、多数の溝跡等を検出する。
- 8.10 引き続き、土層掘削と遺構検出を行い、溝跡を中心に検出する。
- 8.11 北東部の遺構検出作業並びに土層断面の精査を行う。
- 8.17 遺構の清掃を行った上で、西側から遺構検出写真を撮影する。
- 8.18 遺構の調査を開始する。本日は溝跡を中心に調査を行う。
- 8.19 引き続き溝跡を中心に遺構の調査を行う。
- 8.22 週末からの雨で調査区に溜まった雨水の汲み取り作業を行う。
- 8.23 溝跡を中心に遺構の調査を行う。
- 8.24 建物跡の柱穴、溝跡などの遺構の調査を行う。
- 8.25 弥生の溝跡を中心に遺構の調査を行う。
- 8.26 弥生の溝跡の調査を主に行う。
- 8.29 中央バンクの取り除きと弥生の溝跡の調査を行う。
- 8.30 中央バンクの除去と柱穴や溝跡の調査を行う。
- 8.31 天候不順のため現場作業は中止する。
- 9.1 古代の建物跡を中心に調査を行う。
- 9.2 古代・中世の建物跡、溝跡の調査を行う。
- 9.5 雨天のため現場作業は中止する。
- 9.7 本日は水汲み作業を行う。
- 9.8 古代末から中世の建物跡の柱穴の調査を中心に進行。
- 9.9 掘立柱建物跡の柱穴並びに古代から鎌倉期の溝跡の調査を行う。
- 9.12 古代と中世の溝跡を中心に調査を行う。
- 9.13 平安末から鎌倉期、室町期の溝跡の調査を中心に進行。
- 9.14 弥生から中世の溝跡の調査を中心に進行。
- 9.15 弥生から中世の溝跡と柱穴の調査を行う。
- 9.16 建物跡の柱穴と弥生と古代末の溝跡の調査を行う。
- 9.20 弥生・古代・中世の溝跡を中心に調査を行う。
- 9.21 弥生・古代・中世の溝跡と中世の土坑の調査を行う。
- 9.22 中世の土坑と古代の溝跡の調査を中心に進行。
- 9.26 平安後期の溝跡の調査を中心に進行。
- 9.27 本日は古墳時代から古代の溝跡の調査を行う。
- 9.28 本日は古墳時代から中世の溝跡の調査を行う。
- 9.29 溝跡のバンクの取り外し、柱穴・大型土坑の調査を行う。
- 10.3 弥生・古代の溝跡を中心に調査する。
- 10.4 近代の土坑並びに古代～弥生の溝跡の調査を行う。
- 10.5 雨天のため発掘調査は中止する。
- 10.6 水汲み作業を行う。
- 10.7 雨天のため現場作業は中止する。
- 10.11 ッ
- 10.12 北東部の古代の溝跡の調査を中心に進行。
- 10.13 弥生・古代・中世の溝跡の調査を行う。
- 10.14 ッ
- 10.17 近代の土坑、古代の溝跡などを調査する。
- 10.18 弥生から中世の溝跡の調査を行う。
- 10.19 本日も弥生から中世の溝跡の調査を行う。



写真2-2 Ⅲ-1区発掘調査風景1

- 10.20 引き続き弥生から中世の溝跡の調査を行う。
- 10.21                   〃
- 10.24                   〃
- 10.25                   〃
- 10.26 弥生から中世の溝跡及び柱穴の調査を行う。
- 10.27 弥生から古代の溝跡の調査を行う。
- 10.28 溝跡のバンクの除去作業並びに遺構の精査を行う。
- 10.31 現場の掃除とピット群周囲の再精査
- 11. 1 拡張区の土層掘削を行う。
- 11. 2 調査区の拡張を行った上で、検出写真を撮影し、調査に取り掛かる。
- 11. 4 拡張区の遺構の調査を行う。
- 11. 7 水汲みと拡張区の遺構の調査を行う。
- 11. 8 拡張区の遺構の調査を行い完掘写真を撮影する。
- 11. 9 再拡張区の土層掘削と調査を行う。
- 11.10 再拡張区の遺構の調査を行い完掘写真を撮影し、発掘調査を終了する。
- 11.11 再度遺構完掘写真を撮影する。
- 11.14 完掘写真撮影に向けて再精査並びに掃除を行う。
- 11.15 完掘写真撮影に向けて、遺構の再精査と現場の掃除を行う。
- 11.16 調査区の遺構の再精査と掃除を行う。

- 11.17 遺構完掘写真撮影を行う。
- 11.18 遺構の個別写真の撮影及び土層のサンプリングを行う。
- 11.21 西野々遺跡の記者発表を行う。
- 11.22 補足写真撮影と現場の片付けを行う。
- 11.23 現地説明会を行い150名以上の参加があった。
- 11.24 下層の土層確認調査と道具類の片付けを行い発掘調査を終了する。
- 11.25 埋め戻し作業を開始する。
- 11.26 引き続き埋め戻し作業を行う。
- 11.28                   〃
- 11.29 埋め戻し作業を終了し、西野々遺跡Ⅲ区の調査をすべて完了する。



写真2-3 Ⅲ-1区発掘調査風景2

Ⅳ区(第Ⅳ調査区)

平成17(2005)年5月9日～12月5日

Ⅳ区E(Ⅲ-2区も含む。)(実働45日).....

- 5. 9 調査区へ安全柵を設置する。
- 5.10 Ⅲ-2区の機械掘削を開始し、併行して遺構検出を行う。
- 5.11 Ⅲ-2区の機械掘削を終了し、Ⅳ区北東部の機械掘削を開始し、併行して遺構検出を行う。
- 5.12 Ⅳ区北東部を終了し、北西部の機械掘削に移る。
- 5.13 引き続き北西部の機械掘削を行う。
- 5.16 北西部の機械掘削をほぼ終了する。
- 5.17 北西部を終了し、南東部の機械掘削に移る。
- 5.18 雨天のため現場作業を中止する。
- 5.19 南東部の機械掘削を行う。
- 5.20 南東部を終了し、南西部の機械掘削に移る。
- 5.23 南西部を終了し、機械掘削を全て終了する。
- 5.24 南西部の遺構検出を行う。
- 5.25 調査区の清掃作業を行う。
- 5.26 引き続き清掃作業を行う。
- 5.27 遺構検出状態の写真撮影を行う。
- 5.30 北東部より遺構調査を開始する。
- 5.31 引き続き北東部の調査を行う。
- 6. 1 北東部の調査及び土層堆積について趙氏による現場指導を受ける。
- 6. 2 雨天のため現場作業を中止する。
- 6. 3 北東部の遺構調査を行う。
- 6. 6 北東部と併行して、北西部の調査に入る。
- 6. 7 北東部及び北西部の調査を行い、北東部をほぼ終了する。

1. 調査の経緯 (2) 調査日誌抄

- |      |                                  |      |                                       |
|------|----------------------------------|------|---------------------------------------|
| 6. 8 | 北西部の調査を行う。                       | 6.30 | 引き続き南西部の調査を行う。                        |
| 6. 9 | 引き続き北西部の調査を行う。                   | 7. 1 | 南西部の調査及び、中央バンクの人力掘削を行う。               |
| 6.10 | 北西部の調査及び、調査区中央バンクの除去を行う。         | 7. 4 | 雨天のため現場作業を中止する。                       |
| 6.13 | 北西部の調査を行う。                       | 7. 5 | 南西部の調査と併行して中央バンクの除去作業及び、調査区周辺の草刈りを行う。 |
| 6.14 | 北西部の調査をほぼ終了し、南東部の調査に移る。          | 7. 6 | 雨天のため現場作業を中止する。                       |
| 6.15 | 雨天のため現場作業を中止する。                  | 7. 7 | 南西部の調査を終了する。午後より職員研修のため現場作業を休止する。     |
| 6.16 | 〃                                | 7. 8 | 職員研修及び情報交換会のため現場作業を休止する。              |
| 6.17 | 南東部は遺構が少なく調査をほぼ終了する。             | 7.11 | 調査区の清掃作業を開始する。                        |
| 6.20 | 南西部の調査に移る。                       | 7.12 | 引き続き清掃作業を行う。                          |
| 6.21 | 南西部の調査を行うが、午後より降雨のため現場作業を中止する。   | 7.13 | 遺構完掘状態の写真撮影及び空中写真撮影測量を行う。             |
| 6.22 | 引き続き南西部の調査と中央バンクの除去作業を行う。        | 7.14 | 空中写真撮影測量の結果待ちのため、現場作業を休止する。           |
| 6.23 | 雨天のため現場作業を中止する。午後から現場で平面図の測量を行う。 | 7.15 | 下層確認調査を行い、調査区東側の調査を終了する。              |
| 6.24 | 南西部の調査を行う。                       | 7.18 | 埋め戻し作業を開始する。                          |
| 6.27 | 南西部の調査及び調査区中央バンクの機械掘削を行う。        | 7.19 | 引き続き埋め戻し作業を行う。                        |
| 6.28 | 引き続きバンクの機械掘削及び遺構検出を行う。           | 7.20 | 埋め戻し作業を終了する。                          |
| 6.29 | 南西部の調査を行う。                       |      |                                       |

IV区W(実働71日) .....

- |      |                            |      |                                |
|------|----------------------------|------|--------------------------------|
| 7.21 | コンクリートを除去し、北西部より機械掘削を開始する。 |      | 雨のため現場作業を中止する。                 |
| 7.22 | 北西部の機械掘削を行う。               | 8.11 | 現場作業を休止する。                     |
| 7.25 | 北西部の機械掘削を行い、併行して遺構検出を開始する。 | 8.12 | 〃                              |
| 7.26 | 引き続き北西部の機械掘削を行う。           | 8.15 | 〃                              |
| 7.27 | 北西部の機械掘削をほぼ終了する。           | 8.16 | 〃                              |
| 7.28 | 北西部を終了し、北東部の機械掘削に移る。       | 8.17 | 調査区の清掃作業を行う。                   |
| 7.29 | 北東部の機械掘削を行う。               | 8.18 | 引き続き清掃作業を行う。                   |
| 8. 1 | 引き続き北東部の機械掘削を行う。           | 8.19 | 遺構検出状態の写真撮影を行う。                |
| 8. 2 | 北東部の機械掘削をほぼ終了する。           | 8.22 | 北西部より遺構調査を開始する。                |
| 8. 3 | 北東部を終了し、南西部の機械掘削に移る。       | 8.23 | 北西部の調査を行うが、午後より降雨のため現場作業を中止する。 |
| 8. 4 | 南西部の機械掘削を行う。               | 8.24 | 引き続き北西部の調査を行う。                 |
| 8. 5 | 南西部を終了し、南東部の機械掘削に移る。       | 8.25 | 北西部と併行して、北東部の調査に入る。            |
| 8. 8 | 南東部の機械掘削を行う。               | 8.26 | 北西部及び北東部の調査を行い、北西部の調査は終了する。    |
| 8. 9 | 南東部を終了し、機械掘削は全て終了する。       | 8.29 | 北東部の調査を行う。                     |
| 8.10 | 調査区北壁の写真撮影を行うが、午後より降       | 8.30 | 引き続き北東部の調査を行う。                 |

- 8.31 雨天のため現場作業を中止する。
- 9. 1 北東部の調査を行う。
- 9. 2 引き続き北東部の調査を行う。
- 9. 5 雨天のため現場作業を中止する。
- 9. 6 台風のため現場作業を中止する。
- 9. 7 昨日の降雨のため現場作業を中止する。
- 9. 8 調査区中央バンクセクションの写真撮影及び図面作成を行う。
- 9. 9 北東部の調査及び中央バンクの掘削を行う。
- 9.12 北東部の調査を終了し、南西部の調査に移る。
- 9.13 南西部の調査及び黒色の堆積層にトレンチを設定し、確認作業を行う。
- 9.14 引き続き南西部の調査を行う。
- 9.15 自然科学分析用の清掃作業及び土層堆積の走行傾斜測定法について趙氏より現場指導を受ける。
- 9.16 南西部の調査及び、溝跡のトレンチ確認を行う。
- 9.20 南西部の調査を行う。
- 9.21 遺構平面図作成及び測量を行う。
- 9.22 南西部の調査を行う。
- 9.26 南西部の調査及び黒色堆積層の人力掘削を行う。
- 9.27 引き続き南西部の調査及び黒色堆積層の人力掘削を行う。
- 9.28                    〃
- 9.29 南西部の調査及び人力掘削後、遺構検出を行う。
- 9.30 情報交換会のため現場作業を休止する。
- 10. 3 南西部の調査及び黒色堆積層の再度人力掘削を行う。
- 10. 4 引き続き南西部の調査及び黒色堆積層の人力掘削を行う。
- 10. 5 雨天のため現場作業を中止する。
- 10. 6 昨日の降雨のため現場作業を中止し、排水作業を行う。
- 10. 7 雨天のため現場作業を中止する。
- 10.11                    〃
- 10.12 排水作業及び調査区周辺の草刈りを行う。
- 10.13 南西部と併行して南東部の調査に入る。
- 10.14 引き続き南西部及び南東部の調査を行う。
- 10.17 南西部及び南東部の調査を行い、南西部の調査を終了する。
- 10.18 南東部の調査を行う。
- 10.19 引き続き南東部の調査を行う。
- 10.20                    〃
- 10.21 南東部の調査をほぼ終了する。
- 10.24 南東部の調査を終了する。
- 10.25 調査区の清掃作業を開始する。
- 10.26 引き続き清掃作業を行う。
- 10.27 遺構完掘状態の写真撮影を行う。
- 10.28 遺構完掘状態の空中写真撮影測量を行う。
- 10.31 遺構平面図作成及び測量を行う。
- 11. 1 引き続き遺構平面図作成及び測量を行う。
- 11. 2                    〃
- 11. 4 遺構平面図作成及び測量を行う。
- 11. 7 現場作業を休止する。
- 11. 8                    〃
- 11. 9                    〃
- 11.10                    〃
- 11.11                    〃
- 11.16                    〃
- 11.17 記者発表及び現地説明会に向けて、調査区の清掃作業を行う。
- 11.18 引き続き清掃作業を行う。
- 11.21 西野々遺跡現地説明会の記者発表を行う。
- 11.23 西野々遺跡現地説明会を開催する。
- 11.24 現場作業を休止する。
- 11.25                    〃
- 11.28 下層確認調査を行い、Ⅳ区Wの調査を終了する。午後より埋め戻し作業を開始する。
- 11.29 引き続き埋め戻し作業を行う。
- 11.30                    〃
- 12. 1                    〃



写真2-4 Ⅳ区W発掘調査風景

1. 調査の経緯 (2) 調査日誌抄

- 12.2 引き続き埋め戻し作業を行う。 査を全て完了する。  
12.5 埋め戻し作業を終了し、西野々遺跡Ⅳ区の調

V区(第V調査区)

平成17(2005)年5月9日～平成18(2006)年1月16日

V区E(V-1・3区)(実働42日) .....

- |                                  |                                      |
|----------------------------------|--------------------------------------|
| 5.9 重機の搬入及び調査区周辺に安全柵を設置する。       | 6.7 北東部を中心に調査を行う。                    |
| 5.10 北東部より機械掘削を開始する。             | 6.8 北西部の溝跡を中心に調査を行う。                 |
| 5.11 北東部の機械掘削と併行して遺構検出を開始する。     | 6.9 北西部のレベル測量を行う。                    |
| 5.12 北東部の機械掘削を一旦終了する。            | 6.10 北東部の調査を行う。                      |
| 5.13 北西部の機械掘削に移る。                | 6.13 調査区中央に設置した東西バンクの除去作業を行う。        |
| 5.16 北西部の機械掘削を一旦終了する。            | 6.14 北部を中心に調査を行う。                    |
| 5.17 北東部の機械掘削を再開する。              | 6.15 北西部の調査を行う。                      |
| 5.18 雨天のため現場作業を中止する。             | 6.16 雨天のため現場作業を中止する。                 |
| 5.19 北西部の機械掘削を行う。                | 6.17 南東部の調査を行う。                      |
| 5.20 南東部の機械掘削を行う。                | 6.20 南西部の調査を行う。                      |
| 5.21 南西部の機械掘削を行う。                | 6.21 遺構調査をほぼ終了する。午後より降雨のため現場作業を中止する。 |
| 5.23 機械掘削を全て終了する。                | 6.22 調査区の清掃作業及びレベル測量を行う。             |
| 5.24 北東部の遺構検出を行う。                | 6.23 雨天のため現場作業を中止する。午後から東部の遺構測量を行う。  |
| 5.25 北西部の遺構検出を行う。                | 6.24 調査区の清掃作業を行い、遺構完掘状態の写真撮影を行う。     |
| 5.26 南部の遺構検出を行う。                 | 6.25 遺構完掘状態の空中写真撮影測量を行う。             |
| 5.27 調査区の清掃作業を行い、遺構検出状態の写真撮影を行う。 | 6.27 南部のレベル測量を行う。                    |
| 5.28 東部の遺構測量を行う。                 | 6.28 下層確認調査を行い、V区Eの調査を全て終了する。        |
| 5.30 北東部より遺構調査を開始する。             | 6.29 埋め戻し作業を開始する。                    |
| 5.31 引き続き北東部の調査を行う。              | 6.30 引き続き埋め戻し作業を行う。                  |
| 6.1 北東部と併行して北西部の調査に入る。           | 7.1                                  |
| 6.2 雨天のため現場作業を中止する。              | 7.2                                  |
| 6.3 調査区中央に設定した南北バンクの除去作業を行う。     | 7.4 埋め戻し作業を終了する。                     |
| 6.6 引き続き調査区バンクの除去作業を行う。          |                                      |

V区W(V-2区)(実働110日) .....

- |                                      |                           |
|--------------------------------------|---------------------------|
| 7.5 西側の調査区の調査に移る。まず、調査区中央にバンクの設定を行う。 | 7.13 引き続き北西部の機械掘削を行う。     |
| 7.6 雨天のため現場作業を中止する。                  | 7.14 北西部の機械掘削をほぼ終了する。     |
| 7.7 北東部より機械掘削及び遺構検出を開始する。            | 7.15 北西部を終了し、南西部の機械掘削に移る。 |
| 7.11 北西部の機械掘削を行う。                    | 7.19 南西部を終了し、北東部の機械掘削に移る。 |
| 7.12 引き続き北西部の機械掘削を行う。                | 7.20 北東部の機械掘削を行う。         |
|                                      | 7.21 引き続き北東部の機械掘削を行う。     |

- 7.22 北東部の機械掘削を終了する。
- 7.25 北東部の遺構検出を行う。
- 7.26 南東部の機械掘削に移る。
- 7.27 南西部の遺構検出を行う。
- 7.28 引き続き南西部の遺構検出を行う。
- 7.29 南西部の遺構検出を終了する。
- 8. 1 南東部の機械掘削を再開する。
- 8. 2 南東部を終了し、機械掘削を全て終了する。
- 8. 3 北東部を人力掘削する。
- 8. 4                    〃
- 8. 5                    〃
- 8. 8 北東部の遺構検出を行う。
- 8. 9 北東部を人力掘削する。
- 8.10 現場作業を休止する。
- 8.11                    〃
- 8.12                    〃
- 8.15                    〃
- 8.16                    〃
- 8.17 北東部の人力掘削を再開する。
- 8.18 北東部の遺構検出を行う。
- 8.19 北東部の遺構検出を終了する。
- 8.22 調査区中央バンクセクションの写真撮影及び  
図面作成を行う。
- 8.23 調査区南壁及び東壁セクションの写真撮影及び  
図面作成を行う。
- 8.24 南東部の人力掘削を行う。
- 8.25 引き続き南東部の人力掘削を行う。
- 8.26 南東部の人力掘削及び遺構検出を行う。
- 8.29 引き続き南東部の人力掘削及び遺構検出を  
行う。
- 8.30 南東部の遺構検出を終了する。
- 8.31 雨天のため現場作業を中止する。
- 9. 1 調査区の清掃作業を行う。
- 9. 2 引き続き清掃作業を行う。
- 9. 3 遺構検出状態の写真撮影を行う。
- 9. 5 雨天のため現場作業を中止する。
- 9. 6 台風のため現場作業を中止する。
- 9. 7 排水作業及び調査区中央バンクの除去作業を  
開始する。
- 9. 8 北西部より遺構調査を開始する。
- 9. 9 引き続き北西部の調査を行う。
- 9.12 北西部の調査をほぼ終了する。



写真2-5 V区W発掘調査風景

- 9.13 北東部の調査に移る。
- 9.14 引き続き北東部の調査を行う。
- 9.15 調査区中央バンクを全て掘削する。
- 9.16 北西部のレベル測量を行う。
- 9.20 北東部の調査を行う。
- 9.21 引き続き北東部の調査を行う。
- 9.22 調査区中央部の溝跡を中心に調査を行う。
- 9.26 引き続き調査区中央部の溝跡を中心に調査を  
行う。
- 9.27 北東部の調査を行う。
- 9.28 引き続き北東部の調査を行う。
- 9.29 北東部の溝跡を中心に調査を行う。
- 9.30 引き続き北東部の溝跡を中心に調査を行う。
- 10. 3 南西部の調査に移る。
- 10. 4 引き続き南西部の調査を行う。
- 10. 5 雨天のため現場作業を中止する。
- 10. 6 昨日の降雨のため現場作業を中止する。
- 10. 7 雨天のため現場作業を中止する。午後から西  
側の遺構の測量を行う。
- 10.11 雨天のため現場作業を中止する。



写真2-6 趙氏による現場指導

1. 調査の経緯 (2) 調査日誌抄

- 10.12 南東部の調査に移る。  
10.13 引き続き南東部の調査を行う。  
10.14 雨天のため現場作業を中止する。  
10.17 南東部の調査を行う。  
10.18 引き続き南東部の調査を行う。  
10.19 南東部の溝跡を中心に調査を行う。  
10.20 引き続き南東部の溝跡を中心に調査を行う。  
10.21 調査区の清掃作業を行う。  
10.22 引き続き清掃作業を行う。  
10.24 調査区の清掃作業を終了する。  
10.25 遺構完掘状態の写真撮影及び空中写真撮影測量を行う。  
10.26 レベル実測を行い、一次検出面の調査を終了する。  
10.27 調査区西側の二次検出に伴う機械掘削及び人力掘削を開始する。  
10.28 引き続き機械掘削及び人力掘削を行う。  
10.31 二次検出に伴う機械掘削及び人力掘削を終了する。  
11.1 二次検出面の遺構検出を行う。  
11.2 二次検出面の遺構検出状態の写真撮影を行う。  
11.4 二次検出面の遺構調査を開始する。  
11.7 昨日の降雨のため現場作業を中止する。午後から遺構測量を行う。  
11.8 北西部の調査を行う。  
11.9 北西部及び南西部の調査を行う。  
11.10 雨天のため現場作業を中止する。午後から遺構測量を行う。  
11.11 雨天のため現場作業を中止する。  
11.14 北西部及び南西部の調査を終了する。  
11.15 北西部の一部を再度遺構検出及び調査する。  
11.16 職員研修のため現場作業を休止する。  
11.17 北東部の調査を行う。  
11.18 引き続き北東部の調査を行う。  
11.21 西野々遺跡現地説明会の記者発表を行う。  
11.22 北東部の調査を行う。  
11.23 西野々遺跡現地説明会を開催する。  
11.24 南東部の調査を行う。  
11.25 引き続き南東部の調査を行う。  
11.28 南東部の溝跡完掘状態の写真撮影のため清掃作業を行う。  
11.29 南東部の遺構完掘状態の写真撮影を行う。  
11.30 南部を再検出し、遺構検出状態の写真撮影を行う。  
12.1 南部で再検出した遺構の調査を行う。  
12.2 引き続き南部の調査を行う。  
12.5 南部で再検出した遺構完掘状態の写真撮影を行う。  
12.6 調査区の清掃作業を行う。  
12.7 引き続き清掃作業を行う。  
12.8 二次検出面の遺構完掘状態の写真撮影を行う。  
12.9 二次検出面の遺構完掘状態の空中写真撮影測量を行う。  
12.12 二次検出面の測量を行う。  
12.13 下層確認調査及び土層堆積について趙氏による現場指導を受ける。  
12.14 下層確認調査を終了し、V区Wの調査を終了する。  
12.15 埋め戻し作業を開始する。  
12.16 引き続き埋め戻し作業を行う。  
12.17 〃  
12.19 〃  
12.20 〃  
12.21 〃  
12.22 〃  
12.26 〃  
12.27 〃  
1.10 埋め戻し作業を再開し併せて整地作業を行う。  
1.11 引き続き埋め戻し作業及び整地作業を行う。  
1.16 埋め戻し作業を終了し、西野々遺跡V区の調査を全て完了する。



写真2-7 現地説明会風景

## 2. 調査区の概要

### (1) III区

III区は平成16年度に発掘調査を行ったII区の西隣の調査区で、東西約190m、南北約60mの範囲である。調査区には市道と水路が通っていたため、調査区を5区に分けて発掘調査を行った。最も広い部分をIII-1区、市道を挟んだIII-1区西側の調査区をIII-2区(発掘調査時点ではIV区として調査を行ったが、遺構の状況等からIII区に含めて報告する。)、III-1区の南隣で溝と水路に挟まれた部分をIII-3区、III-3区の南側で水路で区切られたIII区南端の調査区をIII-4区、III-4区とは道路を挟んだ西側の調査区をIII-5区とした。調査は平成16年度にIII-1区の東半分、平成17年度に残りの部分の調査を行った。

地形は、III-1区南東端から北中央部東寄りにかけて幅10~15mで、標高7.0~7.5mを測る低湿地状の窪地があり、低湿地の東側にはII区から続く集落跡の西端がある。低湿地の西側は標高7.8mから徐々に傾斜し、III-2区の7.5mに至る。また、南側(III-4区)は標高8.2mから西に向かって徐々に傾斜し、III-5区に至る。遺構は溝跡を中心に検出され、中でも、低湿地の西側の緩斜面には弥生時代から中世にかけての溝跡が多数掘削されていた。

調査面積は、III-1区が4,433㎡、III-2区が181㎡、III-3区が188㎡、III-4区が1,530㎡、III-5区が138㎡で、合計6,470㎡であった。また、下層確認のためのトレンチ(61㎡)を設定して、土層の堆積状況の調査を行った。

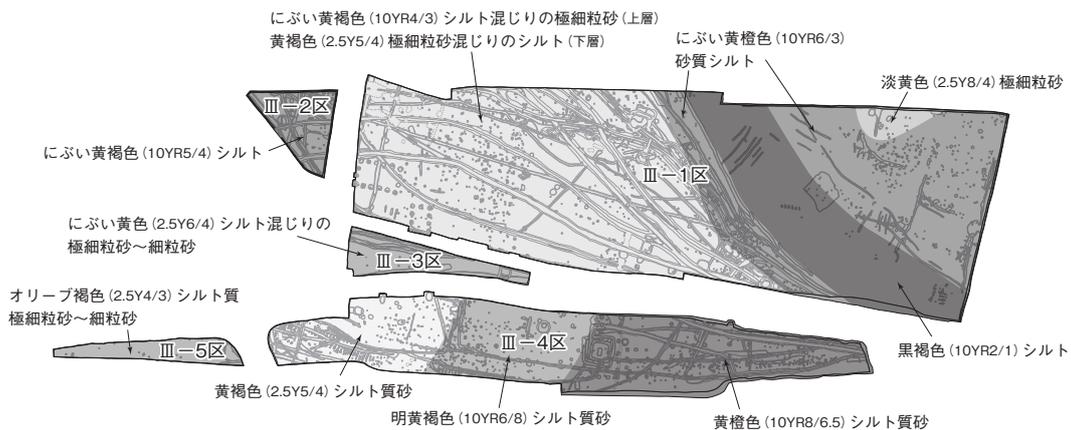


図2-1 III区の調査区と地山の堆積層(S=1/1,500)

#### ① 層序

III-1区でみられた低湿地状の窪地を挟み、東西が高くなっており、東側はII区の集落跡に続き、西側は無数の溝跡が掘削され、古代の掘立柱建物跡も残り、標高の高い部分では遺物包含層は削平され、表土直下が遺構検出面となる部分が多かった。一方、緩斜面部は削平の影響を受けず、比較的良好的な堆積状態がみられた。

- 第I層 中礫を少し含む灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト層(耕作土)
- 第II層 中礫を少し含む灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト層(旧耕作土)
- 第III層 中礫を多く含む暗褐色(10YR3/3)砂質シルト層
- 第IV層 中礫を若干含む黒褐色(10YR2/3)シルト層
- 第V層 明黄褐色(10YR6/8)砂質シルトのブロックを多く含む黒褐色(10YR2/2)シルト層
- 第VI層 明黄褐色(10YR6/8)砂質シルトの土粒を多く含む黒色(10YR2/1)粘土質シルト層

2. 調査区の概要 (1) III区

第Ⅶ層 黒色(10YR2/1)粘土質シルト層

第Ⅷ層 におい黄橙色(10YR6/3)砂質シルト層

層位中、第Ⅲ～Ⅵ層が遺物包含層であるが、堆積状態からすると整地による堆積とみられ、地山が深いほど顕著である。実際、遺構が掘削されていたのは地山の標高が高い部分で、遺構が検出されたのは第Ⅶ層と第Ⅷ層の上面であった。第Ⅶ層の堆積は窪地で顕著にみられ、その部分の遺構検出面となり、標高が高くなるに従って第Ⅷ層が遺構検出面となる。一方、第Ⅵ層から順に堆積が見られなくなり、最終的には第Ⅲ層の堆積も確認できなくなって、第Ⅰ層直下が第Ⅷ層となる。

第Ⅰ層は現在の耕作土層で、厚さ約20cmを測る。調査前までは水田であった。

第Ⅱ層も第Ⅰ層と同じ土質を呈していることから耕作土とみられ、旧耕作土層と判断され、厚さは約10cmを測る。

第Ⅲ層は中世の遺物包含層で、遺存状態の良いところで厚さ約15cmを測る。

第Ⅳ層は古代後半から末の遺物包含層で、遺存状態の良いところで厚さ約12cmを測る。

第Ⅴ層は古代前半の遺物包含層で、遺存状態の良いところで厚さ約10cmを測る。

第Ⅵ層は弥生時代から古墳時代の遺物包含層で、遺存状態の良いところで厚さ約10cmを測る。

第Ⅶ層と第Ⅷ層は自然堆積層で、前述のとおり第Ⅶ層は窪地を中心に堆積し、第Ⅷ層は第Ⅶ層の下層から微高地上で認められ、多くの遺構の検出面となる。なお、場所により色調と土質は異なるものの基本は洪水堆積(洪水流による砂の充填)による。

以上が、基本層序とみられるもので、出土遺物もこの土層に対応している。

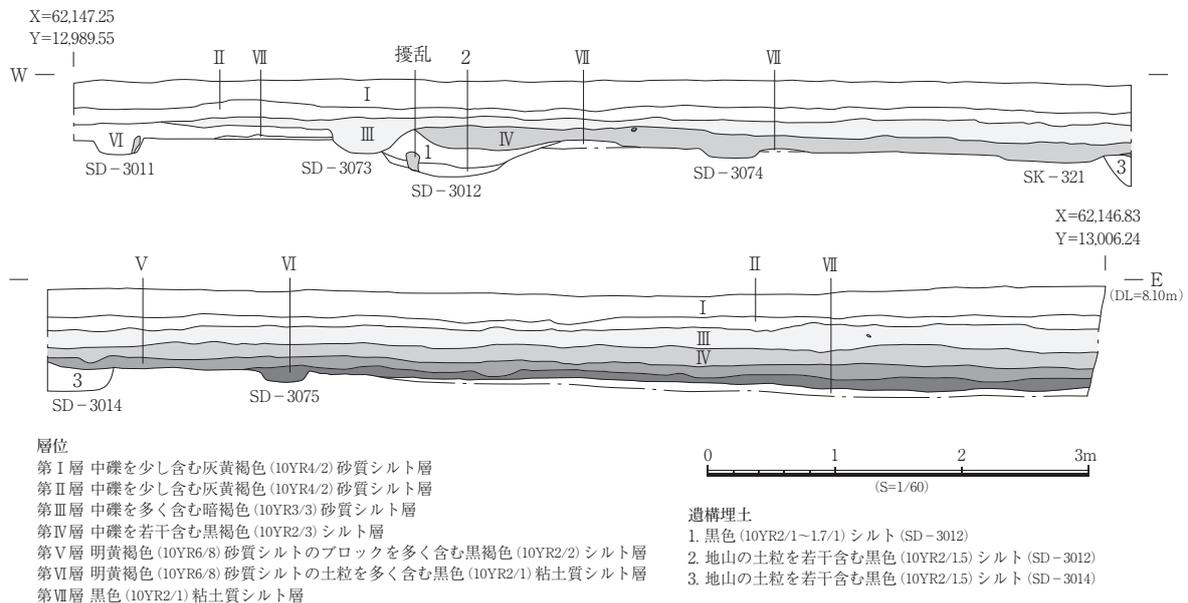


図2-2 III-1区北壁セクション

一方、南側の調査区に当たるIII-4区では次の堆積が認められた。

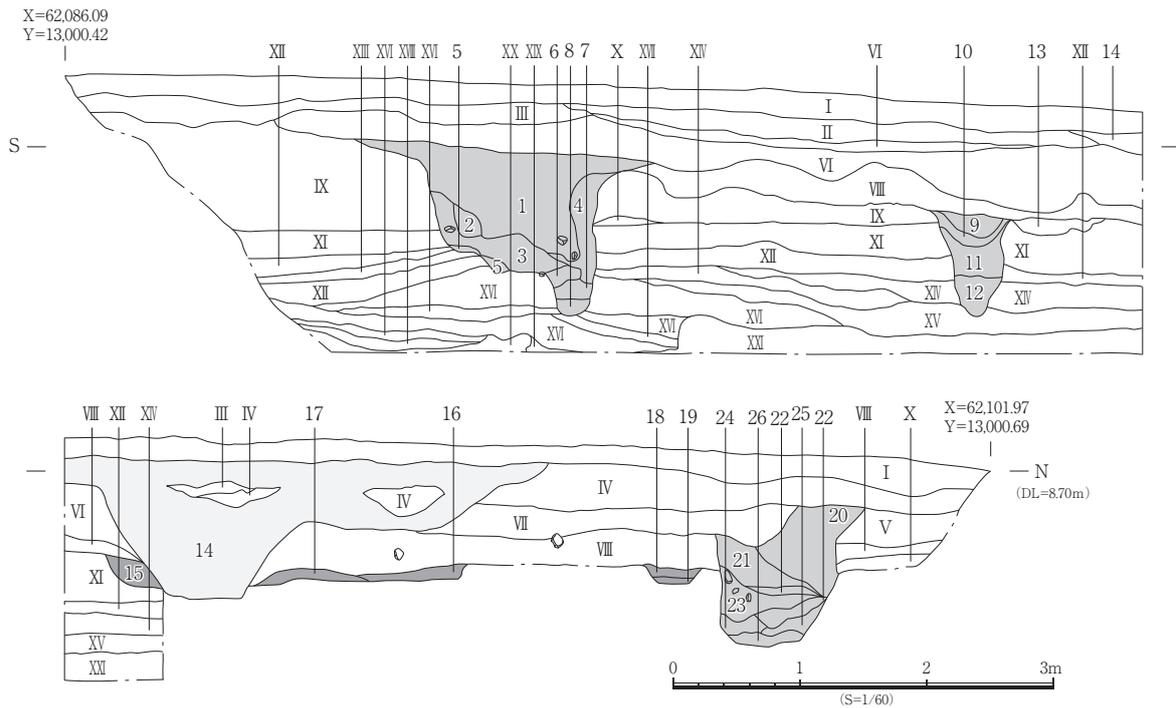
第Ⅰ層 中粒中礫混じりのにおい黄褐色(10YR5/4)砂質シルト層(表土層)

第Ⅱ層 中粒中礫混じりの褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト層

第Ⅲ層 中粒中礫混じりのにおい黄褐色(10YR5/3)シルト層

第Ⅳ層 中粒中礫を少し含むにおい黄橙色(10YR6/3)シルト質砂層

- 第V層 中礫を多く含むにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト層
- 第VI層 褐色(10YR4/4)砂質中粒～粗粒中礫層
- 第VII層 黄褐色(10YR5/8)シルト質砂層(遺物包含層)
- 第VIII層 暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト層(遺物包含層)
- 第IX層 中粒～極粗粒礫を多く含む黒色(10YR2/1)粘土質シルト層
- 第X層 明黄褐色(10YR6/8)砂質シルト層
- 第XI層 灰黄色(2.5Y6/2)シルト質極細粒～細粒砂層
- 第XII層 にぶい黄色(2.5Y6/4)極細粒～細粒砂層



- 層位
- 第I層 中粒中礫混じりのにぶい黄褐色(10YR5/4)砂質シルト層
  - 第II層 中粒中礫混じりの褐色(10YR4/1)粘土質シルト層
  - 第III層 中粒中礫混じりのにぶい黄褐色(10YR5/3)シルト層
  - 第IV層 中粒中礫を少し含むにぶい黄褐色(10YR6/3)シルト質砂層
  - 第V層 中礫を多く含むにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト層
  - 第VI層 褐色(10YR4/4)砂質中粒～粗粒中礫層
  - 第VII層 黄褐色(10YR5/8)シルト質砂層
  - 第VIII層 暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト層
  - 第IX層 中粒～極粗粒礫を多く含む黒色(10YR2/1)粘土質シルト層
  - 第X層 明黄褐色(10YR6/8)砂質シルト層
  - 第XI層 灰黄色(2.5Y6/2)シルト質極細粒～細粒砂層
  - 第XII層 にぶい黄色(2.5Y6/4)極細粒～細粒砂層
  - 第XIII層 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂層
  - 第XIV層 にぶい黄色(2.5Y6/3)細粒砂層
  - 第XV層 にぶい黄褐色(10YR6/3)細粒砂層
  - 第XVI層 オリーブ黄色(5Y6/3)中粒砂層
  - 第XVII層 灰オリーブ色(5Y5/3)細粒～中粒砂層
  - 第XVIII層 にぶい黄色(2.5Y6/3)中粒砂層
  - 第XIX層 浅黄色(5Y7/3)中粒砂層
  - 第XX層 灰オリーブ色(5Y4/2)細粒中礫混じりの中粒～粗粒砂層
  - 第XXI層 灰オリーブ色(5Y6/2)極粗粒中礫混じりの極粗粒砂層
- 3. 中粒～極粗粒中礫を多く含む黒色(10YR2/1)粘土質シルト(SD-3055)
  - 4. 中粒～極粗粒中礫を多く含む黒色(10YR2/1)粘土質シルト(SD-3055)
  - 5. 黒褐色(10YR3/1)砂質シルト(SD-3055)
  - 6. 地山(10YR8/6.5シルト質砂)のブロック(SD-3055)
  - 7. 中粒～極粗粒中礫を僅かに含む黒色(10YR2/1)粘土質シルト(SD-3055)
  - 8. 褐色(10YR4/1)シルト質砂(SD-3055)
  - 9. 地山の土粒を僅かに含む暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト(SD-3054)
  - 10. 地山の土粒を若干含む黒色(10YR2/1)粘土質シルト(SD-3054)
  - 11. 地山のブロックと土粒を多量に含む黒色(10YR2/1)粘土質シルト(SD-3054)
  - 12. 地山の土粒を比較的多く含む黒色(10YR2/1)粘土質シルト(SD-3054)
  - 13. 地山の土粒を僅かに含む暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト(SD-3084)
  - 14. 中粒中礫混じりの黄褐色(10YR5/8)シルト質砂層を主に礫を比較的多く含む(SD-3120)
  - 15. 黒色(10YR2/1)粘土質シルト(SD-3080)
  - 16. 黒色(10YR2/1)粘土質シルト(SD-3081)
  - 17. 地山の土粒とブロックを含む黒色(10YR2/1)粘土質シルト(SD-3081)
  - 18. 黒色(10YR2/1)粘土質シルト(SD-3077)
  - 19. 地山の土粒とブロックを若干含む黒色(10YR2/1)粘土質シルト(SD-3077)
  - 20. 地山の土粒を含む暗褐色(10YR3/3)砂質シルト(SD-3076)
  - 21. 黒色(10YR2/4)砂質シルト(SD-3076)
  - 22. 地山ブロック(SD-3076)
  - 23. 地山の土粒とブロックを僅かに含む黒色(10YR2/1)粘土質シルト(SD-3076)
  - 24. 黒褐色(10YR3/2)砂質シルト(SD-3076)
  - 25. 黄褐色(10YR5/8)シルト質極細粒砂(SD-3076)
  - 26. 地山のブロックを含む灰黄褐色(10YR6/2)極細粒～細粒砂(SD-3076)

遺構埋土

- 1. 中粒～粗粒中礫を比較的多く含むにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト(SD-3055)
- 2. 地山の土粒を多く含むにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト(SD-3055)

図2-3 III-4区南北バンク西壁セクション

## 2. 調査区の概要 (1) III区

第XIII層 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂層

第XIV層 にぶい黄色(2.5Y6/3)細粒砂層

第XV層 にぶい黄橙色(10YR6/3)細粒砂層

第XVI層 オリーブ黄色(5Y6/3)中粒砂層

第XVII層 灰オリーブ色(5Y5/3)細粒～中粒砂層

第XVIII層 にぶい黄色(2.5Y6/3)中粒砂層

第XIX層 浅黄色(5Y7/3)中粒砂層

第XX層 灰オリーブ色(5Y4/2)細粒中礫混じりの中粒～粗粒砂層

第XXI層 灰オリーブ色(5Y6/2)極細粒中礫混じりの極粗粒砂層

第X層以下は洪水堆積(洪水流による砂の充填)によるもので、遺跡の基盤となっている。第I層は表土層で、調査前までは耕作土層であった。第I層直下で検出した溝跡(SD-3120)は昭和以降の比較的新しい時期のもので、微高地の裾部に掘削されており、区画と共に排水等を担ったものとみられる。この微高地を構成しているのは第II～IX層で、その多くが中礫を含んだ礫層であることから古代以降南の山の斜面崩壊によりできたものとみられる。この内、第VII層が中世、第VIII層が古代の遺物包含層とみられ、第VII層が基本層序の第III層に、第VIII層が基本層序の第IV層にほぼ対応する。なお、平面的に中世以前の遺構が検出できたのは第X層ないし第XI層上面であった。

### ② 堆積層出土遺物

#### 第I層出土遺物

##### 土師器(図2-4 3001～3003)

3001は甕の口縁部で、口縁部は短く外反し、端部は丸い。胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。3002は甗ではないかとみられるもので、口縁部は外上方に立ち上がり、端部は丸い。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。3003は手づくねの小皿で、口縁部は内湾気味に短く立ち上がり、端部は細い。胎土は精良で、細粒砂から粗粒砂を少し含む。

##### 土師質土器(図2-4 3004～3010)

3004～3007は杯の底部で、切り離しは回転糸切りによる。3004は粘土紐巻き上げミズビキ成形(A技法)、3005～3007はミズビキ(B技法)による。3004は残部に回転ナデ調整の痕が残り、胎土には細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。3005は糸切りの後、縁辺部にナデ調整を加える。胎土には細粒砂から中粒砂を若干含む。3006は内底面にロクロ目が残り、胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。3007は、内面にはナデ調整を施すが、外面は未調整である。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。3008～3010は小皿で、いずれもB技法による。3008は、焼成が極めて良く、近世以降のものともみられる。3009は器面に回転ナデ調整を施し、切り離しは回転糸切りによる。3010は器面に回転ナデ調整を施すが、底部の切り離しは摩耗しており不明である。胎土には細粒砂から中粒砂を3008・3009が若干、3010が少し含む。

##### 須恵器(図2-4 3011・3012)

3011は杯身で、ハの字形に開く高さ8mmの高台が付き、端部は内傾する凹面をなす。内底面には不整方向と体部外面にはヨコ方向のヘラ磨きを施し、底部の切り離しは静止ヘラ切りによる。胎土は精良で、白色細粒砂から粗粒砂を若干含む。3012は高杯で、直立する中空の脚柱部と杯底部が残る。脚柱部内面にはしぼり目が残り、胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

青磁(図2-4 3013)

同安窯系の皿の底部で、底部の切り離しは回転ヘラ切りとなり、体部外面には回転ヘラ削り調整を施し、露胎となり、他に灰黄色を呈する青磁釉を施釉する。胎土には黒色粒を比較的多く含む。

肥前系陶器(図2-4 3014・3015)

3014は碗で、底部は削り出し高台で、外面に2条の界線、畳付は釉ハギとなる。見込には五弁花のコンニャク版が施され、器面には透明釉を施釉する。胎土は精良である。3015も碗で、底部は削り出し高台で、外面には3条の界線、畳付は欠損するが釉ハギを行っていたものとみられ、全面に白色釉

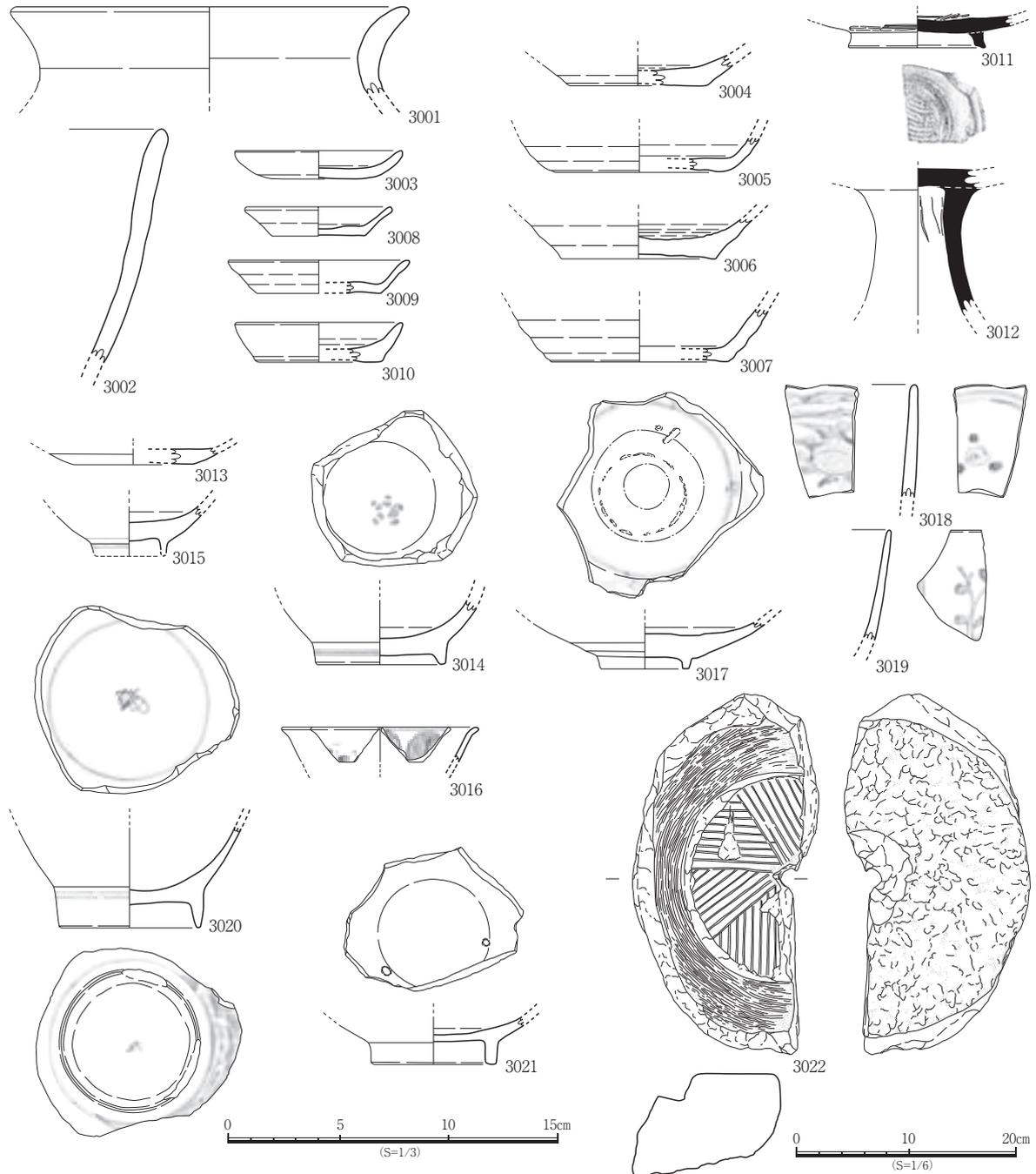


図2-4 III区第I層出土遺物実測図

## 2. 調査区の概要 (1) III区

を施釉する。胎土には黒色粒を比較的多く含む。

### 肥前系磁器(図2-4 3016~3018)

3016は碗で、器面には界線と草花文が施され、胎土には黒色粒を多く含む。3017は皿で、底部は削り出し高台となり、見込には2条の界線で区切った草文を施し、全面に灰白色釉を施釉した上で、畳付と見込は蛇ノ目状に釉ハギを行う。胎土は精良である。3018は稜花鉢とみられる口縁部の破片で、内面には花文、外面には2条の界線と唐草文が施される。胎土には黒色粒を若干含む。

### 能茶山焼(図2-4 3019・3020)

いずれも広東茶碗とみられるもので、3019は口縁部外面に草花文、3020は体部外面に草花文と2条の界線、見込に「寿」、外底面に「サ」の文字を書く。3020は全面に透明釉を施釉した上で、畳付を釉ハギする。胎土はいずれも精良である。

### 近世陶器(図2-4 3021)

産地不明の碗で、底部は削り出し高台で露胎となり、見込には三足付ハマ痕跡が残る。胎土には砂粒をほとんど含まず、精良である。

### 石製品(図2-4 3022)

石臼で、下臼の約1/2が残存し、上面に細かい摺目が残る。

## 第Ⅲ層出土遺物

### 弥生土器(図2-5 3023)

壺の口縁部とみられるもので、外面にはタタキ目、内面にはハケ目が残る。口唇部は回転ナデ調整を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

### 土師器(図2-5 3024~3026)

3024は小型の甕で、口縁部は肩部から大きく湾曲して短く立ち上がり、端部を細く仕上げる。口縁部はヨコナデ調整、他はナデ調整を施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

3025は所謂左手手法による杯で、内底面にはわずかにへら磨きの痕跡が残る。胎土には細粒砂を比較的多く含む。3026も杯であるが、手づくねで、口縁部はヨコナデ調整、内面はナデ調整を施し、体部外面には指押えの痕が残る。胎土には雲母片、細粒砂から中粒砂を少し含む。

### 須恵器(図2-5 3027・3028)

3027は皿で、底部の切り離しは回転へら切りとなり、内面はナデ調整、外面には火襷が1ヵ所残る。胎土には白色極細粒砂から細粒砂を比較的多く含む。

3028は短頸壺の口縁部とみられるもので、口縁部は短く外反し、端部は丸い。内外面は回転ナデ調整を施し、口縁部外面下半に類例をほとんど見ないハケ目が残る。胎土には白色中粒砂から粗粒砂を若干含む。

### 土師質土器(図2-5 3029~3033)

3029~3031は杯で、成形はいずれもA技法となり、底部の切り離しは回転糸切りによる。3031の底部はややベタ高台風となる。3029は回転ナデ調整で、内底面にナデ調整を加える。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。3030は摩耗しており不明で、胎土には細粒砂から中粒砂を若干含む。3031は、体部外面が未調整で、他は回転ナデ調整を施した上で、内面にはナデ調整を加え、さらにへら磨きを施していたとみられる。胎土には細粒砂から中粒砂を少し含む。

3032は碗で、成形はA技法となり、底部外面には小さな高台が残る。器面は摩耗し、胎土には細粒

砂から粗粒砂を比較的多く含む。

3033は小皿で、成形はA技法となり、底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。器面は回転ナデ調整を施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

瓦器(図2-5 3034)

碗の口縁部で、体部外面には指押え、他はヨコナデ調整を施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

瓦質土器(図2-5 3035)

三足釜で、内湾して上がる胴部外面には足の付根が遺存する。口縁部下端には断面三角形の鐔が巡り、鐔から上にはヨコナデ調整、内面はナデ調整、外面には粘土紐の接合痕や指押えの痕が明瞭に残る。外面鐔以下には煤が付着する。胎土には粗粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

青磁(図2-5 3036~3040)

3036~3039は龍泉窯系の碗で、3036は器面が摩滅し、外面には釉タレがみられる。3037は口縁部内面に3条のクシ描沈線が巡り、器面には薄く青磁釉が施釉される。3038は削り出し高台で釉ハギとなり、体部外面には鎬蓮弁文、見込にはクシ描文が残る。3039も削り出し高台で、見込には割花文を

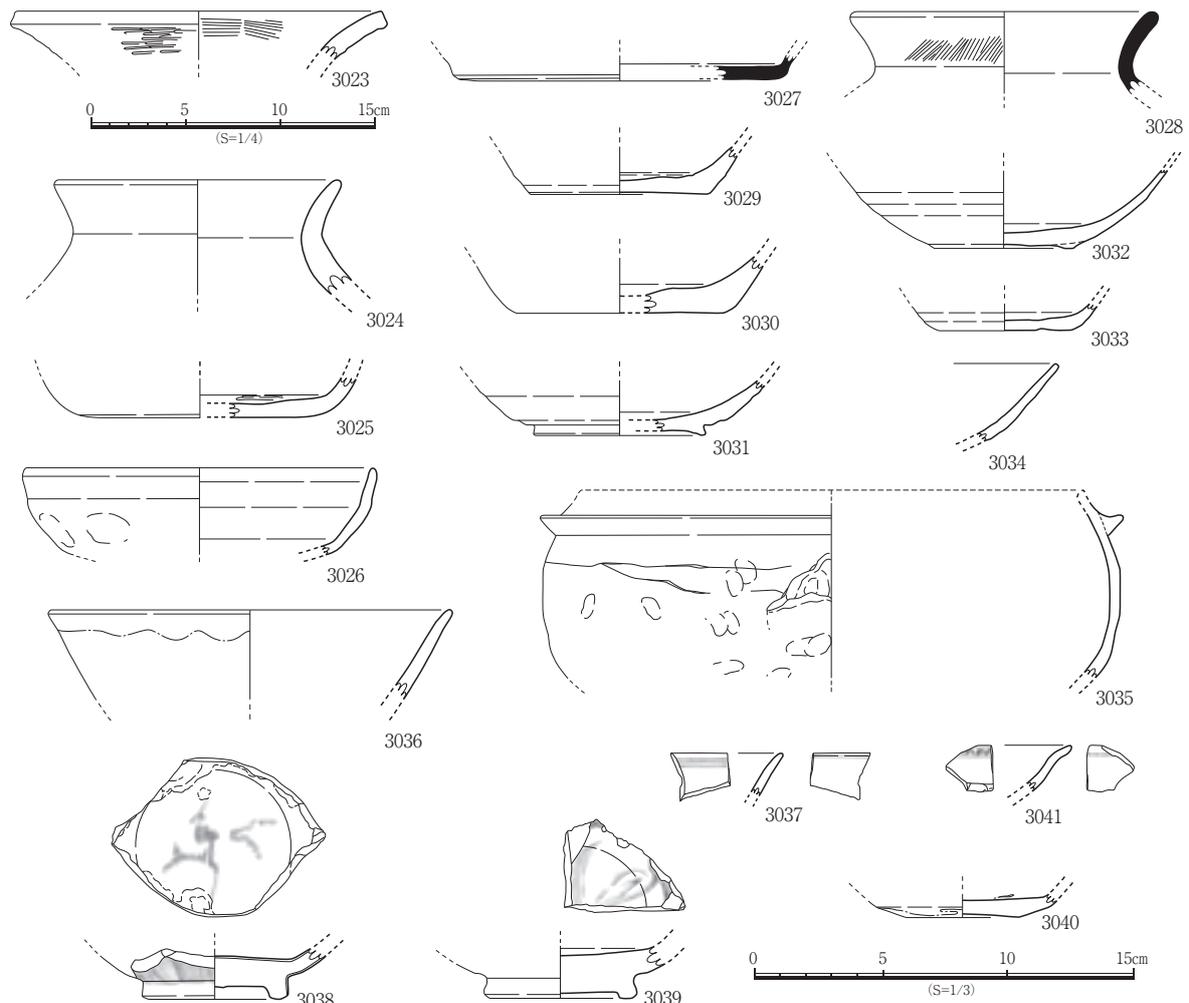


図2-5 Ⅲ区第Ⅲ層出土遺物実測図

## 2. 調査区の概要 (1) III区

施す。胎土には黒色粒を3036が多く含む以外は若干含む。

3040は同安窯系の皿で、底部の切り離しは回転ヘラ切りとなり、見込には胎土目とみられる痕跡が残る。胎土には黒色粒を少し含む。

### 青花(図2-5 3041)

皿の口縁部とみられる破片で、内面には界線で挟まれた雷文帯、外面には1条の界線が残る。胎土には黒色粒を多く含む。

## 第IV層出土遺物

### 弥生土器(図2-6 3042)

鉢とみられる底部の破片で、底部は小さな平底となり、外面には放射線状、内面は不整方向のヘラ磨きを施す。胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

### 土師器(図2-6 3043・3044)

いずれも甕の把手で、3043は全長3.5cmと小型で、3044は全長4.2cmを測る。いずれも器面はナデ調整を施す。胎土には、細粒砂から極粗粒砂を3043が比較的多く、3044が多く含む。

### 須恵器(図2-6 3045~3051)

3045は杯蓋で、平らな天井部外面には擬宝珠形のつまみが付き、ハダ荒れがみられる。器面は回転ナデ調整で、天井部外面には回転ヘラ削り、内面はナデ調整を加える。胎土には白色細粒砂から中粒砂を多く含む。

3046~3048は杯身で、いずれも底部が残存する。3046は、底部の切り離しが回転ヘラ切りで、ナデ調整を加え、底部外端寄りに高さ0.7mmの高台を貼付する。他は回転ナデ調整で、内底面にナデ調整を加える。3047は、底部の切り離しが回転糸切りで、外端部にハの字形に開く断面三角形で高さ0.8mmの高台を貼付する。他は3046と同じである。3048は、底部の切り離しが回転ヘラ切りで、外端部にハの字形に開く高さ0.8mmの高台を貼付する。他は回転ナデ調整を施す。胎土には、3046が白色中粒砂、3047が白色細粒砂から中粒砂、3048が白色細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

3049は提瓶の口縁部とみられるもので、外上方に直立し、端部を丸く仕上げる。調整は回転ナデ調整を施す。胎土には白色中粒砂から極粗粒砂を中心に極細粒中礫を一部に含む。3050は短頸壺の口縁部で、外上方に立ち上がった後、短く外傾し、端部は内傾する平面をなす。器面は一見炭素を吸着させて瓦質土器のように見える。胎土には白色中粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

3051は甕で、口縁部は大きく膨らむ胴部から外反し、端部は内傾する平面をなす。胴部外面には回転カキ目調整の痕が一部に残る。胎土には細粒砂から中粒砂を少し含む。

### 土師質土器(図2-6 3052~3056)

3052は小皿で、成形はA技法による。底部の切り離しは回転糸切りで、口縁部から内面にかけて回転ナデ調整を施し、内面にナデ調整を加える。胎土には中粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。3053と3054は杯で、いずれもバタ高台風の底部が残存し、成形は、3053がA技法、3054がB技法による。底部の切り離しはいずれも回転糸切りで、3054の内面にはロクロ目が残る。胎土には、3053が中粒砂から粗粒砂を多く含む、3054が細粒砂から極粗粒砂を少し含む。3055と3056は椀で、いずれも底部が残存し、成形はA技法による。底部の切り離しは、3055が回転糸切りでナデ調整を加え、3056がヘラ切りの可能性がある。また、3055には高さ6mmのハの字形に開く高台、3056には断面かまぼこ状の高台が付く。3056は回転ナデ調整の後に体部外面には回転ヘラ削り、内面にはヘラ磨きを施す。胎土

には、3055が細粒砂から中粒砂、3056が中粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

瓦器(図2-6 3057)

小皿で、体部外面には指押え、口縁部から内面にかけてヨコナデ調整を施す。胎土には細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

東播系須恵器(図2-6 3058)

片口鉢で、外上方を向く体部から口縁部の一部が残存し、口縁端部は内傾する小さな凸面をなす。器面には回転ナデ調整、内面にはナデ調整を加える。胎土には粗粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

青磁(図2-6 3059・3060)

いずれも龍泉窯系の碗で、3059は口縁部、3060は底部が残存する。3059の外面にはやや形骸化した鎬蓮弁文、3060は削り出し高台で露胎となり、施釉部分には細かな貫入がみられる。胎土にはいずれも黒色粒を若干含む。

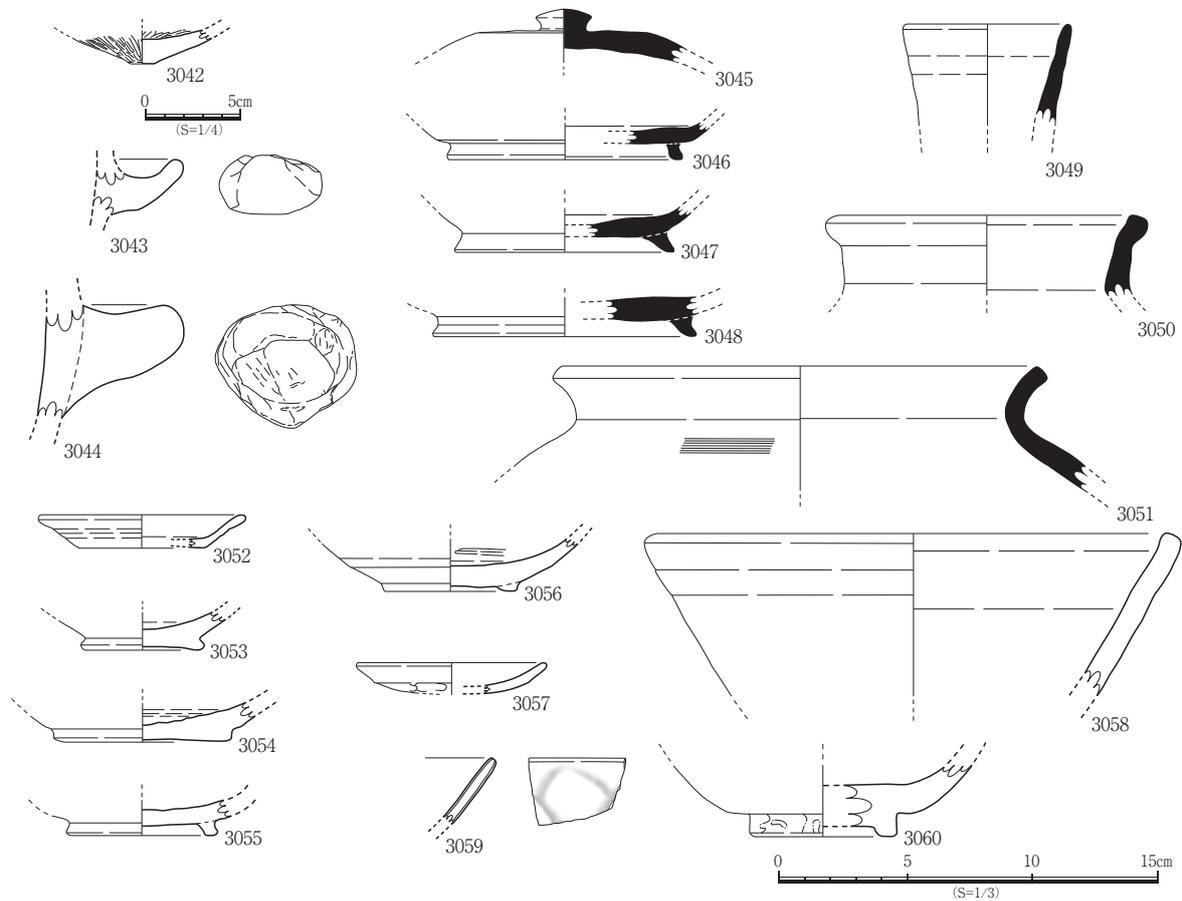


図2-6 III区第IV層出土遺物実測図

第VI層出土遺物

弥生土器(図2-7 3061・3062)

いずれも壺で、3061は垂直に延びる頸部から口縁部が外反し、端部に擬凹線文を施す。口縁部にはヨコナデ調整、頸部内外面にハケ調整を施す。胎土には粗粒砂から極細粒中礫を多く含む。3062は、口頸部が外反するもので、口縁端部は内傾する平面を有する。口縁部にはヨコナデ調整、外面にはハケ目が残る。胎土には極粗粒砂から極細粒中礫を多く含む。

2. 調査区の概要 (2) IV区

石製品(図2-7 3063)

叩石で、柱状をなし断面形は楕円形を呈す。両端部にはわずかに敲打痕が残る。

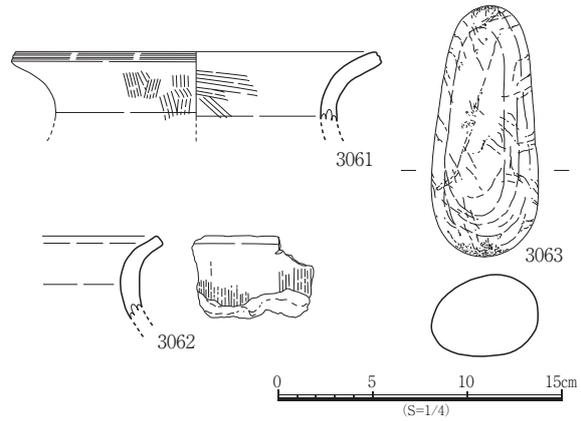


図2-7 III区第VI層出土遺物実測図

(2) IV区

IV区はIII区の西隣の調査区で、東西約158m、南北約53mの範囲である。調査は、排土置き場の関係で、東と西に分けて調査を実施した。なお、北東部の三角形の調査区はIV区として調査を行ったが、遺構の検出状況からIII区に含め、III-2区として報告している。

IV区の地形は、東(標高7.5m)から西(標高6.8m)に向って緩やかに傾斜し、弥生時代では西側に傾斜する溝跡が検出され、古代では中央部を中心に官衙関連とみられる掘立柱建物跡、中世では中央部から東部にかけて屋敷跡、西部で畝跡とみられる畝状遺構が検出された。

調査面積は6,495㎡で、一部二面となっており、調査延べ面積は6,671㎡であった。また、下層確認のためのトレンチ(176㎡)を設定して、土層の堆積状況の調査を行った。

① 層序

地形は前述のとおり、東から西に傾斜しており、堆積層も西部の遺存状況が比較的良かった。中央部から東部では遺物包含層が削平され、表土層直下が遺構検出面となっていた部分もみられた。

調査区で認められた基本層序は次のとおりである。

- 第I層 中礫混じりの灰黄褐色(10YR4/2)シルト層
- 第II層 中礫を少し含む灰黄褐色(10YR4/2)シルト層
- 第III層 黒褐色(10YR2/2)シルト層
- 第IV層 黒色(10YR1.7/1)シルト層
- 第V層 中礫を少し含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト層

第I層は表土層で、調査前までは耕作土となっており、下層部に鉄分が沈殿した床土が認められた部分もあった。

第II層は中世の遺物包含層で、西部以外でも比較的多くの場所で認められた。

第III層は古代の遺物包含層で、中央部から東部では削平されていたものの西部で確認できた。

第IV層は弥生時代から古墳時代の遺物包含層で、第III層同様西部で確認できた。

第V層は自然堆積層で、他の調査区同様洪水堆積によるものとみられ、マトリックスがシルトであることから洪水源から比較的離れた場所であったと考えられる。

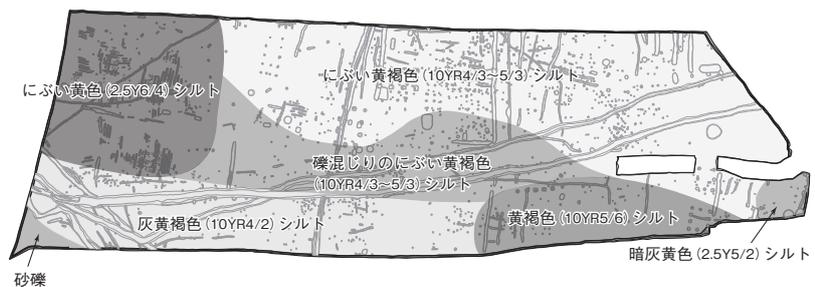


図2-8 IV区の地山の堆積層(S=1/1,500)

② 堆積層出土遺物

第I層出土遺物

須恵器(図2-10 4001)

高杯で、口縁部は丸味のある底部から短く上方に屈曲し、端部は浅い凹面をなす。底部外面には回転ヘラ削り調整を施す。胎土には細粒砂から中粒砂を若干含む。

須恵質土器(図2-10 4002)

擂鉢で、口縁部は体部から屈曲して上方に立ち上がり、肥厚する。内面には5本以上の単位の条線が施される。胎土には白色細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

土師質土器(図2-10 4003)

杯で、口縁部は上外方を向き、成形はB技法とみられる。胎土は精良で、細粒砂から粗粒砂を若干含む。

青磁(図2-10 4004)

碗の口縁部で、内面には劃花文を施す。器面には貫入があり、胎土には黒色粒を若干含む。

近世陶器(図2-10 4005)

碗で、口縁部は体部から屈曲して真上に長く延びる。口縁部と見込には鉄釉を施釉し、体部外面以下は露胎となる。胎土は精良で、極細粒砂から細粒砂を若干含む。

肥前系磁器(図2-10 4006)

皿で、底部は削り出し高台となり、見込には草花文を施し、透明釉を施釉後畳付から内側を釉ハギする。胎土には黒色粒を比較的多く含む。

瀬戸・美濃系陶器(図2-10 4007)

皿で、底部は輪高台となり、全面に施釉する。見込には釉溜まり、器面には貫入がみられる。胎土は精良で、極細粒砂から中粒砂を若干含む。

石製品(図2-10 4008・4009)

4008はサヌカイト製の打製石鏃で、先端と茎が欠損する。4009は石帯の巡方とみられるもので、未成品である。側面は研磨されているが、表は磨き残りが大半で、裏は未調整となっている。石材は

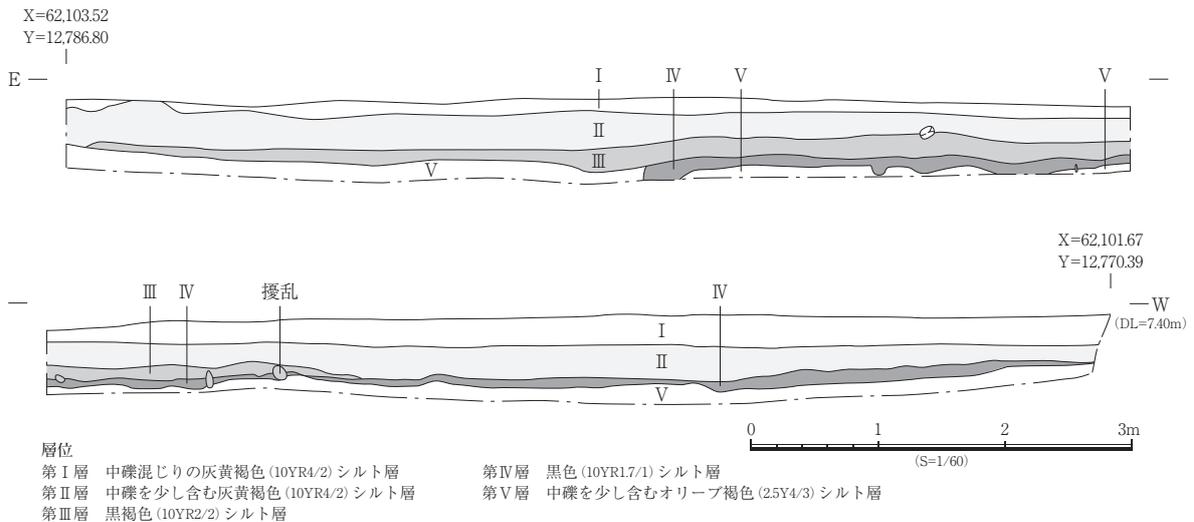


図2-9 IV区南壁セクション

2. 調査区の概要 (2) IV区

粘板岩である。

第Ⅱ層出土遺物

瓦質土器(図2-10 4010)

羽釜で、口縁部は胴部から内湾気味に上がり、外面には断面台形状の鏝が回る。鏝下半には煤が付着する。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

第Ⅲ層出土遺物

弥生土器(図2-10 4011)

甕の底部で、やや上げ底風の底部から胴部は上外方にはほぼ真直ぐ立ち上がる。外面にはハケ調整の後にヘラ磨きを加える。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

須恵器(図2-10 4012)

短頸壺で、口縁部は胴部から屈曲し、短く立ち上がる。胴部外面には凹線を巡らした上に回転カキ目調整を施す。胎土には中粒砂を中心に細粒砂から極細粒中礫を比較的多く含む。

土師質土器(図2-10 4013~4015)

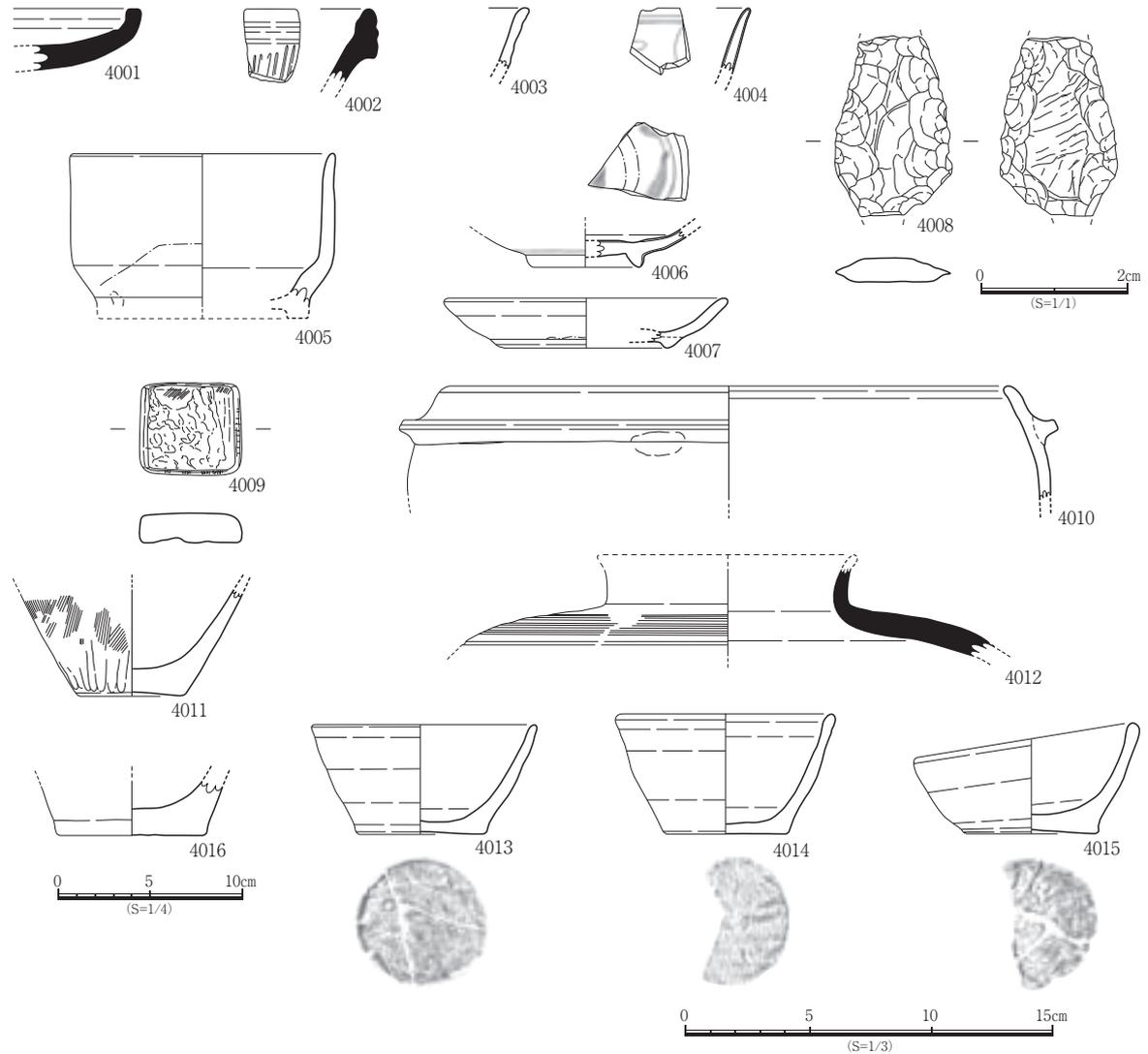


図2-10 IV区第Ⅰ～Ⅳ層出土遺物実測図

3点とも同形態の杯で、底部は深く、口縁部は底部から内湾気味に立ち上がる。成形はA技法で、底部の切り離しは静止糸切りとなり、4014には板状圧痕が残り、外面に煤が付着する。胎土には細粒砂から中粒砂ないし極粗粒砂を比較的多く含む。

第IV層出土遺物

弥生土器(図2-10 4016)

壺の底部とみられるもので、底部が平らで厚く、胴部は上外方に延びる。胎土には粗粒砂と極粗粒砂を中心に細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

(3) V区

V区はIV区の西隣の調査区で、東西約126m、南北約60mの範囲である。また、西野々遺跡の西端部に当たり、現況でもV区の西側は低湿地となっている。

調査区には農道と水路が通っていたため、調査区を3区に分けて発掘調査を行った。東側をV-1区、農道を挟んだ西側をV-2区、V-1区とは水路を挟んだ南の調査区をV-3区とした。

地形は東(標高7.0m)から西(標高5.8m)に向って傾斜しており、各時代とも溝跡を中心に検出した。また、西側のV-2区を中心に遺構面が二面となっており、下層の弥生時代の溝跡は網状流路化し、終焉していた。

調査面積は4,870㎡で、西側は遺構検出面が二面となっており、調査延べ面積は6,540㎡であった。また、下層確認のためのトレンチ(395㎡)を設定して、土層の堆積状況の調査を行い、西端の低湿地部分で遺跡の基盤をなす土層の形成時期を推測し得る資料を得ると共に地震跡を検出した。この地震跡は縄文時代前期以降、弥生時代以前とみられるものの上下の堆積層は無遺物層で、発生時期は判然としない。

① 層序

IV区に比べ東から西への地形の傾斜が強く、南東部では表土層直下で砂礫層がみられ、西部では腐食質泥層の堆積が認められ、西に行くに従って堆積層が厚くなる。また、西部では腐食質泥層の上面(中世～近世)と下面(弥生時代)の二面で遺構を検出した。中世～近世の遺物包含層は北半分に広く分布し、弥生時代の遺物包含層は西部の腐食質泥層中に認められた。

調査区で認められた基本層序は次のとおりである。

第I層 極粗粒中礫を少し含む砂混じりの灰黄色(2.5Y6/2)粘土質シルト層

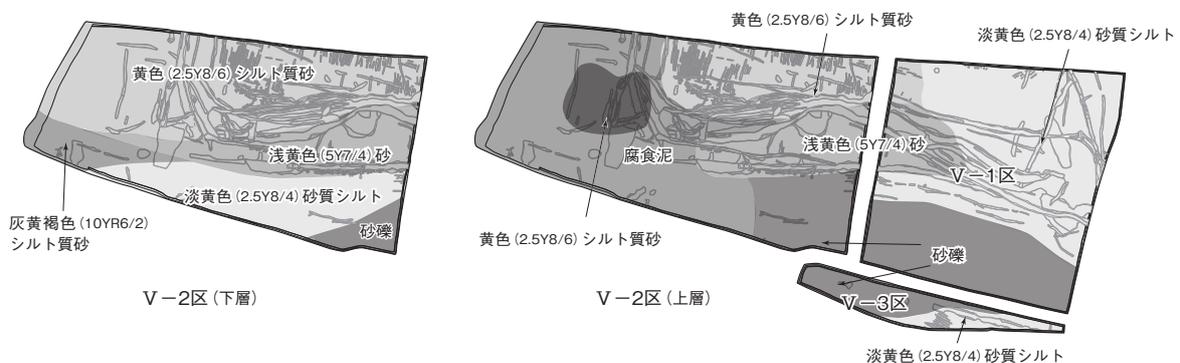


図2-11 V区の調査区と地山の堆積層(S=1/1,500)

2. 調査区の概要 (3) V区

- 第Ⅱ層 極粗粒中礫を多く含む砂混じりの褐灰色(7.5YR6/1)粘土質シルト層
- 第Ⅲ層 極粗粒中礫を少し含む砂混じりの灰黄褐色(10YR5/2)粘土質シルト層
- 第Ⅳ層 砂混じりの灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルト層
- 第Ⅴ層 極粗粒中礫を少し含む黒褐色(10YR3/1)砂質シルト層
- 第Ⅵ層 黒褐色(10YR2/2)シルト質細粒～中粒砂層
- 第Ⅶ層 粗粒中礫を少し含む黒色(10YR2/1)シルト質砂層
- 第Ⅷ層 砂混じりの黒色(10YR2/1)粘土質シルト層
- 第Ⅸ層 粗粒中礫を部分的に含む浅黄色(5Y7/4)細粒～中粒砂層

第Ⅴ層が西部で認められた弥生時代の遺物包含層であると共に第Ⅳ層(中世～近世)に伴う遺構検出面でもある。また、第Ⅸ層は東部の遺構検出面であると共に西部における弥生時代の遺構検出面となっている。

第Ⅰ層は表土層で、調査前は水田の耕作土となっていた。第Ⅱ層と第Ⅲ層は旧耕作土層とみられる。第Ⅳ層は中世～近世の遺物包含層で、V-1・2区で認められた。なお、前述のとおり南東部では削平されており、確認できなかった。

第Ⅴ～Ⅷ層は弥生時代の遺物包含層とみられる堆積層で、第Ⅵ～Ⅷ層は西端部で認められた。第Ⅸ層は洪水堆積(洪水流による砂の充填)によるもので、遺跡の基盤となっている。

② 堆積層出土遺物

第Ⅰ層出土遺物

弥生土器(図2-13 5001)

壺で、口縁部は外反し、内外面ともハケ調整を施し、外面にはヘラ磨きを加える。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

須恵器(図2-13 5002～5006)

5002は杯蓋で、平らな天井部には擬宝珠形のつまみが付く。胎土には白色細粒砂から中粒砂を少

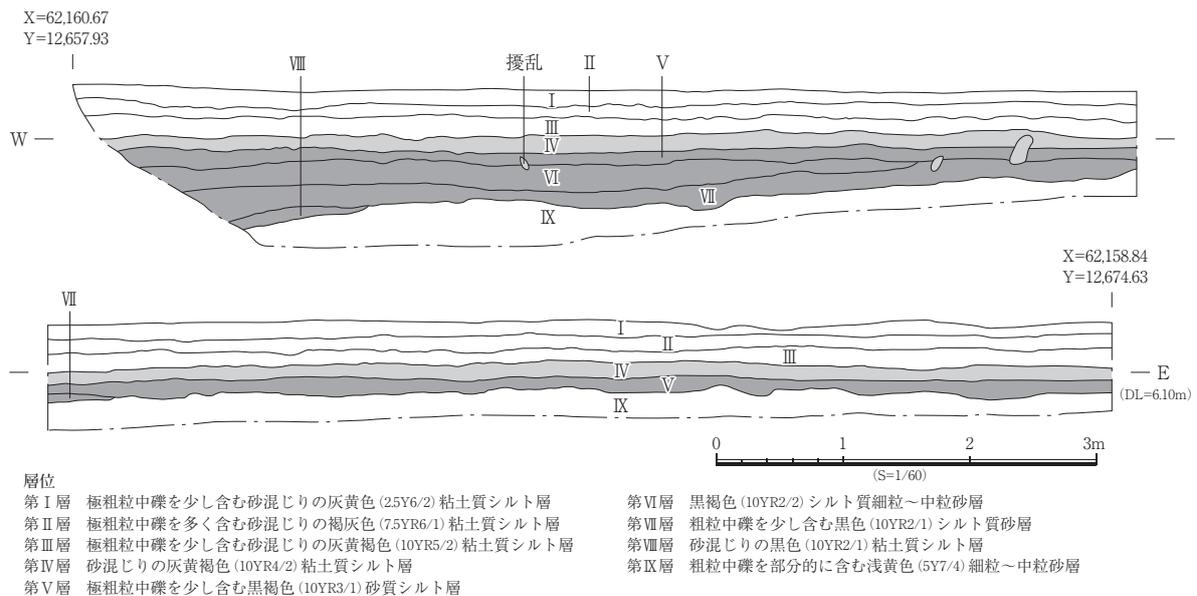


図2-12 V-2区北壁セクション

し含む。

5003～5006 は壺で、5003 は提瓶の口縁部とみられ、外傾して立ち上がった後、短く上方を向く。胎土には白色細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。5004 は長頸壺の頸部とみられるもので、頸部は胴部から屈曲して外傾気味に立ち上がる。胎土には細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。5005 は胴上部の破片で、外面には凹線が4条残る。胎土は比較的精良で、白色細粒砂から粗粒砂を少し含む。5006 は胴上部の細片で、外面には平行のタタキ目が残る。胎土には白色細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

#### 土師器(図2-13 5007～5010)

5007 と 5008 は羽釜で、5007 の口縁部外面には断面台形状の鐳が付く。胎土には細粒砂から粗粒砂を多く含む。5008 は口縁部外面に断面三角形の鐳が付く。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

5009 と 5010 は焙烙で、5009 は口縁部が残る。5010 は体部も残り、皿状の体部から口縁部はいずれもやや反り気味に上がる。胎土は2点とも細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

#### 土師質土器(図2-13 5011～5017)

5011～5015 は杯で、成形は、5012 がB技法である以外いずれもA技法で、底部が残る5012～5015の切り離しは5013が静止糸切りとみられる以外は回転糸切りとなる。胎土は概ね精良で、5012が細粒砂から中粒砂を比較的多く含む以外は細粒砂から中粒砂ないし粗粒砂を若干含む。

5016 と 5017 は小皿で、成形はB技法となる。底部が残る5016の切り離しは回転糸切りとなる。胎土はいずれも精良で、細粒砂から中粒砂を若干含む。

#### 東播系須恵器(図2-13 5018)

片口鉢で、口縁部は外傾し、端部を肥厚する。胎土には細粒砂から中粒砂を多く含む。

#### 白磁(図2-13 5019～5021)

いずれも碗で、削り出し高台の底部が残存し、見込は蛇ノ目状の釉ハギとなる。胎土には黒色粒を、5019が多く、5020が若干、5021が比較的多く含む。

#### 肥前系陶器(図2-13 5022～5024)

いずれも皿で、5022の底部は回転糸切りの後に高台を削り出し、口縁部外面から見込に施釉し、見込には砂目が3ヵ所残る。胎土は精良で細粒砂から粗粒砂を若干含む。5023は端反皿で、口縁部から見込にかけて白色系の釉を施釉する。体部外面は露胎となる。胎土は精良で、極細粒砂から細粒砂を若干含む。5024は大型の皿で、底部は削り出し高台となり、体部外面は回転ヘラ削り調整、見込に刷毛目文を施す。また、見込には砂目が残る。胎土は精良で、細粒砂から中粒砂を若干含む。

#### 肥前系磁器(図2-13・14 5025～5029)

5025 と 5026 は丸碗で、5025 の高台外面には2条の界線がみられ、全面に透明釉を施釉した後に畳付を釉ハギする。胎土には黒色粒を比較的多く含む。5026 は外面に界線で区切った草花文を施し、全面に透明釉を施釉する。胎土には黒色粒を多く含む。5027 は広東茶碗で、底部は削り出し高台となり、体部外面にタテの界線、見込に2条の界線と草花文がみられる。全面に白色釉を施釉し、高台内側を釉ハギする。胎土には黒色粒を比較的多く含む。

5028 は猪口で、口縁部は外上方に上がる体部から短く外反する。体部外面には文様を施す。胎土には黒色粒を多く含む。

5029は紅皿で、底部は削り出し高台となり、外面には条線を施し、口縁部から内面に白色釉を施釉する。外面には煤がわずかに付着する。胎土には黒色粒を比較的多く含む。

瀬戸・美濃系陶器(図2-14 5030・5031)

5030は広東茶碗、底部は削り出し高台となり、外面には2条の界線、見込にはコンニャク版が残る。畳付は欠損するが、残部全面に透明釉を施釉し、貫入がみられる。胎土は精良で、細粒砂から中粒砂を若干含む。5031も広東茶碗で、内外面に界線を施し、残部には透明釉が施釉されている。胎土は精良で、極細粒砂から細粒砂を若干含む。

近世陶器(図2-14 5032~5034)

5032は京焼系とみられる丸碗で、底部は削り出し高台、体部外面には赤色と淡緑色で竹葉文か笹葉文様を描き、底部外面以外に黄灰色の釉を施釉する。胎土は精良で、極細粒砂から細粒砂を若干含む。5033は京焼系の丸碗の蓋とみられるもので、天井部は丸味があり、口縁部は水平に延び、その境内面には真下を向くかえりが付く。天井部外面には黄緑色で竹葉文を描き、外面全面に透明釉を施釉し、貫入がみられる。胎土は精良で、極細粒砂から細粒砂を若干含む。

5034は天目茶碗、口縁部は腰部から垂直に近い角度で上方に立ち上がる。残部には鉄釉が施釉され、外面は摩耗し、釉が剥げる。胎土は精良で、極細粒砂から細粒砂を若干含む。

近世磁器(図2-14 5035)

5035は丸碗で、底部は削り出し高台となり、全面に白色釉を施釉する。畳付は釉ハギされ、内側に砂の付着がみられる。胎土は精良で、黒色粒を若干含む。

近世陶器(図2-14 5036~5044)

5036と5037は碗で、いずれも削り出し高台となり、5036には、見込に鉄釉が施釉され、蛇ノ目状に釉ハギが行われる。胎土は精良で、極細粒砂から細粒砂を若干含む。5037は、腰部から内面にかけて緑色釉を施釉するが、見込は露胎となり、一部に釉タレがみられる。胎土は精良で、極細粒砂から細粒砂を若干含む。

5038~5040は皿で、5038の体部外面は回転ヘラ削り調整となり、残部全面に鉄釉を施す。胎土は精良で、細粒砂を若干含む。5039は内面にやや濃い目の緑色釉を施釉し、外面には釉タレがみられる。胎土は精良で、極細粒砂から細粒砂を若干含む。5040はやや大型の皿で、端反となり、外面にはロクロ口目が残る。残部全面に薄めの鉄釉を施釉する。胎土は精良で、極細粒砂から細粒砂を若干含む。

5041は甕で、口縁部は垂直に立ち上がり、端部を内外に拡張する。残部全面に鉄釉が施される。胎土は精良で、細粒砂から粗粒砂を若干含む。

5042~5044は播鉢で、5042の口縁端部は丸く仕上げられ、口唇部に鉄釉が施釉される。内面全面には7本以上の条線が施される。胎土には細粒砂から中粒砂を若干含む。5043は底部内面に8本単位の条線が斜格子状に施される。胎土には極細粒砂から細粒砂を若干含む。5044は、6本単位の条線が体部内面に放射線状、内底面に十字状に施されるものの、摩滅する。外底面はナデ調整を施す。胎土には細粒砂から極細粒中礫を多く含む。

瓦(図2-14 5045・5046)

いずれも平瓦で、5045の凹面にはナデ調整、凸面にはヘラナデ調整を施し、側面近くはヘラで面取りされる。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。5046は凹面と凸面ともナデ調整、側面は3段にヘラで面取りを行う。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

石製品(図2-14 5047)

石庖丁で、刃部幅0.5cmの片刃となる。両面とも研磨されており、石材は赤色を呈する粘板岩である。

古銭(図2-14 5048・5049)

いずれも裏面無文の寛永通宝である。

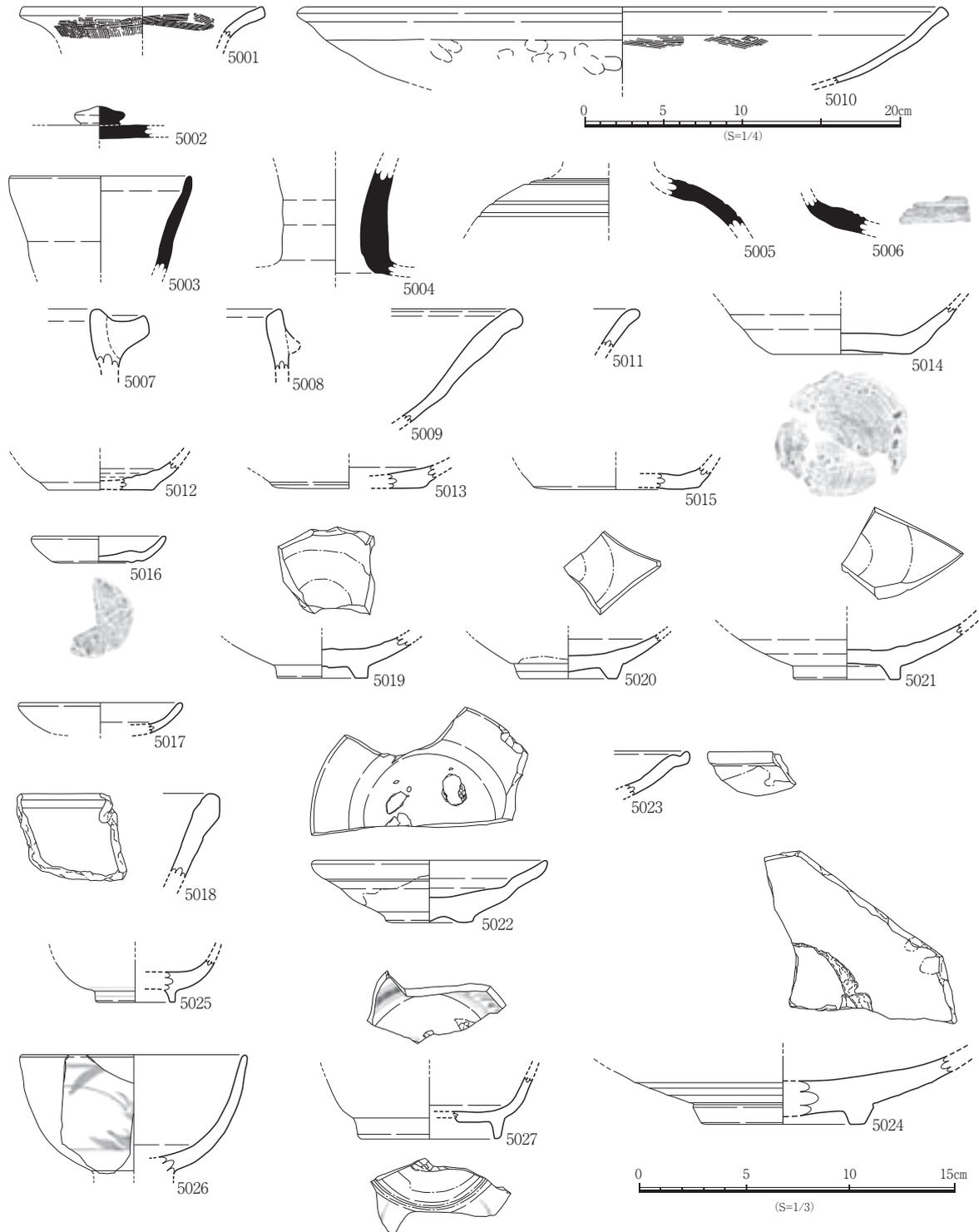


図2-13 V区第I層出土遺物実測図1

金属製品(図2-14 5050~5053)

いずれも煙管で、5050と5053は真鍮製、5051と5052は青銅製となる。5050は雁首と竹の羅宇が残存しており、雁首は胴半ばから首に向って細くなり、火皿は欠損する。雁首胴端部には竹の羅宇が1.2cm残存する。雁首側面には接合痕が残存する。5051は胴に彫り込みの直線文が施された雁首で、首に向って細くなり火皿に至り、厚さも1.7mmの胴から首に向って薄くなる。5052は羅宇の大半は欠損するが、雁首、吸口が残存し、側面には接合痕が残る。雁首の胴には竹の羅宇が残り、吸口は羅宇から繋がる部分が太く、吸口は細くなり、ヤニドメはみられない。5053は吸口で、側面に接合痕があり、羅宇に向って太くなる。

第IV層出土遺物

弥生土器(図2-15 5054・5055)

5054は壺で、丸味のある胴部から頸部は直立する。内面には外傾接合痕、外面にはタタキ目とみられる痕跡が残る。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

5055は甕で、口縁部は外反し、ヨコナデ調整を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

須恵器(図2-15 5056~5059)

5056は杯で、口縁部が外上方を向き、端部は丸い。胎土には細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。5057と5058は高台が付く杯身で、5057の高台は0.8cmを測る。器面は回転ナデ調整を施した上で、底部外面にナデ調整、高台周囲にヨコナデ調整を加える。内面にはハダ荒れがみられる。胎土には白色細粒砂から中粒砂を若干含む。5058は底部の破片で、高台を欠損し、器面は摩耗する。胎土には細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

5059は壺の下胴部で、回転ナデ調整を行った後に、外面には回転ヘラ削り調整を加える。胎土には細粒砂から中粒砂を少し含む。

土師質土器(図2-15 5060~5065)

5060~5063は杯で、5060は成形がA技法となり、口縁部が丸く、内面には回転ナデ調整痕が残る。胎土は精良で、細粒砂から粗粒砂を若干含む。5061は成形がB技法となり、口縁部が内湾気味に上がり、口唇部には凹線が巡り、内面にはロクロ目が明瞭に残る。胎土は精良で、細粒砂から中粒砂を若干含む。5062は成形がB技法で、底部の切り離しは回転糸切りとなり、内面には回転ナデ調整を施すが、ミズビキの痕跡が残る。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。5063も成形がB技法で、底部の切り離しは回転糸切りとみられ、内面にはロクロ目が残る。胎土は精良で、極細粒砂から細粒砂を若干含む。

5064と5065は小皿で、成形はいずれもB技法となる。5064は、底部の切り離しが不明であるが、残部には回転ナデ調整痕が残る。胎土は精良で、細粒砂から中粒砂を若干含む。5065は灯明皿として使用されたとみられ、口唇部にタールが付着する。器面には回転ナデ調整を施した上で、内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は精良で、極細粒砂から中粒砂を若干含む。

瓦器(図2-15 5066)

小皿で、口縁部は短く内湾して上がる。胎土には細粒砂から中粒砂を若干含む。

瓦質土器(図2-15 5067~5071)

5067~5069は羽釜で、口縁部が残る。5067は内傾する口縁部外面に断面三角形の鰐が付く。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。5068はほぼ直立する口縁部外面下端に断面三角形の鰐が付き、胴部外面には指押え、内面にはナデ調整を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

む。5069 は内傾する口縁部外面下端に小さな断面三角形の鏝が付き、鏝上半にはヨコナデ調整を施す。胎土には細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

5070は鍋の胴部で、内湾して上がり、内面にはハケ目、外面には指押えの痕が残る。胎土には細粒砂から中粒砂を多く含む。5071は三足鍋の足の付根で、器面はヘラで面取りを行う。胎土には細粒砂

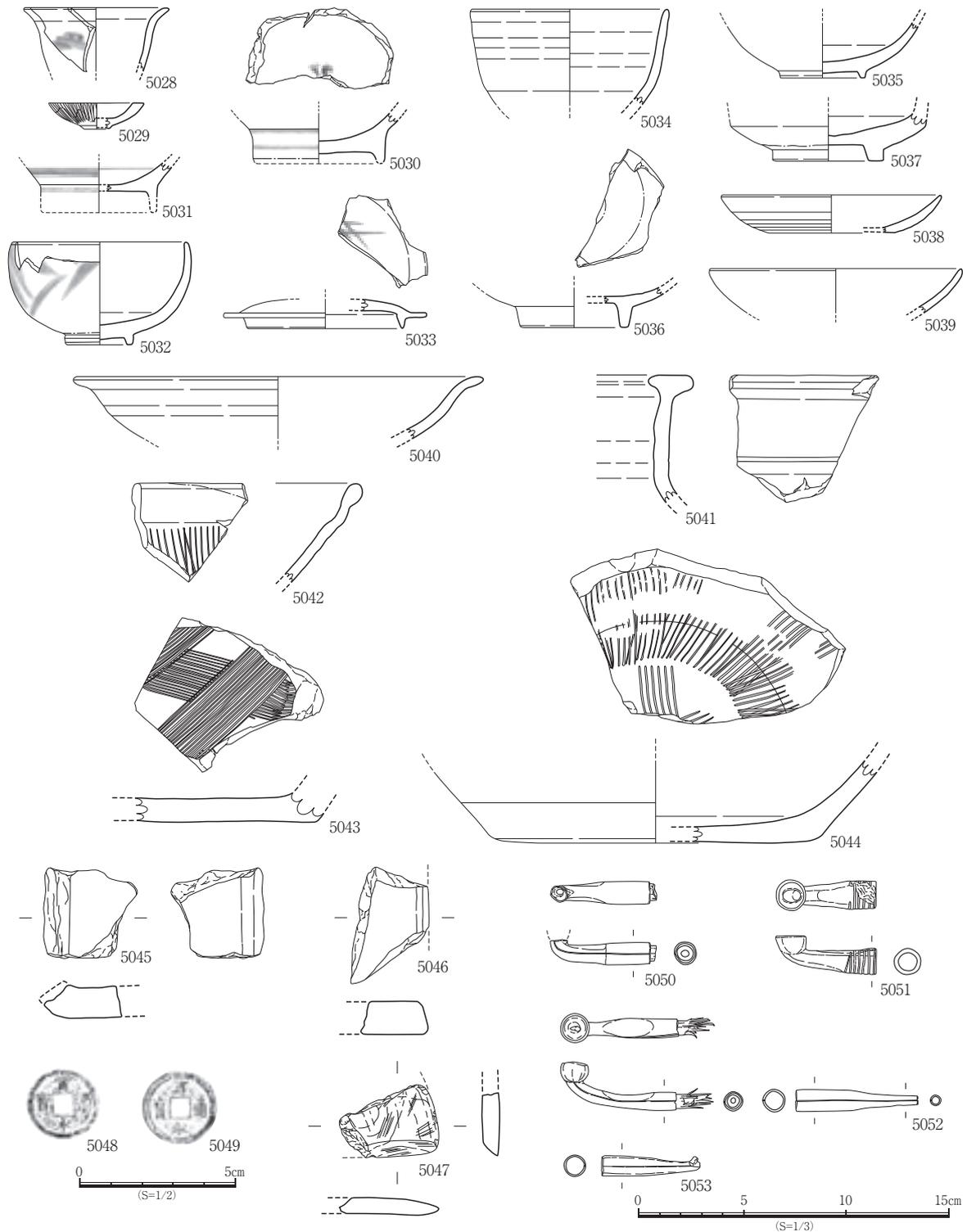


図2-14 V区第I層出土遺物実測図2

から中粒砂を比較的多く含む。

青磁(図2-15 5072)

碗で、内面には劃花文がみられ、全面に緑色釉を施釉する。胎土には黒色粒をほとんど含まない。

肥前系陶器(図2-15 5073・5074)

いずれも碗で、5073の見込には砂目が残し、5074の畳付には砂が付着する。いずれも底部が削り出し高台で、体部外面から内面にかけて施釉され、外面腰部以下は露胎となる。胎土には細粒砂から中粒砂を若干含む。

肥前系磁器(図2-15 5075・5076)

5075は碗で、底部は削り出し高台となり、体部外面には網目文を描き、全面に淡い緑色釉を施釉する。畳付は釉ハギとなり、砂が付着する。胎土には黒色粒を多く含む。

5076は皿で、底部は削り出し高台となり、見込には文様を描き、全面に白色釉を施釉した後、畳付を釉ハギする。畳付から内面にかけて砂が付着する。

瀬戸・美濃系陶器(図2-15 5077)

菊碗で、底部は削り出し高台となり、全面に黄色釉を施釉した後に、畳付を釉ハギする。胎土には細粒砂から粗粒砂を若干含む。

近世陶器(図2-15 5078～5080)

5078は碗で、口縁部は内湾気味に上がる体部から外傾する。全面に緑色釉を施釉する。胎土は精良で、極細粒砂から細粒砂を若干含む。

5079は大型の皿で、口縁部は内湾して上がり、器面には緑色釉の上から濃度の異なる鉄釉を施釉する。胎土は精良で、極細粒砂から細粒砂を若干含む。

5080は皿で、底部は回転糸切りとなり、外端部に胎土目痕が残る。内面には鉄釉が施釉され、外面は露胎となる。胎土は精良で、細粒砂から中粒砂を若干含む。

近世陶磁器(図2-15 5081～5089)

5081は碗で、底部は削り出し高台となり、外面腰部から内面にかけて透明釉を施釉する。畳付には砂が付着する。胎土には黒色粒を比較的多く含む。5082は天目茶碗で、底部は削り出し高台となり、外面は露胎で、内面には鉄釉が残る。胎土は精良で、細粒砂から中粒砂を若干含む。

5083は播鉢で、内面全面には14本以上の単位の条線を施す。外面は底部にナデ調整、体部下端には回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整を施す。胎土には細砂粒から極粗粒砂を比較的多く含む。

5084は碗で、口縁部は体部から垂直に近い角度で立ち上がる。器面には青磁釉を施釉する。胎土には黒色粒を比較的多く含む。5085も碗で、底部は削り出し高台となり、全面に緑色釉を施釉する。器面には細かな貫入がみられる。胎土には黒色粒を多く含む。

5086は猪口で、端反となり、外面には草文を描いた後、全面に透明釉を施釉する。胎土には黒色粒を比較的多く含む。

5087は皿で、端反となり、口縁部には緑色釉を施釉し、見込は露胎となる。施釉された部分には貫入がみられる。胎土には黒色粒を多く含む。5088も皿で、内面には界線と草文を描いた上で透明釉を施釉する。胎土には黒色粒を比較的多く含む。5089も皿で、底部は削り出し高台となり、口縁部は内湾気味に上がる。外面腰部から内面にかけて淡い緑色釉を施釉し、見込は蛇ノ目状の釉ハギを行う。胎土には黒色粒を比較的多く含む。

石製品(図2-15 5090)

刃部と基部が欠損するが、石斧の未成品とみられ、側面に研磨痕が残る。また、全面を研磨したとみられるが、表面は剥離し、キズが目立つ。材質は緑色片岩である。

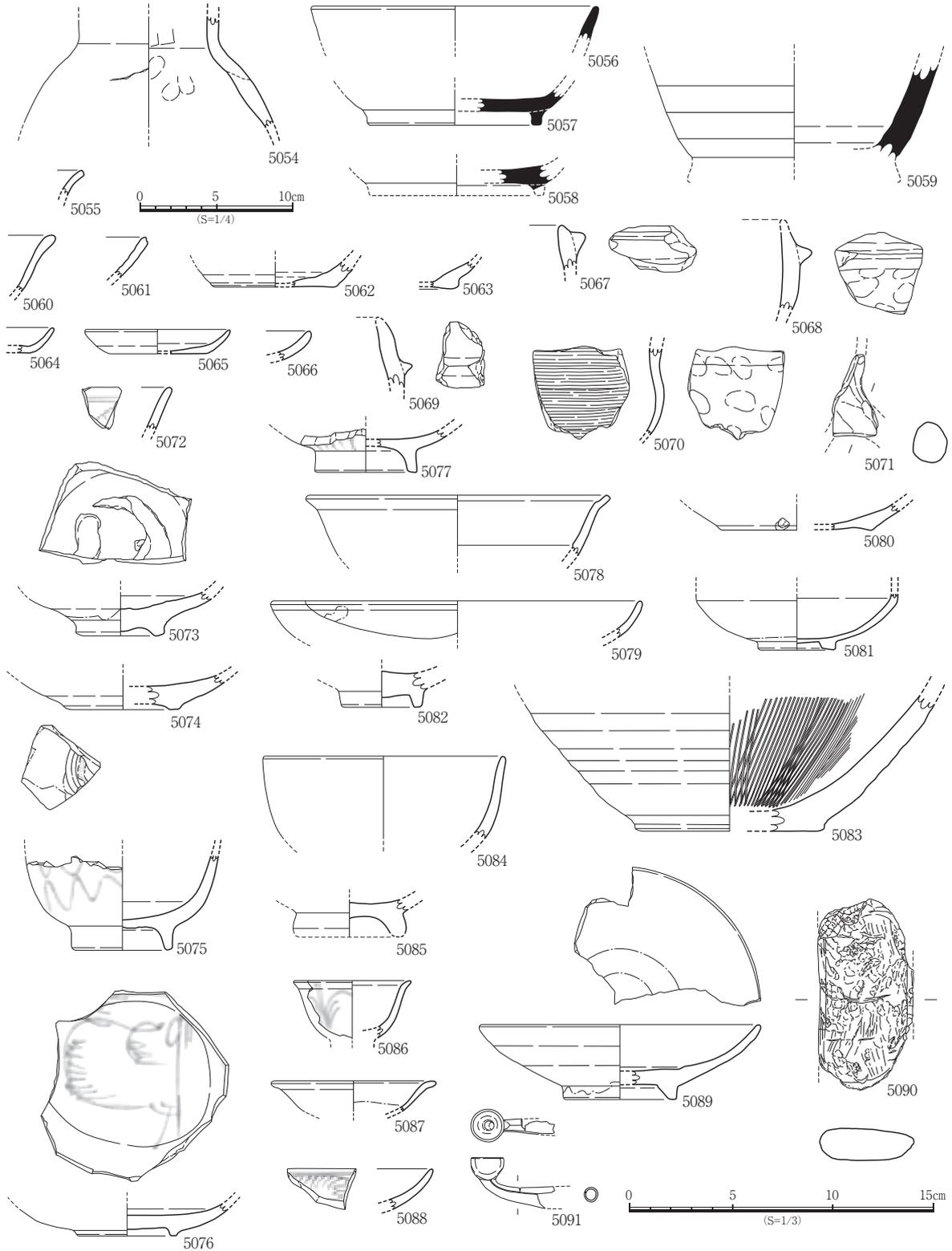


図2-15 V区第IV層出土遺物実測図

2. 調査区の概要 (3) V区

金属製品(図2-15 5091)

煙管の雁首で、青銅製とみられる。胴は欠損するが首から火皿が残り、側面には接合痕がみられる。

第V層出土遺物

弥生土器(図2-16 5092・5093)

5092は壺の口縁部で、外面頸部には僅かに段部が残る。口縁部にはヨコナデ調整を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

5093は甕で、成形は外傾接合による。口縁部は、丸味のある胴部から短く外傾し、端部にヘラ状工具による刻目を施す。頸部外面には1条のヘラ描沈線、胴部内面は指押えとナデ調整、口縁部から胴部

外面にはハケ調整を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

石製品(図2-16 5094)

扁平な叩石で、両端に敲打痕が残る。石材は中粒砂岩である。

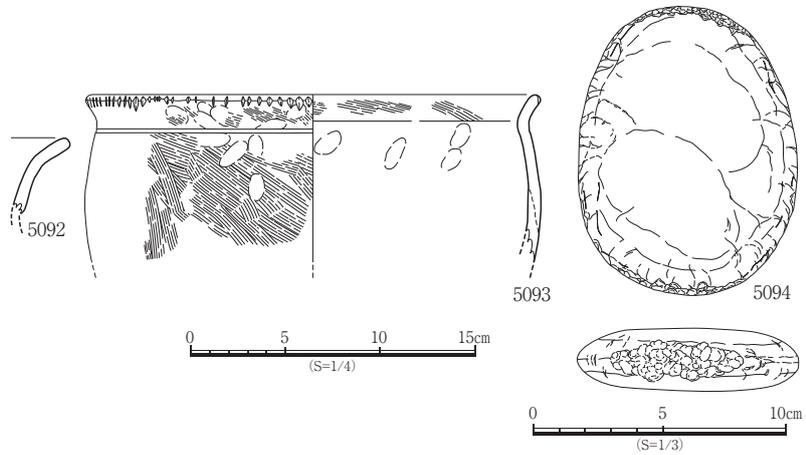


図2-16 V区第V層出土遺物実測図

## 第三章 遺構と遺物

### 1. Ⅲ区

本調査区で検出された遺構は、溝跡がその大半を占め、かつⅢ-1区の中央部東寄りにある緩斜面に各時代の溝跡が重複していた。正に、水路の密集地帯ともいい得る調査区で、古墳時代はやや希薄になるものの弥生時代から古代、中世に至る各時代綿々と同じ場所に水路を掘削し、経営していたことが窺われる。多い箇所では10条以上が重複し、検出面が溝跡で覆われ、一部に残ったたち上がりで溝の存在を確認できるものさえあった。また、溝浚えもよく行われていたとみえて、全般に出土遺物は少ない。中でも、弥生時代のSD-3002とSD-3003は(西側の調査区であるⅣ区を通り、Ⅴ区まで続き総延長はいずれも350m以上を測る。西端はⅤ区に、東端はⅡ区付近にある。)その規模に比べ、図示できたものは、前者で13点、後者で8点と極端に少ない。

一方、存続期間も比較的長いとみえて、特に、古代後半から鎌倉時代のものについては埋没時期を時代で峻別することが難しいものもあった。

溝以外では、古代前半の建物跡が一定のまとまりを持って図示できた。建物の性格を想定させる資料は出土していないものの官衙関連の何らかの施設を考慮しなければならないであろう。また、Ⅲ-1区東部でⅡ区から続く屋敷跡の西端部、Ⅲ-4区では溝で区画された中世の屋敷跡の一部を確認することができた。

以上、本調査区では水路としての溝跡を中心に、弥生時代から中世にかけての遺構を検出することができた。なお、一部ではあるが、近世と近代の遺構もみられる。

#### (1) 弥生時代

確認された遺構は溝が大半を占め、17条を数え、その他に土坑9基、掘立柱建物跡1棟とピット148個がある。溝は、他の時代の溝と同じく大半がⅢ-1区中央部の緩斜面に集中しており、調査区外に続くものが多い。また、前述のSD-3002とSD-3003はⅣ区を通り、Ⅴ区まで続く。

##### ① 掘立柱建物跡

1棟を復元したのみである。

##### SB-301 (図3-1)

Ⅲ-1区の中央北端部で検出した桁行1間(1.80m)以上、梁行2間(3.60m)の南北棟建物跡とみられ、棟方向はN-31°32'-Wを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.80m、梁行(東西)が1.80m等間隔である。柱穴の平面形は円形で径36~53cmを測り、柱径は遺存する柱痕から20cm前後とみられ、深さは14~35cmである。柱穴の埋土は黒色(10YR2/1~1/1)シルトであった。出土遺物はなかった。

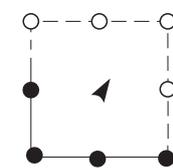


図3-1 SB-301

##### ② 土坑

確認した9基のうち、SK-301~303はその配置から一連のものともみられ、形状は崩れているものいずれも楕円形を基調としたものと考えられ、いずれも標高が7.50~7.60mと調査区内では標高の高い部分に設けられていた。

##### SK-301 (図3-2)

Ⅲ-4区北西部、調査区の壁際で検出した不整楕円形の土坑である。長径1.72m、短径1.31m、深さ

1. Ⅲ区 (1) 弥生時代

35cmを測り、長軸方向はN-1°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は基本的に黒褐色(10YR2/2)シルト単一層とみられるが、壁際に地山のブロックを含む黒褐色(10YR2/3)シルトがみられ、埋土中には人頭大の礫が比較的多く含まれていた。出土遺物には弥生土器34点と石製品6点がみられ、弥生土器12点(3064~3075)と石製品5点(3076~3080)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-4 3064~3075)

3064~3066は壺で、いずれも上胴部が残存する。3064は、外面に上からクシ描直線文、簾状文、下地にハケ調整を施した上に6本単位のクシ描波状文を施し、内面はヘラナデ調整とナデ調整を施す。胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。3065は外面に5本単位のクシを使用し、直線文を挟んで波状文が残り、胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。3066は外面にヘラ描沈線とクシ描刺突文が残り、胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

3067~3070は甕で、いずれも胴部から頸部が内湾気味にたち上がり、口縁部が外反するものである。3067と3068の口縁部は粘土帯を外に折り曲げた貼付口縁となり、外面には接合の際の指押えの痕が残る。3067の肩部外面上端にはヘラ状工具による列点文が施される。3069の肩部外面上端には1条のヘラ描沈線を挟んで、上下にヘラ状工具による列点文を施す。3070は大型の甕で、頸部外面にはタテ方向のハケ目、頸部と肩部の境に粘土紐を貼付した上に刻目を施し、それを挟んで上下に簾状文を施文する。肩部外面にはタテ方向のハケ調整の後にヘラ磨きを施す。胎土には、3067が細粒砂から粗粒砂、3068・3069が細粒砂から極粗粒砂、3070が中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

3071~3075は壺の底部とみられるもので、器面はナデ調整を施す。3075はミニチュア土器の底部の可能性もある。胎土には、3071が中粒砂から極粗粒砂を多く、3072が細粒砂から極粗粒砂を多く、3073が中粒砂から粗粒砂を比較的多く、3074が細粒砂から粗粒砂を多く、3075が細粒砂から中粒砂を多く含む。

石製品(図3-4 3076~3080)

3076は緑泥片岩の小型蛤刃石斧の未成品で、刃部の一部及び側面と基部に敲打痕が明瞭に残る。

3077は叩石で、断面形は楕円形を呈し、一方の端部に強い敲打痕が残る。石材は細粒砂岩である。

3078~3080は磨石で、平面形と断面形はほぼ楕円形を呈し、表面は平滑で、側面に3079が3カ所、3080が1カ所弱い敲打痕が残る。石材はいずれも砂岩である。

SK-302(図3-3)

Ⅲ-4区北西部、SK-301の南西約6mで検出した不整楕円形の土坑である。長径1.52m、短径1.06m、深さ23cmを測り、長軸方向はN-85°-Eを示す。断面形は舟底形を呈し、底面で円形の浅い落ち込み

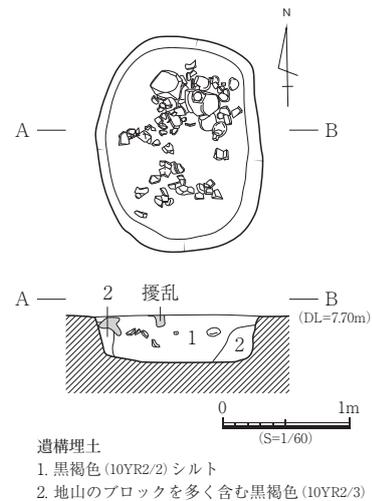


図3-2 SK-301

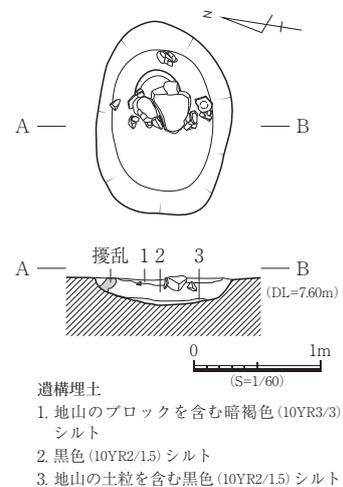


図3-3 SK-302

が認められた。埋土は黒色(10YR2/1.5)シルトを主として、下層部で地山(にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂)の土粒が混じった部分、上層では地山のブロックを含む暗褐色(10YR3/3)シルトが認められた。出土遺物には弥生土器43点がみられ、弥生土器3点(3081~3083)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-6 3081~3083)

3081は甕で、口縁部は粘土紐を折り曲げ貼付口縁とする。頸部外面にはタテ方向のハケ目が部分的に残る。胎土には細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

3082・3083は壺の底部と見られるもので、3082は外傾接合で、外面にはタテ方向のヘラ磨き、内

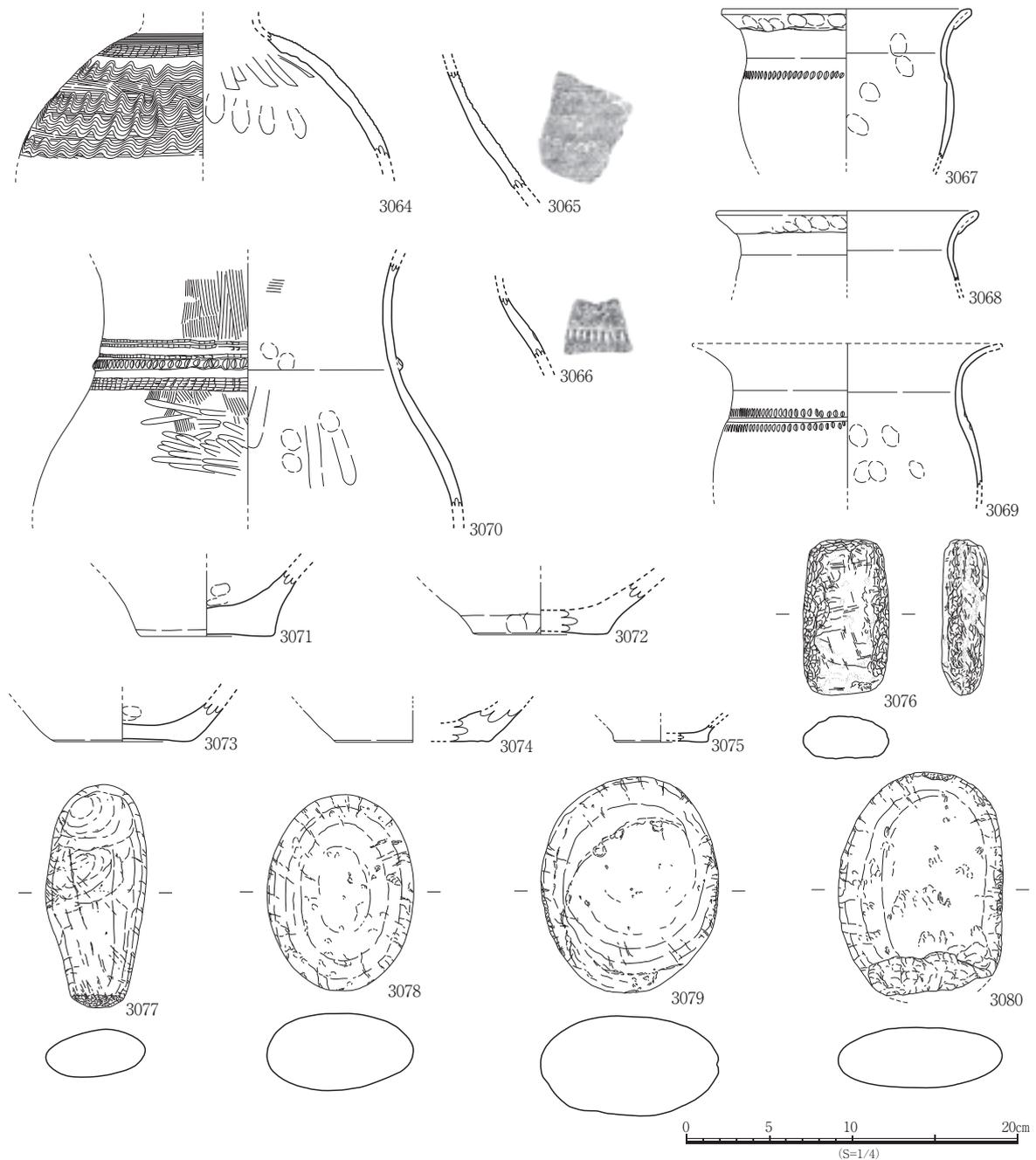


図3-4 SK-301出土遺物実測図

1. Ⅲ区 (1) 弥生時代

面には指ナデ調整, 外底面にはナデ調整をそれぞれ施す。胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。3083 は外面にヨコ方向を指向したヘラ磨き, 内面と外底面にナデ調整を施す。胎土には中粒砂から極細粒中礫を多く含む。

**SK-303** (図3-5)

Ⅲ-4区北西部, SK-301 の真西約8mで検出した楕円形の土坑である。長径1.68m, 短径1.00m, 深さ31cmを測り, 長軸方向はN-9°-Eを示す。断面形は舟底形を呈す。埋土は黒褐色(10YR2/2)シルト単一層で, 生物擾乱が各所に見受けられた。出土遺物には弥生土器14点がみられ, 内1点(3084)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-6 3084)

ミニチュア土器の底部と見られるもので, 器壁が5mmと薄い。底部外縁には指押えの痕が残り, それ以外はナデ調整を施す。胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

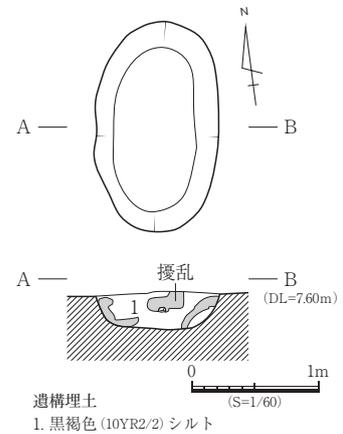


図3-5 SK-303

Ⅲ-1区中央部北西寄りで検出した舟形の土坑で, SD-3004に東半分を切られる。長辺3.62m以上, 短辺0.85m, 深さ34cmを測り, 長軸方向はN-72°-Wを示す。中央部とみられる基底面には柱穴があり, 何らかの覆いがされていたことも考えられる。断面形は逆台形を呈する。埋土はシルト混じりの黒褐色(10YR3/2)極細粒砂単一であった。出土遺物には弥生土器23点がみられ, 内1点(3085)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-6 3085)

壺で, 小さな底部から胴部は内湾気味に立ち上がる。外面はタタキの後にタテ方向のハケ調整, 内面は放射線状に指ナデ調整, 外底面はナデ調整を施す。胎土には細粒砂から極細粒中礫を多く含む。

**SK-305**

Ⅲ-1区中央北端部で検出した方形とみられる土坑で, SD-3008に切られ, 底面からピット1個を確

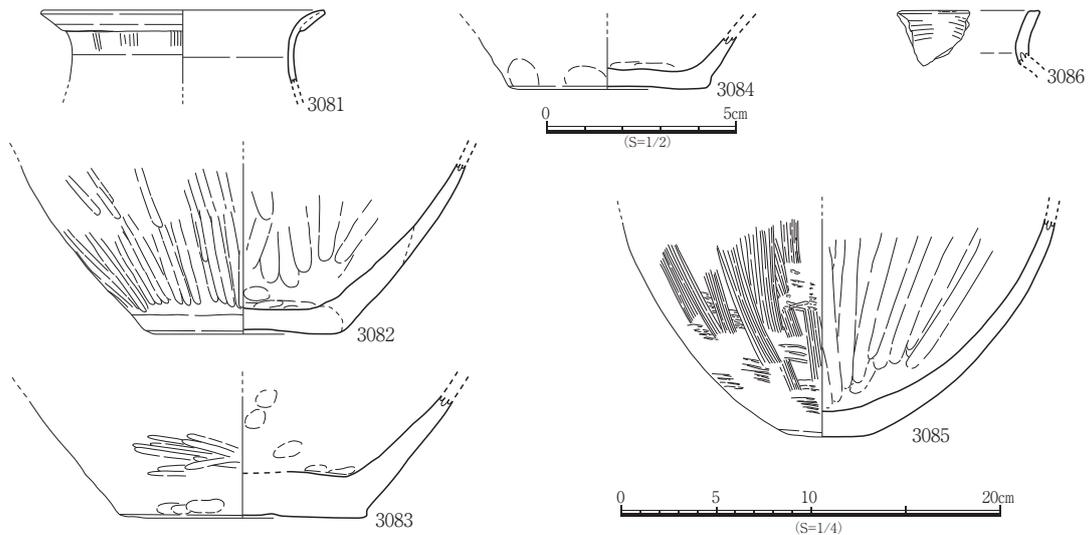


図3-6 SK-302~304・307出土遺物実測図

認した。長辺1.52m以上、短辺0.79m以上、深さ11cmを測り、長軸方向はN-74°-Wを示す。断面形は逆台形を呈す。埋土は地山(シルト混じりの)にぶい黄褐色(10YR4/3)極細粒砂)の土粒を比較的多く含む黒褐色(10YR3/1)シルト単一層であった。遺物は出土しなかった。

**SK-306** (図3-7)

Ⅲ-1区中央北端部で検出した不整形の土坑で、SK-318に切られる。復元規模は長辺1.11m、短辺0.90m、深さ10cmを測り、長軸方向はN-39°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒色(10YR2/1.5)シルト単一層であった。遺物は出土しなかった。

**SK-307**

Ⅲ-1区中央部東寄りで検出した不整楕円形とみられる土坑で、SD-3013に切られ、かつ古代以降の溝や土坑に掘り込まれており、遺存状態は悪い。長径1.54m、短径1.16m、深さ15cmを測り、長軸方向はN-77°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(10YR2/2)シルト単一層である。出土遺物には図示できた弥生土器(3086)1点があった。

出土遺物

弥生土器(図3-6 3086)

甕で、口縁部の一部が残存する。口縁部は外傾し、端部は水平の凹面をなす。内面にハケ調整を施した後、口縁部にヨコナデ調整を加える。極粗粒砂から極細粒中礫を多く含む。

**SK-308**

Ⅲ-1区中央部東寄り、SD-3018とSD-3043を掘削した段階で検出した不整楕円形とみられる土坑で、南側をピットに掘り込まれていた。長径1.18m、短径0.86m、深さ7cmを測り、長軸方向はN-73°-Eを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は黒褐色(10YR2/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

**SK-309**

Ⅲ-1区中央部東寄り、SD-3018とSD-3030・3035を掘削した段階で検出した不整形の土坑で、北側が一段落ち込む。長辺1.92m、短辺0.62m、深さ5~14cmを測り、長軸方向はN-56°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(10YR2/2)シルト単一層であった。出土遺物には弥生土器20点がみられたが、図示できるものはなかった。

③ 溝跡

検出遺構の中で主体を占める。セクションで掘削面と機能面が確認できるものもあるが、その多くは機能面しか確認できず、溝浚えがよく行われていたことが推測される。換言すれば、良く管理された溝であり、大半は用水路として機能していたものと考えられる。これらは掘削された位置によって、大きく3グループに分かれる。すなわち、Aグループ：Ⅲ-1区中央部東寄りにある南東から北西に延びる緩斜面に沿って設けられた規模の比較的小さい溝群(SD-3011~3014など)、Bグループ：緩斜面の上で緩斜面と同じ方向に延びる溝群(SD-3004・3008など)、Cグループ：緩斜面下部から西に延びる溝群(SD-3002・3003など)である。これらは時期差ではなく、目的による違いと考えられる。このうち、BグループとCグループはⅢ-1区南東部に結集部分があり、そこが分岐点となっている。

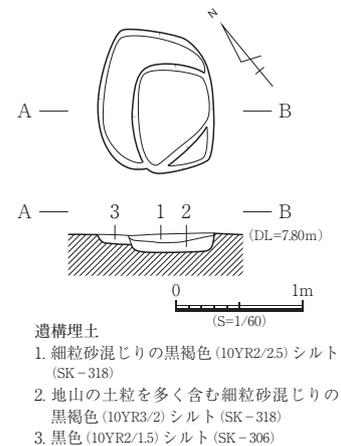


図3-7 SK-306・318

1. Ⅲ区 (1) 弥生時代

なお、Ⅲ区で検出された溝跡の総数が100条を超えたため遺構番号は4桁になっている。

**SD-3001** (図3-8)

Ⅲ-1区西部で検出した東西溝で、SD-3002・3003に切られ、かつ古代以降の溝(SD-3022・3067)に掘り込まれていた。検出長は17.63m、幅0.87~1.72m、深さは15~24cmを測り、断面形は概ね逆台形を呈する。基底面は東(7.487m)から西(7.414m)に向ってやや傾斜し、主軸方向は概ね西北西(N-60°-W)方向を示す。主軸方向と規模からみると前述のSD-3002・3003と重複していた可能性もある。埋土は黒褐色(10YR2/2~2/3)シルトを主体に、下層部で掘削時の堆積とみられる地山の土粒を含む黒褐色(7.5YR3/2)シルトが認められた部分もあった。出土遺物には弥生土器41点と石製品1点があり、弥生土器2点(3087・3088)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-11 3087・3088)

いずれも壺の底部とみられるもので、3088の外面にはタテ方向のハケ調整、内面にはヘラナデ調整とナデ調整、外底面にはナデ調整を施す。いずれも胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

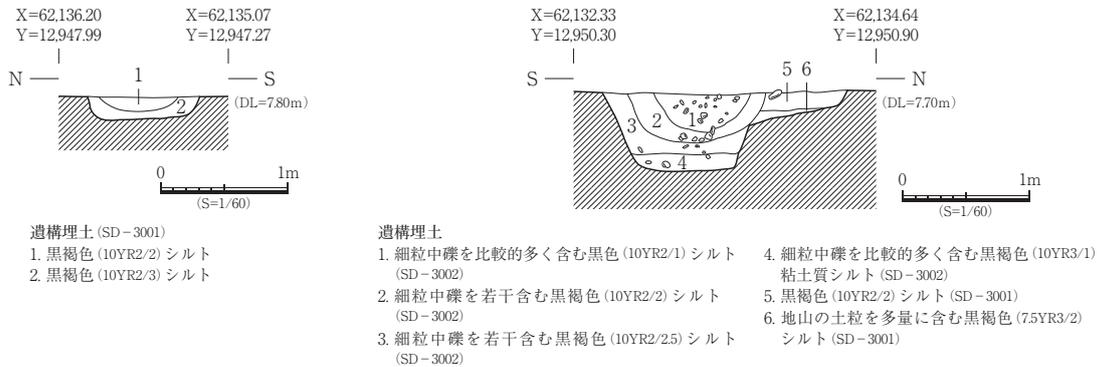


図3-8 SD-3001・3002

**SD-3002** (図3-8~10・81)

Ⅲ-1区南部から西部とⅢ-2区で検出した東西溝で、SD-3001を切り、SD-3003・3008に切られる。延長が長く、各所で古代以降の遺構に掘り込まれ、両端は調査区外に延び、西はV区に至る。検出長は100.88m、幅1.06~2.08m、深さは42~79cmを測り、断面形は概ね逆台形を呈する。基底面は東(7.092m)から西(6.822m)に向って傾斜する。溝は東の分岐点から西北西(N-74°-W)に延びた後、角度をN-57°-Wに変え、SD-3001と接する部分から西(N-85°-W)に大きく傾き、Ⅳ区へ続く。埋土は細

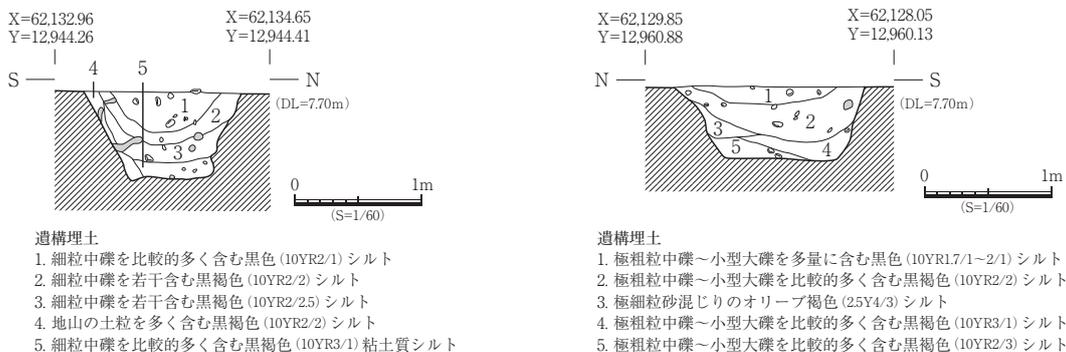


図3-9 SD-3002

粒中礫を含む黒色(10YR2/1)シルトないし黒褐色(10YR2/2~2/2.5)シルトを主体に、場所により3~5層に分層でき、下層部で掘削時の堆積とみられる地山の土粒を含む黒褐色(10YR2/2)シルトが認められた部分もあった。出土遺物には弥生土器121点と石製品4点があり、弥生土器9点(3089~3097)と石製品4点(3098~3101)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-11 3089~3097)

3089は壺の頸部で、外面には上から2本単位のクシ描波状文、5本単位のクシ描直線文、5本単位のクシ描波状文、4本以上の単位のクシ描波状文が残る。内面はナデ調整を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

3090~3093は甕で、3090と3091は口頸部が残る。3090は口縁部で粘土紐を外側に折り曲げて貼付口縁とし、外面に指押えの痕が残る。口縁端部にヘラ状工具による刻目とその内側に刺突文を施す。3091は口縁部外面に粘土帯を貼付して貼付口縁とし、外面には指押えの痕が残る。口唇部から口縁部内面にかけてヨコナデ調整、頸部内外面にはハケ調整、胴部内面にはヘラナデ調整を施す。胴部外面は摩耗する。3092は頸部から上胴部が残り、器壁は3~5mmと薄く、ナデ調整を施し、肩部外面に微隆起突帯を挟んで上に棒状浮文、下に円形ないし楕円形の浮文を貼付する。3093は口縁部の細片で、外反する口縁部外面に微隆起突帯1条を貼付する。いずれも胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

3094~3096は壺の底部とみられるもので、いずれも外面にはヘラ磨きを施し、3094と3095の内面には指押えの後にヘラナデ調整とナデ調整、外面にはナデ調整の後に2カ所にヘラ磨きを加える。3096の内面には指押えの後にナデ調整を加える。胎土には、細粒砂から極粗粒砂を3094と3096が多く、3095が比較的多く含む。

3097は鉢ないし臼のミニチュア土器で、底部はハの字形の高台風となり、体部から口縁部は斜め上外方に真直ぐ上がり、端部が内傾する平面をなす。口唇部から内面は指ナデ調整、外面は指押えの後にナデ調整を加える。胎土には中粒砂から極細粒中礫を比較的多く含む。

石製品(図3-11 3098~3101)

3098は完存する粘板岩の石庖丁で、刃部は両刃の直刃となり、紐孔は2穴両側から穿孔される。表面は部分的に剝落しているがよく研磨されている。

3099は投弾とみられる中粒砂岩の円礫で、表面は平滑である。

3100は扁平な中粒砂岩の磨石で、両面中央部を中心に摩滅しやや窪む。3101は断面台形状を呈す

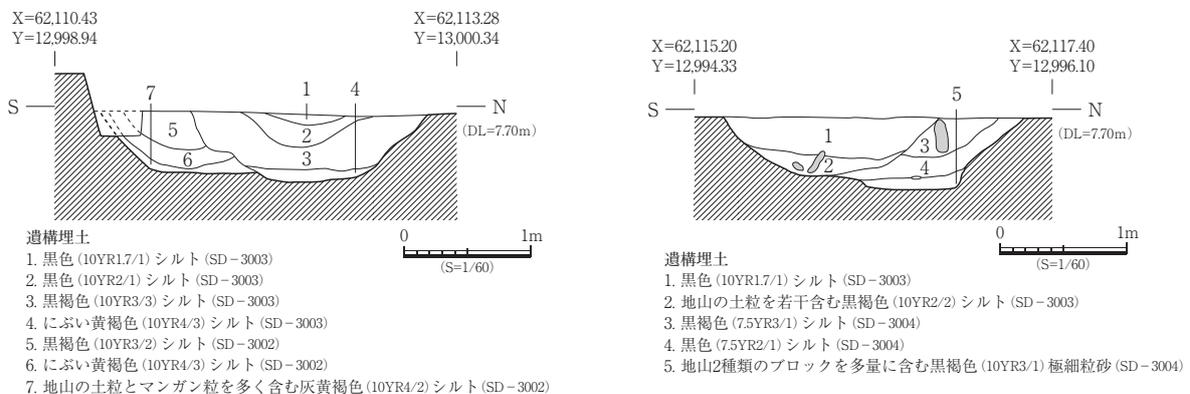


図3-10 SD-3002~3004

1. Ⅲ区 (1) 弥生時代

る中粒砂岩の磨石で、一方の端部に擦痕、もう一方の端部に弱い敲打痕が残る。

SD-3003 (図3-10・12・66・87)

Ⅲ-1区南部から西部とⅢ-2区で検出した東西溝で、中央部から西部ではSD-3002と並走する形となるが、SD-3001・3002・3004など同時代の溝を切る。SD-3002同様延長が長く、各所で古代以降の遺構に掘り込まれ、両端は調査区外に延び、西はV区に至る。検出長は100.68m、幅0.62~2.12m、深さは25~63cmを測り、断面形は概ね逆台形を呈する。基底面は東(7.135m)から西(7.093m)に向ってやや傾斜する。溝は東の分岐点から西北西(N-59°-W)に延びた後、SD-3002と並走するように西(N-88°-W)に大きく傾き、Ⅳ区へ続く。埋土は黒色(10YR2/1~2/1.5)シルトを主体に2~3層に分層でき、

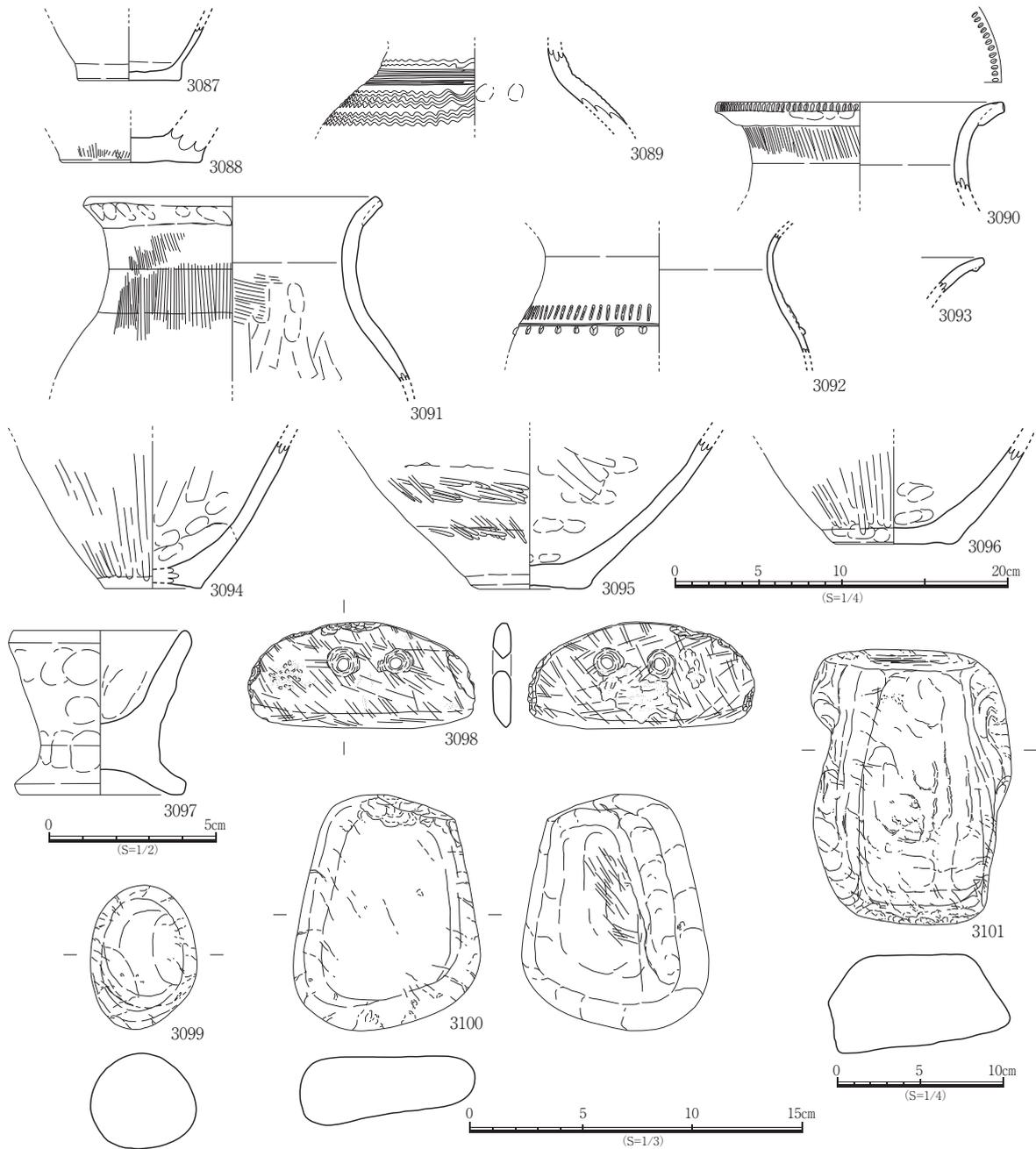


図3-11 SD-3001・3002出土遺物実測図

下層部で掘削時の堆積とみられる地山の土粒を含む黒褐色(10YR2/3)シルトが一部で認められた。出土遺物には弥生土器372点があり、内8点(3102~3109)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-14 3102~3109)

3102は壺で、球形の胴部に外傾する頸部が付く。胴部外面にはタタキの後にハケ調整を加える。胎土には粗粒砂から極細粒中礫を多く含む。

3103~3106は甕で、胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含み、口縁部は胴部からくの字形に屈曲する。胴部は、3103~3105が長胴、3106が球形をなし、3103の外面にはタタキ目、3106にはハケ調整の後にヘラ磨きを部分的に施す。胴部内面は、3103がナデ調整、3104と3105がハケ調整、3106が下胴部にヘラ削りをそれぞれ施す。口縁端部は、3103と3105が内傾する浅い凹面、3104と3106が内傾する平面となり、口頸部はいずれもヨコナデ調整を施す。

3107と3108は甕の底部とみられるもので、いずれも底径4cm以下と小さく、胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。3108の内外面にはハケ目が残る。

3109は大型の鉢で、体部は内湾気味に上がり、端部は丸く、上方を向く。外面には成形時の皺が亀裂として残る。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

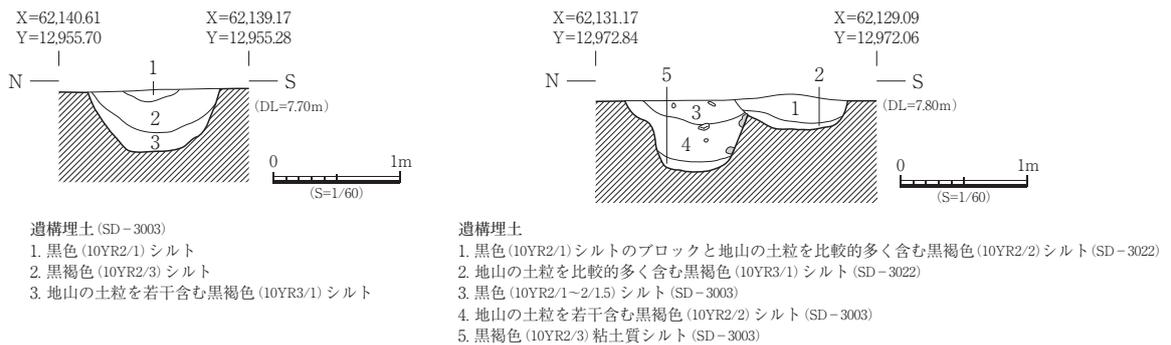


図3-12 SD-3003・3022

SD-3004 (図3-10・13・96)

Ⅲ-1区北端部から南東部で検出した南北溝で、SD-3005を切る。延長が比較的長く、各所で古代以降の遺構に掘り込まれ、両端は調査区外に延びる。SD-3005とは断面形状が似ており、かつ北と南でSD-3005と重複する部分があることからSD-3005の掘り替えの可能性はある。検出長は45.46m、

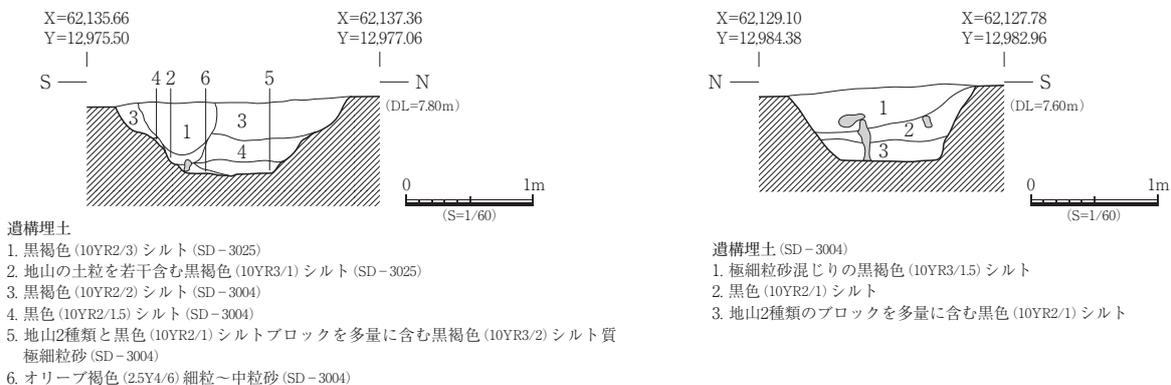


図3-13 SD-3004・3025

1. Ⅲ区 (1) 弥生時代

幅1.40～2.22m, 深さは48～70cmを測り, 断面形は舟底形ないし逆台形を呈する。基底面は南(7.126m)から北(7.062m)に向って傾斜する。溝は東の分岐点から概ね北西(N-42°-W)に向って延びる。埋土は黒褐色(10YR2/2～2/3)シルトを主体に2～3層に分層でき, 下層部で掘削時の堆積とみられる地山の土粒を比較的多く含む暗褐色(10YR3/3)シルトが一部で認められた。出土遺物には弥生土器215点があり, 内3点(3110～3112)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-14 3110～3112)

3110は壺で, 口縁部は直立する頸部から外反し, 端部は上下に拡張され真横を向く凹面をなす。口縁部内面と頸部外面にハケ目が残る。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

3111は甕で, 口縁部は胴部からくの字形をなし, 端部は内傾する浅い凹面をなす。胴部内面にはヘラ削りを施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

3112は壺の底部とみられるもので, 内外面ともナデ調整を施し, 胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

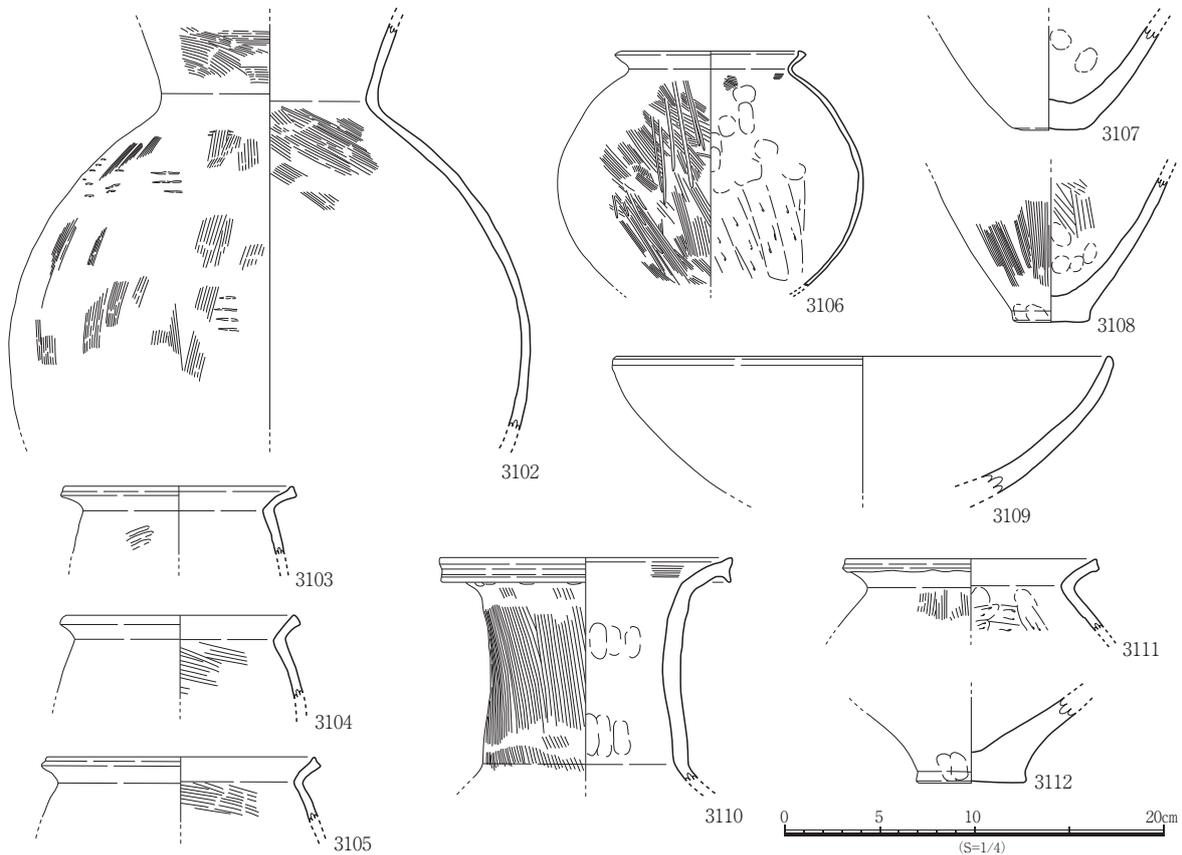


図3-14 SD-3003・3004出土遺物実測図

SD-3005

Ⅲ-1区北端部と南部で西壁の一部を確認し, 一連のものと判断した南北溝で, SD-3004の掘り替え前のものと考えられる。溝は北端部でSD-3006を切り, 南部ではSD-3022に掘り込まれていた。検出長は推定39.42m, 推定幅0.37～1.03m, 深さは22～59cmを測り, 断面形は舟底形を呈するとみられる。基底面は南(7.207m)から北(7.076m)に向ってやや傾斜する。溝はSD-3004と同様概ね北西方向

(N-42°-W)に向って延びるものと考えられる。埋土は黒褐色(10YR2/2~3/2)細粒砂混じりシルトないしシルト質砂を主体に2~4層に分層でき、地山の土粒を多く含む堆積層も認められた。出土遺物には弥生土器2点があったが、図示できるものはなかった。

**SD-3006**

Ⅲ-1区北端部で確認した南北溝とみられるもので、SD-3005に切られ、古墳時代の溝(SD-3018)に掘り込まれていた。検出状態と北壁セクションでの状況は、東西方向に延びる溝のようにみられるが、SD-3004の東側でその延長が確認されないことから本来は南方向に延びていたものと判断される。ただし、その痕跡が南側で確認されないことからSD-3004とSD-3005と同一ライン上にあったことが推測され、SD-3005とSD-3006が掘り替えであると推察される。また、基底面は、SD-3005の方が低いことから本来の溝の掘方は遺存しなかったと思われる。検出長は7.83m、幅0.88m以上、深さは45~54cmを測り、断面形は舟底形を呈するとみられる。基底面は、遺存する東西方向では東(7.158m)から西(7.152m)に向ってやや傾斜する。溝は本来SD-3004同様概ね北西(N-42°-W)に向って延び、その後西(N-82°-W)に大きく振るものとみられる。埋土は黒色(7.5YR2/1.5)シルトを中心に下層部に地山の土粒を多く含む堆積層が認められ、一部にシルト混じりの黒褐色(10YR3/1)粗粒砂が認められた部分もあった。出土遺物には弥生土器5点があったが、図示できるものはなかった。

**SD-3007** (図3-15・97)

Ⅲ-1区北部で検出した東西溝で、SD-3008・3010を切る。また、古代以降の遺構に各所で掘り込まれ、北側は調査区外に延びる。東側はSD-3034に掘り込まれており、本来東側はSD-3034と重複し、分岐点に向って延びていた可能性も考慮される。検出長は19.09m、幅0.80~1.20m、深さは40~50cmを測り、断面形は逆台形を呈する。基底面は東(7.305m)から西(7.204m)に向ってやや傾斜する。溝は西北西方向(N-61°-W)に向って延びる。埋土は黒色(10YR2/1.5)シルトないし黒褐色(10YR2/3)シルトを主体に2~4層に分層でき、下層部で掘削時の堆積とみられる地山の土粒を若干含む黒褐色(10YR2/2)シルトが認められた部分もある。出土遺物には弥生土器30点があり、内1点(3113)が図示できた。

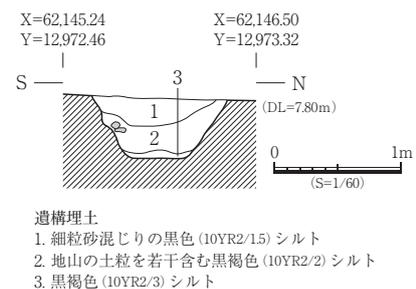


図3-15 SD-3007

**出土遺物**

**弥生土器** (図3-16 3113)

壺の胴部で、球形をなす。外面にはタタキの後に下胴部にハケ調整を加え、内面にはハケ調整の後にナデ調整を加える。胎土には中粒砂から極細粒中礫を多く含む。

**SD-3008** (図3-17・90・97)

Ⅲ-1区北部から南部かけて検出した南北溝で、SK-305, SD-3002・3009・3010を掘り込み、SD-3007に切られる。また、各所で古代以降の遺構に掘り込まれ、両端は調査区外に延びる。検出長は57.92m、幅1.26~1.69m、深さは37~68cmを測り、断面形は逆台形を呈する。基底面は南(7.167m)から北(7.105m)に向ってやや傾斜する。溝は南から西北西方向(N-63°-W)に延びた後、北西(N-42°-W)に方向を変え、さらに延び、一見、SD-3004と並走する形となる。埋土は黒褐色(10YR2/3~3/2)シルトを主体に2~5層に分層でき、下層部で掘削時の堆積とみられる地山のブロックを多く含む黒褐色(10YR2/2)シルトが認められた部分もある。出土遺物には弥生土器113点があり、内9点(3114~3122)

が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-16 3114~3122)

3114~3117は壺で、3114と3115は、頸部が直立し、3114は、口縁部が頸部から屈曲し、端部を上下に拡張する。いずれも器面にはハケ目が残る。胎土には、3114が粗粒砂から極粗粒砂を多く含み、3115が細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。3116は頸部の大半を欠くが、3114・3115と同じく頸部が直立するものとみられ、外面にはハケ目が残る。胎土には極粗粒砂を多量に含む。3117は口縁端部を下方に大きく拡張し、拡張部に竹管文を施文し、口縁部内面にはヘラ磨きを施す。胎土には極粗粒砂を若干含む。

3118と3119は甕で、口縁部は短く立ち上がる頸部から外傾し、端部は内傾する平面を有する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。3119は、口縁部が胴部から緩やかに外傾し、端部は丸く、内外面にはヨコナデ調整を施す。胎土には雲母と粗粒砂を中心に細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

3120は甕の底部で、ミニチュア土器の可能性があり、胎土は比較的精良で、細粒砂から粗粒砂を少し含む、器面にはハケ調整の後にナデ調整を加える。3121は壺の底部で、上げ底となり、上外方へ立ち上がる。外面はハケ調整の後にヘラ磨き、内面はハケ調整の後に指ナデ調整を加える。胎土には中粒砂から極細粒中礫を多く含む。

3122は鉢で、体部は平らな底部から上外方にたち上がり口縁部に至り、端部を細く仕上げる。口唇部から内面にかけてナデ調整を施す。胎土には粗粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

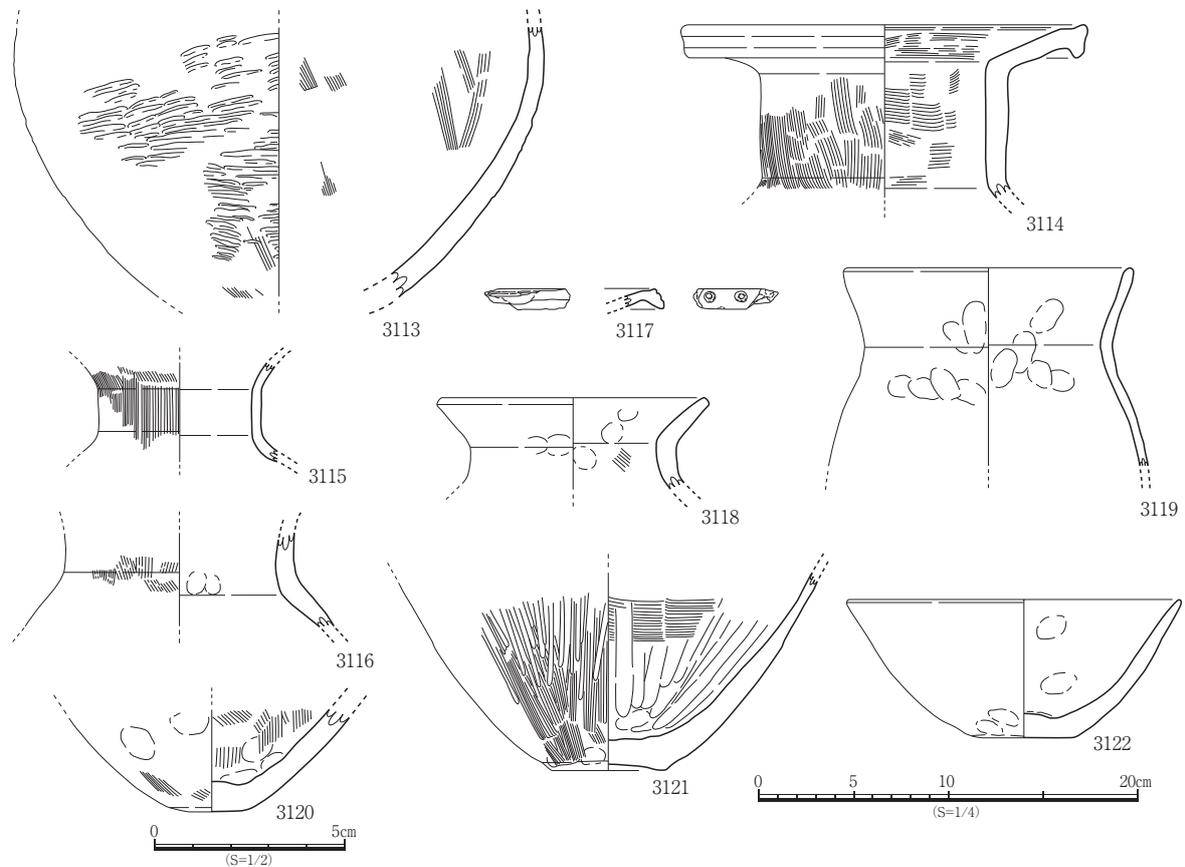


図3-16 SD-3007・3008出土遺物実測図

SD-3009 (図3-17)

Ⅲ-1区中央部南寄り，SD-3008 に切られた形で確認した南北溝で古代の溝(SD-3022)などに掘り込まれる。確認部分では，基底面がSD-3008 より深くなっているものの，他の部分では確認できないことからSD-3008 に先行する溝，すなわち，SD-3008 が掘り替えであったことも考えられる。検出長は8.12m，幅0.63m以上，深さは37～51cmを測り，断面形は中央部が一段窪んだ舟底形を呈する。基底面は北(7.181m)から南(7.125m)に向ってやや傾斜する。溝は概ね南東(N-138°-E)に向って延びる。埋土は黒褐色(10YR2/2)シルトを主体に2層に分層でき，下層は地山の土粒を多く含む極細粒砂混じりの黒褐色(10YR2/2)シルトとなっていた。出土遺物には弥生土器19点があったが，図示できるものはなかった。

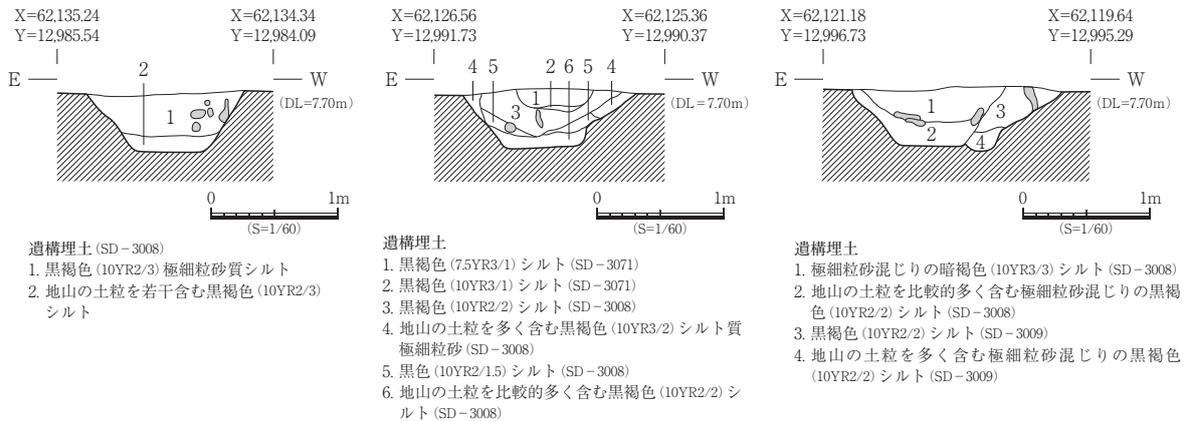


図3-17 SD-3008・3009・3071

SD-3010

Ⅲ-1区北部，SD-3007とSD-3008の交差部分で確認した東西溝で，SD-3007・3008に切られるが，関連するとみられる溝跡が東側と西側で確認できないことから比較的短いものであった可能性が高い。検出長は1.12m，幅0.52m，深さは30cmを測り，断面形は舟底形を呈するとみられる。基底面は西(7.310m)から東(7.284m)に向ってやや傾斜する。主軸方向は東方向(N-89°-E)を向く。埋土として地山の土粒を比較的多く含む黒褐色(10YR2/2)シルトを確認した。出土遺物には弥生土器1点があったが，図示できるものはなかった。

SD-3011 (図3-18)

Ⅲ-1区北部から中央部の緩斜面部の標高7.5mの等高線に沿った形で検出した南北溝で，古代の溝跡(SD-3030)などに掘り込まれていた。検出長は26.46m，幅0.20～0.50m，深さは12～25cmを測り，断面形は逆台形を呈する。基底面は北(7.424m)から南(7.405m)に向ってやや傾斜する。主軸方向は南東方向(N-143°-E)を向く。埋土は極細粒砂混じりの黒色(10YR2/1)シルトで，下層部で地山の小ブロックを含む暗褐色(10YR3/3)極細粒砂の堆積が認められた箇所もあった。出土遺物には弥生土器2点があったが，図示できるものはなかった。

SD-3012 (図3-18)

Ⅲ-1区北部から中央部の緩斜面部の標高7.4mの等高線に沿った形で検出した南北溝で，SD-3011の東隣に位置する。遺構はSD-3013を切り，古代後半以降の溝跡(SD-3073・3074)に掘り込まれていた。検出長は31.98m，幅0.35～1.12m，深さは14～32cmを測り，断面形は舟底形を呈する。基底面は

1. Ⅲ区 (1) 弥生時代

北(7.259m)から南(7.236m)に向ってやや傾斜する。溝は緩やかなS字を描きながら概ね南南東方向(N-148°-E)を向く。埋土は黒色(10YR2/1)シルトを主体に、下層部で地山のブロックを若干含む黒色(10YR2/2)シルトの堆積が認められた箇所もあった。出土遺物には弥生土器5点があったが、図示できるものはなかった。

**SD-3013** (図3-18)

Ⅲ-1区中央部, SD-3012 と重複する形で検出した南北溝で、標高7.2~7.4mの緩斜面に位置する。遺構はSD-3012に切られ、かつ古墳時代以降の遺構に掘り込まれていた。検出長は22.52m, 幅0.65~1.49m, 深さは8~16cmを測り、断面形は舟底形を呈する。基底面は北(7.401m)から南(7.173m)に向って傾斜する。溝は途中で角度を変え、南東方向(N-146°-EとN-133°-E)に延びる。埋土は地山(黒褐色(10YR2/3)シルト)のブロックを多量に含むにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器6点があったが、図示できるものはなかった。

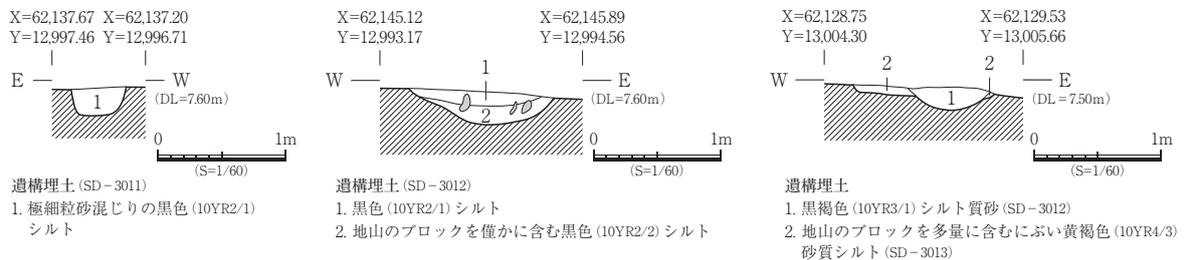


図3-18 SD-3011~3013

**SD-3014** (図3-19)

Ⅲ-1区中央部, 北端部から南東部で検出した南北溝で、標高7.1~7.3mの緩斜面に位置し、北は調査区外に延びる。遺構はSD-3015に切られ、かつ古代以降の遺構(SK-321, SD-3032)などに掘り込まれていた。検出長は37.08m, 幅0.38~0.93m, 深さは8~29cmを測り、断面形は舟底形を呈する。基底面は北(7.208m)から南(7.056m)に向って傾斜する。溝は緩やかなカーブを描くものの概ね南南東方向(N-150°-E)を向く。埋土は黒色(10YR2/1)シルトが主体で、一部に黒褐色(7.5YR3/1)シルトが堆積する部分もあった。出土遺物には弥生土器1点があったが、図示できるものはなかった。

**SD-3015** (図3-19)

Ⅲ-1区中央部南東寄りで検出した南北溝で、標高7.3mの緩斜面に位置する。遺構はSD-3014・3016を切り、SD-3013に掘り込まれ、南側は確認できない。検出長は4.70m, 幅0.35~0.48m, 深さは2~8cmを測り、断面形は舟底形を呈する。基底面は南(7.250m)から北(7.237m)に向ってやや傾斜する。溝はややカーブするも概ね北北西方向(N-12°-W)を向く。埋土は黒色(10YR2/1)シルト単一層であった。遺物の出土はみられなかった。

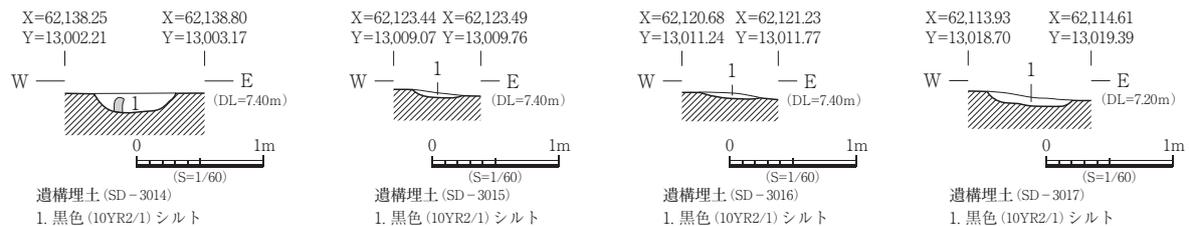


図3-19 SD-3014~3017

**SD-3016** (図3-19)

Ⅲ-1区中央部南東寄りで検出した南北溝で、標高7.2~7.3mの緩斜面に位置する。遺構はSD-3015に切れ、北側は確認できないが、SD-3015より北では確認されていないことから検出長から大きく変わらないものと思われる。検出長は4.02m、幅0.38~0.64m、深さは8cm前後を測り、断面形は舟底形を呈する。基底面は北(7.265m)から南(7.250m)に向ってやや傾斜する。主軸方向は南東方向(N-137°-E)を向く。埋土は黒色(10YR2/1)シルト単一層であった。遺物の出土はみられなかった。

**SD-3017** (図3-19)

Ⅲ-1区南東部で検出した南北溝で、標高7.0~7.2mの緩斜面に位置する。遺構は、SD-3014の南端、東隣から始まっており、本来同一のものであった可能性も考慮されるが、基底面の傾斜方向が異なる。検出長は9.36m、幅0.32~0.69m、深さは4~12cmを測り、断面形は舟底形を呈する。基底面は南(7.118m)から北(6.961m)に向ってやや傾斜する。主軸方向は北西方向(N-47°-W)を向く。埋土は黒色(10YR2/1)シルト単一層であった。遺物の出土はみられなかった。

④ ピット

148個を確認した。出土遺物がみられないものもあったが、埋土が黒色(10YR2/1~1.7/1)シルトを主体としており、古墳時代や古代の遺構の埋土と比べ、黒色が強くなっている。図示できる遺物が出土したのは1個(P-301)であった。

**P-301**

Ⅲ-1区中央部西寄り、SD-3002とSD-3003の間で検出した円形のピットで、径23~25cm、深さ21cmを測る。規模からみて柱穴の可能性が考慮されるものの建物等には復元できなかった。埋土は前述の黒色(10YR2/1~1.7/1)シルトであった。出土遺物は図示した石製品1点(3123)のみであった。

出土遺物

石製品(図3-20 3123)

扁平な磨石で、石材は中粒砂岩である。断面形は楕円形を呈し、表面は平滑である。

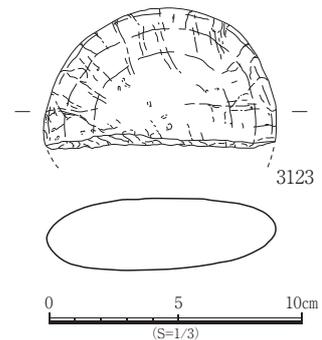


図3-20 P-301出土遺物  
実測図

(2) 古墳時代

低調な時代である。各時代の遺構からは数は少ないものの当時代、中でも6世紀後半から7世紀代の遺物が散見され、中でもSD-3018からは一定量の遺物が出土しており、周辺部に当該期の集落が存在したことが推察される。ただ、後世の遺構、主に溝跡によってその大半は掘削され、片方の壁のたち上がり部分が部分的に確認される程度で、古墳時代単独の平面図を起すことができず、止むを得ず古代後半から中世の図面に掲載している。

一方、このことは時代が異なっても、溝を掘削する位置があまり変わらない。すなわち、水路を構築する上で最も適した場所であったことを意味するものと思われる。

① 竪穴状遺構

1軒確認したが、明確な支柱穴などが確認されなかったことから竪穴建物跡ではなく、簡易な覆い屋程度のもものではなかったかと推察され、竪穴状遺構として報告する。

ST-301 (図3-21)

Ⅲ-1区東部で検出した不整形の竪穴状遺構である。緩斜面の東のたち上がり頂部に位置する。一辺5.61~6.10m、深さ16cmを測り、長軸方向はN-36°-Wを示す。底面の標高は7.271~7.402mを測る。付随遺構としてピット12個を検出した。これらピットはいずれも径20cm前後のものであり、明確な支柱穴等が検出されなかったことから竪穴状遺構とした。このうち、位置関係からP-1~3が覆い屋の支柱穴であった可能性が考えられる。深さはP-1が16.4cm、P-2が11.0cmを測り、P-3が9.7cmを測り、ピット間は約2mとなる。また、中央ピットなど他の付随遺構は未確認である。埋土は主に地山(浅黄色(2.5Y7/4)シルト質砂と細粒砂から極粗粒砂)を含む黒色(10YR2/1)シルトで、一部暗褐色(10YR3/3)細粒砂から極粗粒砂が堆積する箇所があった。出土遺物

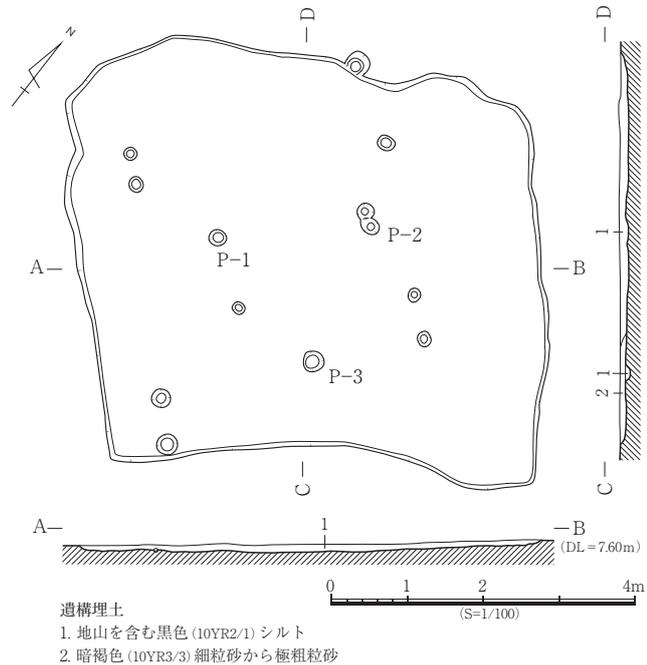


図3-21 ST-301

には土師器40点と須恵器5点がみられたが、図示できるものはなかった。

② 溝跡

SD-3018 (図3-22・96・97)

Ⅲ-1区中央部、北端部から南東部にかけて部分的に検出した東西溝で、さらに調査区外に延びる。古代以降の溝(SD-3024・3034)などに掘り込まれ、両側のたち上がりが遺存しているところはなかった。検出長は72.62m、推定幅3.00~4.00m、深さは32~63cmを測り、断面形は概ね舟底形を呈する。基底面は西(7.316m)から東(7.140m)に向かって傾斜する。溝は緩やかにカーブを描き、東南東方向(N-122°-E)に延びる。埋土は黒褐色(10YR3/1~2/2)シルトを主体として2~5層に分層でき、下層部で掘削時のものとみられる地山のブロックや土粒を比較的多く含む堆積が認められた部分もあった。出土遺物には弥生土器80点、土師器461点、須恵器42点、石製品2点及び鉄製品1点があり、各時代を通

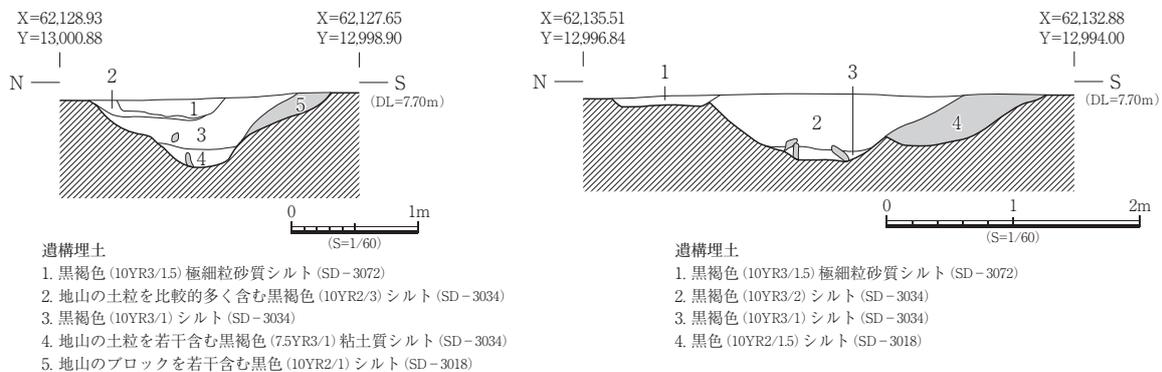


図3-22 SD-3018・3034・3072

じて溝の中では遺物量が多い。この内図示できたのは弥生土器3点(3124~3126)、土師器13点(3127~3139)、須恵器17点(3140~3156)、石製品2点(3157・3158)、鉄製品1点(3159)であった。

出土遺物

弥生土器(図3-23 3124~3126)

3124は甕で、丸味のある胴部にくの字形をなす口縁部が付くとみられる。外面頸部と肩部の境にハケ目が残る。胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。3125は甕で、丸味のある底部に砲弾形の胴部が付く。下胴部外面にはタタキ目残り、胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。3126は壺の下胴部とみられるもので、上外方に内湾して上がる。外面にはハケ目残り、胎土には中粒砂から極細粒中礫を多く含む。

土師器(図3-24 3127~3139)

いずれも甕である。3127は小型で、丸い底部から大きく内湾してたち上がり、口縁部は短く外反する。肩部外面には回転カキ目調整を意識したかのようなヨコ方向のハケ目残り、口縁部から肩部外面には煤が付着する。なお、下胴部外面には一部ヘラ削りしたような痕跡が残るが、摩耗し不明瞭である。胎土には粗粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。3128~3139はいずれも口縁部が残存しており、口縁部は倒卵形の胴部から緩やかに短く外反する。3129の口縁部は肥厚したように厚い。3132は中胴部まで遺存しており、内面中胴部以下にヘラ削りを行い、その後上胴部にハケ調整を施す。肩部外面には煤が付着する。3136の口縁部には外傾接合痕が残る。3138は他に比べ口縁部が長く、内外面にはハケ調整を施し、口唇部を中心にヨコナデ調整を加える。3139は大型の甕で、口縁部内面にはヘラ削り痕が認められる。胎土はいずれも細粒砂から粗粒砂ないし極粗粒砂を多く含み、3138には雲母片が認められる。

須恵器(図3-25 3140~3156)

3140~3142は杯蓋で、天井部は丸味があり、3140と3141にはハの字形に開く口縁部が付く。3142は、口縁部が天井部から湾曲し、その境はない。胎土には白色の細粒砂から粗粒砂ないし極粗粒砂を比較的多く含む。

3143~3152は杯身で、3143と3144のたち上がりはハリツケ手法による。これ以外はいずれもオリコミ手法とみられる。3145はヘラ起こしによる丸味のある底部が遺存する。3146は丸い底部を有し、外面約1/3に回転ヘラ削り調整を施す。3147は、たち上がり高が0.8cmと比較的高く、底部は平らで、

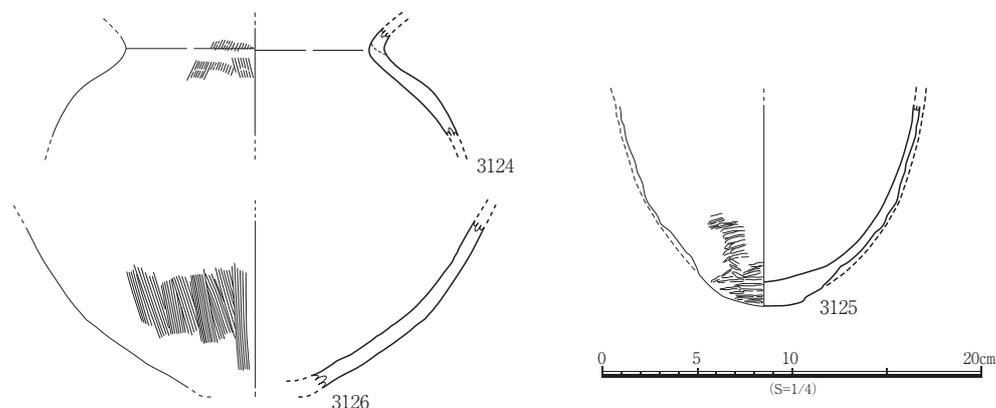


図3-23 SD-3018出土遺物実測図1

1. Ⅲ区 (2) 古墳時代

外面の大半に回転ヘラ削り調整を施す。3148 は底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整を施す。3149 は丸味のある底部を有し、外面に回転ヘラ削り調整を施した上で、ヘラ起こしする。たち上がり高は0.6cmを測る。3150 は丸味のある底部を有するもので、外面約1/2に回転ヘラ削り調整を行う。また、底部内外面には十文字のヘラ記号が施される。たち上がり高は0.6cmを測る。3151 は器高指数26と他に比べやや扁平なもので、底部は丸味があり、外面約2/3に回転ヘラ削り調整を施す。たち上がり高は

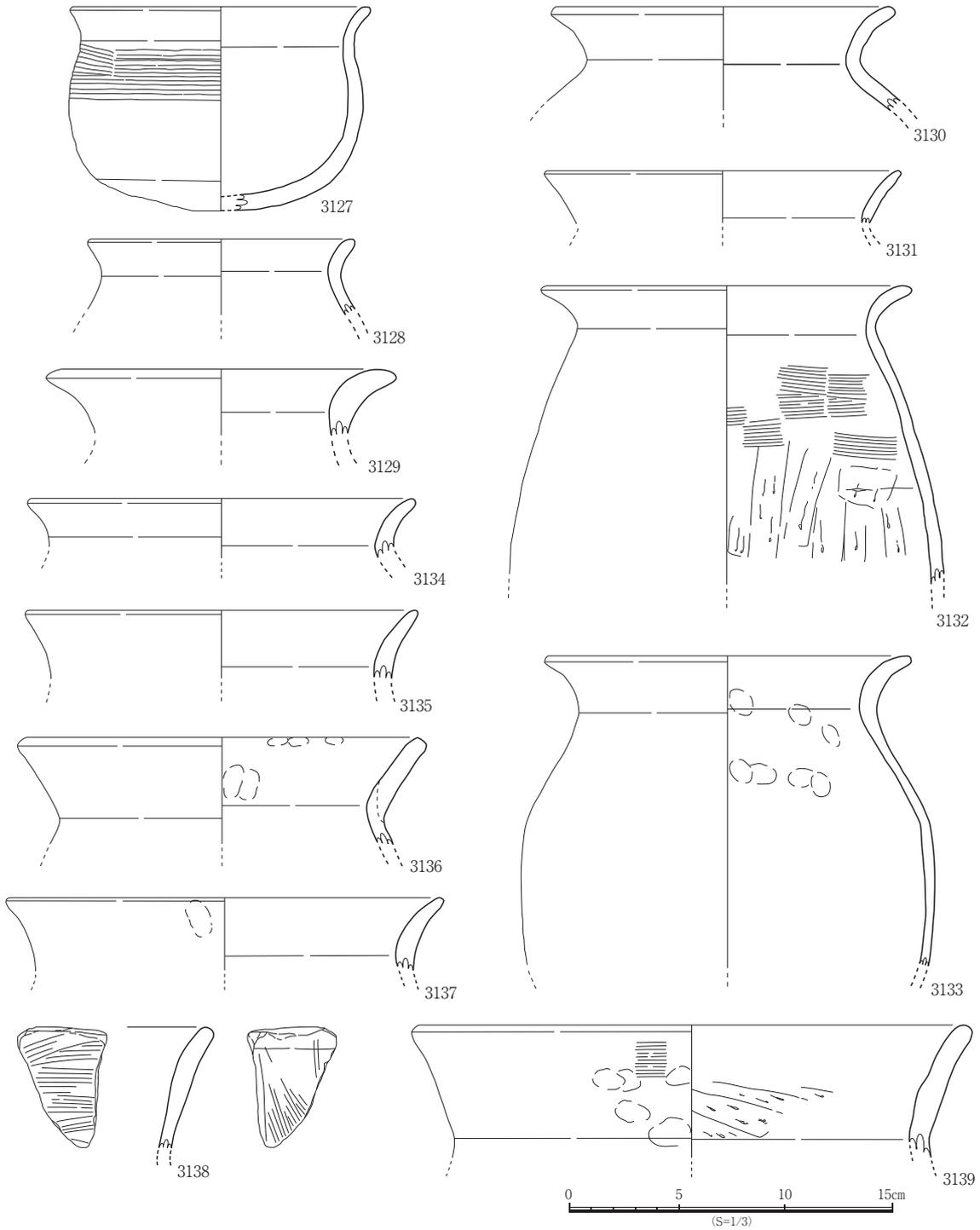


図3-24 SD-3018出土遺物実測図2

0.8cmを測る。3152は底部外面約1/2に回転ヘラ削り調整を施すもので、受部内側には沈線状の凹みが巡る。これら杯身の胎土には白色細粒砂から中粒砂ないし粗粒砂を比較的多く含み、中でも3149には多く含んでいる。

3153は高杯の脚台部で、下外方に大きく開き、裾端部を斜め上方に小さく屈曲させる。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

3154は壺ないし提瓶の口縁部とみられるもので、緩やかに上外方に開き、端部は丸い。胎土には

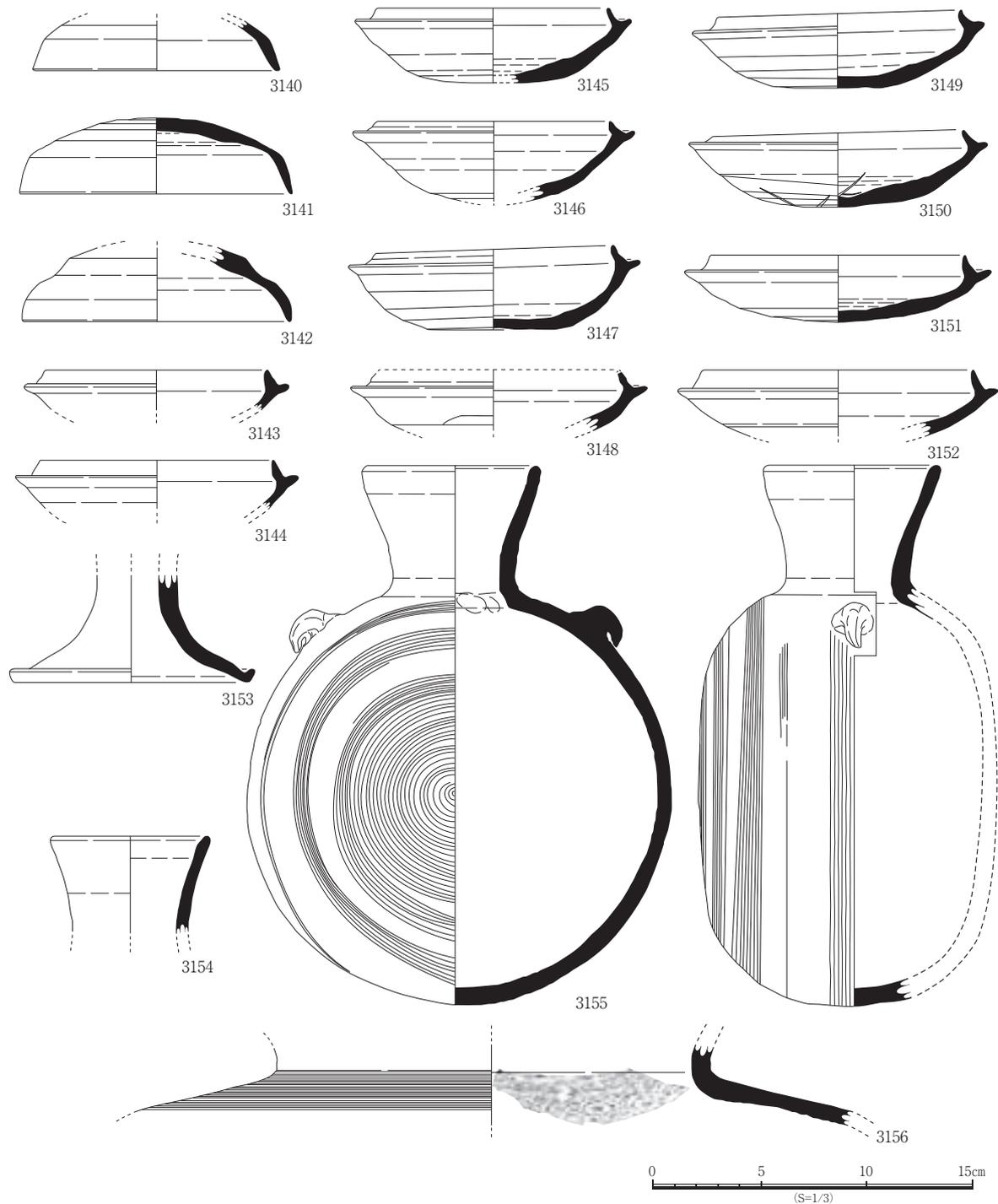


図3-25 SD-3018出土遺物実測図3

1. Ⅲ区 (2) 古墳時代

細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。3155 は提瓶で、胴部は前面が円形、側面が扁平となり、肩部には一対のカギ状把手が付く。口縁部は外傾し、端部は丸い。口頸部と胴部の内面の接合部には指頭圧痕が残り、胴部外面には回転カキ目調整を施す。胎土には白色粗粒砂を多く含む。

3156 は甕の肩部で、大きく張り、球形の胴部に続く。外面には回転カキ目調整、内面には同心円文のタタキを施す。また、外面には自然釉がかかりハダ荒れとなる。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

石製品(図3-26 3157・3158)

3157 は中粒砂岩の磨石で完存し、表面は平滑である。

3158 は粗粒砂岩の叩石で、中央部と端部各1カ所に明瞭な敲打痕が残り、右側面には擦痕と摩滅痕がみられ砥石としても使用されていたものとみられる。

金属製品(図3-26 3159)

鉄製の刃鎌で、刃部は摩滅しているが直線刃となる。刃先は欠損する。

SD-3019 (図3-27)

Ⅲ-1区中央部南東寄りで検出した南北溝で、標高7.2mから7.6mの緩斜面に位置する。遺構はSD-3018に切られ、古代以降の遺構が各所に掘り込まれていた。検出長は27.23m、幅0.30~0.66m、深さ約19cmを測

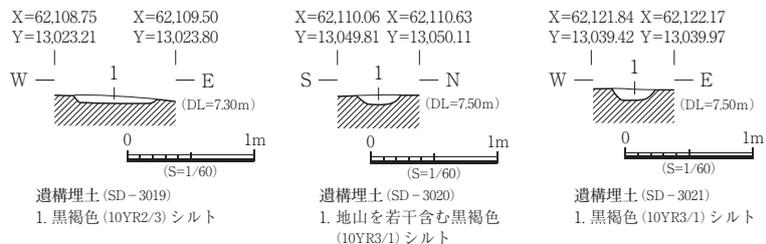


図3-27 SD-3019~3021

り、断面形は逆台形を呈する。基底面は北(7.185m)から南(6.985m)に向ってやや傾斜する。溝は北側で、SD-3018と交差し、東南東方向(N-115°-E)に延び、角度を南東方向(N-125°-E)に変え、SD-3018に沿って延びる。埋土は黒褐色(10YR2/3)シルト単一層であった。出土遺物には弥生土器3点、須恵器4点がみられ、須恵器1点(3160)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-28 3160)

甕の胴部で、外面にはタタキの後に回転カキ目調整、内面には同心円文のタタキを施す。胎土には白色中粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

SD-3020 (図3-27)

Ⅲ-1区南東部で検出した東西溝である。遺構は古代以降の遺構に各所で掘り込まれていた。検出

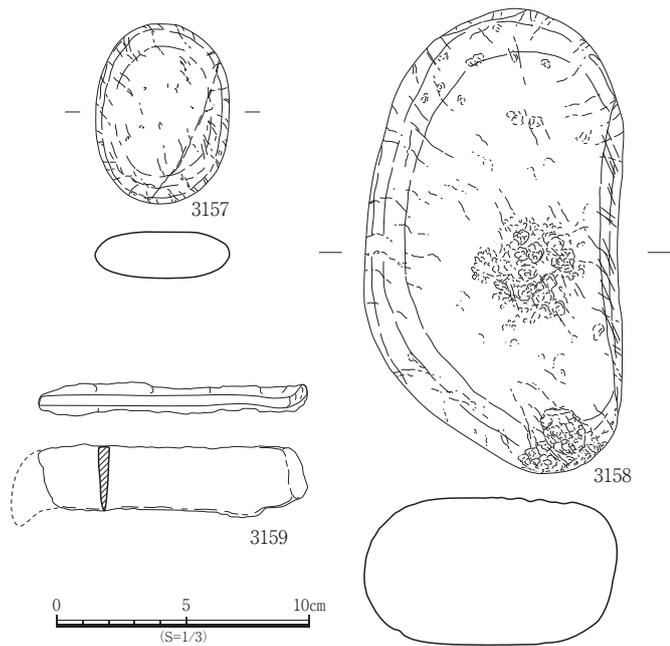


図3-26 SD-3018出土遺物実測図4

長は21.44m, 幅0.28~0.44m, 深さ約13cmを測り, 断面形は舟底形を呈する。基底面は西(7.396m)から東(7.281m)に向ってやや傾斜する。溝は緩やかなカーブを描き, 東南東方向(N-123°-E)に延び, 東はさらに調査区外に続く。埋土は黒褐色(10YR3/1)シルトで地山(浅黄色(2.5Y7/4)シルト質極細粒砂)を若干含む。出土遺物には土師器2点, 須恵器1点がみられ, 須恵器1点(3161)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-28 3161)

椀で, 底部は平らでやや上げ底風となり, 体部は内湾気味に上がり, 口縁部は屈曲して真上にたち上がり, 口縁端部を細く仕上げる。外面, 口縁部と体部の境には1条の凹線が巡る。口縁部には回転ナデ調整, 底部外面には静止ヘラ削り調整, 内底面にはナデ調整を施す。また, 内面には十文字のヘラ記号が残る。胎土には白色中粒砂を多く含む。

SD-3021(図3-27)

Ⅲ-1区北東部, 北端部から南東端にかけて検出した東西溝で, 2カ所で途切れるものの, 位置関係から本来は1条の溝であったものとみられる。また, 遺構としては取り上げなかったが, 東側にある細長い溝状の染みが溝の続きであった可能性も考慮される。遺構は古代以降の遺構に各所で掘り込まれていた。検出長は43.17m, 幅0.13~0.40m, 深さ約13cmを測り, 断面形は舟底形を呈する。基底面は西(7.377m)から東(7.337m)に向ってやや傾斜する。溝は標高7.5mの等高線にほぼ沿う形となり, 南東方向(N-134°-E)に延びる。埋土は黒褐色(10YR3/1)シルト単一層であった。出土遺物には土師器6点がみられたが, 図示できるものはなかった。

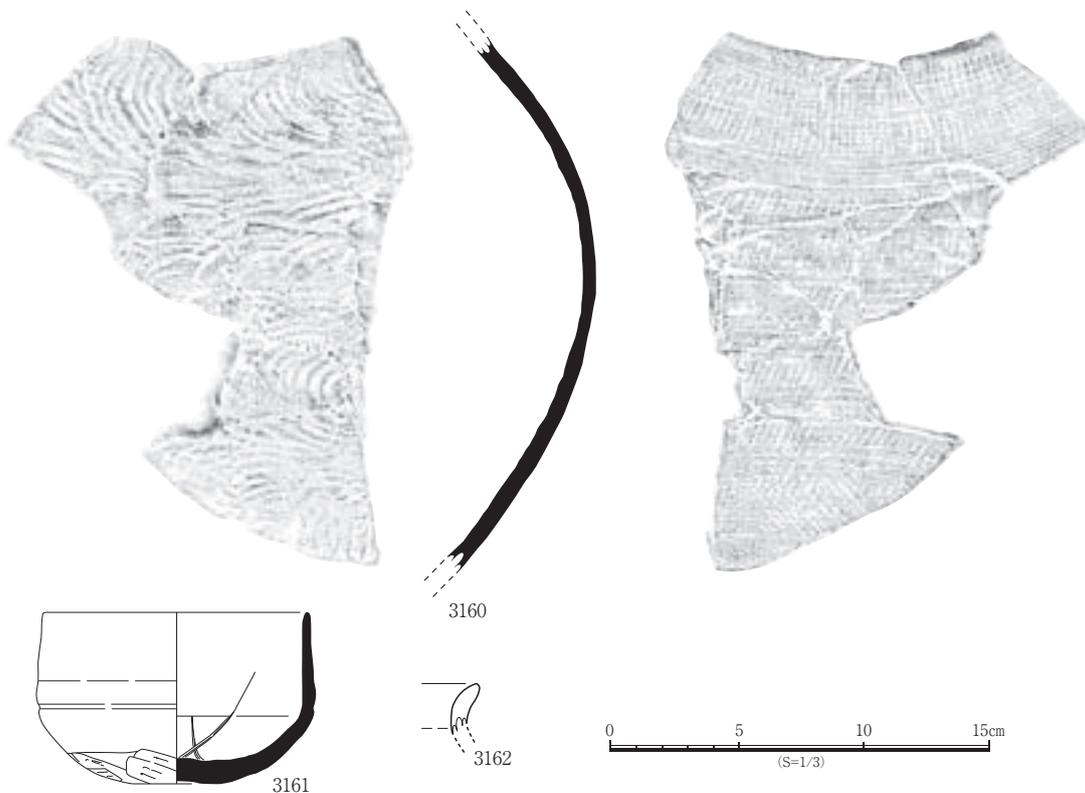


図3-28 SD-3019・3020, P-302出土遺物実測図

1. Ⅲ区 (3) 古代前半

③ ピット

出土遺物で古墳時代のものと判断したのは1個のみであった。

P-302

Ⅲ-1区南西部, 調査区壁際で検出した円形のピットで, 古代の方形の柱穴に掘り込まれていた。径30cm, 深さ24cmを測る。周辺に, 古墳時代の明確なピットが検出されていないことから古代のピットの可能性も考えられるが, 出土遺物が図示した土師器1点(3162)のみであったため古墳時代のものとした。埋土は地山の土粒を含む黒褐色(10YR2/2~2/3)シルトであった。

出土遺物

土師器(図3-28 3162)

甕で, 短く外反する口縁上半部が残存する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

(3) 古代前半

ここでは奈良時代と平安時代前半の建物跡を取り上げて報告する。他の遺構, 中でも溝跡の中にはこの時期に掘削されたとみられるものもあるが, 存続時期が比較的長く, 埋没時期が平安時代後半以降になっているものは次項に入れている。

建物跡は, 柱穴の掘方が方形のものと同円形がある。方形の掘方で構成された建物は2ヵ所にまとま

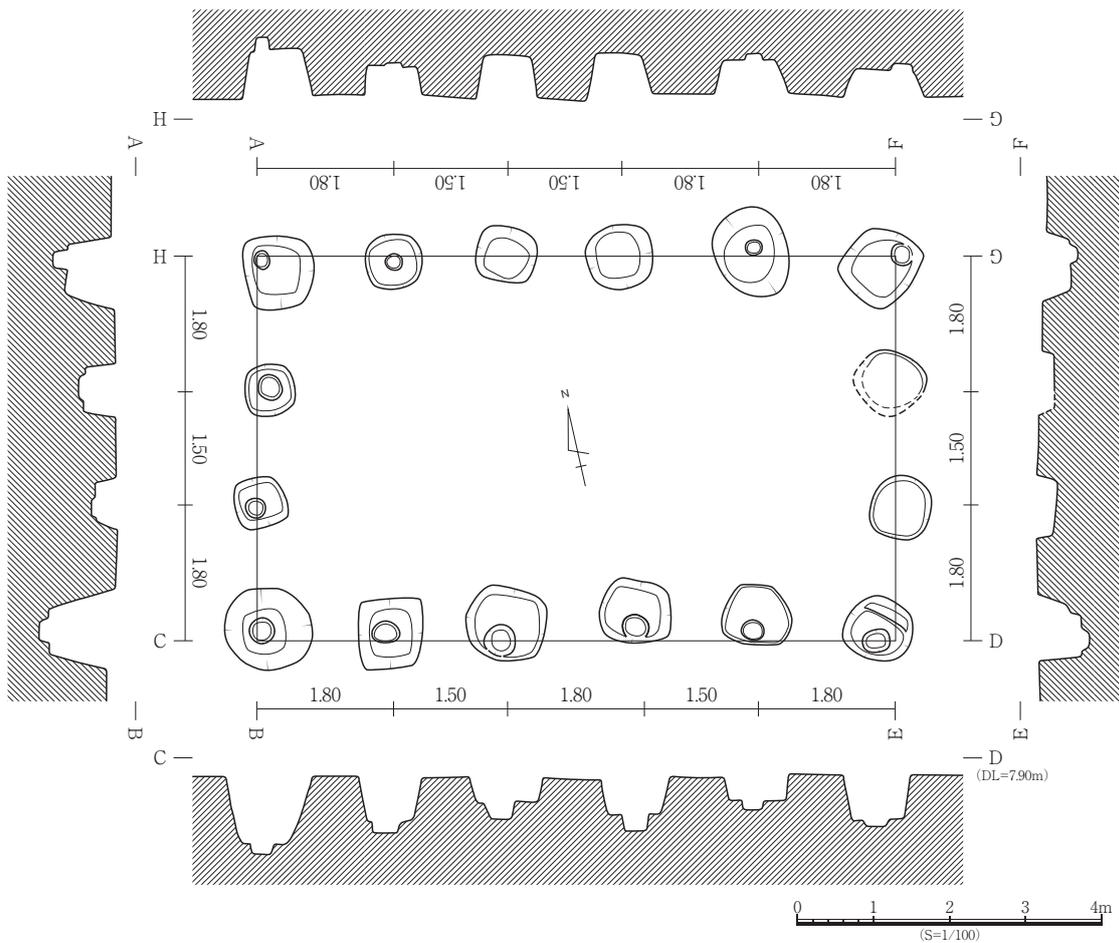


図3-29 SB-302

りが認められる。1ヵ所はⅢ-1区南西部の2棟、もう1ヵ所はⅢ-4区の東部の5棟である。この内、Ⅲ-1区で復元したSB-303の東にも方形の掘方の柱穴が3個あり、何らかの建物跡を構成していたのではないと思われるが、復元できなかつた。これら方形の掘方の柱穴で構成された建物跡は棟方向で3時期に分かれる。すなわち、SB-302, SB-304~306, SB-303・307・308である。

一方、円形の柱穴で構成された建物跡はⅢ-1区の南西部で1棟とⅢ-4区の中央部西寄りで2棟確認され、棟方向も地区で異なる。

#### ① 掘立柱建物跡

前述のとおり棟方向で時期差が看取されると共に、梁行の柱穴数にも違いがみられる。この内、SB-302のみ梁行3間で、面積も42.84㎡と最も広い。

#### SB-302 (図3-29)

Ⅲ-1区南西部で検出した桁行5間(8.40m)、梁行3間(5.10m)の東西棟建物跡で、棟方向はN-77°2′-Wを示す。柱間寸法は、桁行(東西)、梁行(南北)ともに1.50・1.80m(5~6尺)である。柱穴の平面形は、隅丸方形を呈するものもみられるが基本的に方形で、一辺67~106cmを測り、柱径は18~22cmとみられ、深さは20~102cmである。柱穴の埋土は黒褐色(10YR2/2~2/3)シルトを主体に地山のブロックを多量に含むもので、版築状の堆積を示す柱穴(北側柱北東隅の柱穴から2間目の柱穴)もみられた。出土遺物には土師器1点、須恵器6点、土師質土器5点がみられたが、図示できるものはなかつた。

#### SB-303 (図3-30)

Ⅲ-1区南西部、SB-302の南東約4mのところ検出した桁行3間(4.80m)以上、梁行2間(3.60m)の南北棟建物跡で、棟方向はN-3°49′-Eを示し、本来桁行は4間ではなかつたと思われる。柱間寸法は、桁行(南北)が1.35m(4.5尺)~1.80m(6尺)、梁行(東西)は1.80m(6尺)等間隔である。柱穴の平面形は、隅丸方形を呈するものもみられるが基本的に方形で、一辺72~86cmを測り、柱径は15cm前後とみられ、深さは12~74cmである。柱穴の埋土は黒褐色(10YR2/2~2/3)シルトを主体に地山のブロックを含むものであった。出土遺物には土師質土器4点がみられたが、図示できるものはなかつた。

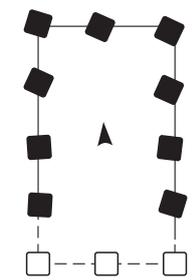


図3-30 SB-303

#### SB-304 (図3-31)

Ⅲ-4区東部で検出した桁行2間(4.05m)以上、梁行1間(3.90m)の南北棟建物跡で、棟方向はN-1°55′-Wを示す。建物は後世の多くの溝跡に切られており、溝の底面から検出した柱穴もあった。梁行の柱間寸法が3.90m(13尺)と長く、2間と考えた方が自然ではあるが、南北の妻柱列では柱穴を検出することができなかったことから1間とした。桁行(南北)の柱間寸法は1.80m(6尺)と2.25m(7.5尺)である。柱穴の平面形は、隅丸方形を呈するものもみられるが基本的に方形で、

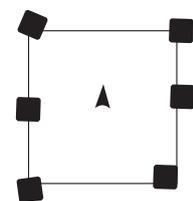


図3-31 SB-304

一辺70~90cmを測り、柱径は16~20cmとみられ、深さは35~63cmである。柱穴の埋土は黒色(10YR2/1)シルトから黒褐色(10YR2/2)シルトを主体に地山の土粒を含むもので、版築状をなす柱穴(東側柱真中の柱穴)もみられた。出土遺物には弥生土器3点、土師質土器11点がみられ、西側柱真中の柱穴から出土した弥生土器1点(3163)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-35 3163)

甕で、口縁部はくの字形をなす。外面にはタテ方向のハケ目が残り、胎土には細粒砂から細礫を多く含む。

SB-305(図3-32)

Ⅲ-4区東部で検出した桁行3間(6.65m)、梁行2間(4.65m)の東西棟建物跡で、棟方向はN-87°44'-Eを示す。建物の北西隅の柱穴以外は後世の溝跡に切られており、柱穴の一部しか遺存していなかったものもあった。柱間寸法は、桁行(東西)が2.10~2.40m(7~8尺)、梁行(南北)が2.25m(7.5尺)と2.40m(8.0尺)である。柱穴の平面形は基本的に方形で、一辺58~77cmを測り、柱径は20cm前後とみられ、深さは20~74cmである。柱穴の埋土は黒色(10YR2/1)シルトから黒褐色(10YR2/2)シルトを主体に地山の土粒を含むものであった。出土遺物は確認されなかった。

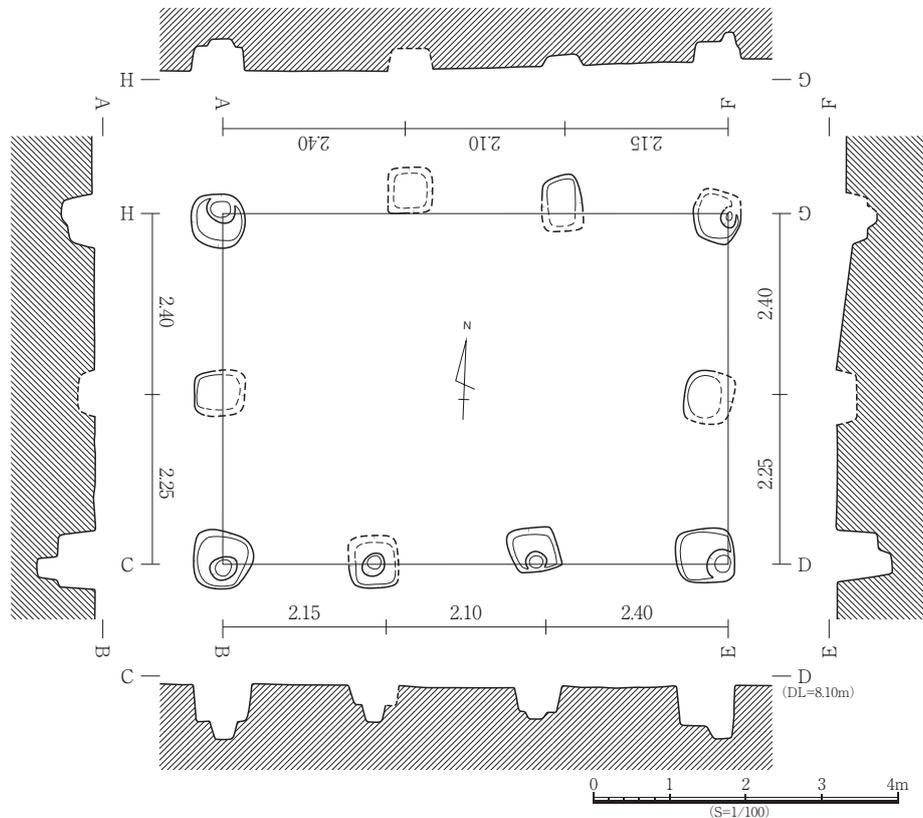


図3-32 SB-305

SB-306(図3-33)

Ⅲ-4区中央部で検出した桁行3間(5.55m)、梁行2間(3.90m)の南北棟建物跡で、棟方向はN-1°2'-Wを示す。建物南側の柱穴は後世の溝跡に切られており、柱穴の一部しか遺存していなかったもの(東側柱南隅の柱穴から1間目の柱穴など)もあった。柱間寸法は、桁行(南北)が1.80m(6尺)と1.95m(6.5尺)、梁行(東西)が1.80m(6尺)と2.10m(7尺)である。柱穴の平面形は基本的に方形で、一辺44~72cmを測り、柱径は12~15cmとみられ、石の礎板が確認された柱穴(北西の隅柱から南に1間目の柱穴)もあった。深さは23~52cmである。柱穴の埋土は黒色(10YR2/1)粘土質シルトを主体に地山の土粒を含む堆積が柱痕以外から認められた。出土遺物には弥生土器2点、須恵器2点がみられたが、図示できるものはなかった。

SB-307 (図3-34)

Ⅲ-4区中央部、北壁際で検出した桁行4間、梁行2間とみられる南北棟建物跡で、桁行3間分(4.65~4.80m)、梁行2間(3.90m)を確認した。棟方向はN-4°34'-Eを示す。建物西側柱を中心に後世の遺構に切られており、遺構底面から検出した柱穴も多々あった。柱間寸法は、桁行(南北)が1.35m(4.5尺)~1.80m(6尺)と区々で、梁行(東西)が1.95m(6.5尺)等間隔である。柱穴の平面形は不整円形を呈するものもみられるが、基本的に方形で、一辺67~89cmを測り、柱径は12~15cmとみられ、深さは19~77cmである。柱穴の埋土は黒色(10YR2/1)粘土質シルトから黒褐色(10YR2/2)シルトを主体に地山の土粒やブロックを含む堆積が下層を中心に認められた。出土遺物には弥生土器8点、土師器2点、須恵器2点、土師質土器3点がみられ、弥生土器1点(3164)と須恵器1点(3165)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-35 3164)

甕の口縁部とみられるもので、口縁端部には刻目が残り、胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

須恵器(図3-35 3165)

鉢の底部とみられるもので、底部は平らで、内湾気味に立ち上がる。内面には自然釉が付着し、部分的にハダ荒れがみられる。胎土には白色細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

SB-308 (図3-36)

Ⅲ-4区中央部、SB-307の約1.5m南隣で検出した桁行3間(4.80m)、梁行2間(3.60m)の南北棟建物で、棟方向はN-4°26'-Eを示す。建物南妻柱西側2個の柱穴以外は後世の遺構に切られており、丁度北西隅の柱穴は土坑墓(SK-356)の主体部に掘り込まれ確認できなかった。柱間寸法は、桁行(南北)が1.50m(5尺)・1.65m(5.5尺)、梁

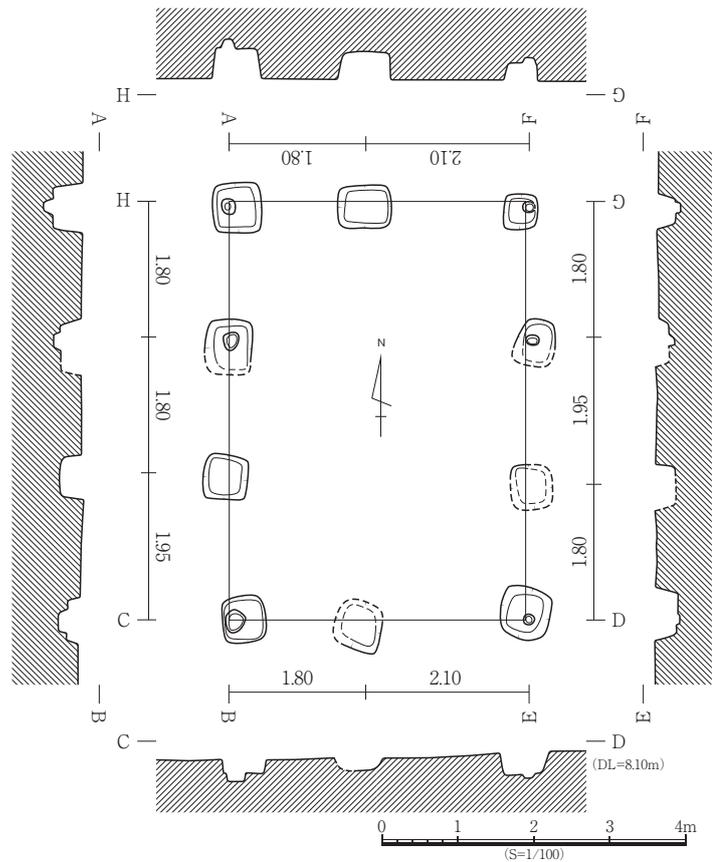


図3-33 SB-306

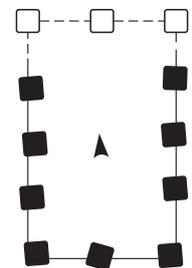


図3-34 SB-307

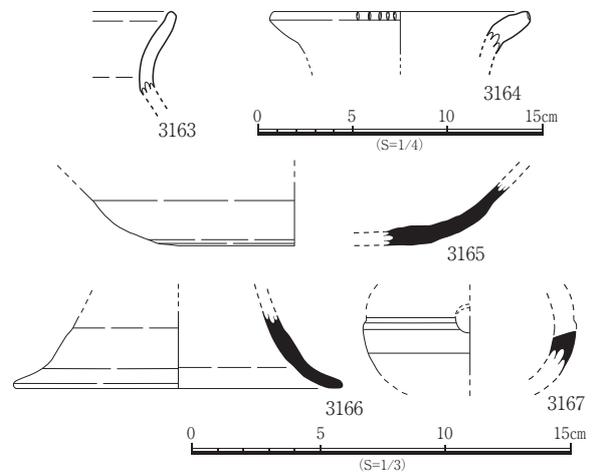


図3-35 SB-304・307・308出土遺物実測図

1. Ⅲ区 (3) 古代前半

行(東西)が1.50~2.10m(5~7尺)と区々である。柱穴の平面形は隅丸方形を呈するものもみられるが、基本的に方形で、一辺54~72cmを測り、柱径は15~18cmとみられ、深さは18~64cmである。柱穴の埋土は黒色(10YR2/1)粘土質シルトを主体に地山の土粒やブロックを含む堆積が下層を中心に認められた。出土遺物には弥生土器4点、土師器20点、須恵器5点、土師質土器4点がみられ、須恵器2点(3166・3167)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-35 3166・3167)

3166は高杯の脚台部で、裾部は下外方に大きく開き、端部は丸い。胎土には白色細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

3167は甕で、脚台付きの甕とみられる。胴部は球体をなし、中胴部には径12cmの円孔を穿つ。円孔部分には1条の凹線、胴部下半には回転ヘラ削り調整を施す。胎土には白色細粒砂から中粒砂を少し含む。

SB-309(図3-37)

Ⅲ-4区中央部西寄りで検出した桁行1間(3.90m)、梁行2間(3.70m)と正方形に近い南北棟建物で、西側と北側に濡縁状の半間の張り出し部が付くものとみられ、棟方向はN-2°27'-Eを示す。隅柱と南妻柱以外は、柱穴が確認できず、礎石で棟を支えていたと思われる。また、他の建物とは構造が異なっており、お堂などではなかったかと推察される。柱間寸法は、梁行(東西)が1.75m(5.8尺)と1.95m(6.5尺)で、約0.9m(3尺)張り出した部分は1.60~1.95m(5.3~6.5尺)と区々となり、南端の柱穴は南妻柱の延長線上、北西隅と北東隅の柱穴はそれぞれ対角隅柱の延長線上にある。柱穴の平面形は隅丸方形を呈するものもみられるが、基本的に方形で、一辺52~73cmを測り、柱径は18cm前後とみられ、深さは27~63cmである。張り出し部分は方形を呈するものもみられるが、基本的には円形で、径38~44cmを測り、柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトを主体に地山のブロックを多く含んでいた。出土遺物には弥生土器6点、土師器7点、須恵器1点、土師質土器23点などがみられたが、図示できたのは南西隅柱に遺存していた柱根1点(3168)のみであった。

出土遺物

木製品(図3-39 3168)

柱根で、芯の部分が残存する。樹種はヒノキ科である。

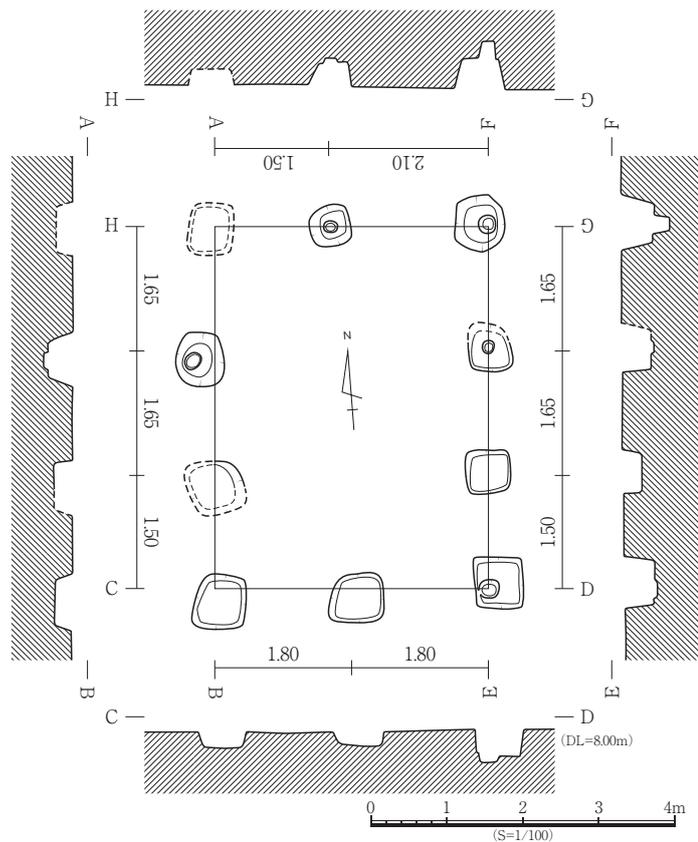


図3-36 SB-308

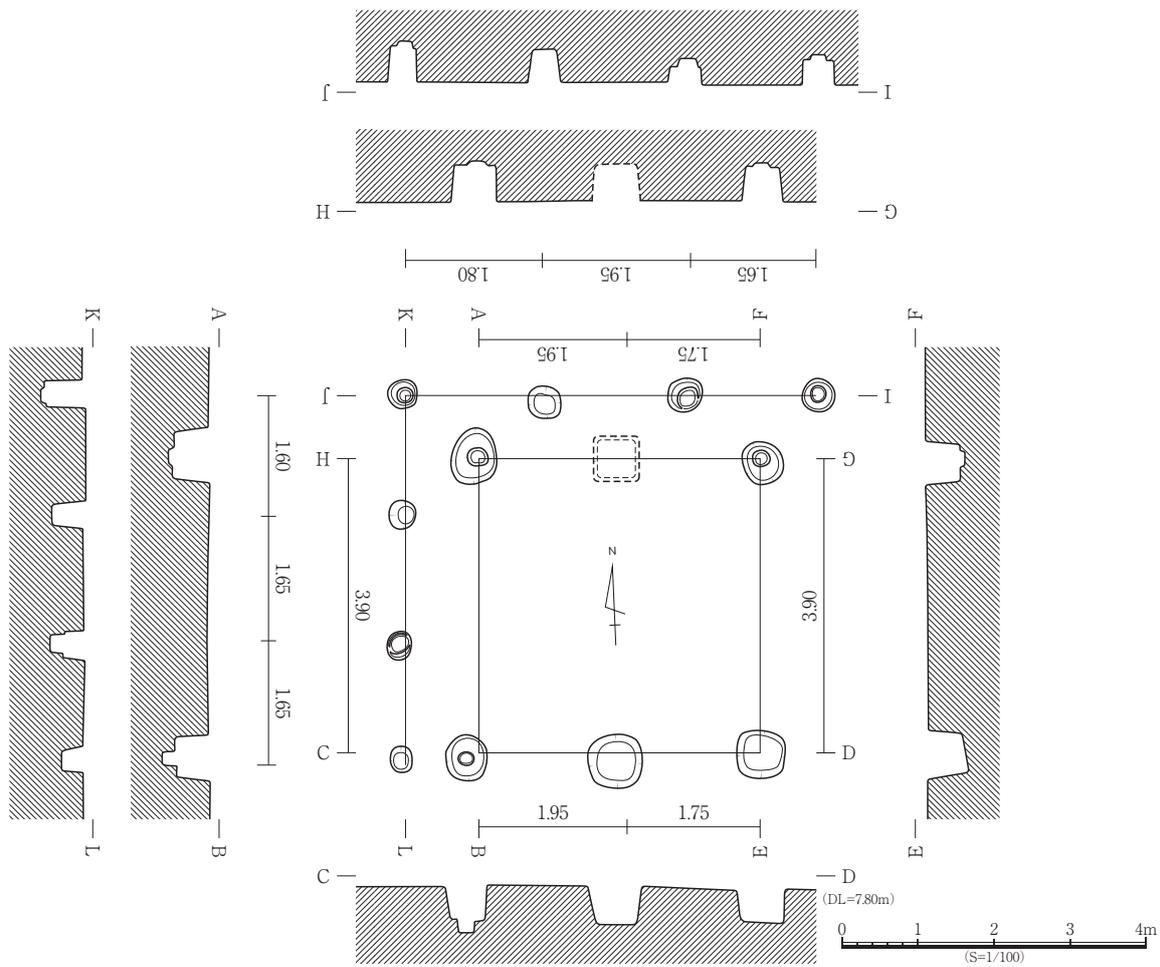


図3-37 SB-309

**SB-310** (図3-38)

Ⅲ-4区中央部西寄り、SB-309の約4m西側で検出した桁行3間(6.90m)、梁行1間(3.00m)の南北棟建物で、棟方向はN-1°9'Eを示す。建物は南側を中心に後世の遺構に切られていた。柱間寸法は、桁行(南北)が2.10m(7尺)~2.40m(8尺)と区々で、かつ梁行とも柱間寸法が長くなっている。柱穴の平面形は隅丸方

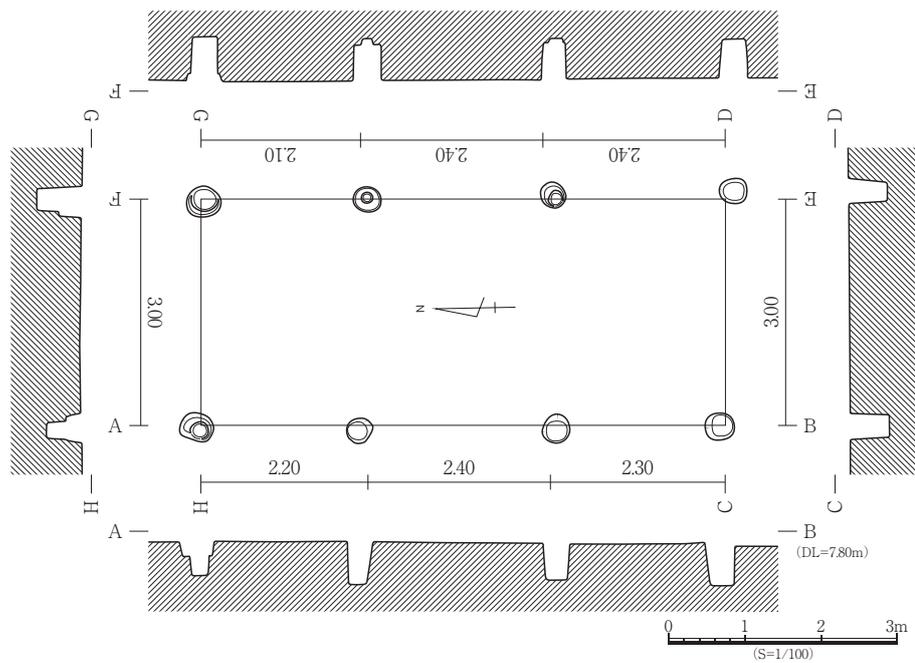


図3-38 SB-310

1. Ⅲ区 (4) 古代後半から中世

形を呈するものもみられるが、基本的に円形で、径31~46cmを測り、柱径は15cm前後とみられ、深さは48~59cmである。柱穴の埋土はSB-309と同じで黒褐色(10YR3/2)シルトを主体に地山のブロックを多く含んでいた。出土遺物には土師器1点、土師質土器10点などがみられたが、図示できたのは西側柱南から1間目の柱穴に遺存していた柱根1点(3169)のみであった。

出土遺物

木製品(図3-39 3169)

柱根で、芯の部分が残存する。樹種はヒノキである。

SB-311(図3-40)

Ⅲ-1区南西部、SB-302の東隣で検出した桁行3間(7.20m)、梁行2間(5.55m)の身舎に片廂付きの東西3間、南北3間の東西棟建物で、棟方向はN-77°18'-Wを示す。建物は南側を中心に後世の溝に掘り込まれ、南東隅柱から1間

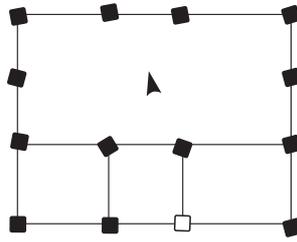


図3-40 SB-311

目の柱穴は確認できなかった。柱間寸法は、桁行(東西)が1.95m(6.5尺)~2.85m(9.5尺)と区々で、梁行(南北)が1.65m(5.5尺)と1.80(6尺)となり、廂の出は2.10m(7尺)である。柱穴の平面形は方形や隅丸方形を呈するものもみられるが、基本的に円形で、径25~42cmを測り、柱径は12cm前後とみられ、深さは8~38cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを多量に含む黒褐色(10YR2/2~2/3)シルトであった。出土遺物には土師器2点、須恵器2点、土師質土器4点がみられたが、図示できるものはなかった。

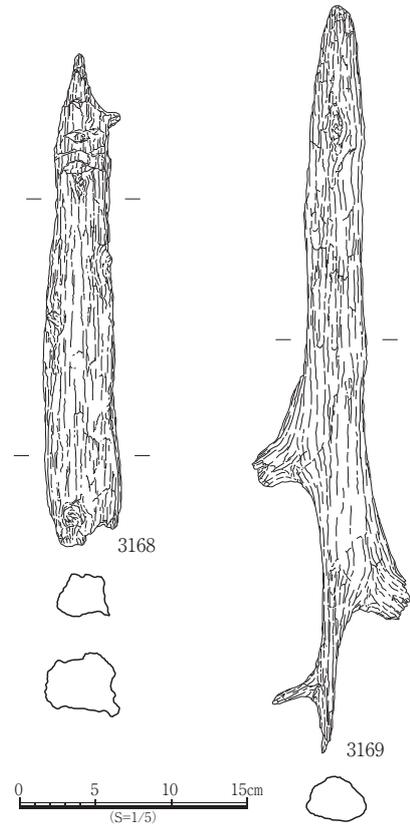


図3-39 SB-309・310出土遺物実測図

(4) 古代後半から中世

水路と考えられる溝跡を中心に検出した。これら溝跡はⅢ-1区の中央部から西部、さらにⅢ-2区、及びⅢ-4区にかけて顕著で、かつ存続期間が比較的長期に及ぶものがみられ、古代後半に掘削され、埋没時期が12世紀後半から13世紀初めのものもある。一方、屋敷の区画溝と考えられるものがⅢ-1区東部とⅢ-4区にみられ、それに伴う建物跡も確認された。Ⅲ-1区からは区画溝を伴わない建物跡が散発的に復元されている。

また、Ⅲ-4区からは土坑墓が検出されており、内1基は類例をみないもので、主体部の周りを2重の溝跡で区画していた。

① 掘立柱建物跡

SB-312(図3-41)

Ⅲ-1区東端部で検出した桁行2間(5.00m)、梁行2間(3.80m)の南北棟総柱建物跡で、東隣りにSD-3048・3049が並走する。棟方向はN-17°-Eを示し、柱間寸法は、桁行(南北)が2.50m等間隔、梁行(東西)が1.90m等間隔である。柱穴は径24~

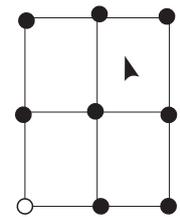


図3-41 SB-312

29cmの円形で、柱径は15cm前後と推測され、深さは12～32cmを測る。柱穴の埋土は地山(にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質シルト)の土粒を比較的多く含む暗褐色(10YR3/4)シルトであった。出土遺物には弥生土器1点、土師器2点、須恵器2点、土師質土器39点がみられ、東側柱真中の柱穴から出土した土師質土器2点(3170・3171)、身舎真中の柱穴から出土した土師質土器1点(3172)及び西側柱真中の柱穴から出土した土師質土器1点(3173)の計4点が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-61 3170～3173)

いずれも小皿で、成形技法は3170と3171がA技法、3172と3173がB技法となり、底部の切り離しはいずれも回転糸切りによる。調整は、回転ナデ調整が口縁部から内面にかけて行われ、体部外面は未調整となる。3172は回転ナデ調整の後に内底面にナデ調整を加える。3173の内底面にはロクロ目が残る。胎土は、3170と3171が極細粒砂から細粒砂を比較的多く含むのに対し、3172と3173は精良で、3172が極細粒砂から細粒砂、3173が細粒砂から中粒砂を若干含む程度である。

SB-313 (図3-42)

Ⅲ-1区東端部、SB-312の西隣りで検出した桁行3間(6.70m)、梁行2間(4.00m)の東西棟建物跡で、東から1間目の柱通りに間仕切柱が建つ。棟方向はSB-312と同じN-73°-Wを示し、柱間寸法は、桁行(東西)が2.20mと2.30m、梁行(南北)が2.00m等間隔である。柱穴は径20～27cmの円形で、柱径は15cm前後と推測され、深さは12～31cmを測る。柱穴の埋土は地山(にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質シルト)の土粒を比較的多く含む暗褐色

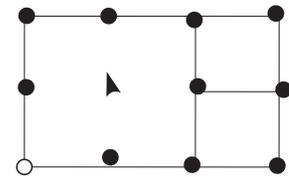


図3-42 SB-313

(10YR3/4)シルトであった。出土遺物には弥生土器3点、土師器7点、須恵器1点、土師質土器24点がみられたが、図示できる遺物はなかった。

SB-314 (図3-43)

Ⅲ-1区東端部、SB-313の西隣りで検出した桁行3間(5.00m)、梁行2間(4.40m)の南北棟建物跡で、SB-315・316と重なり、かつ南妻柱真中の柱穴がSB-316の東妻柱真中の柱穴と重複する関係で柱穴が径36～46cmと他の柱穴より大きくなっていた。また、西側柱の柱穴2個は検出できていない。棟方向はN-8°-Eを示し、柱間寸法は、桁行(南北)が1.60mと1.80m、梁行(東西)が2.10mと2.30mである。

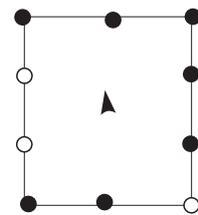


図3-43 SB-314

柱穴は基本的には径24～46cmの円形で、柱径は15cm前後と推測され、深さは7～29cmを測る。柱穴の埋土は地山(にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質シルト)の土粒を比較的多く含む暗褐色(10YR3/4)シルトであった。出土遺物には土師器1点、土師質土器2点がみられたが、東側柱北から1間目の柱穴から出土した土師質土器1点(3174)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-61 3174)

椀で、ベタ高台となる底部が残存する。成形技法はA技法となり、底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土には細粒砂から中粒砂を多く含む。

SB-315 (図3-44)

Ⅲ-1区東端部、SB-316と重なった形で検出した桁行2間(3.60m)、梁行2間(2.90m)の南北棟建物跡で、南妻柱の真中の柱穴は確認できなかった。棟方向はN-9°-Eを示し、柱間寸法は、桁行(南北)が

1. Ⅲ区 (4) 古代後半から中世

1.80m等間隔, 梁行(東西)が1.40mと1.50mである。柱穴は基本的に円形で径18~28cmを測り, 柱径は12cm前後と推測され, 深さは12~42cmを測る。柱穴の埋土は地山(にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質シルト)の土粒を比較的多く含む暗褐色(10YR3/4)シルトであった。出土遺物には弥生土器1点, 土師器1点, 須恵器1点, 土師質土器6点がみられたが, 図示できる遺物はなかった。

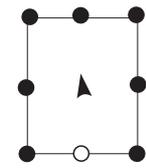


図3-44 SB-315

**SB-316** (図3-45)

Ⅲ-1区東端部, SB-315と重なった形で検出した桁行4間(7.30m), 梁行2間(4.10m)の東西棟建物跡であるが, 南東隅の柱穴を含め南側柱東から2間分の柱穴が確認できなかった。棟方向はN-81°-Wを示し, 柱間寸法は, 桁行(東西)が1.30~2.20mと区々で, 梁行(南北)が2.00mと2.10mである。柱穴は基本的に円形で径25~46cmを測り, 柱径は15cm前後と推測され, 深さは15~36cmを測る。柱穴の埋土は地山(にぶい黄橙色(10YR6/3)

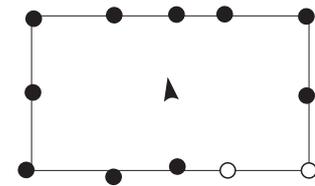


図3-45 SB-316

砂質シルト)の土粒を比較的多く含む暗褐色(10YR3/4)シルトであった。出土遺物には土師器3点, 土師質土器16点, 瓦器1点, 瓦質土器2点がみられたが, 北東隅柱から出土した土師質土器1点(3175)と北側柱東から1間目の柱穴から出土した瓦器1点(3176)の計2点が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-61 3175)

杯で, 口縁部は斜め上方を向き, 端部は丸い。成形技法はA技法である。胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

瓦器(図3-61 3176)

小皿で, 口縁部は丸い底部から緩やかに上がり, 端部は丸い。底部外面には指押えの痕が僅かに残る。胎土には粗粒砂から細礫を少し含む。

**SB-317** (図3-46)

Ⅲ-1区北西端部で検出した桁行3間(4.90m)以上, 梁行2間(4.30m)とみられる南北棟建物跡で, SD-3067に掘り込まれていた。また, 西側柱南から2間目の柱穴と南東隅の柱穴以外の東側柱の柱穴は未検出で, 建物は北の調査区外に続くとみられる。棟方向はN-14°-Eを示し, 柱間寸法は, 桁行(南北)が1.50~1.90mで, 梁行(南北)が2.15m等間隔である。柱穴は基本的に円形で径28~38cmを測り, 柱径は15cm前後と推測され, 深さは13~38cmを測る。柱穴の埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトであった。遺物は出土しなかった。

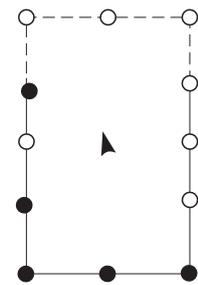


図3-46 SB-317

**SB-318** (図3-47)

Ⅲ-1区北西部, SB-317の東側で検出した桁行2間(3.60m), 梁行2間(3.40m)とみられる南北棟総柱建物跡で, 東側柱列は攪乱のため検出していない。また, 南妻柱西から2間目の柱穴も検出できなかった。棟方向はN-14°-Eを示し, 柱間寸法は, 桁行(南北)が1.80m等間隔で, 梁行(東西)が1.40~2.00mである。柱穴は基本的に円形で径21~35cmを測り, 柱径は15cm前後と推測され, 深さは5~22cmを測る。柱穴の埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には土師質土器2点がみられたが, 図示できるものはなかった。

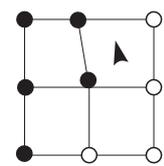


図3-47 SB-318

**SB-319** (図3-48)

Ⅲ-1区北西部, SB-318の南東側で検出した桁行2間(4.40m), 梁行2間(3.30m)の東西棟総柱建物跡である。棟方向はN-84°-Wを示し, 柱間寸法は, 桁行(東西)が2.20m等間隔で, 梁行(南北)が1.50mと1.80mである。柱穴は基本的に円形で径16~40cmを測り, 柱径は10~15cmと推測され, 深さは7~48cmを測る。柱穴の埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には土師器1点, 土師質土器37点, 瓦質土器1点がみられ, 図示できたのは北西隅柱から出土した土師質土器1点(3177)のみであった。

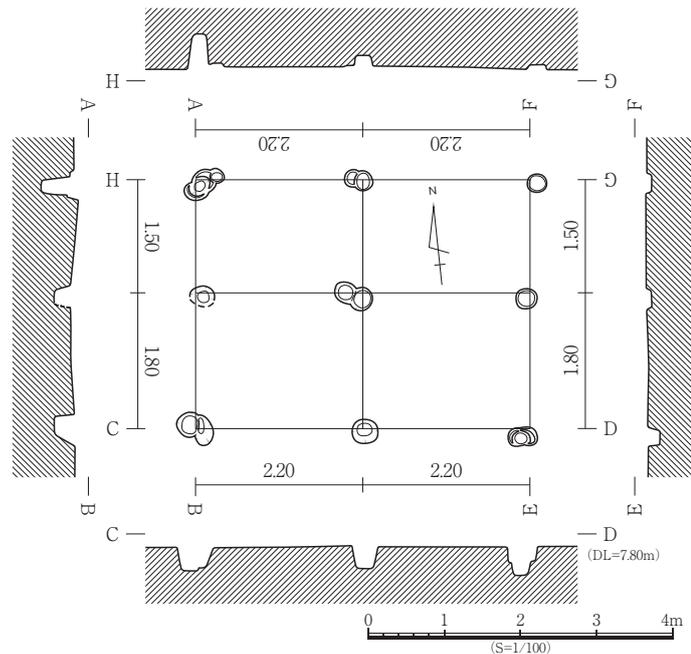


図3-48 SB-319

**出土遺物**

土師質土器(図3-61 3177)

杯の口縁部から体部の細片で, 上外方を向き, 端部は丸い。成形技法はA技法とみられる。胎土は精良で, 細粒砂から中粒砂を若干含む。

**SB-320** (図3-49)

Ⅲ-1区西部, SB-321と重複した形で検出した桁行4間(6.90m), 梁行2間(4.50m)の身舎に西廂が付く南北4間, 東西3間の南北棟建物跡である。棟方向はN-17°-Eを示し, 柱間寸法は, 桁行(南北)が1.50mと1.80mで, 梁行(東西)が2.00・2.50mで, 廂の出は2.50mを測る。柱穴は基本的に円形で径22~39cmを測り, 柱径は10cm前後とみられ, 深さは16~37cmを測る。柱穴の埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には土師質土器128点, 瓦器5点, 瓦質土器3点がみられ, 東側柱北から1間目の柱穴から出土した土師質土器1点(3178)と瓦器1点(3180)及び廂西側柱北から1間目の柱穴から出土した瓦器1点(3179)が図示できた。

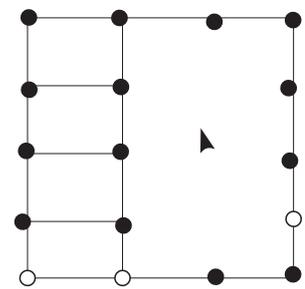


図3-49 SB-320

**出土遺物**

土師質土器(図3-61 3178)

杯で, 口縁部は外傾し, 端部は丸い。成形技法はA技法で, 胎土には細粒砂から中粒砂を若干含む。

瓦器(図3-61 3179・3180)

3179は椀で, 口縁部は内湾気味に上がり, 端部は細い。体部外面には指押えの痕が残り, 口縁部から内面にかけてヨコナデ調整を施す。ヘラ磨きの痕跡は確認できない。胎土には細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

3180は小皿で, 底部はやや丸味があり, 口縁部は短く外傾し, 端部は丸い。底部外面には指押え, 内面にはナデ調整の後に細かい平行のヘラ磨きを施す。胎土には細粒砂から中粒砂を少し含む。

**SB-321** (図3-50)

Ⅲ-1区西部, SB-320と重複した形で検出した桁行3間(6.70m), 梁行2間(4.50m)の南北棟建物跡で, 南から1間目の柱通りに間仕切柱が建つ。棟方向はN-9°-Eを示し, 柱間寸法は, 桁行(南北)が2.20mと2.30mで, 梁行(東西)も2.20mと2.30mである。柱穴は基本的に円形で径20~32cmを測り, 柱径は10cm前後とみられ, 深さは8~33cmを測る。柱穴の埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には土師質土器22点, 瓦器1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

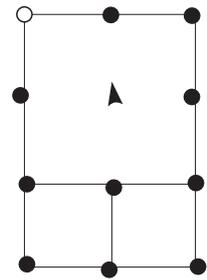


図3-50 SB-321

**SB-322** (図3-51)

Ⅲ-1区南西部で検出した桁行2間(3.80m), 梁行2間(3.80m)と真四角の建物で, 南側の真中の柱穴が西に振っている。棟方向は東西棟とした場合, N-85°-Wを示し, 柱間寸法は, 桁行(東西)が1.50~2.30mで, 梁行(南北)が1.90m等間隔である。柱穴は基本的に円形で径20~28cmを測り, 柱径は10cm前後とみられ, 深さは7~26cmを測る。柱穴の埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には須恵器1点, 土師質土器5点がみられたが, 図示できるものはなかった。

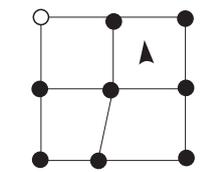


図3-51 SB-322

**SB-323** (図3-52)

Ⅲ-3区で検出した桁行2間(4.00~4.10m), 梁行1間(1.80m)の東西棟建物で, 北側がやや広がっている。棟方向は, N-82°-Wを示し, 柱間寸法は, 桁行(東西)が2.00mと2.05mで, 梁行(南北)が1.80mである。柱穴はほぼ円形で径20~28cmを測り, 柱径は10cm前後と推測され, 深さは9~24cmを測る。柱穴の埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物は皆無であった。

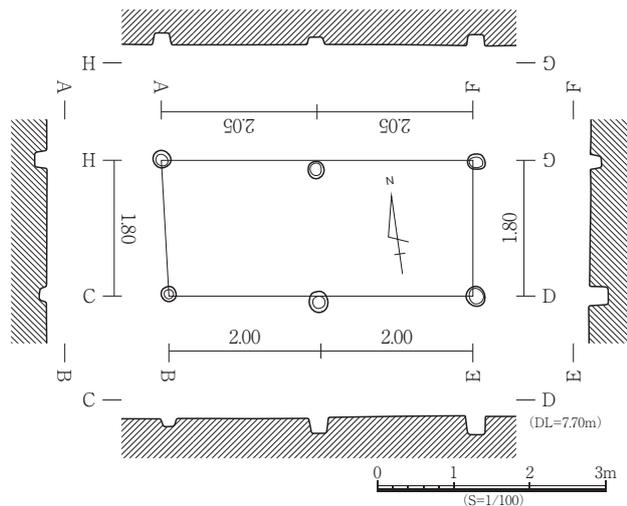


図3-52 SB-323

**SB-324** (図3-53)

Ⅲ-4区ほぼ中央部で検出した桁行3間(5.65m), 梁行2間(3.60m)の東西棟建物で, 東から1間目の柱通りに間仕切柱が建つ。棟方向は, N-77°-Wを示し, 柱間寸法は, 桁行(東西)が1.80~1.95mで, 梁行(南北)が1.80m等間隔である。柱穴はほぼ円形で径19~28cmを測り, 柱径は10cm前後と推測され, 深さは10~35cmを測る。柱穴の埋土は黒褐色(10YR3/1~3/2)シルトを主体に地山(明黄褐色(10YR6/8)シルト)の土粒を含むものであった。出土遺物には土師質土器8点がみられたが, 図示できるものはなかった。

**SB-325** (図3-54)

Ⅲ-4区ほぼ中央部, SB-324の西側で検出した桁行4間(5.90m), 梁行2間(3.90m)の東西棟建物で, 東と西から1間目の柱通りに間仕切柱が建つ。棟方向は, N-76°-Wを示し, 柱間寸法は, 桁行(東西)が1.20~1.60mと区々で, 梁行(南北)が1.90mと2.00mである。柱穴はほぼ円形で径16~32cmを測り, 柱径は10cm前後と推測され, 深さは13~45cmを測る。柱穴の埋土は黒褐色(10YR3/1~3/2)シルトを主体に地山(明黄褐色(10YR6/8)シルト)の土粒を含むものであった。出土遺物には須恵器2点, 土師質土器

26点, 瓦器1点, 瓦質土器2点, 同安窯系の青磁1点がみられ, 北東隅柱の柱穴から出土した土師質土器2点(3182・3183)と南西隅柱の柱穴から出土した土師質土器1点(3181), 瓦器1点(3185)及び西妻柱真中の柱穴から出土した土師質土器1点(3184)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-61 3181~3184)

3181と3182はほぼ同形態の杯で, 底部は平らで, 口縁部は上外方に立ち上がる。成形技法はいずれもA技法で, 底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土には細粒砂から中粒砂を少し含む。

3183と3184は小皿で, 3183は, 口縁部が平らな底部から短く外反し, 端部は丸い。成形技法はA技法で, 底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は精良で, 赤色極細粒砂から細礫を若干含む。3184は, 底部をつまみ上げて, 小さな口縁部を作り出す。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は精良で, 細粒砂を若干含む。

瓦器(図3-61 3185)

椀で, 口縁部は内湾気味に上がり, 端部は丸い。体部外面には指押え, 口縁部にはヨコナデ調整, 内面にはナデ調整の後にヘラ磨きを施す。胎土には, 細粒砂から細礫を比較的多く含む。

SB-326 (図3-55)

Ⅲ-4区ほぼ中央部, 南壁際で検出した桁行5間(9.95m), 梁行1間(2.00m)以上の東西棟建物で, 南半分は調査区外にあるとみられる。棟方向は, N-80°-Wを示し, 柱間寸法は, 桁行(東西)が1.85~2.40mで, 梁行(南北)が2.00mである。柱穴はほぼ円形で径24~32cmを測り, 柱径は10cm前後とみられ, 深さは26~50cmを測る。柱穴の埋土は黒褐色(10YR3/1~3/2)シルトを主体に地山(明黄褐色(10YR6/8)シルト)の土粒を含むものであった。出土遺物には土師器1点, 土師質土器6点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SB-327 (図3-56)

Ⅲ-4区ほぼ中央部, 南壁際でSB-326と重複した形で検出した桁行3間(5.70m), 梁行1間(0.95m)以上の東西棟建物で, 大半は調査区外にあるとみられ, 確認したのは北側柱列のみである。また, SD-3054を切って掘り込んでいた。棟方向は, N-81°-Wを示し, 柱間寸法は, 桁行(東西)が1.90m等間隔

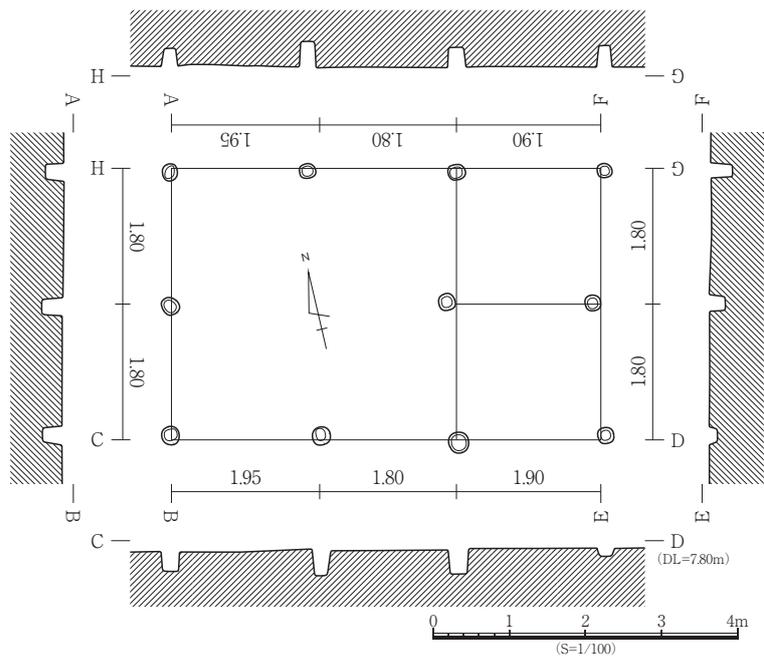


図3-53 SB-324

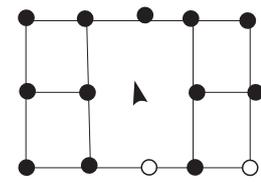


図3-54 SB-325

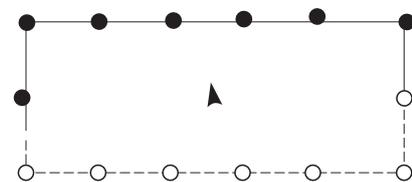


図3-55 SB-326

で、梁行(南北)が0.95m以上である。柱穴は方形で一辺32~41cmを測り、柱径は10cm前後とみられ、深さは25~48cmを測る。柱穴の埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトを主体に地山(明黄褐色(10YR6/8)シルト)のブロックを多量に含むものであった。出土遺物には土師質土器4点がみられたが、図示できるものはなかった。

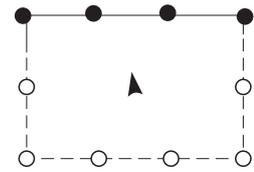


図3-56 SB-327

**SB-328** (図3-57)

Ⅲ-4区北西部、北壁際で検出した桁行4間(7.60m)、梁行1間(2.50m)以上の東西棟建物で、約半分は調査区外にあるとみられ、確認したのは南側柱列と東妻柱列の南側である。また、SD-3058に掘り込まれていた。棟方向は、N-72°-Wを示し、柱間寸法は、桁行(東西)が1.70~2.00mで、梁行(南北)が2.50mである。柱穴は円形で径21~30cmを測り、柱径は10cm前後とみられ、深さは12~48cmを測る。柱穴の埋土は黒褐色

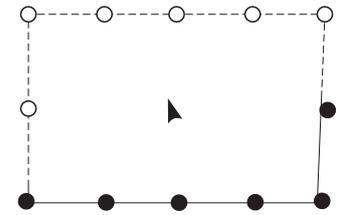


図3-57 SB-328

(10YR3/1~3/2)シルトを主体に地山(黄褐色(2.5Y5/4)シルト混じりの極細粒~細粒砂)の土粒を含むものであった。出土遺物には土師質土器1点、瓦質土器2点がみられたが、図示できるものはなかった。

**SB-329** (図3-58)

Ⅲ-4区西部、SB-328の南側で検出した桁行5間(9.30m)、梁行2間(3.90m)の南北棟総柱建物で、SD-3054・3058~3060を掘り込んでいた。棟方向は、N-13°-Eを示し、柱間寸法は、桁行(南北)が1.80~2.00mで、梁行(東西)が1.90mと2.00mである。柱穴はほぼ円形で径20~30cmを測り、柱径は10cm前後とみられ、深さは12~50cmを測る。柱穴の埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトを主体に地山(黄褐色(2.5Y5/4)シルト混じりの極細粒~細粒砂)のブロックを多量に含むものであった。出土遺物には土師質土器19点、瓦器2点がみられ、西側柱北から2間目の柱穴から出土した土師質土器1点(3186)が図示できた。

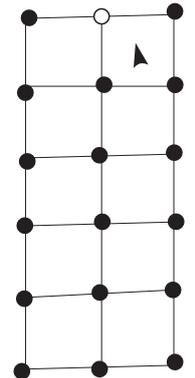


図3-58 SB-329

**出土遺物**

**土師質土器**(図3-61 3186)

小皿で、口縁部は平らな底部から短く外傾し、端部は細い。成形技法はA技法とみられ、底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は精良で、細粒砂から中粒砂を若干含む。

**SB-330** (図3-59)

Ⅲ-4区西部、SB-329と重複する形で検出した桁行3間(7.40m)、梁行2間(3.80m)の東西棟建物で、西から1間目の柱通りに間仕切柱が建つ。棟方向は、N-77°-Wを示し、柱間寸法は、桁行(東西)が1.80~3.30mで、梁行(南北)が1.75~2.05mと区々である。柱穴はほぼ円形で径20~41cmを測り、柱径は10cm前後とみられ、深さは13~45cmを測る。柱穴の埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトを主体に地山(黄褐色(2.5Y5/4)シルト混じりの極細粒~細粒砂)のブロックを多量に含むものであった。出土遺物には土師質土器15点、瓦器1点がみられ、間仕切柱の柱穴から出土した土師質土器1点(3187)が図示できた。

**出土遺物**

**土師質土器**(図3-61 3187)

杯で、口縁部は平らな底部から上外方にたち上がり、端部は丸い。成形技法はB技法で、未調整の体部外面にはロクロ目が残る。底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は精良で、細粒砂から中粒

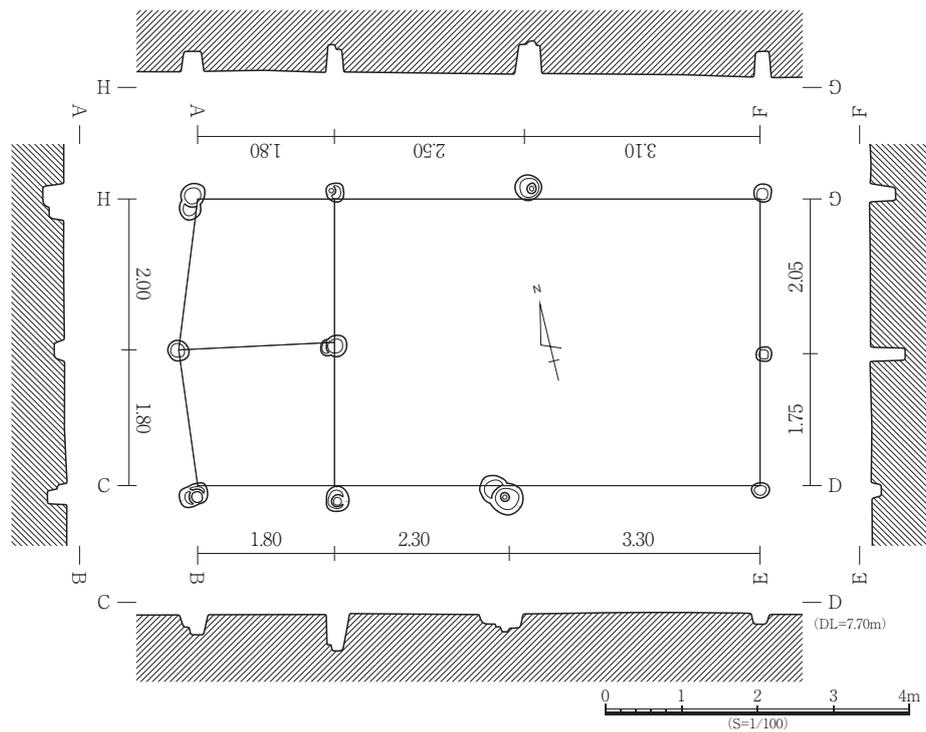


図3-59 SB-330

砂を若干含む。

**SB-331** (図3-60)

Ⅲ-4区西部, SB-329・330と重複する形で検出した桁行2間(2.80m), 梁行1間(1.90m)の南北棟建物で, 東側柱真中の柱穴は確認できなかった。棟方向は, N-14°-Eを示し, 柱間寸法は, 桁行(南北)が1.40m等間隔で, 梁行(東西)が1.90mである。柱穴はやや大型の円形で径28~44cmを測り, 柱径は10cm前後とみられ, 深さは14~46cmを測る。柱穴の埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトを主体に地山(黄褐色(2.5Y5/4)シルト混じりの極細粒~細粒砂)のブロックを多量に含むものであった。出土遺物には土師器1点, 須恵器1点, 土師質土器21点, 瓦器1点がみられ, 南西隅柱の柱穴から出土した土師質土器1点(3188)が図示できた。

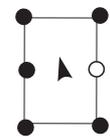


図3-60 SB-331

出土遺物

土師質土器(図3-61 3188)

杯で, 成形技法はA技法とみられ, 底部の切り離しは回転糸切りによる。底部外面端部には切り離しの際のものとみられる径7mm, 厚さ3mmの粘土が付着する。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

② 塀・柵列跡

全部で4列確認した内で, SA-302~304は重複しており, 建て替えによるものとみられるが, 関連性を窺わず遺構が周囲にはなく, 性格が判然としない。

**SA-301** (図3-62)

Ⅲ-4区西部, SB-329~331と重複して検出した南北塀(N-8°-E)である。方向的には, SB-326・327とほぼ同じである。4間分(7.60m)を検出し, 柱間寸法は1.60~2.30mである。柱穴はほぼ円形で, 径は

1. Ⅲ区 (4) 古代後半から中世

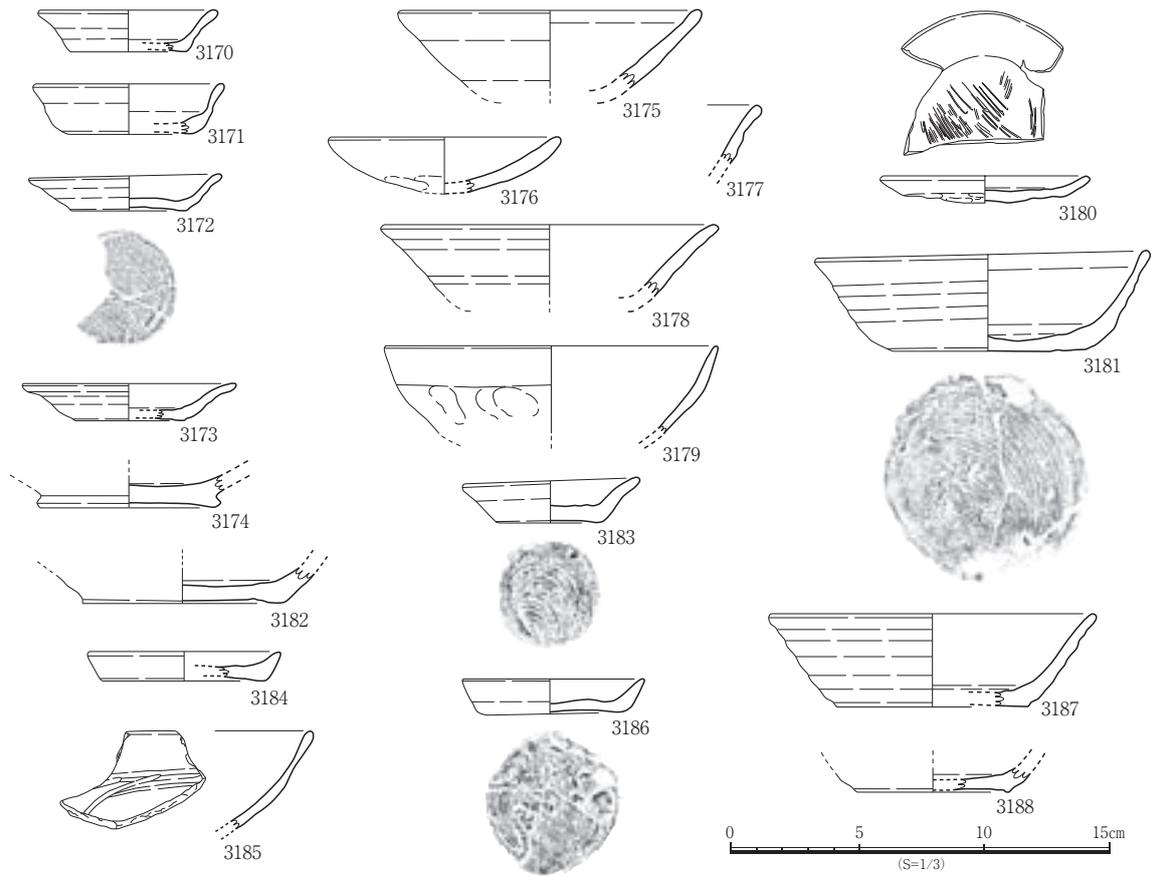


図3-61 SB-312・314・316・319・320・325・329～331出土遺物実測図

19～34cmを測り、柱径は10cm前後とみられ、深さは12～43cmを測る。柱穴の埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトを主体に地山(黄褐色(2.5Y5/4)シルト混じりの極細粒～細粒砂)のブロックを多量に含むものであった。出土遺物には土師質土器46点、瓦器2点がみられ、北端の柱穴から出土した土師質土器1点(3189)と瓦器1点(3190)の2点が図示できた。



図3-62 SA-301

出土遺物

土師質土器(図3-63 3189)

杯で、口縁部は外傾してたち上がり、端部は丸い。成形技法はB技法で、外面にはロクロ目が残る。胎土は精良で、極細粒砂から細粒砂を若干含む。

瓦器(図3-63 3190)

器高指数24と扁平な碗で、外底面には極めて小さな高台を貼付し、体部と口縁部は平らな底部から内湾気味に上がり、端部は細い。在地産とみられ、焼成は不良で、色調はにぶい橙色ないし橙色を呈する。胎土には中粒砂から細礫を比較的多く含む。

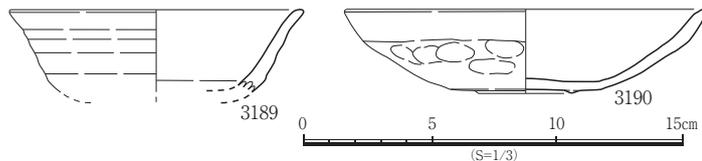


図3-63 SA-301出土遺物実測図

**SA-302** (図3-64)

Ⅲ-1区東部, SA-304に切られた形で検出した東西塀(N-81°-W)である。SA-303とは切り合っていないため前後関係は不明であるが, SA-304が建て替えとみられる。5間分(3.45m)を検出し, 柱間寸法は0.65mと0.70mである。柱穴はほぼ円形で, 径は17~32cmを測り, 柱径は10cm前後とみられ, 深さは8~12cmを測る。柱穴の埋土は極細粒砂から細粒中礫を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には須恵器1点がみられたが, 図示できなかった。

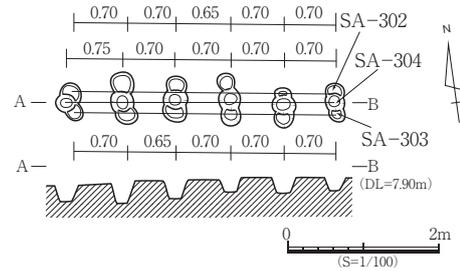


図3-64 SA-302~304

**SA-303** (図3-64)

Ⅲ-1区東部, SA-304に切られた形で検出した東西塀(N-81°-W)である。SA-302とは切り合っていないため前後関係は不明であるが, SA-304が建て替えとみられる。5間分(3.45m)を検出し, 柱間寸法は0.65mと0.70mである。柱穴はほぼ円形で, 径は20~32cmを測り, 柱径は10cm前後とみられ, 深さは7~15cmを測る。柱穴の埋土は極細粒砂から細粒中礫を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には須恵器1点がみられたが, 図示できなかった。

**SA-304** (図3-64)

Ⅲ-1区東部, SA-302とSA-303を切った形で検出した東西塀(N-81°-W)で, いずれかの建て替えと考えられる。5間分(3.55m)を検出し, 柱間寸法は0.70mと0.75mでSA-302・303より10cm長く, 柱穴もやや大きい径25~32cmのほぼ円形で, 柱径は10cm前後とみられ, 深さは15~26cmを測る。柱穴の埋土は極細粒砂から細粒中礫を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器1点と須恵器1点がみられたが, 図示できなかった。

③ 土坑

54基の土坑を確認した。土坑墓と考えられるものもみられるが, 全般に散在しており, 性格が不明なものが大半である。

**SK-310** (図3-65)

Ⅲ-1区北西部, SD-3024を切った形で検出したほぼ円形の土坑である。長径1.05m, 短径1.03m, 深さ10cmを測る。断面形は舟底形を呈する。埋土は黒褐色(10YR3/1)シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器2点がみられ, 内1点(3191)が図示できた。

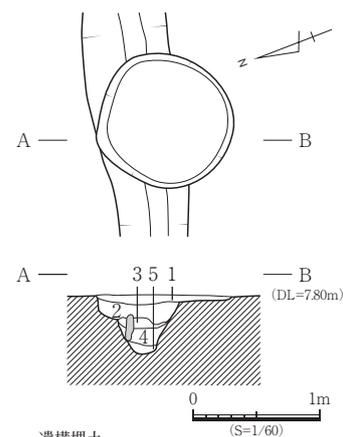
出土遺物

土師質土器(図3-80 3191)

杯で, 口縁部は外傾し, 端部は丸い。成形技法はA技法とみられる。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

**SK-311** (図3-66)

Ⅲ-1区北西部, SD-3003を切った形で検出したほぼ円形の土坑である。長径1.00m, 短径0.88m, 深さ15cmを測る。断面形は舟底形を呈する。埋土は黒褐色(10YR3/2)シルト単一層であった。出土遺物には土師器1点, 須恵器1点, 土師質土器13点, 瓦器1点, 鉄釘1点がみら



- 遺構埋土
1. 黒褐色(10YR3/1)シルト(SK-310)
  2. 地山の土粒を僅かに含む黒褐色(10YR3/2)砂質シルト(SD-3024)
  3. 地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/3)砂質シルト(SD-3024)
  4. オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト混じり砂
  5. 地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR2/3)シルト(SD-3024)

図3-65 SK-310,SD-3024

れ、土師質土器1点(3192)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-80 3192)

杯で、口縁部は平らな底部から上外方にたち上がり、端部は丸い。成形技法はA技法で、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

SK-312(図3-67)

Ⅲ-1区北西部, SK-311の南側, SD-3022に切られた形で検出した方形の土坑である。長辺約1.70m, 短辺1.01m, 深さ14cmを測り, 長軸方向はN-18°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(10YR2/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

SK-313(図3-68)

Ⅲ-1区西端部, SD-3067に切られた形で検出した方形の土坑である。長辺1.38m, 短辺0.93m, 深さ15cmを測り, 長軸方向はN-60°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(10YR2/3)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

SK-314(図3-69)

Ⅲ-1区西部, SK-346の南側で検出したほぼ方形の土坑で、北壁と西壁にピットが掘り込まれる。長辺1.09m, 短辺0.68m, 深さ11cmを測り, 長軸方向はN-5°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(10YR2/2)シルトのブロックと地山(にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト混じりの極細粒砂)の土粒を多く含む黒褐色(10YR2/3)シルトであった。出土遺物には土師質土器25点がみられたが、図示できるものはなかった。

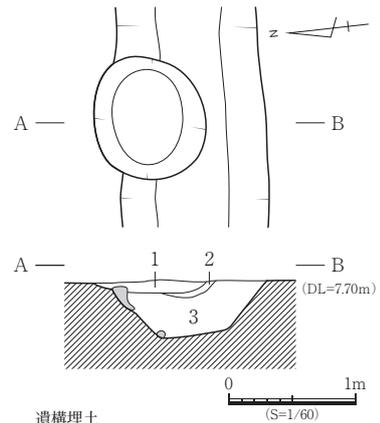
SK-315

Ⅲ-1区南西部, SD-3053に切られた形で検出した方形とみられる土坑である。長辺約5.30m, 短辺0.84m以上, 深さ14cmを測り, 長軸方向はN-80°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト混じりの極細粒砂)の土粒を少し含む黒褐色(10YR2/25)シルトであった。出土遺物には弥生土器1点, 土師器1点, 土師質土器50点, 瓦器1点, 瓦質土器2点がみられたが、図示できたのは土師質土器1点(3193)であった。

出土遺物

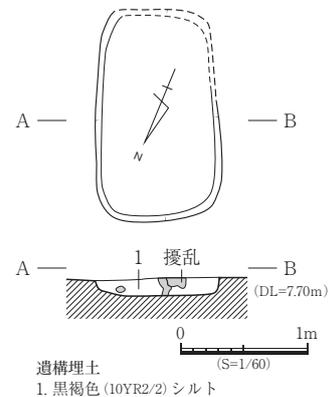
土師質土器(図3-80 3193)

杯で、成形技法はA技法とみられ、底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は精良で、細粒砂から中粒砂を少し含む。



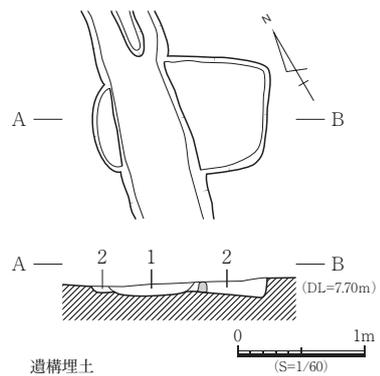
遺構埋土  
1. 黒褐色(10YR3/2)シルト(SK-311)  
2. 黒色(10YR2/1)シルト(SD-3003)  
3. 黒褐色(10YR2/25)シルト(SD-3003)

図3-66 SK-311,SD-3003



遺構埋土  
1. 黒褐色(10YR2/2)シルト

図3-67 SK-312



遺構埋土  
1. 黒褐色(10YR3/2)シルト(SD-3067)  
2. 黒褐色(10YR2/3)シルト(SK-313)

図3-68 SK-313,SD-3067

**SK-316** (図3-70)

Ⅲ-1区南西部, SK-315の東側, SD-3069に切られた形で検出した円形の土坑である。長径0.88m, 短径0.87m, 深さ6cmを測る。断面形は概ね逆台形を呈する。埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト混じりの極細粒砂)の土粒を多く含む黒褐色(7.5YR2/2)シルトであった。出土遺物には土師質土器1点, 瓦質土器1点がみられたが, 図示できなかった。

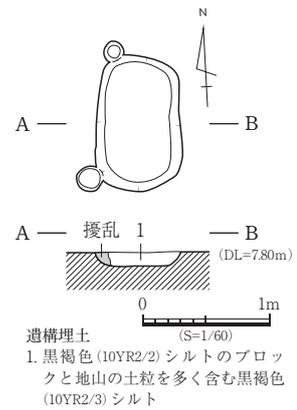


図3-69 SK-314

**SK-317**

Ⅲ-1区南西部, SK-315の南側, SD-3068に切られた形で検出した方形とみられる土坑である。長辺約0.76m, 短辺0.30m以上, 深さ8cmを測り, 長軸方向はN-57°-Wを示す。断面形は概ね逆台形を呈する。埋土は黒色(10YR2/1)シルト単一層であった。出土遺物には土師器1点がみられたが, 図示できなかった。

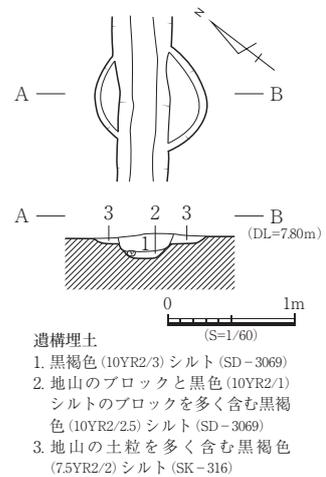


図3-70 SK-316, SD-3069

**SK-318** (図3-7)

Ⅲ-1区北部で検出した方形の土坑で, 弥生時代の土坑SK-306を掘り込んでいた。長辺0.85m, 短辺0.65m, 深さ16cmを測り, 長軸方向はN-37°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(10YR3/2~2/2.5)シルトを主体に地山(にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト混じりの極細粒砂)の土粒の有無により上下2層に分層される。出土遺物には土師質土器1点がみられたが, 図示できなかった。

**SK-319**

Ⅲ-1区中央部で検出した舟形の土坑で, SD-3023を掘り込む。長辺約4.23m, 短辺0.85m, 深さ26cmを測り, 長軸方向はN-73°-Eを示す。断面形は概ね逆台形を呈する。埋土は黒褐色(10YR2/2)シルト質極細粒砂単一層であった。出土遺物には土師器1点, 土師質土器3点がみられたが, 図示できなかった。

**SK-320** (図3-71)

Ⅲ-1区中央部北寄りで検出した不整形の土坑である。長辺0.94m, 短辺0.77m, 深さ13cmを測り, 長軸方向はN-5°-Wを示す。断面形は概ね逆台形を呈する。埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト混じりの極細粒砂)の土粒を比較的多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には土師器1点, 土師質土器4点がみられたが, 図示できなかった。

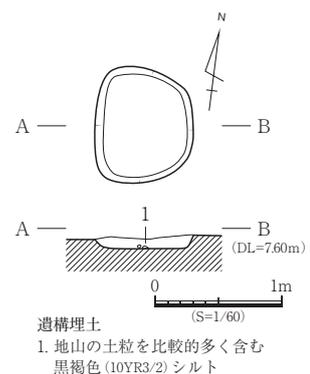


図3-71 SK-320

**SK-321**

Ⅲ-1区中央部北端で検出した舟形とみられる土坑で, 北側は調査区外に延びる。長辺1.65m以上, 短辺1.03m, 深さ5cmを測り, 長軸方向はN-24°-Wを示す。断面形は概ね逆台形を呈する。埋土は粗粒中礫を比較的多く含む黒褐色(10YR3/1)シルトであった。出土遺物には土師器2点, 土師質土器2点がみられたが, 図示できなかった。

**SK-322** (図3-72)

Ⅲ-1区中央部北寄りで検出した方形の土坑である。長辺1.00m, 短辺0.99m, 深さ9cmを測り, 長軸

1. Ⅲ区 (4) 古代後半から中世

方向はN-31°-Wを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト混じりの極細粒砂)の土粒とブロックを多く含む極細粒砂混じりの黒褐色(10YR2/2)シルトであった。出土遺物には土師質土器3点がみられたが、図示できなかった。

**SK-323** (図3-73)

Ⅲ-1区中央部, SD-3022を切った形で検出した方形の土坑で、形状がSK-320・322と似る。長辺1.02m, 短辺0.92m, 深さ10cmを測り、長軸方向はN-11°-Wを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は黒褐色(10YR2/3)砂質シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器3点がみられたが、図示できなかった。

**SK-324**

Ⅲ-1区中央部南寄り, SD-3030に切られた形で検出した不整楕円形の土坑である。長径2.44m以上, 短径1.26m, 深さ7cmを測り、長軸方向はN-9°-Wを示す。断面形は概ね逆台形を呈する。埋土は黒褐色(10YR2/3)砂質シルト単一層であった。出土遺物には土師器41点, 須恵器5点がみられたが、図示できるものはなかった。

**SK-325**

Ⅲ-1区中央部南寄り, SD-3030に切られた形で検出した方形の土坑で、形状がSK-320・322・323と比較的似る。長辺1.27m, 短辺1.08m, 深さ17cmを測り、長軸方向はN-80°-Eを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は下層部に地山(淡黄色(2.5Y8/3)シルト質極細粒砂)の土粒とブロックを含む黒色(10YR2/1)シルトであった。出土遺物には弥生土器16点, 土師器5点, 須恵器3点がみられたが、図示できなかった。

**SK-326**

Ⅲ-1区中央部南寄り, SD-3035に切られた形で検出した不整形の土坑である。長辺3.21m, 短辺約1.14m, 深さ11cmを測り、長軸方向はN-65°-Wを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は灰白色(10YR7/1)シルト質砂のブロックと礫を含む暗褐色(10YR3/3)シルトであった。出土遺物には土師器2点, 土師質土器4点がみられたが、図示できなかった。

**SK-327** (図3-74)

Ⅲ-1区北東部で検出した楕円形の土坑である。長径1.17m, 短径0.75m, 深さ9cmを測り、長軸方向はN-32°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は粗粒中礫を含む黒褐色(10YR3/2)シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器1点, 瓦質土器1点がみられたが、図示できなかった。

**SK-328**

Ⅲ-1区北東部, 北壁際で検出した方形の土坑で、北側は調査区外に延

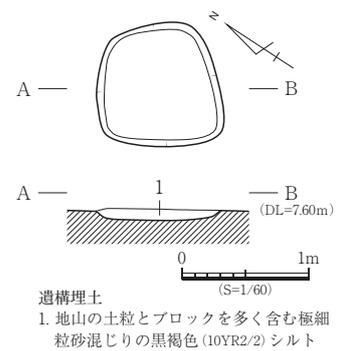


図3-72 SK-322

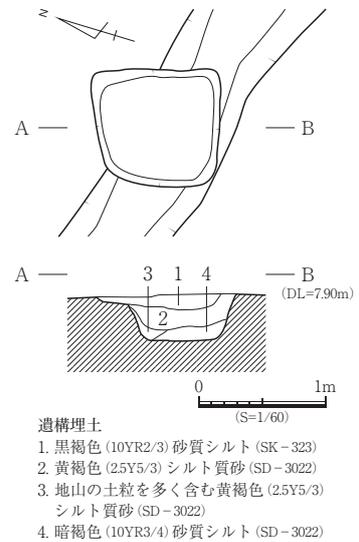


図3-73 SK-323, SD-3022

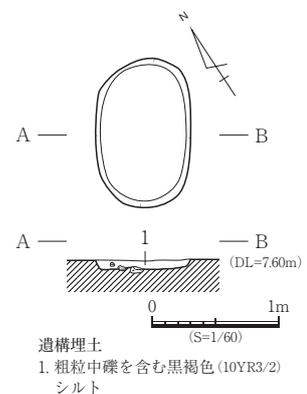


図3-74 SK-327

びる。長辺2.24m, 短辺1.00m以上, 深さ8cmを測り, 長軸方向はN-87°-Wを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は細粒砂から粗粒砂を含む灰黄褐色(10YR4/2)シルト単一層であった。出土遺物には図示できた土師質土器1点(3194)がみられた。

出土遺物

土師質土器(図3-80 3194)

碗で, 丸味のある底部外面端部にはハの字形に開く高さ1cmの高台が付く。成形技法はA技法とみられる。胎土には極細粒砂から細粒砂を比較的多く含む。

SK-329

Ⅲ-1区東部, SD-3021とSU-305を切った形で検出した方形の土坑である。長辺1.66m, 短辺1.41m, 深さ7cmを測り, 長軸方向はN-30°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は細粒砂から粗粒砂を含む灰黄褐色(10YR4/2)シルト単一層であった。出土遺物には須恵器3点, 土師質土器4点がみられ, 須恵器1点(3195)と土師質土器1点(3196)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-80 3195)

鉄鉢とみられるもので, 残存する胴部は内湾気味に上がる。外面下胴部には回転ヘラ削り調整を施す。胎土は精良で, 白色中粒砂から粗粒砂を若干含む。

土師質土器(図3-80 3196)

碗で, 底部は高さ8mmのベタ高台となる。成形技法はA技法で, 底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は精良で, 細粒砂から粗粒砂を若干含む。

SK-330

Ⅲ-4区中央部で検出した染み状を呈する不整形の土坑で, 北の調査区外に延びる。長辺4.12m, 短辺3.00m以上, 深さ11cmを測り, 長軸方向はN-83°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(10YR2/3)シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器3点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-331 (図3-75)

Ⅲ-4区中央部, SB-324の東側で検出した不整円形の土坑である。長径1.03m, 短径0.96m, 深さ40cmを測る深い土坑で, 断面形は箱形を呈する。埋土は地山(明黄褐色(10YR6/8)シルト質砂)の土粒を比較的多く含む黒褐色(10YR2/3)粘土質シルト単一層であった。出土遺物には弥生土器1点, 須恵器4点, 土師質土器24点がみられ, 土師質土器1点(3197)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-80 3197)

碗で, 体部は内湾気味に上がり, 口縁部はやや外反し, 端部は丸い。内面には僅かにヘラ磨きの痕跡が残る。成形技法はA技法である。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

SK-332 (図3-76)

Ⅲ-2区, SD-3113に掘り込まれた形で検出した楕円形の土坑である。長径1.20m, 短径0.67m,

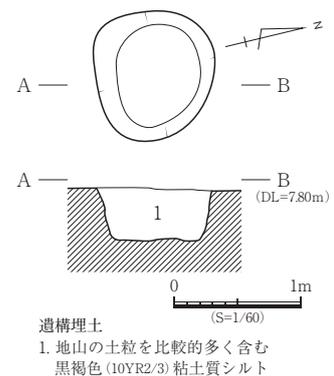


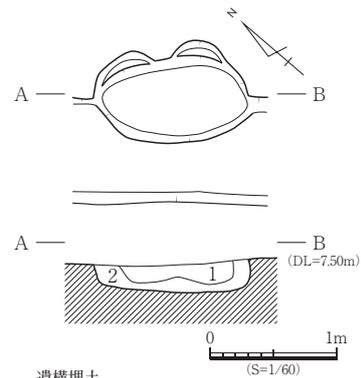
図3-75 SK-331

1. Ⅲ区 (4) 古代後半から中世

深さ 25cm を測り、長軸方向は N-42°-W を示す。断面形は袋状を呈する部分もみられるが基本的に箱形を呈する。埋土は黒色 (10YR2/1) ないし黒褐色 (10YR3/2) シルトを主に地山 (黄褐色 (2.5Y5/3) シルト) の土粒の量によって 2 層に分層される。出土遺物は皆無であった。

**SK-333**

Ⅲ-2区, SK-334 と SD-3114 に掘り込まれた形で検出した不整形の土坑である。長辺 2.67m, 短辺 1.26m 以上, 深さ 14cm を測り、長軸方向は N-80°-E を示す。断面形は概ね舟底形を呈する。埋土は地山 (にぶい黄橙色 (10YR6/4) シルト) のブロックを含む黒褐色 (10YR3/2) シルト単一層であった。出土遺物には須恵器 1 点がみられたが、図示できなかった。



遺構埋土  
1. 地山のブロックを含む黒色 (10YR2/1) シルト  
2. 地山の土粒を含む黒褐色 (10YR3/2) シルト

図3-76 SK-332

**SK-334**

Ⅲ-2区, SK-333 を掘り込んだ形で検出した不整楕円形の土坑である。長径 2.05m 以上, 短径 0.59m 以上, 深さ 16cm を測り、長軸方向は N-89°-W を示す。断面形は概ね舟底形を呈する。埋土は地山 (にぶい黄橙色 (10YR6/4) シルト) のブロックを多く含む黒褐色 (10YR3/2) シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器 1 点がみられたが、図示できなかった。

**SK-335**

Ⅲ-2区, SK-336 に掘り込まれた形で検出した不整楕円形の土坑である。長径 1.69m, 短径 1.07m, 深さ 12cm を測り、長軸方向は N-14°-W を示す。断面形は概ね舟底形を呈する。埋土は地山 (にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト) のブロックを多く含む黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト単一層であった。出土遺物には須恵器 1 点, 土師質土器 6 点, 瓦 1 点がみられ、須恵器 1 点 (3198) が図示できた。

出土遺物

須恵器 (図3-80 3198)

壺で、底部外端部に高さ 6mm の高台が付く。胎土には白色細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

**SK-336**

Ⅲ-2区, SK-335 を掘り込んだ形で検出した楕円形の土坑である。長径 1.09m, 短径 0.73m, 深さ 12cm を測り、長軸方向は N-7°-E を示す。断面形は U 字形を呈する。埋土は地山 (にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト) のブロックを僅かに含む黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

**SK-337**

Ⅲ-2区, SK-338 と SD-3117 に掘り込まれた形で検出した不整形の土坑である。長辺 1.81m, 短辺 0.67m, 深さ 36cm を測り、長軸方向は N-1°-E を示す。断面形は U 字形を呈する。埋土は地山 (にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト) のブロックを多く含む黒褐色 (10YR2/3) ~ 暗褐色 (10YR3/3) シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

**SK-338**

Ⅲ-2区, SK-337 と SD-3023 を掘り込んだ形で検出した舟形の土坑で、北側は調査区外に延びる。長辺 1.61m 以上, 短辺 0.67m, 深さ 16cm を測り、長軸方向は N-13°-E を示し、底面には中央部で

ピット状の落ち込みがある。断面形は舟底形を呈する。埋土は極細粒砂から中粒砂混じりの暗褐色(10YR3/3)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

#### SK-339

Ⅲ-2区, SK-340とSD-3113・3114に掘り込まれた形で検出した不整形の土坑である。長辺2.27m以上, 短辺1.98m, 深さ13~25cmを測り, 長軸方向はN-83°-Eを示し, 底面には西側に落ち込みがある。断面形は舟底形を呈する。埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)のブロックを含む黒褐色(10YR2/2~3/2)シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器12点があり, 内2点(3199・3200)が図示できた。

#### 出土遺物

土師質土器(図3-80 3199・3200)

3199は椀で, 体部から口縁部にかけて内湾気味に上がり, 丸い口縁端部は僅かに屈曲して水平を向く。成形技法はB技法とみられ, 未調整の外面にはロクロ目が残る。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。3200は杯で, 体部は平らな底部から内湾気味に上がる。成形技法はB技法で, 未調整の体部外面にはロクロ目が明瞭に残る。底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は精良で, 細粒砂から粗粒砂を若干含む。

#### SK-340

Ⅲ-2区, SK-339を掘り込んだ形で検出した楕円形の土坑である。長径1.64m, 短径0.95m, 深さ4~6cmを測り, 長軸方向はN-22°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の土粒を含む黒褐色(10YR3/2)シルト単一層で, 下層に土粒が目立った。出土遺物には土師質土器4点があり, 内1点(3201)が図示できた。

#### 出土遺物

土師質土器(図3-80 3201)

杯で, 口縁部と体部は上外方へほぼ真直ぐ延び, 口縁端部は丸い。成形技法はB技法で, 体部外面は未調整でロクロ目が明瞭に残る。口縁部内面には煤が付着する。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

#### SK-341

Ⅲ-2区, SD-3114に中央部を掘り込まれた形で検出した不整楕円形の土坑で, 遺構の約半分は掘削されている。長径1.43m以上, 短径1.23m, 深さ3~12cmを測り, 長軸方向はN-85°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の土粒を僅かに含む黒褐色(10YR3/2)シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器1点がみられたが, 図示できなかった。

#### SK-342

Ⅲ-2区, SD-3114に西側を掘り込まれた形で検出した不整楕円形の土坑である。長径1.15m以上, 短径0.97m, 深さ16~20cmを測り, 長軸方向はN-87°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山(にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト)の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルト単一層であった。出土遺物には図示できた土師質土器1点(3202)があった。

#### 出土遺物

土師質土器(図3-80 3202)

杯で, 体部はやや内湾し, 口縁部は上外方を向き, 端部は丸い。成形技法はB技法で, 体部外面は

未調整でロクロ目が明瞭に残る。内底面は回転ナデ調整の後にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は精良で、細粒砂から粗粒砂を若干含む。

**SK-343**

Ⅲ-2区, SD-3116 に掘り込まれた形で検出した楕円形の土坑である。長径1.18m, 短径0.94m, 深さ3~5cmを測り, 長軸方向はN-72°-Wを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は地山(黄褐色(2.5Y5/3)シルト)のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

**SK-344**

Ⅲ-2区, 東壁際で検出した不整形の土坑で, 調査区外に続く。長辺1.24m以上, 短辺0.92m, 深さ3cmを測り, 長軸方向はN-70°-Wを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は地山(黄褐色(2.5Y5/3)粘土質シルト)の土粒を含む黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

**SK-345**

Ⅲ-1区南東隅, SD-3068 に切られた形で検出した不整形の土坑で, SD-3067 を掘り込む。長辺1.55m以上, 短辺1.04m, 深さ10cmを測り, 長軸方向はN-50°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は細粒中礫を多量に含む暗褐色(10YR3/4)シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器3点がみられたが, 図示できるものはなかった。

**SK-346**

Ⅲ-1区中央部西寄り, SD-3022 を切った形で検出した不整形の土坑で, 底面にピット状の落ち込みが多数みられた。長辺2.34m以上, 短辺1.69m, 深さ33cmを測り, 長軸方向はN-77°-Eを示す。断面形は, 袋状を呈する部分もあるが, 概ね逆台形を呈する。埋土は黒褐色(10YR2/3)シルトを主に地山の土粒の量で上下2層に分層される。出土遺物には弥生土器2点, 土師器8点, 須恵器1点, 土師質土器45点がみられたが, いずれも細片で図示できるものはなかった。

**SK-347 (図3-77)**

Ⅲ-1区中央部西寄り, SK-346 の北側で検出した不整形の土坑である。長径0.87m, 短径0.76m, 深さ10cmを測り, 長軸方向はN-55°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト混じり極細粒砂)を若干含む黒褐色(10YR3/2)シルト単一層であった。出土遺物には須恵器1点, 土師質土器24点, 瓦器1点がみられ, 瓦器1点(3203)が図示できた。

**出土遺物**

**瓦器(図3-80 3203)**

椀で, 体部から口縁部は内湾気味に上がり, 端部は細く丸い。体部外面には指押えの痕が残る。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

**SK-348 (図3-78)**

Ⅲ-1区中央部西寄り, SK-349 の南隣で検出した不整形の土坑である。長径1.28m, 短径1.21m, 深さ12cmを測り, 長軸方向はN-56°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は上下2層に分層さ

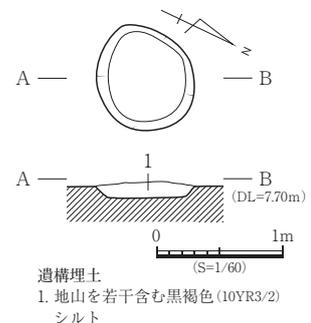


図3-77 SK-347

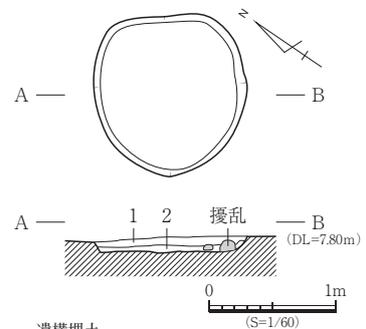


図3-78 SK-348

れ、上層が極細粒砂質シルト、下層がシルト質極細粒砂となりいずれも地山(にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト混じり極細粒砂)のブロックを比較的多く含んでいた。出土遺物には須恵器1点、土師質土器31点、瓦器2点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-349 (図3-79)

Ⅲ-1区中央部西寄り、SK-348の北隣で検出した円形の土坑である。長径1.01m、短径0.97m、深さ12cmを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土はSK-348とほぼ同じで上下2層に分層され、上層が極細粒砂質シルト、下層がシルト質極細粒砂となり、いずれも地山(にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト混じり極細粒砂)のブロックを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器12点、瓦器1点がみられ、土師質土器1点(3204)が図示できた。

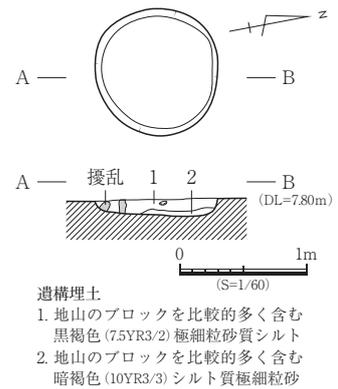


図3-79 SK-349

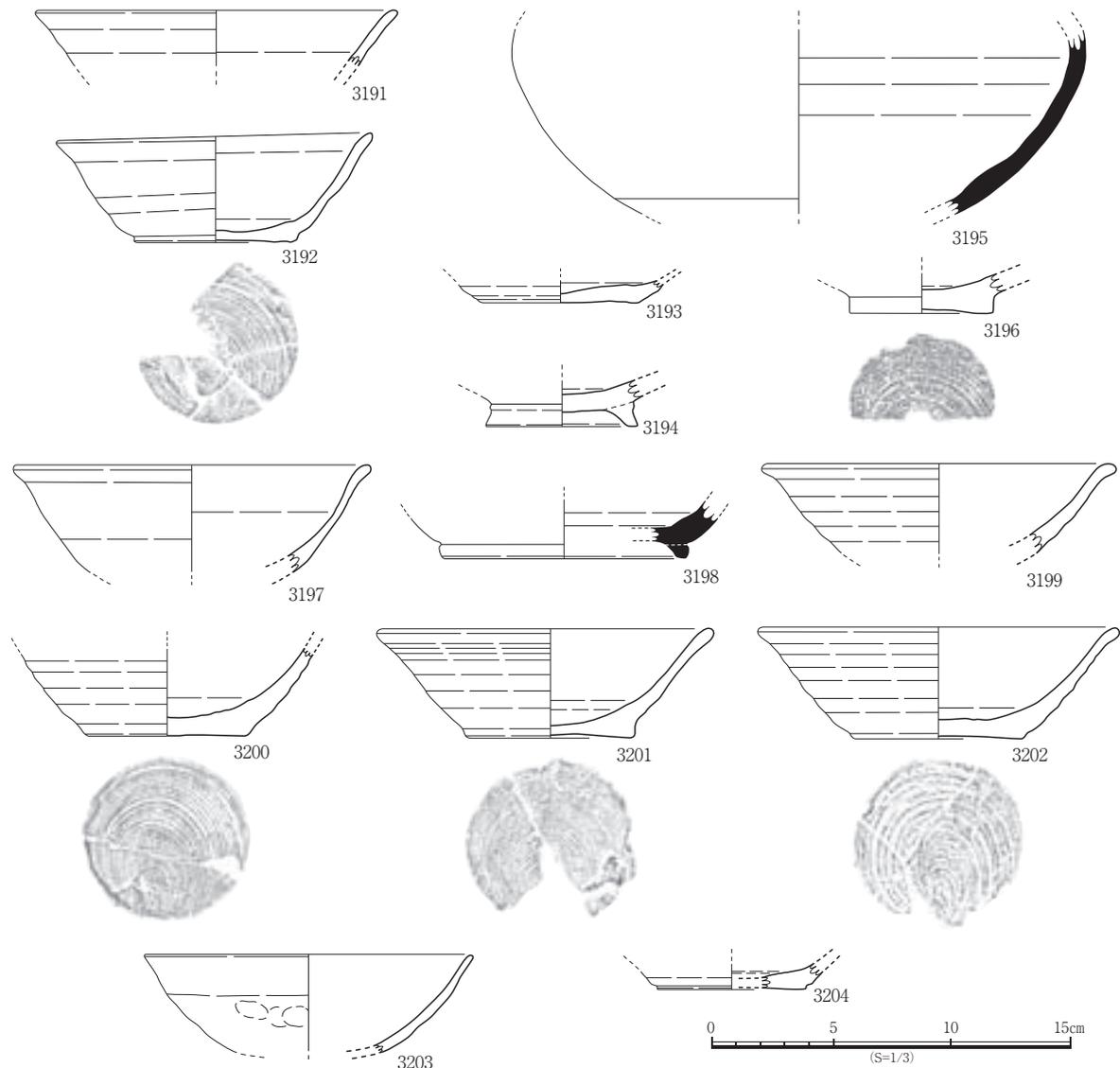


図3-80 SK-310・311・315・328・329・331・335・339・340・342・347・349出土遺物実測図

出土遺物

土師質土器(図3-80 3204)

杯で、成形技法はB技法とみられる。底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は精良で、細粒砂から中粒砂を若干含む。

SK-350

Ⅲ-1区中央部西寄り、SK-349の北隣で検出した楕円形の土坑で、SD-3022と2つのピットを掘り込んでいた。長径0.96m、短径0.70m、深さ15cmを測り、長軸方向はN-57°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は上下2層に分層され、上層が黒褐色(7.5YR3/2)シルト、下層が極細粒砂混じりの暗褐色(10YR3/3)シルトで、生物擾乱の影響がみられた。出土遺物には黒色土器1点、土師器3点、土師質土器4点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-351(図3-81)

Ⅲ-1区中央部南壁際、弥生時代の溝を掘り込んだ形で検出した隅丸方形の土坑で、東壁沿いに段部がみられる。長辺2.03m、短辺1.80m、深さ42cmを測り、長軸方向はN-6°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトを主に地山(シルト混じり)のぶい黄褐色(10YR4/3)極細粒砂などの土粒の含み具合によって4層に分層される。出土遺物には土師質土器2点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-352

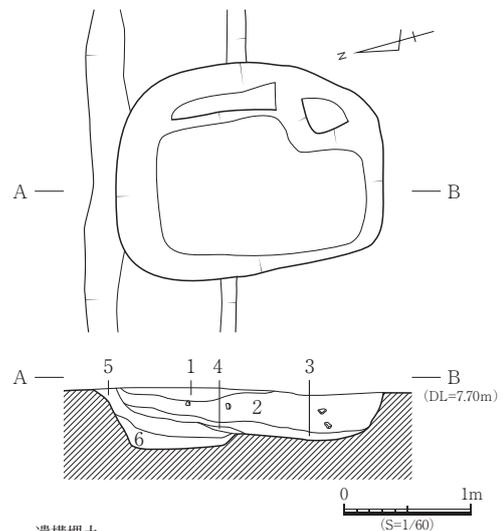
Ⅲ-1区中央部南寄り、SD-3034などの溝に切られた形で検出した不整形とみられる土坑である。長辺0.76m以上、短辺1.14m以上、深さ29cmを測り、長軸方向はN-34°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山(にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質シルト)を若干含む黒褐色(10YR2/3)シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器1点があったが、図示できなかつた。

SK-353

Ⅲ-1区中央部南寄り、SD-3039などの溝に切られた形で検出した不整形とみられる土坑で、東壁際がピットに掘り込まれていた。長辺1.70m、短辺1.26m、深さ12cmを測り、長軸方向はN-22°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山(にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質シルト)を若干含む暗褐色(10YR3/3)シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器2点があったが、図示できなかつた。

SK-354

Ⅲ-1区中央部南寄り、SD-3025・3037などの溝に切られた形で検出した方形とみられる土坑で、東壁に沿ってSD-3037が掘り込む。長辺2.11m以上、短辺1.08m以上、深さ26cmを測り、長軸方向はN-58°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は砂質シルトで色調によって上下2層に分層される。出土遺物には土師器23点、須恵器7点、土師質土器1点がみられたが、図示できるものはなかった。



- 遺構埋土
1. 中粒中礫を若干含む褐色(10YR4/4)シルト(SK-351)
  2. 地山の土粒と中粒~粗粒中礫を若干含む黒褐色(10YR3/2)シルト(SK-351)
  3. 地山の小ブロックを含む灰黄褐色(10YR4/2)シルト(SK-351)
  4. 地山のブロックを多量に含む黒色(10YR2/1.5)シルト(SK-351)
  5. 黒色(10YR2/1.5)シルト(SD-3002)
  6. 地山の土粒を若干含む黒褐色(10YR3/1)シルト(SD-3002)

図3-81 SK-351,SD-3002

**SK-355** (図3-82)

Ⅲ-1区中央部南壁際, SD-3033・3072を切った形で検出した方形の土坑で, 中央部が一段落ち込む。長辺3.20m, 短辺2.12m以上, 深さ88cmを測り, 長軸方向はN-76°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は7層に分層でき, 最下層には掘削時の堆積とみられる地山(淡黄色(2.5Y8/3)細粒砂)のブロックを含む黒褐色(10YR3/1)シルトが認められた。出土遺物には弥生土器1点, 土師器1点, 須恵器6点, 土師質土器36点, 瓦質土器1点, 備前焼2点, 青磁1点がみられたが, 図示できたのは土師器1点(3205)のみであった。

出土遺物

土師器(図3-85 3205)

羽釜で, 口縁部下端に断面台形状の鑊が付き, 周囲に煤が付着する。胎土には中粒砂から粗粒砂及び雲母片を多く含む。

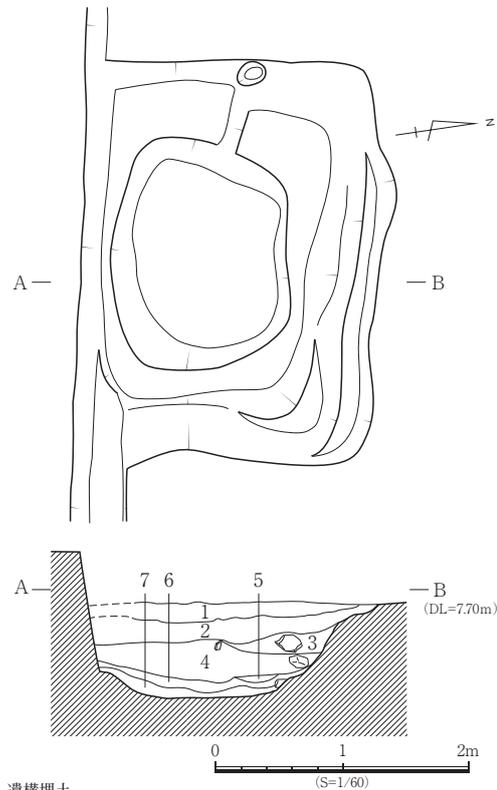
**SK-356** (図3-83)

Ⅲ-4区中央部, 2条の溝に囲まれた形で検出した土坑で, 土坑墓と考えられる。2条の溝で区画された中に方形の主体部を設けたもので, 四国では類例がなく, 「方形区画墓」と呼称する。主体部は長辺1.60m, 短辺0.84m, 深さ34cmを測り, 長軸方向はN-9°-Eを示す。断面形は箱形を呈す。埋土は中央部に木棺の痕跡とみられる堆積, 壁際に木簡を据えた時の堆積が認められ, 北壁際の床面からは副葬品と考えられる遺物が出土した。副葬品の中の土師質土器の杯は完形ではなく, 割れた状態で出土した。主体部を囲む溝は2条ともSD-3054を切り, 内側の溝は一辺3.85~4.15m, 幅0.49~0.65m, 深さ12~23cmで, 主体部とは南が0.5m, 他の方向が約1.0mの間隔を持っている。断面形は逆台形ないしU字形を呈す。埋土は黒褐色(10YR2/3)砂質シルト単一層であった。外側の溝は一辺5.40~6.45m, 幅0.47~0.74m, 深さ6~17cmで, 内側の溝とは東側が接し, 西側が約1.0m, 北側が0.1~0.5m, 南側が0.5mの間隔を持っている。断面形は逆台形ないし舟底形を呈す。外側の溝の北側と西側は, 主体部の主軸方向とはややずれている。埋土は黒褐色(10YR2/3)砂質シルト単一層であるが, 下層に地山(明黄褐色(10YR6/8)砂質シルト)を含んだ堆積が確認された部分もある。出土遺物には, 主体部から出た副葬品とみられる図示した土師質土器4点(3207~3210)と溝から出た弥生土器1点, 土師器2点, 須恵器5点, 土師質土器146点, 瓦器1点, 瓦質土器2点があり, 図示できたのは須恵器1点(3206)と前述の土師質土器4点であった。

出土遺物

須恵器(図3-85 3206)

杯身で, 底部には丸味があり, たち上がりは高さ5mmと短く内傾する。底部外面には回転ヘラ削り



- 遺構埋土
1. 中礫細粒砂~極細粒砂と黒褐色(10YR3/1)シルトの大ブロックと地山の小ブロックを含むにぶい黄褐色(10YR5/3)シルト
  2. 中礫細粒砂~粗粒砂を多く含むにぶい黄褐色(10YR5/3)シルト
  3. にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト
  4. 赤褐色(5YR4/8)シルト粒を多く含むにぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質砂
  5. 黒褐色(10YR3/1)シルトブロック
  6. 赤褐色(5YR4/8)シルト粒を含む褐色(10YR5/1)シルト質砂
  7. 地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/1)シルト

図3-82 SK-355

1. Ⅲ区 (4) 古代後半から中世

の痕跡は見られない。胎土には、細粒砂から中粒砂を少し含む。

土師質土器(図3-85 3207~3210)

3207は杯で、体部は上外方に延び、口縁部はやや外傾し、端部は丸い。成形技法はB技法で、口縁部と体部外面は未調整でロクロ目が明瞭に残る。底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は精良で、中粒砂を若干含む。

3208~3210は小皿である。成形技法は、3208がB技法で、3209と3210が口縁部と体部を成形後に粘土塊に接合して底部を作り出してあり、粘土塊からミズビキして作り出すB技法と異なり、A技法の垂流とみられることからA2技法と仮称する。3210は、底部と体部との接合痕跡が明瞭に残り、内面にはその境が沈線状に巡る。底部の切り離しはいずれも回転糸切りで、3210には板状圧痕が残る。胎土はいずれも精良で、細粒砂ないし中粒砂を若干含む。

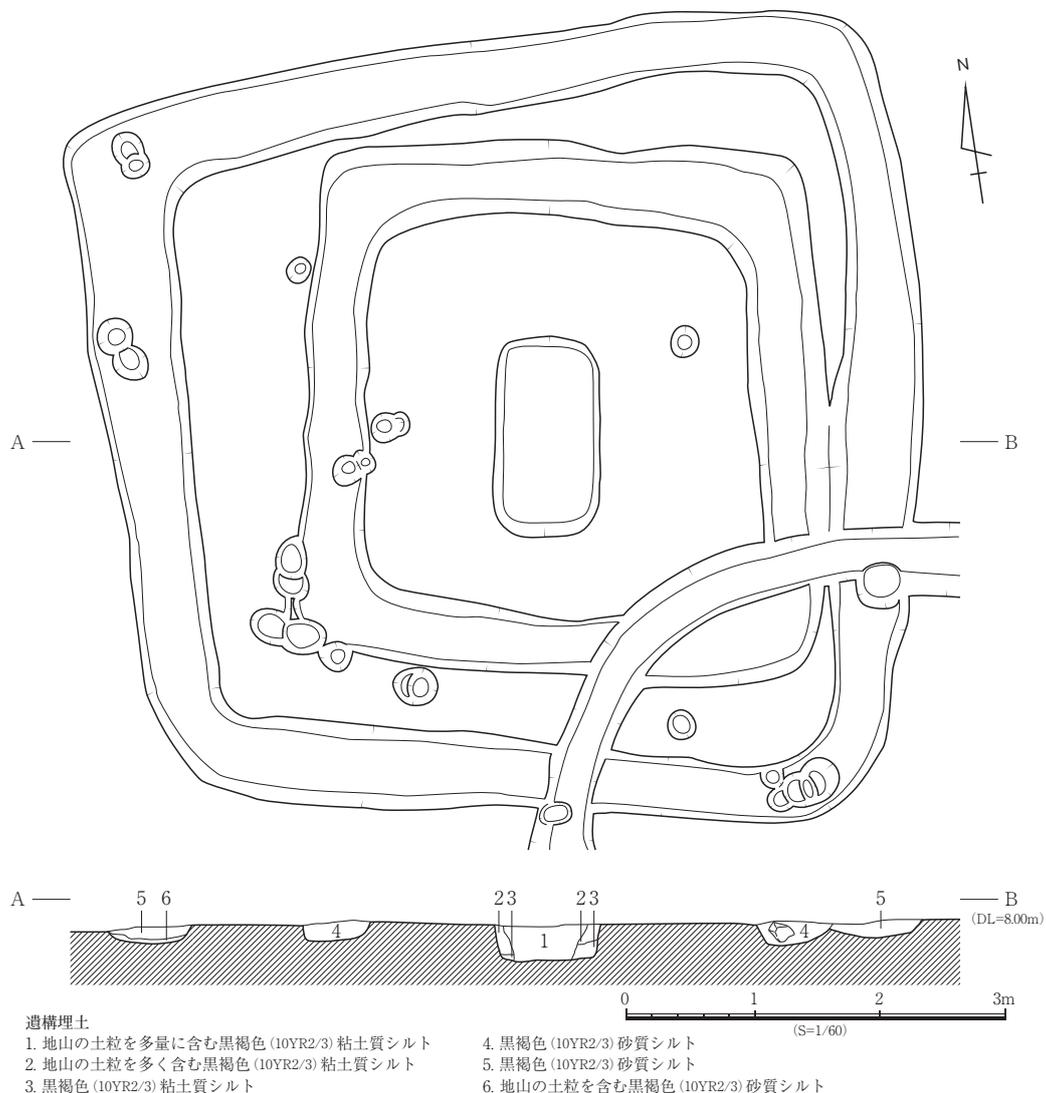


図3-83 SK-356

SK-357(図3-84)

Ⅲ-4区中央部、南壁際で検出した土坑で、SD-3054を切っていた。溝による区画はないものの、形態がSK-356とほぼ同じことから土坑墓と考えられる。長辺1.85m、短辺1.03m、深さ32cmを測り、長

軸方向はN-5°-Wを示す。断面形は箱形を呈す。SK-356のような堆積は認められず、埋土は地山(明黄褐色(10YR6/8)砂質シルト)の土粒と黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトの土粒を多量に含む黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトを主体とし、北側の土層で黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトの堆積が認められた。出土遺物には土師器1点と土師質土器18点があり、土師質土器6点(3211~3216)が図示できた。図示できたものはいずれも副葬品と考えられる。

出土遺物

土師質土器(図3-85 3211~3216)

3211と3212は杯で、3211は体部から口縁部は上外方へほぼ真直ぐたち上がり、端部を丸く仕上げる。成形技法はB技法で、口縁部と体部外面は未調整でロクロ目が明瞭に残る。また、内底面もナデ調整を加えておらず、ロクロ目が残る。底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は精良で、砂粒はほとんど認められない。3212はベタ高台の杯で、高台から一気に仕上げるB技法となり、ミズビキにより高台部分を作り出す。底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は精良で、細粒砂を少し含む。

3213~3216は小皿で、成形技法はいずれもA2技法によっており、内面の底部と体部の境には接合の際の凹みがみられる。底部の切り離しはすべて回転糸切りであり、3213はナデ調整を加えている。3215の胎土には細粒砂から中粒砂を比較的多く含む以外はいずれも精良で、細粒砂ないし中粒砂を少し含む。

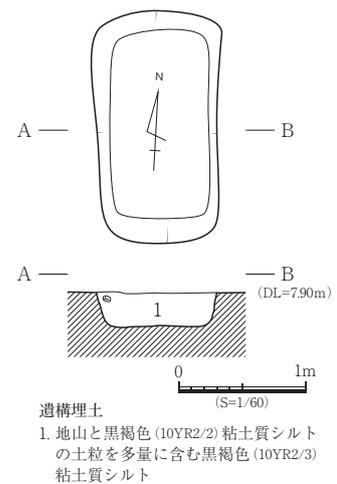


図3-84 SK-357

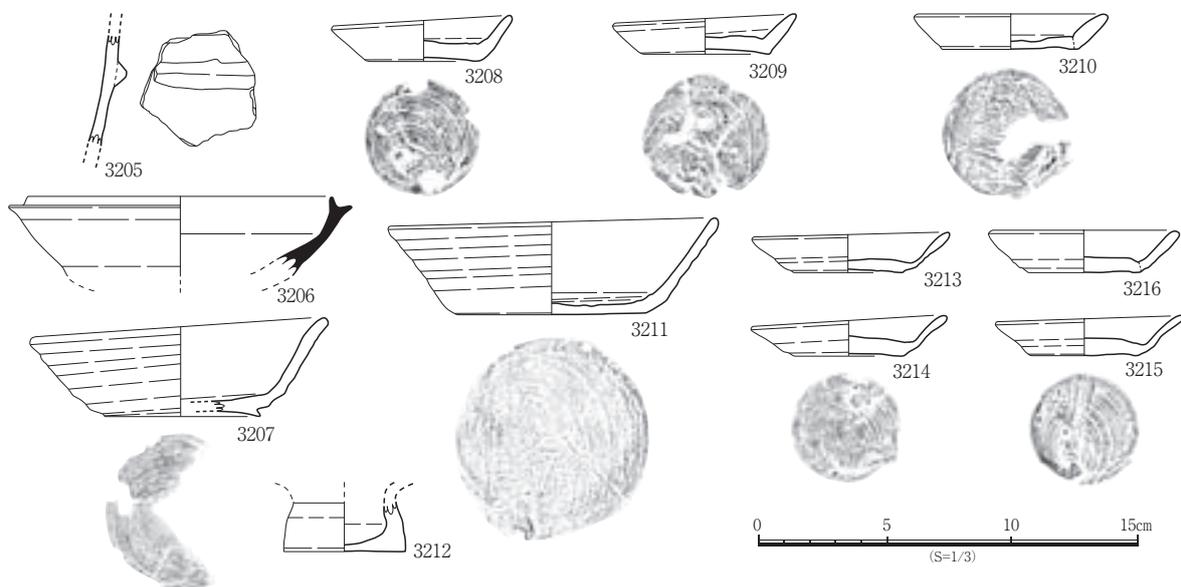


図3-85 SK-355~357出土遺物実測図

SK-358

Ⅲ-4区中央部、SK-359を切った形で検出した舟形の土坑である。長辺4.50m、短辺0.74m、深さ4~27cmを測り、長軸方向はN-9°-Eを示す。断面形はU字形を呈する。埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質砂)のブロックと土粒を僅かに含む黒褐色(10YR3/2)シルトを主体とし、中層と下層には地山(にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質砂)のブロックを多量に含む黒褐色(10YR3/2)シルトの堆積

1. Ⅲ区 (4) 古代後半から中世

が認められた。出土遺物には弥生土器1点、土師器3点、須恵器3点、土師質土器94点がみられたが、図示できるものはなかった。

**SK-359**

Ⅲ-4区中央部、SK-358 に掘り込まれた形で検出した舟形の土坑である。長辺1.54m以上、短辺0.48m、深さ17cmを測り、長軸方向はN-65°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質砂)の土粒を含む黒褐色(10YR3/1~3/2)シルト単一層であった。出土遺物には土師器12点、須恵器1点、備前焼1点がみられたが、図示できるものはなかった。

**SK-360**

Ⅲ-4区中央部、SK-359 の南側で検出した楕円形の土坑である。長径0.70m、短径0.35m、深さ8cmを測り、長軸方向はN-77°-Wを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質砂)の小ブロックを含む黒褐色(10YR2/3)中粒砂質シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器1点がみられたが、図示できなかつた。

**SK-361**

Ⅲ-4区中央部西寄り、北壁際で検出した不整楕円形の土坑である。長径1.02m、短径0.41m、深さ15cmを測り、長軸方向はN-18°-Eを示す。断面形はU字形を呈する。埋土は黒褐色(10YR3/2)シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器2点がみられたが、図示できなかつた。

**SK-362 (図3-86)**

Ⅲ-4区中央部西寄り、SK-361 の西側で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.76m、短辺1.17m、深さ20cmを測り、長軸方向はN-82°-Eを示す。断面形はU字形を呈する。埋土は上下2層に分層され、上層は黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトを主体とし、下層は黄橙色(7.5YR7/8)砂質シルトとなっていた。出土遺物には土師器1点と土師質土器1点がみられたが、図示できなかつた。

**SK-363**

Ⅲ-4区中央部西寄り、SD-3088 を切った形で検出した方形の土坑で、ピットに掘り込まれていた。長辺0.88m、短辺0.70m、深さ25cmを測り、長軸方向はN-9°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(10YR2/2)シルトを主体とし、上下2層に分層され、下層は地山(明黄褐色(10YR6/8)シルト質砂)と黒色(10YR2/1)シルトの小ブロックを多量に含んでいた。出土遺物には土師器1点、須恵器1点、土師質土器12点がみられたが、図示できるものはなかった。

④ 溝跡

この時期も多数の溝が掘削されており、古代に属するもの以外に古代後半に掘削され、13世紀まで続く溝も多くあることからまとめて報告する。弥生時代と同じくⅢ-1区西部から南東部に向って掘削された溝やⅢ-1区中央部の緩斜面に沿って掘削された溝以外に、Ⅲ-4区では区画溝と判断されるものも散見されるようになると共に用水路と考えられる溝も新たに掘削されている。

**SD-3022 (図3-12・73・87・133)**

Ⅲ-2区からⅢ-1区西部から中央部、緩斜面にかけて検出したほぼ直線的に延びる東西溝で、SD-

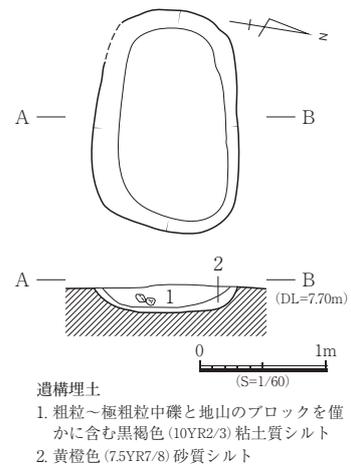


図3-86 SK-362

3066・3067・3069に切られる。検出長85.25m，幅0.34～1.00m，深さ6～43cmを測り，断面形はU字形ないし逆台形を呈する。基底面は西(7.330m)から東(7.309m)に若干傾斜し，溝は東南東(N-107°-E)に延びる。埋土は，黒褐色(10YR3/1～3/2)シルトないし砂質シルトを主体に単一層となるところもみられるが，地山の土粒やブロックの混入度合によって2～4層に分層される所が多い。出土遺物には弥生土器4点，土師器58点，須恵器27点，黒色土器1点，土師質土器361点，瓦器1点，鉄釘2点がみられ，弥生土器1点(3217)，須恵器1点(3218)，黒色土器1点(3219)，土師質土器17点(3220～3236)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-89 3217)

甕の口縁部ではないかとみられるもので，口縁部外面には断面三角形の粘土帯を貼付する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

須恵器(図3-89 3218)

高杯の脚台部で，裾部は下外方にラップ状に大きく開き，端部は外傾する浅い凹面をなす。外面には自然釉がかり，ハダ荒れがみられる。胎土には白色細粒砂から粗粒砂を少し含む。

黒色土器(図3-89 3219)

内黒の椀で，底部外面端部にはハの字形に開く高さ5mmの高台が付く。胎土には細粒砂から粗粒砂と雲母片を少し含む。

土師質土器(図3-89 3220～3236)

3220～3232は杯で，3220～3223は口縁部を中心に残存するもので，成形技法は3220がA技法である以外はB技法となる。胎土は概ね精良で，細粒砂から中粒砂を若干含む。3224～3232は底部を中心に残存するもので，3228が不明であるのを除けば，底部の切り離しは3227が回転ヘラ切りになっている以外は回転糸切りとなる。成形技法は3224～3227，3229がA技法でこれら以外はB技法となり，内底面にはロクロ目が残存する。

3233と3234は小皿で，いずれも成形技法はB技法によるが，器高指数は3233が19であるのに対し，3234は29で，底部が深い。

3235と3236は椀で，3235の底部外面には断面逆台形状の高さ8mmの高台が付く。成形技法はA技法で，底部外面は回転糸切りの後にナデ調整を加える。胎土は精良で，極細粒砂から細粒砂を少し含

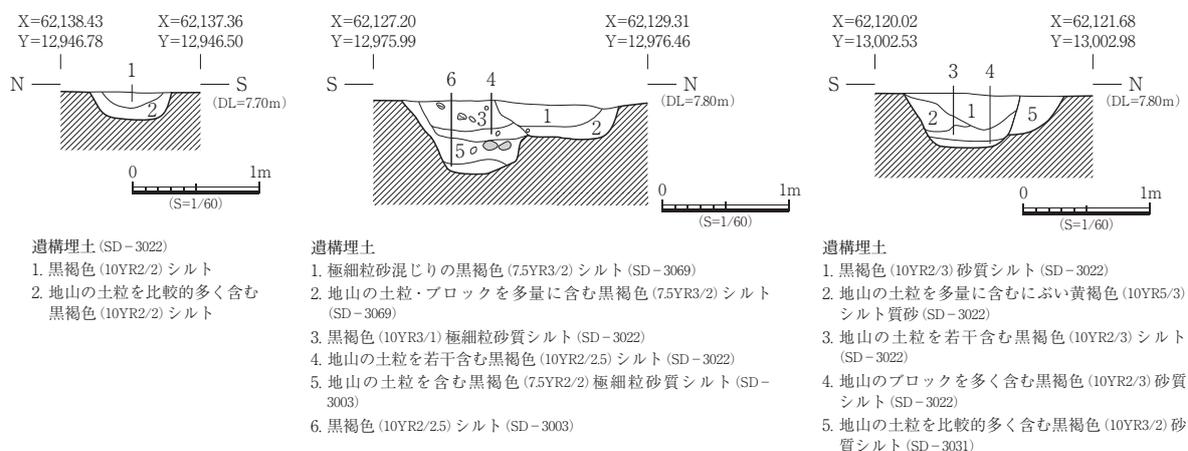


図3-87 SD-3003・3022・3031・3069

1. III区 (4) 古代後半から中世

む。3236も成形技法はA技法で、丸味のある底部から口縁部に向かって内湾気味に上がり、端部は短く外傾し丸い。底部外面はナデ調整され、端部には高さ6mmの真下を向く高台が付く。また、体部内面には部分的に煤が付着する。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

**SD-3023** (図3-88・95)

III-1区中央部北部からIII-2で検出した東西溝で、SD-3034に掘り込まれているため起点は不明であるが、ほぼ西方向に伸び、北の調査区外へ続く。一方、掘り返しが行われたとみられ、起点を南に移し、西方向、途中で北西方向に屈曲し、SD-3034と交差する付近で合流する。検出長70.87m、幅0.34~0.68m、深さ11~24cmを測り、断面形は概ね逆台形を呈するが、場所によってU字形となる。基底面は東(7.451m)から西(7.155m)に傾斜し、溝は概ね西(N-86°-W)に伸びる。埋土は、黒褐色(10YR2/1~3/2)シルトを主体に単一層の部分と2層に分層される所がある。出土遺物には弥生土器2点、土師質土器11点がみられ、弥生土器1点(3237)、土師質土器1点(3238)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-89 3237)

甕で、口縁部は丸味のある胴部から短く外反する。胴部内面には指押え、外面にはタタキの後にハケ調整を加える。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

土師質土器(図3-89 3238)

小皿で、口縁部は斜め上方に短く上がり、端部は丸い。成形技法はA技法とみられ、胎土は精良で、細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

**SD-3024** (図3-65・88・96・97)

III-1区中央部北部で検出した東西溝で、SD-3034に掘り込まれているため起点は不明であるが、まず西に伸び、途中で西南西に屈曲した後再度西に方向を変え、ほぼ真直ぐ伸び、北の調査区外へ続く。検出長49.84m、幅0.40~0.74m、深さ32~48cmを測り、断面形は概ね逆台形を呈するが、場所によってV字形やU字形となる。基底面は東(7.260m)から西(7.159m)に若干傾斜し、溝は概ね西(N-79°-W)に伸びる。埋土は、黒褐色(10YR2/1~3/2)シルトを主体に単一層の部分と地山の土粒の混入度合いなどで2~5層に分層される部分がある。出土遺物には弥生土器29点、土師器6点、須恵器9点、土師質土器24点、瓦器3点、白磁1点、石製品1点がみられ、土師器1点(3239)、須恵器2点(3240・3241)、土師質土器3点(3242~3244)、瓦器1点(3245)、白磁1点(3246)が図示できた。

出土遺物

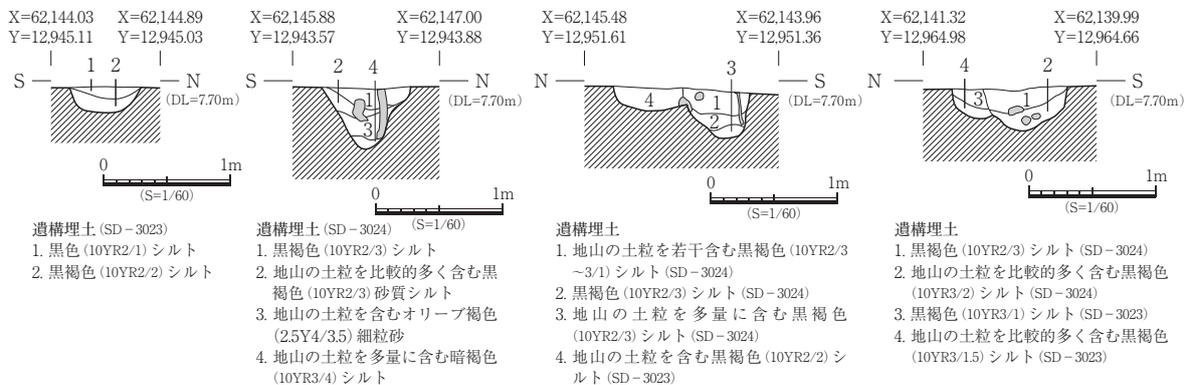


図3-88 SD-3023・3024

土師器(図3-89 3239)

甕の把手で、舌状を呈し、反り上がる。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

須恵器(図3-89 3240・3241)

いずれも甕で、3240の短く外傾する口縁部外面にはハケ状工具によるとみられる刺突文が施される。胎土には白色細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。3241は、口縁部が大きく外反するものである。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

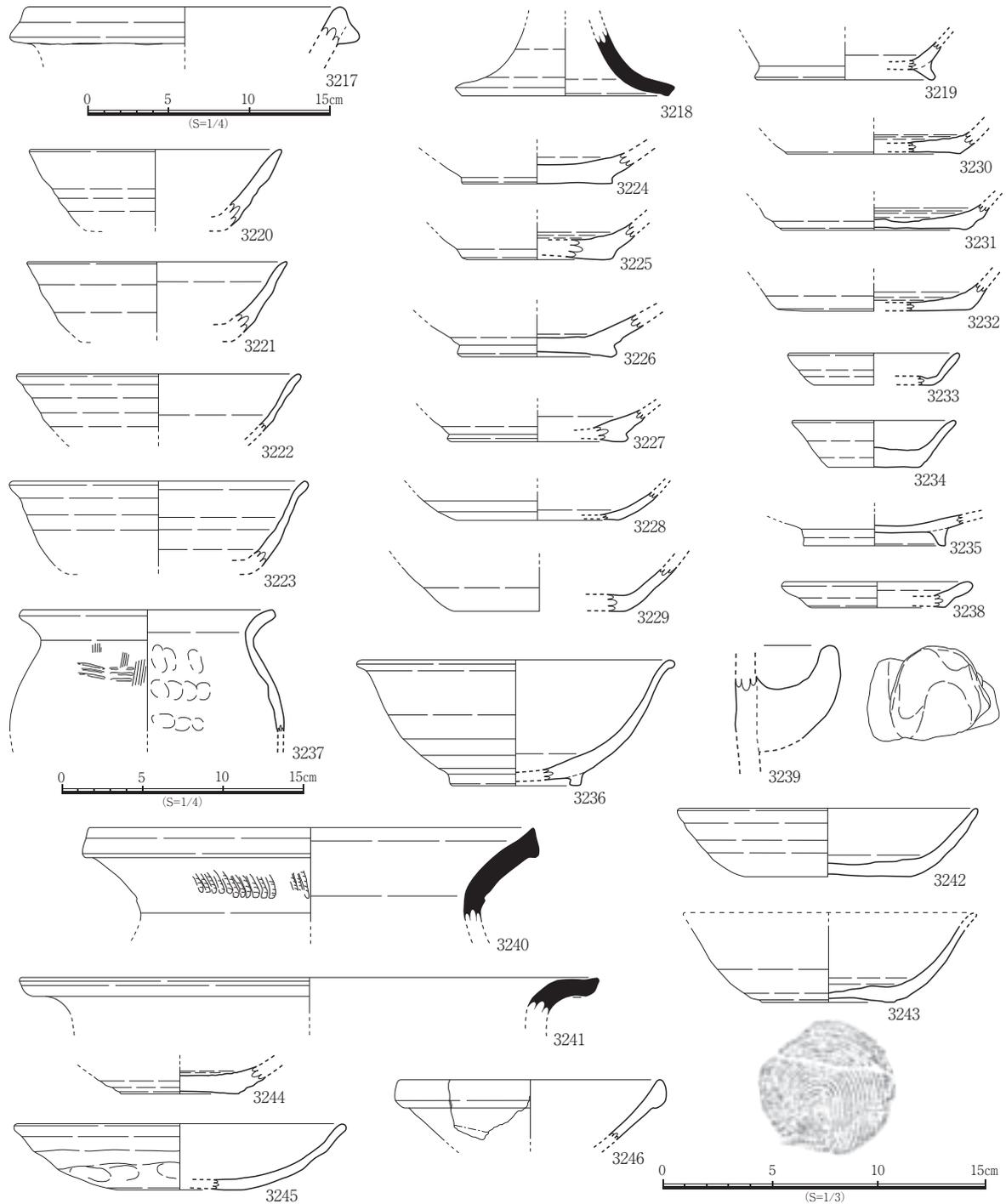


図3-89 SD-3022~3024出土遺物実測図

土師質土器(図3-89 3242~3244)

3242~3244は杯で、3242は底部が比較的浅く、口縁部はやや内湾気味に上がり、端部は丸い。成形技法はA技法で、底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土には中粒砂から粗粒砂を若干含む。3243は、3242に比べ底部はやや深く、体部は内湾気味に上がる。成形技法はA技法で、底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。3244はB技法とみられるもので、底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

瓦器(図3-89 3245)

扁平な碗で、口縁部には2段にヨコナデ調整を施し、外面には煤の付着が認められる。胎土には細粒砂から中粒砂を少し含む。

白磁(図3-89 3246)

玉縁の碗で、口縁部はやや内湾して上がる。胎土には黒色粒を比較的多く含む。

SD-3025(図3-13・90・96)

Ⅲ-1区中央部で検出した東西溝で、SD-3036に掘り込まれているため起点は不明であるが、SD-3036の東側で検出したSD-3033に続く可能性もある。溝は緩斜面に沿う形で、西北西に延び、途中でSD-3022・3069・3071に切られ、SD-3024を掘り込む。検出長52.90m、幅0.28~0.75m、深さ22~58cmを測り、断面形は概ねU字形を呈するが、場所によって逆台形となる。基底面は東(7.292m)から西(7.273m)に若干傾斜し、溝は緩やかなカーブを描きながら概ね西北西(N-57°-W)に延びる。埋土は、黒褐色(10YR2/2~3/2)シルトを主体に単一層の部分と地山の土粒の混入度合いなどで2層に分層される部分がある。出土遺物には弥生土器54点、土師器27点、須恵器8点、土師質土器45点がみられ、弥生土器1点(3247)、須恵器1点(3248)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-93 3247)

細頸壺で、口頸部は内傾する胴部からほぼ直立し、端部を細く仕上げる。外面には細かなタテ方向のハケ調整を施す。胎土には粗粒砂から極粗粒砂を多く含む。

須恵器(図3-93 3248)

扁平な杯身で、比較的短いたち上がりは折込みによる。底部外面約2/3には回転ヘラ削り調整を施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

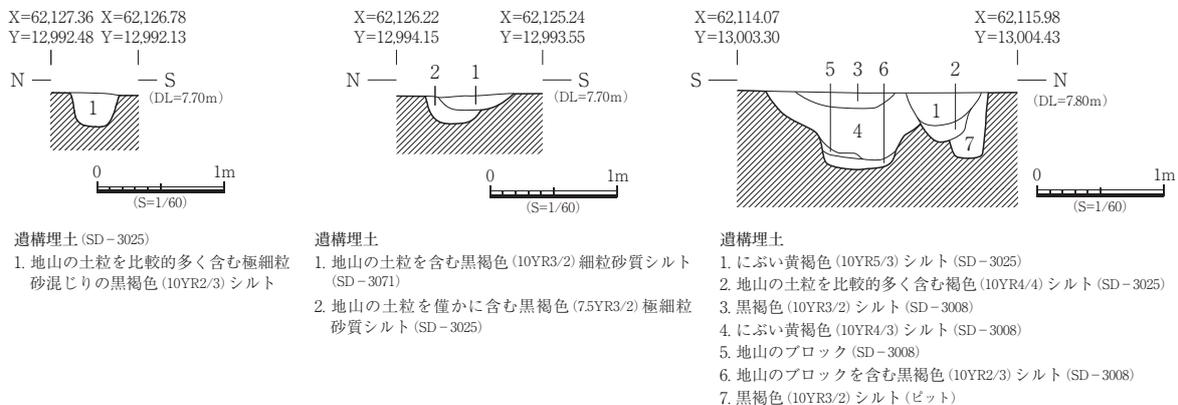


図3-90 SD-3008・3025・3071

**SD-3026** (図3-91)

Ⅲ-1区中央部北側で検出した東西溝であるが、北側はさらに調査区外に延び、南側はSD-3027～3029・3034に掘り込まれており、不明で、かつ遺構検出面である第Ⅲ層上面で検出できた箇所はなく、確認できたのはセクションと下層部の掘方からであった。溝は北の調査区外にさらに延びる。検出長20.75m、検出幅0.38～0.69m、深さ28～43cmを測り、断面形はU字形ないし逆台形を呈する。基底面は西(7.326m)から東(7.163m)に傾斜し、概ね南東(N-139°-E)に延びる。埋土は、黒褐色(10YR3/1)シルトを主体に地山(シルト混じりの)にぶい黄褐色(10YR4/3)極細粒砂)の土粒を若干含む箇所もあった。出土遺物には弥生土器3点、土師器1点、土師質土器8点がみられたが、図示できるものはなかった。

**SD-3027** (図3-91)

Ⅲ-1区中央部北側で、SD-3026を切った形で検出した東西溝で、北側はさらに調査区外に延び、南側はSD-3028・3029・3034に掘り込まれており、不明で、かつSD-3026同様、遺構検出面である第Ⅲ層上面で検出できた箇所はなく、確認できたのはセクションと下層部の掘方からであった。検出長15.27m、検出幅0.29～0.46m、深さ54～58cmを測り、断面形は概ね逆台形を呈する。基底面は西(7.081m)から東(7.070m)に若干傾斜し、概ね南東(N-139°-E)に延びる。埋土は、黒色(7.5YR2/1)シルトを主体に地山(シルト混じりの)にぶい黄褐色(10YR4/3)極細粒砂)の土粒を少し含む箇所や黒褐色(10YR3/2)シルトをラミナ状に含む箇所もあった。出土遺物には須恵器2点、土師質土器3点がみられたが、図示できるものはなかった。

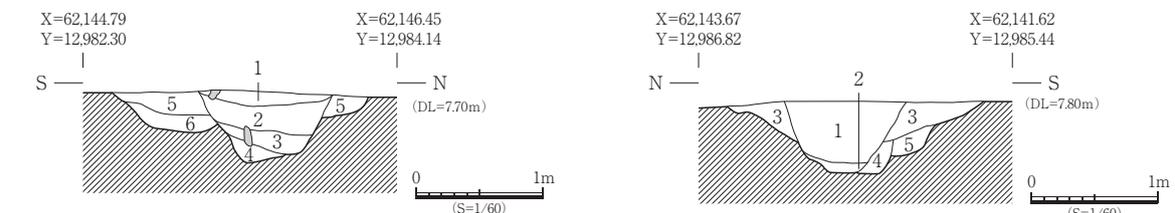
**SD-3028** (図3-91)

Ⅲ-1区中央部北側で、SD-3026・3027を切った形で検出した東西溝で、北側はさらに調査区外に延び、南側はSD-3029・3034に掘り込まれており、不明で、かつ溝全体を確認できたところはなかった。検出長17.68m、検出幅1.08～2.22m、深さ19～35cmを測り、断面形は概ね舟底形を呈する。基底面は西(7.428m)から東(7.350m)に傾斜し、概ね南東(N-138°-E)に延びる。埋土は、地山(シルト混じりの)にぶい黄褐色(10YR4/3)極細粒砂)の土粒を少し含む黒褐色(10YR2/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器32点、土師器95点、須恵器6点、黒色土器1点、土師質土器5点、瓦質土器3点がみられたが、図示できたのは須恵器1点(3249)のみであった。

出土遺物

須恵器(図3-93 3249)

口径10cmと小型の杯身で、たち上がりは短く反り上がり、端部は細い。残部には回転ヘラ削り調整



- 遺構埋土
1. 褐色(10YR4/6)細粒砂質シルト粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルト(SD-3029)
  2. マンガン粒を含む黒褐色(10YR3/1)シルト(SD-3029)
  3. 黒褐色(7.5YR3/1)シルト(SD-3029)
  4. 黒褐色(10YR3/2)シルトをラミナ状に含む黒色(7.5YR2/1)シルト(SD-3027)
  5. 地山の土粒を少し含む黒褐色(10YR2/2)シルト(SD-3028)
  6. 地山の土粒を若干含む黒褐色(10YR3/1)シルト(SD-3026)

- 遺構埋土
1. 黒褐色(7.5YR3/1)シルト(SD-3029)
  2. 地山の土粒をラミナ状に含む黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト(SD-3029)
  3. 地山の土粒を少し含む黒褐色(10YR2/2)シルト(SD-3028)
  4. 黒褐色(10YR3/2)シルトをラミナ状に含む黒色(7.5YR2/1)シルト(SD-3027)
  5. 地山の土粒を若干含む黒褐色(10YR3/1)シルト(SD-3026)

図3-91 SD-3026～3029

は認められない。胎土には白色細粒砂から粗粒砂を少し含む。

**SD-3029** (図3-91)

Ⅲ-1区中央部北側で、SD-3026～3028を切った形で検出した東西溝で、北側はさらに調査区外に延び、南側はSD-3034に掘り込まれており、不明である。検出長18.91m、検出幅0.96～1.07m、深さ38～57cmを測り、断面形は逆台形ないしU字形を呈する。基底面は東(7.117m)から西(7.040m)に若干傾斜し、概ね北西(N-49°-W)に延びる。埋土は、黒褐色(10YR2/2)シルトを主に地山(シルト混じりの)にぶい黄褐色(10YR4/3)極細粒砂)の土粒を含む度合いにより2～3層に分層される。出土遺物には弥生土器11点、土師器73点、須恵器15点、土師質土器44点、瓦器3点がみられ、土師器1点(3250)、須恵器1点(3251)、土師質土器2点(3252・3253)、瓦器1点(3254)が図示できた。

**出土遺物**

土師器(図3-93 3250)

甕の把手で、小さな舌状を呈し、僅かに反る。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

須恵器(図3-93 3251)

甕で、口縁部は胴部からくの字形を呈し、端部を肥厚する。胎土には細粒砂から粗粒砂を主に一部細礫を含む。

土師質土器(図3-93 3252・3253)

3252は杯で、口縁部はやや凸状をなす底部から上外方に上がり、端部は丸い。成形技法はA技法で、底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

3253は小皿で、口縁部は短く外反し、端部は丸い。成形技法はA技法で、底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土には細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

瓦器(図3-93 3254)

椀で、体部は内湾して上がり、外面には指押えの痕が残る。底部外面には高さ4mmの比較的しっかりした高台が付く。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

**SD-3030** (図3-92)

Ⅲ-1区中央部の緩斜面に沿った形で検出した南北溝で、北側はSD-3034に掘り込まれており、不明である。方向的にSD-3023やSD-3024に繋がる可能性がある。検出長29.05m、検出幅0.52～0.90m、深さ27～54cmを測り、断面形は概ねU字形を呈する。基底面は南(7.176m)から北(7.101m)に若干傾斜し、概ね北西(N-37°-W)に延びる。埋土は、黒褐色(10YR2/2)シルトを主に暗褐色(10YR3/3)シルトの小ブロックと地山(シルト混じりの)にぶい黄褐色(10YR4/3)極細粒砂)のブロックを含む度合いにより上下2層に分層される。出土遺物には弥生土器6点、土師器20点、須恵器31点、土師質土器15点、瓦器6点、

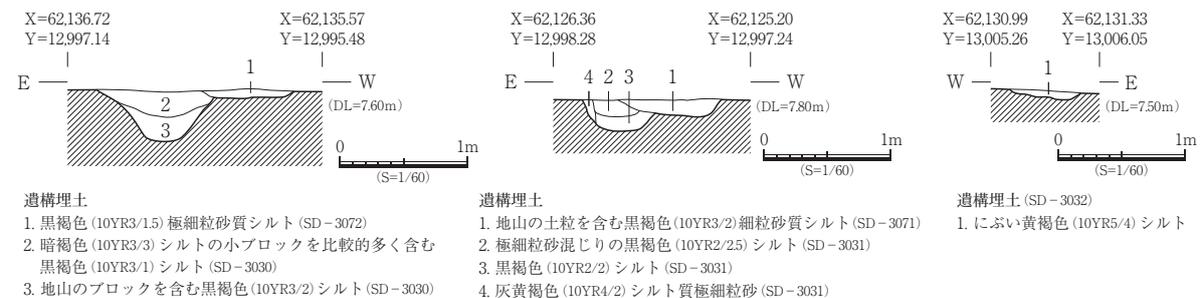


図3-92 SD-3030～3032・3071・3072

瓦質土器1点がみられ、須恵器1点(3255)、瓦器1点(3256)、瓦質土器1点(3257)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-93 3255)

甕で、口縁部は短く外反し、端部は上下に凹線を施すことにより凸帯を作り出す。胎土には白色極細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

瓦器(図3-93 3256)

椀で、口縁部は内湾気味に上がり、端部は丸い。口縁部外面には一段のヨコナデ調整、体部外面には指押えを行った上にナデ調整を加えた後でヘラ磨きを部分的に施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

瓦質土器(図3-93 3257)

壺とみられるもので、口縁部は外反し、端部を外側に肥厚する。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

SD-3031(図3-87・92)

Ⅲ-1区中央部の緩斜面に沿った形で検出した南北溝で、北側と南側はSD-3034に掘り込まれており、不明である。また、溝はSD-3023を切り、SD-3072に掘り込まれていた。検出長34.71m、検出幅0.42~0.89m、深さ13~32cmを測り、断面形は概ねU字形を呈する。基底面は北(7.433m)から南(7.380m)に若干傾斜し、概ね南東(N-132°-E)に延びる。埋土は、黒褐色(10YR3/1)シルト質極細粒砂単一層となるところと黒褐色(10YR2/2~3/2)シルトを主に2~3層に分層されるところがあった。また、生物擾乱の影響がみられるところもあった。出土遺物には須恵器1点、土師質土器24点、瓦器2点、瓦質土器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-3032(図3-92)

Ⅲ-1区中央部の緩斜面に沿った形で検出した南北溝で、5本に分断された形となるが、配置と検出状況から1本の溝と考えられる。また、溝はSD-3019を掘り込んでいる。検出長33.44m、検出幅0.31

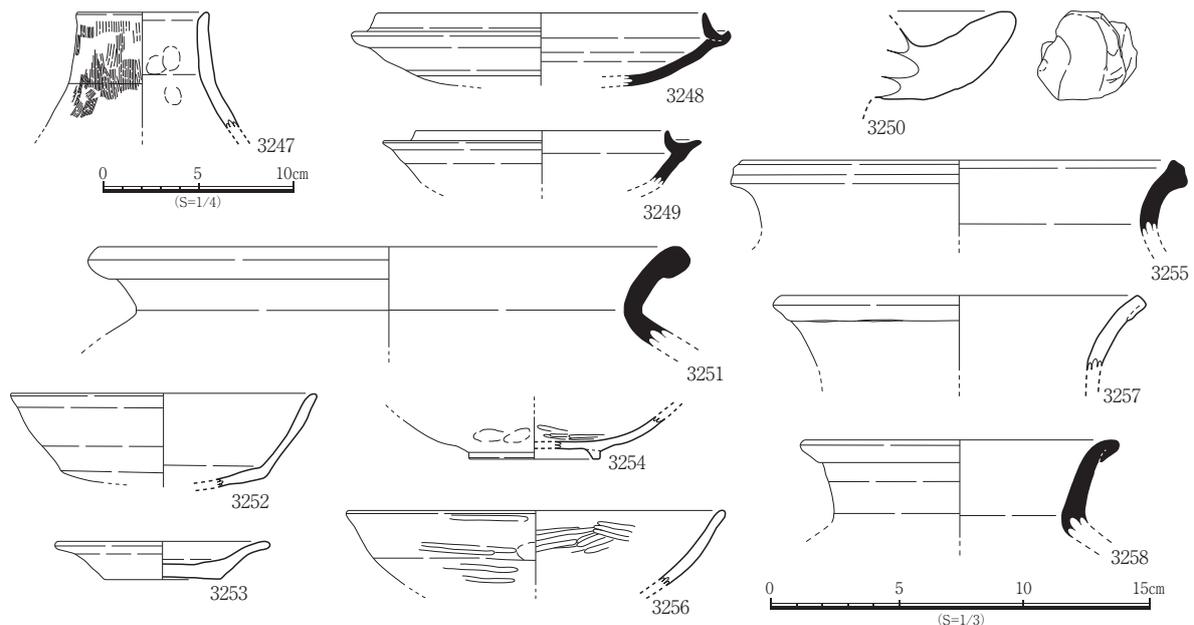


図3-93 SD-3025・3028~3030・3032出土遺物実測図

1. Ⅲ区 (4) 古代後半から中世

～1.17m, 深さ5～9cmを測り, 断面形は概ね逆台形を呈する。基底面は北(7.402m)から南(7.323m)に若干傾斜し, 概ね南東(N-132°-E)に延びる。埋土は, にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト単一層のところと地山(黒色(10YR2/1)シルト)の小ブロックを少し含むところがあった。出土遺物には弥生土器1点, 土師器4点, 須恵器6点, 土師質土器3点がみられ, 須恵器1点(3258)が図示できた。

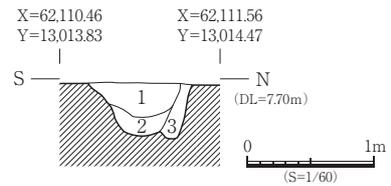
出土遺物

須恵器(図3-93 3258)

壺で, 口縁部は胴部から屈曲して短く外傾し, 端部を肥厚する。胎土には白色中粒砂から細礫を比較的多く含む。

SD-3033(図3-94)

Ⅲ-1区中央部南東の緩斜面に沿った形で検出した東西溝で, SD-3036に掘り込まれ, 西側は判然としないが, 前述のとおりSD-3025に繋がる可能性がある。検出長10.11m, 検出幅0.74～0.87m, 深さ36～49cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。基底面は西(7.237m)から東(7.149m)に傾斜し, 概ね南東(N-144°-E)に延びる。埋土は, 暗褐色(10YR3/3)～褐灰色(10YR4/1)シルトを主体に地山(浅黄色(5Y7/3)細粒砂と黄橙色(10YR7/8)砂質シルト)の土粒を含む度合いにより, 上下2層に分層される。出土遺物には弥生土器1点, 土師器3点, 土師質土器2点がみられたが, 図示できるものはなかった。



- 遺構埋土
1. 地山の土粒を僅かに含む暗褐色(10YR3/3)シルト(SD-3033)
  2. 地山の土粒を比較的多く含む褐灰色(10YR4/1)シルト(SD-3033)
  3. 地山の土粒を多く含む暗褐色(10YR3/3)シルト(ピット)

図3-94 SD-3033

SD-3034(図3-22・95～97)

Ⅲ-1区中央, 北西部から南東部で検出した東西溝である。多くの溝を掘り込み, この時期の中心的な溝で, 北壁から東南東方向に延びた後, 南に屈曲し緩斜面に沿って延び, さらに南の調査区外へ続く。検出長88.03m, 検出幅1.23～2.47m, 深さ29～65cmを測り, 断面形はU字形ないし逆台形を呈する。基底面は西(7.116m)から東(7.104m)に若干傾斜し, 東南東(N-110°-E)に延びた後, 南に屈曲し, 緩斜面に沿って南東(N-135°-E)に延びる。埋土は, 黒褐色(10YR3/2～7.5YR3/1)シルトないしシルト質細粒砂を主体に2～3層に分層される。多くの溝を切って掘り込まれている関係で出土遺物は多く, 弥生土器138点, 土師器1,016点, 須恵器206点, 黒色土器6点, 土師質土器954点, 瓦器9点, 東播系須恵器1点, 石製品7点, 白磁1点, 青磁1点がみられた。この内, 図示できたものは土師器19点(3259～3277), 須

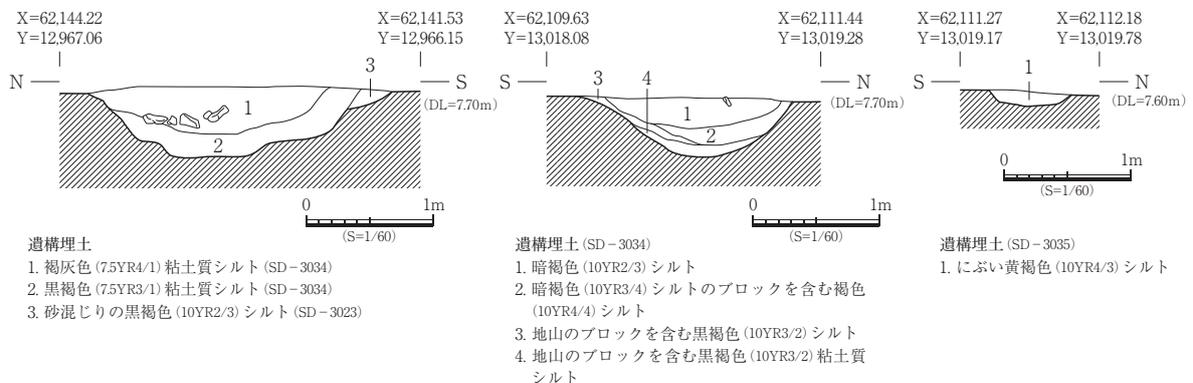


図3-95 SD-3023・3034・3035

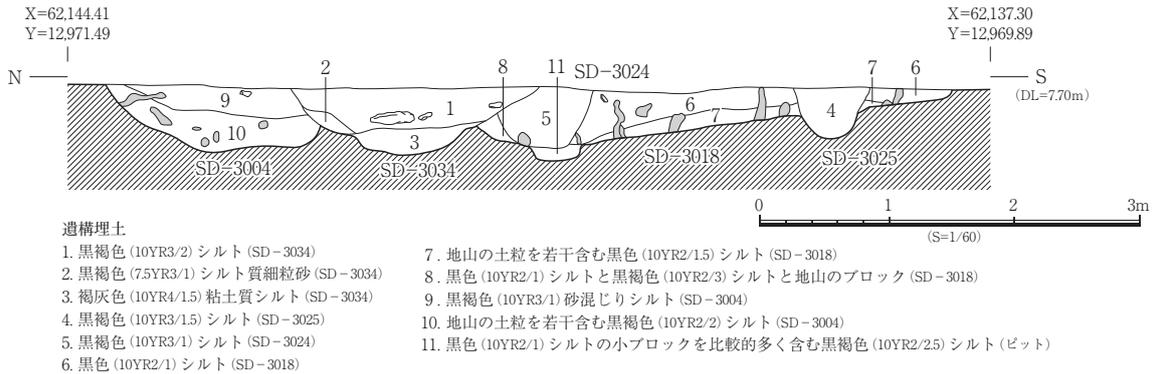


図3-96 SD-3004・3018・3024・3025・3034

恵器18点(3278~3295), 土師質土器46点(3296~3341), 黒色土器2点(3342・3343), 瓦器1点(3344), 東播系須恵器1点(3345), 石製品4点(3346~3349)であった。

出土遺物

土師器(図3-98 3259~3277)

3259~3263は古墳時代後期の甕の口縁部で, ほぼ外反し, 端部を丸く仕上げる。調整は不明瞭なものもみられるがヨコナデ調整を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く, ないしは多く含む。3264~3266は甕の把手で, 3264と3266は角状, 3265は舌状を呈し, 3265にはハケ目が残る。胎土には, 3264と3266が細粒砂から極粗粒砂を多く含み, 3265が細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。3267~3269も甕の口縁部で, 3267は, 口縁部が丸い胴部から短く外反し, 端部は浅い凹面をなす。胎土には粗粒砂を主に細粒砂から極粗粒砂を多く含む。3268と3269は, 口縁部がほぼ直立する胴部から大きく屈曲するもので, 短い口縁端部は浅い凹面をなす。3269の口縁部内面にはハケ目が残る。

3270~3276は羽釜で, 胴部は直立し, そのまま口縁部に至り, 口縁部外面に断面台形状の鏝が巡る。鏝は, 3270・3274・3275が口縁端部から, それ以外は口縁端部やや下に付く。3273は接合痕跡が明瞭に残り, 煤が付着する。3274は, 鏝下半に指押えとナデ調整, 胴部外面にハケ調整の後にナデ調整を加える。胎土は細粒砂から極粗粒砂ないし細礫を多く含む。

3277は高杯で, 小型でありミニチュアの可能性もある。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

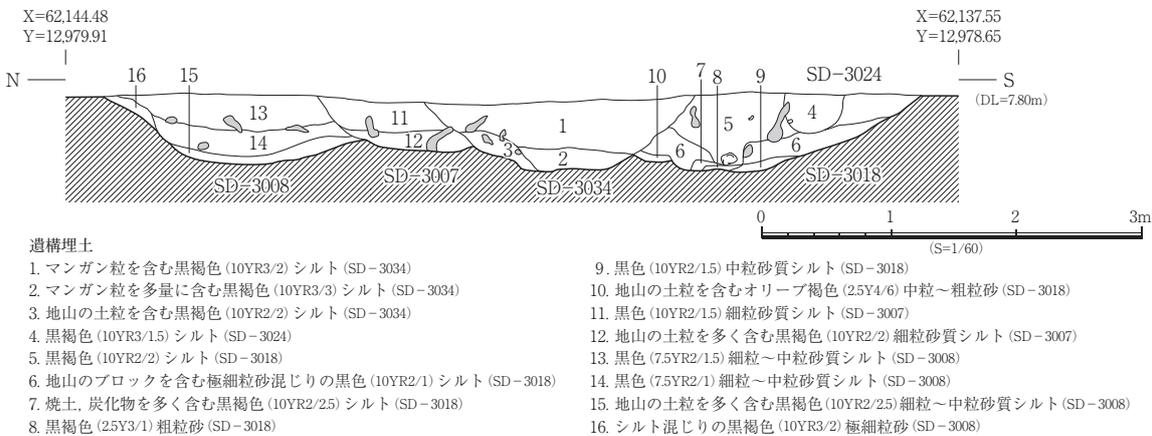


図3-97 SD-3007・3008・3018・3024・3034

1. Ⅲ区 (4) 古代後半から中世

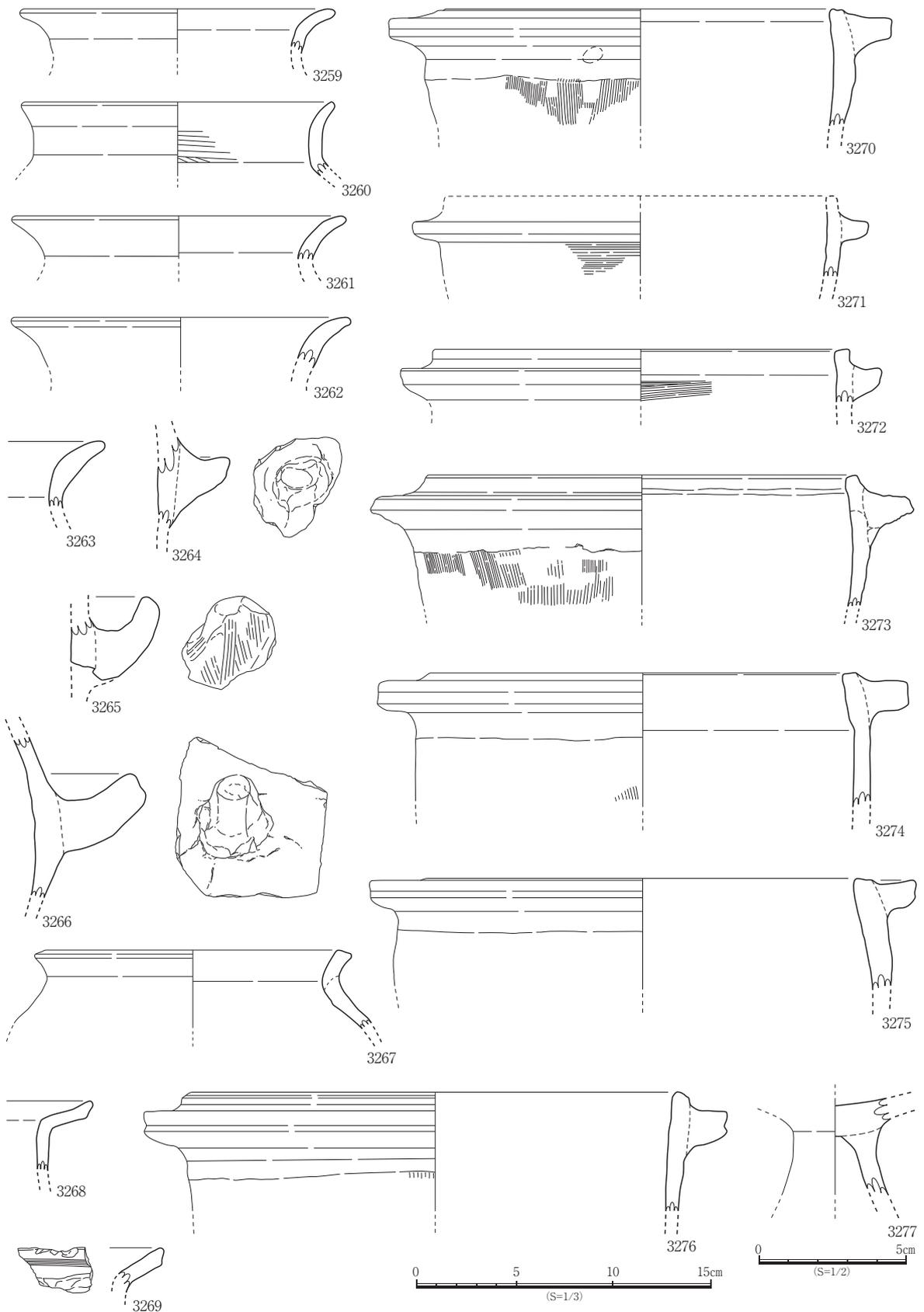


図3-98 SD-3034出土遺物実測図1

須恵器(図3-99 3278~3295)

3278と3279は杯蓋で、前者は口径11.2cmと小型である。いずれも天井部と口縁部の境は不明瞭で、屈曲によってそれを識別できる程度である。胎土にはいずれも白色細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。3280と3281は杯身で、たち上がりは低い。3280の底部外面には回転ヘラ削り調整の痕跡は

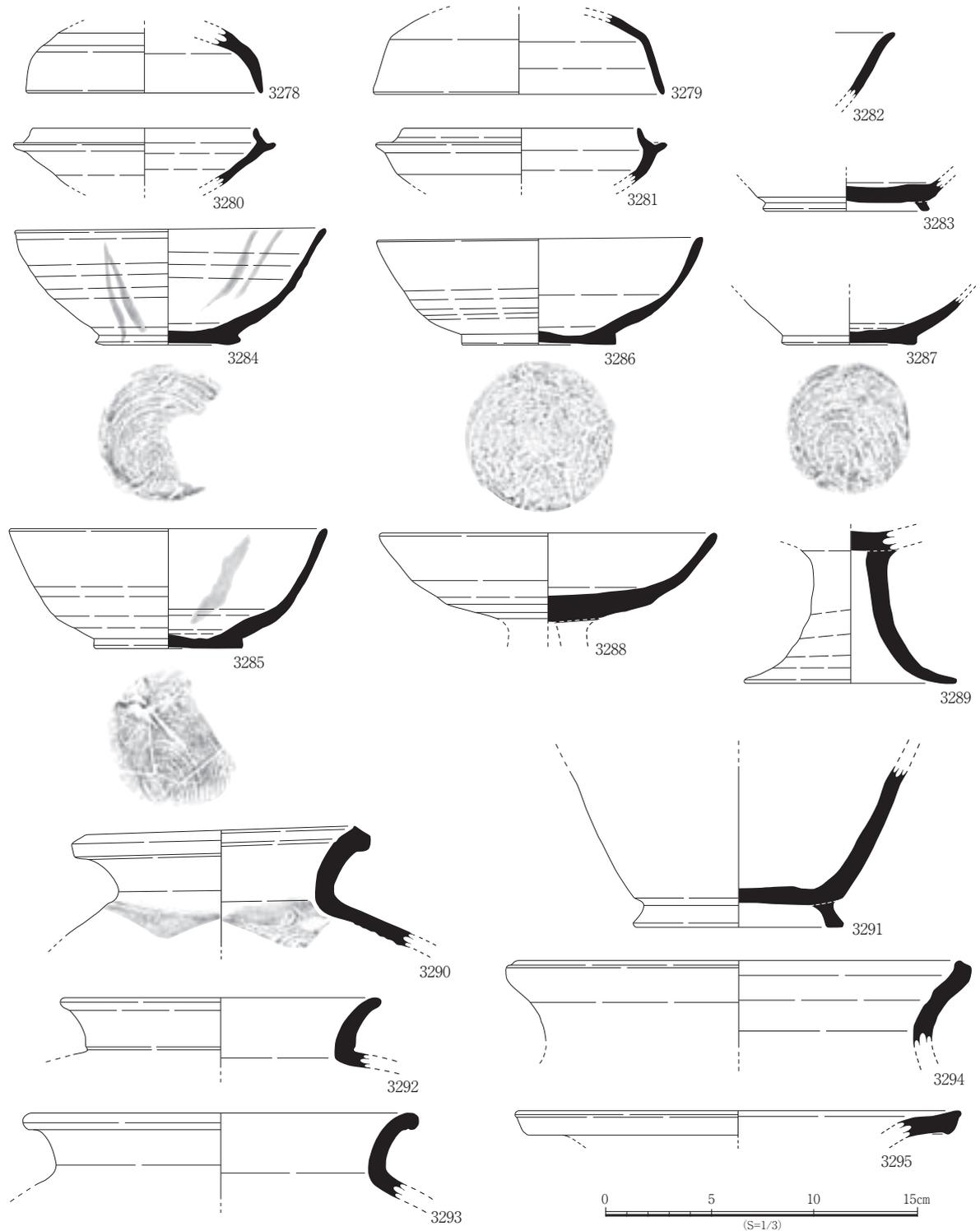


図3-99 SD-3034出土遺物実測図2

認められない。胎土には、3280が細粒砂から中粒砂を若干含む、3281が細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。3282も杯身で、口縁部は体部からやや外反し、端部は丸い。胎土には細粒砂から中粒砂を若干含む。3283は高台が残る杯身で、回転ヘラ切り底の底部外端には高さ5mmのハの字形の高台が付く。体部外面下端には回転ヘラ削り調整の痕跡が残る。胎土には白色粗粒砂を比較的多く含む。

3284～3287はベタ高台の椀で、体部は内湾気味に上がり、口縁部は上外方にほぼ真直ぐ立ち上がる。成形技法は従来の粘土紐巻き上げミズビキ成形(A技法)とは異なり、粘土塊から一気にミズビキ成形(B技法)している。内底面中央部にはミズビキ成形の際に残った高まりが3285と3286にはよく残る。底部の切り離しはいずれも回転糸切りによる。胎土は全般に精良で、3284が細粒砂から粗粒砂を少し、3285が細粒砂から粗粒砂を若干、3286が白色細粒砂を少し、3287が細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

3288と3289は高杯で、3288は古墳時代後期の杯蓋をひっくり返したような杯部となり、底部外面には回転ヘラ削り調整の痕跡が残る。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。3289はほぼ直立する脚柱部と大きく広がる裾部からなる。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

3290は短頸壺で、口縁部が丸い胴部から外反し、端部を肥厚する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。3291は長頸壺の下胴部ではないかとみられるもので、底部外面には高さ1.3cmのハの字形に開く高台が付く。内底面の中央約5cmの範囲には自然釉が付着する。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

3292～3295は甕で、3292は、口縁部が肩の張る胴部から大きく屈曲し、外反する。胎土には細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。3293は、口縁部が外反し、端部を肥厚する。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。3294は、口縁部が外反して後、端部がやや内傾する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。3295は、口縁部が大きく外反し、端部は浅い凹面をなす。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

#### 土師質土器(図3-100・101 3296～3341)

3296～3308は全体が復元できる小杯で、口径9.6～11.8cm、器高2.7～3.7cm、底径6.2～7.8cmを測り、口縁部は底部から上外方にほぼ真直ぐ立ち上がる。器壁は概して体部より口縁部が厚くなる。成形にはA技法(3296・3299～3304・3307)とB技法(3297・3298・3305・3306)がみられるものの、底部の切り離しは回転ヘラ切りであり、ナデ調整を加えるもの(3296・3300・3307・3308)もみられる。また、底部の器壁はA技法の方がB技法のものに比べ相対的に厚くなっている。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含むものが大半である。

3309は口縁部が残る杯で、口縁部はほぼ真直ぐ上外方に上がり、端部は丸い。粘土紐の接合痕が明瞭に残り、成形技法はA技法である。胎土は精良で、細粒砂から粗粒砂を若干含む。

3310～3316は杯ないし小杯の底部とみられるもので、底径は6.0～7.0cmを測る。成形技法はいずれもA技法とみられ、底部の切り離しは3312が回転糸切りである以外は回転ヘラ切りとなり、3315には板状圧痕がみられる。胎土には、3310と3311が細粒砂から粗粒砂を若干含むのに対し、それ以外には含む粒形に差異はあるもののいずれも砂粒を比較的多く含んでいる。

3317～3323は皿で、器高が3cm未満(3317～3321)と3cm以上(3322・3323)の二種類に分れる。口縁部は斜め上方に短くたち上がり、小杯のように口縁部上半は下半に比べ厚くなるもの(3317・3319・3323)もみられる。成形技法はいずれもA技法で、底部の切り離しは回転ヘラ切りとなり、3318には

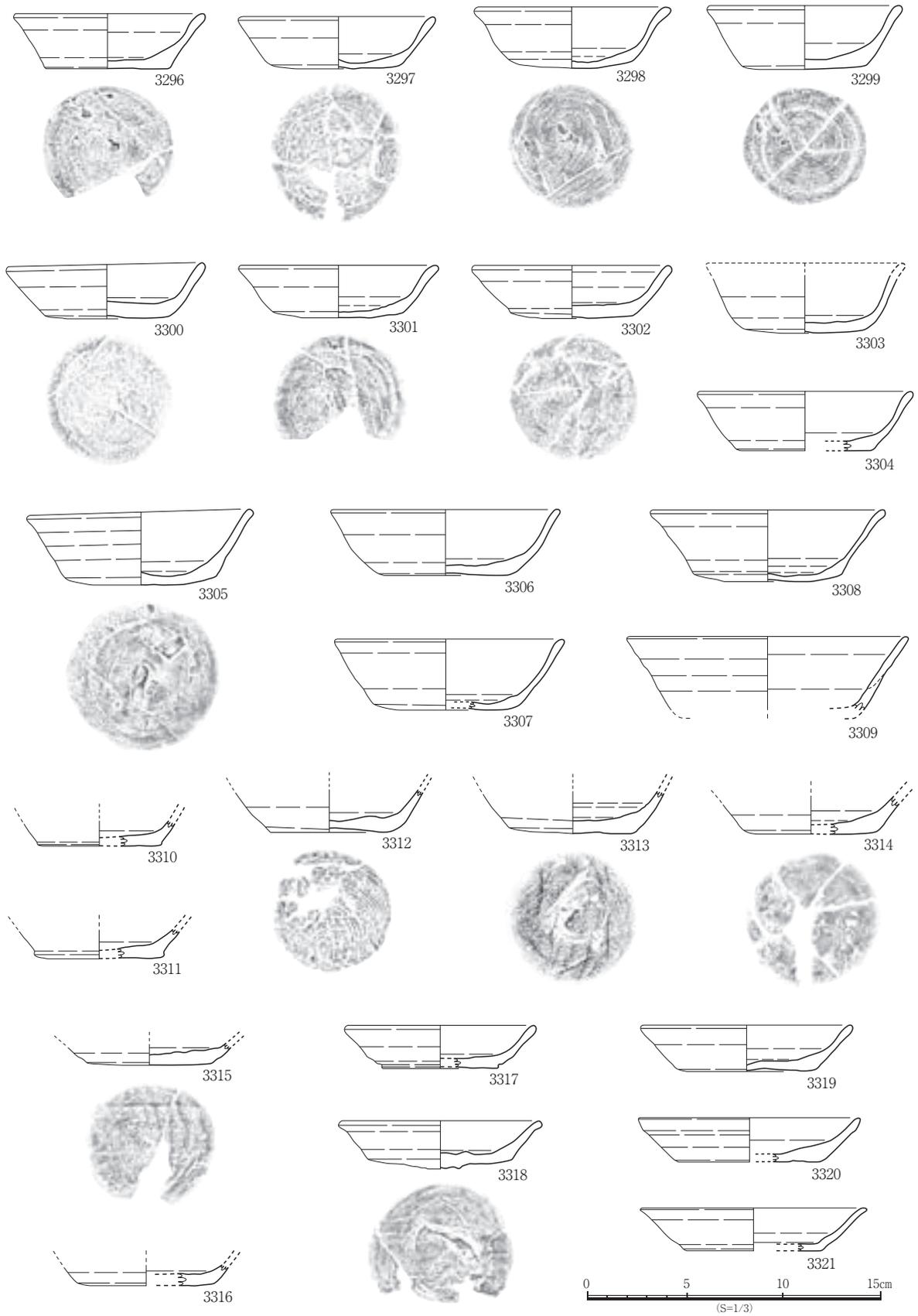


図3-100 SD-3034出土遺物実測図3

1. Ⅲ区 (4) 古代後半から中世

ヘラナデ調整を加えている。3323の内面では過半で器面が剥離し、外面には煤が付着する。胎土は微妙に異なっており、3317と3318が細粒砂から極粗粒砂を少し含み、3319が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含み、3320と3321が細粒砂から粗粒砂を若干含み、3322が細粒砂から中粒砂を若干含み、3323が細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

3324と3325は小皿で、成形技法は、3324がB技法、3325がA技法となり、底部の切り離しは前者が回転糸切り、後者が回転ヘラ切りによる。胎土は前者が精良で、細粒砂から粗粒砂を若干含むのに対し、後者は細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

3326～3341は椀で、3326～3332は口縁部が残存する。成形技法はいずれもB技法である。3326は、底部が回転糸切りのベタ高台となり、体部は内湾し、口縁部で上外方を向く。底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。3327も底部が回転糸切りのベタ高台

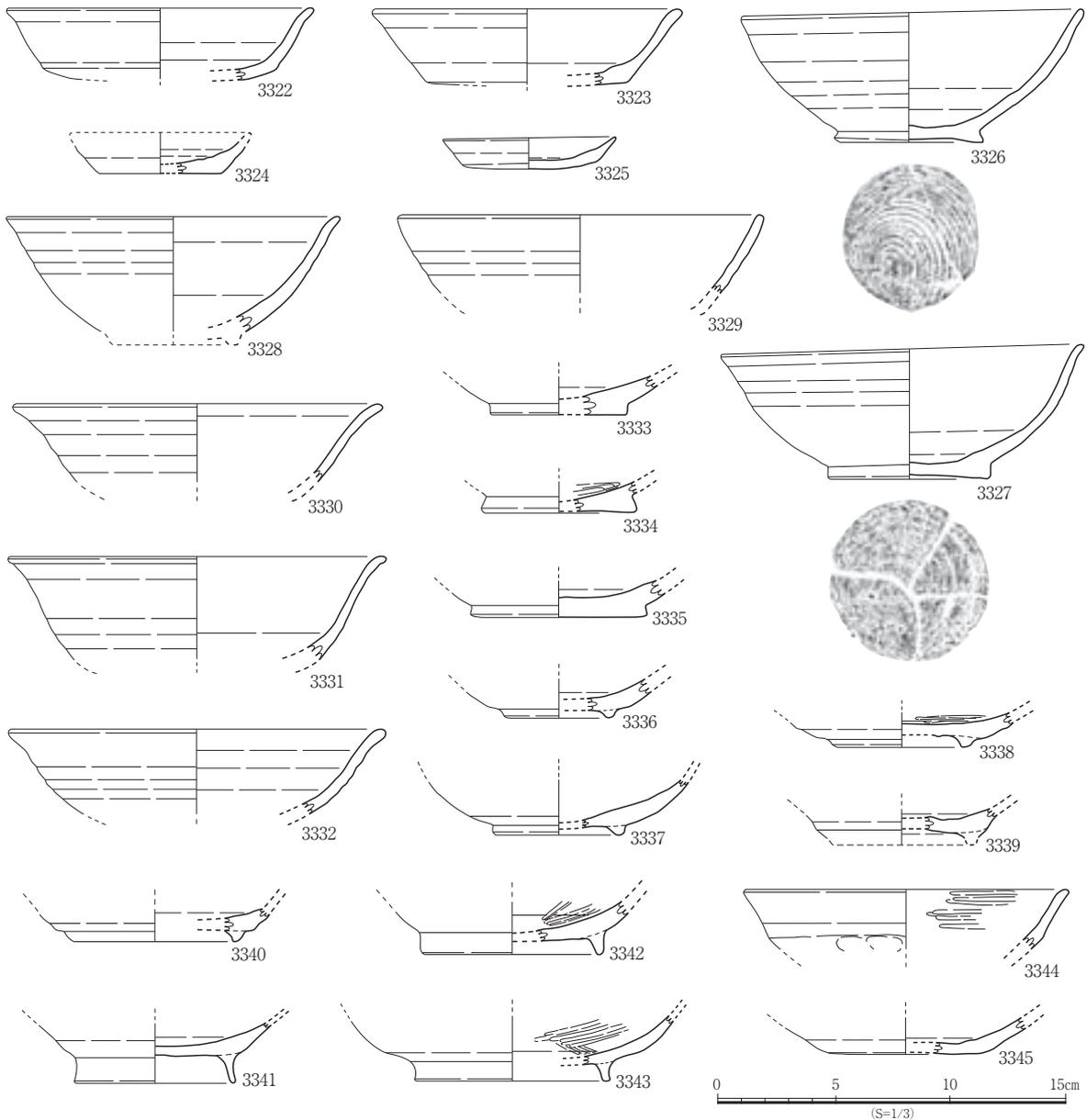


図3-101 SD-3034出土遺物実測図4

となり、体部は内湾し、口縁部で上外方を向くが、端部が小さく外傾する。底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土には、中粒砂から細礫を比較的多く含む。3328は3327とほぼ同形態で、胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。3329は3328とほぼ同形態で、胎土には細粒砂から粗粒砂を若干含む。3330は3327に近い形態で、胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。3333～3341は底部で、3333～3335はベタ高台となるもので、成形技法はいずれもA技法であり、底部の切り離しは、3333が回転ヘラ切り、3334と3335が回転糸切りとなっている。3334は内底面に回転ナデ調整の後にヘラ磨き、底部外面は回転糸切り後に不定方向のヘラ磨きを加える。胎土は精良で、3333には細粒砂から粗粒砂を少し含む、3334には細粒砂から中粒砂を若干含む、3335には細粒砂から粗粒砂を若干含む。3336～3341は貼付け高台となるもので、高台は、3336～3339が逆台形状、3340が逆三角形形状、3341が高高台となる。3337の体部外面には回転ヘラ削り、3338の内面にはナデ調整の後にヘラ磨きを加える。成形技法はいずれもA技法で、胎土には、3336・3338・3339・3341が細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む、3337が細粒砂から極粗粒砂を若干含む、3340が細粒砂から粗粒砂を少し含む。

黒色土器(図3-101 3342・3343)

いずれも椀で、3342は、体部がやや内湾してたち上がり、底部外端には高さ8mmの高台が付く。胎土には細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。3343は高さ1.1cmの高台が付き、底部は丸味があり、内面にはナデ調整の後にヘラ磨きを加える。胎土には細粒砂から中粒砂を少し含む。

瓦器(図3-101 3344)

椀で、口縁部にはヨコナデ調整、内面には平行線のヘラ磨きを加える。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

東播系須恵器(図3-101 3345)

椀で、体部は平らな底部から斜め上外方を向く。底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

石製品(図3-102 3346～3349)

3346は投弾ではないかとみられるもので、表面は平滑で、石材は粗粒砂岩である。

3347と3348は叩石で、3347は棒状を呈し、両端に敲打痕が残るもの一方の摩滅が目立つ。また、側面には一カ所弱い敲打痕が残る。石材は粗粒砂岩である。3348は丸く扁平なもので、平坦部両面中央部に弱い敲打痕が残る。石材は粗粒砂岩である。

3349は砥石で、2面に使用痕跡が残る。石材は細粒砂岩である。

SD-3035(図3-95)

Ⅲ-1区中央部南東の緩斜面に

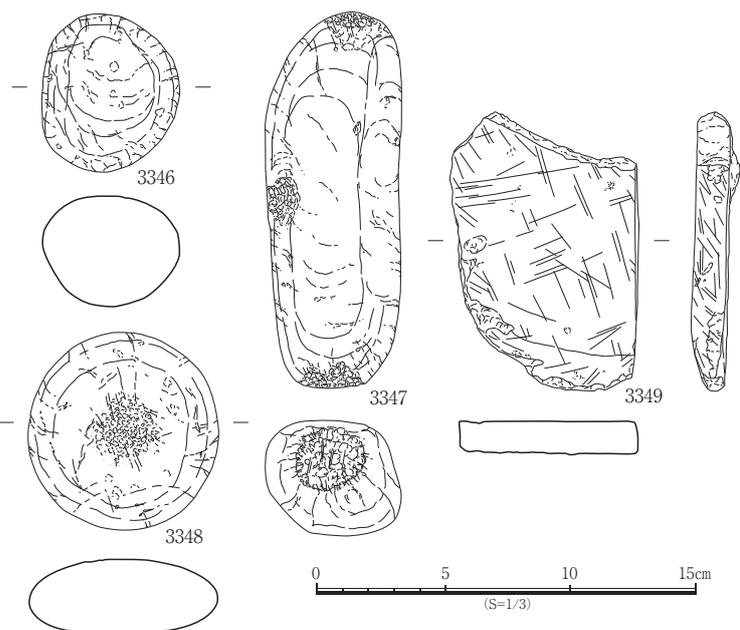


図3-102 SD-3034出土遺物実測図5

1. Ⅲ区 (4) 古代後半から中世

沿った形で検出した東西溝で、SD-3034に掘り込まれ、西側は判然としないが、方向的にSD-3022に繋がる可能性もある。また、SD-3030を切り、東側は途切れるが、調査区外にさらに続く。検出長18.39m、検出幅0.28～0.68m、深さ5～14cmを測り、断面形は逆台形を呈する。基底面は西(7.379m)から東(7.356m)に傾斜し、概ね東南東(N-120°-E)に延びる。確認できた埋土は下層部に堆積していたにぶい黄褐色(10YR4/3)シルトであった。出土遺物には土師器15点、須恵器8点、土師質土器24点がみられたが、図示できるものはなかった。

**SD-3036** (図3-103)

Ⅲ-1区中央部南壁際で検出した南北溝で、SD-3033を切り、SD-3031・3072に掘り込まれ、南は調査区外に延び、方向的にⅢ-4区で検出したSD-3080に繋がる可能性もある。また、北側の基底面は東に曲がり、SD-3034に繋がる可能性も考慮される。検出長7.19m、幅1.33～1.80m、深さ45～50cmを測り、断面形は逆台形を呈する。基底面は南(7.234m)から北(7.209m)に傾斜し、概ね北東(N-44°-E)に延びる。埋土は基本的に3層に分層でき、1層がにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト、2層が地山(黄橙色(10YR7/8)砂質シルト)のブロックを含む灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルト、3層が地山(黄橙色(10YR7/8)砂質シルトと黒褐色(10YR3/1)シルト)のブロックを僅かに含む褐色(10YR5/1)粘土質シルトで、地山のブロックを含む割合により5層に分層されるところもあった。出土遺物には土師質土器25点を中心に弥生土器2点、土師器13点、須恵器3点、瓦器2点、瓦質土器1点がみられたが、図示できたのは混入と見られる弥生土器1点(3350)のみであった。

出土遺物

弥生土器(図3-108 3350)

甕で、口縁部は外反し、端部を丸く仕上げる。胎土には粗粒砂から極粗粒砂を多く含む。

**SD-3037** (図3-103)

Ⅲ-1区中央部南壁際、SD-3036の西隣で検出した南北溝で、SD-3025・3072を切り、南は調査区外に延びるが、Ⅲ-4区では関連すると考えられる溝は検出できなかったため、Ⅲ-1区とⅢ-4区の間で終わるものと思われる。検出長5.92m、幅0.20～0.38m、深さ4～11cmを測り、断面形は概ねU字形を呈する。基底面は北(7.622m)から南(7.604m)に傾斜し、概ね南南西(N-158°-W)に延びる。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト単一層であった。出土遺物には須恵器2点がみられたが、図示できるものはなかった。

**SD-3038** (図3-103)

Ⅲ-1区中央部南壁際、SD-3037の西隣で検出した南北溝で、南は調査区外に延び、方向と規模から

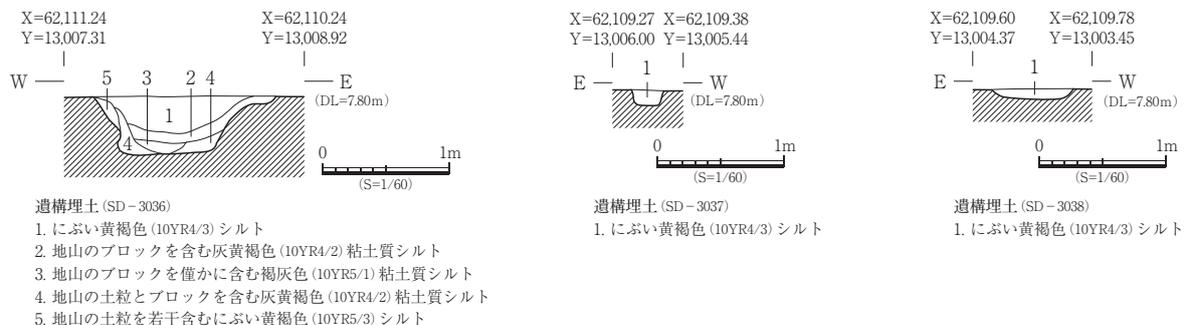


図3-103 SD-3036～3038

みてⅢ-4区で検出したSD-3081と関連すると思われる。検出長2.13m，幅0.18～0.44m，深さ3～11cmを測り，断面形は概ね逆台形を呈する。基底面は北(7.679m)から南(7.529m)に傾斜し，概ね南南西(N-149°-W)に延びる。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト単一層であった。出土遺物はなかった。

**SD-3039** (図3-104)

Ⅲ-1区中央部南壁際，SD-3038の西隣で検出した南北溝で，南は調査区外に延び，方向と規模からみてⅢ-4区で検出したSD-3086と繋がる可能性が強い。検出長5.87m，幅0.37～0.46m，深さ16～20cmを測り，断面形は箱形を呈する。基底面は南(7.537m)から北(7.482m)に傾斜し，概ね北北東(N-31°-E)に延びる。埋土は暗褐色(10YR3/4)砂質シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器4点がみられたが，図示できるものはなかった。

**SD-3040** (図3-104)

Ⅲ-1区西部で検出した短い南北溝である。検出長5.31m，幅0.24～0.43m，深さ4～6cmを測り，断面形は逆台形を呈する。基底面は北(7.602m)から南(7.593m)に若干傾斜し，概ね南(N-177°-W)を向く。埋土は地山(オリブ褐色(2.5Y4/6)シルト混じり極細粒砂)の土粒を比較的多く含む暗褐色(10YR3/3)シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器9点がみられたが，図示できるものはなかった。

**SD-3041** (図3-104)

Ⅲ-1区北東部北壁際で検出した南北溝で，北は調査区外に続く。検出長5.57m，幅0.41～1.40m，深さ4～9cmを測り，北側が広くなり，断面形は逆台形を呈する。基底面は北(7.434m)から南(7.407m)に傾斜し，南側が一段深い溝状の落ち込みとなる。方向は概ね南(N-169°-W)を向く。埋土は地山(淡黄色(2.5Y8/4)極細粒砂)の小ブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルト単一層であった。出土遺物には土師器1点，土師質土器2点がみられたが，図示できるものはなかった。

**SD-3042** (図3-104)

Ⅲ-1区北東部，SD-3041の南側で検出したやや湾曲する東西溝で，西側で枝状に分れる。検出長10.94m，幅0.30～0.92m，深さ2～6cmを測り，断面形は舟底形を呈する。基底面は東(7.520m)から西(7.394m)に傾斜し，概ね西北西(N-64°-W)を向く。埋土は基本的に極細粒砂を含む黒褐色(10YR2/3)砂質シルトで，枝分かれした箇所では褐灰色(10YR5/1)砂質シルトとなっていた。出土遺物はなかった。

**SD-3043** (図3-105)

Ⅲ-1区東部，SD-3044・3045を切った形で検出した南北溝で，2カ所で途切れ，3本に分れるが，一連のものとみられる。検出長18.38m，幅0.12～0.56m，深さ3～13cmを測り，断面形は舟底形を呈する。基底面は北(7.532m)から南(7.357m)に傾斜し，概ね南南西(N-161°-W)に延びる。埋土は地山(浅黄色(2.5Y7/4)シルト質極細粒砂)の土粒を含む黒褐色(10YR2/3)シルトであった。出土遺物には土師器7点，須恵器1点，土師質土器9点がみられたが，図示できるものはなかった。

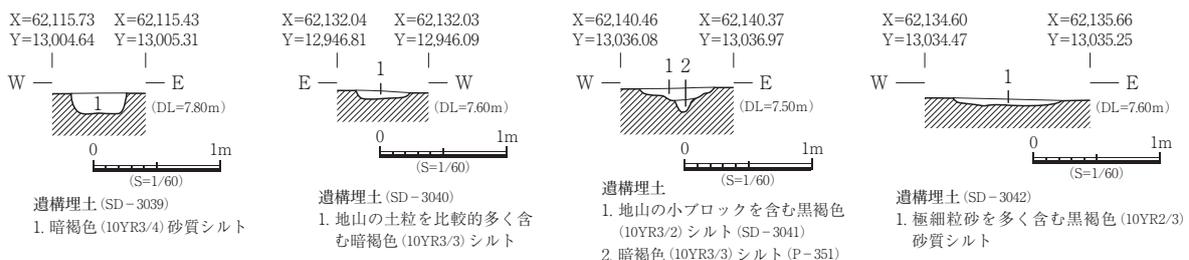


図3-104 SD-3039～3042, P-351

**SD-3044** (図3-105)

Ⅲ-1区東部, SD-3043 に掘り込まれた形で検出した短い東西溝で, 等高線に沿っている。検出長8.09m, 幅0.31~0.69m, 深さ6~13cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。基底面は東(7.592m)から西(7.519m)に少し傾斜し, 概ね北西(N-56°-W)を向く。埋土は細粒中礫を多く含む暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂単一層であった。出土遺物には土師器1点, 土師質土器11点がみられたが, 図示できるものはなかった。

**SD-3045** (図3-105)

Ⅲ-1区東部, SD-3044 の南側でSD-3043 に掘り込まれた形で検出した細く短い東西溝である。検出長5.73m, 幅0.20~0.36m, 深さ3~9cmを測り, 断面形は舟底形を呈する。基底面は東(7.553m)から西(7.460m)に傾斜し, 概ね西北西(N-59°-W)を向く。埋土は地山(にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質シルト)のブロックを僅かに含む黒褐色(10Y2/3)シルト単一層であった。出土遺物には土師器1点, 土師質土器2点がみられたが, 図示できるものはなかった。

**SD-3046** (図3-105)

Ⅲ-1区東部, SD-3045 の西側でSU-305 を切り, SK-329 に掘り込まれた形で検出した細い東西溝である。検出長8.41m, 幅0.20~0.34m, 深さ2~4cmを測り, 断面形は舟底形を呈する。基底面は東(7.397m)から西(7.380m)に若干傾斜し, 概ね西北西(N-74°-W)を向く。埋土は地山(にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質シルト)のブロックを僅かに含む暗褐色(10YR3/4)シルト単一層であった。出土遺物には土師器1点, 土師質土器1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

**SD-3047** (図3-105)

Ⅲ-1区東端部, 東壁際で検出した細い南北溝である。検出長1.81m, 幅0.12~0.20m, 深さ6~10cmを測り, 断面形は舟底形を呈する。基底面は7.482~7.483mとほぼ平坦で, 概ね北(N-11°-E)を向く。埋土は地山(にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質シルト)のブロックを僅かに含む暗褐色(10YR3/4)シルト単一層であった。出土遺物はなかった。

**SD-3048** (図3-106)

Ⅲ-1区東端部東壁際, SD-3049 の西隣, SB-312 の東側柱に沿う形で検出した細い南北溝である。検出長6.67m, 幅0.18~0.50m, 深さ4~9cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。基底面は南(7.548m)から北(7.543m)に若干傾斜し, 概ね北北東(N-17°-E)を向く。埋土は細粒砂から細粒中礫及び地山(にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質シルト)のブロックを含む暗褐色(10YR3/4)シルト単一層であった。出土遺物には土師器1点, 土師質土器1点, 瓦器1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

**SD-3049** (図3-106)

Ⅲ-1区東端部東壁際, SD-3048 の東隣, SB-312 の東側柱に沿う形で検出した細い南北溝で, 区

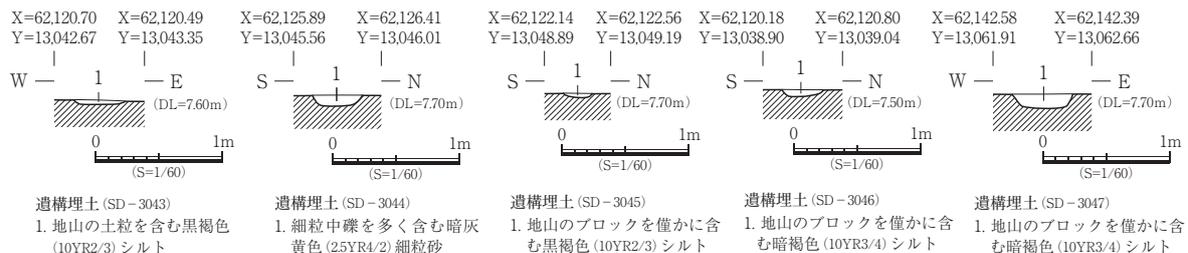


図3-105 SD-3043~3047

画溝の可能性が考えられる。検出長13.05m，幅0.16～0.64m，深さ4～8cmを測り，断面形は概ね逆台形を呈する。基底面は北(7.544m)から南(7.538m)に若干傾斜し，概ね南南西(N-165°-W)に延びる。埋土は細粒砂から細粒中礫及び地山(にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質シルト)のブロックを含む暗褐色(10YR3/4)シルト単一層であった。出土遺物には土師器66点，須恵器2点，土師質土器1点，瓦質土器1点がみられたが，図示できるものはなかった。

**SD-3050** (図3-106)

Ⅲ-1区東端部東壁際，SD-3051に掘り込まれた状態で検出した南北溝で，北側が広く一段深い落ち込みとなり，そこを境に一方は東側に続き，一方は南に延び，南端部がピット状の落ち込みとなる。検出長6.80m，幅0.52～2.20m，深さ20～28cmを測り，断面形は逆台形ないしU字形を呈する。基底面は北(7.370m)から南(7.327m)に若干傾斜し，概ね南南西(N-167°-W)を向く。埋土は，基本的に上層が暗褐色(10YR3/3)シルト質細粒砂と下層が褐灰色(10YR4/1)細粒砂でいずれも地山(にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質シルト)のブロックを含んでいた。また，南側のピット部分では黒褐色(10YR2/3)シルトを主体とする堆積が下層部で認められた。出土遺物には弥生土器1点，土師器12点，須恵器10点，土師質土器44点，瓦器3点がみられ，土師器1点(3351)と瓦器1点(3352)が図示できた。

出土遺物

土師器(図3-108 3351)

高杯の脚台部で，中空となり，9面に面取りされ，内面にはしぼり目が残る。胎土は精良で，白色と褐色の中粒砂を少し含む。

瓦器(図3-108 3352)

椀で，丸味のある底部外面にはハの字形に開く矩形で高さ4mmの高台が付く。胎土には細粒砂から粗粒砂を中心に細礫を一部に含む。

**SD-3051** (図3-106)

Ⅲ-1区東端部東壁際，SD-3050を切り，SD-3052に掘り込まれた形で検出した細い南北溝である。検出長10.58m，幅0.26～0.60m，深さ4～12cmを測り，断面形は概ね逆台形を呈する。基底面は北(7.508m)から南(7.323m)に傾斜し，概ね南南西(N-168°-W)に延びる。埋土は地山(浅黄色(2.5Y7/3)シルト質極細粒砂)のブロックを含む暗褐色(10YR3/3)シルト単一層であった。出土遺物はなかった。

**SD-3052** (図3-106)

Ⅲ-1区東端部東壁際，SD-3051を掘り込んだ形で検出した細い南北溝である。検出長7.22m，幅0.21～0.45m，深さ6～15cmを測り，断面形は概ね逆台形を呈する。基底面は北(7.371m)から南(7.338m)に少し傾斜し，概ね南(N-171°-W)に延びる。埋土は地山(浅黄色(2.5Y7/3)シルト質極細粒砂)のブロックを

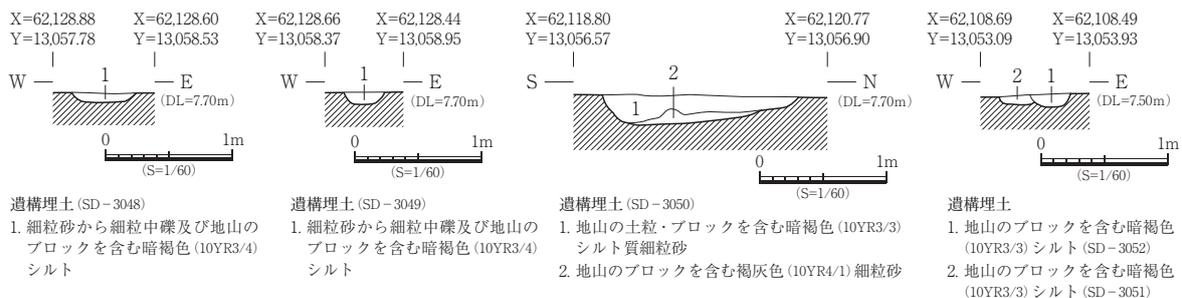


図3-106 SD-3048～3052

含む暗褐色(10YR3/3)シルト単一層であった。出土遺物はなかった。

**SD-3053** (図3-107・118)

Ⅲ-1区西端部から中央部南端に緩やかなカーブを描いて延びる東西溝で、交わる各溝に掘り込まれ、両端は調査区外に続く。Ⅲ-2区で検出したSD-3118が方向と規模からみて同一の可能性も考えられる。検出長63.94m、幅0.80~1.26m、深さ24~51cmを測り、断面形はU字形をなす部分もみられるが、多くは逆台形を呈する。基底面は西(7.250m)から東(7.216m)に若干傾斜し、西側で南東(N-135°-E)に延びた後、緩やかなカーブを描き東南東(N-116°-E)に延びる。埋土は黒褐~暗褐色(10YR3/1~3/3)シルトを主体に地山(主ににぶい黄褐色(10YR4/3)極細粒砂)のブロックや土粒を含んだもので、基本的には2~3層に分層される。出土遺物は土師質土器152点を中心に、弥生土器9点、土師器44点、須恵器17点、黒色土器1点、灰釉陶器1点、瓦器3点、白磁1点、青磁1点がみられ、土師器2点(3353・3354)、須恵器3点(3355~3357)、灰釉陶器1点(3358)、土師質土器15点(3359~3373)、白磁1点(3374)、青磁1点(3375)が図示できた。

**出土遺物**

**土師器**(図3-108 3353・3354)

いずれも羽釜で、ほぼ直立する口縁部外面直下には断面台形状の鏝が巡る。胎土には、3353が極粗粒砂から細礫を多く含み、3354が細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

**須恵器**(図3-108 3355~3357)

3355は杯蓋で、天井部は丸く、口縁部で屈曲する。胎土には白色細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。3356は杯身で、口縁部は上外方へほぼ真直ぐ上がり、端部を丸く仕上げる。胎土には白色細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

3357は壺で、底部には焼成時の歪みがみられ、胴部は底部から屈曲して上外方へ延び、外面には回転ヘラ削り調整を加える。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

**灰釉陶器**(図3-108 3358)

椀で、転用硯となり、内底面は平滑で、墨痕が残る。底部外面端部には断面三角形の高さ9mmの高台が付き、体部には灰釉を施釉する。胎土には細粒砂から中粒砂を少し含む。

**土師質土器**(図3-108 3359~3373)

3359は杯で、体部は内湾気味に上がり、口縁部は上外方を向く。器壁は口縁部の方が体部より厚くなる。成形技法はB技法で、底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。3360~3362は椀の底部で、ベタ高台になる。成形技法は、3360と3361がA技法で、底部の切り離しは回転糸切りとなり、3362はB技法で、底部の切り離しは静止糸切りとなる。胎土には、

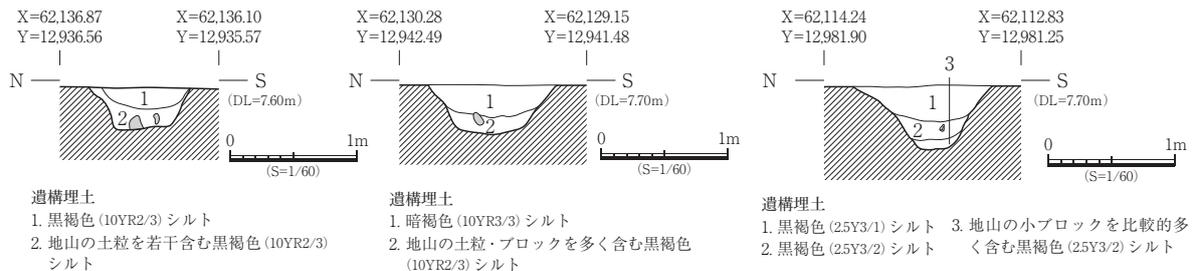


図3-107 SD-3053

3360が細粒砂から中粒砂を比較的多く含み, 3361と3362が細粒砂から中粒砂を少し含む。

3363と3364は小皿で, 成形技法はいずれもB技法で, 底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は, 3363が細粒砂から中粒砂を比較的多く含み, 3364が細粒砂から粗粒砂を少し含む。

3365～3373は椀で, 底部から体部にかけては内湾気味に上がる。唯一口縁部が残る3370では, 口縁部はやや外傾し, 端部は丸味を有する。成形技法はいずれもA技法で, 回転ナデ調整の後に, 体部

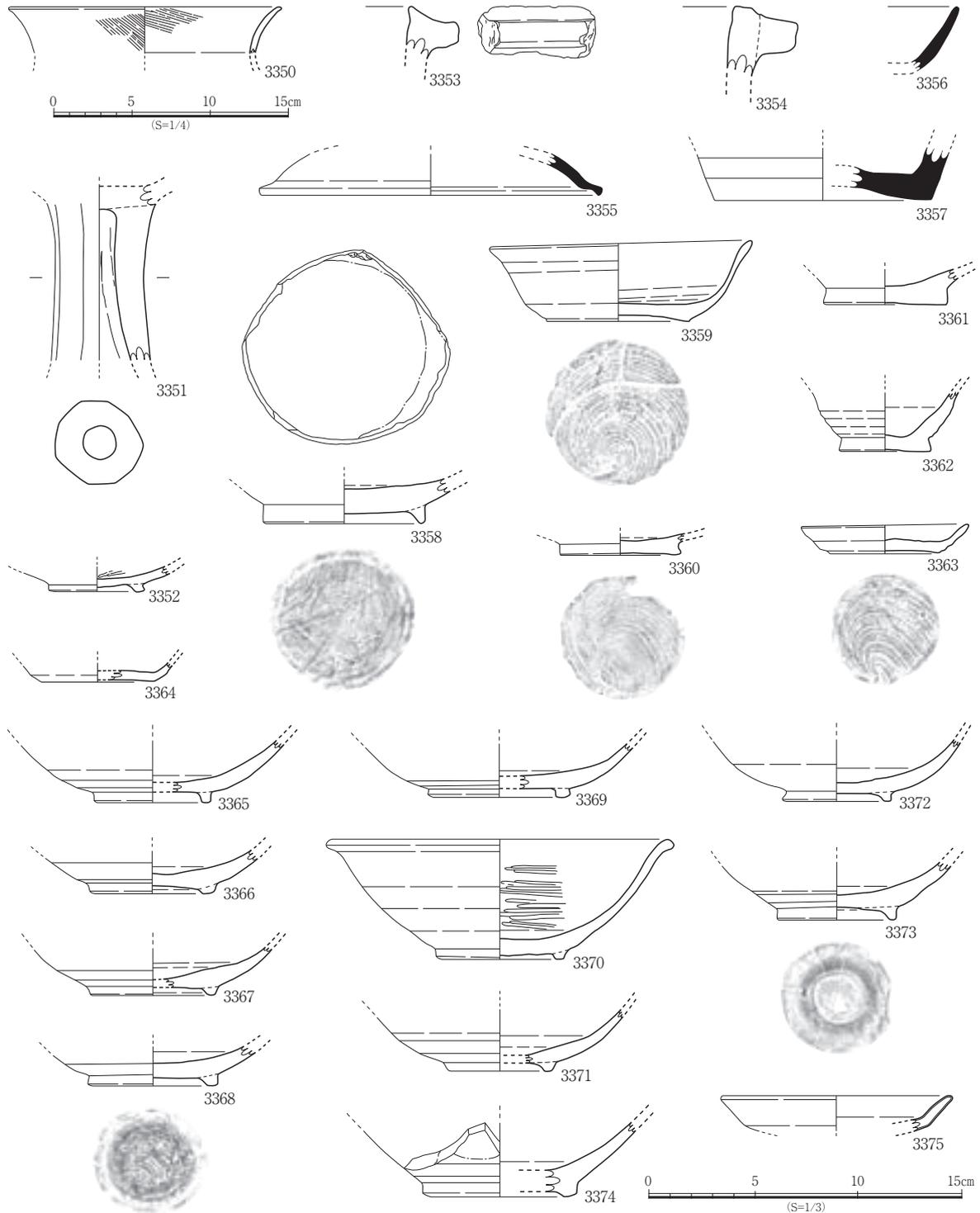


図3-108 SD-3036・3050・3053出土遺物実測図

1. Ⅲ区 (4) 古代後半から中世

外面には回転ヘラ削り調整, 内底面にはナデ調整を加える。3370の内面にはヨコ方向のヘラ磨き調整を加えている。底部外面には断面逆台形状の高台が付き, ヨコナデ調整を施し, 3368・3370・3373の外底面には回転糸切りの痕跡が残る。3366の外底面はヨコナデ調整とナデ調整を施し, 内面には煤が付着する。胎土には, 3367が細粒砂から粗粒砂を少し含み, 3373が細粒砂から中粒砂を比較的多く含む以外は細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

白磁(図3-108 3374)

碗で, 底部が削り出し高台となり, 露胎で, 体部外面には回転ヘラ削り調整を施す。体部外面から見込にかけて白磁釉を施釉する。胎土には黒色粒を比較的多く含む。

青磁(図3-108 3375)

同安窯系の皿で, 口縁部は底部から屈曲して, 短く外反する。胎土には黒色粒を比較的多く含む。

SD-3054(図3-109・112・113・120)

Ⅲ-4区西端から東端まで延びる東西溝で, 途中で鍵状に屈曲し, 東は調査区外に続く。遺存状態も西と東とでは大きく異なり, 深さが西では5cmに満たない部分があるのに対し, 東では80cm以上の部分がみられた。また, 溝はSK-356・357, SD-3055・3080・3086など多くの遺構に掘り込まれていた。検出長112.37m, 幅0.31~0.74m, 深さ5~86cmを測り, 断面形は遺存状態の悪いところでU字形や逆台形, 遺存状態の良いところで箱形を呈する。基底面は西(7.530m)から東(7.459m)に傾斜し, 溝は緩やかにカーブを描くものの西側では概ね東南東(N-110°-E)に延び, 途中で鍵状に屈曲して東(N-80°-E)に延びる。埋土は黒色(10YR2/1)シルトを主体に地山(黄橙色(10YR8/6)シルト質砂)のブロックや土粒の含まれる度合いにより, 1~4層に分層される。出土遺物は弥生土器48点, 土師器35点, 須恵器25点, 土師質土器30点, 瓦器1点, 瓦質土器1点がみられ, 土師器1点(3376), 須恵器3点(3377~3379)が図示できた。

出土遺物

土師器(図3-114 3376)

皿で, 口縁部はやや外反気味となり, 端部は丸い。内外面にはヨコ方向のヘラ磨きを施す。胎土には細粒砂から中粒砂を少し含む。

須恵器(図3-114 3377~3379)

3377は杯身で, 底部外端部にハの字形に開く高さ約8mmの高台が付く。胎土には白色細粒砂から中

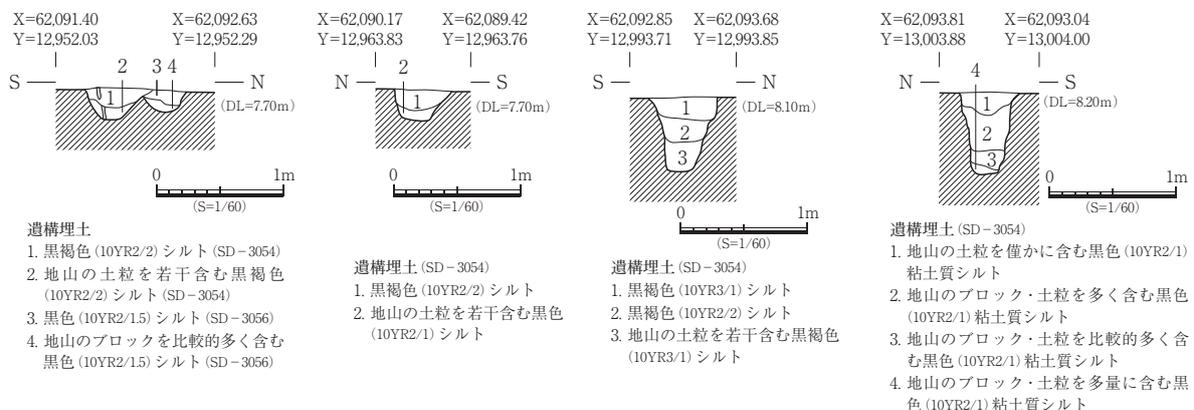


図3-109 SD-3054・3056

粒砂を比較的多く含む。

3378は皿で、底部は平らで、口縁部は上外方に真直ぐ延び、端部は丸い。口縁部には火襻がみられる。底部外面は回転ヘラ切りの後にナデ調整を加える。胎土には白色細粒砂から中粒砂を少し含む。

3379は高杯で、中空の脚台部は大きく開く。胎土には白色細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

**SD-3055** (図3-110・124)

Ⅲ-4区東端から西部のSD-3058 までほぼ直線的に延びる東西溝で、SD-3054 を切り、SD-3080・3088 に掘り込まれる。東は調査区外にさらに続く。遺存状態はSD-3054 同様に西と東とでは大きく異なり、深さが西では20cmに満たない部分があるのに対し、東では1m以上の部分が見られた。また、溝はSD-3058 に繋がった形となっているが、SD-3058 はSD-3054 に掘り込まれており、同時期に存続したものではない。検出長82.45m、幅0.37~1.32m、深さ14~110cmを測り、断面形は遺存状態の悪いところでU字形や逆台形、遺存状態の良いところで箱形を呈する。基底面は東(7.539m)から西(7.371m)に傾斜し、西(N-83~99°-W)に緩やかにカーブを描いて延びる。埋土は黒色~にぶい黄褐色(10YR2/1~4/3)シルトを主体に地山(黄橙色(10YR8/6)シルト質砂)のブロックや土粒の含まれる度合いにより、1~9層に分層される。出土遺物は弥生土器40点、土師器42点、須恵器18点、土師質土器25点、瓦器1点、石製品1点がみられ、須恵器4点(3380~3383)、瓦器1点(3384)、石製品1点(3385)が図示できた。

**出土遺物**

**須恵器**(図3-114 3380~3383)

3380は杯身で、底部の切り離しは回転ヘラ切りで、ナデ調整を加え、外端部に真下を向く高さ6mmの高台を付ける。胎土には白色中粒砂を多く含む。

3381は高杯で、裾部は大きく開き、端部は丸い。胎土には細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

3382は甕で、口縁部は胴部からくの字形をなす。胴部外面には回転カキ目調整、内面には同心円文のタタキ目が残る。胎土は精良で、白色細粒砂から中粒砂を若干含む。

3383は台付長頸壺とみられるもので、胴部は外上方に延びた後、内側に屈曲する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

**瓦器**(図3-114 3384)

椀で、底部外面には断面逆台形状の小さな高台が付き、体部から口縁部は内湾気味に上がり、端部は丸い。口縁部には一段のヨコナデ調整痕、体部外面には四段に指頭圧痕、内面には部分的にヘラ磨

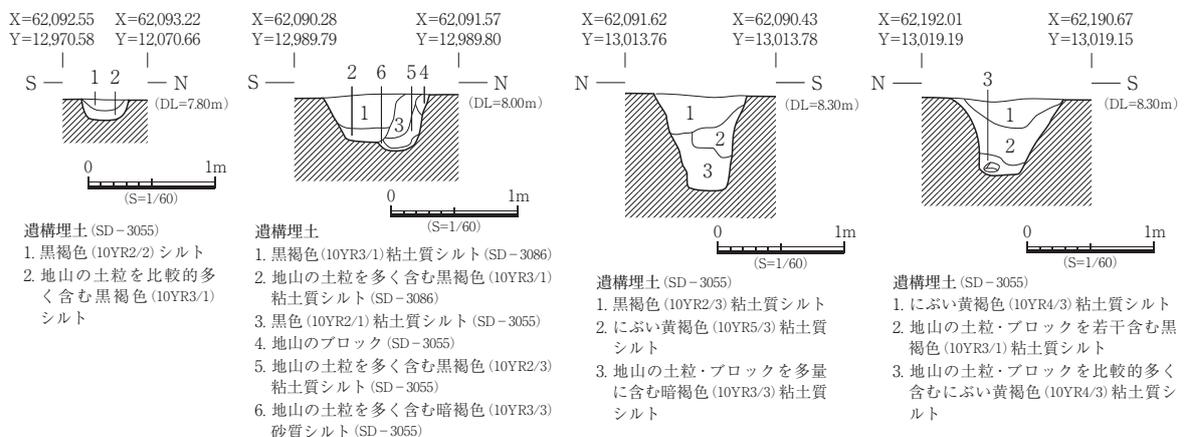


図3-110 SD-3055・3086

1. Ⅲ区 (4) 古代後半から中世

きが残る。胎土には粗粒砂から細礫を比較的多く含む。

石製品(図3-114 3385)

丸く扁平な磨石で、表面は平滑となる。石材は粗粒砂岩である。

SD-3056(図3-109)

Ⅲ-4区中央部南壁際で検出した東西溝で、SD-3054に切られ、西側は判然としない。検出長17.17m、幅0.14~0.40m、深さ2~19cmを測り、断面形は遺存状態の良い西側ではU字形、依存状態の悪い東側では逆台形を呈する。基底面は東(7.632m)から西(7.514m)に傾斜し、概ね西(N-79°-W)に延びる。埋土は黒色(10YR2/1.5)シルトを主体に下層に地山(明黄褐色(10YR6/8)シルト質砂)のブロックを含む箇所があった。出土遺物には弥生土器3点、土師質土器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-3057(図3-111)

Ⅲ-4区中央部南壁際で検出した南北溝で、SD-3054に切られ、北端部は不明であるが、南側は調査区外に続く。検出長3.65m、幅0.40~0.66m、深さ12~18cmを測り、断面形は概ね逆台形を呈する。基底面は南(7.477m)から北(7.423m)に傾斜し、概ね北西(N-44°-W)に延びる。埋土は黒褐色(7.5YR2/2)シルトを主体に下層に地山(明黄褐色(10YR6/8)シルト質砂)のブロックを含む箇所があった。出土遺物はなかった。

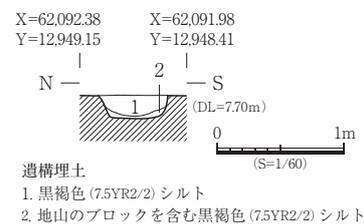
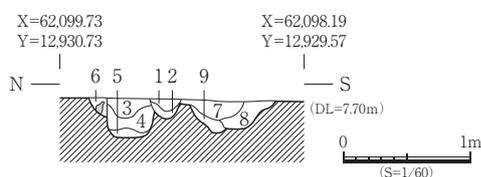


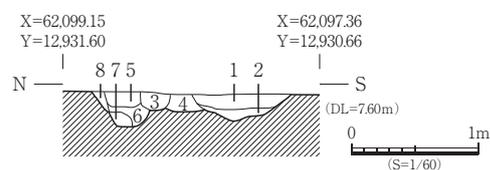
図3-111 SD-3057

SD-3058(図3-112・113・124)

Ⅲ-4区西部で検出したコの字形をなす溝で、SD-3054・3088に掘り込まれる。北側と南側はそれぞれ西の調査区外に続く。南東隅でSD-3055と繋がるが、前述のとおり切り合い関係から同時期には存続していない。検出長42.66m、幅0.30~0.78m、深さ14~34cmを測り、断面形はU字形ないし逆台形を呈する。基底面はほぼ平坦で7.342m(北)、7.350m(東)、7.375m(南)、7.328m(西)を測り、南北方向は北北東(N-16°-E)、東西方向は西北西(N-74°-W)を向く。埋土は黒褐色(10YR2/2)シルトを主体に下層には地山(明黄褐色(10YR6/8)シルト質砂)の土粒やブロックを含んでいた。出土遺物には弥生土器1点、土師器1点、須恵器2点、土師質土器3点がみられ、土師器1点(3386)と須恵器1点(3387)が図示できた。



- 遺構埋土
1. 黒褐色(10YR2/2)シルト(SD-3063)
  2. 地山の土粒を比較的多く含む黒褐色(10YR2/2)シルト(SD-3063)
  3. 黒褐色(10YR2/3)シルト(SD-3058)
  4. 黒色(10YR2/1~1.5)シルト(SD-3058)
  5. 地山のブロックを多く含む黒色(10YR2/1~1.5)シルト(SD-3058)
  6. 地山の土粒を若干含む黒褐色(10YR2/2)シルト(SD-3064)
  7. 黒褐色(10YR3/1)シルト(SD-3054)
  8. 地山の土粒を多く含む黒色(10YR2/1)シルト(SD-3061)
  9. 黒色(10YR2/1.5)シルトと地山2種類のブロックの集合(SD-3062)



- 遺構埋土
1. 黒褐色(7.5YR3/2)シルト(SD-3065)
  2. 地山のブロック・土粒を含む黒褐色(7.5YR3/2)シルト(SD-3065)
  3. 地山の土粒を比較的多く含む黒褐色(10YR2/3)シルト(SD-3063)
  4. 黒褐色(10YR2/2)シルトと地山2種類の土粒・ブロックの集合(SD-3061)
  5. 黒褐色(10YR2/3)シルト(ラミナ状を呈する部分あり)(SD-3058)
  6. 地山の土粒・小ブロックを僅かに含む黒褐色(10YR2/3)シルト(SD-3058)
  7. 地山の土粒・小ブロックを比較的多く含む黒褐色(10YR2/3)シルト(SD-3058)
  8. 黒褐色(10YR2/3)シルト土粒を僅かに含む地山のブロック(SD-3064)

図3-112 SD-3054・3058・3061~3065

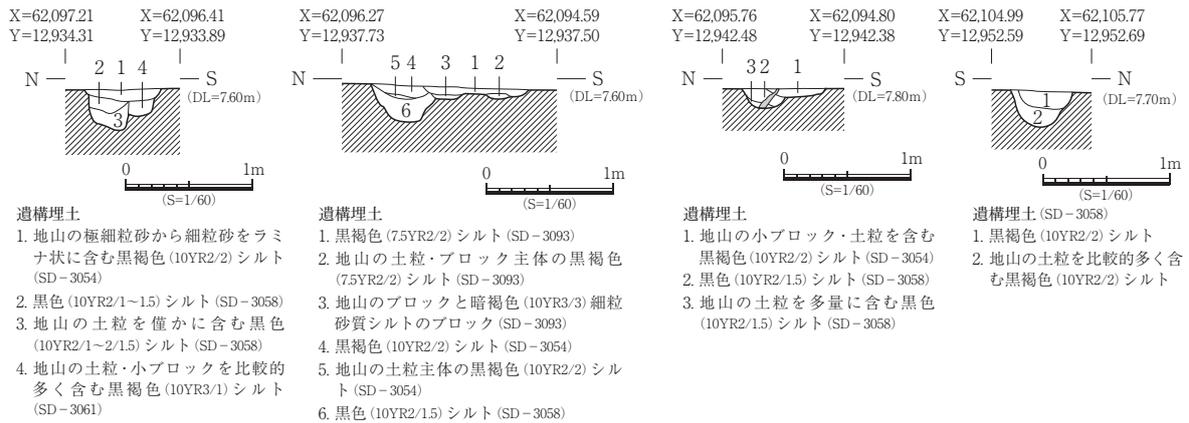


図3-113 SD-3054・3058・3061・3093

出土遺物

土師器(図3-114 3386)

甕の口縁部で、外傾し、端部は片面をなす。胎土には細粒砂から粗粒砂を多く含む。

須恵器(図3-114 3387)

高杯の杯底部で、外面には脚台の接合痕跡と長方形の透かし痕跡が3方向に残る。胎土には白色中粒砂から細礫を比較的多く含む。

SD-3059(図3-115)

Ⅲ-4区西部, SD-3058の内側で検出したL字形の溝で、東側は北側の溝と途切れるが、位置関係

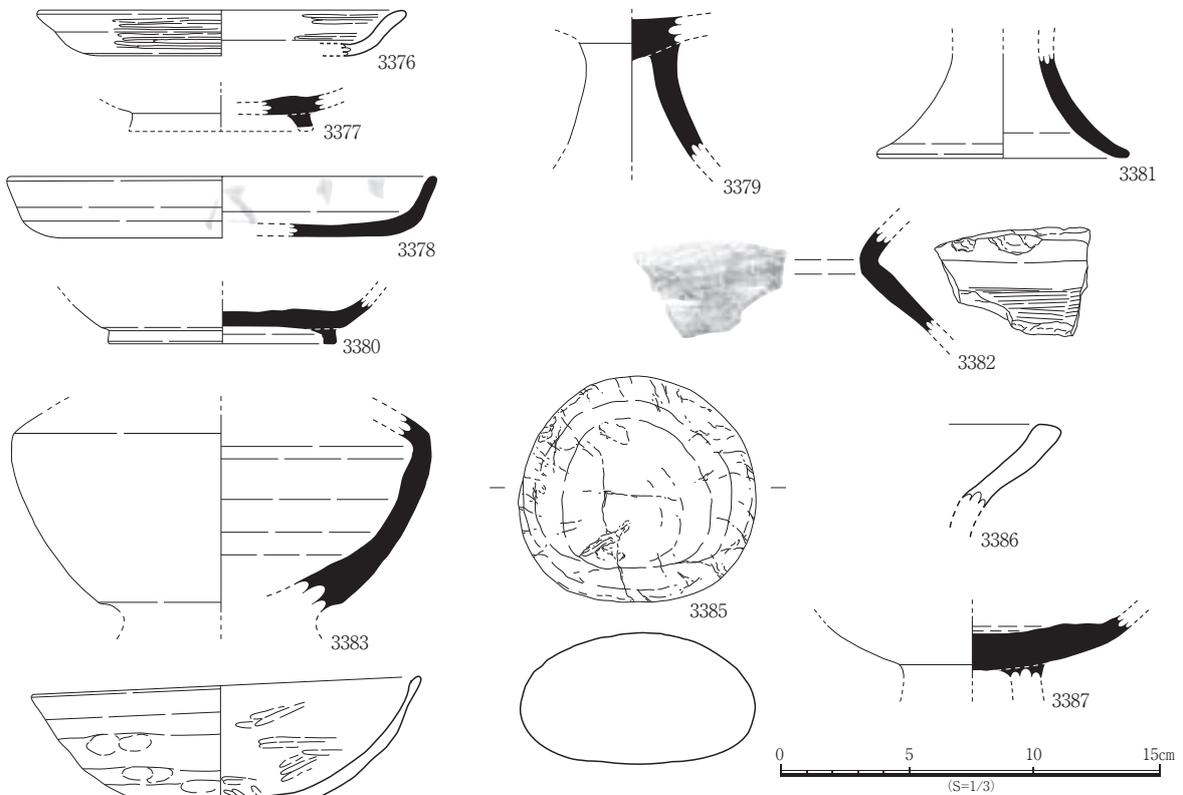


図3-114 SD-3054・3055・3058出土遺物実測図

1. Ⅲ区 (4) 古代後半から中世

から同一のものとみられる。検出長7.23m, 幅0.20~0.48m, 深さ2~12cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。基底面は, 東側が7.561~7.583mを測りほぼ平坦で, 南側が東(7.583m)から西(7.466m)へ傾斜する。南北方向は北北東(N-19°-E), 東西方向は西北西(N-78°-W)を向く。埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂)の土粒やブロックを含む黒褐色(7.5YR3/1)シルト単一層であった。出土遺物には土師器1点があったが, 図示できなかった。

**SD-3060** (図3-115)

Ⅲ-4区西部, SB-329の西側柱に沿った形で検出した南北溝で, SB-329に掘り込まれる。検出長5.64m, 幅0.10~0.17m, 深さ2~6cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。基底面は, 北側が7.475m, 南側が7.496mとほぼ平坦で, 北北東(N-16°-E)を向く。埋土は地山(にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト質砂)と黒褐色(10YR3/1)シルトのブロックを含む黒褐色(10YR2/2)シルト単一層であった。出土遺物はなかった。

**SD-3061** (図3-112・113・115)

Ⅲ-4区西部, 溝が重複している箇所検出した東西溝で, SD-3062を切り, SD-3054・3058・3093に掘り込まれ, 両壁の立ち上がり確認できたのは, SD-3054の上層部が攪乱で削平された西側のみであった。検出長11.95m, 幅0.44~0.62m, 深さ11~24cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。基底面は西(7.373m)から東(7.307m)へ傾斜し, 東南東(N-111°-E)に延びる。埋土は黒褐色(7.5YR2/2~10YR3/1)シルトを主体に下層部で地山(黄褐色(2.5Y5/4)シルト質砂)の土粒とブロックを含む堆積が認められた箇所もあった。出土遺物はなかった。

**SD-3062** (図3-112・115)

Ⅲ-4区西部, 溝が重複している箇所検出した東西溝で, 各溝に掘り込まれており, 両壁の立ち上がり確認できたのは西端部のみで, 東側の始まりは判然としない。検出長3.53m, 幅約0.40m, 深さ18~27cmを測り, 断面形は概ねU字形を呈する。基底面は西(7.392m)から東(7.294m)へ傾斜し, 南東(N-125°-E)を向く。埋土は黒色(10YR2/1.5)シルトを主体に下層部で地山(黄褐色(2.5Y5/4)シルト質砂)のブロックを比較的多く含む堆積が認められた箇所もあった。出土遺物には弥生土器1点があったが, 図示できなかった。各溝に切れ, かつ埋土が弥生時代のものであり, 出土遺物も弥生土器だけであることから弥生時代の溝跡であった可能性も考えられるが, 溝の重複関係を示すためここに掲載した。

**SD-3063** (図3-112)

Ⅲ-4区西部, 溝が重複している箇所検出した東西溝で, SD-3054・3058・3061を切っていた。ただし, 検出時には明確ではなく, 断面と底面において確認できた。検出長6.20m, 幅0.22~0.24m, 深さ4~17cmを測り, 断面形はU字形を呈する。基底面は西(7.557m)から東(7.359m)へ傾斜し, 東南東(N-

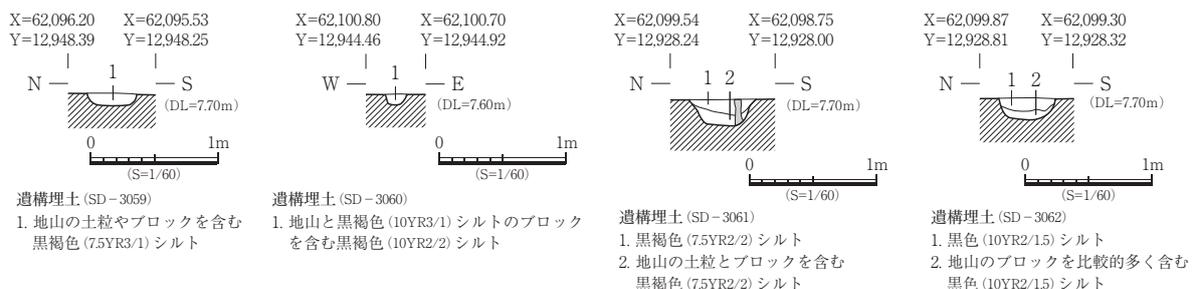


図3-115 SD-3059~3062

121°-E)を向く。埋土は黒褐色(10YR2/2)シルトを主体に下層部で地山(黄褐色(2.5Y5/4)シルト質砂)の土粒を比較的多く含む部分もあった。出土遺物はなかった。

**SD-3064** (図3-112)

Ⅲ-4区西部, 溝が重複している箇所検出した東西溝で, SD-3058 に掘り込まれており, 確認できたのは北壁の立ち上がりのみで, 溝の両端は判然としない。検出長5.10m, 検出幅0.08~0.14m, 深さ11~18cmを測り, 断面形はU字形を呈するとみられる。基底面は西(7.475m)から東(7.422m)へ若干傾斜し, 東南東(N-120°-E)を向く。埋土は地山(黄褐色(2.5Y5/4)シルト質砂)の土粒を若干含む黒褐色(10YR2/2)シルトであった。出土遺物はなかった。

**SD-3065** (図3-112・116)

Ⅲ-4区西部, 溝が重複している箇所検出したL字形の溝で, SD-3061・3062を切り, SD-3054・3091・3093に掘り込まれていた。検出長9.02m, 幅0.30~0.60m, 深さ9~24cmを測り, 断面形はU字形ないし逆台形を呈する。基底面は

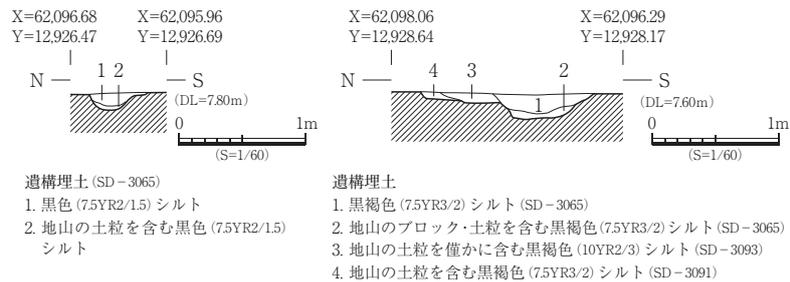


図3-116 SD-3065・3091・3093

西(7.391m)から東(7.376m)へ若干傾斜する。溝は, 東北東(N-69°-E)に延びた後, 屈曲し東南東(N-116°-E)を向く。埋土は黒褐色(7.5YR3/2)シルトを主体に下層部は地山(黄褐色(2.5Y5/4)シルト質砂)の土粒とブロックを含んでいた。出土遺物には須恵器3点がみられたが, 図示できるものはなかった。

**SD-3066** (図3-117)

Ⅲ-1区西端部, 西壁際で検出した南北溝で, SD-3022・3023・3053を掘り込み, 南と北はそれぞれ調査区外に続き, 西壁の立ち上がりは確認できていない。検出長15.30m, 幅1.32m以上, 深さ26~36cmを測り, 断面形は概ね逆台形を呈するとみられる。基底面は南(7.239m)から北(7.197m)へ若干傾斜し, 北北東(N-12°-E)に延びる。埋土は2層に分層され, 上層は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト, 下層は褐灰色(10YR4/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器3点, 土師器2点, 須恵器3点, 土師質土器46点, 瓦器・青磁・鉄滓・木片各1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

**SD-3067** (図3-68・117)

Ⅲ-1区西端部, 西壁に沿った形で検出した南北溝で, SD-3066 から 2.0~2.5m離れて北流し, SD-3022・3023・3053を掘り込み, 南はSK-345とSD-3068に切れ不明で北は調査区外に続く。検出長25.87m, 幅0.48~0.90m, 深さ10~28cmを測り, 断面形は概ね逆台形を呈する。基底面は南(7.466m)から北(7.384m)へ若干傾斜し, 北北東(N-14°-E)に延びる。埋土は暗褐色~黒褐色(7.5YR3/3~10YR3/2)シルトを主体に下層に地山(オリブ褐色(2.5Y4/6)シルト質砂)を含む箇所もみられた。出土遺物には弥生土器1点, 土師器2点, 須恵器4点, 土師質土器44点, 瓦器・青磁各1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

**SD-3068** (図3-117)

Ⅲ-1区西部, 南壁際で検出した東西溝で, 南壁の立ち上がりは確認できていない。溝はSK-345とSD-3067を掘り込み, 東西それぞれ調査区外に続き, 東はⅢ-4区で検出したSD-3076に繋がる可能

1. Ⅲ区 (4) 古代後半から中世

性があり、西は方向的にSD-3114に繋がるものとみられる。検出長50.07m、幅1.58m以上、深さ24～32cmを測り、断面形は逆台形ないしU字形を呈するとみられる。基底面は東(7.307m)から西(7.280m)へ若干傾斜し、西北西(N-74°-W)に延びる。埋土は黒褐色(10YR2/3)シルトを主体に下層に褐灰色(10YR4/1)シルト質粘土の堆積がみられ、一定時期帯水していたものとみられる。出土遺物には土師器2点、須恵器5点、土師質土器67点、瓦器・東播系須恵器・瓦質土器各1点と青磁2点がみられたが、図示できるものはなかった。

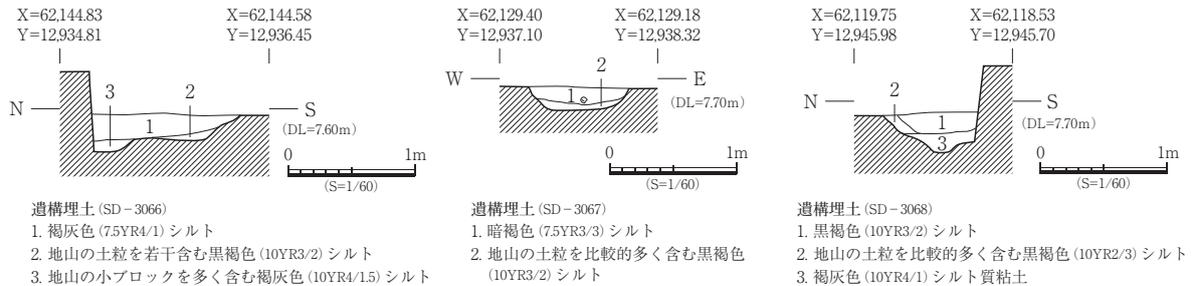


図3-117 SD-3066～3068

SD-3069 (図3-70・87・118)

Ⅲ-1区中央部西寄りで斜め方向に掘削されていた南北溝で、交わるすべての溝を掘り込んでいた。検出長23.24m、幅0.30～0.87m、深さ15～29cmを測り、断面形は逆台形ないしU字形を呈する。基底面は北(7.464m)から南(7.443m)へ若干傾斜し、南西(N-134°-W)に延びる。埋土は黒褐色(10YR2/3)シルトを主体に地山(にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂及びマンガン粒を多量に含む黄褐色(2.5Y5/4)砂質シルト)のブロックを含むもので、含む度合いにより2層に分層される箇所もあった。出土遺物には弥生土器1点、土師器5点、須恵器6点、土師質土器130点、瓦器・瓦質土器各1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-3070 (図3-118)

Ⅲ-1区中央部北寄りで検出した東西溝で、交わるすべての溝を掘り込んでいた。検出長13.60m、幅0.36～0.65m、深さ8～23cmを測り、断面形は逆台形を呈する。基底面は西(7.531m)から東(7.281m)へ若干傾斜し、東(N-81°-E)を向く。埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂)の土粒を多く含む黒色(10YR2/1.5)シルト単一層であった。出土遺物には土師器5点、須恵器2点、土師質土器35点、瓦器・鉄釘各2点がみられ、土師質土器1点(3388)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-121 3388)

杯で、口縁部は上外方を向き、端部は丸い。内面には煤が付着する。胎土は精良で、細粒砂から中

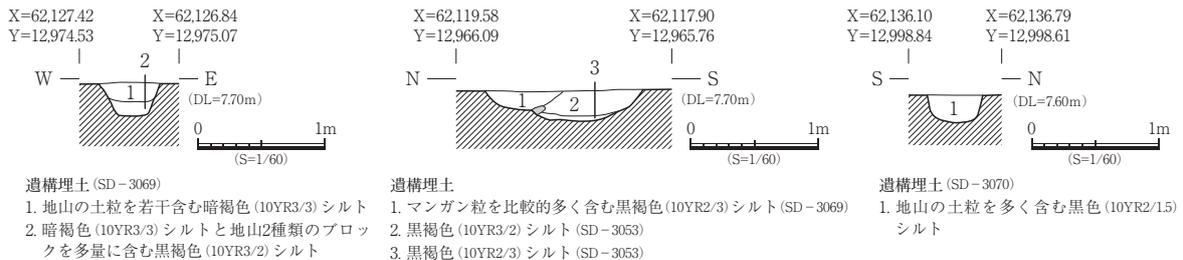


図3-118 SD-3053・3069・3070

粒砂を少し含む。

**SD-3071** (図3-17・90・92)

Ⅲ-1区中央部で検出した東西溝で、SD-3072以外の交わるすべての溝を掘り込んでいた。検出長13.31m、幅0.28~0.62m、深さ4~19cmを測り、断面形はU字形を呈する。基底面は西(7.527m)から東(7.481m)へ若干傾斜し、東(N-89°-E)を向く。埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂)の土粒を含む黒褐色(10YR3/2)細粒砂質シルト単一層であった。出土遺物には土師器4点、須恵器1点、土師質土器54点、瓦器6点がみられ、土師器1点(3389)と瓦器1点(3390)が図示できた。

出土遺物

土師器(図3-121 3389)

甕で、口縁部はほぼ直立する胴部から屈曲し、短く外傾する。胎土には細粒砂から粗粒砂を多く含む。

瓦器(図3-121 3390)

椀で、体部が内湾気味に上がり、口縁部は斜め上方を向き、端部は丸い。口縁部にはヨコナデ調整、体部には指押えを施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

**SD-3072** (図3-22・92・119)

Ⅲ-1区中央部で検出した南北溝で、SD-3037・3070以外の交わるすべての溝を掘り込み、南端はSK-355に切られ、確認できていない。検出長39.58m、幅0.22~0.96m、深さ8~18cmを測り、断面形は舟底形を呈する。基底面は南(7.614m)から北(7.447m)へ傾斜し、北西(N-33°-W)に延びる。埋土は黒褐色(10YR3/1.5)極細粒砂質シルト単一層であった。出土遺物には土師器15点、須恵器6点、土師質土器100点、瓦器7点、青磁1点がみられ、土師質土器3点(3391~3393)と瓦器1点(3394)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-121 3391~3393)

3391と3392は杯で、3391は口縁部の破片で、成形技法はB技法とみられる。胎土には細粒砂から中粒砂を少し含む。3392は底部が残り、成形技法はA技法で、底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は精良で、細粒砂から極粗粒砂を若干含む。

3393は小皿で、口縁部は短く外反する。成形技法はA技法で、底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土には細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

瓦器(図3-121 3394)

椀で、底部外面には断面三角形の小さな高台が付き、体部外面には指押えの痕、内面にはへら磨きが残る。胎土には細粒砂から中粒砂を少し含む。

**SD-3073** (図3-119)

Ⅲ-1区中央部、北壁際で検出した浅い南北溝で、弥生の溝(SD-3012)を掘り込み、北は調査区外に

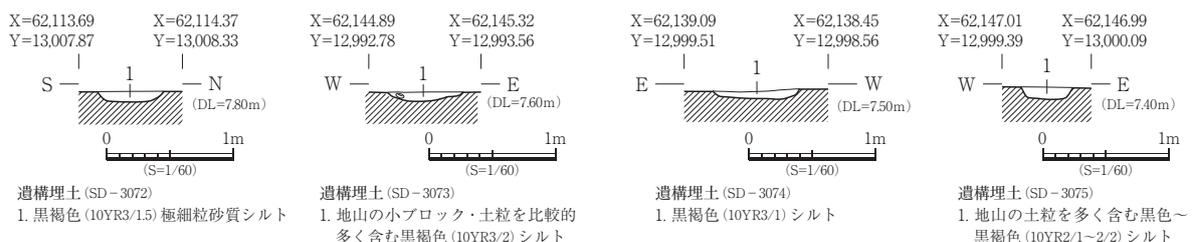


図3-119 SD-3072~3075

1. Ⅲ区 (4) 古代後半から中世

延びる。検出長3.76m, 幅0.67m, 深さ8~10cmを測り, 断面形は舟底形を呈する。基底面は北(7.470m)から南(7.456m)へ若干傾斜し, 南東(N-146°-E)を向く。埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂)の小ブロック・土粒を比較的多く含む黒褐色(10YR3/2)シルト単一層であった。出土遺物には土師器3点, 須恵器1点, 土師質土器17点, 瓦器・白磁各1点がみられ, 白磁1点(3395)が図示できた。

出土遺物

白磁(図3-121 3395)

汀溪窯系の碗で, 口縁部は玉縁となる。胎土には黒色粒を比較的多く含む。

SD-3074(図3-119)

Ⅲ-1区中央部, 北壁際で検出した浅い南北溝で, 弥生の溝(SD-3012)を掘り込み, 北は調査区外に延びる。検出長13.21m, 幅0.30~0.70m, 深さ5~8cmを測り, 断面形は舟底形を呈する。基底面は北(7.442m)から南(7.380m)へ若干傾斜し, 南南東(N-151°-E)を向く。埋土は黒褐色(10YR3/1)シルト単一層であった。出土遺物には弥生土器1点, 土師器3点, 須恵器3点, 土師質土器14点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SD-3075(図3-119)

Ⅲ-1区中央部, 北壁際で検出した浅い南北溝で, 北は調査区外に延びる。検出部分は少ないが形状からみて, SD-3073・3074と同じような溝であったと考えられる。検出長1.03m, 幅0.31~0.40m, 深さ5~9cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。基底面は北(7.284m)から南(7.260m)へ若干傾斜し, 南(N-174°-W)を向く。埋土は地山(明黄褐色(10YR6/8)砂質シルト)の土粒を多く含む黒色~黒褐色(10YR2/1~2/2)シルト単一層であった。遺物は出土しなかった。

SD-3076(図3-120)

Ⅲ-4区東部, 北壁に沿った形で検出した東西溝で, 交わる各溝を掘り込み, 両端はそれぞれ調査区外に延びる。西側は前述のように方向的にみてSD-3068とSD-3114に繋がる可能性がある。検出長38.73m, 幅1.00~1.15m, 深さ52~75cmを測り, 断面形は箱形ないし逆台形を呈する。基底面は東(7.422m)から西(7.277m)へ傾斜し, 西(N-80°-W)を向く。埋土は黒褐色~褐色(10YR3/2~4/1)シルトを主体に地山(明黄褐色(10YR6/8)砂質シルト)の土粒を含む度合いと堆積状態によって3~6層に分層され, 堆積の中にはラミナ状をなす部分や粘土化した箇所があり, 一定流れがあり, 帯水していた

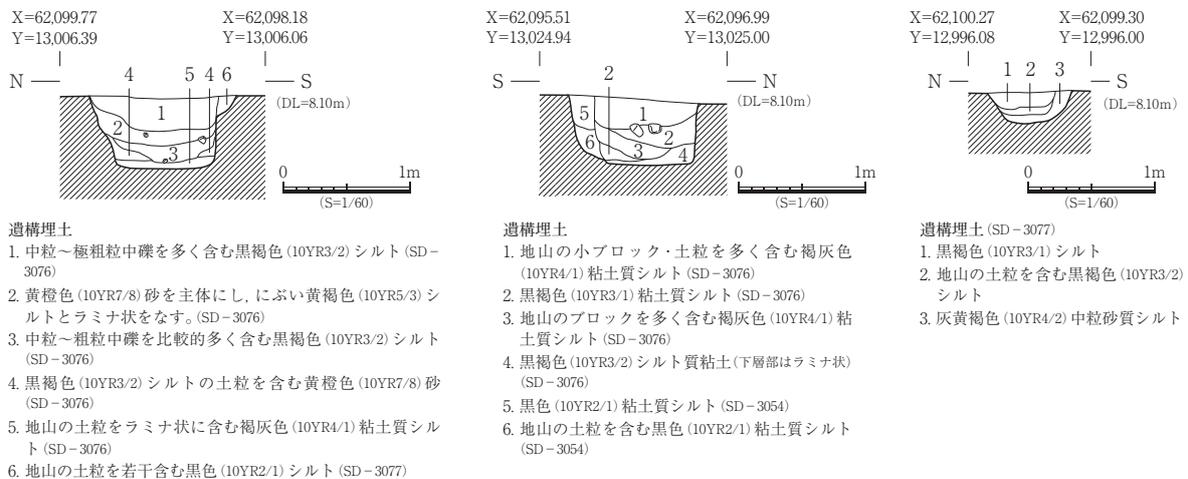


図3-120 SD-3054・3076・3077

時期もあったものとみられる。出土遺物には弥生土器1点、土師器8点、須恵器7点、土師質土器200点、黒色土器1点、瓦器7点、瓦質土器2点、青磁2点、常滑焼1点、石製品1点がみられ、須恵器(3396)・土師質土器(3397)・瓦器(3398)・瓦質土器(3399)・青磁(3400)・石製品(3401)各1点が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-121 3396)

台付長頸壺の底部とみられ、底部外面にはハの字形に開く高さ1.2cmの高台が付く。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

土師質土器(図3-121 3397)

3397は杯で、口縁部は上外方を向き、端部は細い。成形技法はA技法で、底部の切り離しは不明瞭であるが回転糸切りとみられる。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

瓦器(図3-121 3398)

椀で、口縁部は内湾気味に上がり、端部は細い。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

瓦質土器(図3-121 3399)

三足鍋の脚基部で、器面には指頭圧痕が残る。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

青磁(図3-121 3400)

龍泉窯系の碗で、底部は削り出し高台となり、畳付から見込にかけて青磁釉を施釉する。見込には劃花文がみられる。胎土には黒色粒を比較的多く含む。

石製品(図3-121 3401)

丸く扁平な磨石で、表面は平滑となる。石材は中粒砂岩である。

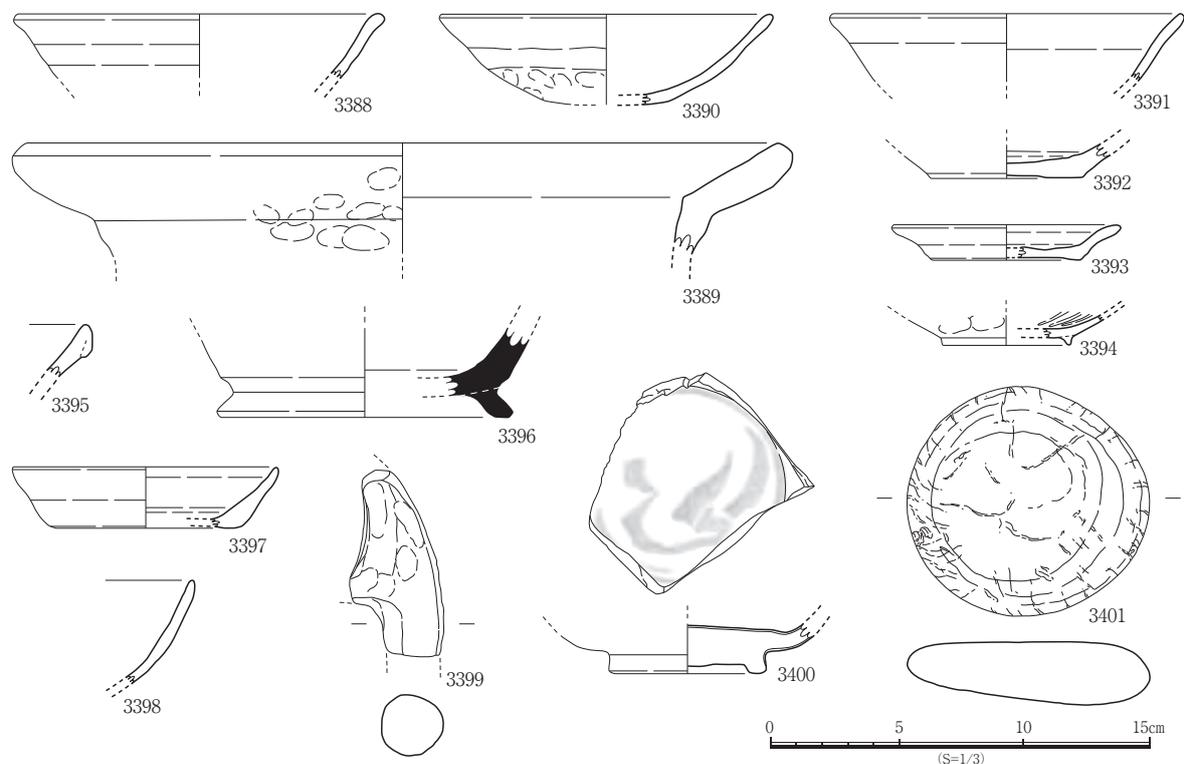


図3-121 SD-3070~3073・3076出土遺物実測図

**SD-3077** (図3-120)

Ⅲ-4区東部, 北壁に沿った形で検出した東西溝で, SD-3054・3078・3083・3087を切り, SD-3076・3080・3081・3086に掘り込まれ, 東は調査区外に続く。検出長54.42m, 幅0.40~1.07m, 深さ5~24cmを測り, 断面形は概ね逆台形を呈する。基底面は西(7.807m)から東(7.777m)へ若干傾斜し, 東(N-94°-E)を向く。埋土は地山(黄橙色(10YR8/6.5)シルト質砂)の土粒を若干含む黒色(10YR2/1)粘土質シルト単一層であった。出土遺物には須恵器1点, 土師質土器4点がみられたが, 図示できるものはなかった。

**SD-3078**

Ⅲ-4区北東部, 北壁際で検出した東西溝で, SD-3076・3077に掘り込まれ東は不明で, 西は調査区外に続く。検出長2.10m, 幅0.38~0.50m, 深さ11cmを測り, 断面形は概ね逆台形を呈する。基底面は西(7.833m)から東(7.810m)へ若干傾斜し, 東南東(N-122°-E)を向く。埋土は暗褐色(10YR3/3)砂質シルト単一層であった。遺物は出土しなかった。

**SD-3079**

Ⅲ-4区北東部北壁際, 建物跡確認のために拡張した部分で検出した東西溝で, 両端はそれぞれ調査区外に続く。検出長0.94m, 幅0.53m, 深さ14~18cmを測り, 断面形はU字形を呈する。基底面は東(7.701m)から西(7.684m)へ若干傾斜し, 西(N-84°-W)を向く。埋土は暗褐色(10YR3/3)砂質シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器3点がみられたが, 図示できるものはなかった。

**SD-3080** (図3-122)

Ⅲ-4区東部で検出した南北溝で, SD-3054・3077・3084を切り, SD-3076・3081に掘り込まれ, 北は調査区外に続く。前述のとおり, 方向からするとSD-3036と同一の可能性はある。検出長12.16m, 幅0.37~0.87m, 深さ12~28cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。基底面は南(7.955m)から北(7.570m)へ傾斜し, 北北東(N-27°-E)に延びる。埋土は黒褐色(10YR3/1)砂質シルトを主体に下層で地山(明黄褐色(10YR6/8)砂質シルト)の土粒とブロックを含む褐灰色(10YR4/1)砂質シルトの堆積が認められた箇所もあった。出土遺物には弥生土器・土師器・須恵器各2点, 土師質土器28点, 瓦質土器2点がみられ, 土師質土器2点(3402・3403)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-125 3402・3403)

いずれも杯である。3402は器高指数約39と底部が深く, 成形技法はB技法で, 底部の切り離しは回転糸切りとなり, 上外方に立ち上がる口縁部外面と内底面にはロクロ目が残る。胎土は精良で, 細粒砂から中粒砂を若干含む。3403は底部が残存する。成形技法はA技法で, 底部の切り離しは回転糸

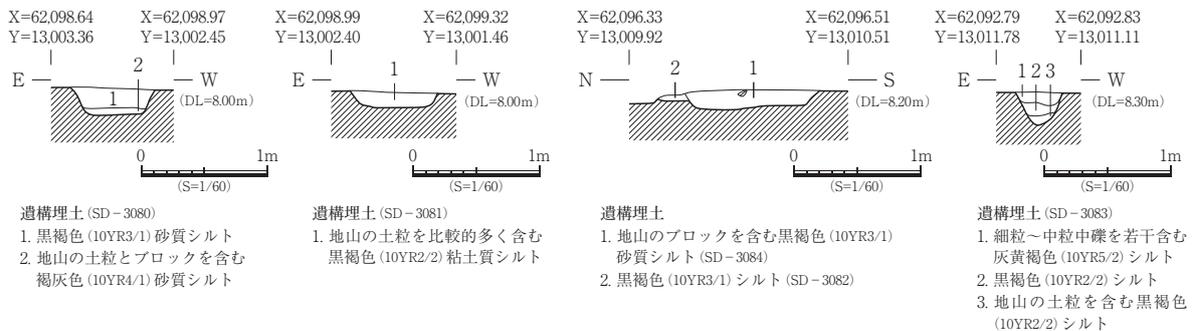


図3-122 SD-3080~3084

切りによる。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

#### SD-3081 (図3-122)

Ⅲ-4区東部で検出した南北溝で、SD-3077・3080を切り、SD-3076に掘り込まれ、北は調査区外に続く。前述のとおり、方向からするとSD-3038に繋がる可能性もある。検出長7.06m、幅0.61～0.80m、深さ6～12cmを測り、断面形は逆台形を呈する。基底面は南(7.955m)から北(7.700m)へ傾斜し、北北東(N-21°-E)に延びる。埋土は地山(明黄褐色(10YR6/8)砂質シルト)の土粒を比較的多く含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器1点、瓦質土器2点がみられたが、図示できるものはなかった。

#### SD-3082 (図3-122)

Ⅲ-4区東部で検出した南北溝で、北はSD-3076に掘り込まれ、L字形をなす南はSD-3083・3084に掘り込まれ不明である。検出長2.53m、幅0.30～0.56m、深さ2～6cmを測り、断面形は概ね逆台形を呈する。基底面は南(7.940m)から北(7.870m)へ傾斜し、北北西(N-15°-W)に延びる。埋土は黒褐色(10YR3/1)シルト単一層であった。出土遺物には土師器1点、土師質土器7点、瓦器2点がみられ、土師器1点(3404)が図示できた。

#### 出土遺物

##### 土師器(図3-125 3404)

甕の頸部とみられるもので、直立する胴部から口縁部は屈曲して、外傾する。胎土には中粒砂から粗粒砂を多く含む。

#### SD-3083 (図3-122)

Ⅲ-4区東部で検出した細長い南北溝で、SD-3054・3055を切り、SD-3076・3077・3082・3084・3085に掘り込まれ、北は調査区外に続く。検出長7.88m、幅0.32～0.44m、深さ23～30cmを測り、断面形はU字形を呈する。基底面は南(7.895m)から北(7.645m)へ傾斜し、北(N-1°-E)に延びる。埋土は暗褐色(10YR3/4)砂質シルトないしシルトを主に炭化物や地山(明黄褐色(10YR6/8)砂質シルト)の土粒を含む堆積も認められ、3～4層に分層される。出土遺物には土師器1点、土師質土器9点、瓦器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

#### SD-3084 (図3-122)

Ⅲ-4区東部で検出した浅い東西溝で、SD-3054・3082・3083を切り、SD-3080に掘り込まれる。検出長20.45m、幅0.60～1.08m、深さ5～16cmを測り、断面形は概ね逆台形を呈する。基底面は西(8.000m)から東(7.977m)へ若干傾斜し、東(N-83°-E)に延びる。埋土は地山(明黄褐色(10YR6/8)砂質シルト)のブロックを含む黒褐色(10YR3/1)砂質シルト単一層であった。出土遺物には弥生土器2点、土師器1点、須恵器1点、土師質土器6点がみられ、土師質土器1点(3405)が図示できた。

#### 出土遺物

##### 土師質土器(図3-125 3405)

杯の口縁部で、成形技法はB技法となり、外面にはロクロ目が残る。胎土には細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

#### SD-3085 (図3-123)

Ⅲ-4区東部で検出した浅い東西溝で、SD-3083を掘り込む。検出長11.36m、幅0.46～1.34m、深さ3～14cmを測り、断面形は逆台形を呈する。基底面は西(8.150m)から東(8.051m)へ傾斜し、東(N-85°-E)

1. Ⅲ区 (4) 古代後半から中世

に延びる。埋土は黒褐色(10YR3/1)砂質シルト単一層であった。出土遺物には弥生土器2点, 土師器2点, 須恵器5点, 土師質土器19点, 瓦質土器1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

**SD-3086** (図3-110・123)

Ⅲ-4区中央部東寄りで検出した調査区を斜めに走る南北溝で, 北壁から南西に緩やかなカーブを描き, 北はSD-3076に掘り込まれ不明であるが, 方向的にSD-3039に続くともみられ, 南はSD-3054・3055・3077を切り, 調査区外に続く。検出長22.98m, 幅0.36~1.26m, 深さ14~50cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。基底面は北(7.570m)から南(7.543m)へ若干傾斜し, 北側は南南西(N-151°-W)に延び, 緩やかに南西方向にカーブし西南西(N-118°-W)を向く。埋土は黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトを主体に地山(明黄褐色(10YR6/8)砂質シルト)の土粒を含む度合いにより2~4層に分層される。出土遺物には弥生土器6点, 土師器1点, 須恵器4点, 図示した黒色土器1点(3406), 土師質土器75点, 瓦器1点がみられた。

**出土遺物**

**黒色土器**(図3-125 3406)

内外面とも黒色を基調とする椀の底部で, 外底面にはハの字形に開く高さ5mmの高台が付く。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

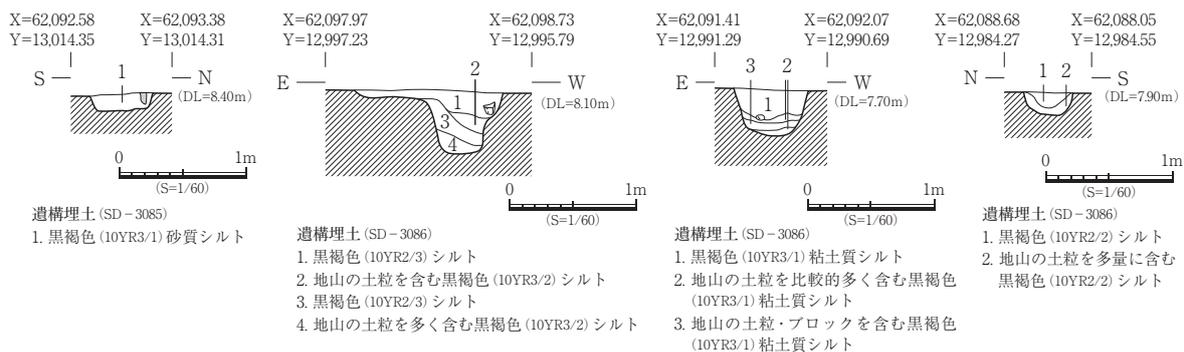


図3-123 SD-3085・3086

**SD-3087**

Ⅲ-4区中央部北壁際で検出した南北溝で, 南はSD-3077に掘り込まれ不明で, 北は調査区外に続くが, Ⅲ-1区では関連するとみられる溝跡は検出されていない。検出長2.18m, 幅0.50~0.54m, 深さ12~14cmを測り, 断面形は概ね逆台形を呈する。基底面は南(7.750m)から北(7.670m)へ傾斜し, 北(N-11°-E)を向く。埋土は黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト単一層であった。遺物は出土しなかった。

**SD-3088** (図3-124)

Ⅲ-4区中央部西寄りで検出したL字形の溝で, 区画をなす溝と思われる。北側は調査区外に続き, SD-3055・3058を切り, SK-363に掘り込まれる。検出長17.74m, 幅0.32~1.17m, 深さ6~46cmを測り, 断面形は逆台形ないしU字形を呈する。基底面はほぼ平坦となり, 北で7.489m, 中央で7.327m, 南で7.546m, 東で7.188mを測り, 南北方向は北(N-7°-E), 東西方向は西北西(N-73°-W)を向く。埋土は黒褐色(10YR2/3)シルトを主体に下層部で地山(オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質中粒砂)の土粒を含む箇所もみられた。出土遺物は比較的多く, 土師質土器378点を中心に土師器7点, 須恵器11点, 瓦器17点, 東播系須恵器1点, 瓦質土器2点がみられ, 須恵器3点(3407~3409), 土師質土器3点(3410~3412), 瓦器1点(3413), 瓦質土器1点(3414)が図示できた。

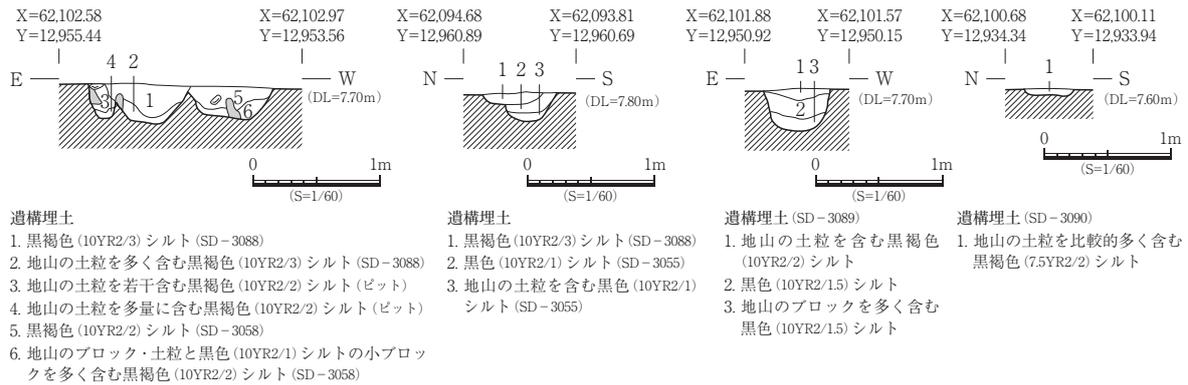


図3-124 SD-3055・3058・3088～3090

出土遺物

須恵器(図3-125 3407～3409)

3407は杯蓋で、口縁部にはほぼ真下を向かえりが付く。胎土には白色細粒砂から粗粒砂を少し含む。3408は杯身で、たち上がりは高さ4mmと低い。胎土には白色細粒砂から中粒砂を若干含む。

3409は8世紀後半の杯蓋で、天井部は平らで、口縁部は斜め下方に下り、端部を下方に屈曲さす。胎土には白色細粒砂から中粒砂を少し含む。

土師質土器(図3-125 3410～3412)

3410は杯で、体部は真直ぐ上外方に上がり、口縁部でやや外反する。成形技法はA技法で、器壁が体部で2mmと薄い。胎土は精良で、細粒砂から中粒砂を若干含む。3411はB技法で成形された杯で、底部の切り離しは回転糸切りとなり、内底面にはロクロ目が残る。胎土は精良で、極細粒砂から細粒砂を少し含む。

3412は小皿で、口縁部は斜め上方に短く立ち上がる。成形技法はA技法となり、底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

瓦器(図3-125 3413)

碗の口縁部で、内湾気味に上がり、端部は丸い。口縁部にはヨコナデ調整、体部外面には指押え、内面にはへら磨きを施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

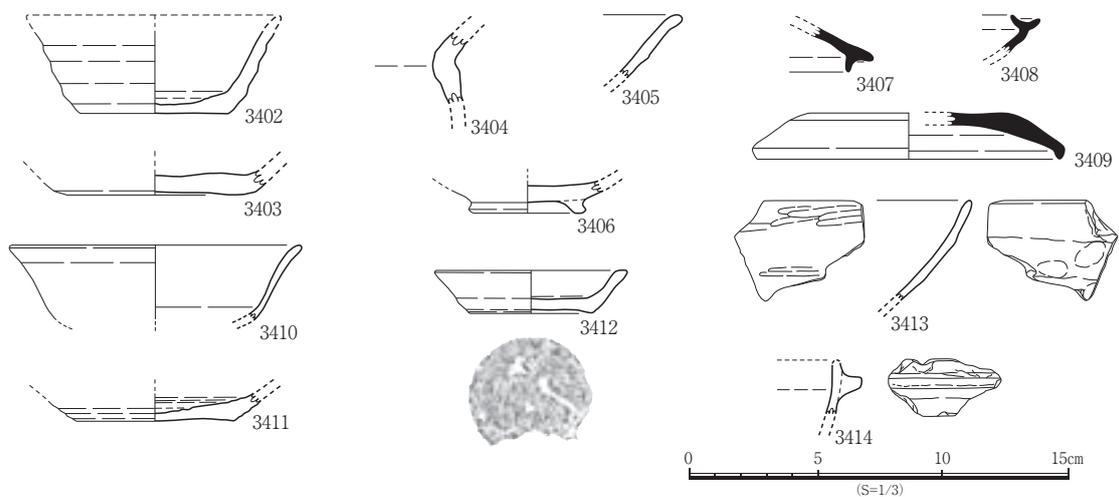


図3-125 SD-3080・3082・3084・3086・3088出土遺物実測図

1. Ⅲ区 (4) 古代後半から中世

瓦質土器(図3-125 3414)

羽釜で、やや内湾する口縁部の外面下には断面台形状の鏝が巡る。胎土は精良で、中粒砂から粗粒砂を若干含む。

SD-3089 (図3-124)

Ⅲ-4区中央部西寄りで検出した南北溝で、南端でSD-3059を掘り込む。検出長9.17m、幅0.38～0.63m、深さ18～34cmを測り、断面形はU字形を呈する。基底面は南(7.400m)から北(7.346m)に傾斜し、南北方向は北北西(N-14°-W)を向く。埋土は黒褐色(10YR2/2)シルトと黒色(10YR2/1.5)シルトを主体に下層部で地山(黄褐色(2.5Y5/4)シルト質砂)の土粒を多く含む箇所もみられ、2～3層に分層される。出土遺物には土師器1点、土師質土器8点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-3090 (図3-124)

Ⅲ-4区西部、北壁際で検出した東西溝で、西は調査区外に続く。検出長4.11m、幅0.35～0.46m、深さ4～16cmを測り、断面形は逆台形を呈する。基底面は西(7.455m)から東(7.421m)に若干傾斜し、東南東(N-119°-E)を向く。埋土は地山(黄褐色(2.5Y5/4)シルト質砂)とオリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質砂)の土粒を比較的多く含む黒褐色(7.5YR2/2)シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器1点がみられたが、図示できなかつた。

SD-3091 (図3-116・126)

Ⅲ-4区西端部で検出した浅い東西溝で、SD-3065を切り、東はSD-3093に掘り込まれ不明で、西は調査区外に続く。また、SD-3104にも掘り込まれる。検出長9.32m、幅0.46～0.76m、深さ4～13cmを測り、断面形は舟底形を呈する。基底面は西(7.437m)から東(7.435m)に若干傾斜し、東南東(N-114°-E)を向く。埋土は黒褐色(7.5YR3/1)シルトを主体に、下層は地山(オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質中粒砂)の土粒を含んでいた。出土遺物には弥生土器1点、土師質土器2点がみられたが、図示できなかつた。

SD-3092 (図3-126)

Ⅲ-4区西端部で検出した浅い東西溝で、SD-3093に掘り込まれ東と西は不明である。また、SD-3104にも掘り込まれる。検出長3.45m、幅0.36～0.40m、深さ4～8cmを測り、断面形は逆台形を呈する。基底面は西(7.445m)から東(7.434m)に若干傾斜し、東(N-101°-E)を向く。埋土は地山(オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質中粒砂)の土粒を多く含む黒色(10YR2/1.5)シルト単一層であった。遺物は出土しなかつた。

SD-3093 (図3-113・116・126)

Ⅲ-4区西部で検出した東西溝で、SD-3104に切られる以外、交わるすべての溝を掘り込み、西は調査区外に続く。検出長25.99m、幅0.30～1.12m、深さ4～23cmを測り、断面形は遺存状態の良い西側

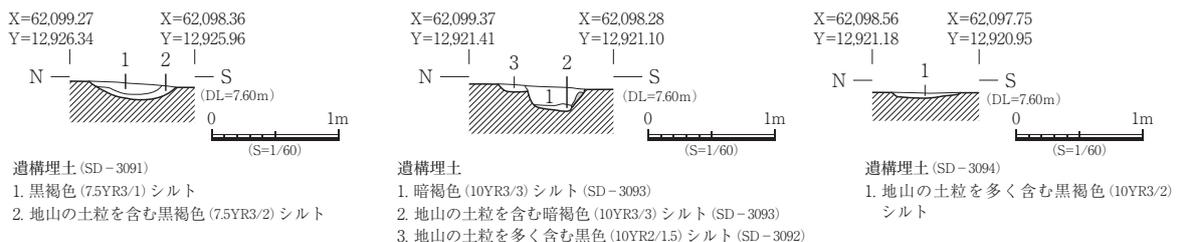


図3-126 SD-3091～3094

では逆台形, 悪い東側では舟底形を呈する。基底面は東(7.418m)から西(7.308m)に傾斜し, 西北西(N-78°-W)を向く。埋土は暗褐色(10YR3/3)シルトを主体に地山(オリブ褐色(2.5Y4/6)シルト質中粒砂)の土粒の含み度合いにより2~3層に分層される箇所がある。出土遺物は土師器・須恵器・土師質土器各1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

**SD-3094** (図3-126)

Ⅲ-4区西端部で検出した短く浅い東西溝で, SD-3093に北側が接する。検出長2.72m, 幅0.52~0.63m, 深さ5~7cmを測り, 断面形は舟底形を呈する。基底面は西(7.463m)から東(7.427m)に若干傾斜し, 東(N-100°-E)を向く。埋土は地山(オリブ褐色(2.5Y4/6)シルト質中粒砂)の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルト単一層であった。遺物は出土しなかった。

**SD-3095** (図3-127)

Ⅲ-4区西端部で検出した浅い東西溝で, 西はSD-3096・3097に掘り込まれ, 東は調査区外に続く。検出長13.18m, 幅0.38~0.66m, 深さ6~16cmを測り, 断面形は概ね舟底形を呈する。基底面は東(7.433m)から西(7.269m)に傾斜し, 西北西(N-78°-W)を向く。埋土は暗褐色(10YR3/3)シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器2点がみられたが, 図示できなかつた。

**SD-3096** (図3-127)

Ⅲ-4区西端部で検出した短い東西溝で, 西はSD-3104, 東はSD-3097に掘り込まれる。また, 溝はSD-3095を切る。検出長3.75m, 幅0.78m, 深さ8~15cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。基底面は西(7.397m)から東(7.309m)に傾斜し, 南東(N-127°-E)を向く。埋土は黒褐色(10YR2/2)シルトを主体に地山(オリブ褐色(2.5Y4/6)シルト質中粒砂)の含み度合いにより3層に分層される。遺物は出土しなかった。

**SD-3097** (図3-127)

Ⅲ-4区西端部で検出した東西溝で, SD-3098・3104に掘り込まれ, SD-3095・3096・3099・3105を切り, 西は調査区外に続く。検出長11.44m, 幅0.40~0.75m, 深さ4~12cmを測り, 断面形は舟底形を呈する。基底面は西(7.420m)から東(7.373m)に若干傾斜し, 東南東(N-107°-E)を向く。埋土は暗褐色(10YR3/3)シルトを主体に下層で地山(オリブ褐色(2.5Y4/6)シルト質中粒砂)の小ブロックを比較的多く含む箇所もみられた。出土遺物には土師器4点がみられたが, 1点(3415)が図示できた。

出土遺物

土師器(図3-132 3415)

甕の口縁部で, 胴部から屈曲して外傾する。胎土には中粒砂から粗粒砂を多く含む。

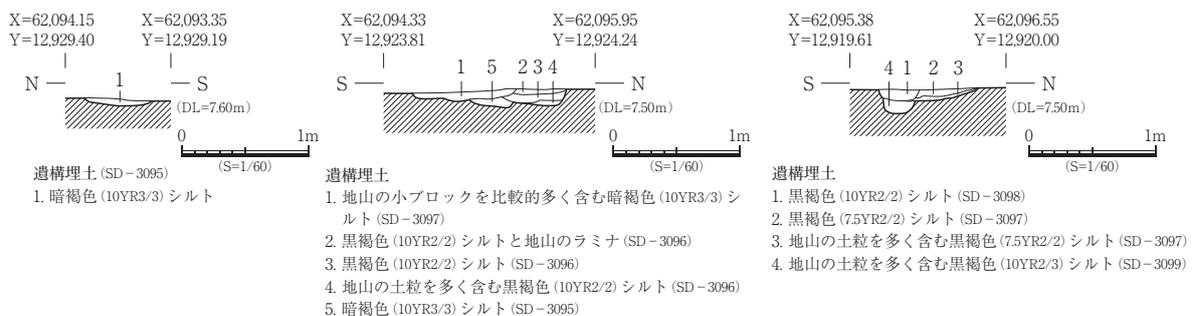


図3-127 SD-3095~3099

1. Ⅲ区 (4) 古代後半から中世

**SD-3098** (図3-127・128)

Ⅲ-4区西端部で検出した東西溝で、SD-3097の南側を掘り込み、かつSD-3099・3100・3105を切り、SD-3101・3104に掘り込まれ、西は調査区外に続く。検出長5.89m、幅0.24~0.38m、深さ7~18cmを測り、断面形はU字形を呈する。基底面はほぼ平坦で7.357~7.358mを測り、西北西(N-77°-W)を向く。埋土は黒褐色(10YR2/2)シルト単一層であった。遺物は出土しなかった。

**SD-3099** (図3-127)

Ⅲ-4区西端部で検出した斜めに走る南北溝で、北はSU-310に切られ、かつSD-3097・3098・3102・3104にも切られ、南は不明である。また、溝はSD-3100を掘り込む。検出長4.36m、幅0.27~0.35m、深さ13~19cmを測り、断面形はU字形を呈する。基底面は北(7.388m)から南(7.288m)に傾斜し、南東(N-139°-E)を向く。埋土は黒褐色(10YR2/3)シルトを主体に下層で地山(オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質中粒砂)を多く含む箇所がみられた。遺物は出土しなかった。

**SD-3100**

Ⅲ-4区西端部、SD-3099と交差する形で検出した浅い東西溝で、交わる各溝に掘り込まれ、両端は不明である。検出長1.92m、幅0.26~0.35m、深さ6~9cmを測り、断面形は逆台形を呈する。基底面は東(7.383m)から西(7.345m)に若干傾斜し、西南西(N-116°-W)を向く。埋土は黒褐色(10YR2/2)シルト単一層であった。遺物は出土しなかった。

**SD-3101** (図3-128)

Ⅲ-4区西端部、SD-3102に切られた形で検出した浅い東西溝で、SD-3098・3100・3105を掘り込み、両端は調査区外に続く。検出長2.98m、幅0.38~0.41m、深さ7~14cmを測り、断面形はU字形を呈する。基底面は東(7.365m)から西(7.350m)に若干傾斜し、北西(N-51°-W)を向く。埋土は地山(オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質中粒砂)の土粒を若干含む黒褐色(10YR2/3)シルト単一層であった。遺物は出土しなかった。

**SD-3102** (図3-128)

Ⅲ-4区西端部、SD-3104・3105に切られた形で検出した比較的しっかりした東西溝で、SD-3099~3101・3103を掘り込み、両端は調査区外に続く。検出長6.40m、幅0.73~0.76m、深さ22~26cmを測り、断面形は逆台形を呈する。基底面は西(7.178m)から東(7.164m)に若干傾斜し、東南東(N-106°-E)を向く。埋土は黒褐色(5YR2/2)シルトを主体に下層は地山(オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質中粒砂)の土粒を比較的多く含んでいた。出土遺物には実測した土師質土器1点(3416)がみられた。

出土遺物

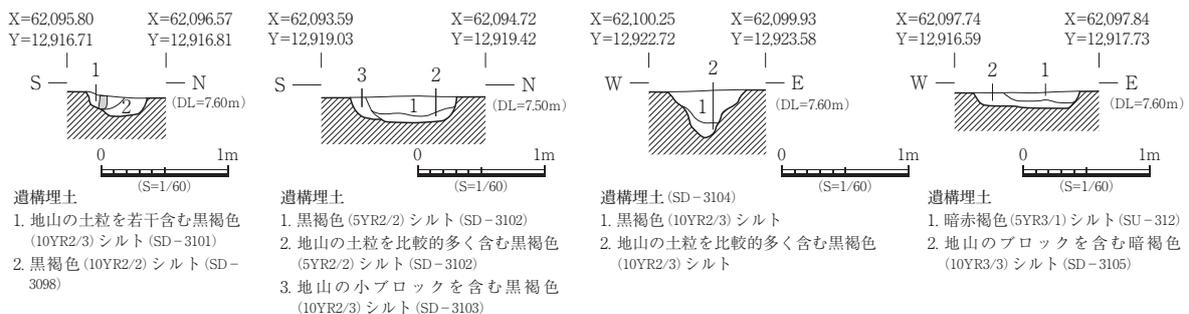


図3-128 SD-3098・3101~3105, SU-312

土師質土器(図3-132 3416)

杯で、体部は内湾気味に上がる。成形技法はB技法で、底部の切り離しは回転糸切りとなり、内底面にはロクロ目が残る。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

SD-3103(図3-128)

Ⅲ-4区西端部, SD-3102 に切られた形で検出した東西溝で, SD-3102 と並走し, 西側はSD-3105 に掘り込まれる。検出長2.72m, 推定幅約0.50m, 深さ18~20cmを測り, 断面形はU字形を呈する。基底面は西(7.220m)から東(7.200m)に若干傾斜し, 東南東(N-106°-E)を向く。埋土は地山(オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質中粒砂)の小ブロックを含む黒褐色(10YR2/3)シルト単一層であった。遺物は出土しなかった。

SD-3104(図3-128)

Ⅲ-4区西端部で検出した比較的しっかりした南北溝で, 交わる各溝を掘り込み, 両端は調査区外に続く。検出長8.94m, 幅0.44~0.72m, 深さ26~42cmを測り, 断面形はV字形ないし逆台形を呈する。基底面は北(7.194m)から南(7.138m)に傾斜し, 南南西(N-165°-W)に延びる。埋土は黒褐色(10YR2/3)シルトを主体に2層に分層でき, 下層は地山(オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質中粒砂)の土粒を比較的多く含んでいた。出土遺物には弥生土器2点, 須恵器1点, 土師質土器9点, 石製品2点がみられ, 石製品1点(3417)が図示できた。

出土遺物

石製品(図3-132 3417)

丸く扁平な磨石で, 片面は平滑であるが一方はやや粗く, 側面には敲打痕が残る。石材は粗粒砂岩である。

SD-3105(図3-128)

Ⅲ-4区西端部, 西壁に沿った形で検出した浅い南北溝で, SD-3102・3103を切り, SD-3093・3097・3098・3101に掘り込まれ, 両端は調査区外に続く。検出長6.51m, 幅0.82~0.96m, 深さ8~16cmを測り, 断面形は舟底形を呈する。基底面は北(7.424m)から南(7.340m)に傾斜し, 南(N-173°-E)に延びる。埋土は地山(オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質中粒砂)のブロックを含む暗褐色(10YR3/3)シルト単一層であった。遺物は出土しなかった。

SD-3106

Ⅲ-5区東端部, 東壁際で検出した湾曲するL字形の溝であるが, その大半は調査区外にある。また, 溝はSD-3107に掘り込まれる。検出長10.16m, 幅0.50m以上, 深さ8~12cmを測り, 断面形は概ね逆台形を呈するとみられる。基底面は南東(7.357m)から北西(7.347m)に若干傾斜し, 北北西(N-30°-W)

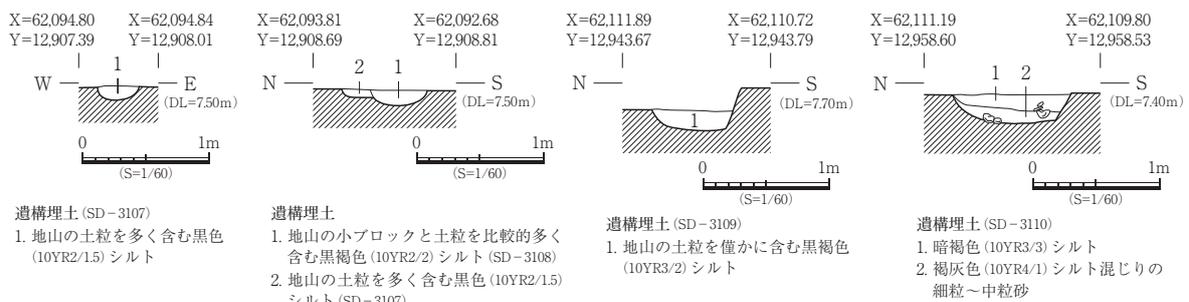


図3-129 SD-3107~3110

から西(N-84°-W)に湾曲して延びる。埋土は黒褐色(10YR2/2)シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器2点がみられたが、図示できなかった。

**SD-3107** (図3-129)

Ⅲ-5区東端部で検出した湾曲するL字形の溝で、北はSD-3106を切り調査区外に延び、南はSD-3108に掘り込まれる。検出長4.54m、幅0.28~0.38m、深さ3~11cmを測り、断面形はU字形を呈する。基底面は南(7.415m)から北(7.391m)に若干傾斜し、西北西(N-57°-W)から屈曲して北(N-5°-E)に延びる。埋土は地山(オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質極細粒砂から細粒砂)の土粒を多く含む黒褐色(10YR2/1.5)シルト単一層であった。遺物は出土しなかった。

**SD-3108** (図3-129)

Ⅲ-5区東端部で検出した東西溝で、SD-3107を切り、両端は調査区外に続く。検出長4.55m、幅0.39~0.53m、深さ10~13cmを測り、断面形はU字形を呈する。基底面は東(7.352m)から西(7.324m)に若干傾斜し、西(N-97°-W)に延びる。埋土は地山(オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質極細粒砂から細粒砂)の小ブロックと土粒を比較的多く含む黒褐色(10YR2/2)シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器1点がみられたが、図示できなかった。

**SD-3109** (図3-129)

Ⅲ-3区西部の南壁際で検出した東西溝で、SD-3110に掘り込まれ、南は調査区外に続く。検出長19.00m、幅1.08~1.44m、深さ3~13cmを測り、断面形は概ね逆台形を呈する。基底面は7.323~7.325mを測りほぼ平坦で、東(N-83°-E)を向く。埋土は地山(にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト質極細粒砂から細粒砂)の土粒を僅かに含む黒褐色(10YR3/2)シルト単一層であった。出土遺物には土師器2点、須恵器3点、土師質土器11点、瓦器・瓦質土器・青磁各1点がみられたが、図示できるものはなかった。

**SD-3110** (図3-129)

Ⅲ-3区東部の南壁際で検出した東西溝で、SD-3109を掘り込み、北側の立ち上がりのみ確認でき、両端は調査区外に続く。検出長18.86m、幅0.70~1.26m、深さ14~27cmを測り、断面形は概ねU字形を呈するとみられる。基底面は西(7.125m)から東(7.119m)に若干傾斜し、東(N-97°-E)に延びる。埋土は2層に分層でき、上層は暗褐色(10YR3/3)シルト、下層は褐灰色(10YR4/1)シルト混じりの細粒砂から中粒砂で礫が混じっており、当時は一定の流れがあったものとみられる。出土遺物には土師質土器5点を中心に須恵器・瓦器・青磁各1点がみられたが、図示できるものはなかった。

**SD-3111** (図3-130)

Ⅲ-3区北壁際で検出した東西溝で、SD-3112を掘り込み、両端は調査区外に続く。検出長25.17m、幅0.52~1.06m、深さ13~35cmを測り、断面形は逆台形ないしU字形を呈する。基底面は東(7.307m)か

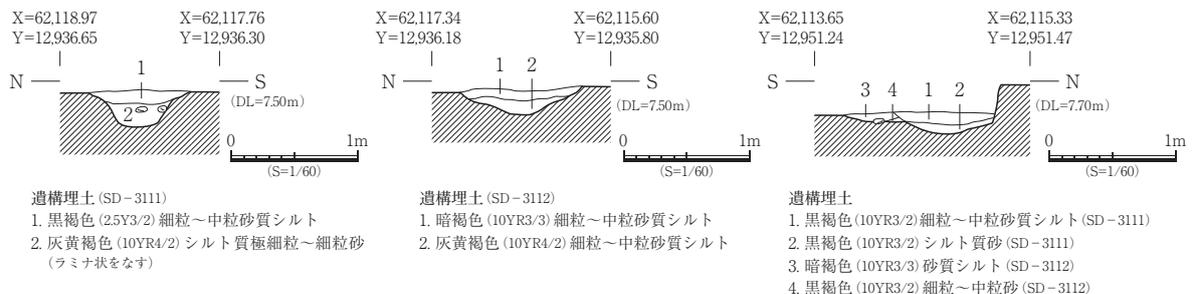


図3-130 SD-3111・3112

ら西(7.186m)に傾斜し、西(N-97°-W)に延びる。埋土は2層に分層でき、上層が黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂から中粒砂質シルト、下層が灰黄褐色(10YR4/2)シルト質極細粒砂から細粒砂でラミナ状をなしており、当時は一定の流れがあったものとみられる。出土遺物には土師質土器4点がみられたが、図示できるものはなかった。

**SD-3112** (図3-130)

Ⅲ-3区北壁際、SD-3111の南隣で検出した東西溝で、東はSD-3111に切られ、西は調査区外に続く。検出長21.28m、幅0.45~1.35m、深さ6~30cmを測り、断面形は舟底形を呈する。基底面は東(7.374m)から西(7.241m)に傾斜し、西(N-80°-W)に延びる。埋土は2層に分層でき、上層が暗褐色(10YR3/3)細粒砂から中粒砂質シルト、下層が灰黄褐色(10YR4/2)細粒から中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器9点がみられたが、図示できるものはなかった。

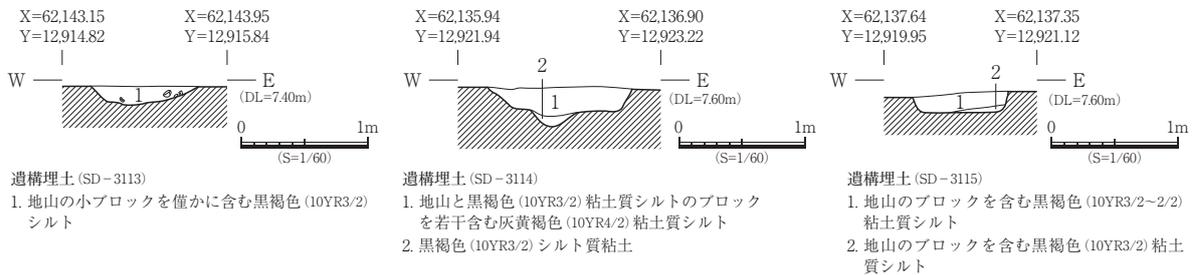


図3-131 SD-3113~3115

**SD-3113** (図3-131)

Ⅲ-2区西壁際、SD-3115を切った形で検出した南北溝で、両端は調査区外に続く。検出長18.65m、幅0.66~0.84m、深さ8~23cmを測り、断面形は舟底形を呈する。基底面は北(7.245m)から南(7.194m)に傾斜し、南東(N-145°-E)に延びる。埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の小ブロックを僅かに含む黒褐色(10YR3/2)シルト単一層であった。出土遺物には弥生土器1点、須恵器2点、土師質土器11点がみられたが、図示できるものはなかった。

**SD-3114** (図3-131)

Ⅲ-2区西部、SD-3113の東隣で検出した南北溝で、交わる各遺構を掘り込み、両端は調査区外に続く。前述のように、方向的にSD-3068に繋がる可能性が考えられる。検出長18.60m、幅0.67~1.24m、深さ16~31cmを測り、断面形は舟底形ないし逆台形を呈し、南側の基底面は一段深くなる。基底面は

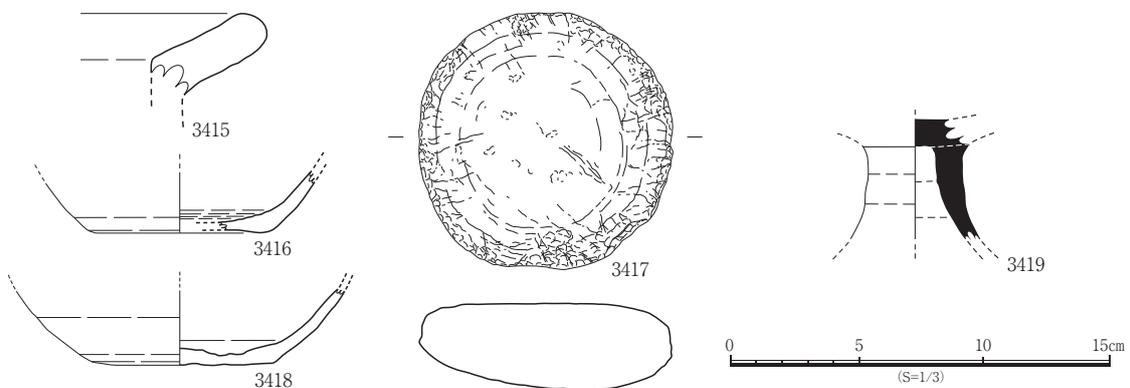


図3-132 SD-3097・3102・3104・3115, SU-311出土遺物実測図

南(7.239m)から北(7.167m)に傾斜し、北北西(N-24°-W)に緩やかに曲がって延びる。埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)と黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトのブロックを若干含む灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルトを主体に、一段深くなった下層には黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土の堆積が認められた。出土遺物には土師質土器9点を中心に、弥生土器・須恵器・青磁各1点がみられたが、図示できるものはなかった。

**SD-3115** (図3-131)

Ⅲ-2区中央部, SD-3113・3114に掘り込まれた形で検出した南北溝で, SD-3117を切り, 両端は調査区外に続く。検出長10.70m, 幅0.61~0.77m, 深さ7~16cmを測り, 断面形は逆台形を呈す。基底面は北(7.266m)から南(7.256m)に若干傾斜し, 南南西(N-168°-W)に延びる。埋土は黒褐色(10YR3/2~2/2)粘土質シルトを主体に, 地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)のブロックを含む度合いにより2層に分層される箇所もある。出土遺物には弥生土器3点, 土師質土器13点がみられ, 土師質土器1点(3418)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-132 3418)

杯で, 体部は平らな底部から内湾気味に上がる。成形技法はB技法で, 底部の切り離しは回転ヘラ切りで板状圧痕が残る。内底面にはロクロ目が残る。胎土は精良で, 細粒砂から中粒砂を若干含む。

**SD-3116** (図3-133)

Ⅲ-2区中央部, SD-3114に掘り込まれた形で検出した短い南北溝で, SK-343を切る。検出長5.10m, 幅0.39~0.54m, 深さ5~17cmを測り, 断面形はU字形を呈す。基底面は南(7.353m)から北(7.330m)に若干傾斜し, 北(N-3°-E)を向く。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一層であった。出土遺物には弥生土器2点, 土師質土器4点がみられたが, 図示できるものはなかった。

**SD-3117** (図3-133)

Ⅲ-2区北部, SD-3115に切られた形で検出した東西溝で, SD-3115の東側で途切れ, それぞれ調査区外に続く。検出長11.88m, 幅0.42~1.09m, 深さ2~16cmを測り, 断面形は舟底形を呈す。基底面は東(7.364m)から西(7.325m)に若干傾斜し, 北西(N-55°-W)を向く。埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)のブロックを多く含む黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一層であった。出土遺物には土師器1点, 土師質土器4点がみられたが, 図示できるものはなかった。

**SD-3118** (図3-133)

Ⅲ-2区北東部, SD-3022・3023を掘り込んだ形で検出した南北溝で, 両端は調査区外に続き, 東側は前述のとおりSD-3053に続く可能性がある。検出長4.03m, 幅0.62~0.96m, 深さ10~30cmを測

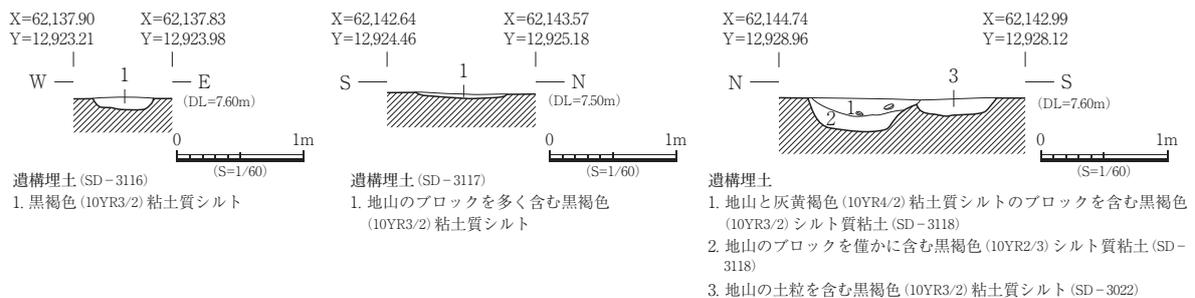


図3-133 SD-3022・3116~3118

り、断面形はU字形ないし逆台形を呈す。基底面は北(7.302m)から南(7.252m)に若干傾斜し、南東(N-142°-E)を向く。埋土は黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土を主体に、地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)と灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルトのブロックを含む度合いにより2層に分層される。出土遺物には土師器2点、須恵器5点、土師質土器12点がみられたが、図示できるものはなかった。

⑤ 畝状遺構

畝地跡と考えられるもので、Ⅲ-1区西部で1列、東部で5列、Ⅲ-4区西部で6列の計12列を検出した。Ⅲ-1区東部の畝状遺構は北東部で確認したSB-312~316、Ⅲ-4区西部で確認した畝状遺構はSB-329~331にそれぞれ関連するものとみられる。また、後者は全般に長さが短いものである。

SU-301

Ⅲ-1区南西端部、SB-322の西側で検出した3本単位の南北方向の畝状遺構で西側がやや広くなり、畝間間隔は0.87~1.31m、畝幅0.50~1.00mである。幅は20~40cm、深さ1~5cmを測り、最大長は2.10mである。主軸方向はN-9~13°-Eを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトであった。遺物は出土しなかった。

SU-302 (図3-134)

Ⅲ-1区中央部東寄りの緩斜面で検出した6本単位の南北方向の畝状遺構で西から2本目と3本目の間隔がやや広くなり、畝間間隔は0.60~1.95m、畝幅0.30~1.60mである。幅は20~44cm、深さ1~6cmを測り、最大長は9.78mである。主軸方向はN-37~41°-Eを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)シルトであった。出土遺物には土師器5点、須恵器2点、土師質土器6点がみられたが、図示できるものはなかった。

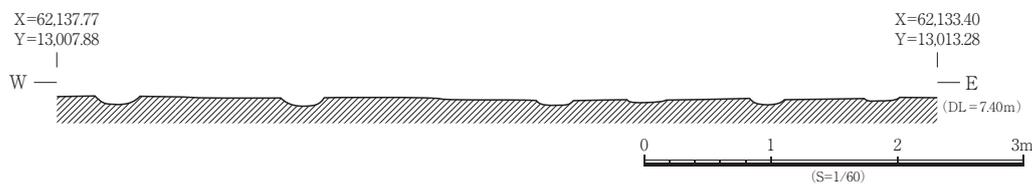


図3-134 SU-302

SU-303

Ⅲ-1区北東部で検出した5本単位の東西方向の畝状遺構で北から2本目は中央部で途切れる。畝間間隔は約1.97m、畝幅約1.67mである。幅は18~32cm、深さ1~5cmを測り、最大長は9.40mである。主軸方向はN-52~58°-Wを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)シルトであった。出土遺物には土師器1点、土師質土器2点がみられたが、図示できるものはなかった。

SU-304

Ⅲ-1区北東部で検出した不揃いな3本単位以上の南北方向の畝状遺構で、SD-3042の枝分かれした部分が畝状遺構の一部であった可能性も考えられる。検出した畝間間隔は0.50~2.90m、畝幅0.30~2.70mである。幅は22~44cm、深さ2~6cmを測り、最大長は2.24mである。主軸方向はN-2°-W~5°-Eを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は極細粒砂を多く含む暗褐色(10YR2/3)砂質シルトであった。遺物は出土しなかった。

SU-305

Ⅲ-1区東部で検出した4本単位以上の南北方向の畝状遺構で、東から2本目と西から2本目との間

1. Ⅲ区 (4) 古代後半から中世

隔が6.70mと広くっており、間には3本の畝状遺構があったものと推測され、畝間間隔は1.75～2.12m、畝幅1.70～1.79mとみられる。幅は20～42cm、深さ1～4cmを測り、最大長は5.08mである。主軸方向はN-26～33°-Eを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)シルトであった。出土遺物には須恵器3点がみられたが、図示できるものはなかった。

**SU-306**

Ⅲ-1区東部、SU-305の間で検出した5本単位以上の南北方向の畝状遺構で、東から4本目と西から1本目との間隔が3.00mと広くっており、間には2～3本の畝状遺構があったものと推測され、畝間間隔は0.60～0.80m、畝幅0.46～0.60mとみられる。幅は20～42cm、深さ1～2cmを測り、最大長は4.04mである。主軸方向は概ねN-15°-Eを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)シルトであった。遺物は出土しなかった。

**SU-307**

Ⅲ-4区中央部西寄り、SD-3054・3057に切られた形で検出した6本単位の南北方向の畝状遺構で、畝間間隔は0.64～0.69m、畝幅約0.40mである。幅は17～31cm、深さ1～8cmを測り、最大長は0.89m以上で、南の調査区外に続く。主軸方向はN-10～14°-Eを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は地山(明黄褐色(10YR6/8)シルト質砂)のブロックを多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトで、細粒砂から極細粒中礫が比較的多く混じっていた。出土遺物は須恵器1点がみられたが、図示できなかった。

**SU-308**

Ⅲ-4区西端部、SD-3093に切られた形で検出した11本単位の南北方向の畝状遺構で、西から1本目と2本目の間隔が短くなっている以外、畝間間隔は0.66～0.70m、畝幅0.30～0.34mである。幅は20～43cm、深さ2～7cmを測り、最大長は2.02m以上である。主軸方向はN-15～22°-Eを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は黒褐色(5YR3/1)シルトであった。出土遺物は土師質土器4点がみられたが、図示できるものはなかった。

**SU-309**

Ⅲ-4区西端部で検出した6本単位の南北方向の畝状遺構で、交わる遺構に掘り込まれていた。畝間間隔は0.45～0.76m、畝幅0.25～0.52mである。幅は19～30cm、深さ1～5cmを測り、最大長は1.02m以上である。主軸方向はN-15～18°-Eを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は黒褐色(5YR3/1)シルトであった。出土遺物は須恵器2点、土師質土器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

**SU-310**

Ⅲ-4区西端部、北壁際で検出した3本単位以上の南北方向の畝状遺構で、SD-3091とSU-311に掘り込まれ、西側の2本はやや間隔が空いており、間に1本あったものとみられ、畝間間隔は約0.83m、畝幅約0.64mである。幅は28～40cm、深さ2～5cmを測り、最大長は1.16m以上である。主軸方向は概ねN-18°-Eを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は黒褐色(5YR3/1)シルトであった。出土遺物は土師器2点、須恵器1点、土師質土器2点がみられたが、図示できるものはなかった。

**SU-311**

Ⅲ-4区西端部、北壁際で検出した5本単位以上の南北方向の畝状遺構で、SD-3091～3093に掘り込まれ、SU-310を切り、畝間間隔は約0.68m、畝幅約0.45mである。幅は20～34cm、深さ1～6cmを測り、最大長は1.96m以上である。主軸方向はN-18～28°-Eを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は黒褐色(5YR3/1)シルトであった。出土遺物は弥生土器3点、土師器7点、須恵器3点、土師質土器15点がみら

れ、須恵器1点(3419)が図示できた。

#### 出土遺物

須恵器(図3-132 3419)

高杯で、杯底部と脚基部が残る。脚台部は中空となり、裾部に向かって広がる。胎土には白色細粒砂から中粒砂を若干含む。

SU-312(図3-128)

Ⅲ-4区西端部、西壁際で検出した5本単位以上の南北方向の畝状遺構で、SD-3099・3105を切り、SD-3093・3097に掘り込まれ、畝間間隔は約0.65m、畝幅約0.32mである。幅は28~50cm、深さ1~8cmを測り、最大長は1.75m以上である。主軸方向は概ねN-40°-Eを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は黒褐色(5YR3/1)シルトであった。出土遺物は土師質土器1点がみられたが、図示できなかった。

#### ⑥ ピット

標高が高く、建物跡が図示できたⅢ-1区西部と北東部、Ⅲ-4区中央部から西部で計2,238個を確認した。その大半は平面形が円形のもので、復元はできなかったが掘立柱建物跡などの柱穴と考えられる。この内、図示できた遺物が出土したピットは76個であり、詳細は遺物観察表のとおりである。

#### 出土遺物

土師器(図3-135 3420~3422)

3420は皿で、口縁部は開き気味に短くたち上がり、口縁端部内面に1条の凹線を巡らす。器面にはヨコナデ調整の後にヘラ磨きを施す。胎土には細粒砂から中粒砂を少し含む。3421は手づくねの小皿で、底部外面を中心に指押えの痕が残り、口縁部端部外面にはヨコナデ調整によるとみられる凹線状の凹みが巡る。成形は瓦器と同じである。胎土には細粒砂から中粒砂を少し含む。

3422は甑とみられるもので、口縁部は緩やかに外反し、端部は丸い。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

須恵器(図3-135 3423~3433)

3423は杯蓋で、口縁部は内湾気味に下り、端部は丸い。胎土には白色細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。3424は杯身で、たち上がりは9mmと短く折込みにより内傾した後真上を向き、端部は細い。底部外面残部には回転ヘラ削り調整の痕跡はみられない。胎土には白色細粒砂から粗粒砂を少し含む。3425は杯で高台が付かず、底部外面には回転ヘラ切り痕が残る。胎土には白色細粒砂から粗粒砂を少し含む。3426は高さ7mmのハの字形に開く高台が付くもので、底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。胎土には白色細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

3427は高さ1.2cmの高台が付く椀とみられるもので、高台から底部にかけてヨコナデ調整を施す。胎土は精良で、細粒砂から極粗粒砂を若干含む。

3428は高杯で、脚台部はハの字形に開き、裾部で屈曲し、端部は浅い凹面をなす。胎土には白色細粒砂を中心に細礫を若干含む。

3429は鉢で、東播系須恵器の可能性も考慮され、体部は平らな底部から斜め上方を向く。胎土には白色細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

3430は甕の口縁部で、短く外傾し、端部は平面をなす。胎土には白色粗粒砂を比較的多く含む。3431も甕で、胴部は丸く、口縁部は外傾する。外面には平行のタタキ目、内面には同心円文のタタキ目が残る。胎土は比較的精良で、白色細粒砂を少し含む。

3432と3433は壺で、3432は小型で、胴部は内湾気味に立ち上がる。胎土は比較的精良で、細粒砂から極粗粒砂を少し含む。3433は、胴部は平らな底部から上外方に立ち上がる。器面には接合痕跡が明瞭に残る。胎土には白色細粒砂から粗粒砂を多く含む。

土師質土器(図3-136・137 3434~3509)

3434~3474は杯で、3434~3454は口縁部が残存する。口径は11.0~15.2cmまであり、成形技法は、A技法(3434・3438・3439・3447・3449・3453・3454)のものとB技法(3435~3437・3440~3446・3448・3450~3452)のものがみられ、底部が残るもの(3445・3447・3449)はいずれも回転糸切り底となっている。胎土は細粒砂から粗粒砂までを若干含む精良なものが大半を占める一方、細粒砂から中粒砂を比較的多く含むもの(3435・3447・3449)もみられる。この内、3447や3449のように回転糸切り底であるがA技法で成形されたものは器壁も他に比べ厚く古相を示すものと思われる。また、B技法で成形されたものの内、体部外面には回転ナデ調整を加えず未調整でロクロ目が残るものは、回転ナデ調整を加えたものより新相であろう。

3455~3474は底部と一部体部も残るもので、成形技法は、A技法(3455・3458~3461・3464・3466~3470・3472・3473)のものとB技法(3456・3457・3462・3463・3465・3471・3474)のものがみられるが、3467が回転ヘラ切り底である以外すべて回転糸切り底である。胎土は細粒砂から中粒砂を若干含む精良なものが多くみられる一方、細粒砂から粗粒砂を比較的多く含むもの(3459~3461・3466・3471・3472)もある。また、雲母片を含むもの(3465・3471)も認められた。

3475~3500は小皿で、3475~3495は一応全体を知ることができる。3475~3477は粘土塊から口縁部を摘み出し、小皿としたとみられるもので、口縁部は短く斜め上方を向く。成形技法はB技法と

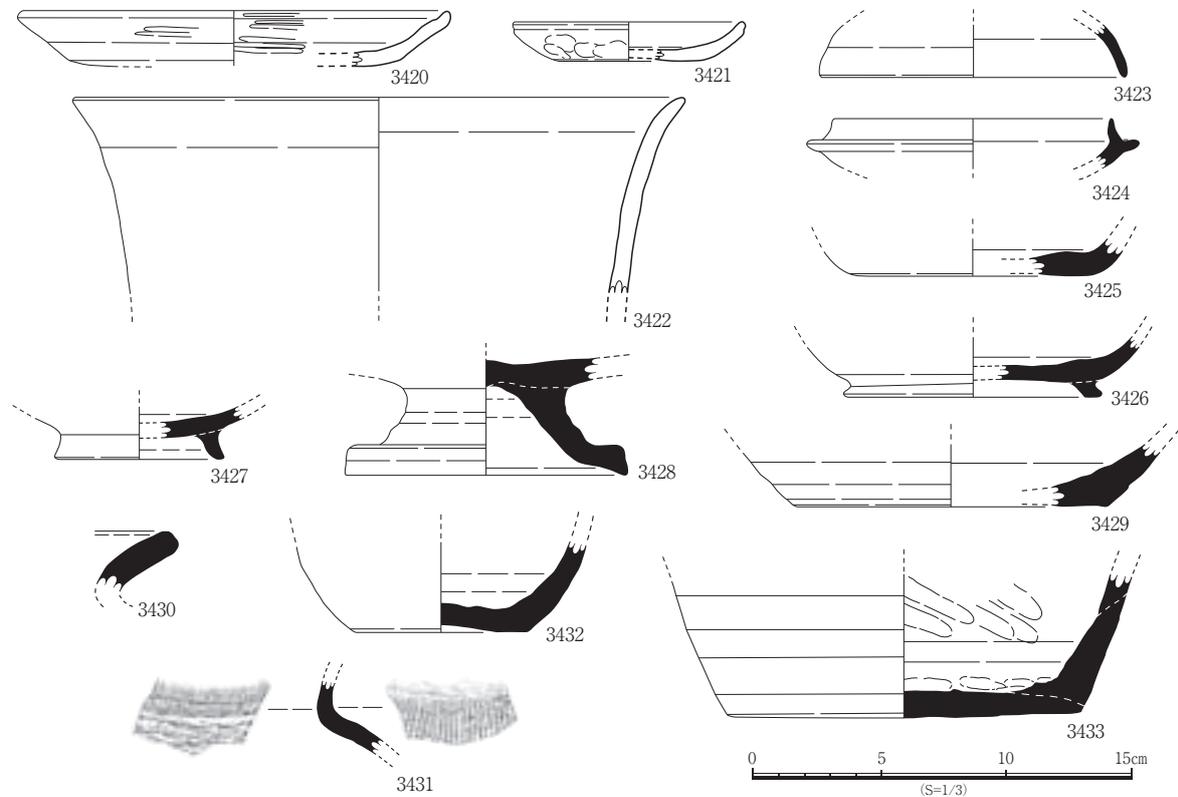


図3-135 ピット出土遺物実測図1

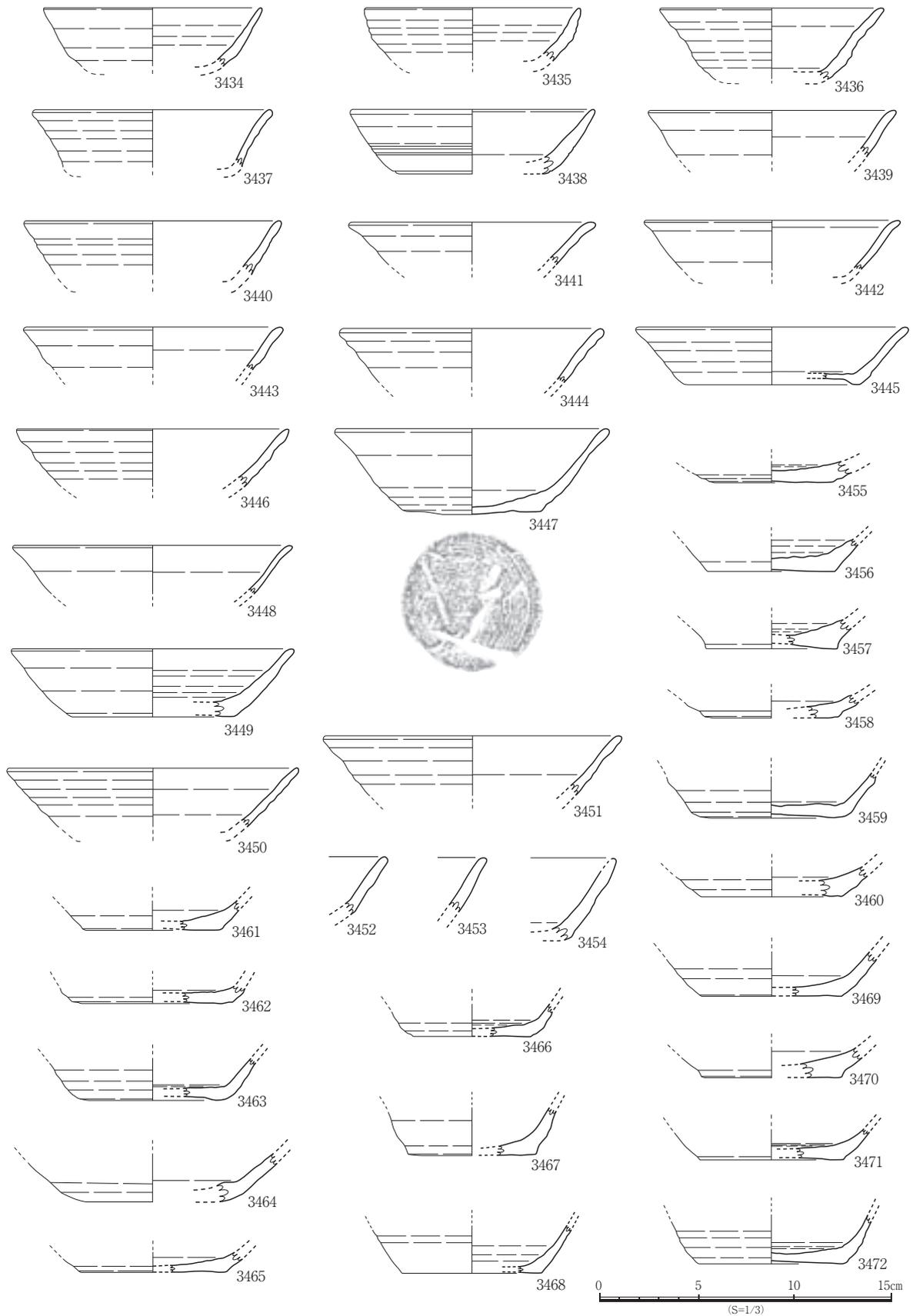


図3-136 ピット出土遺物実測図2

なる。底部の切り離しはいずれも回転糸切りである。胎土は精良で、細粒砂から中粒砂を若干含む。3478も似た形態であるが、成形技法はA技法とみられる。底部の切り離しは回転糸切りとなる。胎土は精良で、赤色粗粒砂を若干含む。3479～3485は、成形がA技法とみられるもので、比較的薄い底部から口縁部が斜め上方を向く。底部の切り離しはいずれも回転糸切りによる。胎土には、3479が極細粒砂から細粒砂を若干含み、3480が赤色中粒砂を若干含み、3481～3483が細粒砂から中粒砂ないし粗粒砂を少し含み、3484と3485が細粒砂から中粒砂ないし粗粒砂を比較的多く含む。3486～3489は、底部と口縁部～体部を別々に作り接合して成形したとみられるもの(A2技法)で、3489にはその接合

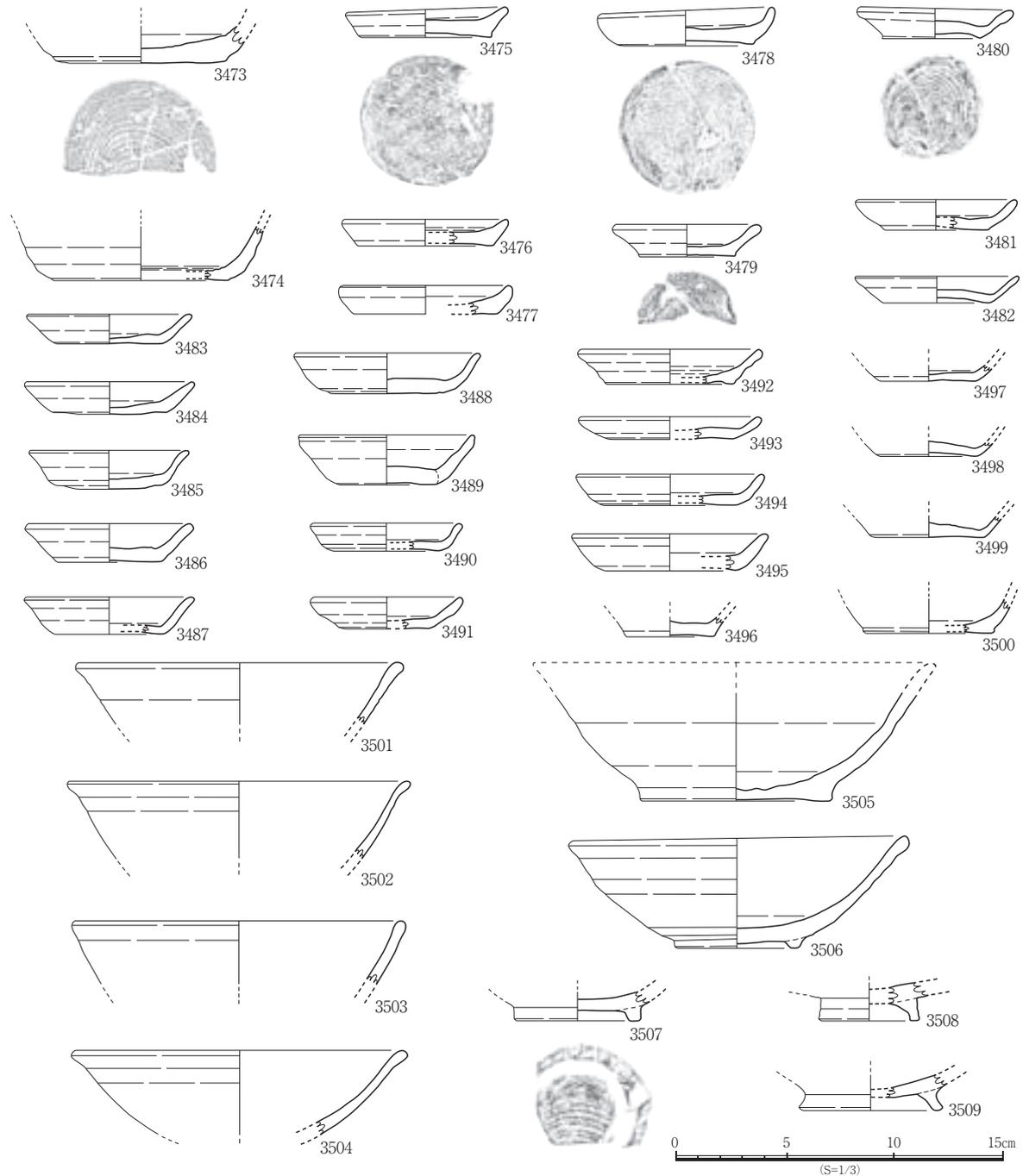


図3-137 ピット出土遺物実測図3

痕跡が明瞭に残る。内底端部に接合痕跡がくびれとして残る特徴がある。底部の切り離しは、3489が回転ナデ調整で不明瞭な以外は回転糸切りによる。胎土は、3486が細粒砂から中粒砂を若干含み、3487が細粒砂から中粒砂を少し含み、3488は細粒砂から粗粒砂を比較的多く含み、3489が細粒砂を若干含む。3490～3492は、外面に未調整部分が残りロクロ目が目立つもので、成形技法はB技法となり、底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土はいずれも精良で、細粒砂から中粒砂を若干含む。3493～3495は、薄く扁平な小皿で、器高指数は20に満たない。器高指数が12の3493と17の3494の成形技法はB技法、19の3495はA技法である。底部が残る3493と3494は回転糸切り底となる。胎土は、3493と3494が精良で、細粒砂から中粒砂を若干含むのに対して3495は細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。3496～3500は底部が残るもので、成形技法は3500がA技法である以外はB技法である。底部の切り離しはいずれも回転糸切りによる。胎土は精良で3500以外は細粒砂から中粒砂を若干含む、3500は極細粒砂から細粒砂を若干含む。

3501～3509は椀で、3501～3506は口縁部が残る。口縁部は概して体部から内湾気味に上がり、端部を丸く仕上げる。成形技法はいずれもA技法で、ベタ高台が残る3505は回転糸切り底となる。3504の口縁部内面にはタールが付着しており、灯明皿に使用されたものとみられる。3506の体部外面下端には回転ヘラ削り調整がみられる。胎土には、3501・3502・3505が細粒砂から粗粒砂を少し含み、3503・3506が細粒砂ないし中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含み、3504が細粒砂から中粒砂を多く含む。3507～3509は椀の高台で、成形技法はどれもA技法となり、3507の外底面には静止糸切りの痕跡が残る。胎土には、3507と3509が細粒砂から粗粒砂を比較的多く含み、3508が細粒砂から粗粒砂を少し含む。

瓦器(図3-138 3510～3522)

3510～3518は椀で、3510のみ全体を知ることができる。3510は、体部から口縁部は内湾気味に上がり、底部外面にはハの字形に開く矩形で高さ5mmの高台が付く。外面には大きく四段にヨコ方向のヘラ磨き、内面口縁部には連結圏線、底面には平行線のヘラ磨きが施される。胎土には粗粒砂から細礫を比較的多く含む。3511～3516は口縁部が残る、比較的器高があり、口縁部が内湾気味に上がるもの(3511～3513)は内面にヘラ磨きがみられるが、器高が低くなる3514～3516では、3515に一部ヘラ磨きが認められる程度である。胎土には、3513～3515に細粒砂から粗粒砂を若干含む以外は細粒砂

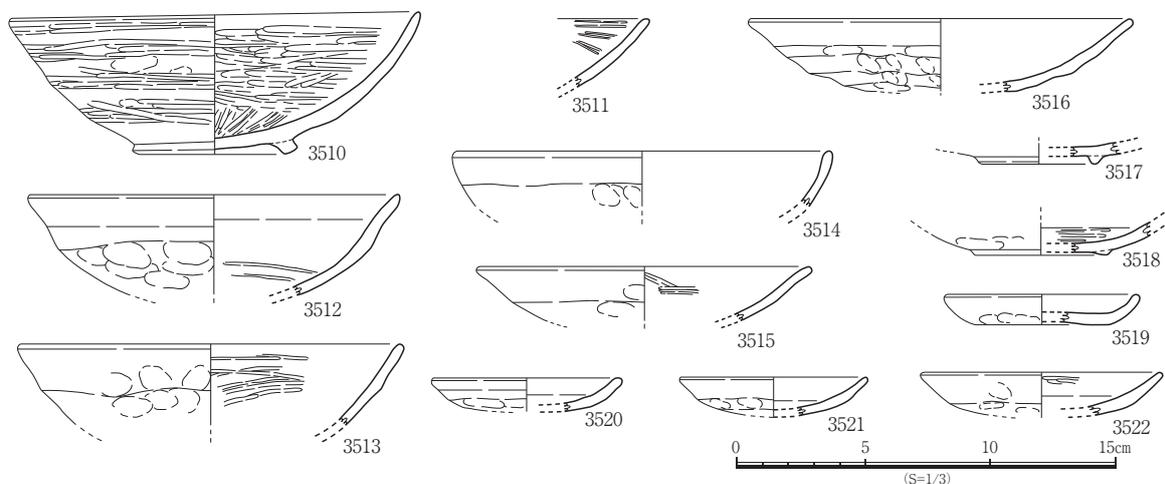


図3-138 ピット出土遺物実測図4

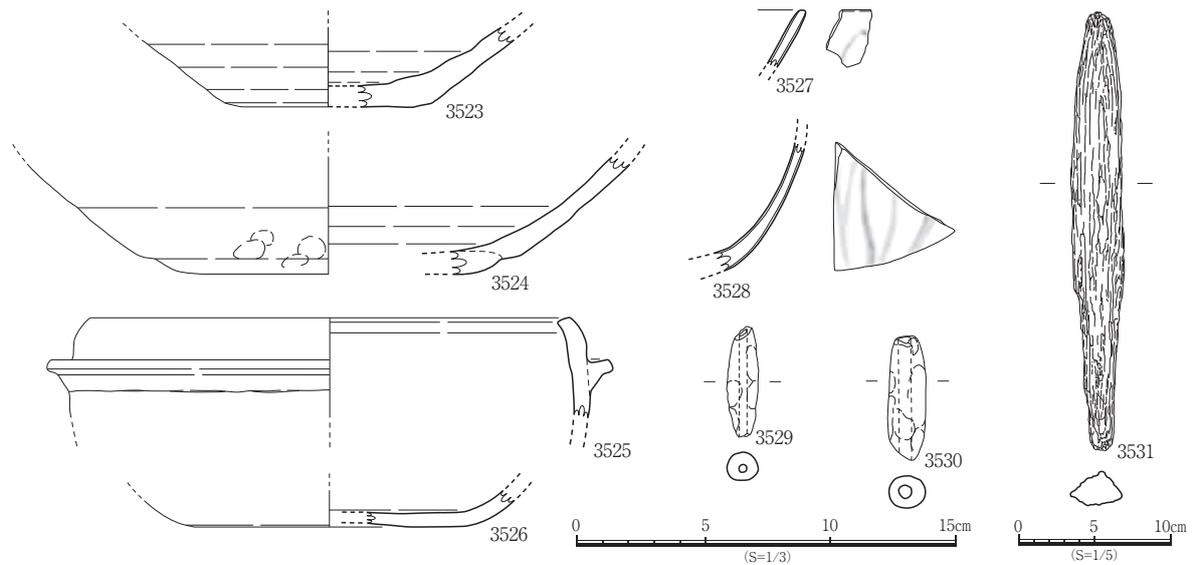


図3-139 ピット出土遺物実測図5

から粗粒砂を比較的多く含む。3517と3518は底部が残り、外面には小さな断面三角形の高台が付き、3518にはヘラ磨きが残る。胎土には、3517が細粒砂から粗粒砂を比較的多く含み、3518が細粒砂から中粒砂を少し含む。

3519～3522は小皿で、3519の底部が平らである以外は丸味があり、口縁部に向かって内湾気味に上がる。口縁部から内面にかけてヨコナデ調整を施し、底部外面には指押えの痕が残る。3522の口縁部内面にはヘラ磨きとみられる痕跡が認められる。胎土には、3522が細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む以外は精良で、極細粒砂から中粒砂ないし粗粒砂を若干含む。

東播系須恵器(図3-139 3523・3524)

いずれも片口鉢で、底部が残る。底部は平らで、体部は3523がほぼ真直ぐ、3524が内湾気味に斜め上方に延びる。胎土には、3523が細粒砂から細礫、3524が中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

瓦質土器(図3-139 3525・3526)

いずれも羽釜で、3525は内湾気味に立ち上がる口縁部下端に断面台形状の鐙が巡る。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。3526は底部で、胴部は平らな底部から内湾気味に上がる。外面には煤の付着が認められる。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

青磁(図3-139 3527・3528)

いずれも碗で、3527は上外方に延びる口縁部となり、端部は丸く、外面にはやや形骸化した鎬蓮弁文が残る。3528は体部で、外面には鎬蓮弁文が施される。2点とも貫入はなく、胎土には黒色粒を若干含む。

土製品(図3-139 3529・3530)

いずれも土錘で、3529は紡錘形、3530は円筒形である。胎土には、3529が細粒砂から粗粒砂を比較的多く含み、3530が赤色粗粒砂を比較的多く含む。

木製品(図3-139 3531)

柱根で、芯の部分が残存する。樹種はヒノキである。

(5) 近世以降

Ⅲ-1区中央部とⅢ-4区を中心に検出された。規格性などはなく、散発的である。

① 土坑

SK-364 (図3-140)

Ⅲ-1区中央部、北側で検出した不整形で深い大型の土坑で、北側から階段状の段部を掘り残しており、水汲み用に掘削されたものではないかとみられる。長辺5.60m、短辺4.90m、深さ1.57mを測り、長軸方向はN-34°-Eを示す。断面形は北側が階段状、南側が逆台形を呈する。埋土は暗褐色から黒褐色(10YR2/3~3/2)シルトを主体に多くの層で中礫から大礫や地山(にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質極細粒砂)などのブロックが混じっており、11層に分層される。出土遺物には弥生時代から中世の遺構を掘り込んでいる関係で、土師器16点、須恵器13点、土師質土器56点、肥前系磁器3点、奈半利焼1点、近代陶器3点、近代磁器5点、近現代陶磁器25点、石製品3点などがみられ、肥前系磁器3点(3532~

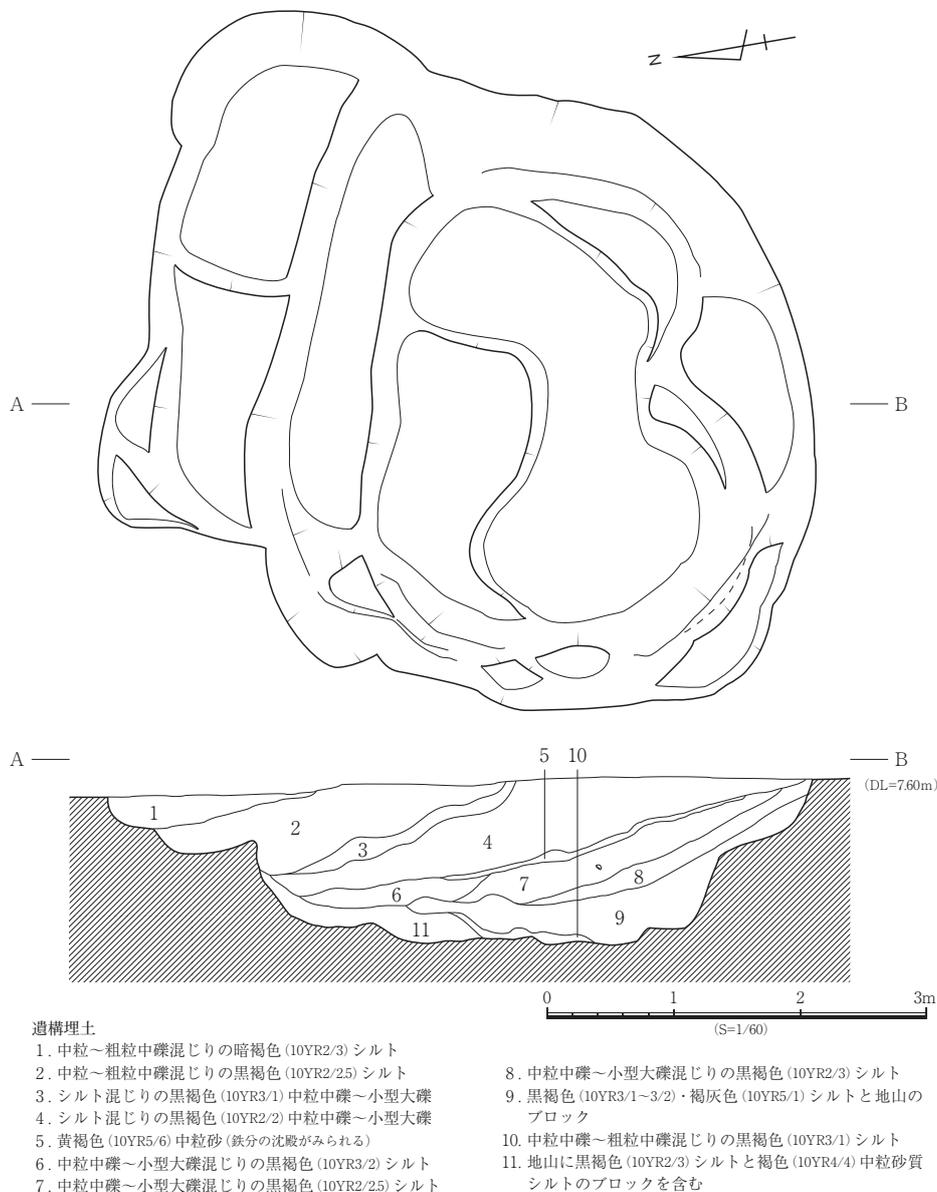


図3-140 SK-364

3534), 奈半利焼1点(3535), 石製品1点(3536)が図示できた。

出土遺物

肥前系磁器(図3-143 3532~3534)

3532・3533は碗で, 3532は上外方を向く口縁部が残る。外面には界線と花文, 内面には雷文が施される。3533は底部から体部が残る。底部が削り出し高台となり, 体部は上外方に立ち上げる。体部外面には文様と界線が施され, 畳付は釉ハギとなる。胎土には2点とも黒色粒を比較的多く含む。

3534は瓶で, 外面には蛸唐草文を施した上から透明釉を施釉し, 内面は露胎となる。胎土には黒色粒を多量に含む。

奈半利焼(図3-143 3535)

蓋で, 口縁基部には高さ1cmのかえりが付き, 天井部には濃緑色の釉を施釉する。胎土は精良である。

石製品(図3-143 3536)

扁平片刃石斧で, 片面に幅23mm, 長さ10mmの刃が付き, 側面に2カ所欠損箇所がみられる。石材は蛇文岩である。

SK-365

Ⅲ-1区中央部, SK-364の南隣で検出した方形の土坑で, 南壁と北壁に段部がある。長辺3.06m, 短辺1.70m, 深さ74cmを測り, 長軸方向はN-20°-Eを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は極細粒から中粒中礫が主体で色調により2層に分層される。遺物は出土しなかった。

SK-366(図3-141)

Ⅲ-1区中央部, SK-365の東隣で検出した不整形の土坑で, SK-367に掘り込まれていた。底面は南側が一段深くなっていた。長辺3.55m以上, 短辺1.44m, 深さ66cmを測り, 長軸方向はN-18°-E

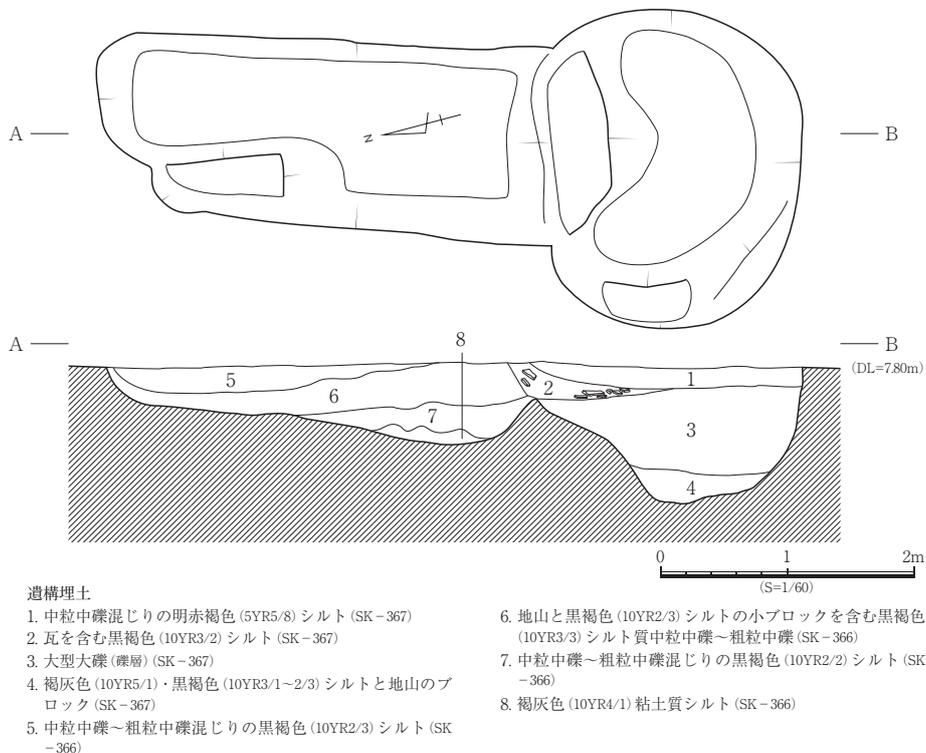


図3-141 SK-366・367

を示す。断面形は概ね逆台形を呈する。埋土は黒褐色(10YR3/3)シルトを中心に中粒中礫から粗粒中礫などが混じるもので、その度合いにより4層に分層される。遺物は出土しなかった。

**SK-367** (図3-141)

Ⅲ-1区中央部, SK-366を掘り込んだ形で検出した不整形の土坑である。長径2.52m, 短径2.24m, 深さ1.23mを測り, 長軸方向はN-84°-Wを示す。断面形は概ね逆台形を呈する。埋土にはシルトと礫及び瓦が混じっており, 4層に分層される。また, 最下層では掘削時の堆積とみられる地山や弥生から中世の遺構埋土のブロックが堆積していた。出土遺物には図示した須恵器1点(3537)と近代磁器1点(3538)がみられた。

出土遺物

須恵器(図3-143 3537)

甕で, 大きく張る肩部と屈曲する頸部が残り, 胴部外面には格子目状のタタキ目, 内面には同心円文のタタキ目が残る。胎土には白色細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

近代陶磁器(図3-143 3538)

皿で, 底部は削り出し高台となり, 高台外面基部に二重の界線, 見込には草花文が銅板焼付される。胎土には黒色粒が比較的多く含む。

**SK-368**

Ⅲ-1区中央部南側, 攪乱に南壁と北壁を掘り込まれた形で検出した円形の土坑である。長径1.82m, 短径1.72m, 深さ53cmを測る。断面形は概ね逆台形を呈するが, 東壁は袋状をなしていた。埋土は黒褐色(10YR2/3)シルトから粘土質シルトを中心に地山(にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質極細粒砂)や中礫が含まれ, その度合いにより8層に分層される。出土遺物には土師質土器16点, 青磁1点, 備前焼1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

**SK-369** (図3-142)

Ⅲ-1区中央部南側, SK-368の東隣で検出した不整形の土坑である。長辺4.16m, 短辺2.30m, 深さ30cmを測り, 長軸方向はN-20°-Eを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は中粒から極粗粒中礫混じりの黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト単一層であった。出土遺物には土師器1点, 土師質土器10点, 近代陶器1点, 瓦1点, 鉄製品2点がみられたが, 図示できるものはなかった。

**SK-370**

Ⅲ-1区中央部南側, SK-369の南隣で検出した円形の土坑である。長径2.04m, 短径1.83m, 深さ10cmを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山(にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質シルト)のブロックと黒褐色(10YR2/3)シルトの小ブロックを多く含む黒褐色(10YR2/2)シルト単一層であった。遺物は出土しなかった。

**SK-371**

Ⅲ-1区中央部南側, SK-370の南隣で検出した不整形

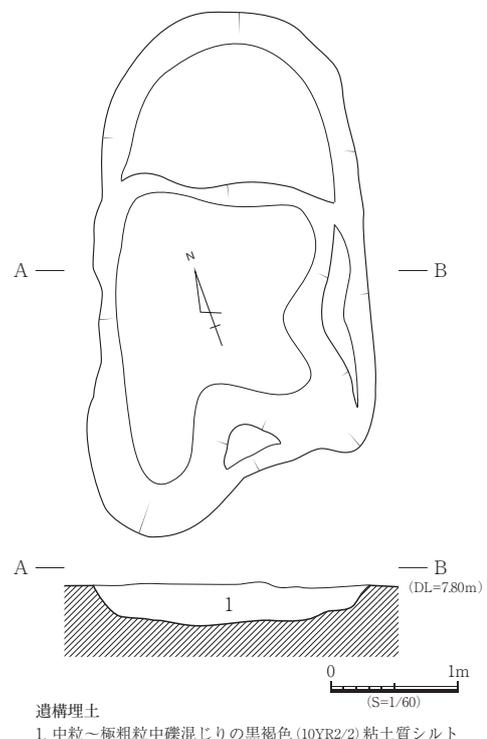


図3-142 SK-369

の土坑で、西壁と東壁にピット状の落ち込みがみられた。長辺0.94m，短辺0.88m，深さ8cmを測り，長軸方向はN-73°-Wを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は黒褐色(10YR2/2~3/1)シルトを主体に上層には礫，下層には地山(にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質シルト)を含んでいた。遺物は出土しなかった。

**SK-372**

Ⅲ-1区中央部南東寄り，南壁際で検出した不整形の土坑で，南側は調査区外に続く。長辺3.32m以上，短辺2.70m，深さ27cmを測り，長軸方向はN-15°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は中礫から大礫を含む黒色から黒褐色(10YR2/1~3/2)シルト単一層であった。出土遺物には土師器1点，須恵器3点，土師質土器7点，肥前系陶磁器3点がみられ，土師器1点(3539)，土師質土器1点(3540)，肥前系陶器1点(3541)が図示できた。

**出土遺物**

土師器(図3-143 3539)

甕で，胴部から外傾する口縁部が残り，端部は浅い凹面をなし，口縁外面にはヨコ方向のハケ目が残る。

土師質土器(図3-143 3540)

椀で，底部外面には逆台形の小さな高台が付き，体部が内湾気味に延びる。成形技法はA技法で，胎土には雲母片と細粒砂を比較的多く含む。

肥前系陶器(図3-143 3541)

皿で，底部外面は回転ヘラ削りとなり，見込にはハケ目文を施す。胎土は精良で，粗粒砂を若干含む。

**SK-373**

Ⅲ-1区南東部，SK-374に掘り込まれた形で検出した長楕円形の土坑で，底面は東側と西側に落ち込みがある。長径1.66m，短径0.66m，深さ82cmを測り，長軸方向はN-67°-Eを示す。断面形はU字形を呈する。埋土は褐灰色(10YR6/1)シルトを主体に地山(にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質シルト)などのブ

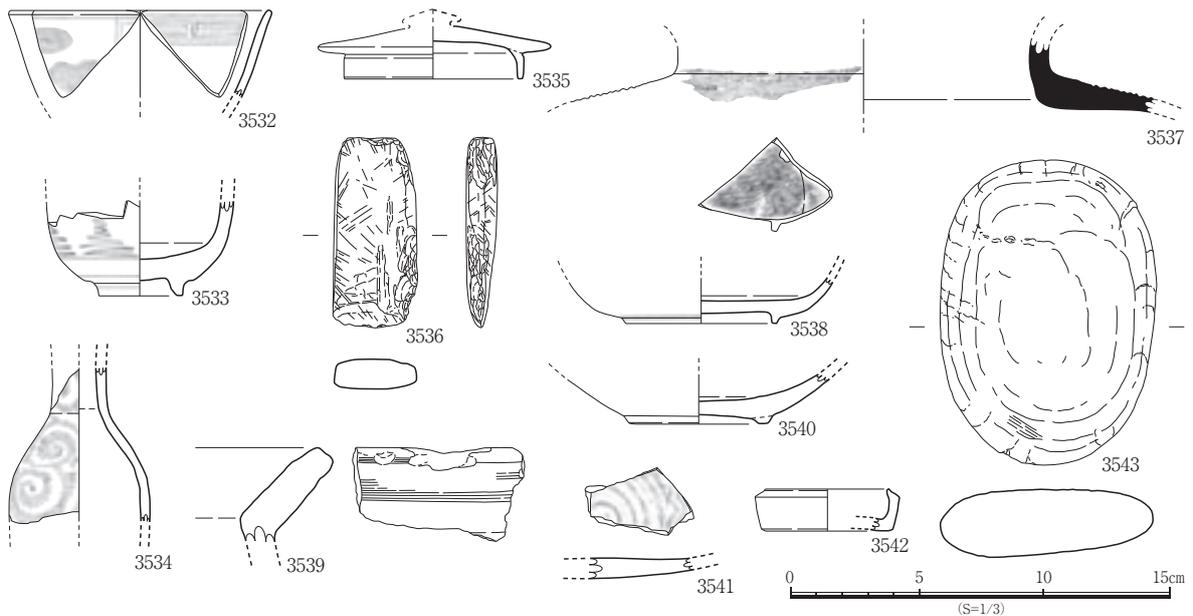


図3-143 SK-364・367・372・377・378出土遺物実測図

ロックを含む度合いと細粒砂を含む部分により4層に分層される。遺物は出土しなかった。

**SK-374**

Ⅲ-1区南東部, SK-373を掘り込んだ形で検出した長楕円形の土坑である。長径1.72m, 短径0.68m, 深さ35cmを測り, 長軸方向はN-69°-Wを示す。断面形は箱形を呈する。埋土はシルトと地山(浅黄色(5Y7/3)細粒砂)のブロックとなっていた。出土遺物には瓦2点があったが, 図示できなかった。

**SK-375**

Ⅲ-1区南東部で検出した不整形の土坑である。長辺1.68m, 短辺1.46m, 深さ26cmを測り, 長軸方向はN-52°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は細粒砂から粗粒砂及び中礫を比較的多く含む灰黄褐色(10YR4/1)シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器2点があったが, 図示できなかった。また, 粘土塊も出土している。

**SK-376**

Ⅲ-1区北東部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.43m, 短辺1.35m, 深さ13cmを測り, 長軸方向はN-15°-Eを示す。断面形は概ね逆台形を呈する。埋土は粗粒砂から中礫, 赤土ブロック, 瓦片を含む褐灰色(10YR6/1)シルトであった。出土遺物には瓦9点があったが, 図示できるものはなかった。

**SK-377**

Ⅲ-4区東端部, SK-378に切られた形で検出した長楕円形の土坑である。長径1.48m以上, 短径0.92m, 深さ27cmを測り, 長軸方向はN-86°-Eを示す。断面形は概ね逆台形を呈する。埋土は褐灰色(10YR6/1)シルト単一層であった。出土遺物には図示した白磁1点(3542)があった。

出土遺物

白磁(図3-143 3542)

合子で, 胴部は直立し, 口縁部は小さく内傾する。底部外面は回転ヘラ切り底となる。体部から内面にかけて施釉し, 口縁部外面を釉ハギする。

**SK-378** (図3-144)

Ⅲ-4区東端部, SK-377を切った形で検出した不整楕円形の土坑である。長径2.49m, 短径0.87m, 深さ38cmを測り, 長軸方向はN-86°-Eを示す。断面形は概ね逆台形を呈する。埋土は, 掘方に沿って灰黄褐色(10YR5/2)シルト質砂がみられ, その内側に粗粒中礫から小型大礫が堆積した形となっていた。出土遺物には図示した石製品1点(3543)があった。

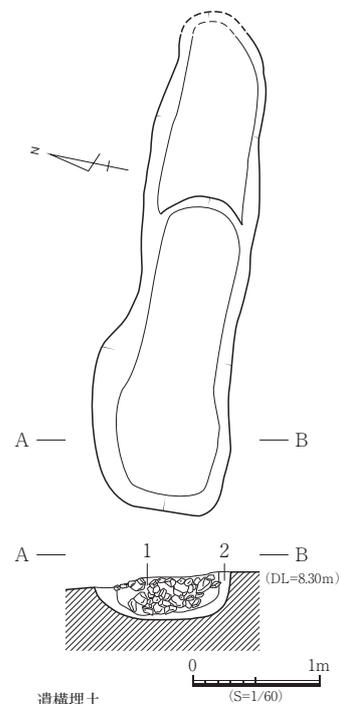
出土遺物

石製品(図3-143 3543)

扁平で楕円形を呈する磨石で, 前面が平滑となる。石材は中粒砂岩である。

**SK-379** (図3-145)

Ⅲ-4区中央部で検出した円形の土坑である。長径1.47m, 短径1.40m, 深さ26cmを測る。断面形は概ね逆台形を呈する。埋土は暗褐



遺構埋土  
1. 粗粒中礫～小型大礫  
2. 灰黄褐色(10YR5/2)シルト質砂

図3-144 SK-378

1. Ⅲ区 (5) 近世以降

色(10YR3/4)シルトを主体にハンダ(明赤色(2.5YR5/6)砂質シルト)を間層に含み3層に分層される。遺物は出土しなかった。

**SK-380**

Ⅲ-4区中央部, 西寄りで見出した不整形の土坑である。長径1.00m, 短径0.83m, 深さ11cmを測り, 長軸方向はN-64°-Wを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土はハンダ(明褐色(7.5YR5/6)砂質シルト)を主体にする層と暗褐色(10YR3/4)シルト質砂を主体とする層に分層される。遺物は出土しなかった。

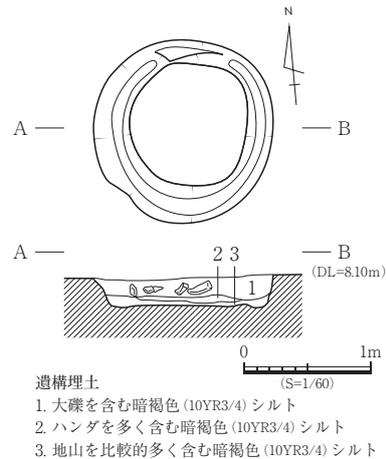


図3-145 SK-379

**SK-381** (図3-146)

Ⅲ-4区西部, 西壁際で, SK-382に切られた形で見出した不整形の土坑で, 東側と西側に段部を有する。長径2.01m, 短径1.67m, 深さ39cmを測り, 長軸方向はN-86°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(2.5Y~10YR3/1)シルトないし粘土質シルトを主体にハンダ(橙色(7.5YR7/6)シルト質砂)や中礫の堆積がみられ, 4層に分層される。出土遺物には須恵器・青磁・近代磁器各1点と瓦3点がみられたが, 図示できるものはなかった。

**SK-382** (図3-146)

Ⅲ-4区西部, 西壁際で, SK-381を掘り込んだ形で見出した浅い不整形の土坑である。長径1.22m, 短径1.07m, 深さ11cmを測り, 長軸方向はN-89°-Wを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土はハンダ(橙色(7.5YR7/6)シルト質砂)を主体に極細粒から細粒中礫の河原石を含む黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトが間層に堆積していた。出土遺物はなかった。

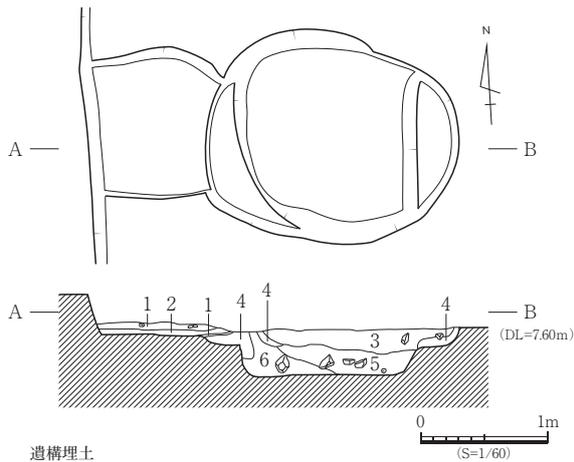


図3-146 SK-381・382

② 溝跡

**SD-3119** (図3-147)

Ⅲ-1区南東部, 南壁際で見出した南北溝で, 南は調査区外に続く。検出長3.98m, 幅0.34~0.92m, 深さ9~12cmを測り, 断面形は概ね逆台形を呈す。基底面は南(7.564m)から北(7.552m)に傾斜し, 北端は溜まり状となり, 北北東(N-28°-E)を向く。埋土は小型大礫を多く含む褐灰色(10YR6/1)シルト単一層であった。出土遺物には弥生土器1点, 土師質土器5点がみられたが, 図示できるものはなかった。

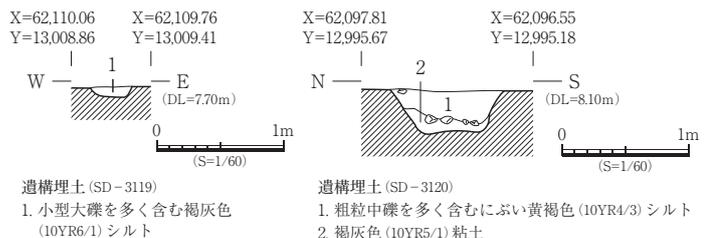


図3-147 SD-3119・3120

**SD-3120** (図3-147)

Ⅲ-4区中央部で見出したコの字形

をなす溝で、南は調査区外に続く。旧地形の小高くなった部分の裾部から検出されており、排水用に設置されたものとみられる。検出長45.26m、幅0.16~1.30m、深さ5~52cmを測り、断面形は概ね逆台形を呈す。基底面はほぼ平坦で7.591~7.710mを測る。埋土は2層に分層され、上層が下部に粗粒中礫を多く含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト、下層には褐灰色(10YR5/1)粘土が堆積しており、機能していた時は帯水し、機能を失って後は人為的に埋められたものとみられる。出土遺物には弥生土器8点、土師器6点、須恵器7点、土師質土器11点、肥前系陶磁器2点、近世以降陶器1点、石製品2点がみられ、肥前系陶磁器2点(3544・3545)、近世以降陶器1点(3546)、石製品1点(3547)が図示できた。

出土遺物

肥前系磁器(図3-150 3544)

皿で、底部は削り出し高台となる。見込には草花文とコンニャク版とみられる文様が僅かに残り、全面に透明釉を施釉し、見込は蛇ノ目状の釉ハギ、畳付も釉ハギされる。また、見込には煤が一部付着する。胎土には黒色粒を比較的多く含む。

肥前系陶器(図3-150 3545)

壺で、内湾する胴部が残り、外面下半には回転ヘラ削り調整、上半にはハケ目文が施される。胎土は精良である。

近世以降陶器(図3-150 3546)

碗で、ほぼ直立する口縁部が残り、端部は丸い。前面に鉄釉が施釉される。胎土は精良である。

石製品(図3-150 3547)

砥石で、表面と側面に使用痕が残る。石材は泥岩とみられる。

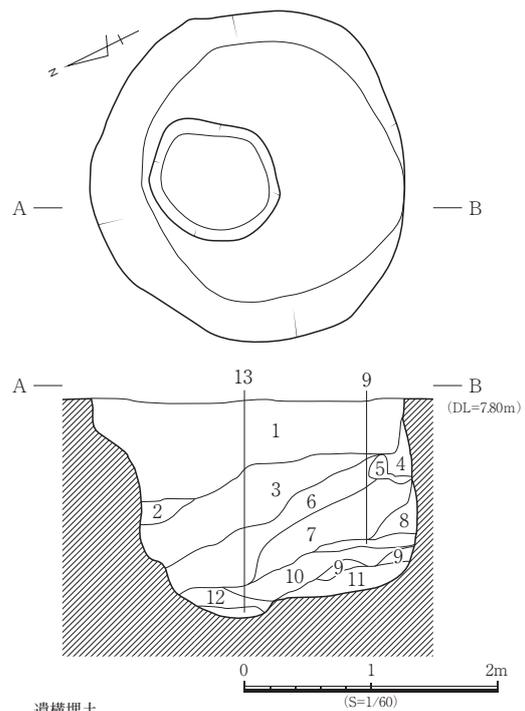
③ 井戸跡

SE-301 (図3-148)

Ⅲ-3区中央部で検出した井戸跡とみられる遺構で円形を呈する。石組みなどの主体となる遺構はみられなかったものの、底面に径0.94~1.40m、深さ42cmの落ち込みがみられた。長径2.68m、短径2.51m、深さ1.73mを測る。断面形は概ね逆台形を呈する。埋土は13層に分層され、最終的には中礫から大礫を主体とする褐灰色(7.5YR4/1)シルトで埋められていた。出土遺物には土師質土器4点、肥前系陶磁器3点がみられたが、図示できるものはなかった。

SE-302 (図3-149)

Ⅲ-3区東端部で検出した井戸跡とみられる遺構で隅丸方形を呈する。南側は階段状となり、北壁際で木組みの一部を検出した。長辺2.48m以上、短辺2.41m、深さ1.69mを測り、長軸方向はN-16°-E



遺構埋土

1. 中礫~大礫を主体とする褐灰色(7.5YR4/1)砂質シルト
2. 黒褐色(10YR3/2)シルト
3. シルト混じりのにぶい黄褐色(10YR4/3)中粒~極粗粒砂
4. 中粒~粗粒砂を多く含む黒褐色(10YR2/3)粘土質シルト
5. 地山と黒褐色(10YR2/3)シルトのブロック
6. 黒褐色(10YR2/3)粘土質シルト
7. シルト混じりのにぶい黄褐色(10YR4/3)中粒~極粗粒砂
8. 地山の崩壊堆積
9. マンガン粒を含むシルト混じりの褐色(10YR4/6)極粗粒砂~細粒砂
10. 中粒~極粗粒砂混じりのにぶい黄褐色(10YR5/3)シルト
11. シルトと中粒~粗粒砂混じりの暗褐色(10YR3/4)極粗粒~極粗粒中礫
12. シルト混じりの褐色(10YR4/6)極細粒~細粒砂
13. 黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトのブロックを僅かに含む黄褐色(10YR5/6)シルト質粘土

図3-148 SE-301

1. Ⅲ区 (5) 近世以降

を示す。断面形は概ね逆台形を呈する。埋土は7層に分層され、中層以下には粘土の堆積が認められた。出土遺物には図示した白磁1点(3548)があった。

出土遺物

白磁(図3-150 3548)

小壺で、底部は削り出し高台となり、胴部が内湾気味に立ち上がる。胴部外面下半に回転ヘラ削り調整を行い、外面全面に施釉し、畳付を釉ハギする。内面は露胎で、ヘラ削りの痕跡が残る。胎土には黑色粒を少し含む。

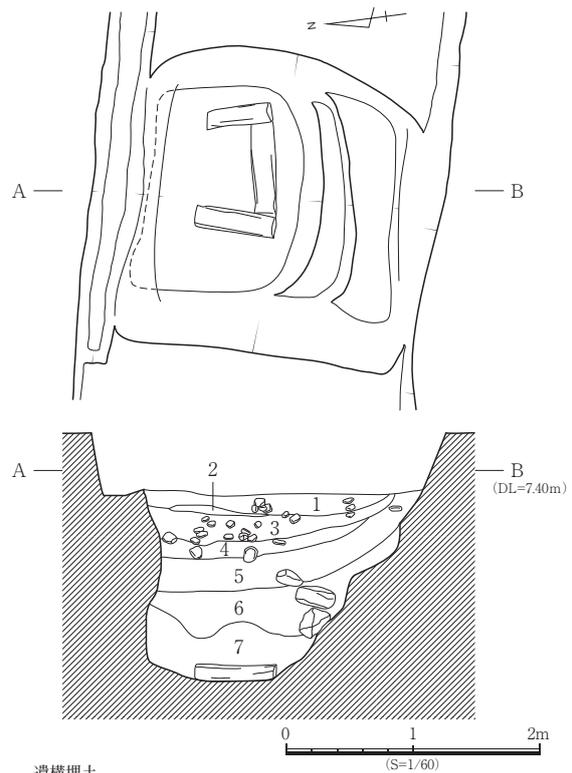
④ ピット

7個のピットを確認したが、散在しており、関連は不明である。この内、図示できた遺物が出土したピットは1個で径19cmの円形で、深さ9cmを測る。出土遺物には土師質土器4点と近世磁器1点(3549)のみであった。

出土遺物

近世磁器(図3-150 3549)

型作りの稜花皿で、見込には草文を施し、全面に施釉した後、畳付を釉ハギする。胎土には黑色粒を比較的多く含む。



遺構埋土

1. 細粒～中粒中礫を多く含む灰黄褐色(10YR5/2)シルト質粘土
2. 炭化物を多く含む灰黄褐色(10YR5/2)シルト質粘土
3. 細粒～中粒中礫を多く含む灰黄色(2.5Y4/1)シルト質粘土
4. 中粒中礫を少し含む灰黄色(2.5Y4/1)粘土
5. シルト混じりの灰色(5Y4/1)粘土
6. 細粒～中粒中礫を僅かに含むシルト混じりの褐灰色(10YR4/1)粘土
7. 細粒～中粒中礫混じりの褐灰色(10YR4/1)シルト質粘土

図3-149 SE-302

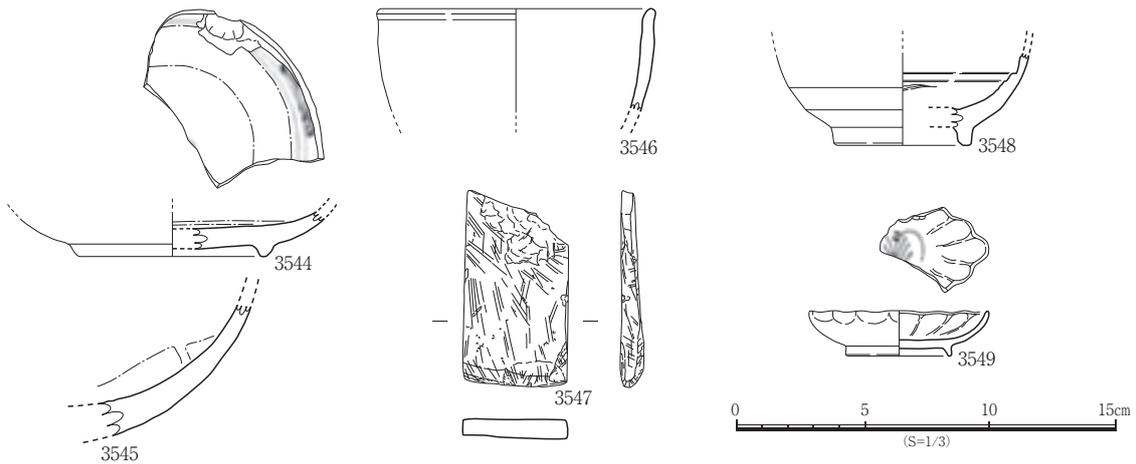


図3-150 SD-3120, SE-302, P-379出土遺物実測図

## 2. IV区

本調査区はⅢ区の西隣の調査区であるが、遺構の様相は異なる。すなわち、Ⅲ区では弥生時代以降連綿と掘削された溝跡を中心とした生産空間が主体を占めるのに対し、Ⅳ区では屋敷跡を中心とした居住空間がその中心となる。これは地形によるところが大きく、弥生時代に限れば、南西隅が小さな窪地となり、そこに溝跡がまとまる傾向はあるものの、古代以降は概して平坦な地形となり、西に向って緩やかに傾斜している。

確認された遺構の時期は弥生時代から近世にかけてで、その中心は古代後半から中世である。

### (1) 弥生時代

確認された遺構は、Ⅲ区から続く溝跡2条と南西隅で検出した溝跡1条のみで、これ以外に弥生時代と判断される遺構は確認されておらず、単に溝の通路としての役割しか果たしていない場所とも言えるが、SD-401からは3,000点近い遺物が出土しており、単に溝が掘削された場所とも言い切れない面もあり、周辺に何らかの遺構が存在した可能性も十分考えられる。このことはSD-402からの出土遺物がSD-401の2.2%と少ないことと対照的であることから言えそうである。

#### ① 溝跡

確認された溝跡の内、Ⅲ区から続く2条は等高線を縦断する形で、標高約7.5mから約6.4mに向ってほぼ真直ぐ伸び、西の調査区であるⅤ区に続く。

#### SD-401 (図3-151)

調査区東部から西部にかけて検出した東西溝で、Ⅲ区のSD-3002と同一のもので、SD-402に切られる。延長が長く、各所で古代以降の遺構に掘り込まれ、西端は調査区外に伸び、Ⅴ区に至る。検出長は147.54m、幅1.21~2.27m、深さは43~71cmを測り、断面形は舟底形を呈する部分もあるが概ね逆台形を呈する。溝幅は、Ⅲ区で検出した幅よりやや広がっている。基底面は東(6.912m)から西(6.312m)に向って傾斜する。溝は等高線を縦断する形で西南西(N-104°-W)に伸びた後、途中で西(N-92°-W)に角度を変え、Ⅴ区に続く。埋土は黒褐色(10YR2/2~2/3)シルトを主体に地山の砂礫を含んでおり、4~5層に分層できる。出土遺物には弥生土器2,897点と石製品11点、焼礫1点があり、弥生土器74点(4017~4090)と石製品11点(4091~4101)が図示できた。

#### 出土遺物

##### 弥生土器(図3-152~156 4017~4090)

4017~4034は口縁部が残存するもので、いずれも壺とみられる。4017は、直立する頸部に外反する口縁部がつき、口縁端部にはクシ状工具による刻目を施す。頸部外面下端には4本単位のクシ描直

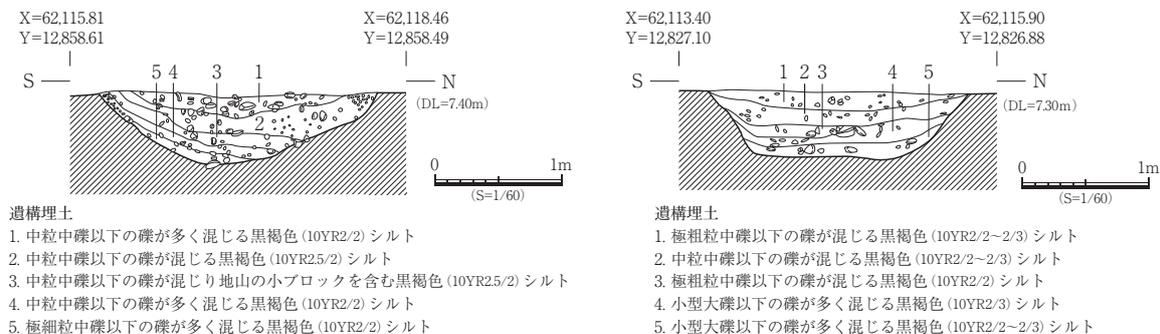


図3-151 SD-401

線文がみられる。胎土には細粒砂から粗粒砂を多く含む。4018～4030は、口縁部外面に大なり小なり粘土帯を貼付する所謂貼付口縁となるもので、外面には指押えの痕がみられ、端部にはヘラ状工具による刻目やハケ状工具による刺突文を施すものが大半である。4018は、球形の胴部に短く直立する頸部と外反する口縁部が付くもので、口縁部内面にはハケ状工具による刺突文を施し、頸部から胴部外面には上からクシ描直線文、簾状文、2本単位のヘラ描斜格子文、3段の断面三角形の突帯で区画した間に6本単位のクシ描波状文、同じ工具によるクシ描直線文を2段に施す。胴部内面は粘土紐接合部を中心に指押えを行った後にナデ調整を施す。頸部外面はタテ方向のハケ調整、胴部上半はナデ調整、下半はハケ調整の後にナデ調整を加えた上で施文する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。4019も4018と同形態の口頸部となるもので、口縁端部は粘土帯の接合痕跡が凹面となって残り、外端にヘラ状工具による刻目が巡る。胴部との境にはクシ描きによる稚拙な簾状文が巡る。胴部内面は粘土紐接合部を中心に指押えとナデ調整を施す。外面は摩耗する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。4020～4022は比較的長い口頸部となるもので、4020と4021の貼付口縁は突帯状をなし、外端に4020がクシ状工具、4021がヘラ状工具による刻目を施す。4020は頸部外面下端から中胴部外面にかけて、ハケ調整した後に、上から波状文、直線文、波状文2段、直線文と6本単位のクシ描文を施し、断面三角形の楕円形浮文を8個貼付する。胴部下半にはヘラ磨きを施す。胴部内面は指ナデ調整とナデ調整を施す。胎土には粗粒砂を中心に、細粒砂から極粗粒砂を多く含む。4021は口頸部が残存し、内外面にはハケ目が残る。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。4022は口縁端部にヘラ状工具による刻目を施す。なお、口縁部に粘土帯を貼付する前にはハケ調整を施し、下半はヨコナデ調整を加えナデ消している。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。4023～4030は、4026のように口縁部が直立し外傾する頸部から外反する形態とみられるもので、いずれも胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。4023は口縁部内面と端部にハケ状工具に刺突文を施す。4024は、口縁端部両端にヘラ状工具による刻目を施す。4025は口縁端部にハケ状工具による刺突文を巡らす。4026は、口縁部内面にハケ調整した後にハケ状工具による刺突文、口縁端部にはヘラ状工具による刻目を施し、端部下端には指頭圧痕と爪痕が残る。胴部内面は指押えの後に指ナデ調整とナデ調整、外面はハケ調整の後にヘラ磨きを施す。4027は口縁端部に刻目等は施していない。4028と4029は他に比べ、器壁が厚く口縁部の外反度が大きいもので、いずれも口縁端部にはヘラ状工具による斜格子文を施し、下端には指頭圧痕が残る。4030は、口縁端部を下端に大きく拡張しており、口縁端部は広い凹面となる。4031は全体が復元でき、底部は上げ底風となり、胴部は倒卵形を呈し、口頸部は緩やかに外反して、口縁端部は下端を拡張する。器面には、頸部外面にハケ調整の後にヘラ磨きを施す。上胴部外面にハケ調整の後に暗文風のヘラ磨きを放射線状に施す以外目立った文様はみられない。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。4032は倒卵形の胴部に直立する短い口縁が付くもので、口縁端部には無文土器風に粘土帯を貼付する。口縁部外面を中心に指押えの痕が明瞭に残る。口頸部内面下半、胴部内面は粘土紐の接合部を中心に指押えとナデ調整、外面に丁寧なヘラ磨きを施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。4033は肩の張らない胴部に内傾して直立する口縁部が付くもので、口縁部外面にはタテ方向、胴部外面には斜め方向とタテ方向のヘラナデ調整を施す。胎土は精良で、細粒砂から粗粒砂を若干含む。4034は、口縁部が上外方に延びるもので、外面にはハケ調整の後にナデ調整を加えている。胎土には細粒砂から粗粒砂を多く含む。

4035～4038は胴部が遺存する壺で、胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。4035は、外面に10

本単位のクシ描きで、直線文の間に3段の波状文を施す。4036は、上胴部外面にハケ調整の後に断面三角形の突帯を挟んで6本単位のクシ描簾状文(ただし、上方は不明)、波状文2段、その下に棒状工具による刺突文を施す。4037は上胴部外面に断面三角形の突帯を4段貼付し、上の2段の間に円形または楕円形の浮文を貼付する。4038は上胴部外面に4本単位のクシ描きで、簾状文2段と波状文を施す。

4039~4058は壺の底部とみられるもので、底径は4.9~10.9cmを測る。胎土には、一部細礫を含むも

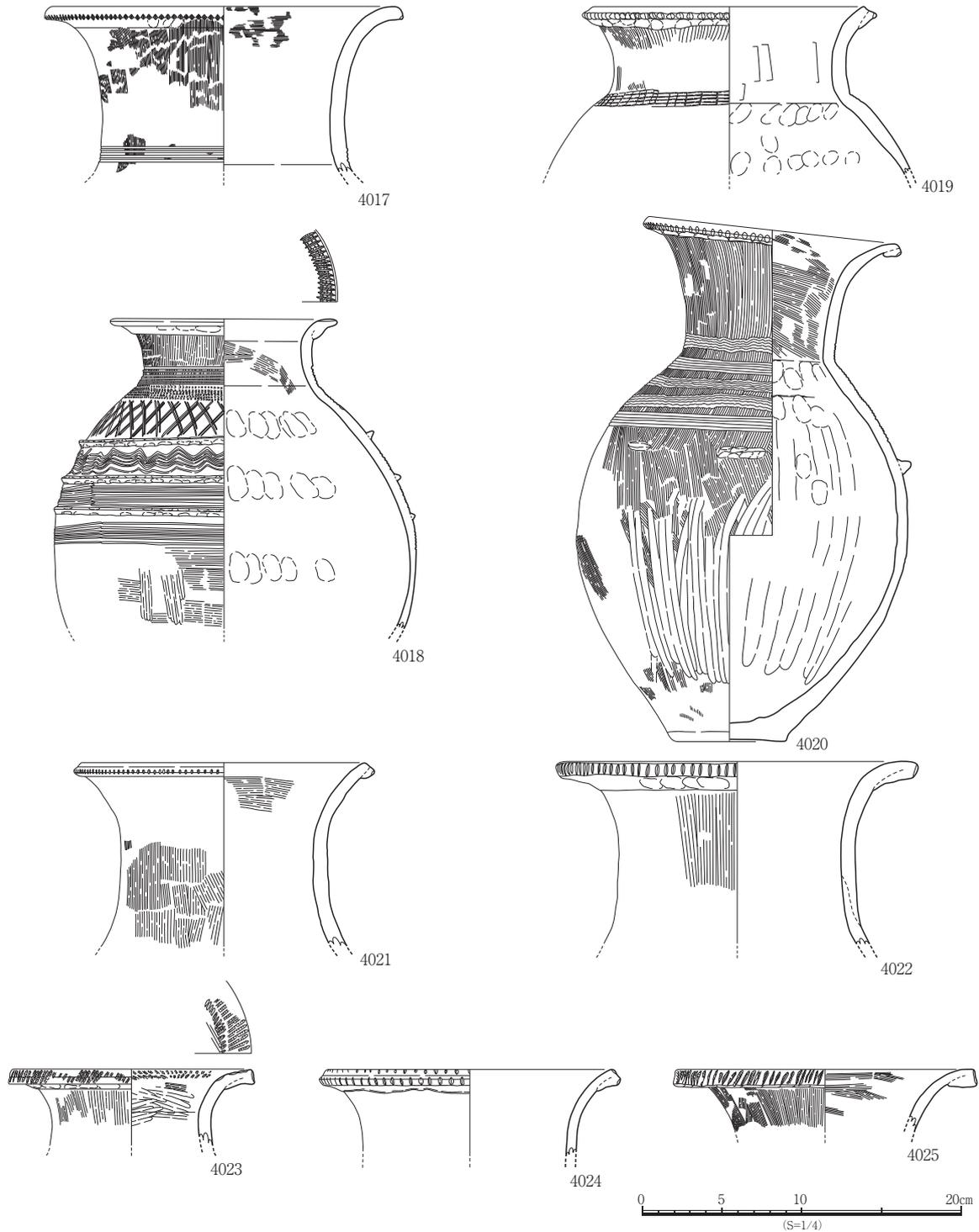


図3-152 SD-401出土遺物実測図1

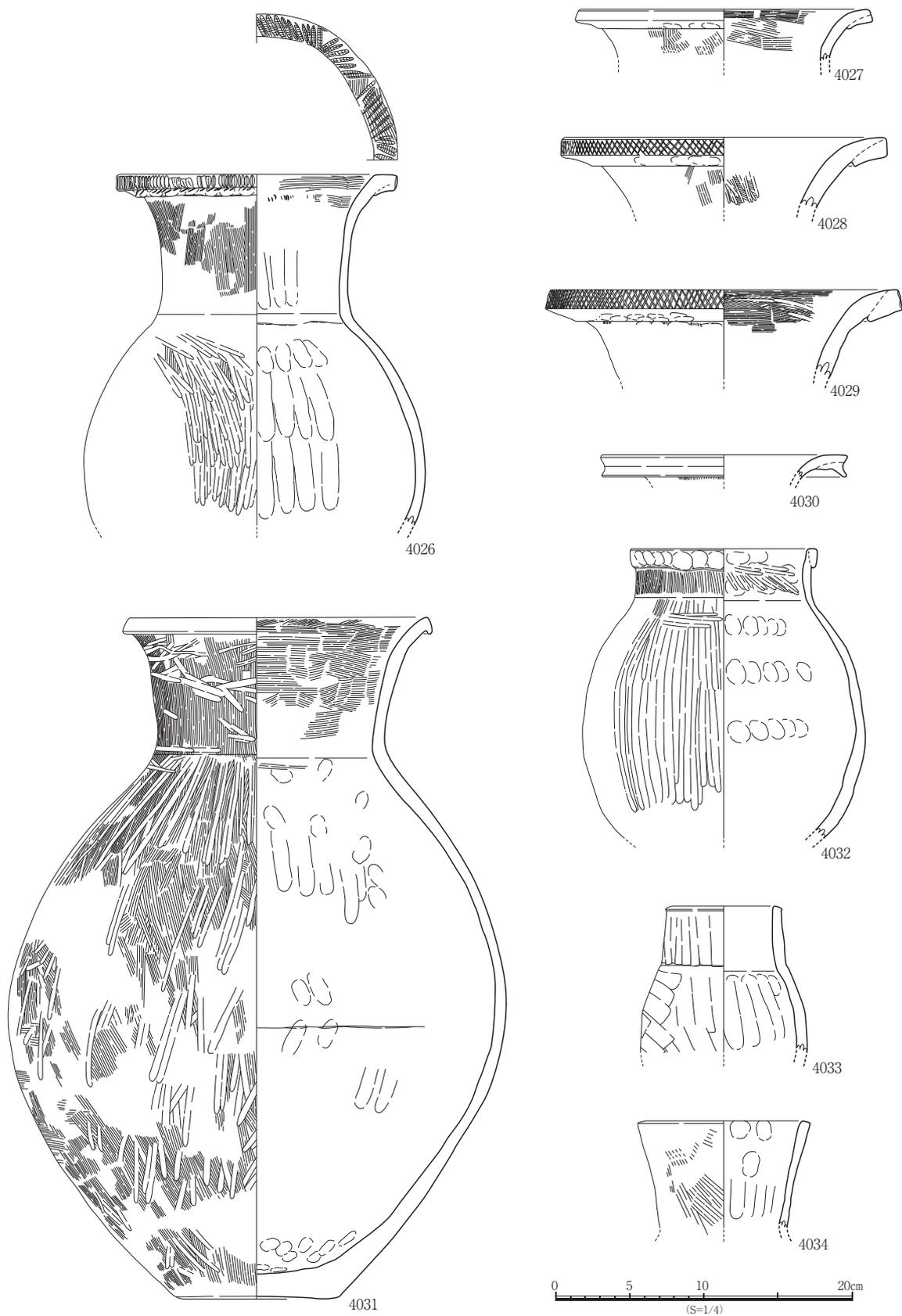


图3-153 SD-401出土遺物実測图2

のもみられるがいずれも細粒砂から極粗粒砂を多く含む。4039は、上げ底の底部となり、外面にはハケ調整の後にヘラ磨きを施す。4040は上げ底風の底部に胴部が球形をなすもので、外面にはハケ調整の後にヘラ磨きを施す。4041は、底部が上げ底となるもので、外面にはハケ調整の後にヘラ磨きを施す。4042は、胴部が平らな底部から上外方に延びるもので、胴部下端にヘラナデ調整を施す。4043～4046は、胴部が平らな底部から斜め外方に延びるもので、器面にはナデ調整を施す。

4047と4048は、胴部が底部から急角度で立ち上がるもので、4047の底部が上げ底風となり、4048の内外面にはハケ調整の後にヘラ磨きを施した痕跡が残る。

4049は外面にハケ調整の後にヘラ磨き、4050は外面にハケ調整、4051は内外面にヘラ磨きをそれ

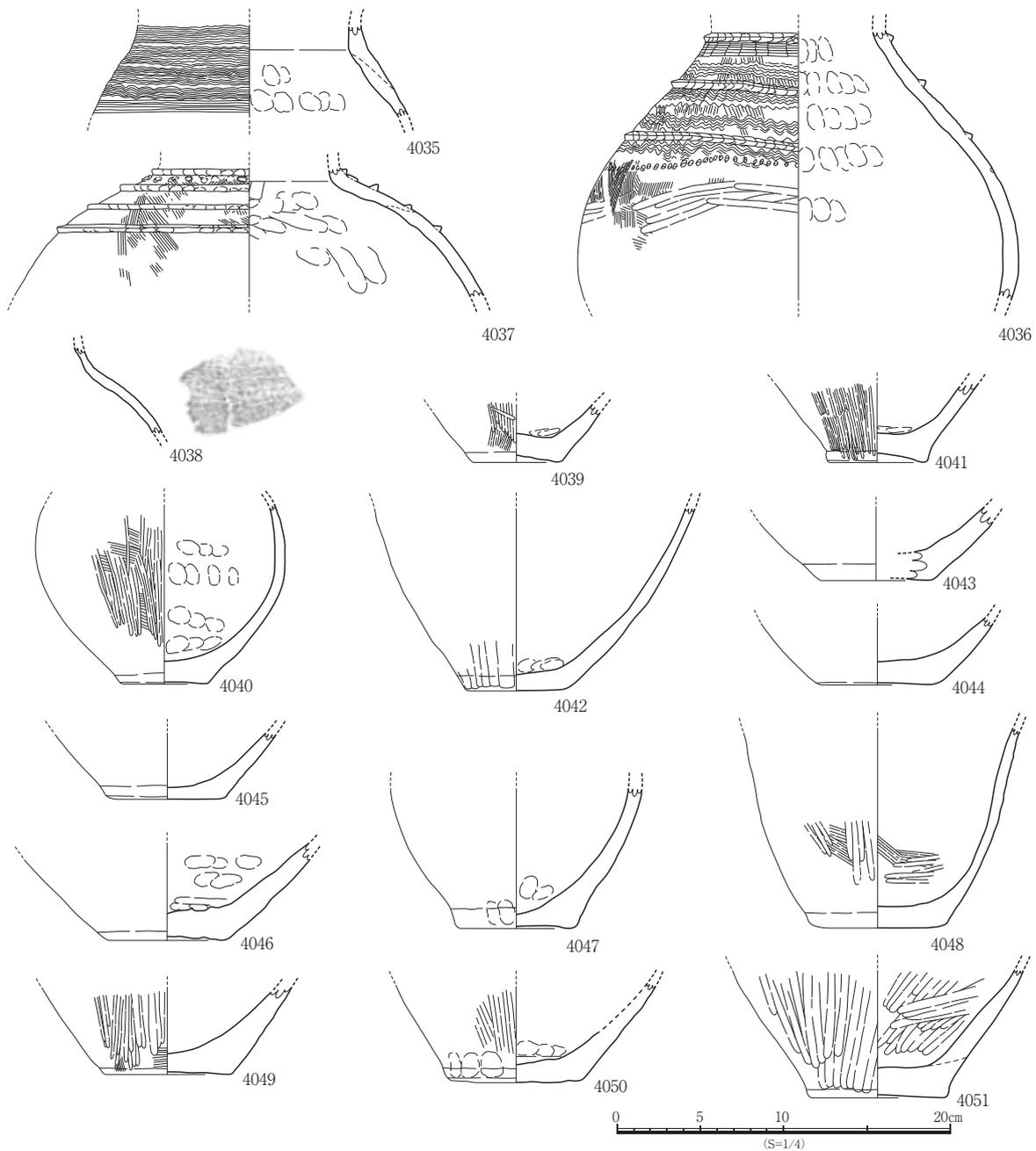


図3-154 SD-401出土遺物実測図3

ぞれ施す。4052 はほぼ平らな底部から胴部が内湾してたち上がり、胴部が倒卵形を呈するものである。4053 は内面にヘラナデ調整, 4054 は胴部外面にハケ調整の後にヘラ磨き, 外底面にナデ調整の後にヘラ磨き, 4055 は外面にハケ調整, 4056 は外面にヘラ磨き, 4057 と 4058 は外面にハケ調整の後にヘラ磨きをそれぞれ施す。

4059～4075 は口縁部が残存するもので、いずれも甕とみられる。4059 は、倒卵形の胴部から口縁部が外反するもので、口頸部内面にはヨコ方向のヘラ磨き, 外面にはタテ方向のハケ調整を施し、胴部内面には指押えとナデ調整, 外面には粗目のハケ調整を施し、肩部外面にはハケ状工具による刺突文を巡らす。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。4060 と 4061 は外反する口縁端部に刻目を施すもので、4060 には口縁端部直下に2条の微隆起突帯を貼付する。胎土には4060 が細粒砂から極粗粒砂, 4061 が細粒砂から粗粒砂をそれぞれ多く含む。

4062～4075 は口縁部外面に粘土帯を貼付するもので、外面には指押えの痕がみられる。4062 は倒卵形の胴部から口縁部は短く外反し、端部にヘラ状工具による刻目を施す。外面のハケ調整は、頸部から肩部にタテ方向に施した上で、それ以下はヨコ方向に行う。外面各所に煤が付着する。胎土には細粒砂から粗粒砂を多く含む。4063 は口縁端部下端にヘラ状工具による刻目を施し、胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。また、外面には煤が付着する。4064～4067 は、4059 や 4062 に比べると外反する比較的長い口縁部を有するもので、口縁端部には刻目は施さず、器面調整にはハケ調整を多用し、胎土には細粒砂から粗粒砂ないし極粗粒砂を多く含む。また、4065 と 4067 の外面には煤が付着する。4068 は、口縁部内面にハケ調整の後にヘラ磨きを施し、口縁端部下端にヘラ状工具による刻目を巡らす。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。4069 は、口頸部外面にタテ方向、胴部外面にヨコ方向のハケ調整を施し、口頸部と胴部の境にクシ状工具による刺突文を施す。胎土には粗粒砂を中心に細粒砂から極粗粒砂を多く含む。4070 は口縁端部をハケ調整した上でハケ状工具による刺突文を巡らし、内面にはヨコ方向のヘラ磨きを施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

4071 と 4072 は口縁端部を丸く仕上げているもので、端部には刻目は施していない。4071 は頸部内面にヘラ磨きの後にナデ調整, 外面はハケ調整の後にナデ調整をそれぞれ加える。胴部内面は指押えとナデ調整, 外面はナデ調整を施す。胴部外面には煤が付着する。胎土には、4071 が粗粒砂を中心に細粒砂から極粗粒砂を多く含み、4072 が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。4073 の口縁端部には刻目等は施されていないが、面をなし、胴部との境には断面三角形の突帯を貼付する。胎土には細粒砂から粗粒砂を多く含む。

4074 はほぼ全体を復元することができる個体で、深鉢とも言い得るものである。胴部は平らな底部から内湾気味にほぼ直立し、口縁部は短く外傾する。胴部との境には断面三角形の突帯を巡らし、その直下には6本単位のクシ描直線文と波状文を施し、中胴部以下にはハケ調整の後に上下二段にヘラ磨きを加える。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

4075 は、粘土紐を丸めることにより口縁部を肥厚するもので、内面にはハケ調整の後にヘラ磨き調整を加える。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

4076～4078 は甕の胴部が残存するもので、4076 は微隆起突帯を作り出し、その下に楕円形浮文を貼付している。胎土には粗粒砂を中心に細粒砂から粗粒砂を多く含む。4077 は上胴部外面に微隆起突帯を貼付した上で、棒状工具による刻目を巡らし、4078 は上胴部外面に断面三角形の貼付突帯を3

段巡らす。いずれも胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含み、外面には煤が付着する。

4079～4088は甕の底部とみられるもので、底径は5.6～7.9cmを測る。胎土には細粒砂から粗粒砂な

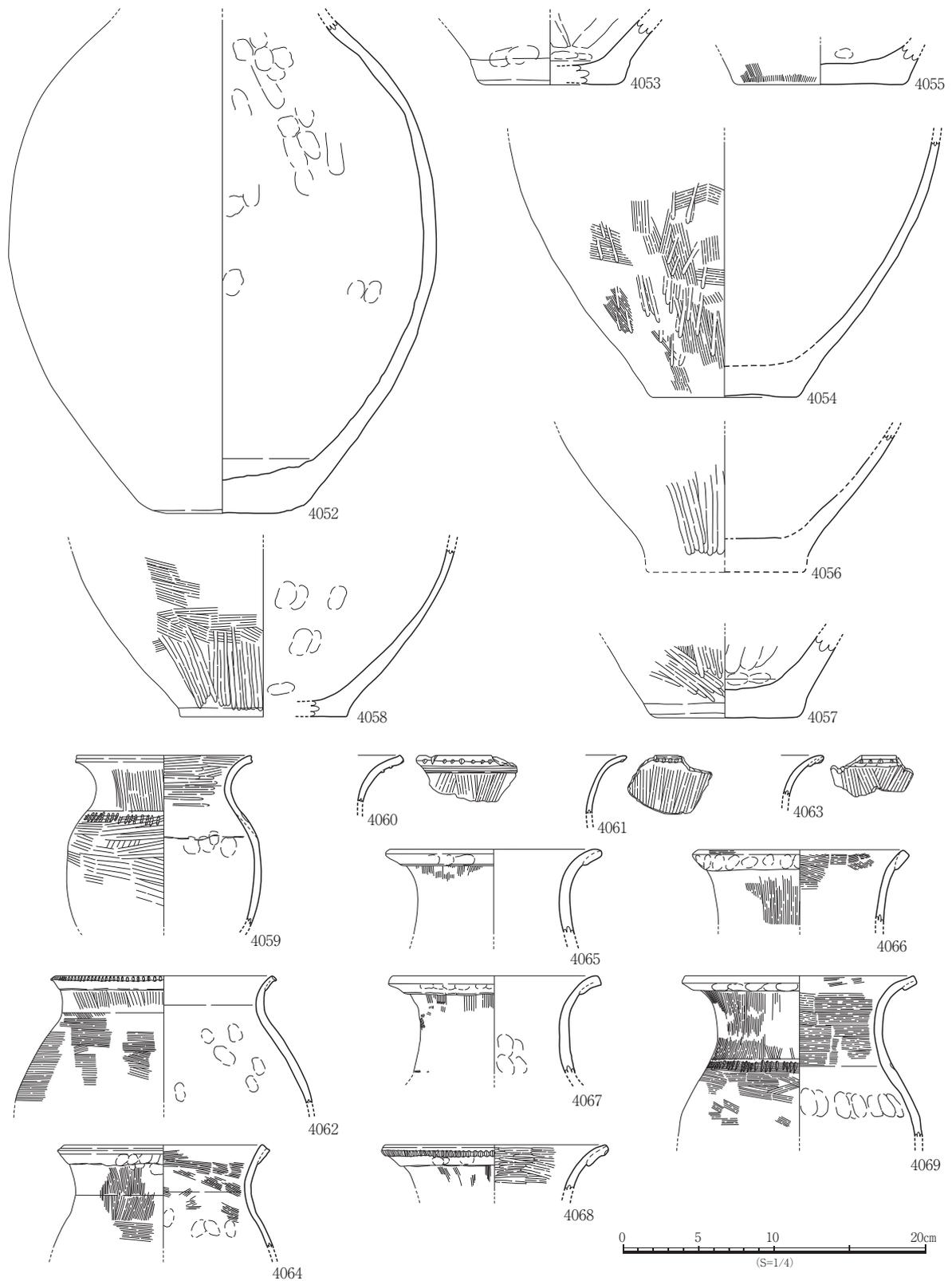


図3-155 SD-401出土遺物実測図4

2. IV区 (1) 弥生時代

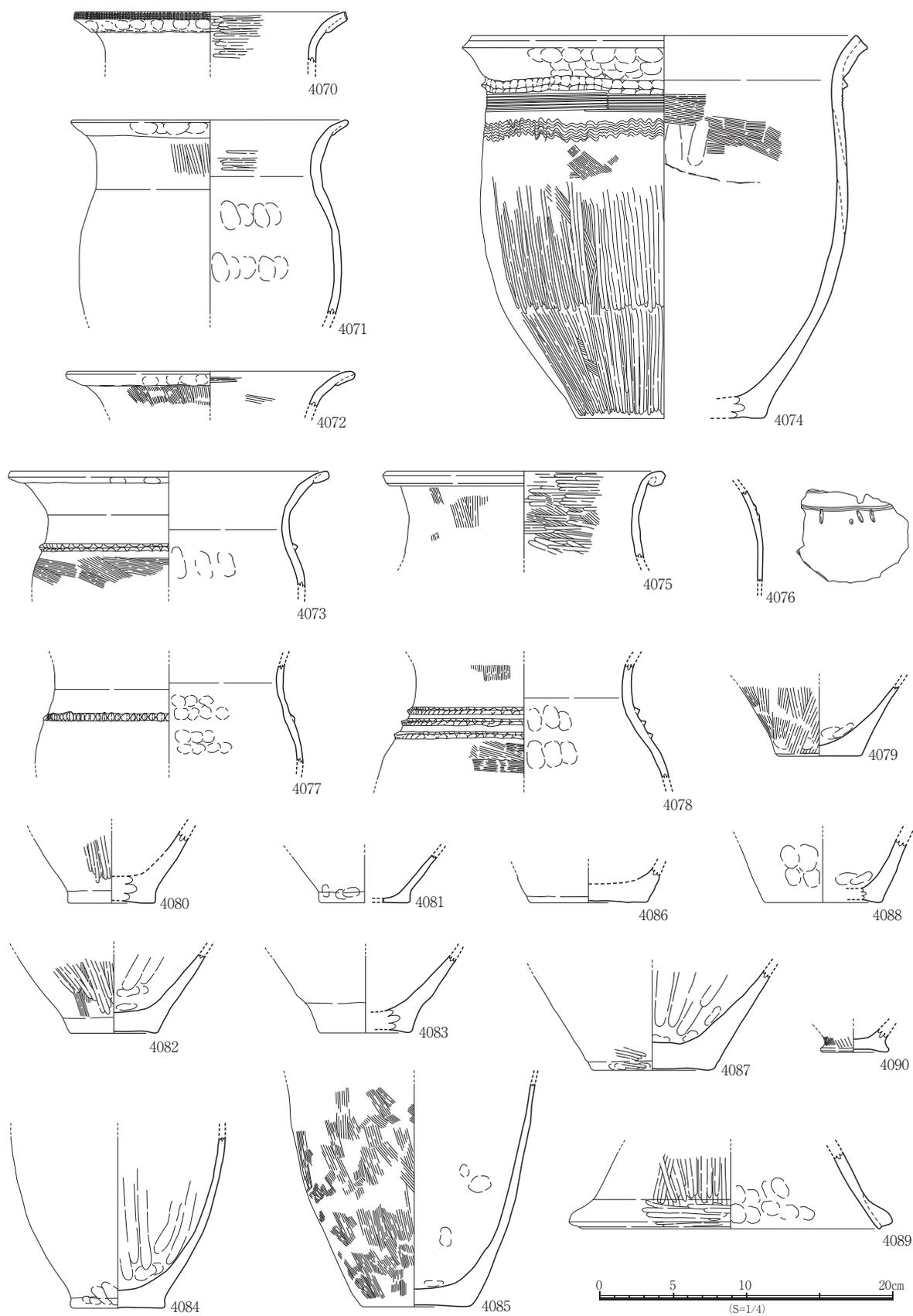


図3-156 SD-401出土遺物実測図5

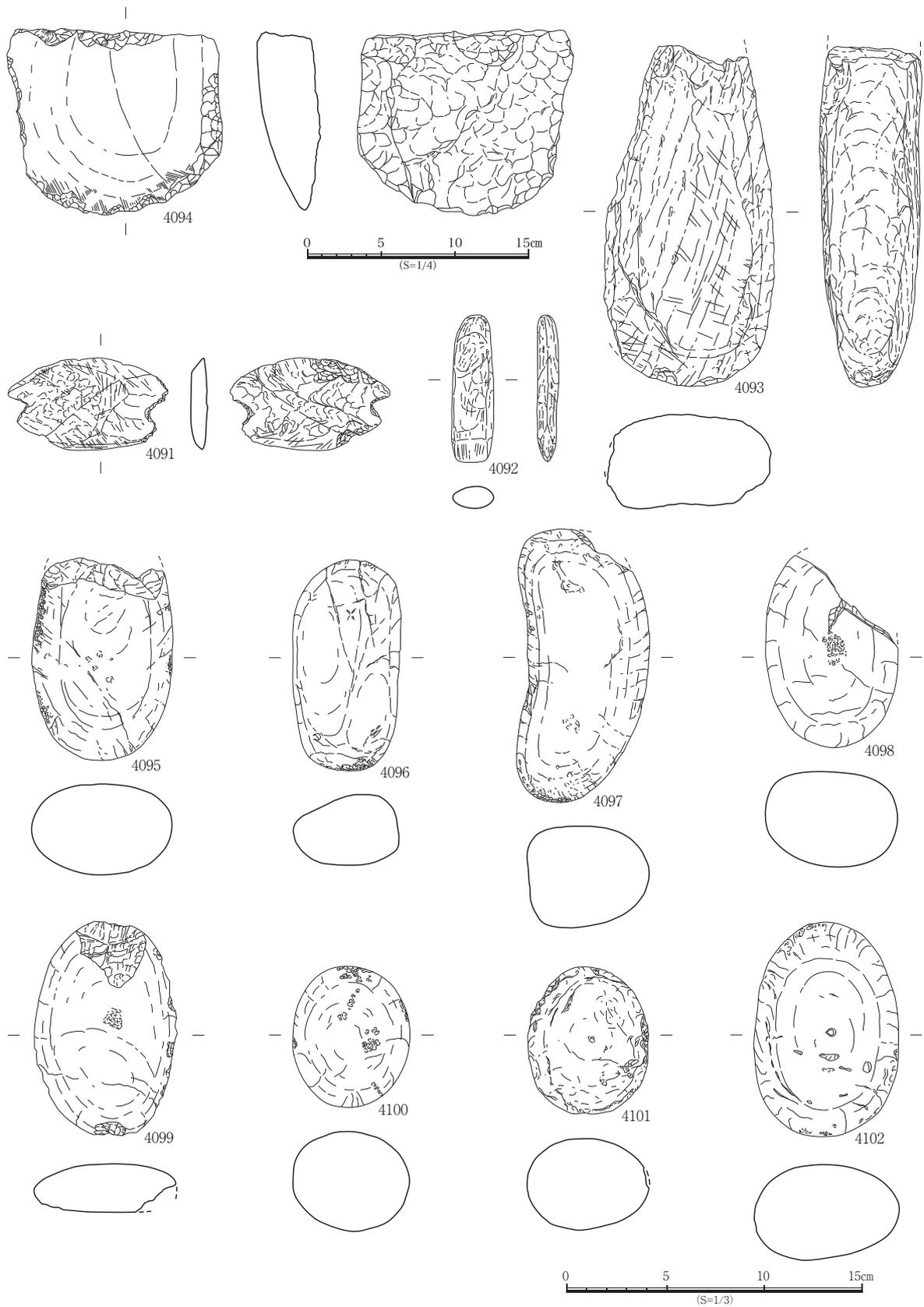


図3-157 SD-401・402出土遺物実測図

## 2. IV区 (1) 弥生時代

いし極粗粒砂または細礫を多く含む。4079は内面に煤が付着し、外面にはハケ調整を施す。4080の外面にはヘラ磨き、4081の内外面にはナデ調整、4082の内面には指ナデ調整とナデ調整、外面にはハケ調整の後にヘラ磨き、4083の外面にはナデ調整、4084の内面には指ナデ調整、4085の外面にはハケ調整、4086にはナデ調整、4087の内面には指ナデ調整、外面にはヘラ磨き、4088の内面にはナデ調整をそれぞれ施す。また、4082と4083の外面には煤が付着する。

4089は器台の脚部ではないかとみられるもので、裾部は粘土帯を貼付して肥厚し、外面全面にはヘラ磨きを施し、内面にはナデ調整を施すも指押えの痕跡が明瞭に残る。胎土には細粒砂から細礫を多く含む。

4090はミニチュア土器で、高台状の底部が残り、外面にはハケ調整を施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

### 石製品(図3-157 4091~4101)

4091は両側面に挟りがある両刃の石庖丁で、刃部長5.0cm、刃部幅1.0cmを測る。研磨箇所もみられるものの剥離の後未調整のままとなった部分が多い。石材は粘板岩である。

4092は小型両刃石斧で、刃部長1.6cm、刃部幅1.2cmを測る。断面は楕円形を呈し、全面を研磨するも風化が目立つ。石材は緑色片岩である。4093は太型蛤刃石斧で、刃部長7.0cm、刃部幅2.0cmを測る。刃部以外も比較的平滑であるが、側面と基部の一部が欠損する。石材は緑色片岩である。

4094は粗製剥片石器と言われているもので、田村遺跡群の調査(田村遺跡群Ⅱ)でも出土しており、大型直縁刃石器として報告しているものに当たる。河原石を打ち欠いてできた剥片を利用したもので、厚くなった水平面を握り、外湾する面を刃部として使用したと考えられ、縁辺部には植物などの茎を刈った際の擦痕がみられる。石材は中粒砂岩である。なお、土坑からまとまって出土した東側の調査区の報告(西野々遺跡Ⅲ)の際に詳述するが、名称としては用途から打製石鎌とする。

4095~4097は叩石で、4095は、形状が断面とも楕円形を呈し、面は平滑であるが側面に弱い敲打痕がみられる。石材は中粒砂岩である。4096は、やや細長く断面は不整形を呈し、一端に敲打痕と摩滅痕が残る。それ以外は平滑な自然面である。石材は細粒砂岩である。4097は、真中がくびれた不整楕円形で断面は不整円形を呈し、一端に弱い敲打痕が残る。それ以外は平滑である。石材は粗粒砂岩である。

4098と4099は磨石で、石材は4098が粗粒砂岩、4099が細粒砂岩である。4098は、形状が楕円形で、断面は丸味があり、中央部に弱い敲打痕は認められるものの全般に平滑となる。4099は小判状を呈するもので、両端を中心に欠損はみられるもののそれ以外は平滑となる。

4100と4101は投弾とみられるもので、石材は、4100が中粒砂岩、4101が粗粒砂岩である。いずれも球形に近い形状となる。

### SD-402(図3-158)

調査区東部から西部にかけて検出した東西溝で、Ⅲ区のSD-3003と同一のもので、SD-401を切る。延長が長く、各所で古代以降の遺構に掘り込まれ、西端は調査区外に延び、V区に至る。検出長は148.51m、幅0.73~1.62m、深さは20~39cmを測り、断面形は逆台形を呈する部分もみられるが、概ね舟底形を呈する。溝幅は、Ⅲ区で検出した幅より広がっている。基底面は東(7.167m)から西(6.491m)に向かって傾斜する。溝は等高線を縦断する形で西南西(N-106°-W)に延びた後、途中で西北西(N-57°-W)に角度を変え、V区に続く。埋土は黒色(10YR1.7/1~2/1)~黒褐色(10YR2/2)シルトを主体に

地山の砂礫を含むもので、3～4層に分層できる。出土遺物には弥生土器63点と石製品1点があり、石製品1点(4102)が図示できた。

出土遺物

石製品(図3-157 4102)

磨石で、形状は楕円形で、断面が卵形を呈する。表面には弱い敲打痕も認められるもののほぼ平滑である。

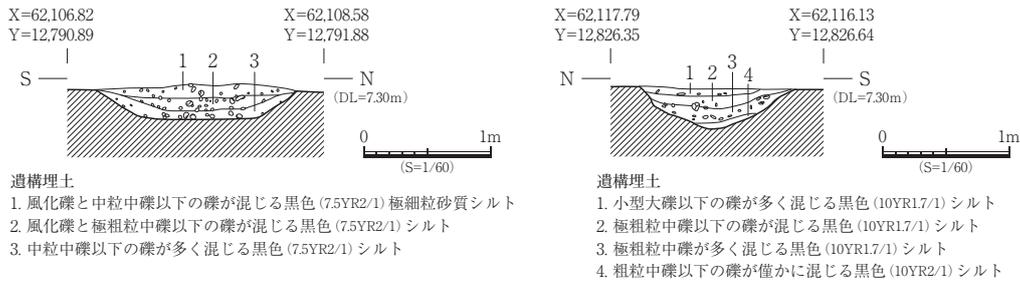


図3-158 SD-402

SD-403(図3-159)

調査区南西隅の窪地で検出した南北溝で、鍵状に屈曲し、両端は調査区外に延びる。検出長は18.50m、幅0.72～1.85m、深さは21～43cmを測り、断面形は舟底形ないし逆台形を呈する。基底面は東(6.503m)から西(6.416m)に向って傾斜する。溝は標高6.5mの等高線に沿って北西(N-34°-W)方向に延びた後、屈曲し、北北西(N-29°-W)方向に角度を変え、標高6.4mの等高線に沿って調査区外に延びる。埋土は黒色(7.5YR2/1)～黒色(10YR1.7/1)シルトを主体に地山(褐色(7.5YR4/3)シルト)のブロックや土粒を含むもので、2～3層に分層できる。出土遺物には弥生土器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

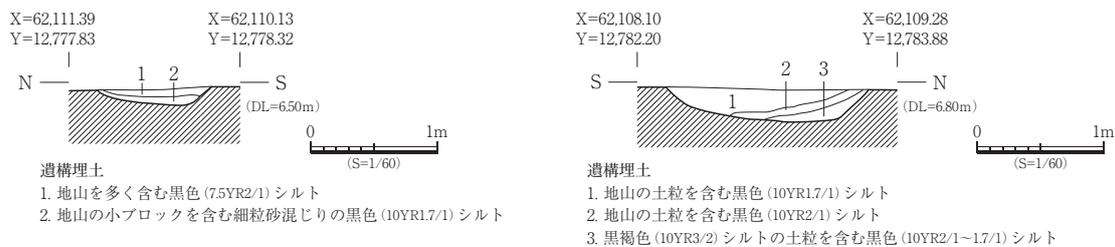


図3-159 SD-403

(2) 古代

ここでは奈良時代と平安時代前半の建物跡を取り上げて報告する。遺構の中心は掘立柱建物跡である。

建物跡の柱穴の掘方は円形や隅丸方形となったものも見受けられるが、方形を指向したものと考えられ、大きく3カ所で検出した。これら復元した建物跡は棟方向で3時期に分かれる。すなわち、SB-403, SB-401・404・405・407, SB-402・406である。

① 掘立柱建物跡

本調査区では7棟の掘立柱建物跡を復元した。

**SB-401** (図3-160)

調査区南東部で検出した桁行2間(3.90m), 梁行2間(3.30m)の南北棟建物跡であるが, 北妻柱真中の柱穴は検出できなかった。棟方向はN-4°29'-Eを示し, 柱間寸法は, 桁行(南北)が1.95m(6.5尺)等間隔, 梁行(東西)が1.65m(5.5尺)等間隔とみられる。柱穴の平面形は, 円形や隅丸方形を呈するものが多くみられるが, 基本的には方形を指向していたものと考えられ, 一辺55~75cmを測り, 柱径は10~15cmと推測され, 深さは21~54cmである。柱穴の埋土は黒褐色(10YR2/2~3/2)

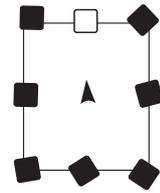


図3-160 SB-401

シルトを主体に地山(極細粒砂から極粗粒中礫を含むにぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)のブロックを含むものであった。出土遺物には弥生土器8点しかなく, 北西隅柱から出土した1点(4103)が図示できた。

**出土遺物**

**弥生土器**(図3-163 4103)

壺の底部とみられるもので, 底部は上げ底風となり, 胴部は内湾気味に立ち上がる。外面にはハケ調整の後に幅の異なる工具でヘラ磨きを施す。胎土には粗粒砂から極粗粒砂を中心に細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

**SB-402** (図3-161)

調査区南東部, SB-401の南側で検出した桁行3間(4.35m), 梁行2間(3.60m)の南北棟建物跡で, 中世の溝状の落ち込みに掘り込まれていた。棟方向はN-11°19'-Eを示し, 柱間寸法は, 桁行(南北)が1.35m(4.5尺)と1.50m(5尺), 梁行(東西)が1.65m(5.5尺)と1.95(6.5尺)である。柱穴の平面形は, 円形や隅丸方形を呈するものもみられるが, 基本的には方形を指向していたものと考えられ, 一辺43~74cmを測り, 柱径は20cm前後と推測され, 深さは18~32cmである。柱穴の埋土は黒色(7.5YR2/1)シルトを主体に地山(黄褐色(10YR5/6)シルト)の土粒を含むものであった。出土遺物はみられなかった。

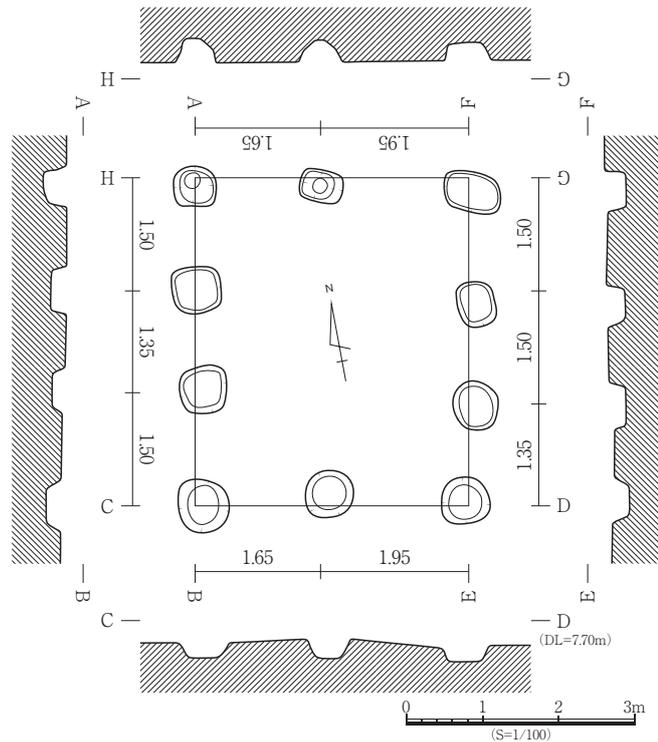


図3-161 SB-402

**SB-403** (図3-162)

調査区中央部東寄りで検出した桁行5間(9.00m), 梁行2間(4.35m)の東西棟建物跡で, 弥生の溝跡(SD-401)を切り, 中世の溝跡(SD-425・426)に掘り込まれていた。IV区では最大の建物跡で, 棟方向がN-83°45'-Eと他の建物跡とは異なり, 単独で建っていたことも考慮される。柱間寸法は, 桁行(東西)が1.35m(4.5尺)~2.10m(7尺), 梁行(南北)が2.10m(7尺)と2.25m(7.5尺)である。柱穴の平面形は, 円形や隅丸方形を呈するものも一部みられるが, 基本的には方形で, 一辺44~84cmを測り, 柱径は20cm前後と推測され, 深さは13~84cmである。柱穴の埋土は黒褐色(10YR2/2~3/2)シルト

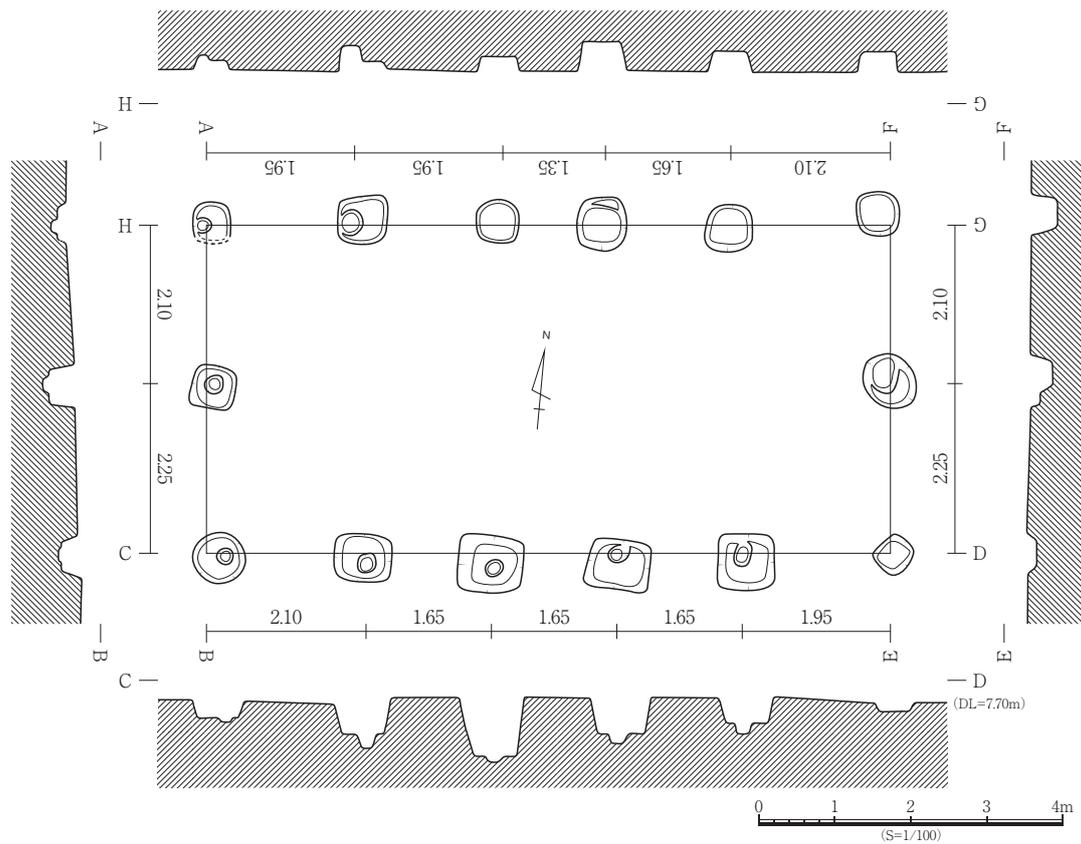


図3-162 SB-403

を主体に地山(極細粒砂から極粗粒中礫を含むにぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)のブロックを含むものであった。出土遺物には弥生土器25点と北側柱西から1間目の柱穴から出土し図示した石製品1点(4104)がみられた。

出土遺物

石製品(図3-163 4104)

扁平な叩石で、側面を中心に敲打痕が残る。石材は中粒砂岩である。

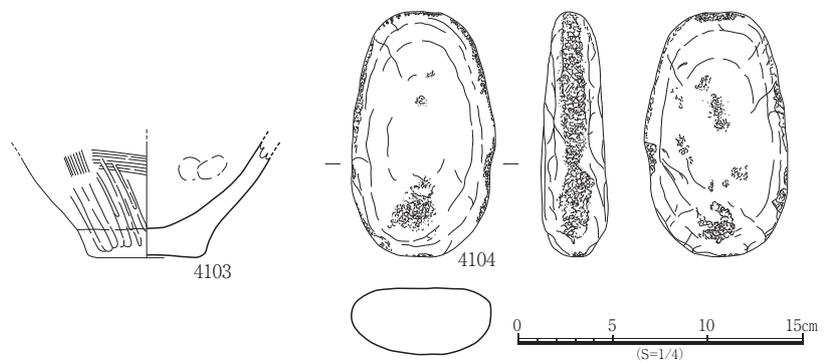


図3-163 SB-401・403出土遺物実測図

SB-404 (図3-164)

調査区中央部西寄りで検出した桁行3間(5.70m)、梁行2間(3.90m)の東西棟建物跡で、弥生の溝跡(SD-401・402)を掘り込んでいた。柱穴の並びが不揃いであるが、周囲に関連する柱穴が確認されなかったことから、1棟の建物として復元した。棟方向はN-85°14'-Wで、SB-401・405・407とほぼ同一である。柱間寸法は、桁行(東西)が1.80m(6尺)と1.95m(6.5尺)、梁行(南北)が1.95m(7尺)等間隔である。柱穴の平面形は、円形や不整形を呈するものがみられる

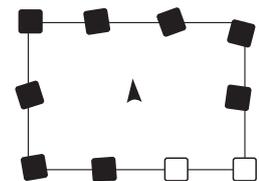


図3-164 SB-404

が、基本的には方形を指向していたものと考えられ、一辺61~103cmを測り、柱径は20cm前後と推測され、深さは9~37cmである。柱穴の埋土は黒褐色(10YR2/2~3/2)シルトを主体に地山の極細粒砂から極粗粒中礫を含んでいた。出土遺物には須恵器1点と土師質土器6点がみられたが、図示できるものはなかった。

**SB-405** (図3-165)

調査区中央部西寄り, SB-404の西隣で検出した桁行2間(3.90m), 梁行1間(2.40m)の南北棟建物跡で、弥生の溝跡(SD-401・402)を掘り込んでいた。柱穴の並びが不揃いであるが、周囲に関連する柱穴が確認されなかったことから、1棟の建物として復元した。棟方向はN-4°40'-Eで、SB-401・404・407とほぼ同一である。柱間寸法は、桁行(南北)が1.50m(5尺)と2.40m(8尺)である。柱穴の平面形は、円形ないし不整形円形を呈し、径61~99cmを測り、柱径は20cm前後と推測され、深さは4~21cmである。柱穴の埋土は黒褐色(10YR2/2~3/2)シルトを主体に地山の極細粒砂から極粗粒中礫を含んでいた。出土遺物はなかった。

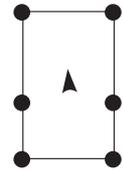


図3-165 SB-405

**SB-406** (図3-166)

調査区中央部西寄り, SB-405の北側で検出した桁行3間(7.35m), 梁行2間(4.20m)の南北棟建物跡で、西側柱を中世の溝跡(SD-432)が掘り込んでいた。棟方向はN-11°19'-Eで、SB-402とほぼ同一である。柱間寸法は相対的に長く、桁行(南北)が2.40m(8尺)と2.55m(8.5尺), 梁行(東西)が1.95m(6.5尺)と2.25m(7.5尺)である。柱穴の平面形は、円形ないし不整形円形を呈するものもみられるが、基本的には方形で、一辺61~100cmを測り、柱径は20cm前後と推測され、深さは12~49cmである。柱穴の埋土は黒色(10YR2/1)シルトを主体に地山(におい黄褐色(10YR4/3)シルト)の小ブロックを含んでいた。出土遺物には弥生土器1点がみられたが、図示できなかつた。

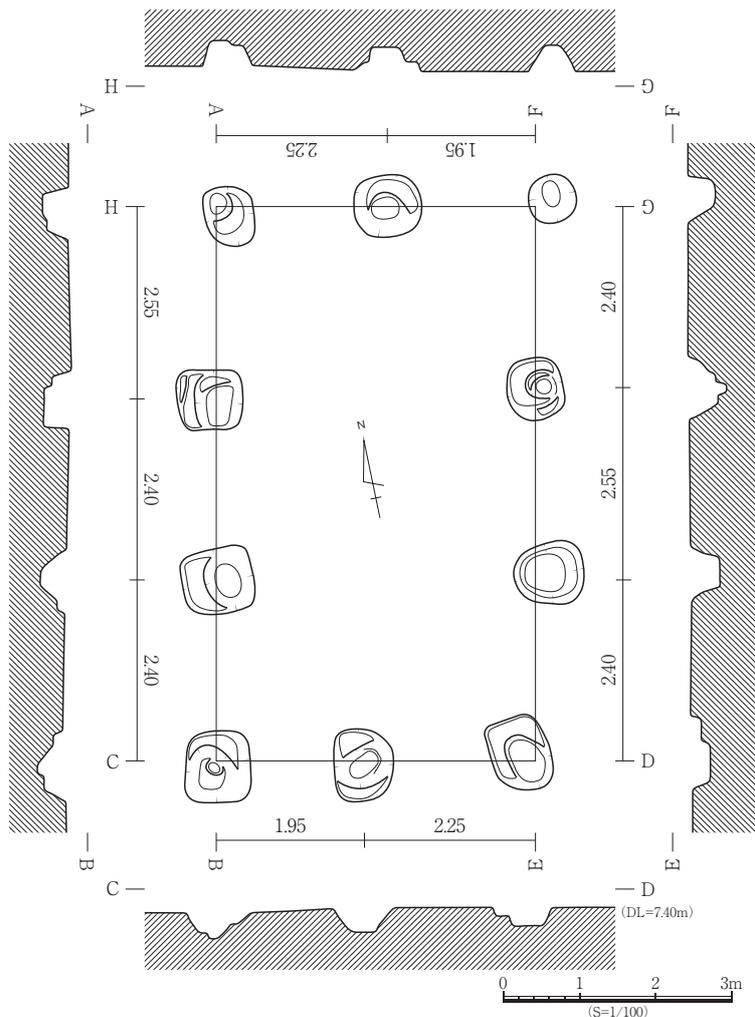


図3-166 SB-406

**SB-407** (図3-167)

調査区中央部北寄り, SB-406の北側で検出した桁行3間(7.65m), 梁行2間(3.90m)の東西棟建物跡

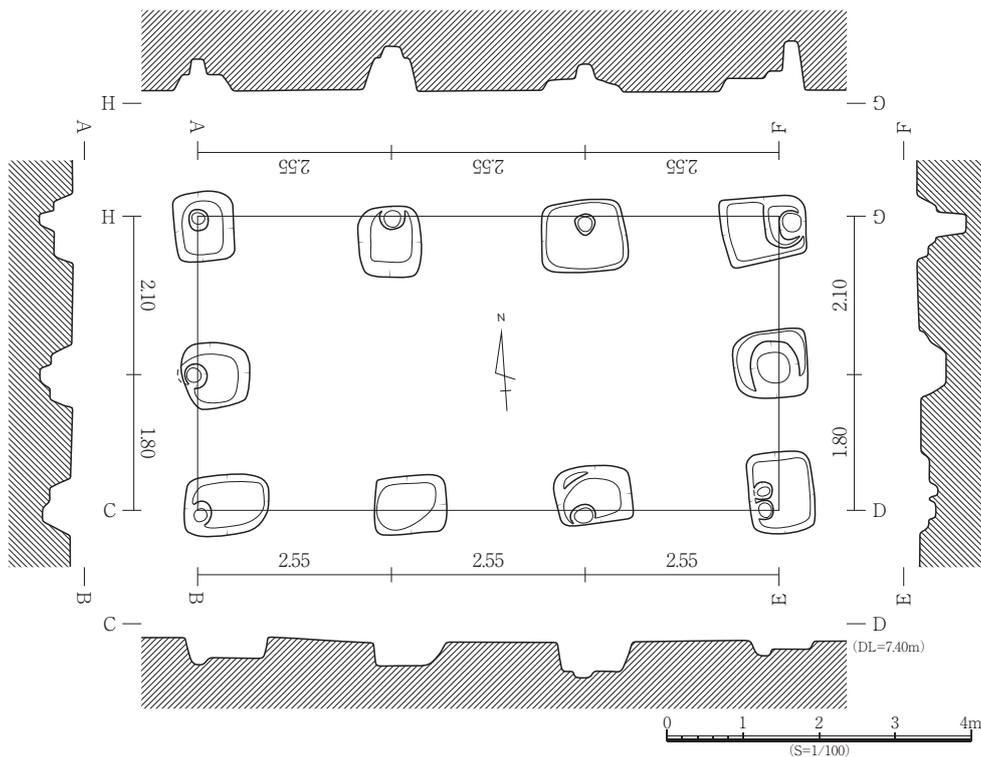


図3-167 SB-407

で、西妻柱を中世の溝跡(SD-429)が掘り込んでいた。棟方向はN-85°44'-Wで、SB-401・404・405とほぼ同一である。柱間寸法は、桁行(東西)が相対的に長く2.55m(8.5尺)等間隔、梁行(南北)が1.80m(6尺)と2.10m(7尺)である。柱穴の平面形は、隅丸方形を呈するものもみられるが、基本的には方形で他の建物跡に比べ大きく、一辺73~120cmを測る。柱径は20cm前後と推測され、深さは20~66cmである。柱穴の埋土は黒色(10YR2/1)~黒褐色(10YR2/2)シルトを主体に地山(にぶい黄褐色(10YR4/3~5/4)シルト)の小ブロックを含んでいた。出土遺物には須恵器1点がみられたが、図示できなかった。

② 土坑

SK-401 (図3-168)

調査区東部で検出した不整楕円形の土坑である。長径1.42m、短径0.92mを測り、深さは8cmと浅く、長軸方向はN-31°-Wを示す。断面形は概ね逆台形を呈する。埋土は極細粒砂から極粗粒中礫を若干含む黒褐色(10YR3/2)シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器2点があり、内1点(4105)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-169 4105)

高杯の杯部で、口縁部は大きく開く底部から屈曲して短く上方を向く。成形技法はA技法で、器面には回転ナゲ調整を施す。胎土は精良で、細粒砂から中粒砂を若干含む。

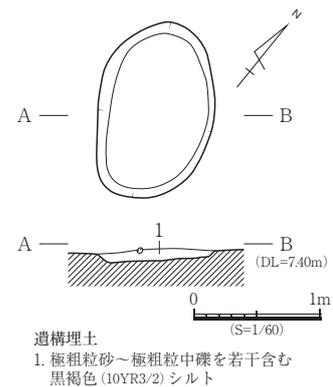


図3-168 SK-401

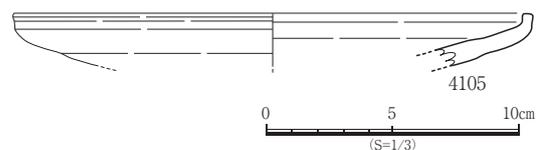


図3-169 SK-401出土遺物実測図

③ 溝跡

SD-404

調査区南東部, SB-401とSB-402の東隣で検出した南北溝である。検出長は8.54m, 幅0.53~1.02m, 深さは2~6cmを測り, 断面形は舟底形を呈する。基底面は南(7.441m)から北(7.425m)に向って若干傾斜し, 溝は北(N-9°-E)を向く。埋土は地山(にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト)の小ブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルト単一層である。出土遺物には須恵器1点があったが, 図示できなかった。

(3) 中世

本項では, 中世と考えられる遺構について報告する。本調査区を中心となる時期で, 遺構数が多いものの, 出土遺物が限られ, 明確な時期を言及することは難しい。遺構では調査区中央部北半分にあるSD-421とSD-429で区画された屋敷跡を中心に展開し, 西側には関連するとみられる畝状遺構として遺存する畠地がある。また, 掘立柱建物跡では, 屋敷跡にみられるものとは棟方向を異にする一群がみられる。

① 掘立柱建物跡

前項で報告した建物跡以外で, 大きく前述の屋敷跡に伴うものとそれらとは棟方向を異にするものに分れる。建物構造では古代からの廂構造が残る一方, 間仕切柱を持つものや下屋構造のものがあるが, いずれも間面記法で表現できる建物である。復元できた建物は17棟で, いずれも掘立柱建物跡である。

SB-408 (図3-170)

調査区中央部北寄りで検出した桁行4間(7.00~7.10m), 梁行2間(3.30m)の身舎に東側と西側に廂の付いた二面廂付きの南北4間(7.00~7.10m), 東西4間(8.00m)の南北棟建物跡である。身舎の北妻柱真中の柱穴と南東隅の柱穴は, SD-421と重複しており確認されていない。棟はやや歪むがその方向は概ねN-74°-Wである。柱間寸法は, 桁行(南北)が1.30~2.10m, 梁行(東西)が1.30mと2.00mで, 東廂幅は2.70m, 西廂幅は2.00mである。柱穴は基本的に径30~40cmの円形で, 短径が20cmを測るものや長径が70cmを測る楕円形のものも一部にみられる。柱径は15cm前後と推測され, 深さは11~45cmを測る。柱穴の埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の小ブロックを含む黒褐色(10YR2/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器1点, 土師質土器26点, 瓦器2点がみられ, 身舎東側柱南から2間目の柱穴から出土した土師質土器1点(4106)と同じく南から1間目の柱穴から出土した瓦器1点(4107)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-171 4106)

小皿で, 成形技法はB技法とみられ, 底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は精良で, 細粒砂から中粒砂を若干含む。

瓦器(図3-171 4107)

椀で, 体部から口縁部は内湾気味に上がり, 端部は丸い。口縁部にはヨコナデ調整, 体部外面には指押えの痕跡が残る。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

SB-409 (図3-172)

調査区中央部北寄り, SB-408の南隣で検出した桁行3間(8.30~8.40m), 梁行1間(2.30~2.60m)の細

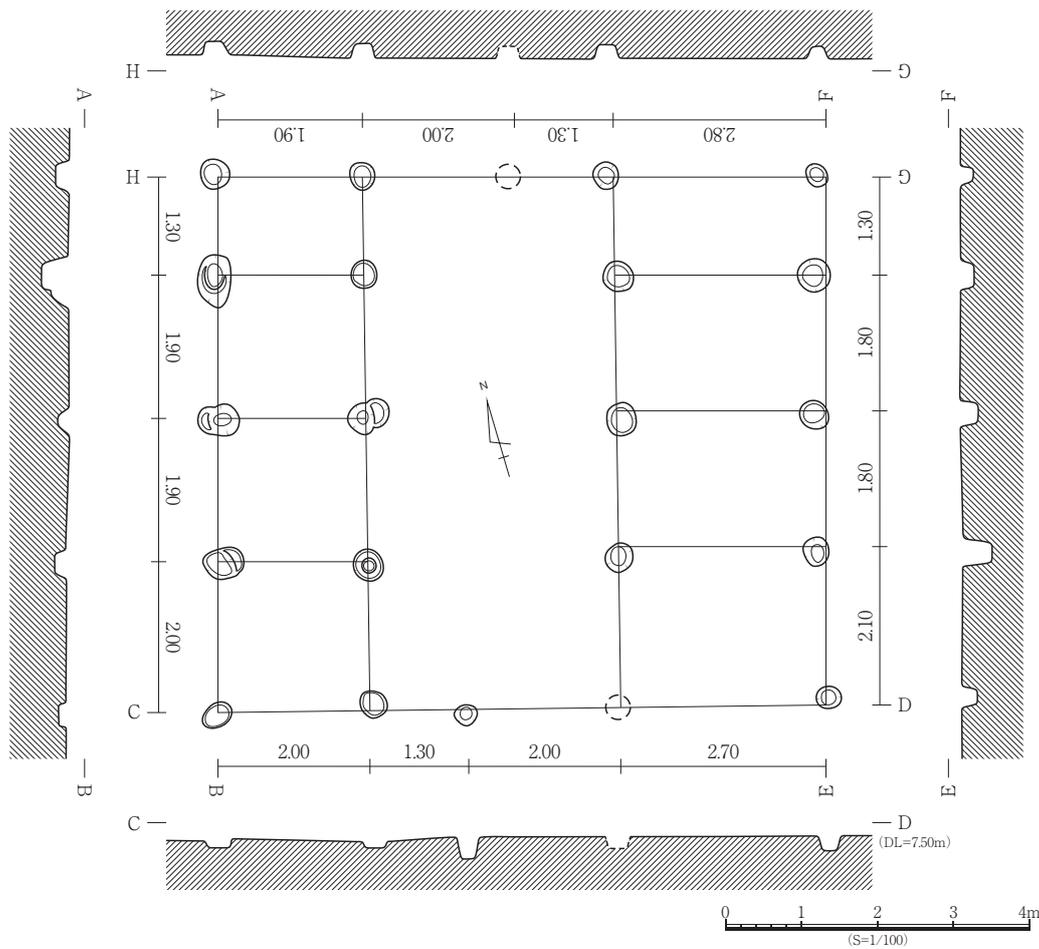


図3-170 SB-408

長い東西棟建物跡である。柱間が4.00mと広がっている部分がみられるが、側柱の並びから3間×1間の建物を復元した。棟はやや歪み、その方向はN-75°~77°-Wである。柱間寸法は、桁行(東西)が1.60~4.00m、梁行(南北)が2.30m

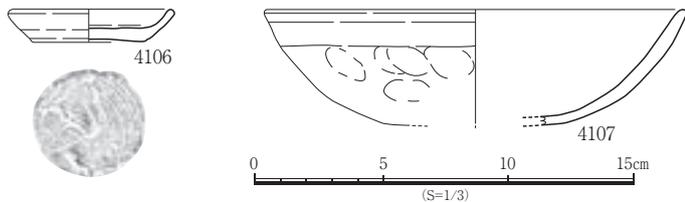


図3-171 SB-408出土遺物実測図

と2.60mである。柱穴は径20~45cmの円形を呈するものもみられるが、基本的に径25cm前後の円形で、柱径は10cm前後と推測され、深さは8~38cmを測る。柱穴の埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の小ブロックを含む黒褐色(10YR2/2)シルトであった。出土遺物には土師質土器1点がみられたが、図示できなかった。

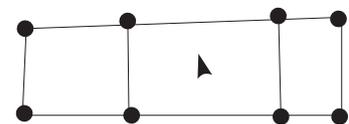


図3-172 SB-409

**SB-410** (図3-173)

調査区中央部北寄りSB-409の南側柱と重複して検出した桁行2間(4.20~4.30m)、梁行1間(2.30~2.40m)の東西棟建物跡である。棟はやや歪み、その方向はN-72°~73°-Wである。柱間寸法は、桁行(東西)が2.00~2.30m、梁行(南北)が2.30mと2.40mである。柱穴は径20~31cmの円形で、柱径は10cm前後と推測され、

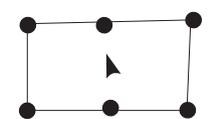


図3-173 SB-410

深さは14～29cmを測る。柱穴の埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の小ブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物は皆無であった。

**SB-411** (図3-174)

調査区中央部, SB-420の南側で検出した桁行2間(3.80m), 梁行2間(2.90m)の東西棟建物跡である。棟方向はN-74°-Wである。柱間寸法は, 桁行(東西)が1.50～2.30m, 梁行(南北)が1.30mと1.60mである。柱穴は径19～32cmの円形で, 柱径は10cm前後と推測され, 深さは2～19cmを測る。柱穴の埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の小ブロックを含む黒褐色(10YR2/2)シルトであった。出土遺物には土師質土器6点がみられ, 西妻柱真中の柱穴から出土した1点(4108)が図示できた。

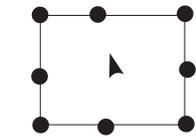


図3-174 SB-411

**出土遺物**

**土師質土器**(図3-178 4108)

小皿で, 器壁は比較的厚く, 成形技法はA技法となり, 底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は精良で, 細粒砂から中粒砂を若干含む。

**SB-412** (図3-175)

調査区東部北寄りで検出した桁行2間(5.40～5.60m), 梁行2間(3.80～4.10m)の東西棟建物跡である。棟方向はN-67～74°-Wである。柱間寸法は, 桁行(東西)が2.60～2.90m, 梁行(南北)が1.80～2.20mである。柱穴は基本的に径30cmの円形で, 径27～35cmを測り, 柱径は15cm前後と推測され, 深さは14～27cmを測る。柱穴の埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の小ブロックを含む黒褐色(10YR2/2)シルトであった。出土遺物には土師質土器32点がみられ, 南東隅柱から出土した2点(4109・4110)と南側柱東から1間目の柱穴から出土した1点(4111)が図示できた。

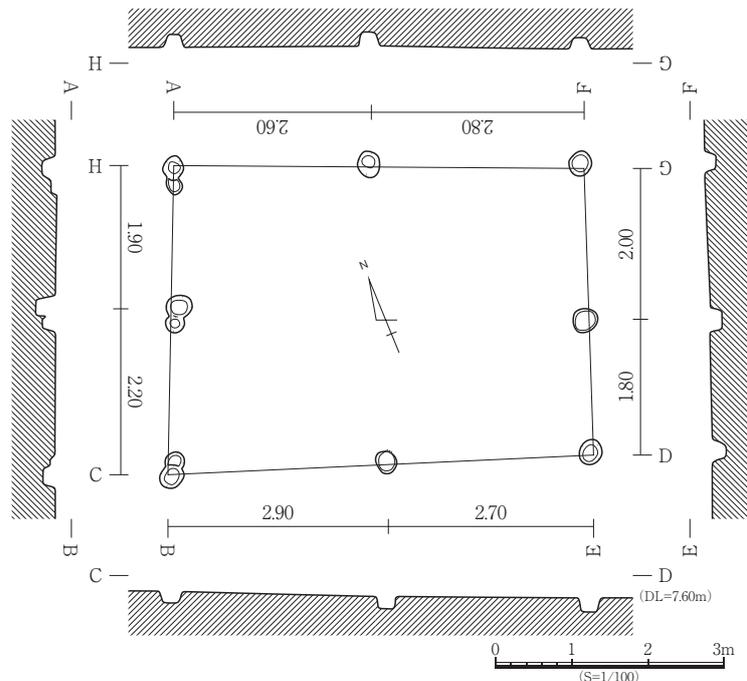


図3-175 SB-412

**出土遺物**

**土師質土器**(図3-178 4109～4111)

4109は小皿で, 成形技法はB技法となり, 内面にはロクロ目が残る。底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は精良で, 細粒砂から中粒砂を若干含む。

4110と4111は椀で, 口縁部は内湾して上がる体部からやや外傾し, 端部は丸い。成形技法はいずれもA技法である。胎土には, 4110が細粒砂から中粒砂を若干含み, 4111が細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。いずれも内面に煤が付着する。

**SB-413** (図3-176)

調査区東部, SB-412 の南東側で検出した桁行2間(3.70m), 梁行2間(3.30m)の南北棟建物跡である。棟方向はN-20°-Eである。柱間寸法は, 桁行(東西)が1.70mと2.00m, 梁行(南北)が1.30~2.00mと区々である。柱穴は径22~38cmの円形で, 柱径は10~15cmと推測され, 深さは6~38cmを測る。柱穴の埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の小ブロックを含む黒褐色(10YR2/2)シルトであった。出土遺物には土師質土器14点がみられ, 北東隅柱から出土した1点(4112)が図示できた。

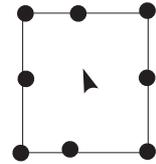


図3-176 SB-413

**出土遺物**

土師質土器(図3-178 4112)

杯で, 口縁部は上外方を向き, 端部は丸い。成形技法はB技法である。胎土は精良で, 細粒砂から中粒砂を若干含む。

**SB-414** (図3-177)

調査区東部, SB-413 の南東側で検出した桁行4間(8.70m), 梁行1間(2.50m)の細長い東西棟建物跡である。棟方向はN-70°-Wである。柱間寸法は, 桁行(東西)が1.80~3.00mと区々である。柱穴は径22~36cmの円形で, 柱径は10~15cmと推測され, 深さは7~32cmを測る。

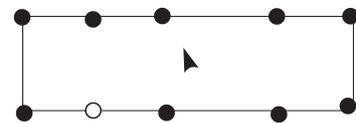


図3-177 SB-414

柱穴の埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の小ブロックを含む黒褐色(10YR2/2)シルトであった。出土遺物には土師質土器8点がみられ, 南東隅柱から出土した1点(4113)が図示できた。

**出土遺物**

土師質土器(図3-178 4113)

杯で, 成形技法はB技法となり, 底部の切り離しは回転糸切りによる。体部外面は未調整となり, 内底面にはロクロ目が明瞭に残る。胎土は精良で, 細粒砂から粗粒砂を若干含む。

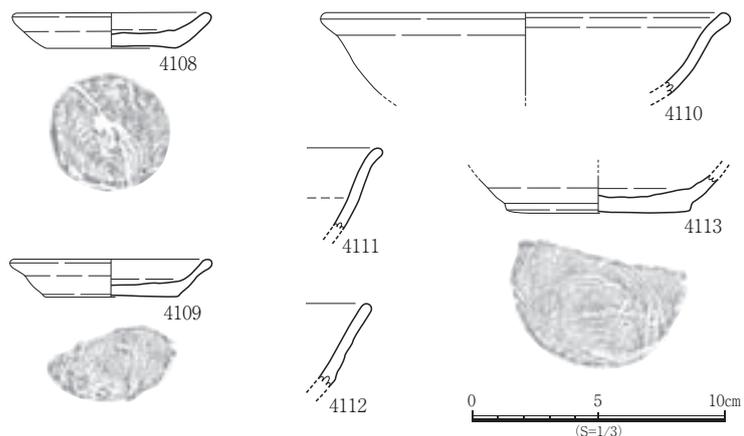


図3-178 SB-411~414出土遺物実測図

**SB-415** (図3-179)

調査区中央部南寄りで検出した桁行2間(4.35m), 梁行2間(3.10m)の身舎に下屋が北側に付く東西2間(4.35m), 南北3間(3.80m)の東西棟総柱建物跡である。Ⅲ区からⅤ区では唯一の下屋構造の建物であり, 土佐の中世の建物を考察する上で重要な資料である。棟方向はN-79°-Wである。柱間寸法は, 桁行(東西)が2.15mと2.20m, 梁行(南北)が1.50mと1.60mで, 下屋の出は0.70mである。身舎の柱穴は, 下屋の柱穴が径17~27cmの円形であるのに対し, 径24~42cmの円形と一回り大きい。柱径は10~15cmと推測され, 深さは7~51cmを測る。柱穴の埋土は極細粒中礫以下の砂礫を含む黒褐色(10YR2/2~3/2)シルトであった。出土遺物は皆無であった。

**SB-416** (図3-180)

調査区中央部西寄りで検出した桁行2間(6.10m), 梁行2間(3.70m)の東西棟建物跡である。棟方向

はN-80°-Wである。柱間寸法は区々で、桁行(東西)が相対的に長く2.90~3.20m, 梁行(南北)が1.70~2.00mとなる。柱穴は径26~35cmの円形で、柱径は15cm前後と推測され、深さは13~26cmを測る。柱穴の埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の小ブロックを含む黒褐色(10YR2/2)シルトであった。出土遺物には土師質土器4点と石製品1点がみられ、西妻柱真中の柱穴から出土した土師質土器2点(4114・4115)と石製品1点(4116)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-187 4114・4115)

いずれも小皿である。4114は、成形がB技法で、内底面にはロクロ目が明瞭に残り、底部の切り離しは回転糸切りとなる。胎土は精良で、細粒砂から中粒砂を若干含む。4115は、口縁部は上外方に比較的長く延びるもので、成形技法はA技法で、器面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は精良で、細粒砂から粗粒砂を若干含む。

石製品(図3-187 4116)

磨石で、形状は楕円形で、断面は球形に近い。側面に一部摩滅痕が残る以外は平滑である。

SB-417(図3-181)

調査区中央部北西寄りで検出した桁行3間(5.70m), 梁行2間(3.10m)の南北棟建物跡で、南から1間目の柱通りに間仕切柱が建つ。棟方向はN-10°-Eである。柱間寸法は、桁行(南北)が1.80~2.00m, 梁行(東西)が1.40mと1.70mである。柱穴は、北東隅柱が径20cmの円形と小さく、東側隅柱で長径47cmと短径33cm, 長径48cmと短径33cmの楕円形を呈するものがある以外は概ね径30~35cmの円

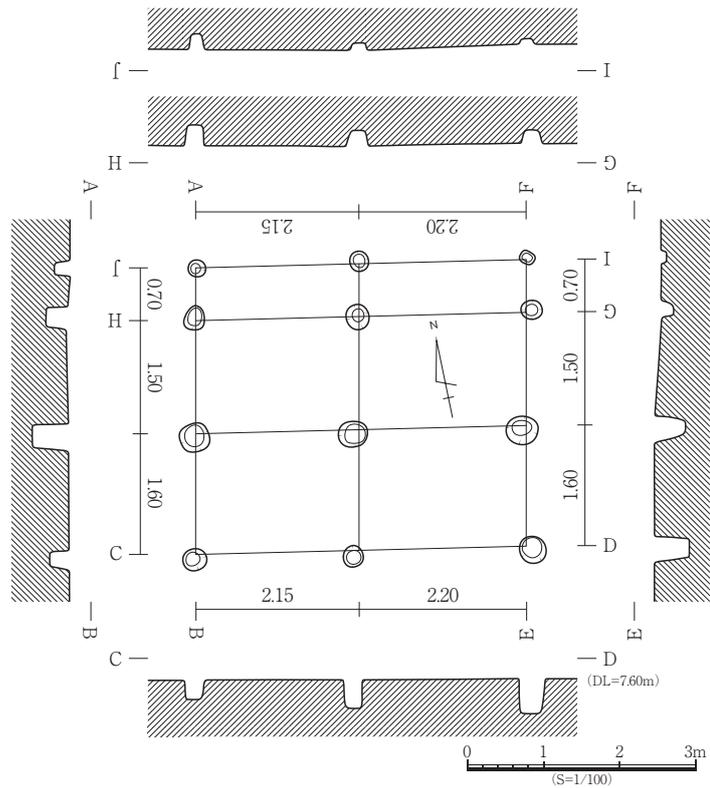


図3-179 SB-415

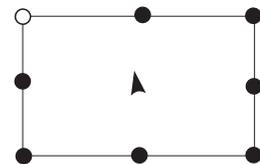


図3-180 SB-416

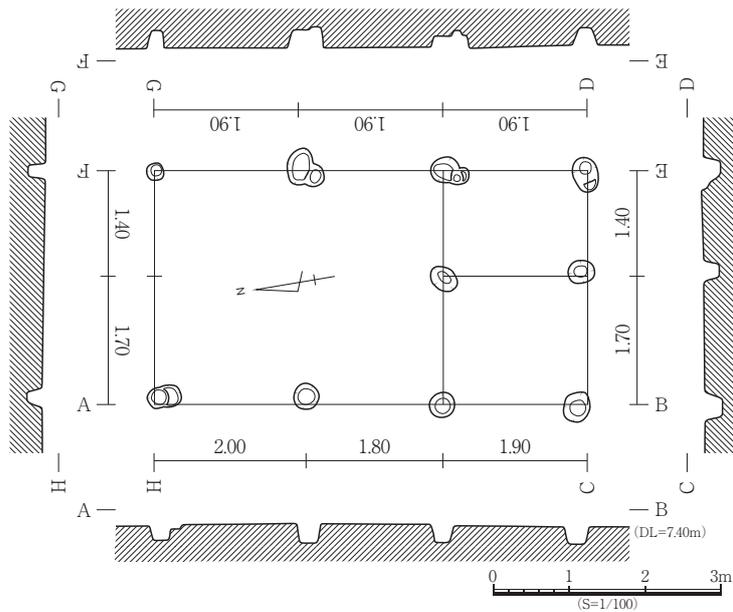


図3-181 SB-417

形で、柱径は15cm前後と推測され、深さは16~29cmを測る。柱穴の埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の小ブロックを含む黒褐色(10YR2/2)シルトであった。出土遺物は皆無であった。

**SB-418** (図3-182)

調査区中央部北寄りで検出した桁行3間(4.50~4.70m)、梁行2間(3.00~3.20m)の身舎に廂が南側に付く、片面廂付きの南北4間(6.00~6.20m)、東西2間(3.00~3.20m)南北棟建物跡で、身舎南から1間目の柱通りに間仕切柱が建つ。建物はSB-419と重複する。棟はやや歪み方向はN-5~7°-Eであるが、屋敷に伴うものと考えられる。柱間寸法は、桁行(南北)が1.35~1.70mと区々で、梁行(東西)が1.40mと1.60mで、廂幅は1.50mである。柱穴は径20~44cmの円形で、柱径は15cm前後と推測され、深さは4~45cmを測る。柱穴の埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の小ブロックを含む黒褐色(10YR2/2)シルトであった。出土遺物は皆無であった。

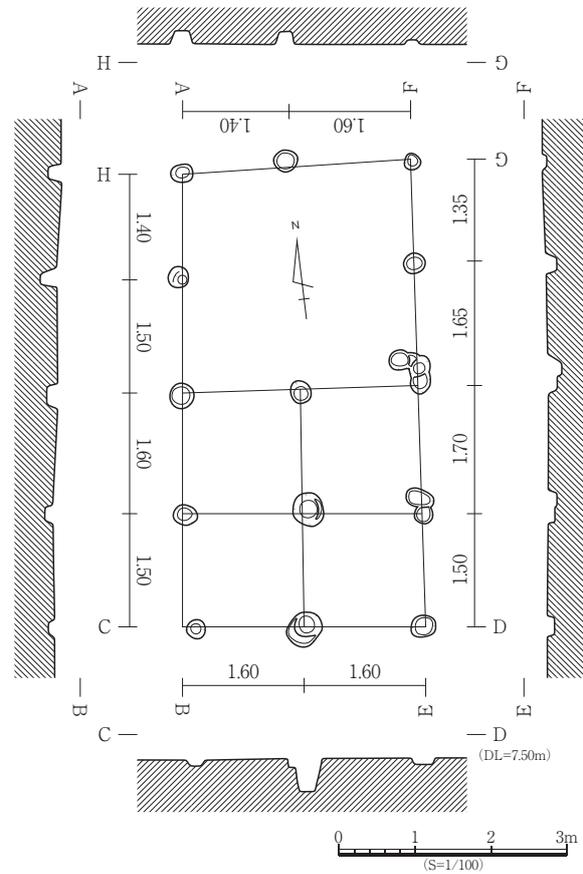


図3-182 SB-418

**SB-419** (図3-183)

調査区中央部北寄りで検出した桁行2間(2.80m)、梁行2間(2.60m)の東西棟総柱建物跡である。建物はSB-418と重複する。棟方向はN-86°-

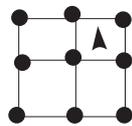


図3-183 SB-419

Wであり、屋敷に伴うものと考えられる。柱間寸法は、桁行(東西)が1.30mと1.50m、梁行(南北)が1.10mと1.50mである。柱穴は径19~34cmの円形で、柱径は10cm前後と推測され、深さは7~26cmを測る。柱穴の埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の小ブロックを含む黒褐色(10YR2/2)シルトであった。出土遺物は皆無であった。

**SB-420** (図3-184)

調査区中央部北寄りで検出した桁行3間(5.00m)、梁行2間(2.60m)の南北棟総柱建物跡である。建物はSB-410と重複する。棟方向はN-4°-Eであり、屋敷に伴うものと考えられる。柱間寸法は、桁行(南北)が1.30~1.90m、梁行(東西)が1.30m等間隔である。柱穴は大小あり、径は15~44cmの円形で、柱径は10

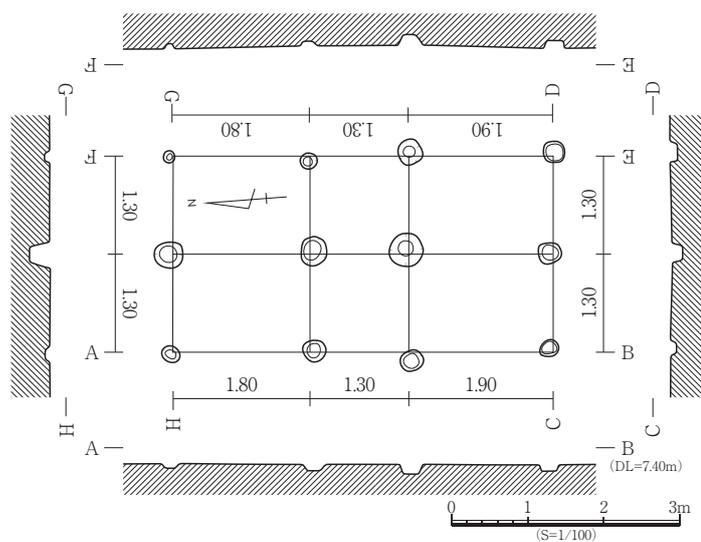


図3-184 SB-420

cm前後と推測され、深さは6~44cmを測る。柱穴の埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)のブロックを含む黒褐色(10YR2/2)シルトであった。出土遺物には、北妻柱真中の柱穴から1間目の柱穴より出土した土師質土器2点がみられたが、図示できなかった。

**SB-421** (図3-185)

調査区中央部北壁際、SB-420の北側で検出した桁行4間(7.10~7.20m)、梁行1間(2.50~2.60m)の細長い南北棟建物跡である。棟はやや歪むが、その方向は概ねN-2°-Eで、屋敷に伴うものと考えられる。柱間寸法は、桁行(南北)が1.60~1.85m、梁行(東西)が2.50mと2.60mである。柱穴は径24

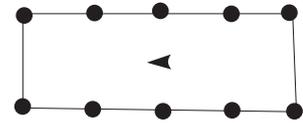


図3-185 SB-421

~32cmの円形で、柱径は10cm前後と推測され、深さは5~31cmを測る。柱穴の埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の小ブロックを含む黒褐色(10YR2/2)シルトであった。出土遺物には、西側柱北から1間目の柱穴より出土した土師質土器2点がみられたが、図示できなかった。

**SB-422** (図3-186)

調査区中央部北寄り、SB-421の南東側で検出した桁行2間(3.70m)、梁行1間(2.80~2.90m)の南北棟建物跡である。棟方向はN-0~2°-Eとやや歪むがSB-421とほぼ同じ棟方向であり、屋敷に伴うものと考えられる。柱間寸法は、桁行(南北)が1.60~2.10mと区々で、梁行(東西)が2.80mと2.90mである。柱穴は径25~38cmの円形で、柱径は15cm前後と推測され、深さは12~33cmを測る。柱穴の埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の小ブロックを含む黒褐色(10YR2/2)

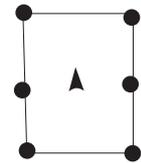


図3-186 SB-422

シルトであった。出土遺物には、土師器2点、土師質土器3点、瓦質土器1点がみられ、土師質土器1点(4117)と瓦質土器1点(4118)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-187 4117)

杯で、口縁部は上外方にほぼ真直ぐ伸びる。成形技法はB技法で、器面には回転ナデ調整を施す。外面には煤の付着が認められる。胎土は精良で、細粒砂から中粒砂を若干含む。

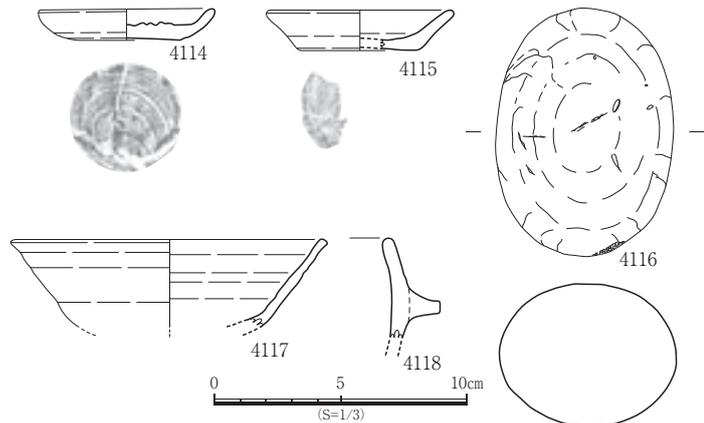


図3-187 SB-416・422出土遺物実測図

瓦質土器(図3-187 4118)

羽釜で、内湾する口縁部外面には断面台形状の鏝が巡る。鏝下半には煤が付着する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

**SB-423** (図3-188)

調査区中央部北寄り、SB-420の東側で検出した桁行3間(5.30~5.40m)、梁行1間(3.50m)の東西棟建物跡である。梁行が1間で、柱間寸法が3.50mと長い、北と南の側柱が並んでいることから1棟の建物として復元した。棟方向はやや歪むが概ねN-89°-Wで、屋敷に伴うものと考えられる。柱間寸法は、桁行(東西)が1.60~2.10mと区々である。柱穴は径26~41cmの円形で、柱径は15cm前後

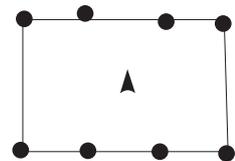


図3-188 SB-423

と推測され、深さは14～46cmを測る。柱穴の埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の小ブロックを含む黒褐色(10YR2/2)シルトであった。遺物は、北西隅の柱穴から出土した鉄製品1点、南東隅柱から西に1間目の柱穴から出土した土師質土器1点があるが、図示できなかった。

**SB-424** (図3-189)

調査区中央部南西寄りで検出した桁行3間(5.20～5.30m)、梁行2間(3.60m)の東西棟建物跡である。SD-432と重複し、北と南の側柱の柱穴の中には未確認のものもある。棟方向はやや歪みN-85～86°-Eである。柱間寸法は、桁行(東西)が1.40m前後、梁行(南北)が1.60～2.00mと区々である。柱穴は径20～30cmの円形で、柱径は10cm前後と推測され、深さは8～11cmを測る。柱穴の埋土は黒褐色(10YR2/2～3/2)シルトであった。出土遺物は皆無であった。

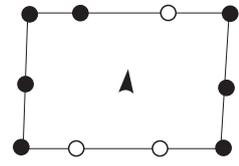


図3-189 SB-424

② 塀・柵列跡

3列を復元したが、いずれも構成柱穴が少なく、広く囲うものではなく、目隠し塀的な性格ではなからうか。SA-402のみ屋敷内にあり、屋敷に関連したものと考えられる。

**SA-401** (図3-190)

調査区東部、SB-414に沿った形で検出した東西塀(N-71°-W)である。位置関係からするとSB-414に関連する可能性が考えられる。3間分(6.70m)を検出し、柱間寸法は2.10mと2.50mである。柱穴は径18～29cmで、



図3-190 SA-401

柱径は10cm前後とみられ、深さは7～17cmを測る。柱穴の埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の小ブロックを含む黒褐色(10YR2/2)シルトであった。出土遺物は皆無であった。

**SA-402** (図3-191)

調査区中央部、SB-421の西側で検出した南北塀(N-1°-E)である。位置関係と並びからSB-421に関連する可能性が考えられる。3間分(6.10m)を検出し、柱間寸法は1.80～2.40mと区々である。柱穴は径21～30cmで、柱径は10

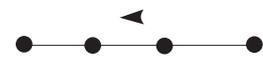


図3-191 SA-402

cm前後とみられ、深さは6～15cmを測る。柱穴の埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の小ブロックを含む黒褐色(10YR2/2)シルトであった。出土遺物は皆無であった。

**SA-403** (図3-192)

調査区西部で検出した東西塀(N-88°-E)である。周囲には建物跡はなく、単独で存在する。柱穴の規模からすると建物跡の可能性も考えられるが、周りには柱穴がなく、塀跡として復元した。また、北側と南側にある畠地とみられる



図3-192 SA-403

畝状遺構との関係を考慮する必要がある。3間分(4.80m)を検出し、柱間寸法は1.40～1.80mと区々である。柱穴は比較的大きく径32～51cmで、柱径は15cm前後とみられ、深さは6～30cmを測る。柱穴の埋土は地山(にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト)の小ブロックを僅かに含む黒褐色(10YR3/2)～灰黄褐色(10YR4/2)シルトであった。出土遺物は皆無であった。

③ 土坑

28基の土坑を検出したが、全般に遺存状況が悪く、かつ出土遺物も少なくその性格を推測することは難しい。しかし、形状などから土坑墓とみられるものがある。

**SK-402**

調査区南東部で検出した溝状の土坑で、SK-433に切られ、南の調査区外に延びる。検出長2.29m、

短辺0.86m, 深さは11cmを測り, 長軸方向はN-14°-Eを示す。断面形は概ね逆台形を呈する。埋土は地山の極細粒砂から極細粒中礫, 灰黄褐色(10YR5/2)シルトのブロック, 褐色(7.5YR4/6)シルトの土粒を含む黒褐色(10YR3/2)シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器47点と鉄製品2点があり, 土師質土器1点(4119)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-194 4119)

小皿で, 成形技法はB技法で, 底部の切り離しは回転糸切りによる。口縁部から内面に回転ナデ調整を施し, 体部外面は未調整となり, 内底面にはナデ調整を加える。胎土は精良で, 細粒砂から中粒砂を若干含む。

SK-403(図3-193)

調査区東部で検出した不整楕円形の土坑で, 南壁に2個のピットが掘り込む。長径4.31m, 短径1.70m, 深さは8cmを測り, 長軸方向はN-89°-Wを示す。断面形は概ね舟底形を呈する。埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の小ブロックを少し含む黒褐色(10YR3/2)シルト単一層であった。出土遺物には弥生土器1点, 土師質土器4点があったが, 図示できるものはなかった。

SK-404

調査区東部, SK-403の西側で検出した浅い不整楕円形の土坑である。長径2.19m, 短径1.04m, 深さは4cmを測り, 長軸方向はN-7°-Wを示す。断面形は概ね舟底形を呈する。埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の小ブロックを多く含む黒褐色(10YR2/2~3/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

SK-405

調査区東部, SK-404の西側で検出した浅い円形の土坑である。長径1.05m, 短径0.99m, 深さは5cmを測る。断面形は概ね舟底形を呈する。埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の小ブロックを含む黒褐色(10YR2/2~3/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

SK-406

調査区東部, SK-405の西側で検出した円形の土坑である。長径1.37m, 短径1.33m, 深さは13cmを測る。断面形は概ね舟底形を呈する。埋土は地山(にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト)の土粒を含む黒褐色(10YR3/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

SK-407

調査区東部, SK-406の南西側で検出した不整形の土坑である。長辺1.26m, 短辺0.55m, 深さは11cmを測り, 長軸方向はN-20°-Eを示す。断面形は概ね舟底形を呈する。埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の土粒を含む黒褐色(10YR2/2)シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器2点

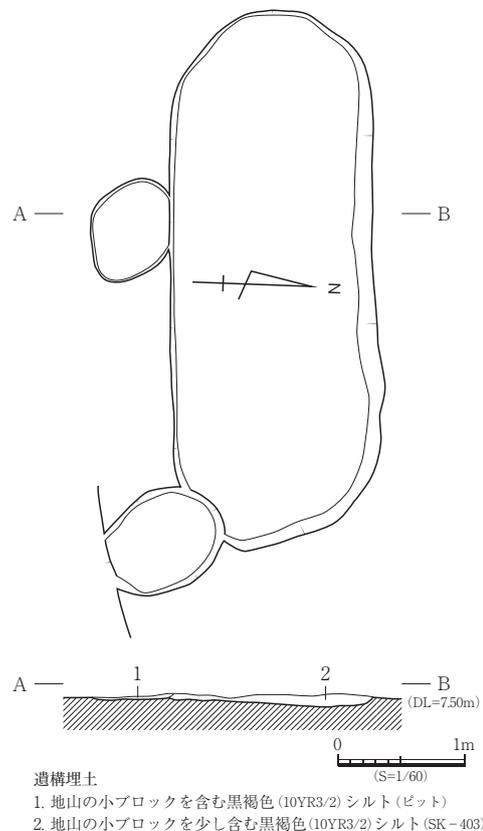


図3-193 SK-403

がみられ、内1点(4120)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-194 4120)

杯で、体部は内湾気味に上がり口縁部は外傾し端部は丸い。成形技法はB技法で、胎土は精良で、細粒砂から粗粒砂を若干含む。

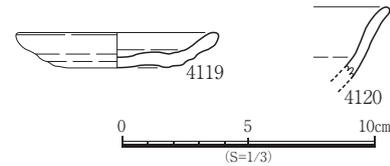
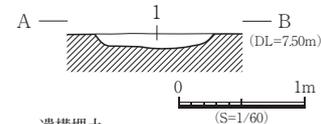
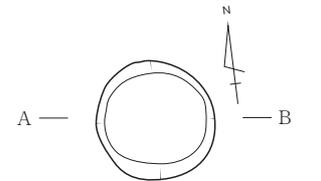


図3-194 SK-402・407出土遺物実測図

SK-408

調査区東部、SK-407の南西約3.5mのところ検出した不整形の土坑で、西壁にピットが掘り込む。長径0.94m、短径0.88m、深さは10cmを測る。断面形は概ね舟底形を呈する。埋土は地山(礫混じりのにぶい黄橙色(10YR6/4)シルト)の土粒を含む黒褐色(10YR2/2~3/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。



遺構埋土  
1. 地山の土粒を含む黒褐色(10YR3/2)シルト

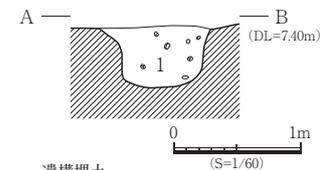
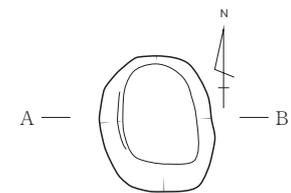
図3-195 SK-409

SK-409 (図3-195)

調査区中央部東寄り検出した円形の土坑で、南側で溝状の遺構を掘り込む。径0.94m、深さは11cmを測る。断面形は概ね舟底形を呈する。埋土は地山(にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト)の土粒を含む黒褐色(10YR3/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

SK-410 (図3-196)

調査区中央部北寄り、屋敷内で検出した楕円形の土坑である。長径1.07m、短径0.89m、深さは48cmを測り、長軸方向はN-1°-Wを示す。断面形は概ね逆台形を呈する。埋土は地山(礫混じりのにぶい黄褐色(10YR5/3)シルト)の小ブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルト単一層であった。出土遺物には弥生土器1点、土師器1点、土師質土器7点、鉄製品1点がみられたが、図示できるものはなかった。



遺構埋土  
1. 地山の小ブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルト

図3-196 SK-410

SK-411

調査区中央部、屋敷内で検出した隅丸方形の土坑で、SD-421に掘り込まれる。長辺1.58m以上、短辺1.98m、深さは10cmを測り、長軸方向はN-87°-Wを示す。断面形は概ね舟底形を呈する。埋土は地山(礫混じりのにぶい黄色(2.5Y6/4)シルト)の土粒を僅かに含む黒褐色(10YR2/2~3/2)シルト単一層であった。出土遺物には弥生土器1点、土師質土器7点、青磁1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-412

調査区中央部、屋敷内で検出した楕円形の土坑で、南側をピットが掘り込む。長径1.09m、短径0.67m、深さは17cmを測り、長軸方向はN-6°-Wを示す。断面形は概ね逆台形を呈する。埋土は地山(礫混じりのにぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の小ブロックを多く含む黒褐色(10YR3/2)シルト単一層であった。出土遺物には図示した瓦2点(4121・4122)があった。

出土遺物

瓦(図3-197 4121・4122)

いずれも丸瓦で、凹面には布目が残り、その上をヘラナデ調整する。凸面はヘラナデ調整の後にナ

デ調整を加える。側面にはヘラ削り調整を施す。胎土は比較的精良で、細粒砂から極細粒中礫を少し含む。焼成は良好で、燻しており、銀灰色ないし灰色を呈する。

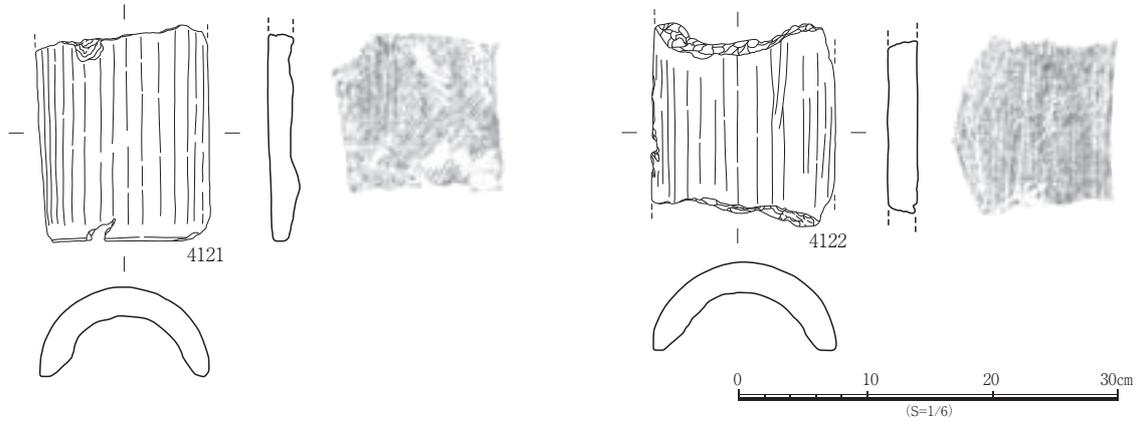


図3-197 SK-412出土遺物実測図

**SK-413**

調査区中央部、屋敷内で検出した隅丸方形の土坑で、SD-421 と接する。長辺1.52m、短辺0.86m、深さは10cmを測り、長軸方向はN-3°-Eを示す。断面形は概ね舟底形を呈する。埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト)の小ブロックを多く含む黒褐色(10YR3/2)～灰黄褐色(10YR4/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

**SK-414**

調査区中央部、SD-421の南側で検出した円形の土坑である。長径1.19m、短径1.15m、深さは11cmを測る。断面形は概ね舟底形を呈する。埋土は地山(礫混じりの灰黄褐色(10YR5/2)シルト)の土粒を含む黒褐色(10YR2/2～3/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

**SK-415 (図3-198)**

調査区中央部、屋敷内で検出した大型の隅丸方形を呈する土坑である。長辺3.10m、短辺2.12m、深さは9cmを測り、長軸方向はN-1°-Wを示す。断面形は概ね舟底形を呈する。埋土は地山(礫混じりのにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト)の土粒を僅かに含む黒褐色(10YR2/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

**SK-416**

調査区中央部北側、屋敷内で検出した不整楕円形の土坑で、SD-428 に掘り込まれる。長径1.28m、短径0.96m、深さは12cmを測り、長軸方向はN-23°-Eを示す。断面形は概ね逆台形を呈する。埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト)の小ブロックを含む黒褐色(10YR2/2～3/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

**SK-417 (図3-199)**

調査区中央部北側、屋敷内のSD-429の東側で検出した隅丸方形の土坑で、形状から土坑墓とみられ、屋敷内

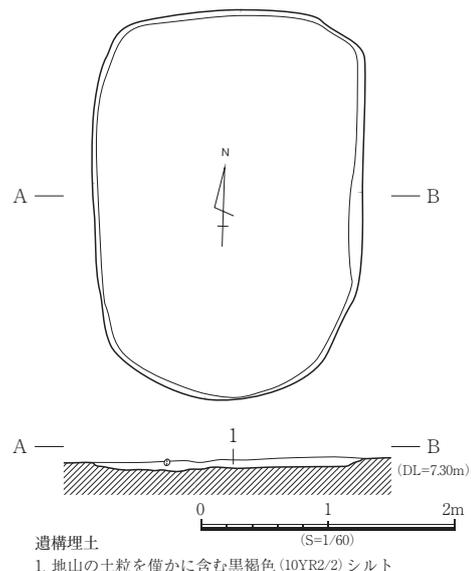


図3-198 SK-415

にあることから屋敷墓と考えられる。長辺2.22m, 短辺0.81m, 深さは30cmを測り, 長軸方向はN-8°-Eを示す。断面形は概ね逆台形を呈する。埋土は黒褐色(10YR2/2)シルトを主体に, 地山(礫混じりの黄褐色(10YR5/6)シルトから黄褐色(2.5Y5/3)シルト)の小ブロックの量によって2~3層に分層される。出土遺物には鉄製品6点がみられたが, 図示できるものはなかった。

**SK-418**

調査区中央部北寄り, 屋敷内で検出した浅い不整形の土坑で, 西側をSD-429と南壁をピットに掘り込まれる。長辺2.47m, 短辺1.73m以上, 深さは5cmを測り, 長軸方向はN-11°-Eを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は, 地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の小ブロックを含む黒褐色(10YR2/2~3/2)シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器1点がみられたが, 図示できなかつた。

**SK-419** (図3-200)

調査区中央部, SD-432の東側で検出した不整形の土坑である。長辺1.01m, 短辺0.72m, 深さは26cmを測り, 長軸方向はN-10°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(10YR2/2~3/2)シルトを主体に, 地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の小ブロックを含む量によって上下2層に分層され, 下層には礫を僅かに含んでいた。出土遺物には図示した土師質土器2点(4123・4124)がみられた。

**出土遺物**

土師質土器(図3-203 4123・4124)

いずれも小杯で, 成形技法はB技法により, 底部の切り離しは回転糸切りによる。4123は, 体部が上外方へ真直ぐ延び, 口縁部はやや外傾し, 端部は丸い。胎土は精良で, 細粒砂から粗粒砂を若干含む。4124は, 体部から口縁部が内湾して上がり, 端部が細く, 内面には成形時のロクロ目が比較的明瞭に残る。胎土は精良で, 細粒砂から極粗粒砂を若干含む。

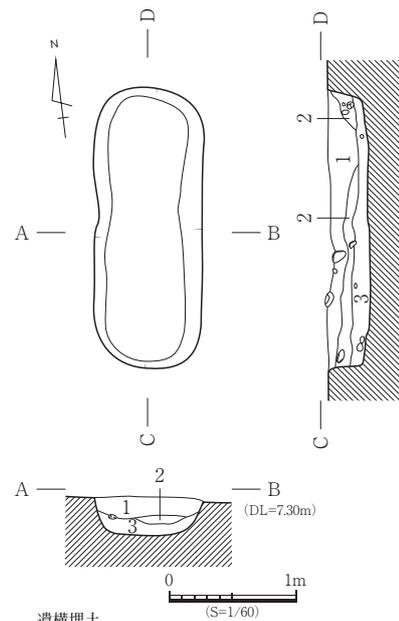
**SK-420**

調査区中央部, SK-421と切り合った形で検出した不整形の土坑で, SK-421を切る。長径1.19m, 短径1.14m, 深さは10cmを測る。断面形は概ね舟底形を呈する。埋土は粗粒砂から極粗粒砂を含む黒褐色(2.5Y3/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

**SK-421**

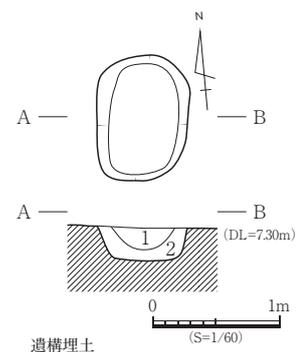
調査区中央部, SK-420と切り合った形で検出した不整形楕円形の土坑で, SK-420に掘り込まれる。長径1.25m, 短径0.81m, 深さは7cmを測り, 長軸方向はN-8°-Eを示す。断面形は概ね舟底形を呈する。埋土は地山(礫混じりの褐色(10YR4/4)シルト)の土粒を含む黒褐色(10YR2/3)シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器14点がみられ, 内1点(4125)が図示できた。

**出土遺物**



遺構埋土  
1. 地山の土粒を僅かに含む黒褐色(10YR2/2)シルト  
2. 地山の小ブロックを多く含む黒褐色(10YR2/2)シルト  
3. 礫が僅かに混じる黒褐色(10YR2/2)シルト

図3-199 SK-417



遺構埋土  
1. 地山の小ブロックを僅かに含む黒褐色(10YR2/2~3/2)シルト  
2. 地山の小ブロックを多く含み, 礫が僅かに混じる黒褐色(10YR2/2~3/2)シルト

図3-200 SK-419

土師質土器(図3-203 4125)

杯で、成形技法はB技法となり、底部の切り離しは回転糸切りによる。体部から口縁部は上外方へほぼ真直ぐ延び、器壁は口縁端部に向かって薄くなる。内底面にはロクロ目が明瞭に残る。胎土は精良で、細粒砂から粗粒砂を若干含む。

SK-422(図3-201)

調査区中央部南東寄りで見出した楕円形の土坑である。長径1.27m、短径0.90m、深さは8cmを測り、長軸方向はN-25°-Eを示す。断面形は概ね舟底形を呈する。埋土は地山(礫混じりのにぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の土粒を含む黒褐色(10YR3/2)シルト単一層であった。出土遺物には焼礫1点がみられた。

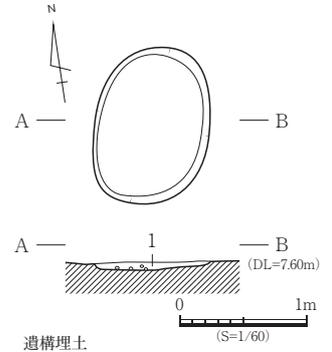


図3-201 SK-422

SK-423(図3-202)

調査区中央部南端、南壁際で見出した不整楕円形の土坑である。長径1.24m、短径0.96m、深さは10cmを測り、長軸方向はN-27°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山(礫混じりの黄褐色(10YR5/6)シルト)の小ブロックを含む黒褐色(10YR2/2~3/2)シルト単一層であった。出土遺物には土師器1点、土師質土器10点がみられ、土師質土器1点(4126)が図示できた。

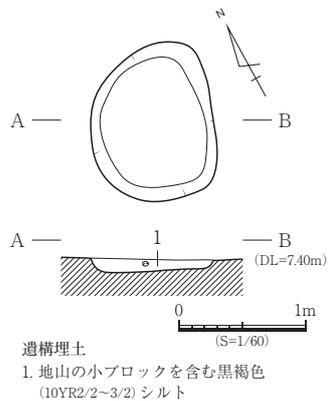


図3-202 SK-423

出土遺物

土師質土器(図3-203 4126)

杯で、成形技法はB技法となり、底部外面には回転糸切り痕跡と静止糸切り痕跡の2種がみられる。体部から口縁部は上外方へほぼ真直ぐ上がり、口縁部から内面にかけて回転ナデ調整を施すが、体部外面は未調整となる。胎土は精良で、細粒砂から粗粒砂を若干含む。

SK-424

調査区西部、SD-432の西側で見出した不整形の土坑である。長辺1.05m、短辺0.91m、深さは12cmを測り、長軸方向はN-21°-Eを示す。断面形は箱形を呈する。埋土は地山(灰黄褐色(10YR4/2)シルト)の土粒と暗褐色(10YR3/3)シルトの小ブロックを含む黒褐色(10YR2/2~3/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

SK-425

調査区西部、SK-424の西側で見出した円形の土坑で、SB-416の北西隅の柱穴と重複する。長径1.51m、短径1.46m、深さは8cmを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山(礫混じりにぶい黄褐色(10YR5/3)シルト)の土粒を僅

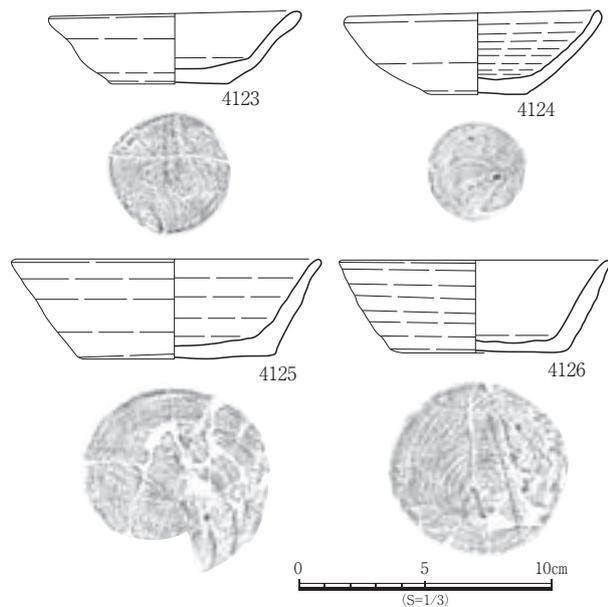


図3-203 SK-419・421・423出土遺物実測図

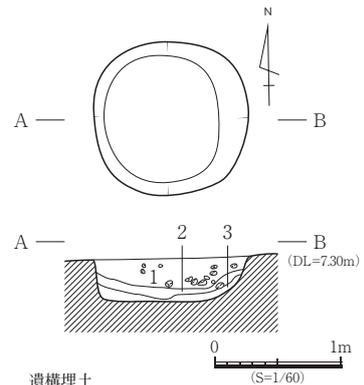
かに含む黒褐色(10YR2/2)シルト単一層であった。出土遺物はチャート片が1点みられた。

**SK-426**

調査区西部, SK-425 の西側で検出した方形の土坑で, 形状から土坑墓の可能性が考えられる。長辺1.41m, 短辺0.82m, 深さは8cmを測り, 長軸方向はN-84°-Wを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は地山(礫混じりのにぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の土粒を含む黒褐色(10YR2/2~3/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

**SK-427 (図3-204)**

調査区西部, SK-426 の北側で検出した円形の土坑で, 形状と掘方から土坑墓の可能性が考えられる。径1.21m, 深さは34cmを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(10YR2/2)シルトを主体に地山(礫混じりの暗褐色(10YR3/4)シルト)の小ブロックを含む量によって3層に分層され, 1層には中礫を比較的多く含む。出土遺物には土師質土器7点がみられたが, 図示できるものはなかった。



遺構埋土  
1. 地山を含む黒褐色(10YR3/4)シルト  
2. 地山の小ブロックを含む黒褐色(10YR2/2)シルト  
3. 礫を僅かに含む黒褐色(10YR2/2)シルト

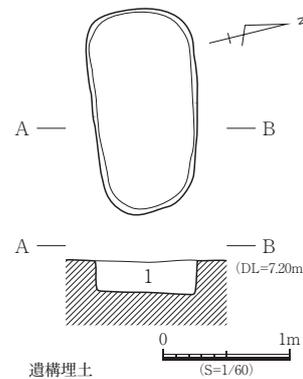
図3-204 SK-427

**SK-428**

調査区西部で検出した方形の土坑で, 形状から土坑墓の可能性も考えられるが, 遺存状態が悪い。長辺1.40m, 短辺0.56m, 深さは7cmを測り, 長軸方向はN-81°-Wを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は地山(礫混じりの灰黄褐色(10YR4/2)シルト)の土粒を僅かに含む黒褐色(10YR2/2~2/3)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

**SK-429 (図3-205)**

調査区西部, SK-436 の西側で検出した不整形の土坑で, 形状と掘方から土坑墓の可能性が考えられる。長辺1.60m, 短辺0.83m, 深さは23cmを測り, 長軸方向はN-82°-Wを示す。断面形は箱形を呈する。埋土は, 黒色(10YR2/1)~黒褐色(10YR2/2)シルト単一層であるが, 下層を中心に地山(黄褐色(2.5Y5/4)シルト)の小ブロックを多く含んでいた。出土遺物は皆無であった。



遺構埋土  
1. 黒色(10YR2/1)~黒褐色(10YR2/2)シルト

図3-205 SK-429

④ 溝跡

46条を溝跡として報告するが, SD-420・421・429などのような区画溝と考えられるものやSD-432・437・444などのように用排水に関連したとみられるものがある一方, その多くは, 延長が短く, かつ遺存状態が悪いためどのような性格であったか判然としない。

**SD-405 (図3-206)**

調査区北東部で検出した南北溝で, 北側は調査区外に延び, ほぼ同じ規模と方向でSD-406~408の3条も併存する。検出長7.84m, 幅0.85m, 深さ4~7cmを測り, 断面形は舟底形を呈する。基底面は南(7.362m)から北(7.288m)に向ってやや傾斜し, 主軸方向は北(N-1°-W)を示す。埋土は, 地山(にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト)の小ブロックを多く含む黒褐色(10YR3/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

**SD-406** (図3-206)

調査区北東部, SD-405の西側で検出した南北溝で, 北側は調査区外に延びる。検出長3.60m, 幅0.74~0.98m, 深さ3~7cmを測り, 断面形は舟底形を呈する。基底面は北(7.326m)から南(7.295m)に向ってやや傾斜し, 主軸方向は南(N-178°-W)を示す。埋土は, 地山(にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト~にぶい黄橙色(10YR6/3)シルト)の小ブロックを多く含む黒褐色(10YR3/2)シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器1点がみられたが, 図示できなかった。

**SD-407** (図3-206)

調査区北東部, SD-406の西隣りで検出した南北溝で, 北側は調査区外に延びる。検出長6.20m, 幅0.57~1.02m, 深さ2~8cmを測り, 断面形は舟底形を呈する。基底面は南(7.337m)から北(7.245m)に向ってやや傾斜し, 主軸方向はSD-406と同じ北(N-2°-E)を示す。埋土は, 地山(黄褐色(2.5Y5/4)シルト)の小ブロックを僅かに含む黒褐色(10YR3/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

**SD-408** (図3-207)

調査区北東部, SD-407の西側で検出した南北溝で, 北側は調査区外に延びる。検出長4.63m, 幅0.78~0.93m, 深さ4~7cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。基底面は南(7.366m)から北(7.322m)に向ってやや傾斜し, 主軸方向は北(N-3°-E)を示す。埋土は, 地山(礫混じりのにぶい黄褐色(10YR5/3)シルト)の小ブロックを僅かに含む黒褐色(10YR3/2)シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器1点がみられたが, 図示できなかった。

**SD-409**

調査区北東部, SD-408の西側で検出した細い南北溝で, SD-410やピットに切られ, 北側は調査区外に延びる。検出長2.33m, 幅0.35~0.38m, 深さ6~9cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。基底面はほぼ平坦で標高7.319~7.321mを測り, 主軸方向は方眼北を示す。埋土は, 地山(黄褐色(2.5Y5/4)シルト)の小ブロックを僅かに含む黒褐色(10YR3/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

**SD-410**

調査区北東部, SD-409の西側で検出した南北溝で, SD-409を掘り込み, 北側は調査区外に延びる。検出長2.00m, 幅0.60~0.81m, 深さ3cmを測り, 断面形は舟底形を呈する。基底面は北(7.363m)から南(7.328m)に向ってやや傾斜し, 主軸方向は南(N-173°-E)を示す。埋土は, 地山(黄褐色(2.5Y5/4)シルト)の土粒を僅かに含む黒褐色(10YR3/2)~暗褐色(10YR3/3)シルト単一層であった。出土遺物は土師質土器1点がみられたが, 図示できなかった。

**SD-411**

調査区北東部, SD-410の西側で検出した細長い南北溝で, 北側は調査区外に延びる。検出長8.55m, 幅0.28~0.51m, 深さ5~9cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。基底面は南(7.347m)から北

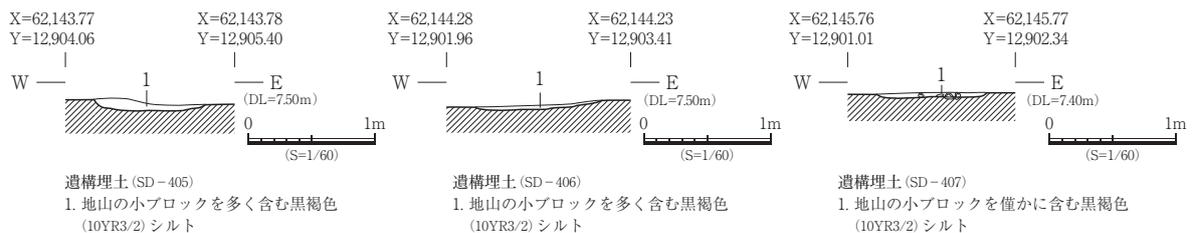


図3-206 SD-405~407

(7.311m)に向ってやや傾斜し、溝は途中で北(N-10°-E)から北北西(N-12°-W)に方向を変える。埋土は、地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の土粒を含む黒褐色(10YR2/2~3/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

**SD-412** (図3-207)

調査区北東部, SD-413・414 と併存した形で検出した細い東西溝で, SD-415 に掘り込まれる。検出長6.46m, 幅0.29~0.45m, 深さ3cmを測り, 断面形は概ね逆台形を呈する。基底面はほぼ平坦で標高7.294~7.372mを測り, 溝は西北西(N-73°-W)を向く。埋土は、地山(黄褐色(2.5Y5/3)シルト)の小ブロックを含む黒褐色(10YR2/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

**SD-413**

調査区北東部, SD-412・414 と併存した形で検出した細い東西溝で, SB-412 が掘り込む。検出長7.90m, 幅0.23~0.43m, 深さ4cmを測り, 断面形は概ね舟底形を呈する。基底面はほぼ平坦で標高7.294~7.362mを測り, 溝は西北西(N-78°-W)を向く。埋土は、地山(にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト)の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

**SD-414**

調査区北東部, SD-412・413 と併存した形で検出した細い東西溝で, 3条ともほぼ同一方向にある。検出長5.60m, 幅0.37~0.48m, 深さ5~7cmを測り, 断面形は概ね舟底形を呈する。基底面はほぼ平坦で標高7.263~7.282mを測り, 溝は西北西(N-78°-W)を向く。埋土は、地山(にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト)の土粒を多く含む黒褐色(10YR2/2)シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器2点がみられたが, 図示できなかつた。

**SD-415** (図3-207)

調査区北東部で検出した南北溝で, 北側は調査区外に延びる。検出長9.32m, 幅0.45~0.65m, 深さ4~14cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。基底面は北(7.325m)から南(7.279m)に向ってやや傾斜し, 溝は南(N-174°-W)に延びた後, 途中で南南西(N-164°-W)に方向を変える。埋土は、黒褐色(10YR2/2~3/2)シルトを主体に地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の粒形の違いにより2層に分層される。出土遺物には土師質土器7点がみられたが, 内1点(4127)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-217 4127)

碗で, 平らな底部外端部には高さ4mmの高台が付き, 体部は内湾気味に上がる。成形技法はA技法で, 底部の切り離しは静止糸切りとみられる。胎土は精良で, 細粒砂から極細粒中礫を若干含む。

**SD-416**

調査区北東部, SD-415 の延長上で検出した細い南北溝である。検出長6.25m, 幅0.25~0.47m, 深

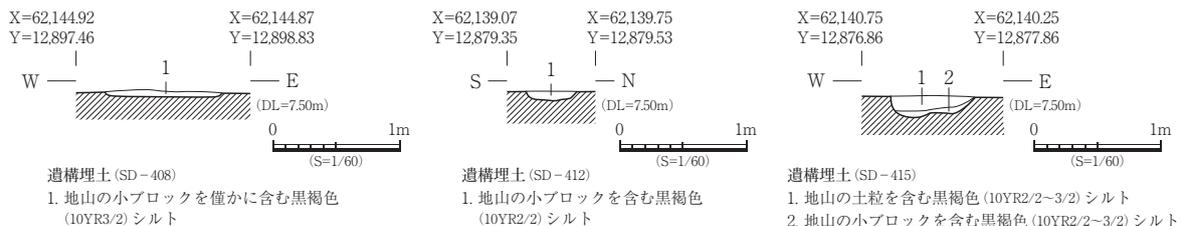


図3-207 SD-408・412・415

さ2~4cmを測り、断面形は舟底形を呈する。基底面はほぼ平坦で標高7.344~7.347mを測り、溝は北北東(N-13°-E)を向く。埋土は、地山(にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト)の土粒と細粒砂を僅かに含む黒褐色(10YR2/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

**SD-417** (図3-208)

調査区北東部, SD-415の西側で検出した細い南北溝で, SD-419を切る。検出長10.86m, 幅0.18~0.31m, 深さ2~8cmを測り、断面形は舟底形を呈する。基底面はほぼ平坦で標高7.242~7.353mを測り、溝は基本的に北北東(N-15°-E)を向き、南端が西北西(N-75°-W)に屈曲する。埋土は、地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の小ブロックを多く含む黒褐色(10YR2/2~3/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

**SD-418** (図3-208)

調査区北東部, SD-417の西側で検出した南北溝で, SD-419を切り、北側は調査区外へ延びる。検出長7.82m, 幅0.45~1.01m, 深さ3~14cmを測り、断面形は舟底形を呈する。基底面は北(7.324m)から南(7.227m)に向ってやや傾斜し、溝は南(N-174°-W)を向く。埋土は、地山(礫混じりのにぶい黄色(2.5Y6/3)シルト)の土粒を含む黒褐色(10YR3/2)シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器5点と瓦質土器1点があったが、図示できるものはなかった。

**SD-419** (図3-208)

調査区中央部から北東部で検出した鍵状の細長い南北溝で, SD-415・417・418・420に切られ、北側は調査区外へ延びる。検出長26.55m, 幅0.18~0.33m, 深さ4~10cmを測り、断面形は舟底形を呈する。基底面は南(7.312m)から北(7.267m)に向ってやや傾斜し、溝は北(N-4°-W)に延びた後、北西(N-50°-W)に屈曲し、調査区外に続く。埋土は、地山(にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト)の土粒を含む黒褐色(10YR2/2~3/2)シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器2点と蓮弁文のある青磁1点がみられたが、図示できるものはなかった。

**SD-420** (図3-208)

調査区中央部, SD-421の東側で検出した細長い南北溝で, SD-419を切り、SD-421とは2.0~2.5m間隔で並走し、北側は調査区外へ延びる。検出状況からみるとSD-421と関連した溝と考えられる。検出長22.78m, 幅0.21~0.48m, 深さ5~11cmを測り、断面形は概ね舟底形を呈する。基底面はほぼ平坦で標高7.257~7.280mを測り、溝は北(N-2°-W)を向く。埋土は、地山(にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト)の土粒を含む黒褐色(10YR3/2)シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器4点がみられたが、図示できるものはなかった。

**SD-421** (図3-209)

調査区中央部, SD-420の西側で検出した屋敷の東と南の区画をなす溝である。溝は南端で途切

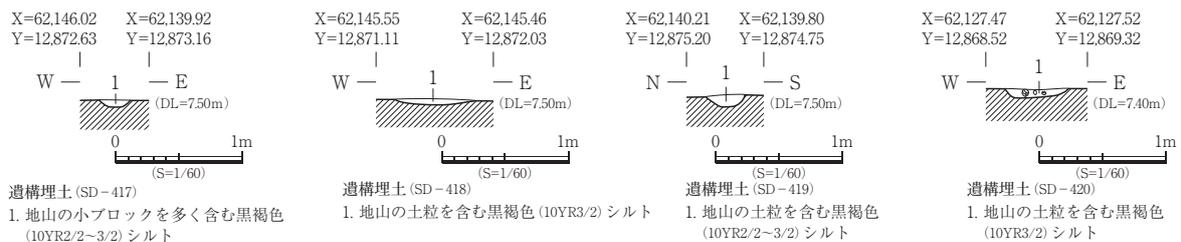


図3-208 SD-417~420

れるが、同一のものと考えられる。東側ではSD-420が2.0~2.5m間隔で並走しており、東側は2条となる。検出長30.60m, 幅0.43~0.95m, 深さ4~17cmを測り、断面形は概ね舟底形を呈する。基底面はほ

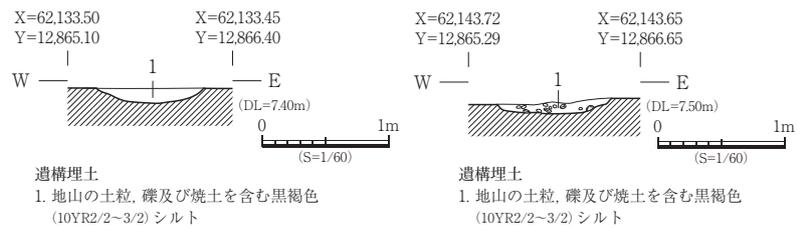


図3-209 SD-421

ぼ平坦で標高7.207~7.297mを測り、東の区画をなす溝は北(N-2°-W)を向き、南の区画をなす溝は西(N-88°-W)を向く。埋土は、地山(褐色(10YR4/6)シルト)の土粒、礫及び焼土を含む黒褐色(10YR2/2~3/2)シルト単一層であった。出土遺物には須恵器1点と土師質土器11点がみられたが、図示できるものはなかった。

**SD-422**

調査区東部, SD-419の南側で検出した東西溝である。検出長9.31m, 幅0.36~0.51m, 深さ4~7cmを測り、断面形は舟底形を呈する。基底面はほぼ平坦で標高は7.282~7.309mを測り、溝は基本的に西(N-82°-W)を向くが、東側で屈曲する部分がある。埋土は、地山(にぶい黄色(25Y6/4)シルト)の土粒を含む黒褐色(10YR2/2~3/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

**SD-423** (図3-210)

調査区南東部で検出した南北溝で、南側はSK-431に切られ、北側は調査区外へ延びる。検出長5.30m, 幅0.43~0.49m, 深さ7~15cmを測り、断面形はU字形を呈する。基底面は北(7.339m)から南(7.292m)にやや傾斜し、溝は南南西(N-160°-W)に延び、調査区外に続く。埋土は、地山(暗灰黄色(25Y5/2)シルト)の土粒と礫を僅かに含む黒褐色(10YR2/2~3/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

**SD-424** (図3-210)

調査区南東部で検出した細い南北溝である。検出長8.42m, 幅0.23~0.51m, 深さ4~7cmを測り、断面形は舟底形を呈する。基底面はほぼ平坦で標高7.425~7.436mを測り、溝は北(N-5°-E)を向く。埋土は黒褐色(10YR3/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

**SD-425** (図3-210)

調査区南東部で検出したL字形の細長い東西溝である。検出長27.80m, 幅0.28~0.54m, 深さ8~14cmを測り、断面形はU字形ないし逆台形を呈する。基底面はほぼ平坦で標高7.301~7.347mを測り、溝は東(N-93°-E)を向き、東端で南(N-176°-E)に屈曲する。埋土は、基本的に黒色(10YR2/1)シルト単一層であるが、下層部に地山(黄褐色(25Y5/4)シルト)のブロックの堆積がみられた。出土遺物には混入した弥生土器7点がみられたが、図示できるものはなかった。

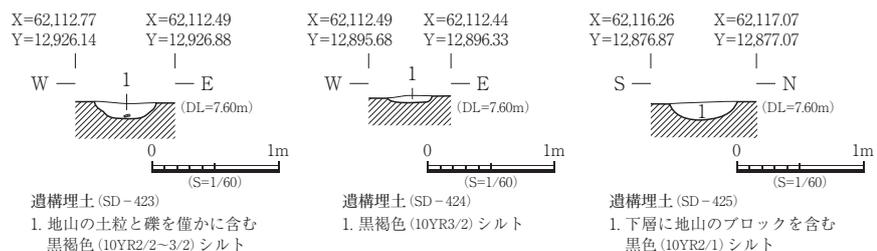


図3-210 SD-423~425

**SD-426**

調査区中央部南側で検出した細い南北溝である。検出長10.03m,

幅0.36~0.55m, 深さ4~6cmを測り, 断面形は舟底形を呈する。基底面はほぼ平坦で標高7.369~7.394mを測り, 溝は北(N-7°-E)を向く。埋土は, 地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の土粒を僅かに含む黒色(10YR2/1)~黒褐色(10YR2/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

**SD-427** (図3-211)

調査区中央部南側, SD-426の西側で検出した南北溝である。検出長12.11m, 幅0.47~0.65m, 深さ5~8cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。基底面は北(7.380m)から南(7.302m)に向って傾斜し, 溝は南(N-172°-W)を向く。埋土は, 地山(灰黄褐色(10YR4/2)シルト)の土粒を含む黒色(7.5YR2/1)シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器3点がみられたが, 図示できるものはなかった。

**SD-428** (図3-211)

調査区中央部北側, 北壁際で検出した東西溝で, SK-416を切る。検出長10.58m, 幅0.22~0.44m, 深さ5~8cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。基底面はほぼ平坦で標高は7.194~7.206mを測り, 溝は西(N-88°-W)を向く。埋土は, 地山(にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト)の土粒を僅かに含む黒褐色(10YR3/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

**SD-429** (図3-211)

調査区中央部, SB-418・419の西側で検出した屋敷の西の区画をなす溝で, 北側は調査区外に延び, 南端でSK-418を切る。西側ではSD-430が1.5

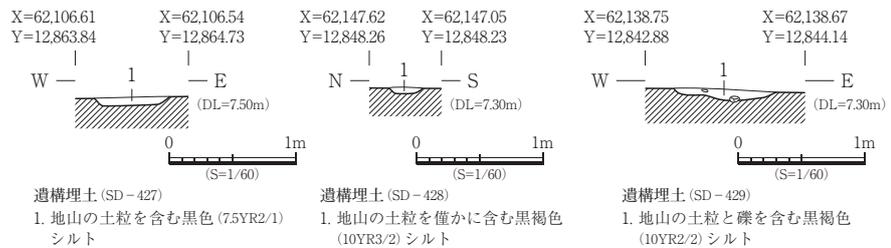


図3-211 SD-427~429

~2.5m間隔で並走しており, 西側も2条になっていたと思われる。検出長14.60m, 幅0.75~0.93m, 深さ4~8cmを測り, 断面形は概ね舟底形を呈する。基底面は北(7.141m)から南(7.089m)にやや傾斜し, 溝は南(N-173°-W)を向く。埋土は, 地山(褐色(10YR4/4)シルト)の土粒と礫を含む黒褐色(10YR2/2)シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器1点がみられたが, 図示できなかった。

**SD-430** (図3-212)

調査区中央部, SD-429の西側で検出した細長い南北溝で, SD-431を切り, SD-429とは1.5~2.5m間隔で並走し, 北側は調査区外へ延びる。検出状況からみるとSD-429と関連した溝と考えられる。検出長14.82m, 幅0.30~0.68m, 深さ3~15cmを測り, 断面形は概ね舟底形を呈する。基底面は南(7.166m)から北(7.074m)に向ってやや傾斜し, 溝は北(N-6°-E)を向く。埋土は, 地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト

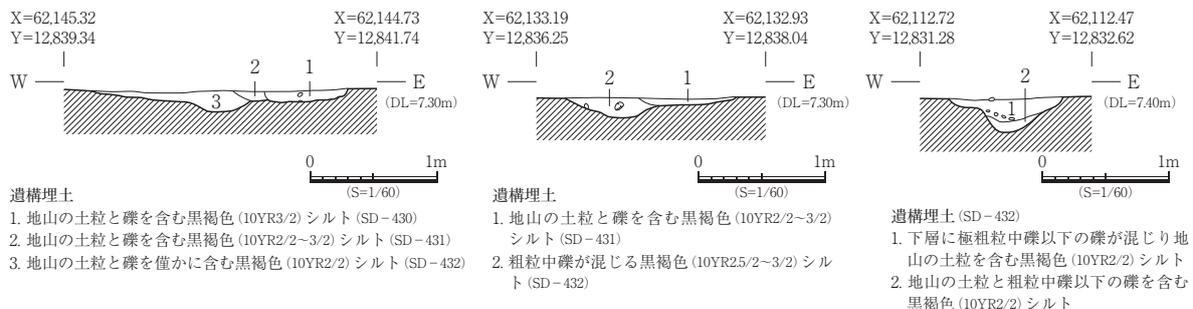


図3-212 SD-430~432

ト)の土粒と礫を含む黒褐色(10YR3/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

**SD-431** (図3-212)

調査区中央部, SD-430・432と重複する形で検出した南北溝で, SD-432を切り, SD-430に掘り込まれ, 北側は調査区外へ延びる。検出状況からみるとSD-432や南側のSD-433と関連した溝と考えられ, SD-432の掘り返しの可能性がある。検出長17.76m, 幅0.60~1.00m, 深さ4~17cmを測り, 断面形は舟底形ないし逆台形を呈する。基底面はほぼ平坦で標高7.090~7.105mを測り, 溝は北(N-9°-E)を向く。埋土は, 地山(黄褐色(10YR5/6)シルト)の土粒と礫を含む黒褐色(10YR2/2~3/2)シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器1点と瓦器1点がみられたが, 図示できなかった。

**SD-432** (図3-212・213)

調査区中央部, SD-430・431・433と重複する形で検出した南北溝で, SD-430・431・433に掘り込まれ, 北側は調査区外へ延びる。検出長47.10m, 幅0.53~1.24m, 深さ15~31cmを測り, 断面形は舟底形ないしU字形を呈する。基底面は, 延長が長いにも関わらずほぼ平坦で標高7.028~7.046mを測り, 溝はSD-431とほぼ同じく北(N-15°-E)を向く。埋土は, 黒褐色(10YR2/2~3/2)シルトを主体に,

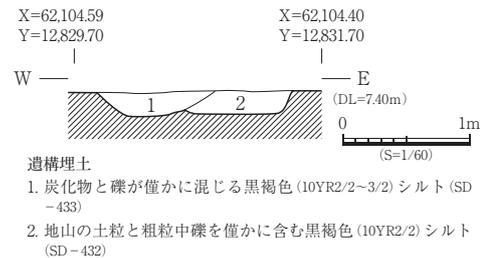


図3-213 SD-432・433

地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)~黄褐色(10YR5/6)シルト)の土粒と礫を含む度合いにより2層に分層される部分もある。出土遺物には弥生土器1点, 須恵器1点, 土師質土器87点, 瓦器5点, 瓦質土器4点がみられたが, 図示できたのは瓦質土器1点(4128)のみであった。

出土遺物

瓦質土器(図3-217 4128)

羽釜で, 口縁部は直立し, 外面に断面三角形の鏝が巡る。鏝下半には煤が付着する。胎土には細粒砂から中粒砂を多く含む。

**SD-433** (図3-213)

調査区中央部, SD-432と重複する形で検出した南北溝で, SD-432を掘り込み, 南側は調査区外へ延びる。検出長5.00m, 幅0.60~0.90m, 深さ8~19cmを測り, 断面形は舟底形を呈する。基底面は, ほぼ平坦で標高7.178~7.184mを測り, 溝はSD-431・432と同じく北(N-15°-E)を向く。埋土は, 炭化物と礫を僅かに含む黒褐色(10YR2/2~2/3)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

**SD-434**

調査区中央部北側, SD-432の西側で検出した細長い南北溝である。検出長7.62m, 幅0.31~0.45m, 深さ1~4cmを測り, 断面形は概ね舟底形を呈する。基底面はほぼ平坦で標高7.198~7.204mを測り, 溝は北(N-9°-E)を向く。地山(にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト)の土粒を含む黒褐色(10YR3/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

**SD-435** (図3-214)

調査区北西部, 北壁際から検出した細長い南北溝である。検出長6.98m, 幅0.40~0.46m, 深さ3~6cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。基底面は南(7.212m)から北(7.117m)にかけてやや傾斜し, 溝は北北東(N-18°-E)に延びる。埋土は, 地山(黄褐色(2.5Y5/4)シルト)の小ブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

2. IV区 (3) 中世

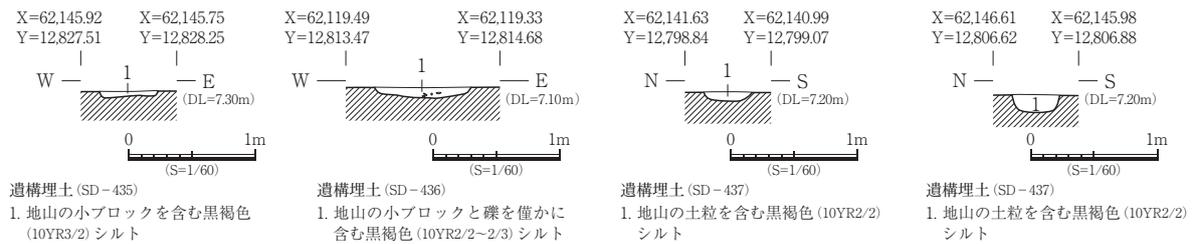


図3-214 SD-435~437

**SD-436** (図3-214)

調査区北西部で検出した南北溝で、SD-401を掘り込む。検出長10.22m、幅0.65~0.71m、深さ6~9cmを測り、断面形は舟底形を呈する。基底面はほぼ平坦で標高7.970~7.982mを測り、溝は北(N-6°-E)を向く。埋土は、地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の小ブロックと礫を僅かに含む黒褐色(10YR2/2~2/3)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

**SD-437** (図3-214)

調査区北西部、北壁から西壁にかけて検出した東西溝で、SD-438を切る。検出長41.70m、幅0.29~0.38m、深さ7~14cmを測り、断面形はU字形ないし逆台形を呈する。基底面は東(7.121m)から西(6.766m)に向って傾斜し、溝は南西(N-125°-W)に延びる。埋土は地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の土粒を含む黒褐色(10YR2/2)シルト単一層であった。出土遺物には混入した弥生土器20点がみられたが、図示できなかった。

**SD-438**

調査区北西部で検出したやや湾曲する東西溝で、SD-437に切られ、西側は調査区外に延びる。検出長27.82m、幅0.30~0.36m、深さ2~6cmを測り、断面形は概ねU字形を呈する。基底面は東(7.137m)から西(6.913m)に向って傾斜し、溝は西南西(N-118°-W)に延びた後、西(N-90°-W)に方向を変える。埋土は、地山(にぶい黄褐色(10YR4/3~5/3)シルト)の小ブロックを含む黒褐色(10YR2/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

**SD-439**

調査区西部で検出した東西溝で、SD-437を切る。溝は途切れるが、位置関係等から4条は本来同一のものと考えられる。検出長16.80m、幅0.24~0.77m、深さ約5cmを測り、断面形は舟底形を呈する。基底面はほぼ平坦で標高6.947~6.955mを測り、溝は西北西(N-75°-W)を向く。埋土は、地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の小ブロックと砂礫を僅かに含む黒褐色(10YR3/2)シルト単一層であった。出土遺物には混入した弥生土器1点がみられたが、図示できなかった。

**SD-440** (図3-215)

調査区西部で検出した南北溝で、SD-439同様に途切れるが、位置関係等から3条は本来同一のものと考えられる。検出長19.70m、幅0.48~0.71m、深さ7~10cmを測り、断面形は逆台形を呈する。基底面はほぼ平坦で標高6.960~7.035mを測り、溝は北(N-1°-W)を向く。埋土は、地山(灰黄褐色(10YR4/2)シルト)の土粒と砂礫を僅かに含む黒褐色(10YR2/2)シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器2点がみられたが、図示できなかった。

**SD-441** (図3-215)

調査区南西部、SD-440の東側で検出した東西溝で、SD-439・440同様途切れるが、位置関係等か

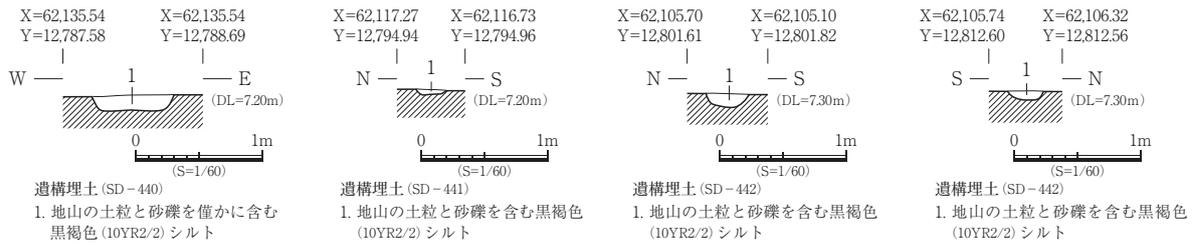


図3-215 SD-440~442

ら4条は本来同一のものと考えられる。また、北側には畠地とみられる畝状遺構があり、似通った形状であることから関連するものと思われる。検出長10.52m, 幅0.20~0.22m, 深さ約4cmを測り、断面形は舟底形を呈する。基底面はほぼ平坦で標高6.957~7.039mを測り、溝は東(N-89°-E)を向く。埋土は、地山(灰黄褐色(10YR4/2)シルト)の土粒と砂礫を含む黒褐色(10YR2/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

**SD-442 (図3-215)**

調査区南西部南寄り、南壁近くで検出した東西溝で、SD-439~441同様途切れるが、位置関係等から2条は本来同一のものと考えられる。また、SD-444に切られる。検出長16.10m, 幅0.20~0.30m, 深さ5~10cmを測り、断面形は逆台形ないしU字形を呈する。基底面は東(7.152m)から西(6.959m)に傾斜し、溝は西(N-93°-W)に延びる。埋土は、地山(灰黄褐色(10YR4/2)~暗褐色(10YR3/3)シルト)の土粒と砂礫を含む黒褐色(10YR2/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

**SD-443 (図3-216)**

調査区南西部南寄り、SD-442の西側で検出した南北溝で、SD-444を切り、南側は調査区外に続く。検出長9.50m, 幅0.21~0.36m, 深さ4~9cmを測り、断面形は舟底形を呈する。基底面は南(7.019m)から北(6.939m)に傾斜し、溝は北北西(N-24°-W)に延びる。埋土は、地山(にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト)の土粒と砂礫を含む黒褐色(10YR2/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

**SD-444 (図3-216)**

調査区南西部南壁から西壁にかけて検出した南北溝で、SD-443・445に切れ、両端は調査区外に続く。検出長29.51m, 幅0.67~1.27m, 深さ5~21cmを測り、断面形は舟底形を呈する。基底面は南(6.873m)から北(6.680m)に傾斜し、溝は北西(N-46°-W)に延びる。埋土は、黒褐色(10YR2/2)シルトを主体に地山(にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト)の土粒と砂礫を含む度合いによって2層に分層される部分もある。出土遺物には土師質土器3点がみられ、内1点(4129)が図示できた。

**出土遺物**

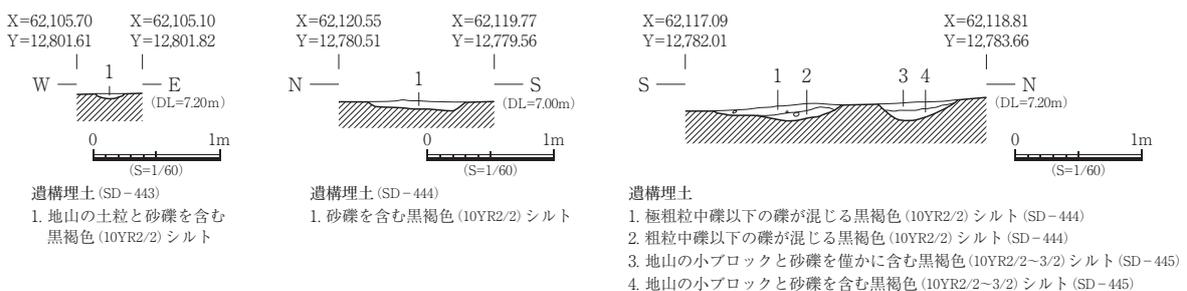


図3-216 SD-443~445

土師質土器(図3-217 4129)

杯で、成形技法はA技法で、底部の切り離しは回転糸切りとなり、板状圧痕が残る。体部から口縁部は内湾気味に上がり、口縁端部でやや外傾する。体部外面は未調整で、内面にはナデ調整を施した後ヘラ磨きを加えた可能性があり、内底面の一部には煤が付着する。胎土は精良で、細粒砂から粗粒砂を若干含む。

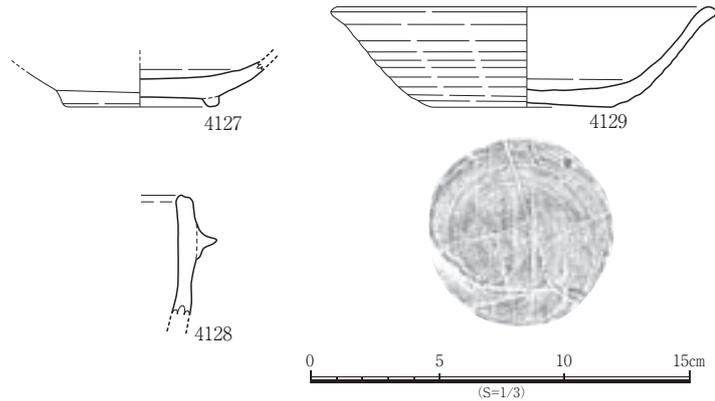


図3-217 SD-415・432・444出土遺物実測図

SD-445 (図3-216)

調査区南西部, SD-444 と重複した形で検出したやや湾曲する南北溝で, SD-444 を切る。検出長12.50m, 幅0.39~0.63m, 深さ9~18cmを測り, 断面形はU字形を呈する。基底面はほぼ平坦で標高6.807~6.859mを測り, 溝は概ね北西(N-48°-W)を向く。埋土は, 黒褐色(10YR2/2~3/2)シルトを主体に地山(にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト)の小ブロックと砂礫を含む度合いによって2層に分層される。出土遺物は皆無であった。

SD-446 (図3-218)

調査区南西部, SD-444 の南側で検出した南北溝で, 南側は調査区外に続く。検出長6.70m, 幅0.35~0.57m, 深さ7~24cmを測り, 断面形はU字形を呈する。基底面は北(6.847m)から南(6.696m)に傾斜し, 溝は南南東(N-149°-E)に延びる。埋土は, 砂礫を含む黒褐色(10YR2/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

SD-447

調査区南西部, SD-446 の西側で検出した南北溝で, 南側は調査区外に続く。検出長1.23m, 幅約0.30m, 深さ約6cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。基底面はほぼ平坦で標高6.881~6.922mを測り, 溝は北北西(N-22°-W)を向く。埋土は, 地山(黄褐色(2.5Y5/3~5/4)シルト)の小ブロックと砂礫を含む黒褐色(10YR2/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

SD-448 (図3-218)

調査区南西部, SD-447 の西側で検出した南北溝で, 南側は調査区外に続く。検出長3.87m, 幅約0.30m, 深さ4~26cmを測り, 断面形はU字形を呈する。基底面はほぼ平坦で標高6.819~6.838mを測り, 溝は北北西(N-31°-W)を向く。埋土は, 黒褐色(10YR3/2)シルトを主体に地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の土粒や小ブロックと砂礫を含む度合いにより2層に分層される。出土遺物は皆無であった。

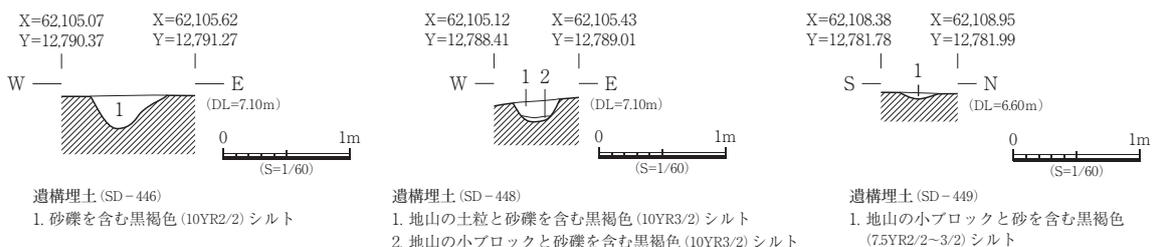


図3-218 SD-446・448・449

**SD-449** (図3-218)

調査区南西部, SD-448の西側で検出したL字形の溝である。検出長7.10m, 幅約0.27m, 深さ約4cmを測り, 断面形は舟底形を呈する。基底面はほぼ平坦で標高6.428~6.445mを測り, 溝は北西(N-49°-W)から屈曲し西北西(N-78°-W)を向く。埋土は, 地山(黄褐色(2.5Y5/4)シルト)の小ブロックと砂を含む黒褐色(7.5YR2/2~3/2)シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

**SD-450**

調査区南西部, SD-449の西側で検出した短い東西溝である。検出長2.99m, 幅約0.52m, 深さ約4cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。基底面はほぼ平坦で標高6.423~6.437mを測り, 溝は東北東(N-75°-E)を向く。埋土は砂礫混じりの暗褐色(10YR3/3)粘土ブロックを含む黒色(7.5YR1.7/1)粘土単一層であった。出土遺物は皆無であった。

⑤ 畝状遺構

畝地跡と考えられるもので, 屋敷跡内で1列, 屋敷跡外で10列認められた。特に, 屋敷の西側, 調査区西部で顕著であった。

**SU-401**

調査区南東部で検出した3本単位の南北方向の畝状遺構で, 東側の間隔が広がっているのも本来は4本単位であったものと思われ, 畝間間隔は1.42m前後, 畝幅1.05m前後とみられる。幅は30~50cm, 深さ1~8cmを測り, 最大長は4.60mである。主軸方向はN-9~22°-Eを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は, 地山(にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト)の土粒を若干含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。遺物は出土しなかった。

**SU-402**

調査区中央部南側, SU-403を切った形で検出した3本単位の南北方向の畝状遺構で, 西側の間隔が広がっているのも本来は4本単位であったものと思われ, 畝間間隔は0.76m前後, 畝幅0.45m前後とみられる。幅は20~55cm, 深さ2~9cmを測り, 最大長は6.60mである。主軸方向はN-9°-E~N-1°-Wを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は, 地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の小ブロックを含む黒褐色(10YR2/2)シルトであった。遺物は出土しなかった。

**SU-403**

調査区中央部南側, SU-402に掘り込まれた形で検出した3本単位の東西方向の畝状遺構で, 南側の間隔が広がっているのも本来は4本単位であったものと思われ, 畝間間隔は1.50~2.00m, 畝幅0.90~1.60mとみられる。幅は20~55cm, 深さ2~8cmを測り, 最大長は3.25mである。主軸方向は概ねN-82°-Wを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は, 地山(にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト)のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。遺物は出土しなかった。

**SU-404**

調査区中央部北側の屋敷内, SB-408に掘り込まれた形で検出した5本単位の東西方向の畝状遺構で, 畝間間隔は0.65~1.25m, 畝幅0.30~0.95mとみられる。幅は22~45cm, 深さ1~6cmを測り, 最大長は4.05mである。主軸方向は概ねN-75°-Wを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は, 地山(にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト)のブロックを多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。遺物は出土しなかった。

**SU-405**

調査区中央部北西寄り北壁沿いで検出した8本の南北方向の畝状遺構で, 畝間が狭いことから掘

り返しが行われたとみられ、本来は4本単位であったものと考えられる。畝間間隔はいずれも0.65～1.15m、畝幅0.30～0.80mとみられる。幅は25～36cm、深さ1～5cmを測り、最大長は1.50mである。主軸方向はN-8～11°-Eを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は、地山(にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト)の土粒を少量含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。遺物は出土しなかった。

#### SU-406

調査区中央部西寄りで見出した4本単位の東西方向の畝状遺構で、北端の畝間は途切れるが本来は一つであったものと考えられ、畝間間隔は0.58m前後、畝幅0.30m前後とみられる。幅は20～40cm、深さ1～3cmを測り、最大長は3.80mである。主軸方向はN-73～79°-Wを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は、地山(にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト)の土粒を少量含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。遺物は出土しなかった。

#### SU-407

調査区中央部西寄り、SU-406の西側で見出した2本単位の南北方向の畝状遺構で、西側の畝間は掘方が認められないものの鋤跡が遺存しており、本来は畝間があったものと考えられる。畝間間隔は3.93m前後、畝幅3.55m前後とみられる。幅は30～42cm、深さ2～3cmを測り、最大長は5.10mである。主軸方向は概ねN-20°-Eを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は、地山(にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト)の小ブロックを含む黒褐色(10YR2/2)シルトであった。遺物は出土しなかった。

#### SU-408

調査区西部北寄りで見出した約30本単位の南北方向の畝状遺構で、途切れる部分もみられるが、鋤跡などから同一のものと判断される。南側で見出されたSU-410とはほぼ同じ方向を示しており、関連性がありそうである。畝間間隔は0.65m前後、畝幅0.36m前後とみられる。幅は12～40cm、深さ1～6cmを測り、最大長は8.10mである。主軸方向はN-1～10°-Eを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は、地山(にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト)の土粒を少量含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。遺物は出土しなかった。

#### SU-409

調査区西端部北寄りで見出した約25本単位の東西方向の畝状遺構で、途切れる部分もみられるが、鋤跡などから同一のものと判断される。SU-408とはほぼ直行した形となる。畝間間隔は0.48m前後、畝幅0.27m前後とみられる。幅は13～40cm、深さ1～7cmを測り、最大長は4.25mである。主軸方向はN-67～78°-Wを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は、地山(にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト)の土粒を少量含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。遺物は出土しなかった。

#### SU-410

調査区西部で見出した約30本単位の南北方向の畝状遺構で、途切れる部分もみられるが、鋤跡などから同一のものと判断される。北側のSU-408とはほぼ同じ方向を示しており、関連性がありそうである。畝間間隔は0.51m前後、畝幅0.23m前後とみられる。幅は12～50cm、深さ1～4cmを測り、最大長は5.70mである。主軸方向はN-6～12°-Eを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は、地山(にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト)の土粒を少量含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。遺物は出土しなかった。

#### SU-411

調査区西部南寄り、SD-440の西側で見出した3本単位の東西方向の畝状遺構で、南側の間隔が広がっているため本来は4本単位であったものと思われ、畝間間隔は0.58m前後、畝幅0.33m前後と

みられる。幅は18~41cm, 深さ1~7cmを測り, 最大長は2.40mである。主軸方向は概ねN-79°-Eを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は, 地山(黒褐色(10YR3/2)シルト)の土粒を含む黒褐色(10YR2/2)シルトであった。遺物は出土しなかった。

⑥ ピット

屋敷跡を中心に検出され, その多くが掘立柱建物跡などの柱穴と考えられ, 総数は1,155個であった。この内図示できた遺物が出土したピットについては遺物観察表のとおりである。

なお, 4130の土師質土器はP-404, 4131の土師質土器はP-402, 4132の叩石はP-405, 4133の砥石はP-401, 4134の砥石はP-403からそれぞれ出土している。

出土遺物

土師質土器(図3-219 4130・4131)

4130は小杯で, 成形技法はB技法となり, 底部の切り離しは回転糸切りによる。体部は内湾気味に上がり, 内面にはロクロ目が残る。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

4131は小皿で, 成形技法はA技法とみられ, 底部の切り離しは回転糸切りにより, 底部外側面は未調整となる。胎土は精良で, 細粒砂から中粒砂を若干含む。

石製品(図3-219 4132~4134)

4132は叩石で, 扁平な楕円形を呈し, 側面に敲打痕が残る。石材は中粒砂岩である。

4133と4134は砥石である。4133は立方体に成形されたもので, 各面に使用痕が残る。石材は礫岩である。4134は河原石を使用したもので, 三面に使用痕が残る, 側面にはタールが付着する。石材は細粒砂岩である。

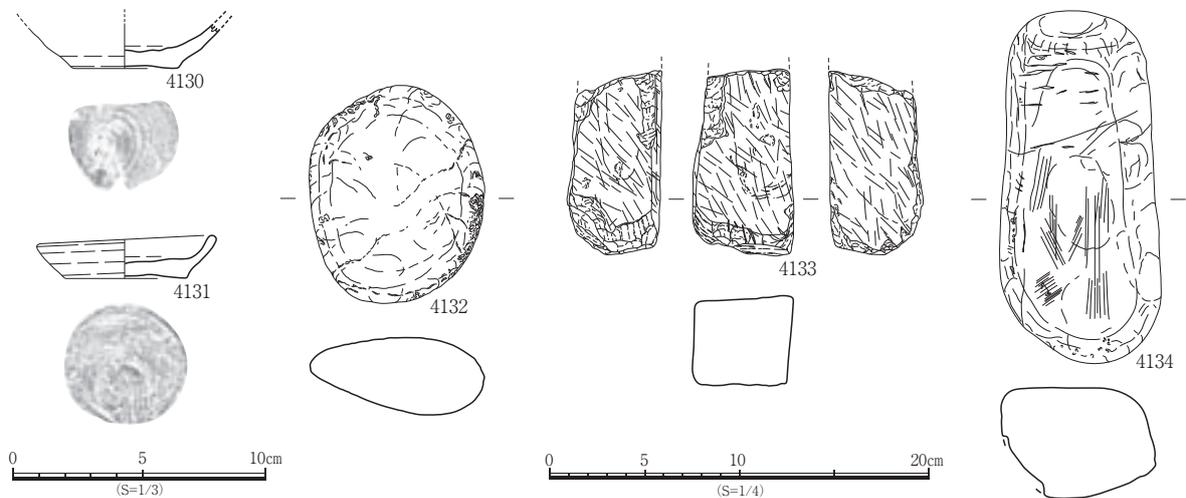


図3-219 P-401~405出土遺物実測図

(4) 近世以降

散発的に8基の土坑を検出した。この内, 埋土に土佐では「ハンダ」と呼ぶ「三和土」が混入したものもみられる。

① 土坑

SK-430

調査区東部で検出した不整形の土坑である。長径3.04m, 短径2.94m, 深さ15cmを測り, 長軸方

向はN-88°-Wを示す。断面形はU字形を呈す。埋土は砂礫を多く含む灰黄褐色(10YR4/2)シルト単一層であった。遺物は出土しなかった。

**SK-431**

調査区南東部で検出した土坑で、東と南は調査区外にあるが平面形は本来楕円形であったものとみられる。長径1.70m以上、短径1.08m以上、深さ60cmを測り、長軸方向はN-48°-Eを示す。断面形は箱形を呈す。埋土は灰黄褐色(10YR4/2)シルトを主体に砂礫の含有量と大きさにより3層に分層される。出土遺物には瓦2点、陶器と磁器各1点がみられたが、図示できるものはなかった。

**SK-432 (図3-220)**

調査区南東部で検出した土坑で、南側は調査区外にあるが平面形は本来楕円形であったものとみられる。長径2.10m、短径1.31m以上、深さ58cmを測り、長軸方向はN-72°-Eを示す。断面形は箱形を呈す。埋土は灰黄褐色(10YR4/2)シルトを主体に砂礫の含有量と大きさにより上下2層に分層される。出土遺物には須恵器1点、瓦8点、陶器2点がみられたが、図示できるものはなかった。

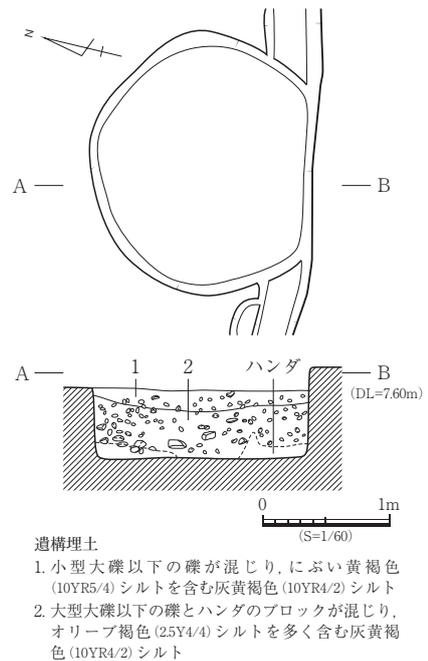


図3-220 SK-432

**SK-433**

調査区南東部で、SK-402を掘り込んだ形で検出した土坑で、南側は調査区外にあるが平面形は本来方形であったものとみられる。長辺2.08m、短辺0.56m、深さ7cmを測り、長軸方向はN-86°-Eを示す。断面形は逆台形を呈す。埋土は灰黄褐色(10YR4/2)シルトに暗褐色(10YR3/3)シルトのブロックを僅かに含むものであった。遺物は出土しなかった。

**SK-434**

調査区中央部で検出したほぼ円形の土坑である。長径1.35m、短径1.26m、深さ26cmを測る。断面形は箱形を呈す。埋土は黒褐色(2.5Y3/2)シルトに砂礫と三和土のブロックを多く含むものであった。出土遺物には図示した石製品1点(4135)がみられた。

出土遺物

石製品(図3-221 4135)

立方体に成形された砥石で、四面に使用痕が残り、両端は摩滅する。石材は細粒砂岩である。

**SK-435 (図3-222)**

調査区中央部、SK-434の北側で検出した不整形の土坑である。土坑墓とみられ、長辺1.30m、短辺0.85m、深さ13cmを測り、長軸方向はN-10°-Eを示す。断面形は逆台形を呈す。埋土は灰黄褐色(10YR4/2)シルトに黒褐色(10YR3/2)シルトのブロックを含むものであった。遺物は出土しなかった。

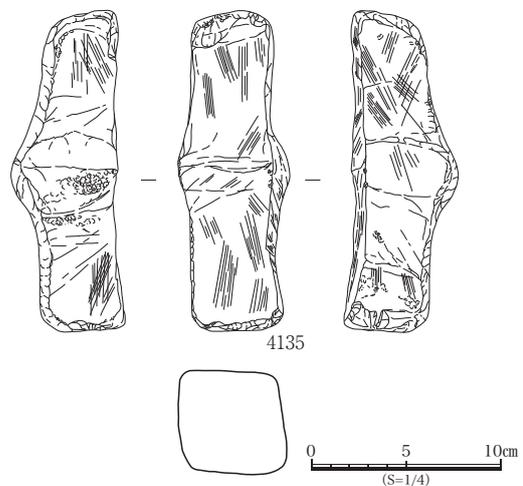


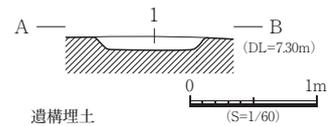
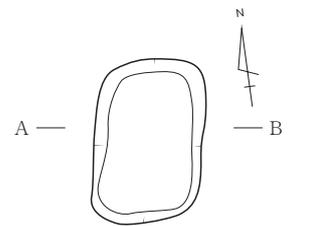
図3-221 SK-434出土遺物実測図

**SK-436** (図3-223)

調査区西部で検出した方形の土坑である。SK-435同様土坑墓とみられ、長辺1.30m、短辺0.73m、深さ39cmを測り、長軸方向はN-74°-Wを示す。断面形は箱形を呈す。埋土は灰黄褐色(10YR4/2)シルトに暗褐色(10YR3/3)シルトのブロックを含むものであった。遺物は出土しなかった。

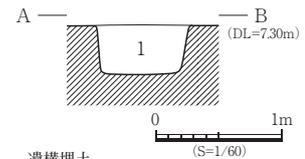
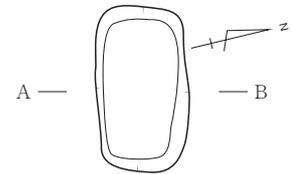
**SK-437**

調査区西端部で検出した不整形の土坑で、南東側に楕円形の落ち込みがみられる。長辺2.18m、短辺1.12m、深さ22cmを測り、長軸方向はN-45°-Wを示す。断面形はU字形を呈す。埋土は灰黄褐色(10YR4/2)シルトに砂礫と地山(黒褐色(10YR2/2~3/2)シルトから黄褐色(2.5Y5/3)シルト)のブロックを多く含むものであった。出土遺物には土師質土器1点がみられたが、図示できるものはなかった。



遺構埋土  
1. 黒褐色(10YR3/2)シルトのブロックを含む灰黄褐色(10YR4/2)シルト

図3-222 SK-435



遺構埋土  
1. 暗褐色(10YR3/3)シルトのブロックを含む灰黄褐色(10YR4/2)シルト

図3-223 SK-436

### 3. V区

西野々遺跡の西端部に位置し、検出された遺構も弥生時代の溝にみられるように最終部は網状流路化し、消滅する。中世以降についても柱穴すらほとんどみられず、復元された建物跡はなく、遺跡縁辺部の様相を呈する。このことは、地形の反映とみられ、東端と西端の比高差は、中世以降で1.1m、弥生時代で1.8mと、大きく東から西に傾斜する。

なお、調査区は3ヵ所に分れており、東の調査区をV-1区、西の調査区をV-2区、南の調査区をV-3区と呼称する。

#### (1) 弥生時代

Ⅲ区から続く溝を中心に、土坑3基、溝跡10条、性格不明遺構1基を検出した。

##### ① 土坑

散在した3基の土坑をV-2区とV-3区で検出した。

##### SK-501 (図3-224)

V-2区東部、SD-501・504を掘り込んだ形で検出した不整楕円形の土坑で、東側と北西側に段部を有する。長径2.82m、短径1.82m、深さ45cmを測り、長軸方向はN-32°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は、黒褐色(10YR3/1)シルト質粘土単一層であった。出土遺物には弥生土器72点がみられ、内2点(5095・5096)が図示できた。

##### 出土遺物

##### 弥生土器(図3-225 5095・5096)

5095は壺で、胴部外面にハケ調整の後に、6本単位のクシ描波状文と簾状文を施す。内面には指ナデ調整とナデ調整がみられる。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

5096は甕で、外反する口縁部にはヨコナデ調整を施す。内面にはハケ目が残る。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

##### SK-502 (図3-226)

V-3区西部、SK-503の東隣で検出した不整形の土坑である。長辺1.34m、短辺1.08m、深さ7cmを測り、長軸方向はN-49°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は円礫と小型大礫以下の風化礫を含む砂混じりの黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト単一層であった。遺物は出土しなかった。

##### SK-503 (図3-227)

V-3区西部、SK-502の西隣で検出した不整楕円形の土坑である。長径1.18m、短径0.49m、深さ10~11cmを測り、長軸方向はN-88°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は円礫と小型大礫以下の風化礫を含む砂混じりの黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト単一層であった。遺物は出土しなかった。

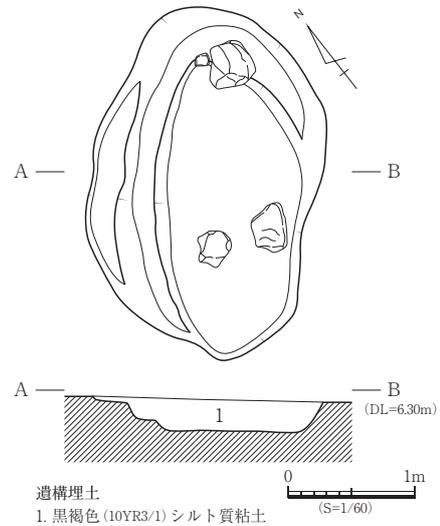


図3-224 SK-501

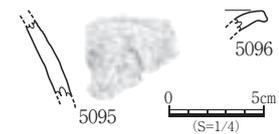


図3-225 SK-501  
出土遺物実測図

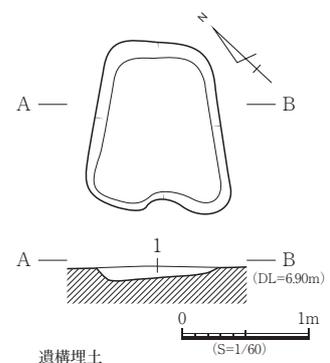
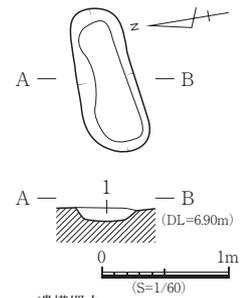


図3-226 SK-502

② 溝跡

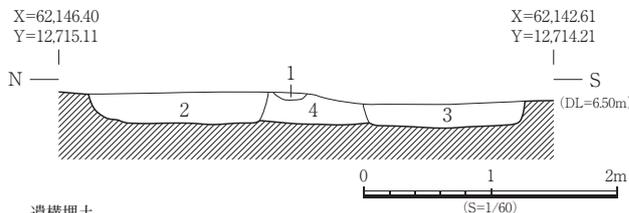
SD-501 (図3-228・233)

V-1区からV-2区で検出した東西溝で、Ⅲ区で確認したSD-3002、Ⅳ区で確認したSD-401と同一のものである。V区ではカーブを描きながら西流し、終端は網状流路となり消滅する。また、溝はSD-502、SK-501に掘り込まれていた。検出長は125.90m、幅1.45~4.50m、深さは8~52cmを測り、断面形は逆台形ないしU字形を呈する。基底面は東(6.339m)から西(6.076m)に向って傾斜し、主軸方向は西北西(N-63°-W)に延びた後、西(N-97°-W)に曲がり、網状流路化する。埋土は黒色(10YR2/1)粘土質シルトを主体に砂と中礫の混じり度合いにより2層に分層される箇所もある。出土遺物には弥生土器149点があり、内11点(5097~5107)が図示できた。

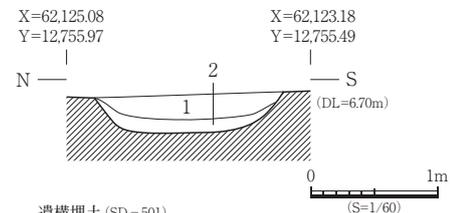


遺構埋土  
1. 円礫と小型大礫以下の風化礫を含む砂混じりの黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト

図3-227 SK-503



遺構埋土  
1. 暗赤褐色(5YR3/3)粘土質シルト(SD-533)  
2. 砂混じりの黒褐色(7.5YR3/2)粘土質シルト(SD-502)  
3. 粗粒中礫以下の礫を含む砂混じりの黒色(5Y2/1)粘土質シルト(SD-501)  
4. 砂混じりの黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト(SD-504)



遺構埋土(SD-501)  
1. 粗粒中礫以下の礫を僅かに含む黒色(10YR2/1)粘土質シルト  
2. 極粗粒中礫以下の礫を含む黒色(10YR2/1)粘土質シルト

図3-228 SD-501・502・504・533

出土遺物

弥生土器(図3-229 5097~5107)

5097と5098は壺で、5097の上胴部外面には棒状工具による刺突文と2条のヘラ描沈線が残る。内面にはハケ調整が施される。胎土には細粒砂から極細粒中礫を多く含む。5098の胴部外面にはクシ描波状文(4本分が残存)と6本単位のクシ描直線文を施し、その下にはハケ目が残る。内面には指ナデ調整とナデ調整を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

5099~5103は甕で、5099は、口縁部が短く外反し、端部は丸い。胎土には細粒砂から粗粒砂を若干含む。5100は、口頸部が緩やかに外反し、端部を丸く仕上げる。口縁部にはヨコナデ調整、頸部にはナデ調整を施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を多く含む。5101は、口縁部が外反し、端部を丸く仕上

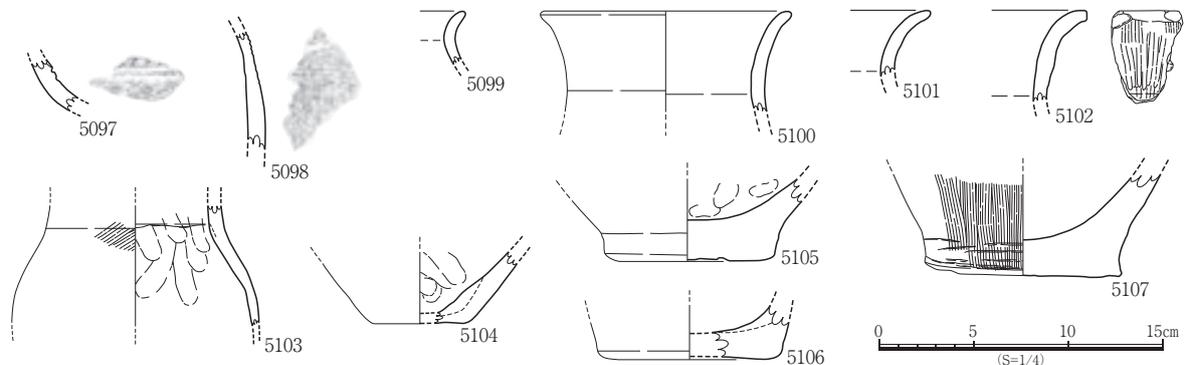


図3-229 SD-501出土遺物実測図

3. V区 (1) 弥生時代

げる。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。5102は、外傾する頸部から口縁部が短く外反し、端部は平面をなす。外面にはハケ調整の後にヘラ磨きを加える。胎土には細粒砂から極細粒中礫を多く含む。

5103は甕の頸部から上胴部で、頸部外面にハケ目が残る、内面には指ナデ調整とナデ調整を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

5104～5107は底部で、大半は甕とみられる。いずれも平底で、外面には5107がハケ調整を施す以外ナデ調整で仕上げる。また、5107の外面には成形の際のヘラ状工具による圧痕が残る。内面には指ナデ調整ないしナデ調整を施し、指押えの痕が5104と5105に残る。胎土には、5104が細粒砂から極粗粒砂を多く含む以外、細粒砂から極細粒中礫を多く含む。

**SD-502** (図3-228・230・241)

V-1区からV-2区で検出した東西溝で、Ⅲ区で確認したSD-3003、Ⅳ区で確認したSD-402と同一のものである。V区では西流し、終端は網状流路となり消滅する。また、溝はSD-501・503・504を掘り込んでいた。検出長は140.9m、幅0.81～5.20m、深さは9～56cmを測り、断面形は逆台形ないしU字形を呈する。基底面は東(6.430m)から西(5.760m)に向って傾斜し、主軸方向は北北西(N-25°-W)に延びた後、屈曲して西(N-81°-W)、さらに曲り西(N-95°-W)へ延び、網状流路化する。埋土は黒褐色(7.5YR3/2～10YR2/2)粘土質シルトを主体に砂が混じる箇所や下層にシルト混じりの黄褐色(2.5Y5/4)砂が堆積する箇所がみられた。出土遺物には弥生土器123点があり、内8点(5108～5115)が図示できた。

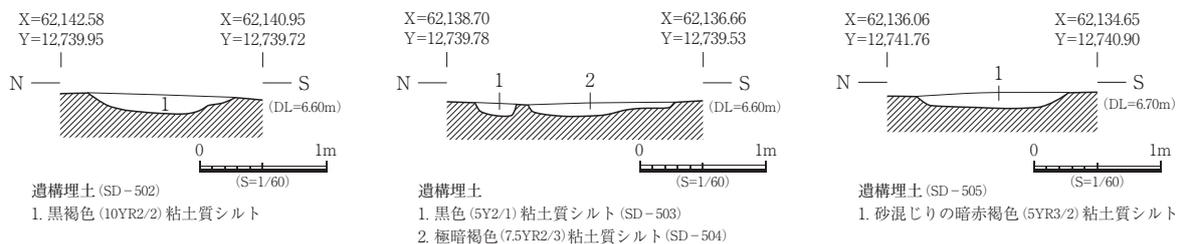


図3-230 SD-502～505

**出土遺物**

**弥生土器**(図3-231 5108～5115)

5108は壺で、外傾する頸部から口縁部は大きくさらに外傾し、端部は丸い。口縁部にはヨコナデ調整、頸部外面にはナデ調整を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。5109も壺で、丸い胴部外面にはタタキの後にハケ調整を加える。内面には、指ナデ調整とナデ調整を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

5110～5113は甕で、5110は如意形口縁となり、口縁端部にはヘラ状工具による刻目、口頸部外面にはハケ調整、頸部外面には1条のヘラ描沈線を施す。また、内面にもハケ目が残る。胎土には細粒砂から極細粒中礫を多く含む。5111は頸部に径6mmの円孔が焼成前に穿孔されたもので、倒卵形の胴部にくの字形をなす口縁部がつき、口縁端部には擬凹線文が施される。頸部から中胴部外面にはハケ調整、下胴部にはヘラ磨き、胴部内面には肩部に指押えとナデ調整、中胴部以下にヘラ削りを施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。5112は、口縁部が外傾し、端部は丸い。口縁部上半にはヨコナデ調整、内面にはハケ調整、外面にはハケ調整の後にナデ調整を加える。胎土には細粒砂から極

粗粒砂を比較的多く含む。5113は、口縁部が短く外反するもので、器面にはヨコナデ調整を施す。胎土には細粒砂から極細粒中礫を多く含む。

5114は壺の中胴部から底部とみられるもので、外面にはタタキ目、内面には指ナデ調整とヘラナデ調整を施す。5115は甕で、外面にはタタキの後にハケ調整、内面には指ナデ調整の後にハケ調整を加え、外面には煤が付着する。いずれも胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

**SD-503** (図3-230・233)

V-1区からV-2区で検出した東西溝でSD-502に掘り込まれ、SD-504・506を切っているが、検出状況及びSD-501の北側でほぼ並走していることからSD-501から溢れた水によって形成されたものではなかろうか。また、同じことがSD-504~507及びSX-501についても言えそうである。検出長は39.76m、幅0.30~0.91m、深さは10~27cmを測り、断面形は逆台形ないしU字形を呈する。基底面は東(6.424m)から西(6.311m)に向って傾斜し、主軸方向は西北西(N-68°-W)に延びる。丁度、等高線の谷部に沿った形となる。埋土は黒色(5Y2/1)粘土質シルト単一層であった。遺物は出土しなかった。

**SD-504** (図3-228・230・233)

V-1区からV-2区で検出した東西溝で、SD-501~503、SK-501に掘り込まれ、SD-506を切っているが、検出状況及びSD-501の北側でほぼ並走していることからSD-501から溢れた水によって

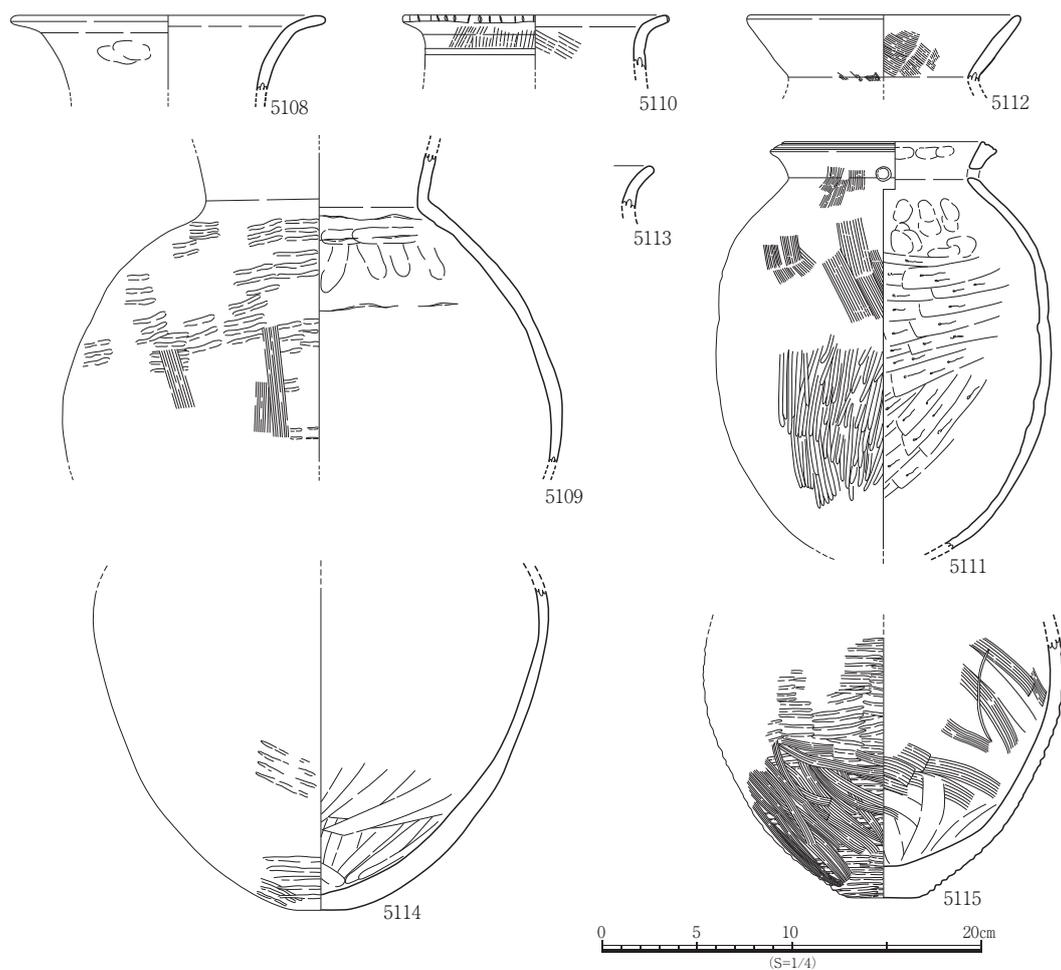


図3-231 SD-502出土遺物実測図

3. V区 (1) 弥生時代

形成されたものではなかろうか。検出長は39.84m，幅1.50～5.20m，深さは10～36cmを測り，断面形は逆台形ないしU字形を呈する。基底面は東(6.284m)から西(6.112m)に向って傾斜し，主軸方向は西北西(N-70°-W)に延びる。SD-503同様，等高線の谷部に沿った形となる。埋土は極暗褐色(7.5YR2/3)～黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトで砂が混じった箇所もあった。出土遺物には弥生土器66点がみられ，内3点(5116～5118)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-232 5116～5118)

いずれも甕で，5116は，口縁部が外傾し，端部は細い。5117は，丸味のある胴部から口縁部が外反し，端部は平面をなす。外面にはタタキの後にハケ調整を加え，内面にはナデ調整とハケ調整を施す。5118は，平らな底部から胴部が内湾気味に立ち上がる。外面にはハケ調整，内面にはヘラ削り調整を施す。いずれも胎土には細粒砂から極細粒中礫を多く含む。

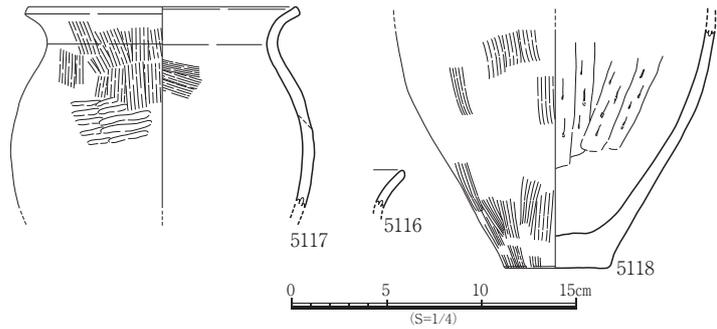


図3-232 SD-504出土遺物実測図

SD-505 (図3-230)

V-1区，SD-501に沿った形で検出した東西溝で，SD-506に掘り込まれる。検出状況及びSD-501にほぼ並走していることからSD-501から溢れた水によって形成されたものではなかろうか。検出長は15.00m，幅0.90～1.60m，深さは10～13cmを測り，断面形は概ね逆台形を呈する。基底面は東(6.426m)から西(6.338m)に向って傾斜し主軸方向は概ね北西(N-53°-W)に延びる。SD-503同様，等高線の谷部に沿った形となる。埋土は砂混じりの暗赤褐色(5YR3/2)粘土質シルト単一層であった。遺物は出土しなかった。

SD-506 (図3-233)

V-1区，SD-501に沿った形で検出した東西溝で，SD-501・503・504・507・508に掘り込まれる。検出状況及びSD-501にほぼ並走していることからSD-501から溢れた水によって形成されたものではなかろうか。検出長は41.30m，幅2.20～5.26m，深さは6～30cmを測り，断面形は概ね逆台形を呈する。基底面は東(6.290m)から西(6.258m)に向って傾斜し，東端では鍵状に屈曲するが，主軸方向は

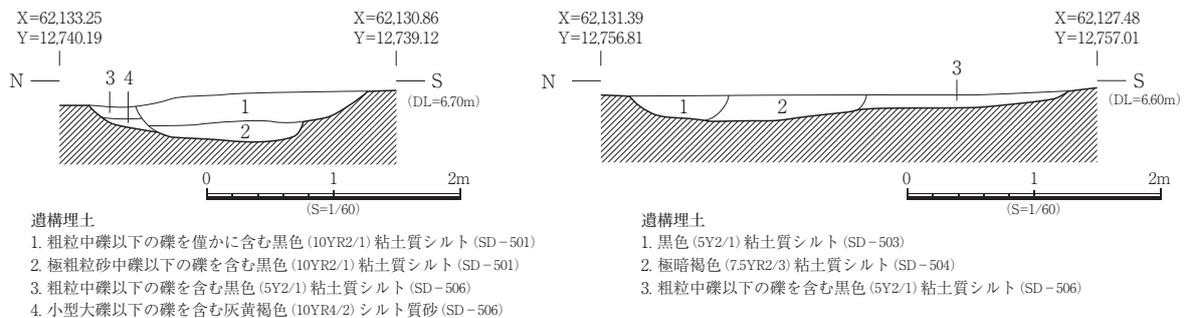


図3-233 SD-501・503・504・506

概ね西(N-81°-W)に延びる。SD-503同様、等高線の谷部に沿った形となる。埋土は粗粒中礫以下の礫を含む黒色(5Y2/1)粘土質シルトで、下層に小型大礫以下の礫を含む灰黄褐色(10YR4/2)シルト質砂の堆積が認められた部分もあった。遺物は出土しなかった。

**SD-507**

V-1区、SD-506を切った形で検出した浅く短い東西溝である。検出状況及びSD-501にほぼ並走していることからSD-501から溢れた水によって形成されたものではなかろうか。検出長は3.87m、幅0.26~0.50m、深さは3~7cmを測り、断面形は概ね逆台形を呈する。基底面は東(6.654m)から西(6.609m)に向って若干傾斜し、主軸方向は概ね北西(N-53°-W)に延びる。埋土は極暗褐色(7.5YR2/3)粘土質シルト単一層であった。遺物は出土しなかった。

**SD-508** (図3-234)

V-1区、SD-506を切った形で検出した短い南北溝で、東側に平場がある。検出状況及びSD-506の東壁に沿っていることからSD-506と同じような性格ではなかろうか。検出長は5.84m、幅0.28~0.95m、深さは4~24cmを測り、断面形は概ね逆台形を呈する。基底面は南(6.497m)から北(6.485m)に向って若干傾斜し、主軸方向は概ね北東(N-37°-E)を向く。埋土は砂混じりの暗赤褐色(5YR3/2)粘土質シルト単一層であった。遺物は出土しなかった。

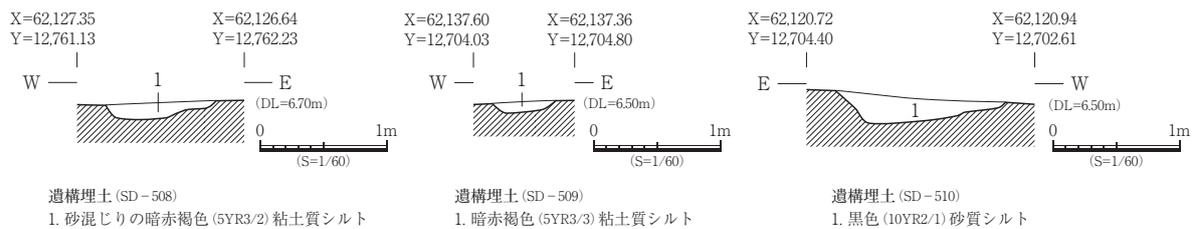


図3-234 SD-508~510

**SD-509** (図3-234)

V-2区、SD-501を切った形で検出した短い南北溝である。検出状況からSD-501に関連していることも考えられる。検出長は3.83m、幅0.30~0.60m、深さは4~15cmを測り、断面形は概ね逆台形を呈する。基底面は南(6.291m)から北(6.253m)に向って若干傾斜し、主軸方向は概ね北東(N-26°-E)を向く。埋土は暗赤褐色(5YR3/3)粘土質シルト単一層であった。出土遺物には弥生土器27点がみられ、内3点(5119~5121)が図示できた。

**出土遺物**

**弥生土器** (図3-235 5119~5121)

いずれも甕で、5119は、やや丸味のある胴部から口縁部が外反気味にたち上がり、端部は浅い凹面をなす。外面にはハケ調整の後に部分的にヘラ磨きを施し、内面には指ナデ調整とナデ調整を行う。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

5120と5121は同形態の底部で、胴部は厚みのある平底の底部か

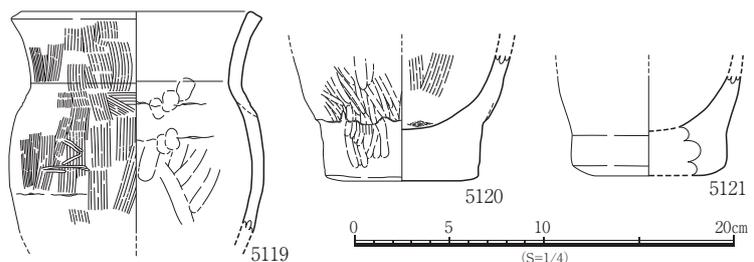


図3-235 SD-509出土遺物実測図

ら内湾気味に立ち上がる。5120の外面にはナデ調整とヘラ磨き、内面にはハケ調整の後にナデ調整を施す。5121は内面にナデ調整の痕跡が残る。いずれも、胎土は細粒砂から極細粒中礫を多く含む。

**SD-510** (図3-234)

V-2区南東部, 南壁際で検出した南北溝で, 北側にやや広い落ち込みがみられる。検出長は4.97m, 幅0.39~1.42m, 深さは3~19cmを測り, 断面形は概ね逆台形を呈する。基底面は南(6.274m)から北(6.223m)に向って若干傾斜し, 主軸方向は北(N-1°-E)を向く。埋土は黒色(10YR2/1)砂質シルト単一層であった。出土遺物には石製品1点がみられたが, 図示できなかった。

③ 性格不明遺構

**SX-501**

V-2区東部で検出した不整形の遺構で, SD-501に切られる。形状が不明確なため性格不明遺構として報告するが, 検出位置やその状況からすると, SD-501に関連する可能性が強く, SD-501から溢れた水によって形成されたものではなかろうか。長辺7.70m, 短辺5.30m, 深さ10~26cmを測り, 断面形は概ね舟底形を呈する。埋土は極粗粒中礫以下の礫を部分的に含む黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一層であった。遺物は出土しなかった。

(2) 中世

畠地とみられる畝状遺構とそれらを区画するとみられる溝跡を中心に確認した。この時代も建物跡の存在を想定さず遺構は全く検出されなかった。確認された遺構は, 土坑8基, 溝跡26条, 畝状遺構6列, 性格不明遺構1基とピット1個であった。

① 土坑

散在し, かつ形状もはっきりしないものが大半を占め, その性格については判然としない。

**SK-504**

V-1区東部, SD-513に切られた形で検出した不整楕円形の土坑である。長径11.01m, 短径3.28m, 深さ3~24cmを測り, 長軸方向はN-21°-Wを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は黒褐色(7.5YR3/2)シルト質粘土単一層であった。出土遺物には土師質土器1点がみられたが, 図示できなかった。

**SK-505**

V-1区北西部で検出した円形の土坑である。長径1.02m, 短径0.98m, 深さ9cmを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は粗粒中礫を含む浅黄色(2.5Y7/3)砂質シルト単一層であった。遺物は出土しなかった。

**SK-506** (図3-236)

V-2区北東部で検出した不整形の土坑である。長辺1.59m, 短辺0.88m, 深さ3~11cmを測り, 長軸方向はN-24°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山(黄色(2.5Y8/6)シルト質砂)のブロックを含む暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルト単一層であった。遺物は出土しなかった。

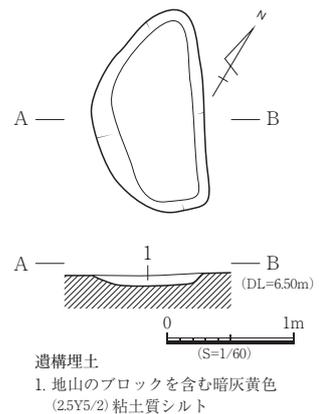


図3-236 SK-506

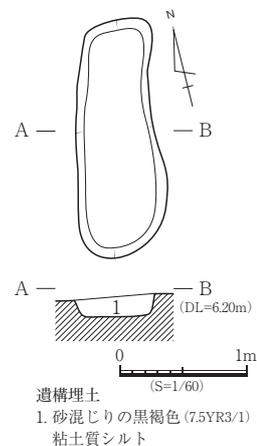
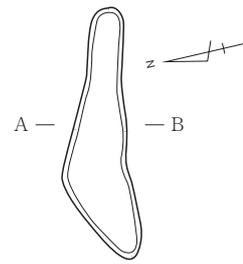


図3-237 SK-507

**SK-507** (図3-237)

V-2区中央部で検出した不整形の土坑である。長辺1.87m, 短辺0.71m, 深さ11~21cmを測り, 長軸方向はN-15°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は砂混じりの黒褐色(7.5YR3/1)粘土質シルト単一層であった。遺物は出土しなかった。



**SK-508**

V-3区中央部で検出した浅い不整形の土坑である。長辺3.48m, 短辺1.92m, 深さ1~8cmを測り, 長軸方向はN-83°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は小型大礫以下の礫と地山(淡黄色(2.5Y8/4)砂質シルト)のブロックを含む黒褐色(7.5YR3/2)シルト質粘土単一層であった。遺物は出土しなかった。

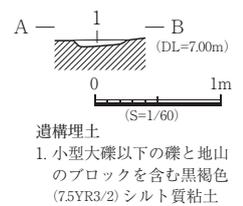


図3-238 SK-509

**SK-509** (図3-238)

V-3区中央部, SK-508の西隣で検出した浅い不整形の土坑である。長辺2.02m, 短辺0.53m, 深さ3~7cmを測り, 長軸方向はN-81°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は小型大礫以下の礫と地山(淡黄色(2.5Y8/4)砂質シルト)のブロックを含む黒褐色(7.5YR3/2)シルト質粘土単一層であった。遺物は出土しなかった。

**SK-510**

V-2区中央部西寄りで検出した浅い不整形の土坑である。長辺2.52m以上, 短辺0.84m, 深さ3~6cmを測り, 長軸方向はN-19°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は砂混じりの黒褐色(7.5YR3/1)粘土質シルト単一層であった。遺物は出土しなかった。

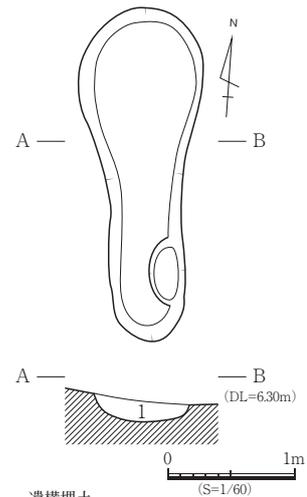


図3-239 SK-511

**SK-511** (図3-239)

V-2区中央部西寄り, SD-521に掘り込んだ形で検出した不整楕円形の土坑で, 南東壁際にピット状の落ち込みがみられた。長径2.65m, 短径0.97m, 深さ14~21cmを測り, 長軸方向はN-4°-Wを示す。断面形はU字形を呈する。埋土は砂混じりのにぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト単一層であった。出土遺物には図示した土師質土器1点(5122)のみであった。

出土遺物

土師質土器(図3-240 5122)

杯で, 成形技法はB技法による。底部の切り離しは回転糸切りで, 内面にはロクロ目が残る。胎土は精良で, 細粒砂から中粒砂を若干含む。

② 溝跡

**SD-511** (図3-241)

V-1区北東部, SD-512を切った形で検出した南北溝で, 北側が途切れるが同一のものとみられ, 北と南はそれぞれ調査区外に続く。検出長は17.59m, 幅0.38~0.52m, 深さは5~28cmを測り, 断面形は逆台形ないしU字形を呈する。基底面は北(6.629m)から南(6.470m)に向って傾斜し, 主軸方向は, 北側が南南東(N-166°-E), 南側が南(N-175°-W)から途中で東向き(南(N-174°-E))に曲る。埋土は地

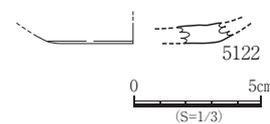


図3-240 SK-511  
出土遺物実測図

3. V区 (2) 中世

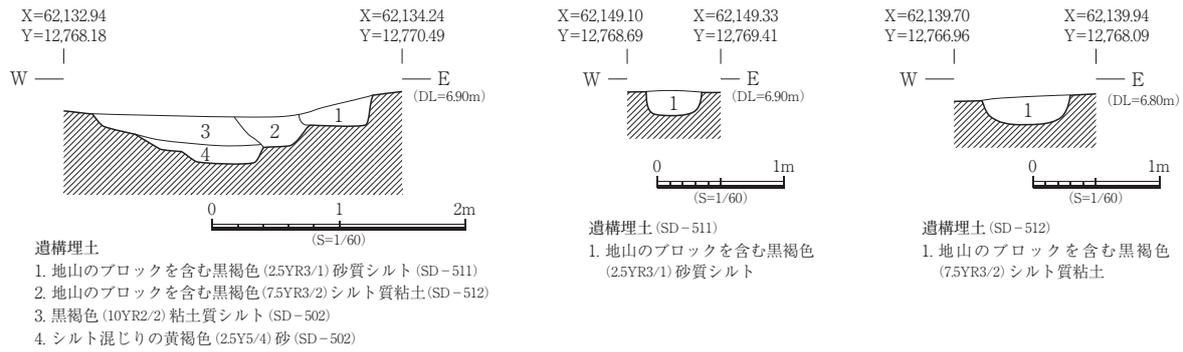


図3-241 SD-502・511・512

山(淡黄色(2.5Y8/4)砂質シルト)のブロックを含む黒褐色(2.5YR3/1)砂質シルト単一層であった。出土遺物には弥生土器2点, 土師質土器10点, 瓦質土器1点がみられ, 土師質土器1点(5123)と瓦質土器1点(5124)が図示できた。

土師質土器(図3-243 5123)

杯で, 成形技法はB技法とみられ, 口縁端部は丸い。口縁部から内面にかけて回転ナデ調整, 体部外面は未調整となる。胎土は精良で, 細粒砂から中粒砂を若干含む。

瓦質土器(図3-243 5124)

三足鍋の脚で, 先端に向って細くなる。器面にはヘラナデ調整とナデ調整を施す。胎土には細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

SD-512(図3-241)

V-1区北東部, SD-513を掘り込み, SD-511・514に切られた形で検出した緩やかに曲がる南北溝で, 北と南はそれぞれ調査区外に続き, 南はIV区のSD-444に繋がるものとみられる。検出長は21.64m, 幅0.67~1.20m, 深さは22~43cmを測り, 断面形はU字形ないし逆台形を呈する。基底面は北(6.348m)から南(6.278m)に向って傾斜し, 主軸方向は概ね南南東(N-161°-E)に延びる。埋土は地山(淡黄色(2.5Y8/4)砂質シルト)のブロックを含む黒褐色(7.5YR3/2)シルト質粘土単一層であった。出土遺物には土師質土器7点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SD-513(図3-242)

V-1区北東部, SD-514を掘り込み, SD-512に切られた形で検出した南北溝で, 途中で途切れるが検出状況からすると同一のものと思われる。検出長は20.47m, 幅0.55~1.10m, 深さは5~18cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。基底面は北(6.552m)から南(6.359m)に向って傾斜し, 主軸方向は概ね南南西(N-154°-W)に延びる。埋土は地山(淡黄色(2.5Y8/4)砂質シルト)のブロックを含む黒褐色(7.5YR3/2)シルト質粘土単一層であった。出土遺物には弥生土器2点, 土師質土器17点がみられ, 土師

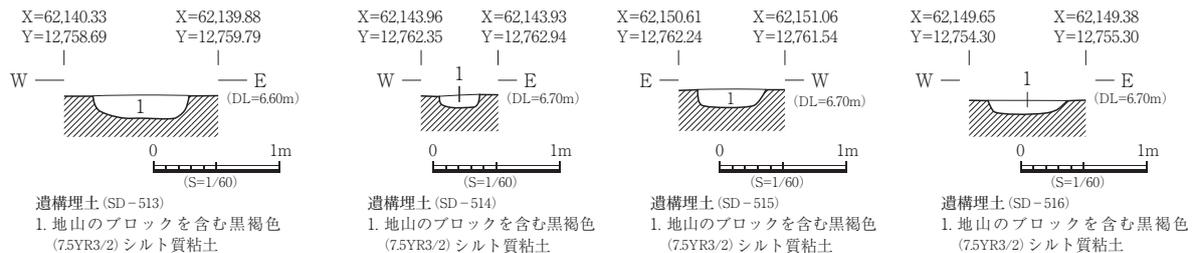


図3-242 SD-513~516

質土器3点(5125~5127)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-243 5125~5127)

5125は椀で、成形技法はA技法となり、底部は丸味があり、外面にはハの字形に開く高さ7mmの高台が付く。胎土は精良で、細粒砂から中粒砂を若干含む。

5126と5127は小皿で、成形技法はB技法となり、底部の切り離しは、5126が静止糸切り、5127が回転糸切りである。いずれも胎土は精良で、細粒砂から中粒砂を若干含む。

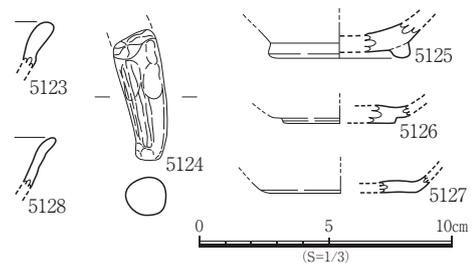


図3-243 SD-511・513・514出土遺物実測図

SD-514(図3-242)

V-1区北東部、SD-513に切られた形で検出した南北溝で、北は調査区外に続く。検出長は11.11m、幅0.26~0.50m、深さは6~12cmを測り、断面形は逆台形を呈する。基底面は北(6.544m)から南(6.437m)に向って傾斜し、主軸方向は概ね南(N-177°-W)に延びる。埋土は地山(淡黄色(2.5Y8/4)砂質シルト)のブロックを含む黒褐色(7.5YR3/2)シルト質粘土単一層であった。出土遺物には弥生土器1点、土師質土器1点がみられ、土師質土器1点(5128)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-243 5128)

杯で、成形技法はB技法とみられる。口縁部は細く、外傾し、端部は丸い。胎土は精良で、細粒砂から中粒砂を若干含む。

SD-515(図3-242)

V-1区北東部で検出した南北溝で、途中で途切れるが、検出状況から同一のものとみられ、北は調査区外に続く。検出長は6.18m、幅0.30~0.50m、深さは5~20cmを測り、断面形は逆台形を呈する。基底面は南(6.543m)から北(6.496m)に向って若干傾斜し、主軸方向は概ね北北東(N-18°-E)を向く。埋土は地山(淡黄色(2.5Y8/4)砂質シルト)のブロックを含む黒褐色(7.5YR3/2)シルト質粘土単一層であった。出土遺物には弥生土器1点、土師質土器3点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-516(図3-242)

V-1区北東部で検出した短い南北溝で、SU-505を掘り込む。検出長は3.99m、幅0.59~0.69m、深さは7~14cmを測り、断面形は逆台形を呈する。基底面は北(6.446m)から南(6.421m)に向って若干傾斜し、主軸方向は概ね南南西(N-160°-W)を向く。埋土は地山(淡黄色(2.5Y8/4)砂質シルト)のブロックを含む黒褐色(7.5YR3/2)シルト質粘土単一層であった。出土遺物には土師質土器2点がみられたが、図示できなかつた。

SD-517(図3-244)

V-1区東部で検出した比較的短い南北溝で、SD-518を掘り込む。検出長は7.38m、幅0.56~0.87m、深さは4~11cmを測り、断面形は逆台形を呈する。基底面は北(6.514m)から南(6.444m)に向って傾斜し、主軸方

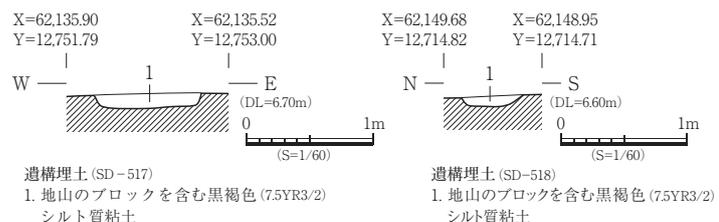


図3-244 SD-517・518

向は概ね南南西(N-162°-W)を向く。埋土は地山(淡黄色(2.5Y8/4)砂質シルト)のブロックを含む黒褐色(7.5YR3/2)シルト質粘土単一層であった。遺物は出土しなかった。

**SD-518** (図3-244)

V-1区東部からV-2区東部にかけて検出した細長い東西溝で、途切れ6条に分れるが、検出状況からみて同一のものとみられ、西は調査区外に続く。検出長は67.16m, 幅0.12~0.83m, 深さは2~15cmを測り、断面形は概ね逆台形を呈する。基底面は東(6.574m)から西(6.311m)に向って傾斜し、主軸方向は概ね西北西(N-72°-W)を向く。埋土は、東側では地山(淡黄色(2.5Y8/4)砂質シルト)のブロックを含む黒褐色(7.5YR3/2)シルト質粘土、西側では地山(黄色(2.5Y8/6)シルト質砂)のブロックを含む暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルトとなっていた。出土遺物には土師質土器3点がみられたが、図示できるものはなかった。

**SD-519** (図3-245)

V-1区中央部からV-2区中央部にかけて検出した東西溝で、V-2区で途切れる箇所もあるが、検出状況からみて同一のものとみられる。検出長は73.36m, 幅1.20~2.50m, 深さは12~22cmを測り、断面形は逆台形ないし舟底形を呈する。基底面は東(6.559m)から西(5.832m)に向って傾斜し、主軸方向は東側で西北西(N-75°-W)に延び、曲がって西(N-90°-W)に延びる。埋土は、東側で極暗褐色(7.5YR2/3)粘土質シルト、西側では粗粒中礫以下の礫と地山(浅黄色(5Y7/4)砂)の小ブロックを僅かに含む黒色(2.5Y2/1)シルト質粘土となっており、下層に地山(黄色(2.5Y8/6)シルト質砂)のブロックを含む黒色(2.5Y3/2)シルト質粘土の堆積が認められた箇所もある。出土遺物には弥生土器2点、土師質土器57点がみられ、土師質土器5点(5129~5133)が図示できた。

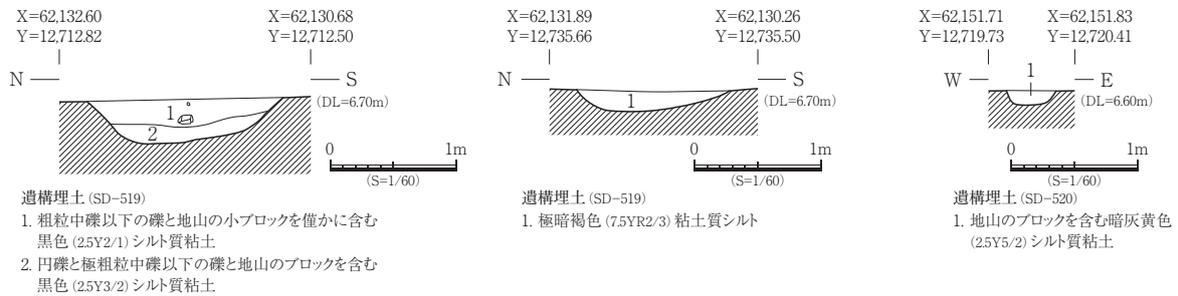


図3-245 SD-519・520

出土遺物

土師質土器(図3-246 5129~5133)

すべて杯の底部で、切り離しは回転糸切りによる。成形技法は5130・5132がA技法、それ以外がB技法となる。5133は底部が深い。いずれも胎土は精良で細粒砂から中粒砂を若干含む。

**SD-520** (図3-245)

V-2区北東部, SD-518 を切った形で検出した細長い南北溝で、北は調査区外に続く。検出長は7.76m, 幅0.28~0.40m, 深さは2~9cmを測り、断面形は概ね逆台形を呈する。基底面は北

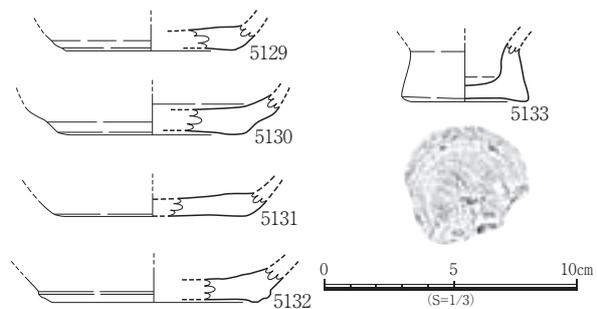


図3-246 SD-519出土遺物実測図

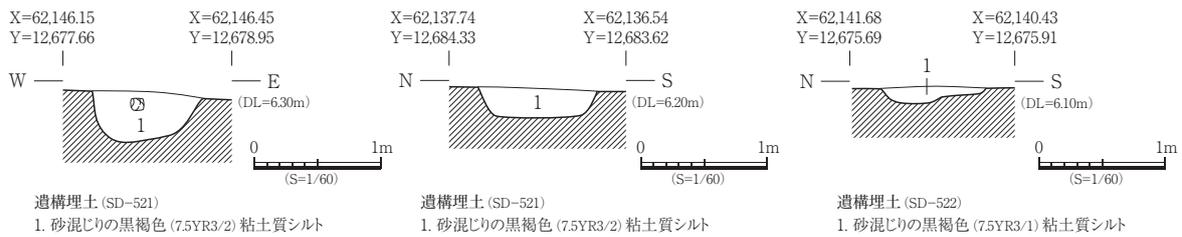


図3-247 SD-521・522

(6.471m)から南(6.440m)に向かって傾斜し、主軸方向は南(N-170°-E)を向く。埋土は地山(黄色(2.5Y8/6)シルト質砂)のブロックを含む暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルトであった。遺物は出土しなかった。

**SD-521** (図3-247)

V-2区中央部から東部で検出したL字形の溝で、北側で検出している畝状遺構に関連するものと思われる。検出長は48.09m、幅0.53~1.18m、深さは17~43cmを測り、断面形は逆台形ないしU字形を呈する。基底面は東(6.427m)から北(5.826m)に向かって傾斜し、主軸方向は東側で西(N-83°-W)に延びた後、北に屈曲して北北西(N-22°-W)を向く。埋土は砂混じりの黒褐色(7.5YR3/2)粘土質シルト単一層であった。出土遺物には図示した弥生土器1点(5134)と土師質土器3点がみられた。

**出土遺物**

弥生土器(図3-250 5134)

壺で、底部外面にナデ調整を施し、側面に指押えの痕が残る。胴部外面にはヘラナデ調整、内面にはハケ調整の後にナデ調整を加える。胎土には細粒砂から極細粒中礫を多く含む。

**SD-522** (図3-247)

V-2区中央部西寄り、SX-502を掘り込んだ形で検出した東西溝で、西端をSD-526、東端をSD-521に切られる。検出長は5.53m、幅0.45~0.65m、深さは9~30cmを測り、断面形は逆台形を呈する。基底面は西(5.929m)から東(5.854m)に向かって傾斜し、主軸方向は東北東(N-76°-E)を向く。埋土は砂混じりの黒褐色(7.5YR3/1)粘土質シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器1点がみられたが、図示できなかった。

**SD-523** (図3-248)

V-2区中央部北壁際、SD-524の東隣で検出した南北溝で、北は調査区外に続く。検出長は8.74m、幅0.57~1.00m、深さは5~21cmを測り、断面形は逆台形を呈する。基底面は北(6.008m)から南(5.828m)に向かって傾斜し、主軸方向は南南西(N-166°-W)を向く。埋土は砂混じりの黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一層であった。出土遺物には弥生土器1点がみられたが、図示できなかった。

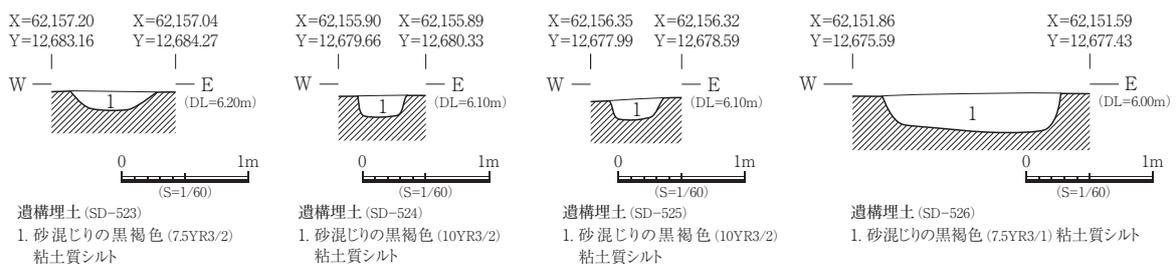


図3-248 SD-523~526

**SD-524** (図3-248)

V-2区中央部北壁際, SD-523 の西隣で検出した細長い南北溝で, 北は調査区外に続く。検出長は7.21m, 幅0.32~0.46m, 深さは8~24cmを測り, 断面形は逆台形ないし箱形を呈する。基底面は北(5.940m)から南(5.909m)に向って若干傾斜し, 主軸方向はSD-523 と同じ南南西(N-166°-W)を向く。埋土は砂混じりの黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一層であった。出土遺物には図示した弥生土器1点(5135)と石製品1点がみられた。

**出土遺物**

弥生土器(図3-250 5135)

甕の口縁部で, 端部にヘラ状工具による刻目, 外面にハケ目が残る。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

**SD-525** (図3-248)

V-2区中央部北壁際, SD-524 の西隣で検出した南北溝で, 北は調査区外に続く。検出長は3.36m, 幅0.31~0.40m, 深さは7~18cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。基底面は北(5.969m)から南(5.852m)に向って傾斜し, 主軸方向は南(N-175°-W)を向く。埋土は砂混じりの黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一層であった。出土遺物には弥生土器1点がみられたが, 図示できなかった。

**SD-526** (図3-248)

V-2区中央部北壁際, SD-525 を切った形で検出した南北溝で, 北は調査区外に続く。検出長は19.40m, 幅1.19~1.55m, 深さは28~36cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。基底面は南(5.757m)から北(5.711m)に向って若干傾斜し, 主軸方向は北北東(N-14°-E)を向く。埋土は砂混じりの黒褐色(7.5YR3/1)粘土質シルト単一層であった。出土遺物には須恵器1点, 土師質土器2点, 図示した瓦質土器1点(5136)がみられた。

**出土遺物**

瓦質土器(図3-250 5136)

三足鍋で, 胴部から口縁部にかけて内湾気味にたち上がり, 口縁部外面には断面三角形の鏝が巡る。胴部外面には脚の基部が残る。鏝の下から口縁部にかけてヨコナデ調整, それ以外はナデ調整で, 外面には指押えの痕が残る。鏝の下には煤が付着する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

**SD-527**

V-2区南西部南壁際で検出した南北溝で, 南は調査区外に続く。検出長は3.13m, 幅0.33~0.58m, 深さは11~20cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。基底面は南(6.007m)から北(5.922m)に向って傾斜し, 主軸方向は北(N-9°-W)を向く。埋土は炭化物と地山(淡黄色(2.5Y8/4)シルト質砂)の小ブロックを含む黒褐色(2.5Y3/1)シルト質砂単一層であった。遺物は出土しなかった。

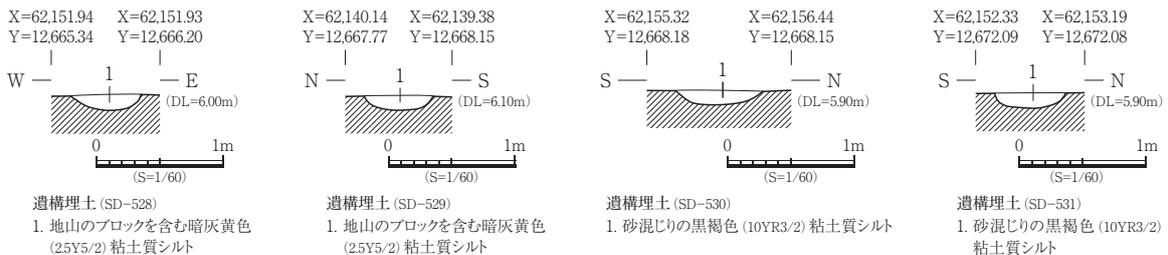


図3-249 SD-528~531

**SD-528** (図3-249)

V-2区西部で検出した南北溝で、丁度中央部で曲がっている。検出長は14.08m、幅0.45~0.62m、深さは4~16cmを測り、断面形は逆台形ないし舟底形を呈する。基底面は南(5.856m)から北(5.786m)に向って傾斜し、主軸方向は北北東(N-15°-E)に延びた後、北(N-4°-E)に曲がる。埋土は地山(黄色(2.5Y8/6)シルト質砂)のブロックを含む暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルト単一層であった。遺物は出土しなかった。

**SD-529** (図3-249)

V-2区西部で検出した浅く短い東西溝である。検出長は5.66m、幅0.30~0.64m、深さは4~8cmを測り、断面形は舟底形を呈する。基底面は東(5.904m)から西(5.802m)に向って傾斜し、主軸方向は西南西(N-110°-W)を向く。埋土は地山(黄色(2.5Y8/6)シルト質砂)のブロックを含む暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器2点がみられ、内1点(5137)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-250 5137)

杯の口縁部で、成形技法はB技法とみられる。胎土は精良で、細粒砂から中粒砂を若干含む。

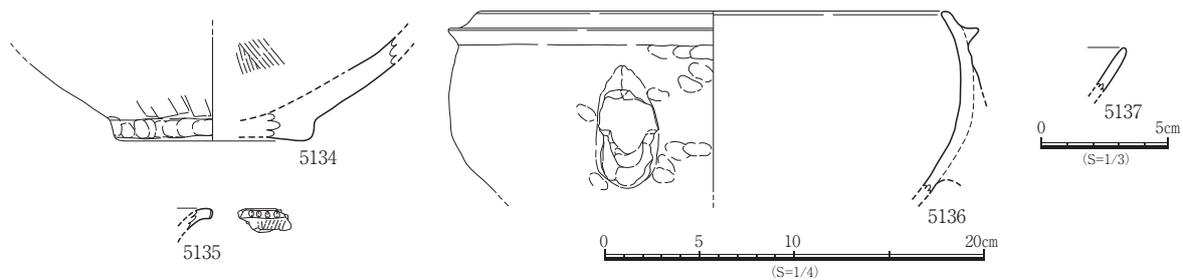


図3-250 SD-521・524・526・529出土遺物実測図

**SD-530** (図3-249)

V-2区北西部で検出した浅く短い東西溝である。検出長は8.11m、幅0.34~0.80m、深さは5~11cmを測り、断面形は舟底形を呈する。基底面は西(5.770m)から東(5.705m)に向って傾斜し、主軸方向は東(N-99°-E)を向く。埋土は砂混じりの黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一層であった。出土遺物には弥生土器8点がみられたが、図示できるものはなかった。

**SD-531** (図3-249)

V-2区北西部で検出した浅く短い東西溝である。検出長は4.26m、幅0.42~0.63m、深さは9~13cmを測り、断面形は舟底形を呈する。基底面は東(5.709m)から西(5.676m)に向って若干傾斜し、主軸方向は西(N-80°-W)を向く。埋土は砂混じりの黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一層であった。遺物は出土しなかった。

**SD-532** (図3-251)

V-2区北東部、SD-533に切られた形で検出した東西溝である。検出長は8.38m、幅0.30~0.53m、深さは3~10cmを測り、断面形は舟底形を呈する。基底面は東(6.401m)から西(6.354m)に向って若干傾斜し、主軸方向は西(N-83°-W)を向く。埋土は地山(黄色(2.5Y8/6)シルト質砂)のブロックを含む暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルト単一層であった。遺物は出土しなかった。

**SD-533** (図3-228・251)

V-2区北東部, SD-532とSU-501を切った形で検出した東西溝である。検出長は31.46m, 幅0.18~0.34m, 深さは4~17cmを測り, 断面形は概ね舟底形を呈する。基底面は東(6.306m)から西(6.096m)に向って傾斜し, 主軸方向は西北西(N-71°-W)を向いた後, 西(N-84°-W)に曲がる。埋土は暗赤褐色(5YR3/3)粘土質シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器1点がみられたが, 図示できなかった。

**SD-534** (図3-251)

V-2区中央部北寄り, SD-533の南隣で検出した東西溝で, SD-535とSU-501を切る。検出長は12.30m, 幅0.18~0.50m, 深さは4~21cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。基底面は西(6.181m)から東(6.071m)に向って傾斜し, 主軸方向は東(N-100°-E)を向く。埋土は地山(黄色(2.5Y8/6)シルト質砂)のブロックを含む暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルト単一層であった。遺物は出土しなかった。

**SD-535** (図3-251)

V-2区中央部北寄り, SD-534に切られた形で検出した東西溝である。検出長は7.72m, 幅0.18~0.38m, 深さは4~8cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。基底面は東(6.401m)から西(6.263m)に向って傾斜し, 主軸方向は西(N-80°-W)を向く。埋土は地山(黄色(2.5Y8/6)シルト質砂)のブロックを含む暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルト単一層であった。遺物は出土しなかった。

**SD-536** (図3-251)

V-3区東部で検出した東西溝である。検出長は21.99m, 幅0.55~1.65m, 深さは2~15cmを測り, 断面形は舟底形を呈する。基底面は東(6.916m)から西(6.851m)に向って傾斜し, 主軸方向は西北西(N-76°-W)を向く。埋土は小型大礫以下の礫と地山(淡黄色(2.5Y8/4)砂質シルト)のブロックを含む黒褐色(7.5YR3/2)シルト質粘土単一層であった。遺物は出土しなかった。

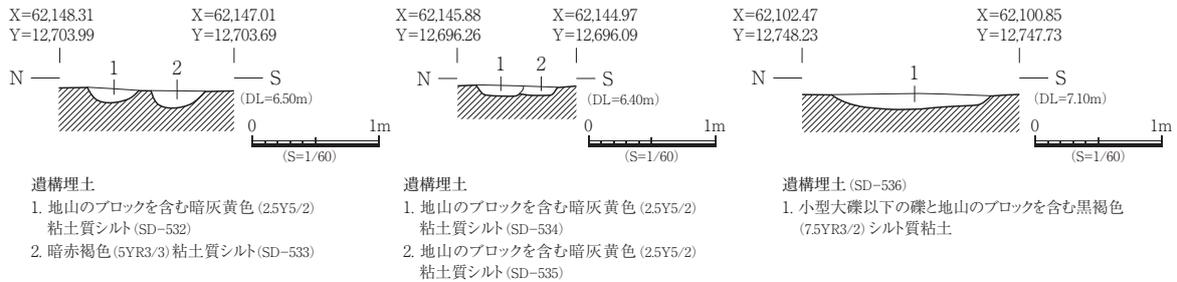


図3-251 SD-532~536

③ 畝状遺構

**SU-501** (図3-252)

V-2区中央部, 北壁際で検出した31本単位の南北方向の畝状遺構で, 途切れる部分もみられるが, 検出状況から同一のものと判断される。また, 畝幅が狭くなっており, 作り替えが行われたとみられ, SD-523の東隣の畝間を西端とし, 東に互い違いとなっており, 17本と14本に分けることができる。畝間間隔は0.78~0.86m, 畝幅0.50~0.56mで, 幅は10~44cm, 深さ1~35cmを測り, 最大長は11.24mである。主軸方向はN-9~17°-Eを示す。断面形は概ね舟底形を呈する。埋土は地山(黄色(2.5Y8/6)シルト質砂)のブロックを含む暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルトであった。出土遺物は弥生土器1点がみられたが, 図示できなかった。

**SU-502**

V-2区北東部、北壁際で検出した50本単位の南北方向の畝状遺構で、途切れる部分もみられるが、検出状況か

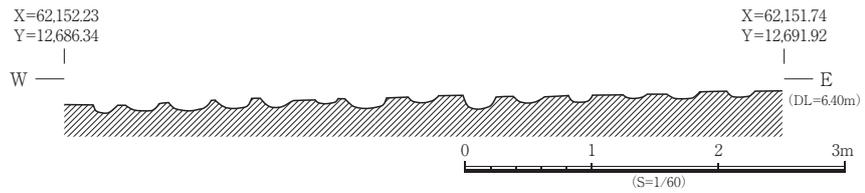


図3-252 SU-501

ら同一のものと判断される。また、畝幅が狭くなっており、数度の作り替えが行われたとみられる。畝間間隔は0.40~0.65m、畝幅0.10~0.53mで、幅は10~48cm、深さ1~6cmを測り、最大長は3.92mである。主軸方向はN-7~19°-Eを示す。断面形は概ね舟底形を呈する。埋土は地山(黄色(2.5Y8/6)シルト質砂)のブロックを含む暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルトであった。出土遺物は土師質土器1点がみられたが、図示できなかった。

**SU-503**

V-1区北西部からV-2区北東部北壁際で検出した約11本単位の東西方向の畝状遺構で、途切れる部分もみられ、かつSU-501やSU-502のように揃っていないが、検出状況から一連のものとみられる。畝間間隔は0.51~1.01m、畝幅0.32~0.85mで、幅は13~33cm、深さ1~6cmを測り、最大長は5.42mである。主軸方向はN-68~76°-Wを示す。断面形は概ね舟底形を呈する。埋土は地山(淡黄色(2.5Y8/4)砂質シルト)のブロックを含む黒褐色(7.5YR3/2)シルト質粘土であった。遺物は出土しなかった。

**SU-504**

V-1区北部、北壁際で検出した8本単位以上の南北方向の畝状遺構で、大半は北の調査区外に続く。畝間間隔は約0.55m、畝幅約0.35mで、幅は14~44cm、深さ1~6cmを測り、最大長は0.77m以上である。主軸方向はN-34°-Eを示す。断面形は概ね舟底形を呈する。埋土は地山(淡黄色(2.5Y8/4)砂質シルト)のブロックを含む黒褐色(7.5YR3/2)シルト質粘土であった。遺物は出土しなかった。

**SU-505**

V-1区北部北壁際、SD-516に切られた形で検出した7本単位の南北方向の畝状遺構で、途切れる部分もみられ、検出状況から一連のものとみられる。畝間間隔は約0.50m、畝幅約0.32mで、幅は11~26cm、深さ2~8cmを測り、最大長は3.41m以上である。主軸方向は概ねN-50°-Eを示す。断面形は概ね舟底形を呈する。埋土は地山(淡黄色(2.5Y8/4)砂質シルト)のブロックを含む黒褐色(7.5YR3/2)シルト質粘土であった。遺物は出土しなかった。

**SU-506**

V-3区中央部南壁際、SD-536に切られた形で検出した10本単位以上とみられる東西方向の畝状遺構で、畝幅が狭くなっていることから作り替えが行われたとみられる。畝間間隔は0.28~0.46m、畝幅約0.28~0.40mで、幅は9~30cm、深さ1~7cmを測り、最大長は3.80mである。主軸方向は概ねN-59°-Wを示す。断面形は概ね舟底形を呈する。埋土は地山(淡黄色(2.5Y8/4)砂質シルト)のブロックを含む黒褐色(7.5YR3/2)シルト質粘土であった。遺物は出土しなかった。

④ 性格不明遺構

**SX-502**

V-2区西部、SD-522・526に切られた形で検出した不整形の遺構で、南北二つに分かれたような状態となる。長辺16.43m、短辺5.02m、深さ23cmを測り、断面形は逆台形を呈する。埋土は砂混じ

3. V区 (3) 近世以降

りのにぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト単一層であった。出土遺物は弥生土器3点, 須恵器1点, 土師質土器8点, 瓦器8点がみられ, 須恵器1点(5138), 土師質土器2点(5139・5140), 瓦器1点(5141)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-253 5138)

杯身で, 底部は回転ヘラ切りの後にナデ調整を加える。器面は回転ナデ調整で, 内底面にはナデ調整を加える。また, 内底面には自然釉がかかりハダ荒れがみられる。胎土には白色細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

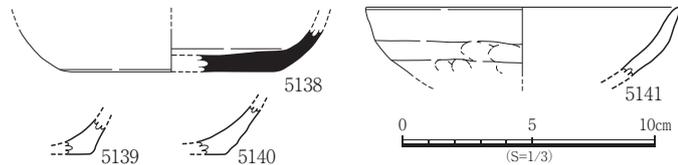


図3-253 SX-502出土遺物実測図

土師質土器(図3-253 5139・5140)

いずれも杯で, 成形技法はB技法とみられる。底部の切り離しは回転糸切りで, 体部は外上方を向く。いずれも胎土は精良で, 細粒砂から中粒砂を若干含む。

瓦器(図3-253 5141)

椀で, 口縁部はヨコナデ調整, 体部外面には指押えの痕が二段に残る。胎土は精良で, 細粒砂から極粗粒砂を若干含む。

⑤ピット

1個のピットを検出したのみであった。

P-501

V-2区中央部西寄り, SD-521 を切った形で検出したもので, 径0.80~0.83mの不整円形で, 深さ34cmを測り, 底面から径24~27cmの柱痕を検出した。埋土は地山(黄色(2.5Y8/6)シルト質砂)のブロックを含む暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器1点と馬の骨が出土している。

(3) 近世以降

いずれもV-2区西側で検出された。検出した遺構には土坑2基, 溝跡7条があるが, 性格は判然としない。

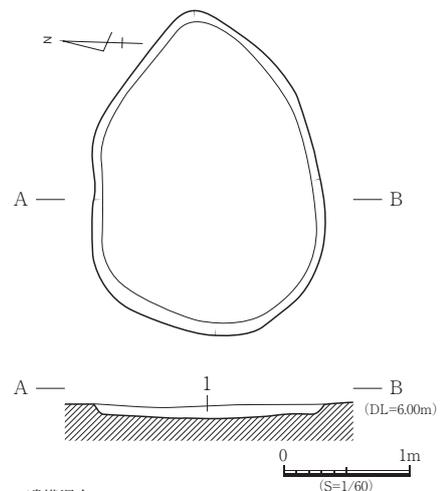
① 土坑

SK-512

V-2区南部, 南壁沿いで検出した不整楕円形の土坑である。長径1.30m, 短径0.86m, 深さ5cmを測り, 長軸方向はN-57°-Eを示す。断面形は概ね逆台形を呈する。埋土は砂混じりの灰黄褐色(10YR6/2)シルト質粘土単一層であった。遺物は出土しなかった。

SK-513 (図3-254)

V-2区南西部で検出した不整楕円形の土坑である。長径2.55m, 短径1.80m, 深さ9cmを測り, 長軸方向はN-89°-W



遺構埋土  
1. 地山のブロックを僅かに含む砂混じりの暗褐色(7.5YR3/3)粘土質シルト

図3-254 SK-513

を示す。断面形は概ね逆台形を呈する。埋土は砂混じりの地山(灰黄褐色(10YR6/2)粘土質シルト)のブロックを僅かに含む暗褐色(7.5YR3/3)粘土質シルト単一層であった。遺物は出土しなかった。

② 溝跡

SD-537

V-2区北西部, 北壁際で検出した南北溝で, 南がやや広がり, ピット状の落ち込みとなる。検出長は2.09m, 幅0.79~1.11m, 深さは3~10cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。基底面は北(5.808m)から南(5.806m)に向って若干傾斜し, 主軸方向は南南西(N-168°-W)を向く。埋土は砂混じりの黒褐色(7.5YR3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器1点と近世陶器1点がみられたが, 図示できなかつた。

SD-538 (図3-255)

V-2区南西部で検出した東西溝で, 途中が途切れ2条に分れるが, 検出状態からみて同一のものと思われる。検出長は10.64m, 幅0.18~0.62m, 深さは5~18cmを測り, 断面形はU字形を呈する。基底面は東(5.953m)から西(5.892m)に向って傾斜し, 主軸方向は西北西(N-74°-W)を向く。埋土は砂混じりの灰黄褐色(10YR6/2)シルト質粘土であった。遺物は出土しなかった。

SD-539

V-2区南西端部, 南壁際で検出した南北溝で, 枝状に分れる部分がみられ, 南は調査区外に続く。検出長は2.44m, 幅0.16~0.57m, 深さは4~12cmを測り, 断面形は概ね逆台形を呈する。基底面は南(6.172m)から北(5.897m)に向って傾斜し, 主軸方向は北北東(N-16°-E)を向く。埋土は砂混じりの灰黄褐色(10YR6/2)シルト質粘土であった。遺物は出土しなかった。

SD-540

V-2区南西端部南壁際, SD-538 を掘り込んだ形で検出した南北溝で, 北側が方形状に広くなり, 南は調査区外に続く。検出長は5.18m, 幅1.13~2.71m, 深さは5~10cmを測り, 断面形は概ね逆台形を呈する。基底面は南(6.148m)から北(5.940m)に向って傾斜し, 主軸方向は北(N-6°-E)を向く。埋土は砂混じりの灰黄褐色(10YR6/2)シルト質粘土であった。出土遺物には土師質土器3点, 近代磁器1点がみられ, 土師質土器1点(5142)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-256 5142)

杯で, 成形技法はB技法となり, 内外面にミズビキの痕跡が残る。底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は精良で細粒砂から粗粒砂を若干含む。

SD-541 (図3-255)

V-2区南部, 南壁際で検出した東西溝で, 南は調査区外に続く。検出長は4.07m, 幅1.02~1.55m, 深さは6~12cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。基底面は東(6.216m)から西(6.202m)に向って若干

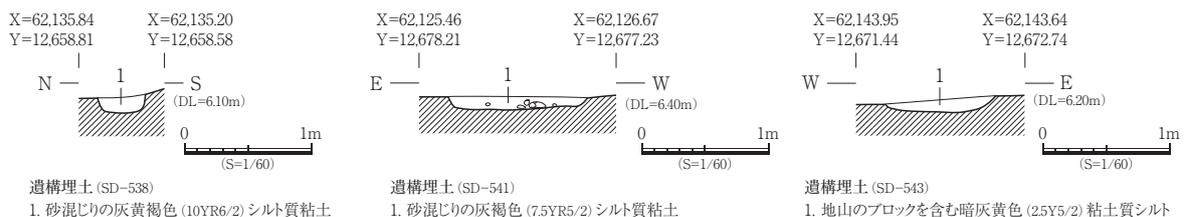


図3-255 SD-538・541・543

3. V区 (3) 近世以降

傾斜し、主軸方向は西南西(N-126°-W)を向く。埋土は砂混じりの灰褐色(7.5YR5/2)シルト質粘土であった。遺物は出土しなかった。

**SD-542**

V-2区南部, 南壁際で検出した南北溝で, 南は調査区外に続く。検出長は1.54m, 幅0.10~0.56m, 深さは3~9cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。基底面は南(6.316m)から北(6.294m)に向って若干傾斜し, 主軸方向は北北東(N-15°-E)を向く。埋土は砂混じりの灰黄褐色(10YR6/2)シルト質粘土であった。遺物は出土しなかった。

**SD-543** (図3-255)

V-2区西部, SD-526の西隣で検出した南北溝である。検出長は7.09m, 幅0.39~1.20m, 深さは5~14cmを測り, 断面形は舟底形を呈する。基底面は南(5.933m)から北(5.931m)に向って若干傾斜し, 主軸方向は北北東(N-12°-E)を向く。埋土は地山(黄色(2.5Y8/6)シルト質砂)のブロックを含む暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルトであった。出土遺物には瓦器, 近世磁器, 近代磁器各1点がみられ, 近代磁器1点(5143)が図示できた。

出土遺物

近代磁器(図3-256 5143)

皿で, 内面は緑色からコバルト色に発色し, 口唇部から外面には透明釉を施釉する。全面に貫入がみられる。胎土には黒色粒をほとんど含まない。

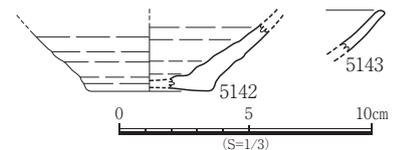


図3-256 SD-540・543出土遺物実測図

## 第Ⅳ章 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

辻康男・矢作健二・辻本裕也・田中義文・馬場健司・伊藤良永・高橋敦

### 1. はじめに

#### (1) 分析目的

本報告では、調査区やその周辺の古環境変遷と、発掘調査で検出された土器胎土に関する岩石学的データの採取を目的として実施した自然科学分析の結果を述べる。前者の目的に対しては、花粉・珪藻・植物珪酸体の各微化石分析、樹種同定、粒度分析、不攪乱堆積物の軟X線写真による層相観察、放射性炭素年代測定を実施する。なお、本分析では、発掘調査の進捗に併せて、述べて7日間の現地調査を実施し、上記各分析の前提となる、調査区内に累重する堆積層や遺構埋土の記載と試料採取を行っている。後者の目的については、薄片観察と蛍光X線分析を適用する。

#### (2) 試料

試料採取層準と調査区の堆積物累重の柱状模式断面図を図4-1・2に示す。調査区やその周辺の古環境変遷に関わる分析は、Ⅲ区およびⅤ区で実施した。

花粉・珪藻分析は、Ⅴ-2区26・29地点の試料番号1～6の6点について実施する。植物珪酸体分析は、Ⅲ-1区14地点の試料番号2・3、15地点の試料番号1・2、SD-3035、SD-3008、SD-3025、SD-3002の各埋土、Ⅴ-2区29地点の試料番号1～5の合計13点について実施する。樹種同定は、Ⅲ区の柱穴から検出された木材(SB-309、SB-310、P-304)と炭化材(P-379)の4点、Ⅴ-2区の遺構検出面基盤層から検出された木材の2点の合計6点を実施する。放射性炭素年代測定は、Ⅲ-1区の柱穴内出土の炭化材(P-379)、Ⅴ-2区29地点の堆積層中の腐植と出土材化石の2カ所(C14-1・2)、26地点で出土した1カ所(C14-3)の合計4点を実施する。粒度分析は、Ⅲ-1区11地点の試料番号2、15地点の試料番号1・2、17地点の試料番号2、SD-3035埋土の試料番号1、SD-3002埋土の試料番号1、SD-3008埋土の試料番号1・4・7・8、SD-3029埋土の試料番号1・4の合計12点を実施する。不攪乱堆積物の軟X線写真による層相観察は、Ⅲ-1区14地点で4点、SD-3008で3点、SD-3029で3点の合計10点を実施する。胎土薄片作製鑑定と胎土蛍光X線分析は、調査区から出土した弥生時代～中世の土器から24点を選択し分析を実施する。

### 2. 西野々遺跡の古環境復元

#### (1) はじめに

本節では、現地調査による堆積物の記載、花粉・珪藻・植物珪酸体分析、樹種同定、放射性炭素年代測定、粒度分析、不攪乱堆積物試料の軟X線写真による層相観察に基づく調査区およびその周辺の古環境変遷について述べる。

#### (2) 分析方法

##### ① 放射性炭素年代測定

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐

2. 西野々遺跡の古環境復元 (2) 分析方法

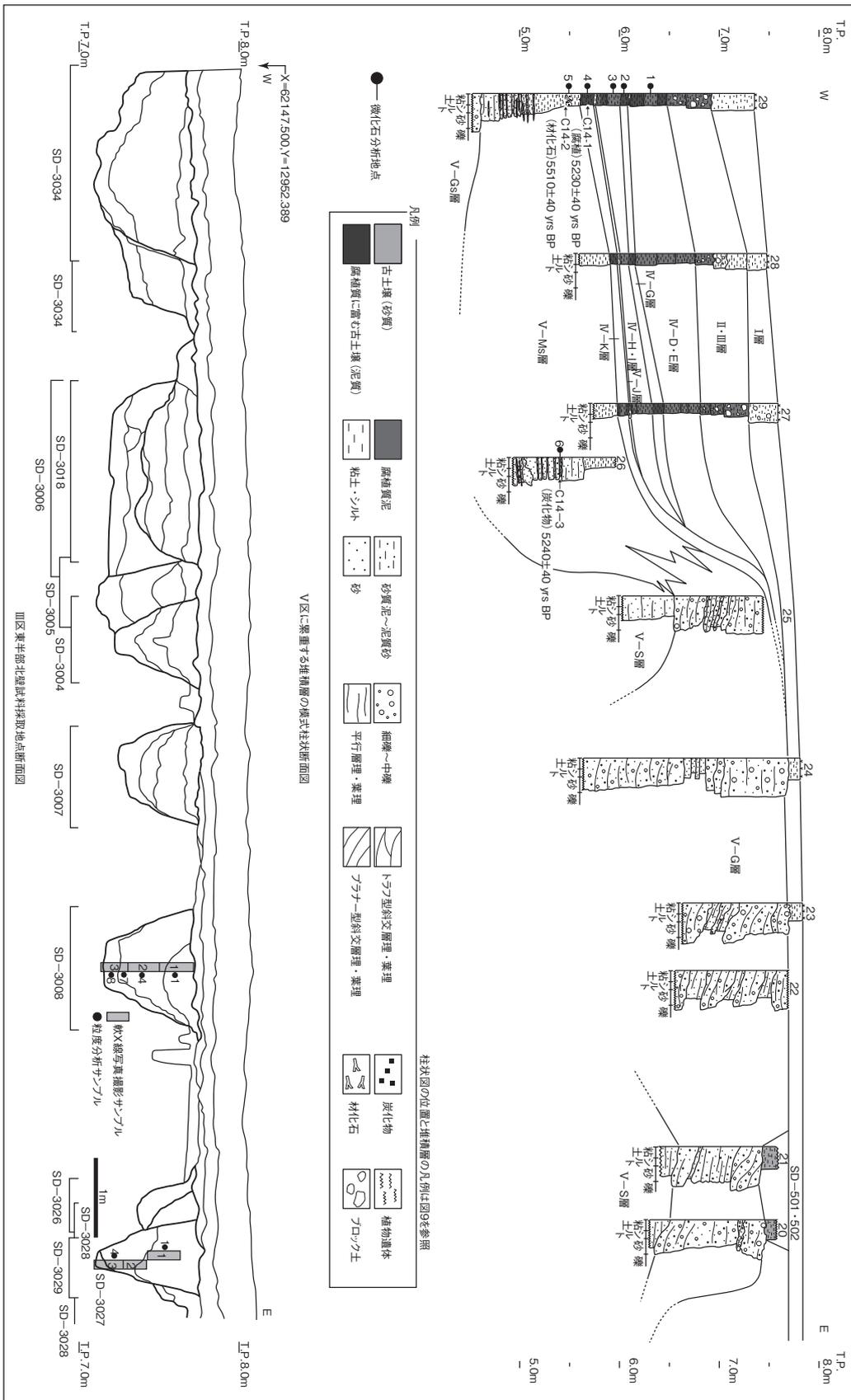


図4-1 Ⅲ区及びⅤ区の試料採取地点

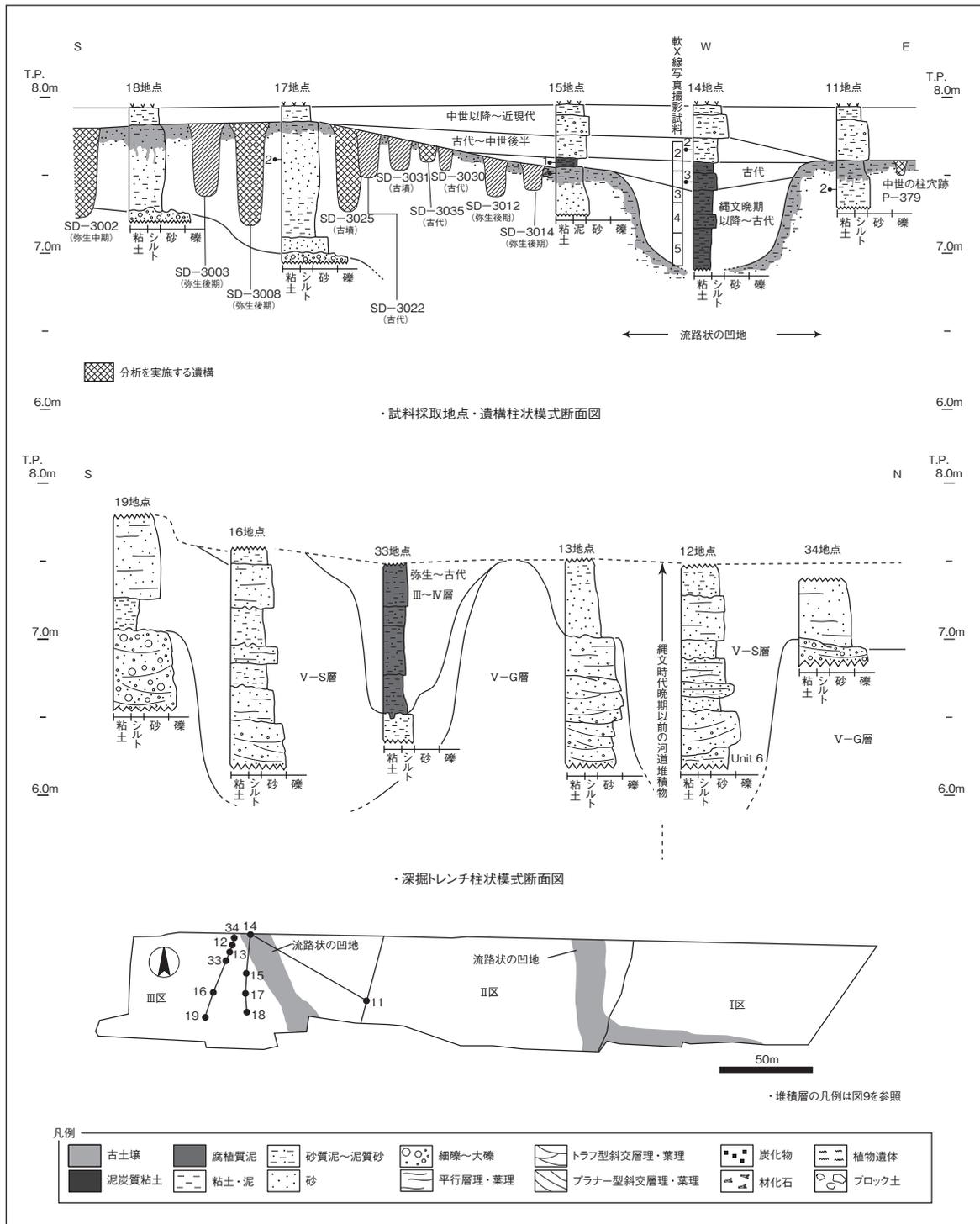


図4-2 III区堆積物累重状況の柱状模式図と分析試料採取地点

植酸等アルカリ可溶成分を除去，HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う(酸・アルカリ・酸処理)。

試料をバイコール管に入れ，1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて，管内を真空にして封じ切り，500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し，真空ラインにてCO<sub>2</sub>を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO<sub>2</sub>と鉄・水

素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1 mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした  $^{14}\text{C}$ -AMS 専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局 (NIST) から提供されるシュウ酸 (HOX-Ⅱ) とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に  $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$  の測定も行うため、この値を用いて  $\delta^{13}\text{C}$  を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma : 68%) に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。測定にあたっては、株式会社加速器分析研究所の協力を得た。

### ② 珪藻分析

試料を湿重で 7g 前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリユウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸 600 倍あるいは 1000 倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に 200 個体以上同定・計数する (化石の少ない試料はこの限りではない)。種の同定は、原口ほか (1998)、Krammer (1992)、Krammer & Lange-Bertalot (1986, 1988, 1991a, 1991b)、Witkowski et al. (2000) などを参照する。

同定結果は、海水生種、海水～汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度 (pH)・流水に対する適応能を示す。また、環境指標種はその内容を示す。そして、産出個体数 100 個体以上の試料は、産出率 2.0 % 以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の産出率を求める。堆積環境の解析は、海水～汽水生種は小杉 (1988)、淡水生種は安藤 (1990)、陸生珪藻は伊藤・堀内 (1991)、汚濁耐性は、Asai & Watanabe (1995) の環境指標種を参考とする。

### ③ 花粉分析

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液 (臭化亜鉛 : 比重 2.2) による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉は総花粉・胞子数から不明花粉を除いたものを基数とした百分率で産出率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

### ④ 植物珪酸体分析

湿重 5 g 前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法 (ポリタングステン酸ナトリウム、比重 2.5) の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希

積し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)、およびこれらを含む珪化組織片を近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定し、計数する。結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生や燃料材について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の産状を図化した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

#### ⑤ 樹種同定

各試料から、剃刀を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を直接採取する。ガム・クロラル(抱水クロラル、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

炭化材は、自然乾燥させた後、3断面の割断面を作成し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡で木材組織の配列等を観察し、その特徴を現生標本と比較して種類を同定する。

#### ⑥ 粒度分析

公文・立石編(1998)の方法を参考に礫・砂粒子画分はふるい分け法、シルト・粘土粒子画分はピペット法で行う。また、粒径区分はWentworth(1922)に従う。以下に分析操作工程を示す。

試料を風乾して2mmφ篩でふるい分ける。2mmφ篩上粒子は水洗して重量を測定する。一方、2mmφ篩下粒子は40.00gをビーカーに秤量し、蒸留水と30%過酸化水素水を加え、熱板上で有機物分解を行う。分解終了後、蒸留水と分散剤(4%カルゴン)を加え、攪拌しながら30分間音波処理を行う。沈底瓶にこの懸濁液を移し、往復振とう機で1時間振とうする。振とう終了後、水で全量を1000mlにする。この沈底瓶を1分間手で激しく振り、直ちに静置する。ピペット法に準じて所定時間に所定深度から粘土・シルト画分(0.063mm>), 粘土画分(0.0039mm>)を10ml採取し、105℃で24時間乾燥させた後、重量を測定し加積通過率(質量%)を求める。ピペット法終了後、懸濁液を63μm篩で水洗いする。63μm篩残留物を105℃で5時間熱乾後、1.0, 0.5, 0.25, 0.125mmφ篩でふるい分け、各篩毎に篩上残留物の質量を測定し、加積通過率(質量%)を求める。ピペット法およびふるい分けで求められる加積通過率(質量%)から粒径加積曲線を描き、Wentworth(1922)の粒径区分毎の質量を算出する。

#### ⑦ 不攪乱堆積物の軟X線写真撮影

地層断面より採取したブロック状の不攪乱堆積物を厚さ1cmの板状に整形し、それをアクリル板上に設置し、周囲を幅1cmの棒状のアクリル樹脂で固定し、軟X線写真撮影を実施する。撮影したフィルムについては、ルーペによる肉眼観察およびスキナーでコンピューター上に取り込んだ画像の補正などから、堆積・土壌構造の特徴把握を行う。試料調整および撮影については、公文・立石編(1998)、斉藤(1993)を参考とする。

### (3) 結果

#### ① 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を表4-1に示す。表4-2に示した暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった

2. 西野々遺跡の古環境復元 (3) 結果

場合の再計算, 再検討に対応するため, 1年単位で表している。いずれの試料も北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いた。

表4-1 放射性炭素年代測定結果

調査区	試料名/地点	試料の質	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
Ⅲ-1区	P-379	炭化材	1580±40	-26.43±0.87	1600±40	IAAA-41712
V-2区	C14-1/29地点	腐植	5230±40	-20.38±0.78	5160±40	IAAA-51834
	C14-2/29地点	木材	5510±40	-16.82±0.82	5370±40	IAAA-51835
	C14-3/26地点	炭化材	5240±40	-23.68±0.99	5210±40	IAAA-51836

- 1) 年代値の算出には, Libbyの半減期5568年を使用  
 2) BP年代値は, 1950年を基点として何年前であるかを示す。  
 3) 付記した誤差は, 測定誤差 $\sigma$ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値

表4-2 暦年較正結果

試料 番号	補正年代 (BP)	暦年較正年代(cal)		相対比	Code No.	
P-379	1575±38	$\sigma$	calAD434 - calAD495 calAD503 - calAD535	calBP1,516 - 1,455 calBP1,447 - 1,415	0.650 0.350	IAAA-41712
		$2\sigma$	calAD409 - calAD567	calBP1,541 - 1,383	1.000	
C14-1	5233±39	$\sigma$	calBC4,217 - calBC4,215 calBC4,174 - calBC4,135 calBC4,053 - calBC3,975	calBP6,167 - 6,165 calBP6,124 - 6,085 calBP6,003 - 5,925	0.017 0.067 0.915	IAAA-51834
		$2\sigma$	calBC4,228 - calBC4,200 calBC4,170 - calBC4,127 calBC4,120 - calBC4,093 calBC4,081 - calBC3,965	calBP6,178 - 6,150 calBP6,120 - 6,077 calBP6,070 - 6,043 calBP6,031 - 5,915	0.076 0.130 0.045 0.748	
C14-2	5506±38	$\sigma$	calBC4,443 - calBC4,422 calBC4,372 - calBC4,329	calBP6,393 - 6,372 calBP6,322 - 6,279	0.193 0.807	IAAA-51835
		$2\sigma$	calBC4,449 - calBC4,323 calBC4,289 - calBC4,267	calBP6,399 - 6,273 calBP6,239 - 6,217	0.925 0.075	
C14-3	5234±38	$\sigma$	calBC4,217 - calBC4,268 calBC4,147 - calBC4,269 calBC4,053 - calBC4,270	calBP6,167 - 6,218 calBP6,097 - 6,219 calBP6,003 - 6,220	0.011 0.069 0.920	IAAA-51836
		$2\sigma$	calBC4,228 - calBC4,200 calBC4,170 - calBC4,127 calBC4,120 - calBC4,094 calBC4,080 - calBC3,965	calBP6,178 - 6,150 calBP6,120 - 6,077 calBP6,070 - 6,044 calBP6,030 - 5,915	0.077 0.131 0.044 0.749	

- 1) 計算には, RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer)を使用  
 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。  
 3) 1桁目を丸めるのが慣例だが, 暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように, 1桁目を丸めていない。

② 珪藻分析

結果を表4-3に示す。すべての層準で珪藻化石の保存状態が著しく不良であった。わずかに産出した珪藻は淡水生種の *Eunotia* spp と, 耐乾性の高い陸生珪藻 A 群の *Pinnularia borealis* Ehrenberg の 2 種だけであった。

③ 花粉分析

結果を図4-3, 表4-4に示す。29地点では, すべての試料で化石の保存状態が非常に不良であった。検出された花粉は, ツガ属, マツ属などの針葉樹, 落葉広葉樹のクマシデ属-アサダ属, コナラ亜属, 常緑広葉樹のアカガシ亜属などである。試料番号1・2では, 草本のキンポウゲ科, セリ科, ヨモギ属, キク亜科, ヒカゲノカズラ属の産出が認められた。26地点では, 統計的に扱えるだけの花粉化石が産出した。本試料では, 木本花粉が優占する。木本花粉では, 産出する種類数が豊富であり, アカガシ

表4-3 V区29地点の珪藻分析結果

種類	生態性			環境 指標種	上段：地点・下段：試料番号				
	塩分	pH	流水		29地点				
					1	2	3	4	5
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	2	6	1	-
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	1	-	-
海水生種					0	0	0	0	0
海水-汽水生種					0	0	0	0	0
汽水生種					0	0	0	0	0
淡水-汽水生種					0	0	0	0	0
淡水生種					0	2	6	1	0
珪藻化石総数					0	2	6	1	0

環境指標種群

R：陸生珪藻 (RA：A群, RB：B群, RI：未区分, 伊藤・堀内, 1991)

凡例

HR：塩分濃度に対する適応性pH：水素イオン濃度に対する適応性C.R：流水に対する適応性

Ogh-ind：貧塩不定性種ind：pH不定性種ind：流水不定性種

Ogh-unk：貧塩不明種ind：pH不明種ind：流水不明種

亜属が多産する他、マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属、コウヤマキ属、スギ属などの針葉樹、クルミ属、クマシデ属-アサダ属、カバノキ属、コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属、エノキ属-ムクノキ属、カエデ属、トチノキ属などの落葉広葉樹、シイノキ属などの常緑広葉樹が認められる。また、ムクロジ属近似種も多産する。草本花粉では、ガマ属、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが産出する。

#### ④ 植物珪酸体分析

結果を図4-4・5、表4-5に示す。各試料からは植物珪酸体が産出するものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。Ⅲ-1区の溝埋土の植物珪酸体量は、弥生時代中期とされるSD-3002とSD-3008では2.3万個/g程度、古墳時代とされるSD-3025では約6,000個/gと少なく、古墳時代とされるSD-3035では約3.7万個/gである。しかし植物珪酸体の相対的な組成は同様であり、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出される。なお、SD-3025とSD-3035では栽培植物であるイネ属の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体、穎珪酸体が産出する。Ⅲ-1区14地点の植物珪酸体含量は、試料番号3が約4万個/gと多く、試料番号2は4,000個/g程度である。試料番号3では、タケ亜科とともにヨシ属の短細胞珪酸体も産出が目立つ。試料番号2では、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立つ。なお、いずれの試料からもイネ属は認められない。Ⅲ-1区15地点の植物珪酸体含量は、試料番号1が約10万個/gと多く、試料番号2が約1.8万個/g程度である。いずれの試料も、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立つ。また試料番号1ではイネ属が見られ、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の含量がそれぞれ約500個/gである。V-2区29地点では、植物珪酸体含量に層位的な変動が見られる。試料番号4と3(ⅢK層とⅢH層)は約4万個/gと多いが、他の試料は2,000個/g前後である。しかし、植物珪酸体の組成は同様である。すなわち、いずれもネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属なども検出される。なお、イネ属などの栽培植物に由来する植物珪酸体は全く検出されない。

#### ⑤ 樹種同定

樹種同定結果を表4-6に示す。樹種同定の結果、Ⅲ-1区P-379の炭化材が広葉樹のタブノキ属、それ以外の木材は針葉樹のアカマツ・ヒノキ・ヒノキ科に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

- ・ アカマツ (Pinus densiflora Sieb. et Zucc.) マツ科マツ属

2. 西野々遺跡の古環境復元 (3) 結果

表4-4 V区26・29地点の花粉分析結果

種類	地点・試料番号					
	29地点					26地点
	1	2	3	4	5	6
木本花粉						
マキ属	-	-	-	-	-	2
モミ属	-	-	-	-	-	21
ツガ属	1	-	-	-	-	14
マツ属複雑管束亜属	-	-	-	-	-	2
マツ属(不明)	1	-	-	-	-	1
コウヤマキ属	-	1	-	1	-	2
スギ属	-	-	-	-	-	1
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	-	-	-	-	9
クルミ属	-	-	-	-	-	1
クマシデ属-アサダ属	2	1	-	-	-	9
カバノキ属	-	-	-	-	-	1
ハンノキ属	-	1	-	-	-	1
ブナ属	-	-	-	-	-	5
コナラ属コナラ亜属	-	-	1	-	-	16
コナラ属アカガシ亜属	-	1	-	1	-	55
クリ属	-	-	-	-	-	2
シイノキ属	-	-	-	-	-	22
ニレ属-ケヤキ属	-	-	-	-	-	20
エノキ属-ムクノキ属	-	-	-	-	-	10
アカメガシワ属	-	-	-	-	-	1
カエデ属	-	-	-	-	-	1
トチノキ属	-	-	-	-	-	1
ムクロジ属近似種	-	-	-	-	-	57
ブドウ属	-	-	-	-	-	1
ツタ属	-	-	-	-	-	1
ミズキ属	-	-	-	-	-	1
ツツジ科	-	-	-	-	-	2
カキ属	-	-	-	-	-	1
ハイノキ属	-	-	-	1	-	1
エゴノキ属	-	-	-	-	-	2
トネリコ属	-	-	-	-	-	1
テイカカズラ属	-	-	-	-	-	1
草本花粉						
ガマ属	-	-	-	-	-	1
イネ科	-	-	-	2	-	-
カヤツリグサ科	-	-	-	1	-	2
キンポウゲ科	1	2	-	-	-	-
セリ科	1	3	-	-	-	-
ヨモギ属	1	2	-	-	-	2
キク亜科	5	1	-	-	-	-
不明花粉	1	-	-	-	-	15
シダ類胞子						
ヒカゲノカズラ属	-	1	-	-	-	2
ゼンマイ属	-	-	-	-	-	1
イノモトソウ属	-	-	-	1	6	10
他のシダ類胞子	3	7	8	15	27	104
合計						
木本花粉	4	4	1	3	0	265
草本花粉	8	8	0	3	0	5
不明花粉	1	0	0	0	0	15
シダ類胞子	3	8	8	16	33	117
総計(不明を除く)	15	20	9	22	33	387

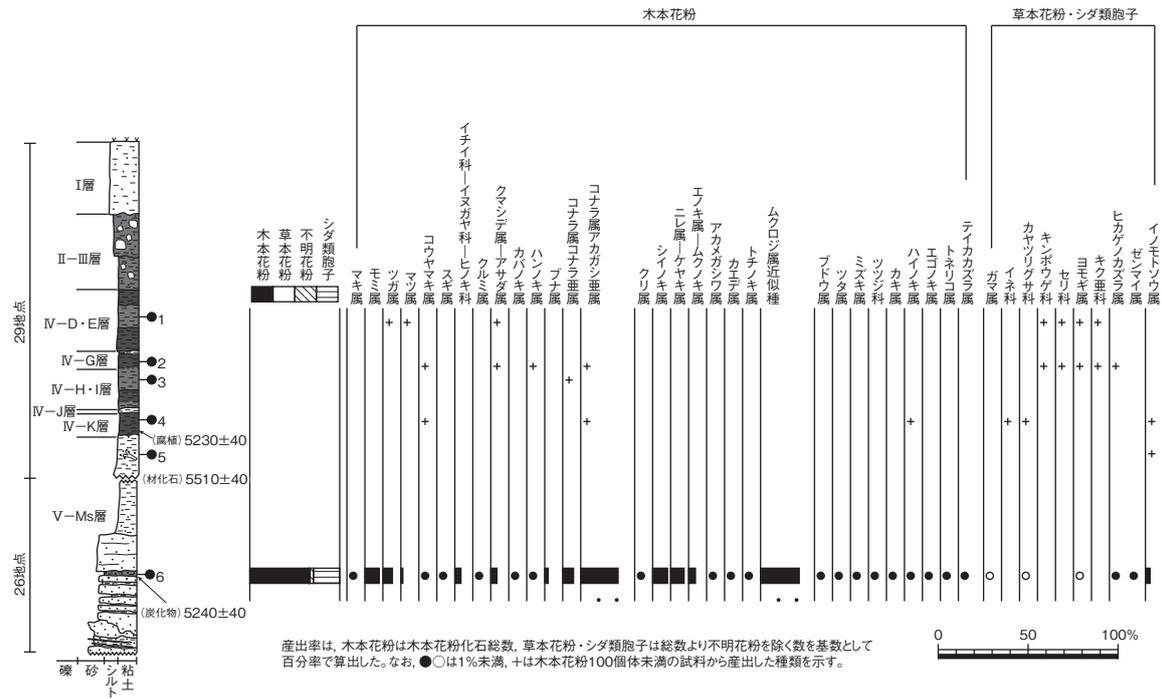


図4-3 V区26・29地点の花粉化石群集の層位分布

表4-5 植物珪酸体含量

(個/g)

種類	地点・試料番号												
	III区						V区						
	SD-3035	SD-3025	SD-3008	SD-3002	14地点		15地点		29地点				
	7	4	3	1	2	3	1	2	1	2	3	4	5
イネ科葉部短細胞珪酸体													
イネ族イネ属	715	183	0	0	0	0	472	0	0	0	0	0	0
タケ亜科ネザサ節	6439	897	3499	4533	147	289	7392	1519	173	202	7605	8534	154
タケ亜科	7513	1936	4871	4938	3745	2748	30039	6668	115	58	6311	7775	154
ヨシ属	0	0	137	0	0	8098	315	338	0	29	1133	0	0
ウシクサ族コブナグサ属	477	41	0	0	37	434	0	0	0	0	0	0	0
ウシクサ族ススキ属	477	61	137	0	0	0	472	0	0	0	0	0	0
イチゴツナギ亜科	477	163	0	0	0	289	315	0	0	0	0	0	0
不明キビ型	596	346	206	81	0	1012	1258	253	0	0	324	190	0
不明ヒゲシバ型	1073	102	1098	809	73	2458	3145	253	29	0	1294	569	0
不明ダンク型	1908	265	1098	1133	110	2603	3460	338	29	29	2104	2655	154
イネ科葉身機動細胞珪酸体													
イネ族イネ属	358	41	0	0	0	0	472	0					
タケ亜科ネザサ節	7751	795	8851	9795	73	5206	8493	928	606	462	12783	15929	154
タケ亜科	5128	836	3499	1700	147	10557	47025	7512	317	58	4045	7585	463
ヨシ属	119	20	206	0	0	434	786	0	0	58	1294	379	0
ウシクサ族	2146	102	0	81	37	1880	944	0	0	0	0	0	0
不明	1789	367	343	81	37	2892	1887	675	779	260	4045	3793	1390
珪化組織片													
イネ属類珪酸体	119	41	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計													
イネ科葉部短細胞珪酸体	19675	3994	11046	11494	4112	17931	46868	9369	346	318	18770	19722	463
イネ科葉身機動細胞珪酸体	17291	2161	12899	11657	294	20969	59607	9115	1703	838	22168	27686	2007
珪化組織片	119	41	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
総計	37085	6196	23945	23151	4406	38900	106475	18484	2049	1156	40938	47408	2470

2. 西野々遺跡の古環境復元 (3) 結果

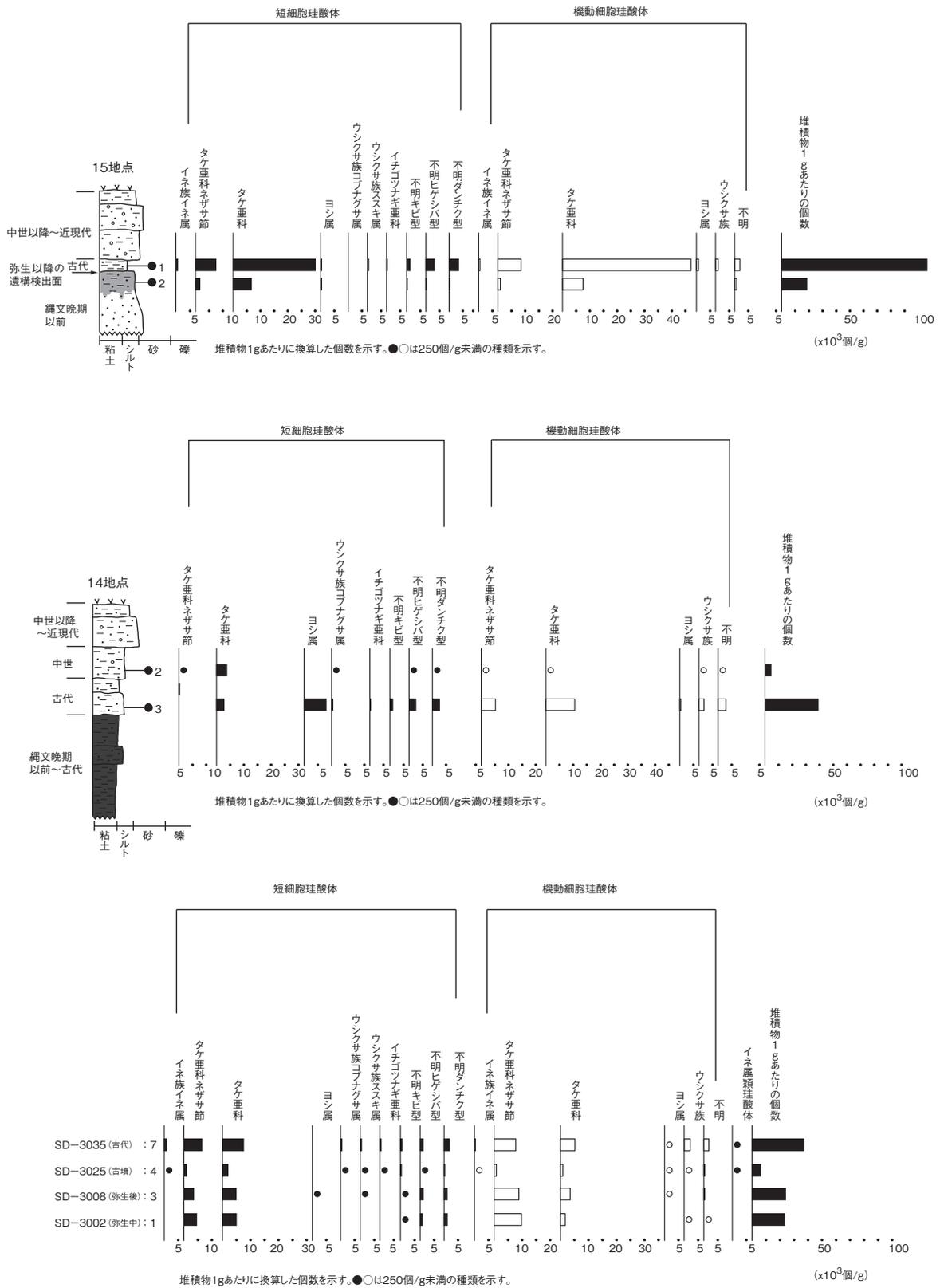


図4-4 Ⅲ区14・15地点および溝埋土の植物珪酸体含量

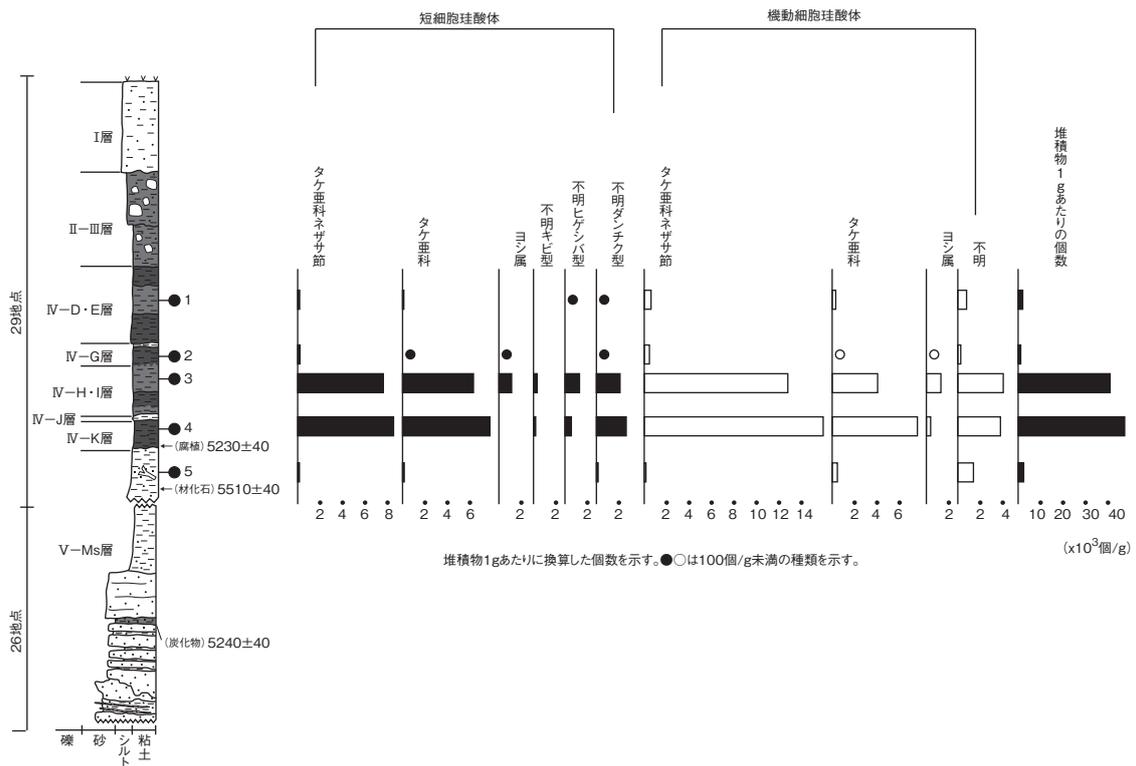


図4-5 V区29地点の植物珪酸体含量の層的变化

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、柔組織、仮道管、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成されるが、水平樹脂道とエピセリウム細胞はいずれも破損しており、痕跡が空壁として認められるのみである。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1-15細胞高。

- ・ ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1-3個。放射組織は単列、1-10細胞高。

- ・ ヒノキ科 (Cupressaceae)

Ⅲ-4区SB-309の1点が該当する。上記ヒノキに特徴が似ているが、保存状態が悪く、分野壁孔等同定を行う上で重要な組織が観察できなかった。ヒノキと同属のサワラや同じくヒノキ科のアスナロの可能性も残ることからヒノキ科とした。

- ・ タブノキ属 (*Machilus*) クスノキ科

表4-6 樹種同定結果

調査区	地区	採取位置・層位	グリッド	試料名	試料の質	樹種
Ⅲ区	-	遺構検出面	D20 - 17 - 21	P-379	炭化材	タブノキ属
	Ⅲ-4区	遺構検出面	E19 - 3 - 9	P-310	生材	ヒノキ
	Ⅲ-4区	遺構検出面	E19 - 4 - 6	P-309	生材	ヒノキ科
	Ⅲ-1区	遺構検出面	D19 - 14 - 21	P-304	生材	アカマツ
V-2区	-	遺構検出面	-	V層最上部出土木材	生材	ヒノキ
	-	遺構検出面	-	V層出土木材	生材	ヒノキ

表4-7 Ⅲ区粒度分析結果

地点	試料番号	粒径区分											粘土 0.0039mm>
		礫		砂					シルト				
		中礫 8~4mm	細礫 4~2mm	極粗粒砂 2.00~1.00mm	粗粒砂 1.00~0.50mm	中粒砂 0.50~0.25mm	細粒砂 0.25~0.125mm	極細粒砂 0.125~0.063mm	粗粒シルト 0.063~0.031mm	中粒シルト 0.031~0.016mm	細粒シルト 0.016~0.008mm	微粒シルト 0.008~0.0039mm	
SD-3035	7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	6.2	12.3	16.7	12.0	9.6	7.7	34.8
SD-3002	1	0.1	0.3	0.0	0.3	2.5	8.7	15.3	15.7	11.1	8.7	7.1	30.1
SD-3008	1	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	11.2	20.4	14.3	10.4	7.3	6.5	28.9
	4	0.0	0.0	0.0	0.0	1.4	15.5	22.2	14.3	9.8	6.4	5.6	24.8
	7	0.0	0.0	0.0	0.0	1.7	18.7	20.7	14.1	9.0	6.5	5.4	23.9
	8	0.0	0.0	0.0	0.0	1.6	13.9	22.3	17.1	11.4	7.0	5.6	21.1
SD-3029	1	0.0	0.1	0.0	0.0	1.6	11.0	12.5	13.0	11.9	8.9	7.6	33.4
	4	0.0	0.0	0.0	0.1	1.6	11.9	13.2	13.4	11.2	8.9	7.3	32.4
11地点	2	0.0	0.0	0.0	0.2	0.5	1.3	4.7	21.9	19.7	13.2	8.7	29.8
15地点	1	0.0	0.0	0.0	0.2	1.8	7.0	9.1	10.7	10.4	8.9	7.9	43.8
	2	0.0	0.0	0.0	0.2	2.8	7.7	11.6	11.4	9.6	8.4	7.3	41.0
17地点	2	0.0	0.0	0.0	0.0	2.2	21.4	29.2	17.3	8.0	5.1	3.9	12.9

注) 単位は重量%で表示

散孔材で管壁は厚く、横断面では楕円形、単独および2-3個が放射方向に複合する。道管は単穿孔(稀に階段穿孔)を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は上下縁辺部が方形細胞となる異性、1-3細胞幅、1-20細胞高。柔組織は周囲状、翼状および散在状。柔細胞はしばしば大型の油細胞となる。

⑥ 粒度分析

粒度分析結果を図4-6・7、表4-7、Folk&Ward (1957)による粒度の評価を総合して結果を表4-8に示す。

分析試料の平均粒径は、すべての試料でシルトとなる。分級度は、11地点の「悪い」を除き、すべてで「非常に悪い」となる。溝埋土は、シルト・粘土からなる泥分を主体とし、60~80%前後の比率を示す。溝埋土に含まれる砂分は、極細粒砂・細粒砂が主体をなし、中粒砂以上の粒径がほとんど含まれない。礫は、SD-3002とSD-3029の試料番号1に極微量含まれるのみである。

⑦ 不攪乱堆積物の軟X線写真撮影

撮影した軟X線写真とその写真から読みとった堆積・土壌構造の一部のトレースを図4-8に示す。以下に軟X線写真に基づく層相観察結果を示す。

i SD-3008埋土の層相

SD-3008埋土については、1~3層の単層に区分されている(図4-8)。軟X線写真の観察から、埋土2

表4-8 粒度組成解析結果

試料名	試料番号	Md (中央値)	Mz (平均値)	Mo (最頻値)	Sk (歪度)	σ (分級度)	Kg (尖度)
SD-3035	7	7.65 φ (0.005mm)	7.61 φ (0.005mm)シルト	7.64 φ (0.005mm)	0.01ほぼ対称	2.47非常に悪い	1.59非常に突出
SD-3002	1	7.51 φ (0.005mm)	7.04 φ (0.008mm)シルト	7.64 φ (0.005mm)	-0.15負の歪み	2.70非常に悪い	1.32突出
SD-3008	1	7.38 φ (0.006mm)	6.89 φ (0.008mm)シルト	7.64 φ (0.005mm)	-0.14負の歪み	2.65非常に悪い	1.12突出
	4	6.89 φ (0.008mm)	6.46 φ (0.011mm)シルト	7.64 φ (0.005mm)	-0.10ほぼ対称	2.69非常に悪い	0.92中間的
	7	6.80 φ (0.009mm)	6.29 φ (0.013mm)シルト	7.64 φ (0.005mm)	-0.13負の歪み	2.63非常に悪い	0.87偏平
	8	6.89 φ (0.008mm)	6.34 φ (0.012mm)シルト	7.64 φ (0.005mm)	-0.16負の歪み	2.49非常に悪い	0.97中間的
SD-3029	1	7.57 φ (0.005mm)	7.17 φ (0.007mm)シルト	7.64 φ (0.005mm)	-0.12負の歪み	2.74非常に悪い	1.45突出
	4	7.54 φ (0.005mm)	7.02 φ (0.008mm)シルト	7.64 φ (0.005mm)	-0.15負の歪み	2.80非常に悪い	1.29突出
11地点	2	7.65 φ (0.005mm)	7.79 φ (0.005mm)シルト	7.64 φ (0.005mm)	0.26正の歪み	1.62悪い	1.82非常に突出
15地点	1	7.83 φ (0.004mm)	7.88 φ (0.004mm)シルト	7.64 φ (0.005mm)	0.05ほぼ対称	2.80非常に悪い	1.53非常に突出
15地点	2	7.74 φ (0.005mm)	7.55 φ (0.005mm)シルト	7.64 φ (0.005mm)	-0.03ほぼ対称	2.93非常に悪い	1.38突出
17地点	2	5.63 φ (0.020mm)	5.57 φ (0.021mm)シルト	7.64 φ (0.005mm)	0.06ほぼ対称	2.24非常に悪い	0.73偏平

注) 評価はFolk&Ward (1957)による。

層については、さらに2つの堆積層に区分されることが明らかとなった。

SD-3008の基盤層は、黄褐色シルト質砂～砂層からなり、不明瞭ながら水平葉理が存在する。埋土3層と遺構基盤層の層界では、激しい凹凸が認められる。遺構基盤層の最上部では、この凹凸に沿うような葉理が観察される。埋土3層では、葉理が認められず、層内に直径5 cm前後の亜角塊状を呈する黄褐色の遺構基盤層を母材とする偽礫が混入する。

埋土2層は、2つの堆積層に細分される。2-1層は、溝の両肩部から中心に向かって底部に沿って分布する。塊状無層理の層相を示し、本層の最上部で腐植が集積した層準が存在する。2-1層の直下に薄く存在する2-2層では、非常に不明瞭ながら水平方向の葉理状の構造が認識される。本層は、溝肩部まで連続するものではなく、溝底部付近を中心に累重する。最上部に累重する埋土1層では、根痕と思われる孔隙によって画された角塊状の土壤構造が観察される。炭化物を多く含み、塊状の層相を示す。

### ii SD-3029埋土の層相

SD-3029埋土については1～2層の単層に区分されている(図4-8)。軟X線写真の観察からは、SD-3029埋土がさらに幾つかに細分されることが明らかとなった。

埋土2層は、3つの堆積層に細分される。2-1層と2-3層は、塊状無層理の層相を示す。2-1層最上部には、腐植が集積する層準が認められる。2-3層は、溝の両肩部から中心に向かって底部に沿うように分布する。本層は、SD-3027埋土を切って形成されている。2-2層では、不明瞭ながら水平方向の葉理の積層が観察される。本層は、溝肩部まで連続するものではなく、溝底部付近のみに分布する。最上部に累重する埋土1層は、炭化物を多く含み、塊状の層相を示す。

### iii 14地点

本地点の堆積層については、1～6層に区分される。流路状の凹地に埋積する腐植質泥層の最下部に位置する6層では、鉄分と思われる白色粒の散在が目立つ。試料の肉眼観察では、根痕と思われる微細な穴や孔隙が多数認められる。白色粒は、このような孔隙の周囲を中心に分布する。5層では、不明瞭ながら水平方向の葉理が観察される。4層は、5層に比べ不均質で、相対的に密度の低い暗色部と、密度の高い明色部がまだら状の層相を示す。3層では、4層に比べてさらに不均質であり、まだらの層相の陰影が強くなる。本層は、全体的にブロック状の層相を示す。2層は、3層を溝状に切って形成された堆積空間を埋積する部分に相当する。本層では、不均質でまだらの層相を示すが、3層に比べて全体的に暗色で、孔隙密度の高いことが推測される。1層は、3層に比べて、より均質な層相を示し、塊状ないし壁状的な様相をなす。

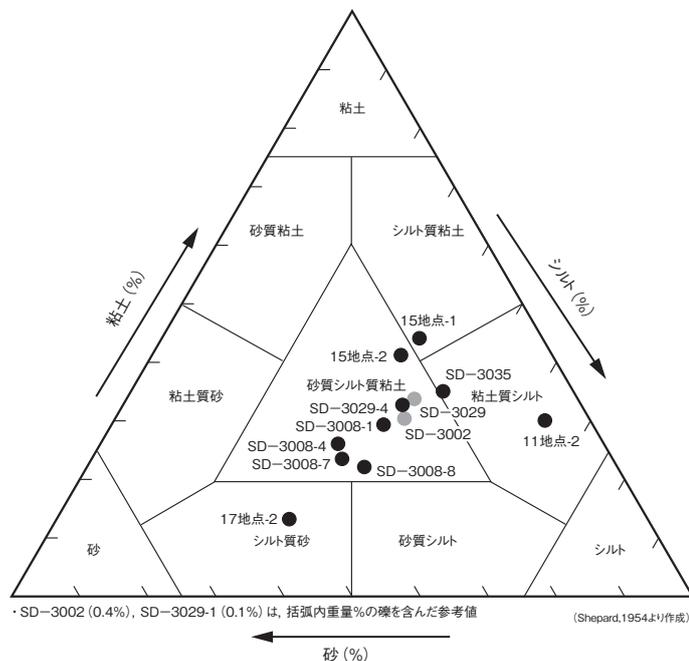


図4-6 粒度分析結果三角ダイアグラム

2. 西野々遺跡の古環境復元 (3) 結果

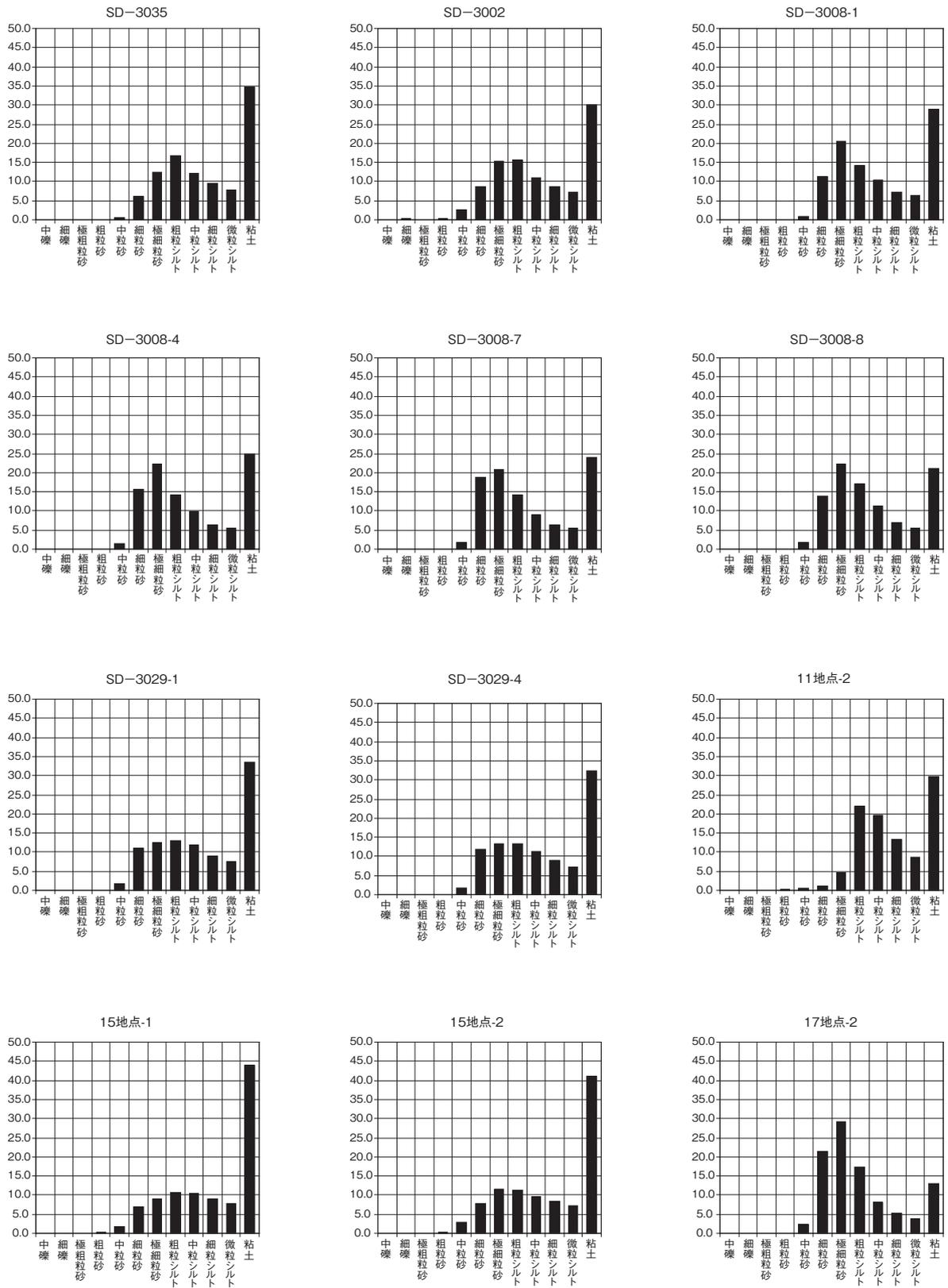


図4-7 粒度分析結果グラフ

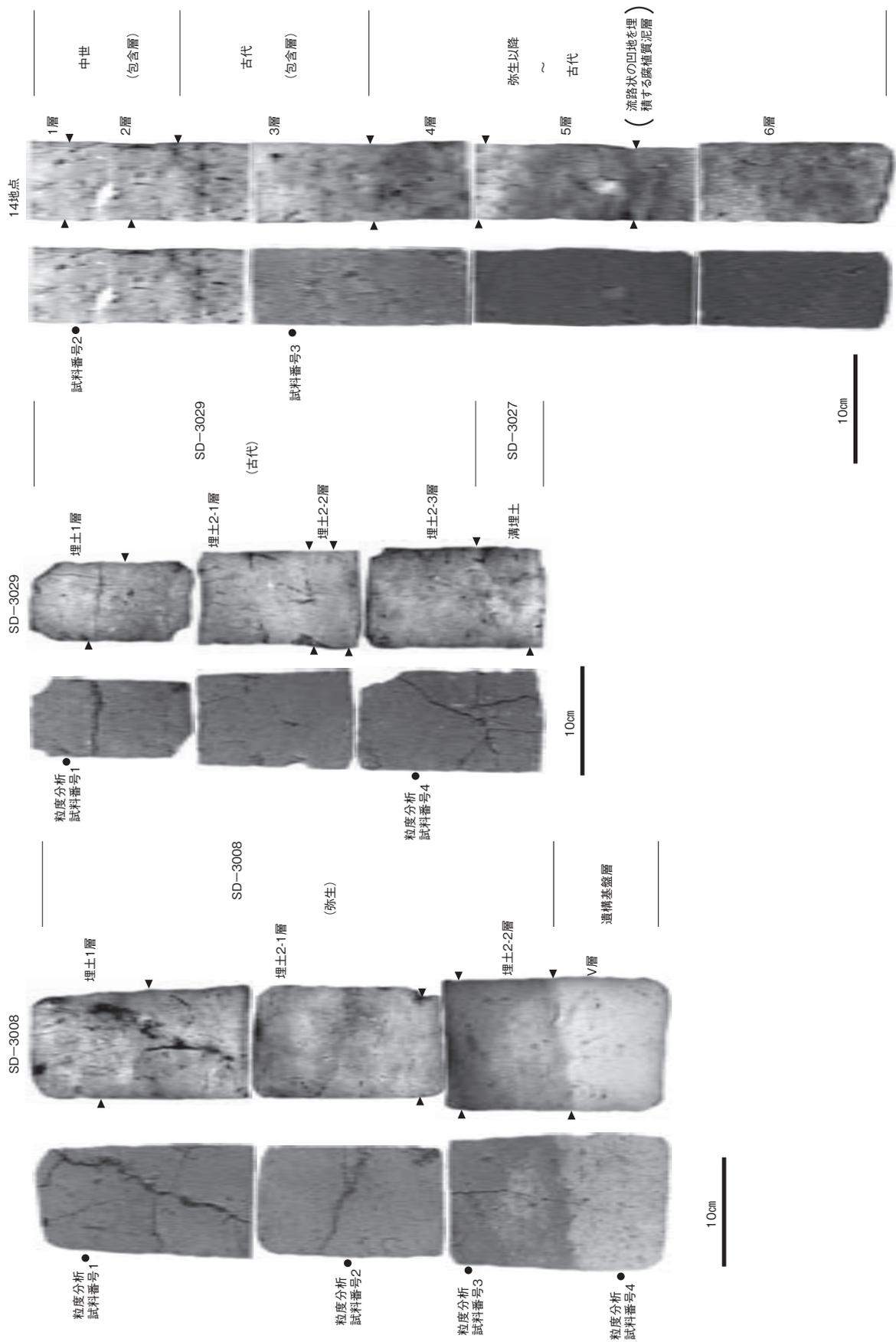


図4-8 軟X線写真および試料写真

#### (4) 考察

##### ① 調査区の堆積環境変遷と遺跡形成過程

###### i はじめに

西野々遺跡の発掘調査区に累重する、今年度および前年度に観察を行った堆積層について、現地での堆積層観察、放射性炭素年代測定および粒度分析の各結果と検出された遺構・遺物の相対年代に基づき、I～V層の区分を試みた(図4-9)。以下に各層の堆積時期ごとの堆積層の特徴、堆積環境および地形発達等について述べる。

###### ii 弥生時代以前の堆積環境

###### 堆積層の特徴

遺構検出面の基盤層をなす堆積層は、5層に区分される。本層は上位からの削平の影響が少ない領域で最上部に古土壌が形成されており、この層準において弥生時代～古代の遺構・遺物が検出されている(図4-2)。V層は、構成される碎屑物の特徴から、6つの堆積層に細分される。I区からV-1区では、砂礫層ないし砂層からなるV-G層、V-Gs層、V-S層が分布する。細礫～中礫を多く含み基質が粗粒砂～極粗粒砂からなる黄灰色砂礫層のV-G層は、堆積層上面が上に凸型をなして累重する。調査区内の遺構検出面上には、上に凸型をなしたV-G層からなる帯状の砂礫が幾筋も分布する。また、V-G層では、トラフ型斜交層理が認められる。凸部の頂部付近の一部では、プラナー型斜交層理も観察される。

V-G層からなる帯状の砂礫間に挟まれた凹部や、V-G層上面が遺構検出面下のより下位に埋没している領域では、黄灰色を呈する礫質砂層のV-Gs層および砂層のV-S層が累重する。細礫混じりの粗粒砂～極粗粒砂を主体となす礫質砂であるV-Gs層は、V-S層の下部やV-G層の帯状砂礫に挟まれた凹部下部に堆積する。本層では、トラフ型斜交層理からなる堆積構造が認められる。V-G層、V-Gs層の上位に堆積し、広く分布するV-S層は、不明瞭な水平葉理をなし、泥を含む細粒砂～中粒砂からなる砂層である。本層では、上方細粒化が認められ、上部から最上部付近で泥分を多く含むシルト質砂や粘土質シルトへと変化する。最上部には、腐植の蓄積が認められ、塊状の層相をなす黒褐色～褐色を呈する古土壌が部分的に残存する。この古土壌の層準は、砂質シルト質粘土からなり、下位の砂層に比べてさらに泥分を多く含む粒度組成を示す。

調査区西端のV区西半部では、V層の上面高度が減じていくとともに、緩やかな斜面を形成する。この部分には、砂層や砂礫層の分布が認められず、シルトと極細粒砂～中粒砂の砂泥互層から砂質粘土質シルト層へと上方細粒化を示すV-Ms層が分布する。この領域に存在するV-Ms層は、東方に分布するV-G層、V-Gs層、V-S層と同時異相であることがV区南壁沿いに連続して掘削した深掘トレンチにおいて確認される。

上述したV層の各堆積層のうち、調査区内に広く分布するV-G層、V-Gs層では、明瞭な斜交層理が形成されている。これらの堆積層で認められた斜交層理は、砂礫質堆積物の表層、すなわち砂礫床表面に形作られるベッドフォーム(砂床形)のうち、線状ないし三日月状や舌状のリップル形の移動累積に伴って形成される(Reineck and Singh,1980;フリッツ・ムーア, 1999)。ベッドフォームでは、水深・流速・粒度のすべてに支配されて様々な形態が形作られる。流速について見てみた場合、その増大に伴い、ベッドフォームは、小リップルから大リップル(砂碓などに相当)へと形態を変化させる。小リップルでは、その波頭が流速の増大にしたがって、直線状から舌状へ形態を変化させていく。さらに大

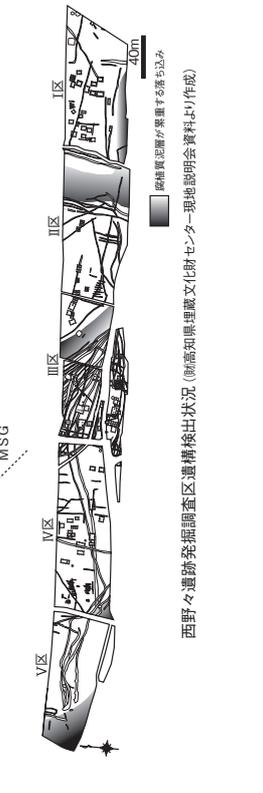
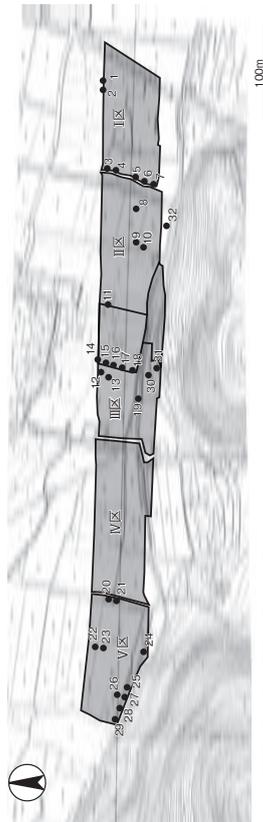
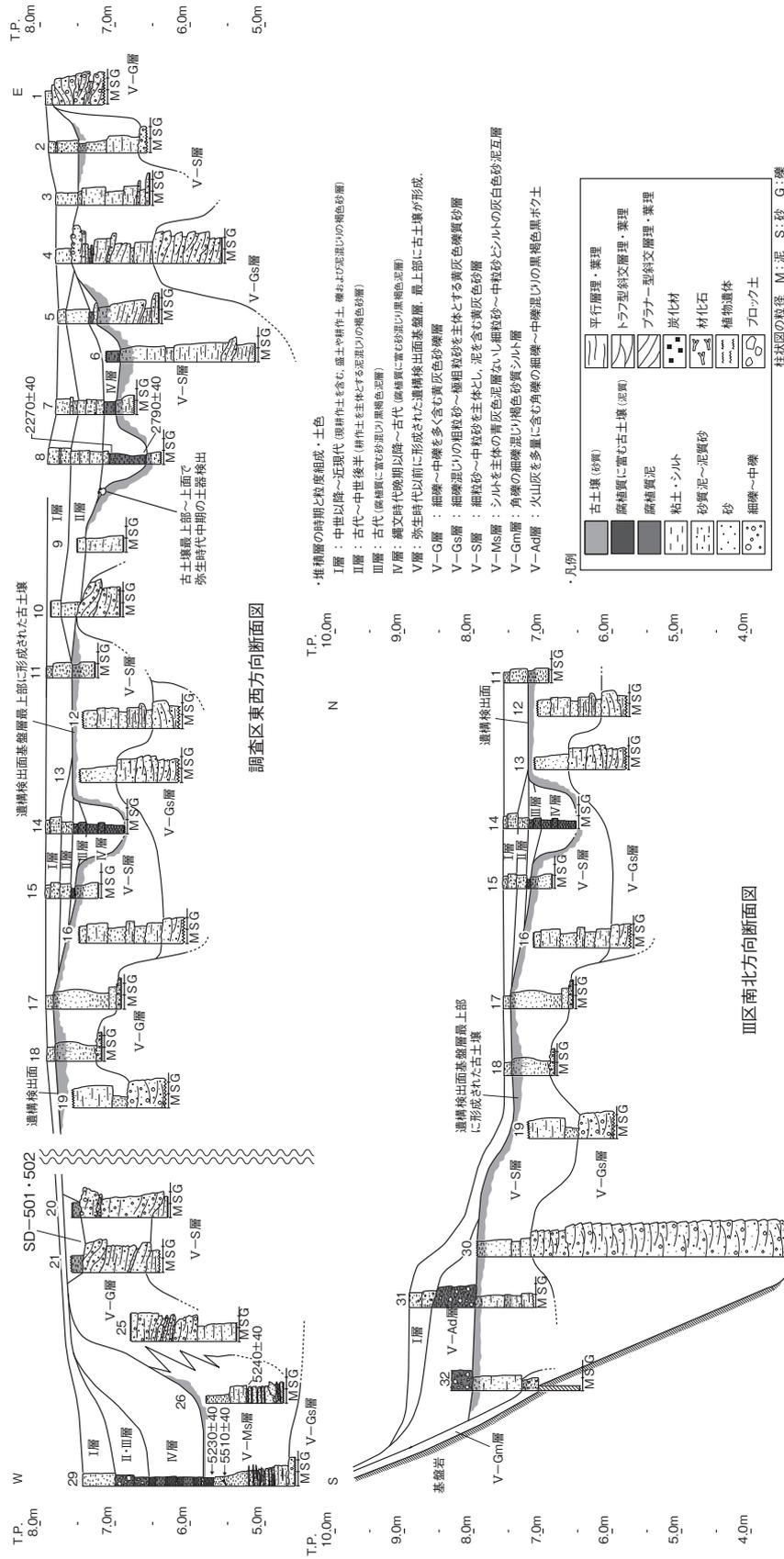


図4-9 西野々遺跡調査区柱状式断面図

リップルでも、流速が増すにつれてややうねったものから三日月状または舌状へと形態を変化させる。なお、大リップルは高さ約6 cm以上、間隔60 cm以上のものとされ、それ以下が小リップルとされる。本調査区で認められた斜交層理のうち、プラナー型斜交層理は、線状の波頭を持った小リップルないし大リップルの累重で形成される。トラフ型斜交層理は、プラナー型斜交層理より流れが強い領域で形成される大リップルに相当する砂礫もしくは三次元砂礫(3-Ddune)の移動累積に伴って形作られる(フリッツ・ムーア,1999)。

#### 推定される堆積環境

上記のような堆積構造を持つV-G層、V-Gs層では、各調査区において実施した深堀調査において、側方および上方への細粒化が顕著でないことが確認される。V-G層では、堆積層上面が上に凸型を示す。V-G層下部については、掘削深度の関係で十分な観察は行えていないが、一部で流路状に侵食して累重する様子が確認される。V-Gs層は、上に凸型をなして堆積するV-G層間の凹部おもに流路状を呈して埋積する。V-G層、V-Gs層の層相、さらに遺跡の立地をふまえると、これらの堆積層で観察された斜交層理は、河川の掃流による一方向流によるベッドフォームによって形成されたと判断される。堆積構造から推定される堆積場の流れの領域およびその分布形態から、V-G層、V-Gs層は、流路内で累重したと考えられる。これらの堆積層の古流向については、南西方向を示すものが多い。一方、水平葉理をなして堆積物が累重するV-S層、V-Ms層は、層相からV-G層、V-Gs層よりも流れの弱い領域で形成されたと考えられ、流路から溢れた洪水流によって運搬堆積したものと判断される。

以上述べたようにV層では、流路を埋積したと考えられる粗粒の堆積層が広く分布し、河岸や氾濫原を構成する細粒の堆積物がほとんど存在していないことが特徴である。このようなV層における堆積層の累重は、河川堆積システムの研究(Miall,1992,1996)から、網状河川によって形成されたと解釈される。網状河川の堆積システムをなすV層のうち、V-G層は、流路内に形成された中州や寄州を構成する砂礫堆や流路内の滯筋で形成されたと考えられる。V-Gs層については、V-G層埋積後に形成された流路堆積物と推定される。V-S層は、V-G層、V-Gs層からなる流路が埋積後、洪水流によって周辺の流路から供給された砂層と解釈される。

調査区西端に相当するV-2区においてV-Ms層が累重する領域では、V層の上面高度の低下と、砂礫層や礫質砂層から泥層ないし砂泥互層への側方細粒化が認められる。V-Ms層の最上部では泥層が累重しており、この段階において後背湿地などの静水域の堆積環境が形成されたことが示唆される。

#### 弥生時代以前における調査区の地形発達

以上のようなV層においてみられた東西方向における層相変化は、網状流路をなして砂礫層が高まりをなして累重する河川の流路帯から、その周囲に広がる後背湿地などの氾濫原に至る堆積場の特徴を示すと解釈される。本遺跡は、高知県(1996)の地形分類図などによれば、扇状地末端部に位置していることが読みとれる(図4-10-11)。このような遺跡の立地と古流向をふまえると、I区からV-1区が物部川流域から供給された堆積物からなる沖積扇状地ローブ末端、V-2区が沖積扇状地ローブ端部から、その周囲に広がる地形的に低所となる後背湿地に位置するものと認識される。

上記の地形発達が進行した時期については、今回の分析において、V-2区深堀の26・29地点の堆積層中から得られた3点の放射性炭素年代試料によって明らかにすることができた。この点は、非常

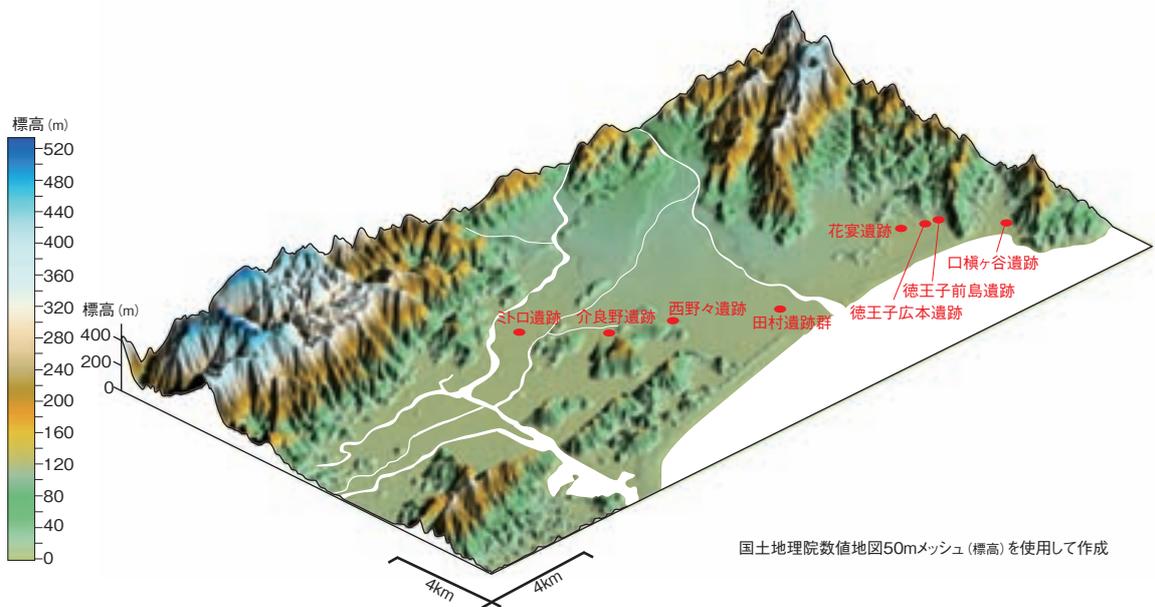


図4-10 調査地点位置図

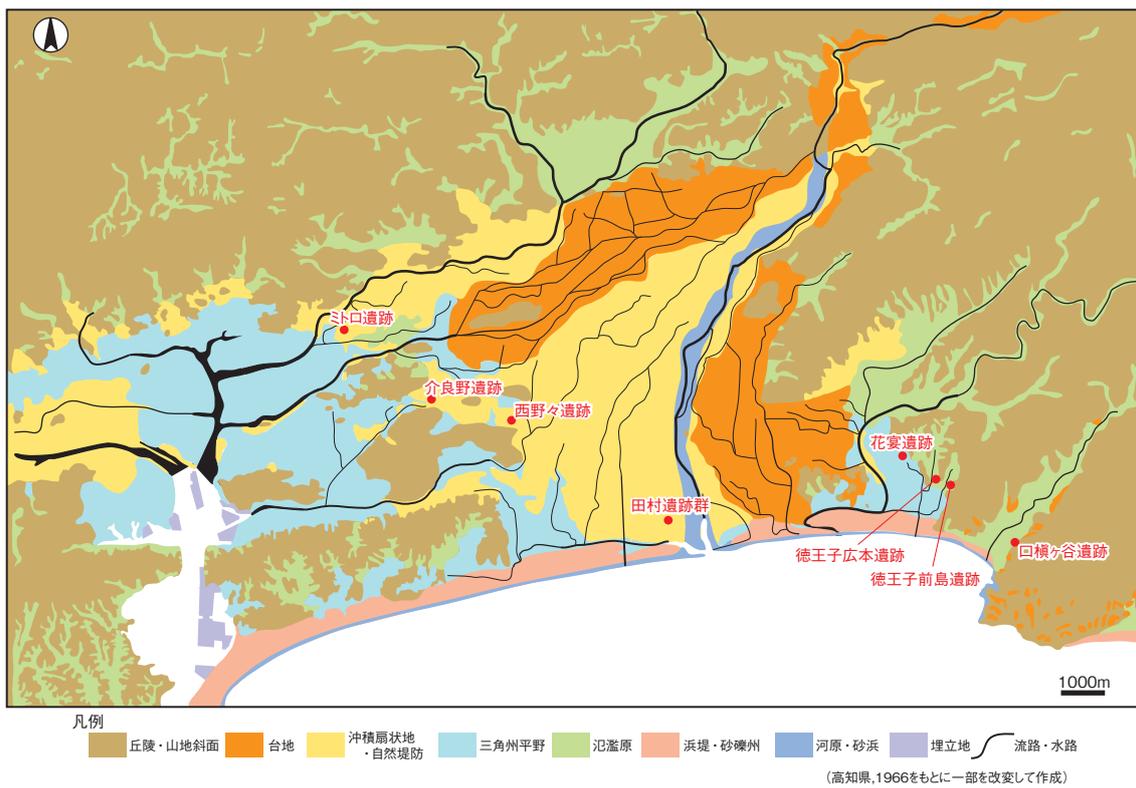


図4-11 西野々遺跡周辺の地形(『高知県 1966』を一部改変)

に重要な成果である(図4-12)。試料の年代値は、V層最上部に形成された古土壌を構成する腐植で  $5230 \pm 40$  yrs BP (C14-1), V層最上部に埋没していた木材片で  $5510 \pm 40$  yrs BP (C14-2), V層上部の砂泥互層中に挟在する炭化物で  $5240 \pm 40$  yrs BP (C14-3)を示す。これらの放射性炭素年代測定値の暦年較正值は、Cal BC 3900-BC 4450前後を示す。年代値をふまえると、V-G層、V-Gs層、V-S層、V-Ms層によって形成された沖積扇状地およびその周囲の氾濫原面は、縄文時代前期後半およびそ

れ以前に形成されたと考えられる。

なお丘陵裾部では、丘陵を構成する基盤岩とV層の関係を捉えることができた。用水路工事に伴う壁面観察を行った32地点では、基盤岩上に斜面上の重力性の堆積物と考えられる極めて淘汰の悪い角礫の細礫混じり砂質シルト層のV-Gm層が堆積し、これをV-S層が覆う。そこから北へ20mほど離れた31地点では、遺構検出面下-4.0mでも基盤岩に達せず、基盤岩は丘陵裾部から急傾斜をなして地下へ潜り込んでいることが推定される。また、丘陵裾部の31地点付近では、角礫の細礫～中礫混じりの火山ガラスを多量に含む黒ボク土のV-Ad層が斜面をなして遺構検出面のV層の古土壌を覆って堆積する。その層相から、V-Ad層は丘陵斜面に存在していた黒ボク土が二次移動して形成された斜面堆積物と推定される。

周辺の考古遺跡との層序対比

上記のような遺構検出面基盤層最上部付近でCal BC 3900-BC 4450 前後の年代値を示す堆積層は、西野々遺跡下流の南西約3kmに位置する介良野遺跡においても確認されている(辻ほか, 2007)。介良野遺跡では、V層上部に対比される堆積層において、5110±40 yrs BP (Cal BC 4000-3800)の年代値が得られており、西野々遺跡のV区の年代値と調和的である(図4-13)。なお、介良野遺跡や西野々遺跡周辺では、土地条件図や土地分類図、空中写真判読によって旧河道の分布が確認される(図4-14)。介良野遺跡では、この旧河道内を介良川が現在流下している。介良野遺跡の分析では、この旧河道の埋没年代に関する年代値も得られている。発掘調査結果から、この旧河道は、V層に対比される堆積層が形成した放棄流路に相当しており、腐植に富む泥層によって埋没していることが確認されている。年代値については、旧河道の最下部で4790±40 yrs BP (Cal BC 3650-3520)、最上部で2090±30 yrs BP (Cal BC 200-40)が得られている。このような年代値と層序から、旧河道については、5000年前頃まで継続した扇状地の土砂供給が停止したことによって、それまで活動的であった流路が放棄流路へと変遷して形成されたと判断される。

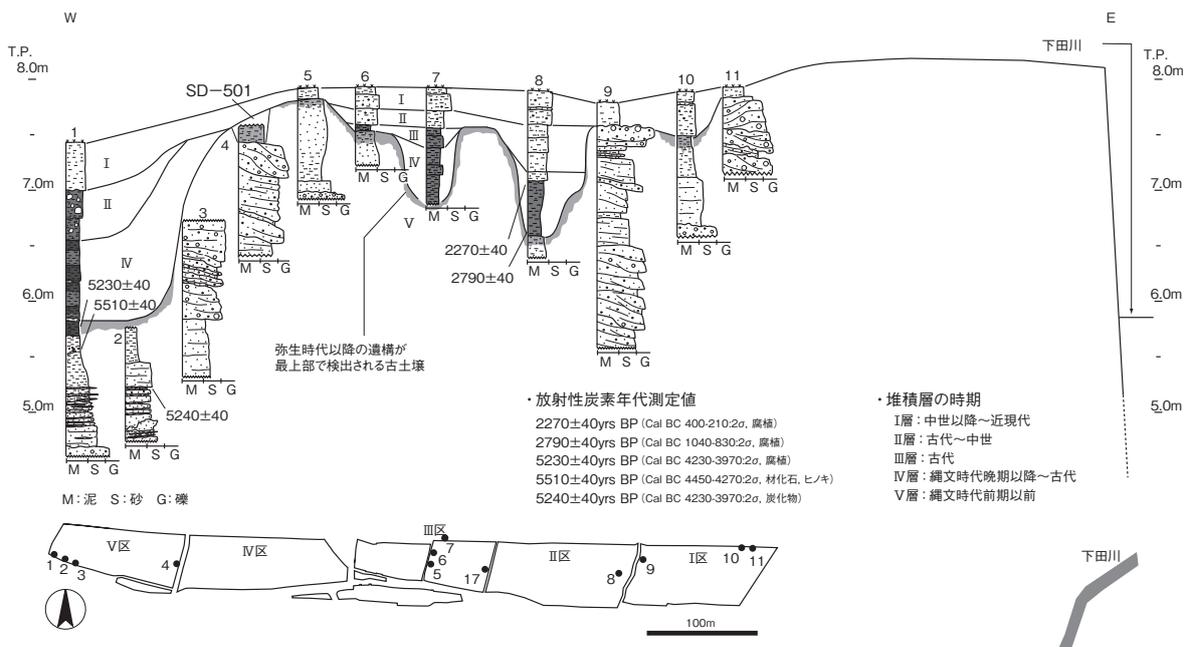


図4-12 西野々遺跡東西方向の層序模式柱状断面図

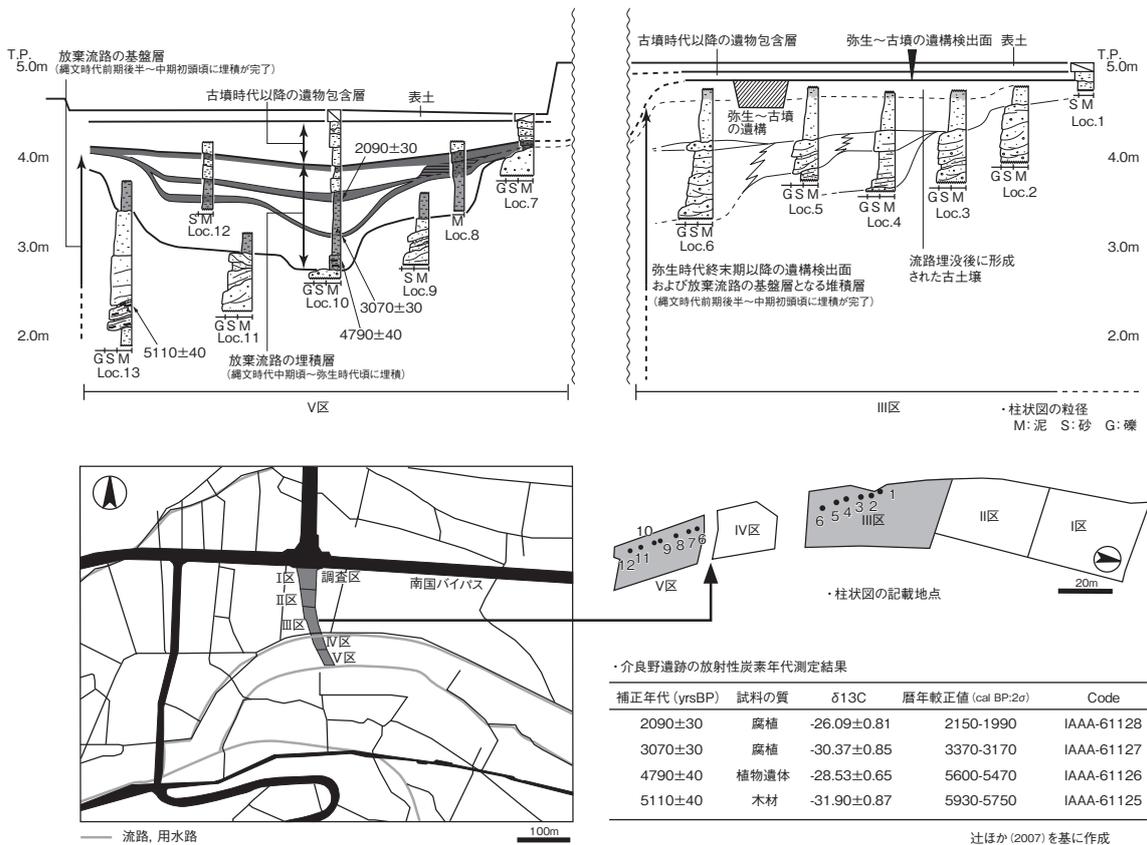


図4-13 介良野遺跡周辺の層序と年代

旧河道内では、現在も小規模な流路が形成されている。旧河道内の現流路については、鈴木(1998)にまとめられた形態と構成物質に基づく低地河川の分類をふまえると、本流の転流後にその旧流路跡に形成された河川である名残川に相当すると判断される。このような名残川では、流路の堆積環境が穏やかで、大規模な洪水の頻度が少なく、かつある一定量の水分量が見込まれるため、灌漑などに利用し易いとされている(鈴木, 1998)。

今回、分析を実施したⅢ区では、弥生時代から中世の溝群が検出されている。これらの溝は、北西方向へ走向する傾向が確認される。また、溝の進入方向については、丘陵裾部を通り、東側へ伸びることが予想される。この溝が伸びる東側には、旧河道が存在しており、現在その中に名残川の下田川が流下している。下田川が流下する旧河道については、その形成年代に関する情報が得られていないが、西野々遺跡および介良野遺跡の成果をふまえると、介良川と同様の地形発達過程を示すものと推測される。旧河道などの周囲の地形の概観をふまえると、西野々遺跡は、北東から南西に舌状に張り出した、縄文時代前期後半頃までに形成された扇状地および自然堤防状の高まり(沖積リッジ)上に立地することが読みとれる。そして、Ⅲ区で検出された溝の走向方向である北西側には、遺跡が立地する地形面より相対的に標高が低い領域が分布することが認識される。上記のような想定される溝の掘削ラインおよび調査区周辺の地形をふまえると、Ⅲ区で検出された溝群は、調査区東側の旧河道内を流下する下田川から取水して、尾根状の微高地を通り、北西側に広がるより低い氾濫原への通水を目的とした灌漑水路である可能性が高いと考えられる。

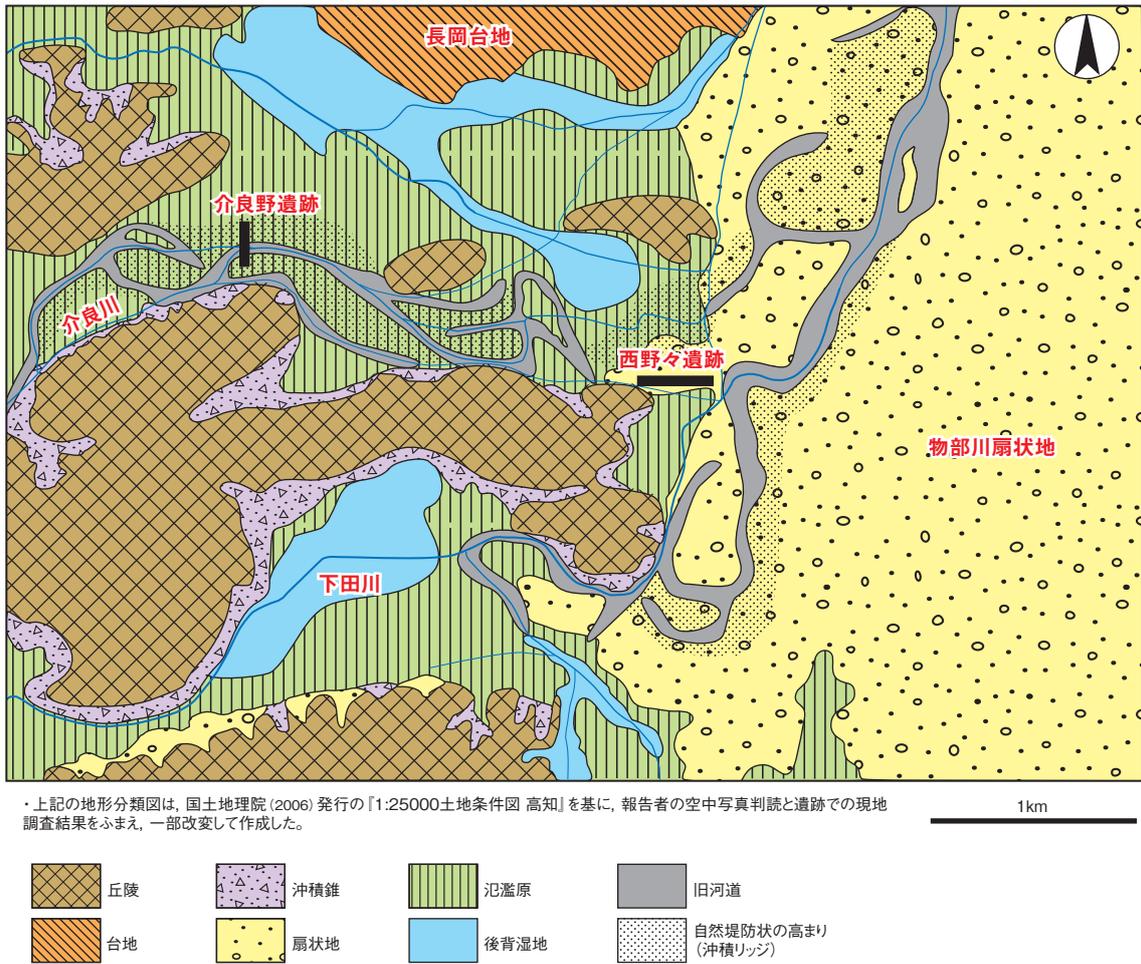


図4-14 調査区周辺の地形分類図

### iii 弥生時代前後から古代の堆積環境と遺跡形成過程

#### 堆積層の特徴

本調査区では、弥生時代以降にV層を基盤として人間活動が展開され、居住域や生産域が形成される。弥生時代前後から古代には、V層上面に形成された流路状の凹地や地形的に低い領域が形成されたV-2区において、腐植質泥層が累重するような環境が形成される。II区の流路状の凹地部分最下部に累重した泥層の腐植からは、 $2740 \pm 40$  yrs BP (2 $\sigma$  暦年較正值: Cal BC1040-830)の年代値が得られている。この年代値をふまえると、調査区内において地形的に低い領域では、縄文時代晩期頃から腐植質の泥層が累重するようになったことがうかがえる。しかしながら、調査区内のほとんどの領域では、上方への堆積物の付加がほとんどなく、土壌が継続的に生成されるような安定した好気的な環境下にあり、当該期に堆積域となる領域は、流路状の凹地内など局所的であることが指摘される。局所的に堆積域となった領域では、腐植質に富み黒褐色を呈するシルト質粘土層のIV層やIII層が累重する。これらの堆積層からは、池や沼などの小さな水域に生育する止水性種の珪藻が多く検出される。前報および今回の14地点の軟X線写真による層相観察では、葉理や層理の発達認められず、静穏な堆積環境下で形成されたことが確認されている。このことから、凹地内を埋積する堆積物は、洪水などで供給されたとは考え難く、周囲の土壌などの流れ込みによって供給されたもの

と推定される。なお、最上部ないし最下部には、植物の根痕や擾乱痕跡が存在しており、この部分で植生が発達したことがうかがえる。前報のⅡ区の流路状凹地の花粉分析では、水生植物のガマ属、オモダカ属、イボクサ属、フサモ属、ミズワラビ属が産出しており、凹地内にはこれらの植物が生育していた可能性がある。層相および珪藻分析結果をふまえると、流路状の凹地内では、周囲からの土壌物質の流れ込みがあるものの、非常に静穏で安定した閉鎖的な浅い滞水域や湿地の環境下であったことが推定される。

#### 推定される堆積環境

上記のような調査・分析結果をふまえると、弥生時代前後から古代に堆積域となったV層上面に形成されたIV層やⅢ層が累重する凹地内やV-2区では、安定した堆積環境の閉鎖的な極めて浅い滞水域や湿地などの堆積環境となっていたことが確認される。ただし、V-2区に累重する腐植質泥層では、珪藻・花粉化石の保存状態が著しく不良であることから、V層上面に形成された凹地よりも、乾燥する時期が長く続いたかあるいは乾湿変動が激しかったことが推測される。それ以外の広い範囲では、ほぼ無堆積の状態が想定され、地表面上において土壌が発達する乾燥し、かつ安定した土地条件が形成されていたと判断される。

#### 弥生時代から古代における調査区の地形発達と人間活動

上述した調査区内で累重するIV層・Ⅲ層の特徴から、弥生時代から古代の時期における調査区内の環境は、以下のように推定される。I区からV-1区においては、縄文時代前期後半およびそれ以前に形成された沖積扇状地堆積物の表層に土壌が形成される安定し乾燥した微高地が形成され、V-2区やV層上面の凹地内においては、閉鎖的でかつ安定した極めて浅い滞水域や湿地が形成されていたと考えられる。このような弥生時代から古代における調査区内の環境は、縄文時代前期後半およびそれ以前に形成された沖積扇状地の地形発達を基盤として成立していることが、V層からの堆積過程において理解される。なお調査区内では、沖積扇状地堆積物のV層上部で新たな流路堆積物や粗粒の氾濫堆積物が認められない。このことから、調査区付近に形成された沖積扇状地面は、V層最上部で得られた放射性炭素年代値が示す縄文時代前期後半頃には遅くとも離水したと考えられる。したがって、弥生時代～古代の遺構・遺物の検出面となるV層最上部の古土壌は、縄文時代前期後半以降から古代頃までの非常に長期にわたって形成されたものと考えられる。

#### iv 古代以降の堆積環境と遺跡形成過程

##### 堆積層の特徴と古代以降における調査区の地形発達と人間活動

調査区内に累重する古代以降の層準は非常に薄く、層厚は20～60cm前後を測るのみである。出土遺物の相対年代から、古代以降の層準は、古代～中世後半のⅡ層、中世後半以降～近現代のⅠ層に区分される。これらの堆積層は、直下のV層を削平して形成されている。Ⅰ・Ⅱ層は、淘汰が非常に悪い礫混じりの泥質砂で構成される。

14地点で実施したⅡ層(軟X線写真の層序区分の2・3層に相当)の軟X線写真による層相観察では、初生的な堆積構造はまったく認められず、よく攪拌され、全体的に密度が不均質な層相からなることが確認される。これらの堆積層は、肉眼観察において塊状無層理の層相を示し、また類似した層相が側方へ連続することが確認される。このような特徴から、Ⅰ層およびⅡ層は、人為的な擾乱を受けて形成された耕作土であると考えられる。

なお、水田耕作土は、湛水しろかき後の還元環境下で形成される凝集状態により団粒が崩壊し、そ

れに伴う泥化の進行により、細粒質からなる壁状構造と、しろかきによる粗粒子のすみやかな沈降により形成された砂の局部的集積からなる単粒状構造が普遍的にみられるとされる(齋藤, 1971)。これに対し、畑地作土では水田作土に比べ、土壌間隙量(土壌固相以外の部分)が多く(森ほか, 1992)、団粒化の程度が大きい(寺沢, 1971・1983)ことが確認されている。また考古遺跡での古畑地土壌でも、粒団構造が発達することが指摘されている(松田・別所, 1997; 松田, 2004; 須永・平山, 2005)。14地点の軟X線写真による層相観察では、古代の耕作土が壁状ではなくブロック状の構造をなすことが示唆される。さらに前報のI区のSD-129や、本報告および前報の古代、中世の耕作土や溝埋土では、栽培種であるイネ属珪酸体が産出するものの非常に少ない。以上の観察・分析結果から、古代に本調査区で形成された耕作土については、畑地の土地利用が卓越していたことも推測される。中世の耕作土についても、植物珪酸体含量の少なさなどから、調査区内で水田が広く維持されるような状況でなかったことが想定される。

### ② V-2区の水環境

V-2区の29地点に累重する腐植質泥層では、珪藻化石の保存状態が著しく不良である。また、同層準で行われた花粉分析でも化石の産出が著しく不良である。

珪藻化石を構成するシリカは、温度が高いほど、流速が早いほど、水素イオン濃度が高いほど溶解度が大きくなり溶けやすいことが実験により推定されている(千木良, 1995)。また、珪藻殻と類似した化学組成を持つ植物珪酸体は、土壌の風化によって溶解する可能性が指摘されている(近藤, 1988)ほか、pH値が高い場所や乾湿を繰り返すような場所において風化が進みやすいと考えられている(江口, 1994・1996)。その他、湿原の乾燥化によって珪藻殻数が急減し保存が悪くなる現象もみられる(小杉, 1987)。考古遺跡においても、安定した地表面となり好気的環境下での土壌発達認められる遺構検出面で、珪藻化石の産出が極めて不良となることが指摘されている(井上, 2003)。

上述した珪藻化石の産出事例と、同時に実施された花粉・植物珪酸体分析結果をふまえると、本地点では、V層上面に形成された凹地に比べて、乾湿の繰り返しが頻繁であったかあるいは、より好気的な土壌環境であったことが推測される。

### ③ 古植生

#### i 遺構検出面基盤層の花化石群集

V-2区の26地点では、放射性炭素年代測定から、縄文時代前期後半頃(V層上部)と判断される花化石群集を1層準のみであるが得ることができた。花化石群集は、木本花粉が優占し、その種類構成が比較的豊富であることが特徴である。種類構成をみると、暖温帯性常緑広葉樹のシイノキ属・アカガシ亜属、暖温帯性の落葉広葉樹であるムクロジ属近似種、暖温帯～冷温帯性の落葉広葉樹であるクマシデ属-アサダ属・ニレ属-ケヤキ属・エノキ属-ムクノキ属・トチノキ属・カエデ属・トネリコ属、温帯性針葉樹を含むモミ属・ツガ属・イチイ科-イネガヤ科-ヒノキ科などの針葉樹、ツル性木本のツタ属・テイカカズラ属などが産出する。このうち、多産した種類はアカガシ亜属とムクロジ属近似種であり、いずれも暖温帯の植生構成要素である。

以上のような花化石群集の特徴から、縄文時代前期後半頃の西野々遺跡を取り巻く山地・丘陵斜面や扇状地の植生は暖温帯の植生であったことが推定される。常緑広葉樹のカシ類・シイ類などは土地的に安定した場所に生育する樹種であることから山地・丘陵を中心に林分を形成していたことが推定される。この林分には、比較的多産した落葉広葉樹のコナラ亜属、ツル性木本のテイカカズ

ラ属・ツタ属、シダ植物のイノモトソウ属なども構成要素として存在した可能性がある。また、落葉広葉樹の種類のうち、比較的多産したニレ属-ケヤキ属、エノキ属-ムクノキ属は、その生態性から(大野, 1979; 阪本, 1987)、物部川の氾濫原上を中心に分布していたと考えられる要素であり、多産したムクロジ属近似種のほか、渓谷林要素であるトチノキ属・カエデ属なども氾濫原上に分布していたことが推定される。また、針葉樹のモミ属とツガ属は暖温帯性種を伴うことから、温帯針葉樹のモミ・ツガに由来する可能性が高い。これら温帯針葉樹は、斜面崩壊地や地滑りなどにより鉍質土壌が露出する攪乱地が生育適地(中静, 2004)であることから、扇状地などを中心に分布していた可能性も考えられる。なお、V-2区の29地点のV層最上部に相当する泥層中で確認された材化石は、ヒノキと同定されている。このヒノキは、後背湿地の堆積環境下で形成された泥層中に埋没していたことから、29地点の周辺に生育していたものと考えられる。

以上、縄文時代前期後半頃の西野々遺跡周辺は、地形環境や水文条件に応じた暖温帯性の森林植生が成立していたことが推定される。本地域における当時の古植生については、本遺跡西方約1.5kmに位置する伊達野の花粉分析研究成果がある(三宅ほか, 2005)。この成果における、放射性炭素年代から推定される同時期の花粉化石群集(伊達野INT-6花粉帯)は、木本花粉群集組成は今回の結果と非常に類似するものの、草本花粉の産状は異なり、伊達野では草本類が占める割合が高い。草本類の産状の差異は、調査地点の堆積場の状況の差異に起因するものであり、より低湿な場所であった伊達野で草本植生が発達していたことを示している。木本組成は類似していたことから、今回の結果が地域的広がりをもった植生を反映していることがうかがえる。

この上位に累重する弥生時代頃とされるV-2区29地点では、花粉の保存状態が非常に不良である。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている(中村, 1967)。層相をふまえると、本分析での花粉化石の保存状態の悪さは、珪藻化石の分解・消失と同様に土壌化作用に伴うものと推測される。

ところで、植生は時間経過とともに変化し、気候・土地の条件が安定していれば先駆的植生から「極相」と呼ばれる安定した植生に遷移するといわれてきたが、実際の植生は気候的条件が同様であっても多様で複雑であることが近年の生態学的調査で明らかになってきている。このような植生の多様性は、土砂くずれや山火事、河川の氾濫などの「攪乱」の種類が大きく関係し、その頻度、再来間隔、予測性、面積、強度といった攪乱レジームの状況に適応した植物からなる植生が形成されているのである(中静, 2004)。西野々遺跡は、先述したように扇状地に位置することから、その発達期であるV層形成期には多大な攪乱の影響を受けていたが、V層上部の土壌形成期以降は攪乱の影響が弱まり、それを契機として植生が大きく変化した可能性がある。今回の結果からは、このような植生変化を推定することはできなかったが、縄文時代前期後半頃の花粉化石群集をみると、植生遷移の途中相をなす種類と、極相をなす種類などからなり多彩であることが窺える。どのような林分を形成していたかは、今後、調査地域における古植生調査成果の蓄積を待って再検討していきたい課題である。

## ii 弥生時代～古代の植物珪酸体群集

Ⅲ区の弥生時代から古代の溝埋土や、弥生時代頃と推定されるV-2区29地点の植物珪酸体分析では、湿潤な場所を好むヨシ属よりも、明るく開けて乾燥した場所を好むネザサ節を含むタケ亜科が多産する。この他には、ネザサ節と同様の生育条件を好むウシクサ族を含むススキ属の産出が認められる。このような植物珪酸体化石群集の特徴から、当該期の調査区では、全体的に明るく開けた高

燥地が広がっていたことが示唆される。このような植物珪酸体群集は、本調査区の地形発達史とも調和的である。

Ⅱ区の腐植質泥層が累重する流路状の凹地では、前報の分析結果において、縄文時代晩期頃から古代の花粉化石群集が得られている。この分析地点は、面積の小さな水域でかつ閉鎖的な環境であったことが推定されるため、調査区周辺の結果を比較的良く反映している可能性が示唆される。分析結果は、イネ科の草本花粉が優占する花粉化石群集であり、調査区周辺で当該期に草地が広がっていたと考えられる。また、今回の溝埋土などの植物珪酸体群集では、樹木起源の珪酸体がまったく検出されていない。このような分析結果も弥生時代から古代における調査区では、草地が卓越するような植生であったことを支持している可能性がある。以上、これまでに得られた花粉および植物珪酸体分析結果をふまえると、弥生時代から古代に、調査区やその近辺では、ネザサ節やススキ属などのイネ科植物を中心とする草地が卓越する植生景観が広がっていたことが推定される。

次に本時期の栽培種の動向について見てみると、弥生時代～古墳時代の溝埋土(SD-3002：弥生中期，SD-3008：弥生後期，SD-3025：古墳)の植物珪酸体分析では、弥生時代の遺構埋土でイネ属がまったく検出されず、古墳時代のSD-3025で短細胞珪酸体180個/g，機動細胞珪酸体40個/gと極少量認められるのみである。このような分析結果からは、弥生時代～古墳時代に調査区内において稲作地が存在していなかったことや、分析地点周囲に多くのイネが持ち込まれるような状況はなかったことが示唆される。また、弥生時代頃と推定されるV-2区29地点では、イネ属がまったく検出されない。このことから、分析地点においても稲作地が存在しないか、もしくは多くのイネが持ち込まれるような状況ではなかったことが推定される。

古代については、Ⅲ区SD-3035で短細胞珪酸体710個/g，機動細胞珪酸体350個/gが確認される。これら古代の溝埋土のイネ属珪酸体含量は全体的に少ない。植物珪酸体分析結果と、上述した層相から、当該期の調査区内においては、稲作地の分布が少なかったものと想定される。

### iii Ⅲ区柱材の樹種

樹種同定を行ったⅢ区で検出された柱材は、中世の時期に相当する。同定された種類は、ヒノキ、ヒノキ科、アカマツ、タブノキ属である。このような同定結果は、当該期の遺跡周辺の植生を構成していた樹種の一端を示しており、今後の類例蓄積が期待される。

### ④ Ⅲ区の溝の埋没状況

本節では、現地での層相観察および粒度分析と不攪乱堆積物の軟X線写真の解釈結果に基づく、弥生時代のSD-3008と古代後半から中世のSD-3029の埋没過程について検討を試みる。

#### i SD-3008(弥生時代)

##### 層相の解釈

SD-3008埋土は、褐色を呈する堆積物を主体となし、全体的に粒度や色調に大きな変化が認められない。埋土は、すべて砂質粘土質シルトに区分される堆積物によって構成される。

遺構基盤層と埋土3層との層界で認められた凹凸は、遺構の堀方を示すことから、溝掘削時、すなわち遺構加工面に伴う構造と解釈される。遺構基盤層最上部では、凹凸に沿うようにして変形した層準が存在しており、溝掘削時に生じたものと考えられる。埋土3層内では、現地での層相観察において、遺構基盤層からなる直径20～30mm前後の垂角状の偽礫の散在が認められた。このような層相と、直下に遺構加工面が存在することと、後述する遺構機能時に形成された可能性のある埋土2-2

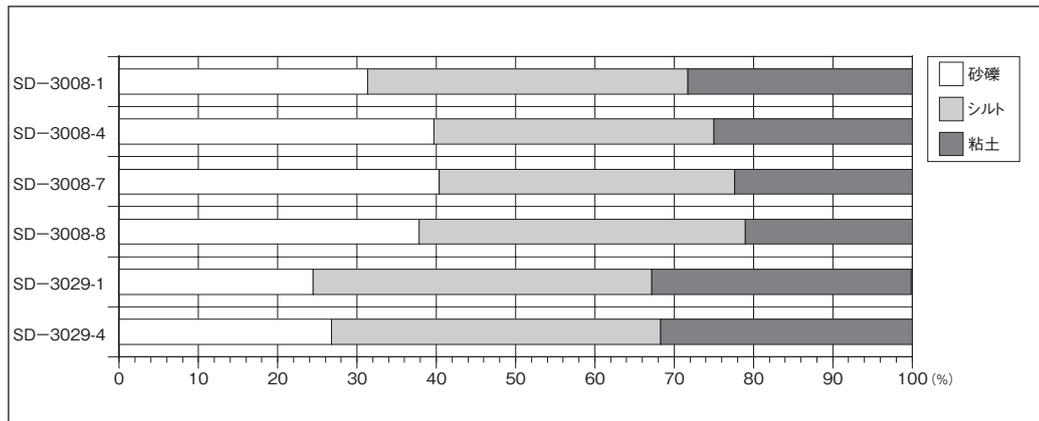


図4-15 SD-3008・3029粒度分析結果グラフ

層が直上に載る層序関係をふまえると、埋土3層は、遺構の掘削から遺構機能時まで、遺構掘削土などが溝内へ再堆積した初期流入土と解釈される。

SD-3008埋土2層は、2つの単層に細分される。上部に存在する2-1層は、塊状無層理の層相を示し、全体的に均質な層相を示す。軟X線写真からは、はっきりとした偽礫の混在が確認されない。現地および試料の肉眼観察でも、2-1層内で遺構基盤層の偽礫が散発的に含まれることが確認されるものの、多量の偽礫の包含は認め難い。葉理や層理が認められないことから、2-1層では、流水による累重で形成された可能性が低く、より緩慢で穏やかな堆積営力下で形成されたことが示唆される。なお、偽礫の包含がほとんど確認されないことから、本層が溝の埋め戻しを目的とした客土を主体とする堆積層である可能性は低いものと思われる。これらのことをふまえると、2-1層は、溝周囲に存在していた土壌や人為的擾乱層が、重力性の営力によって、溝内に徐々に移動して形成されたものと推定される。このような溝の埋没は、遺構が放棄された後に継続的に生じたものと推定される。この2-1層最上部には、腐植の集積が認められ、埋没が進行した段階に土壌の形成が進んだことが確認される。

埋土3層の直上に載る2-2層では、現地での肉眼観察において、上下の堆積層に比べ幾分砂質であることが認識される。粒度分析結果においては、他の埋土と大きな差が認められないが、砂礫の含有量が僅かに多い結果が得られており、肉眼観察結果を裏付ける結果となっている(図4-15)。溝の中心部のみに存在する本層の分布および、上記した初期流入土の埋土3層と遺構放棄段階の2-1層との間に挟在する層序関係から、2-2層は遺構機能時に形成された堆積層である可能性が示唆される。この2-2層は、上下の堆積層より砂質であり、また水が流れたことを示唆する葉理の可能性のある構造も見出されることから、溝底部を通過した水流によって形成されたことが推測される。

埋土1層は、埋土2-1層の古土壌を覆って累重する。本層の直上には、中近世以降の耕作土が累重し、さらに現地表面も近接している。このことから、本層で観察される角塊状の土壌構造は、埋土1層埋没後に発達したものと捉えられる。本層の軟X線写真の層相は、下位と大きな差が認められない。試料の肉眼観察では、直径5~10mm程度の偽礫と思われる構造が多数含まれているように認識される。このことから、埋土1層は、人為的な埋め戻し土である可能性が考えられる。

#### 埋没過程

上記した層相観察から、SD-3008埋土については、遺構加工面とそれに伴う変形層準、加工時以

降から機能時までに累重した初期流入土、遺構機能時形成層、遺構放棄後に形成された古土壌を挟在する溝内の流入土、さらに人為的な埋め戻し土に区分される。

SD-3008 内では、溝内の滞水に伴って形成された堆積層の挟在が認められない。このことから、SD-3008 が機能していた時期には、調査区の地下水位が低く、溝内が常時滞水するような状態ではなかったと認識される。このような古水文環境から、溝については、調査区の排水を目的としたものではないと判断される。層序の節での検討から、Ⅲ区で検出された溝は、調査区東側の旧河道から北西側の地形的に低い領域への導水を目的とした灌漑水路である可能性が指摘される。これらのことをふまえると、SD-3008埋土のうち、遺構機能時に対比され、流水の営力が想定される埋土2-2層は、溝の通水時に伴って形成された可能性がうかがえる。

以上のことから、SD-3008では、次のような埋没過程が復元される。溝掘削時には、遺構基盤層直上に加工面とその形成に伴う変形層準が形づくられる。その後、埋没初期段階においては、初期流入土の埋土3層が累重する。遺構機能時には、この埋土3層を基盤として、溝内の通水時に伴う堆積層である可能性のある埋土2-2層が形成される。溝が放棄された後には、重力性の営力によって徐々に2-1層によって埋積が進行したことが推測される。その後、溝は部分的なくぼみを残して、その状態で一時期安定して、土壌の形成が進行する。このくぼみは、ある段階で人為的に完全に埋め戻されたと推測される。この埋め戻し層が1層である。

#### ii SD-3029(古代)

##### 層相の解釈

SD-3029埋土は、褐色を呈する堆積物を主体となし、粒度や色調に全体的に大きな変化が認められない。埋土は粒度分析の結果、すべて砂質粘土質シルトに区分される堆積物によって構成される。この粒径区分は、SD-3008埋土と同様であるが、SD-3029埋土の方がより多くの泥分を含む(図4-15)。

SD-3029埋土は、SD-3027の埋土を切って形成されている。最下部に存在する埋土2層は、3つの単層に細分される。このうち2-3層と2-1層は、SD-3008埋土2-1層と同様に塊状無層理の層相を示し、重力性の営力で徐々に埋積したものと推測される。2-3層は、SD-3029加工面の直上に載ることから、遺構掘削後の初期流入土と考えられる。2-1層は、以下に述べる遺構機能時の2-2層を覆って累重することから、遺構放棄段階の堆積層と判断される。

埋土2-2層は、葉理状の構造が認められ、流水の営力下によって形づくられたことが想定される。本層は、SD-3008での堆積過程をふまえると、遺構機能時に形成された堆積層と認識される。埋土1層は、試料の肉眼観察において、SD-3008と類似した構造を示すことから、同様に人為的な埋め戻し土であると考えられる。

##### 埋没過程

SD-3029埋土については、SD-3008で観察された堆積過程とよく似た傾向を示す。初期流入土と考えられる埋土2-3層の直上に載る遺構機能時と思われる埋土2-2層は、上記のSD-3008の結果をふまえると、溝の通水時に伴って形成されたものと捉えられる。その後、溝が放棄された後には、重力性の営力を主体として徐々に2-1層による埋積が進行して、くぼみを残した段階で土壌が発達するようになる。そして、そのくぼみは、ある段階で人為的に完全に埋め戻されたと推測される。この埋め戻し層が1層である。

## 溝の形成および埋没過程

上記の検討から、SD-3008、SD-3029では、ほぼ共通した埋没過程を示すことが明らかとなった。これらの溝では、滞水層が挟在しておらず、基本的に溝内が乾燥した状態にあったと判断される。初期流入土直上の溝底部の中心付近には、遺構機能時と推定される流水によって形成されたと推定される薄層が挟在する。本層で観察される葉理状の構造は不明瞭であることから、弱い流れによる溝底部付近の堆積物の再堆積によって形づくられたものと推測される。上記のような埋土の特徴は、溝が排水よりも導水の機能を有していたことを示唆するものと考えられる。また溝内では、周囲からの流れ込み層や人為的な排土や土器や植物体などの残滓の流入が、ほとんど挟在しないことにも着目される。このことから、溝周囲に植生が発達して地表物質の移動が妨げられていたことや、人為的な排土や残滓などが流入ないし投棄がなされないような状況が存在していたことが想定される。

溝の放棄段階では、重力性の営力により徐々に埋積が進行する。よって、溝は水路としての機能修了後、埋め戻しなどを伴わず、そのまま放置されていた可能性が高い。このような埋没過程は、水路としての機能が放棄された段階で、積極的な土地利用がなされなくなったことを示唆するものと解釈される。溝群が検出されたⅢ区の領域では、弥生時代から中世まで同様の走向方向で、連綿と溝の掘削が行われており、本調査区が当該期を通じて水利における導水ライン上に位置していたものと考えられる。西野々遺跡やその周辺では、地形面が離水した縄文時代前期後半以降に大きな地形変化が生じていないことが堆積層の累重から確認される。以上のことと先に述べた調査区周辺の地形と溝との関係をふまえると、溝の構築時期である弥生時代から中世に至る長期間にわたって、Ⅲ区は耕作地としての土地利用よりも、農業水利における灌漑水路の掘削および通過区間として、重要性の高い場所であったと認識される。

以上のような西野々遺跡の立地環境および溝の埋没過程の検討から、物部川扇状地では、名残川が流下する旧河道が、弥生時代以降の農業灌漑において重要な役割を果たしていた可能性のあることが示唆される。この点については、物部川扇状地やその周囲の氾濫原上に存在する考古遺跡の立地論的な検討をさらに進め、微地形と土地利用に関する動態の把握を今後努めていきたい。

### (5) 小結

#### ① 堆積環境・地形発達

- ・ 遺構検出面基盤層の形成時期は、縄文時代前期後半およびそれ以前である。
- ・ 遺構検出面基盤層は、網状河川の堆積システムによって形成された。
- ・ 縄文時代前期後半には、Ⅰ区～Ⅴ-1区が物部川流域から供給された堆積物からなる沖積扇状地ローブ末端、Ⅴ-2区が沖積扇状地ローブ端部からその周囲に後背湿地であった。
- ・ 遺構基盤層によって形作られた沖積扇状地面やその周囲の氾濫原面は、縄文時代前期後半以降に離水して、それ以降、安定した堆積環境が形成された。
- ・ この地形面の離水に伴い、西野々遺跡周辺で確認される旧河道は、放棄流路となり、その中を名残川が流下するようになる。
- ・ 弥生時代以降から古代頃までの遺構・遺物検出層準を構成する古土壌は、縄文時代前期後半以降から古代頃までの長期にわたる土壌生成期間によって形成された。
- ・ 調査区内において相対的に地形が低い領域では、縄文時代晩期頃から古代頃まで、腐植質の泥

層が累重する。ここでは、当該期に水生植物が分布する安定した閉鎖的で極めて浅い滞水域や湿地となった。

- ・ 人間活動の展開が認められる弥生時代前後から古代には、調査区の広い領域で土壌が発達する乾燥し安定した土地条件が形成されていた。

- ・ 西野々遺跡の地形や土地条件の基本的な骨格は、縄文時代前期後半頃までに形成された沖積扇状地および氾濫原の地形発達によるものと考えられた。

## ② 古植生

- ・ 縄文時代前期後半には、調査区周囲の丘陵地などにはカシ類・シイ類などを主体とする暖温帯性の植生が成立していた。また、物部川の氾濫原上など河川攪乱の影響を受ける領域では、ニレ属-ケヤキ属、エノキ属-ムクノキ属などの落葉広葉樹からなる林分も存在したことが推定された。なお、このような植生は、基本的には弥生時代から古代前後まで成立していたことが前報の花粉分析結果からうかがえるが、草本花粉の割合が増加することから林分域は減少している可能性がある。

- ・ 弥生時代前後から古代に調査区内は、ネザサ節、ススキ属などが分布する草地を主体とする植生景観が広がっていた。このような草地が卓越する景観は、続く中世でも同様であったことが確認される。

- ・ 弥生時代から古代さらに中世において調査区内では、水田が卓越するような土地利用でなかった可能性が高いことが、植物珪酸体分析および層相観察結果から示唆された。

- ・ 中世の柱穴跡から検出された木材、炭化材の樹種は、ヒノキ、ヒノキ科、アカマツ、タブノキ属に同定された。

## ③ Ⅲ区で検出された溝群について

- ・ Ⅲ区で検出された溝群は、調査区東側の旧河道内を流下する下田川から取水して、尾根状の微高地を通り、北西側に広がるより低い氾濫原への通水を目的とした灌漑水路である可能性が高いことが、立地的観点から指摘された。

- ・ 軟X線写真による層相観察を実施したSD-3008(弥生)、SD-3029(古代)の溝では、滞水層が挟在しておらず、基本的に溝内が乾燥した状態にあったと判断された。

- ・ これらの溝では、初期流入土の直上に、溝内の弱い水流による通水に伴って形成されたと推測される遺構機能時形成層が見いだされた。

- ・ 溝は放棄後に重力性の堆積営力で徐々に埋積が進行し、くぼみを残した状態で一時期安定して、土壌化が進行したことがうかがわれた。

- ・ 溝は最終的に人為によって埋積されたと推測された。

- ・ 溝群の成立と調査区の地形発達史から、Ⅲ区は農業水利における灌漑水路の掘削および通過区間としての重要性が高い場所であったと認識される。

### 3. 西野々遺跡から出土した土器の胎土分析

#### (1) はじめに

本節では、胎土薄片作製観察と胎土蛍光X線分析からみた西野々遺跡出土の土器胎土分析結果について述べる。分析試料の器種、相対年代などについては、表4-9に示した。

表4-9 胎土分析試料一覧

番号	地区名	遺構番号	図版番号	器種	器形	時代	備考
8	Ⅱ区	SB-225	2263	土師器	小皿	9C後~10C初	〔西野々遺跡Ⅰ〕
9	〃	〃	2264	土師器	小皿	9C後~10C初	〃
10	〃	SD-216	2187	土師器	皿	9C後半	〃
11	〃	SD-218	2205	土師器	杯	9C後半	〃
12	〃	P-222	2237	須恵器	高杯	9C前半	〃
13	〃	P-284	2400	土師質土器	椀	12C	〃
14	〃	SD-215	2176	土師器	杯	9C前半	〃
15	〃	SK-252	2269	土師器	高杯	9C	〃
16	Ⅲ-1区	SD-3018	3133	土師器	甕	6C後~7C前半	〔西野々遺跡Ⅱ〕
17	〃	SD-3029	3252	土師質土器	杯	10C前半	〃
18	〃	SD-3071	3389	土師器	甕	10C前半	〃
19	Ⅲ-4区	SK-356	3207	土師質土器	杯	14C前半	〃
20	〃	SB-325	3181	土師質土器	杯	12C後半	〃
21	Ⅲ-1区	SD-3050	3351	土師器	高杯	9C後半	〃
22	Ⅲ-4区	SK-356	3210	土師質土器	小皿	14C前半	〃
23	Ⅲ-1区	SD-3034	3286	須恵器	椀	10C前半	〃
24	〃	〃	3326	土師質土器	椀	10C前半	〃
25	〃	〃	3308	土師質土器	小杯	10C前半	〃
26	〃	〃	3270	土師器	羽釜	10C前半	〃
27	〃	〃	3323	土師質土器	皿	10C前半	〃
28	〃	〃	3293	須恵器	甕	9C後半	〃
29	〃	〃	3343	黒色土器(内黒)	椀	10C前半	〃
30	〃	〃	3303	土師質土器	小杯	10C前半	〃
31	〃	〃	3288	須恵器	高杯	9C後半	〃
32	〃	SD-3003	3106	弥生	甕	弥生終末	〃

#### (2) 分析方法

##### ① はじめに

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉍物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法とがある。前者は粉碎による重鉍物分析や薄片作製などが主に用いられており、後者では蛍光X線分析が最もよく用いられている方法である。今回の試料のように比較的粗粒の砂粒を含み、低温焼成と考えられる土器の分析では、前者の方が、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点がある。さらに前者の方法の中でも薄片観察は、胎土中における砂粒の量はもちろんのこと、その粒径組成や砂を構成する鉍物、岩石片および微化石の種類なども捉えることが可能であり、得られる情報は多い。一方、蛍光X線分析は、胎土中の砂粒だけではなく、素地を作っている粘土も含めた特性を表しており、また、機器分析による数値データで表されることから、客観性、再現性がよいということがある。したがって、ここでは薄片観察法および蛍光X線分析を併用して胎土分析を行う。以下に手順を述べる。

##### ② 胎土薄片作製鑑定

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。薄片は偏光顕微鏡による岩石学的手法を用いて観察し、胎土中に含まれる鉍物片、岩石片および微

化石の種類構成を明らかにした。

データの呈示は、松田ほか(1999)が示した仕様に従う。砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5 mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質(細粒・微粒シルト、粘土)のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

### ③ 胎土蛍光X線分析

波長分散型蛍光X線装置を用いたガラスビード法による定量分析を行う。

#### i 測定元素

測定元素はSiO<sub>2</sub>、TiO<sub>2</sub>、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、MnO、MgO、CaO、Na<sub>2</sub>O、K<sub>2</sub>O、P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>の10元素およびLOIとRb、Sr、Zr、Baの微量4元素である。

#### ii 装置

理学電機工業社製RIX1000 (FP法のグループ定量プログラム)

#### iii 試料調製

試料を振動ミル(平工製作所製TI100; 10ml容タンクステンカーバイト容器)で微粉碎し、105℃で4時間乾燥させた。この微粉碎試料についてガラスビードを以下の条件で作成した。

溶融装置; 自動剥離機構付理学電機工業社製高周波ビードサンプラー (3491A1)

溶剤及び希釈率; 融剤(ホウ酸リチウム)5.000g: 試料0.500g

剥離剤; LiI(溶融中1回投入)

溶融温度; 1200℃約7分

#### iv 測定条件

X線管; Cr (50Kv-50mA)

スペクトル; 全元素K α

分光結晶; LiF,PET,TAP,Ge

検出器; F-PC,SC

計数時間; PeaK40sec,Back20sec

### (3) 分析結果

#### ① 胎土薄片作製鑑定

観察結果を表4-10～14、図4-16～20に示す。試料番号32を除く24点の試料全体を通じて、石英および斜長石の鉱物片を多く含む。それ以外の砂粒では、鉱物片はカリ長石、緑レン石、黒雲母、不透明鉱物などが少量～微量認められ、岩石片はチャート、流紋岩・デイサイト、多結晶石英、花崗岩類などが少量～微量認められる。また、試料によっては、少量～微量の火山ガラスや植物珪酸体なども含まれる。なお、砂粒自体の含有量が少ないために、岩石片がほとんど計数されない試料もあるが、後述する元素組成において、いずれも岩石片を含む試料と近い組成を示すことから、これらの試料も本来は同様の岩石片の種類構成を有していると考えて良い。一方、試料番号32の鉱物片においては斜長石の量比が他の試料に比べて低く、緑レン石が多い。また、他の試料には全く認められないアクチノ閃石が少量含まれている。岩石片においては、多結晶石英や花崗岩類が含まれることは共通するが、チャートが認められないことと結晶片岩および緑色片岩の変成岩類が少量含まれることで

表4-10 薄片観察結果(1)

試料	砂粒区分	砂粒の種類構成																				合計						
		鉱物片										岩石片											その他					
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	アクチノ閃石	緑帘石	白雲母	黒雲母	ジルコン	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類		ひん岩	結晶片岩	綠色片岩	珪化岩	火山ガラス	植物珪酸体
8	細礫																											0
	極粗粒砂																											0
	粗粒砂																											0
	中粒砂																											0
	細粒砂	1																								2	3	
	極細粒砂	5	2	6										1												4	18	
	粗粒シルト	19	3	9					1	4		1	1													1	5	44
	中粒シルト	23	2	9				1	1	3																	4	43
基質																										245		
孔隙																										17		
9	細礫																											0
	極粗粒砂																											0
	粗粒砂																											0
	中粒砂																											0
	細粒砂	1						1																		1	3	
	極細粒砂	4		2					1	1			1													1	10	
	粗粒シルト	18	6	11					3	3		2	1														5	49
	中粒シルト	23	5	15				2	1	3	1																3	53
基質																										260		
孔隙																										7		
10	細礫																											0
	極粗粒砂																											0
	粗粒砂																											0
	中粒砂											1	1															2
	細粒砂	4											1			1											6	
	極細粒砂	14	4	3			1						5														27	
	粗粒シルト	25	8	16			1	1					3														54	
	中粒シルト	46	5	18					2	3		1															75	
基質																										377		
孔隙																										4		
11	細礫																											0
	極粗粒砂																											0
	粗粒砂																											0
	中粒砂																											0
	細粒砂																											0
	極細粒砂	2	1	3			1		1				2														10	
	粗粒シルト	22	2	10				1		4		1														1	41	
	中粒シルト	39	6	19					3	3																	70	
基質																										313		
孔隙																										6		
12	細礫																											0
	極粗粒砂																											0
	粗粒砂																											0
	中粒砂	2											1														3	
	細粒砂	7	3										6						4								20	
	極細粒砂	28	8	3									5					2							1		47	
	粗粒シルト	35	9	11						1	1	2													1	2	62	
	中粒シルト	24	5	10						1		1														1	42	
基質																										300		
孔隙																										15		





3. 西野々遺跡から出土した土器の胎土分析 (3) 分析結果

表4-13 薄片観察結果(4)

試料	砂粒区分	砂粒の種類構成																	合計											
		鉱物片										岩石片						その他												
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	アクチノ閃石	緑帘石	白雲母	黒雲母	ジルコン	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト		安山岩	多結晶石英	花崗岩類	ひん岩	結晶片岩	緑色片岩	珪化岩	火山ガラス	植物珪酸体		
23	砂	細礫																											0	
		極粗粒砂																												0
		粗粒砂																												0
		中粒砂																												0
		細粒砂			1										1						1									3
		極細粒砂	8	5	4										2						3									22
		粗粒シルト	19	2	11										2															34
	中粒シルト	20	1	14																									35	
基質																											208			
孔隙																											13			
24	砂	細礫																											0	
		極粗粒砂																												0
		粗粒砂	1																											1
		中粒砂	2	1														2		4										9
		細粒砂	2											3			1		2	1							1			10
		極細粒砂	15	2	7															1										25
		粗粒シルト	20	4	9									1															2	36
	中粒シルト	19	7	12																							1		39	
基質																											206			
孔隙																											2			
25	砂	細礫																											0	
		極粗粒砂																												0
		粗粒砂											1													1				2
		中粒砂	1	1										1			1		3							1				8
		細粒砂	10	2									1		4		1	1	2											21
		極細粒砂	8	4	3									4		1		1												21
		粗粒シルト	7	4	7																								4	22
	中粒シルト	3	1	3																							1		8	
基質																											175			
孔隙																											19			
26	砂	細礫																											0	
		極粗粒砂	2	1	1																2									6
		粗粒砂	20	6	10		1						1		1	1	1		7	17										65
		中粒砂	24	7	10												1		1	5	9					1	1			59
		細粒砂	5	3																							3			11
		極細粒砂	9	1	5												1			1							5	1		23
		粗粒シルト	8	2	6																							2	3	21
	中粒シルト	9	1	4																							1		15	
基質																											386			
孔隙																											42			
27	砂	細礫																											0	
		極粗粒砂																												0
		粗粒砂												1																1
		中粒砂	4	2	3										2		1			3	2									17
		細粒砂	18	2	4										6		1			4								1		36
		極細粒砂	14	6	10															1										36
		粗粒シルト	17	4	11																									34
	中粒シルト	15	3	15																									33	
基質																											382			
孔隙																											41			

表4-14 薄片観察結果(5)

試料	砂粒区分	砂粒の種類構成																	合計											
		鉱物片										岩石片						その他												
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	アクチノ閃石	緑簾石	白雲母	黒雲母	ジルコン	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト		安山岩	多結晶石英	花崗岩類	ひん岩	結晶片岩	緑色片岩	珪化岩	火山ガラス	植物珪酸体		
28	砂	細礫																											0	
		極粗粒砂																												0
		粗粒砂	3																		2	2								7
		中粒砂	5																		1	2								8
		細粒砂	9	6	3									1			1	1			1						1			23
		極細粒砂	26	6	12									2							2									48
		粗粒シルト	29	10	14								1	1							1									56
		中粒シルト	25	9	23																									57
基質																											522			
孔隙																											37			
29	砂	細礫																											0	
		極粗粒砂														1				1										2
		粗粒砂	2										1																	3
		中粒砂	3		1								7							5	1									17
		細粒砂	20	1	3								9		1	1				6	2						1			44
		極細粒砂	31	4	12				1	1			2			2				5	1									59
		粗粒シルト	22	4	10															1										37
		中粒シルト	15	3	11																									29
基質																											313			
孔隙																											8			
30	砂	細礫																											0	
		極粗粒砂												1	2											1				4
		粗粒砂							1			2	3	1											1					8
		中粒砂		2									1	5						3	1	1	1							14
		細粒砂	4	2	2									1	1		1			2	2									14
		極細粒砂	18	4	7				1	2			1	1						1										35
		粗粒シルト	14	5	10								1							1										31
		中粒シルト	11	5	10																									26
基質																											354			
孔隙																											9			
31	砂	細礫																											0	
		極粗粒砂																												0
		粗粒砂																	1						1					2
		中粒砂	13														1	2			7	1								24
		細粒砂	10											2				1			1									14
		極細粒砂	30		3									4				1			2									40
		粗粒シルト	26	2	6																									34
		中粒シルト	20		10																									30
基質																											278			
孔隙																											18			
32	砂	細礫																											0	
		極粗粒砂																							1					1
		粗粒砂																		2	1			1	1					5
		中粒砂	2																	4			3			1				10
		細粒砂	10		3			1	1		1									4			1	1		2				24
		極細粒砂	23		4			1	4	4	3									4						3				46
		粗粒シルト	13	1	2				4	10										1						1				32
		中粒シルト	8	1	2				1	4																				16
基質																											210			
孔隙																											28			

3. 西野々遺跡から出土した土器の胎土分析 (3) 分析結果

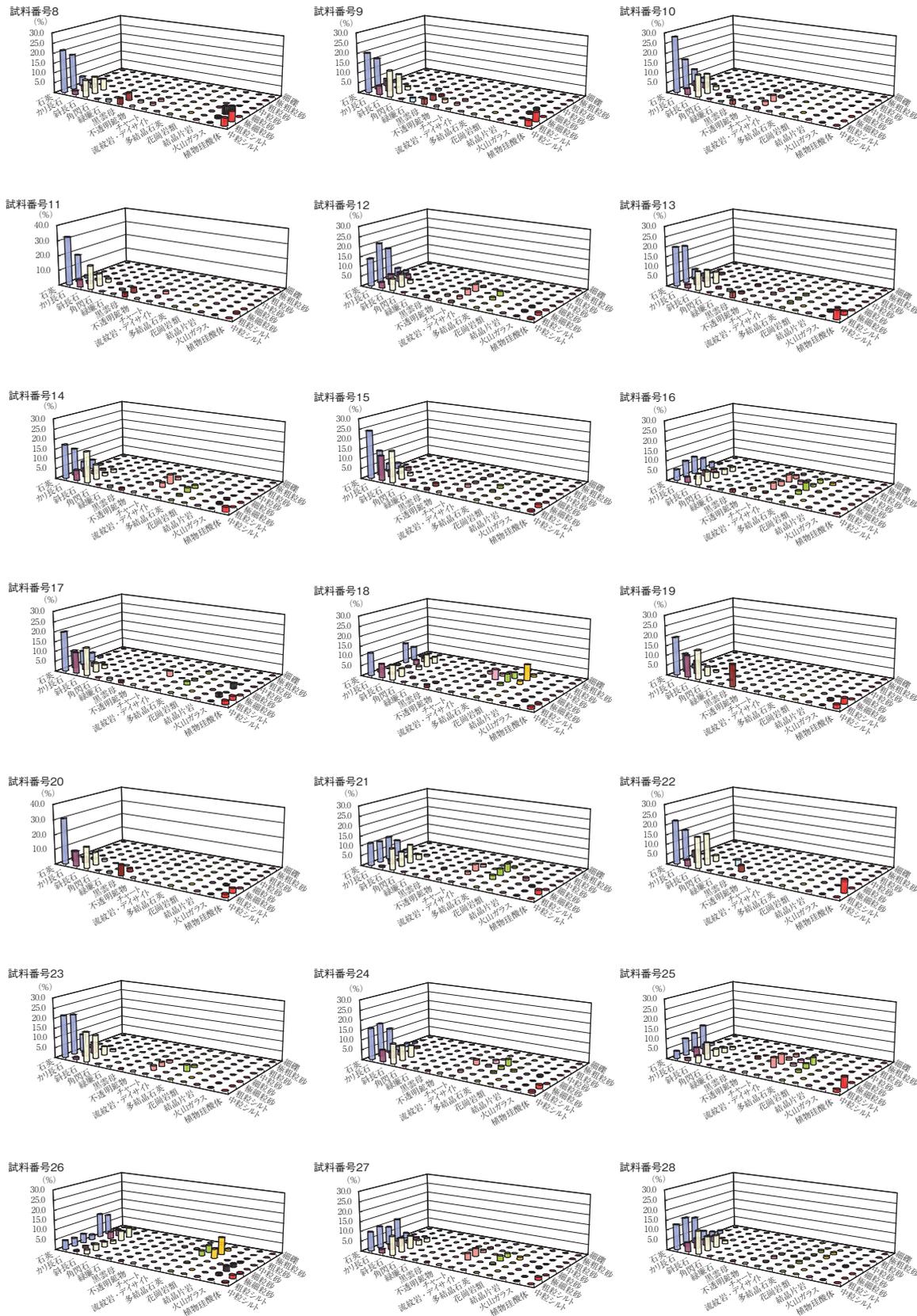


図4-16 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(1)

他の試料とは区別される。

砂粒の粒径組成をみると、中粒シルト～極細粒砂の範囲にほとんどが集中するという組成の試料が多いが、極細粒砂にモードがある試料(試料番号21, 29～32)、細粒砂にモードがある試料(試料番号16, 27)、細粒砂～粗粒シルトにかけてモードがある試料(試料番号25)、粗粒砂～中粒砂にモードがある試料(試料番号26)、粗粒砂～中粒砂と中粒シルトの2つのピークを持つ試料(試料番号18)も認められる。

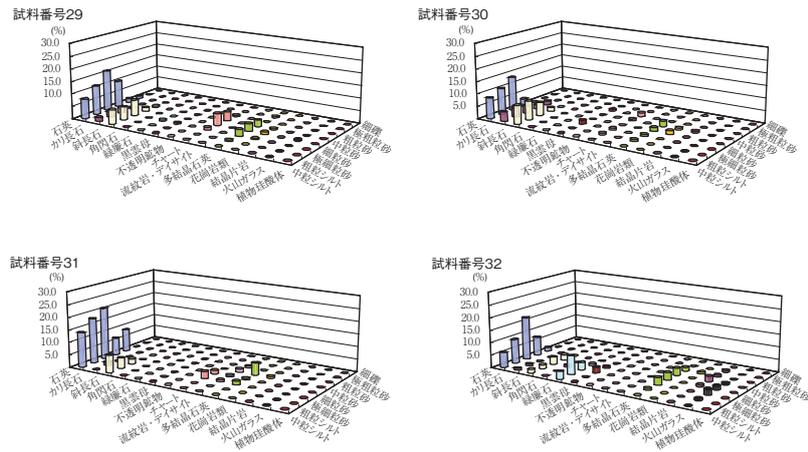


図4-17 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(2)

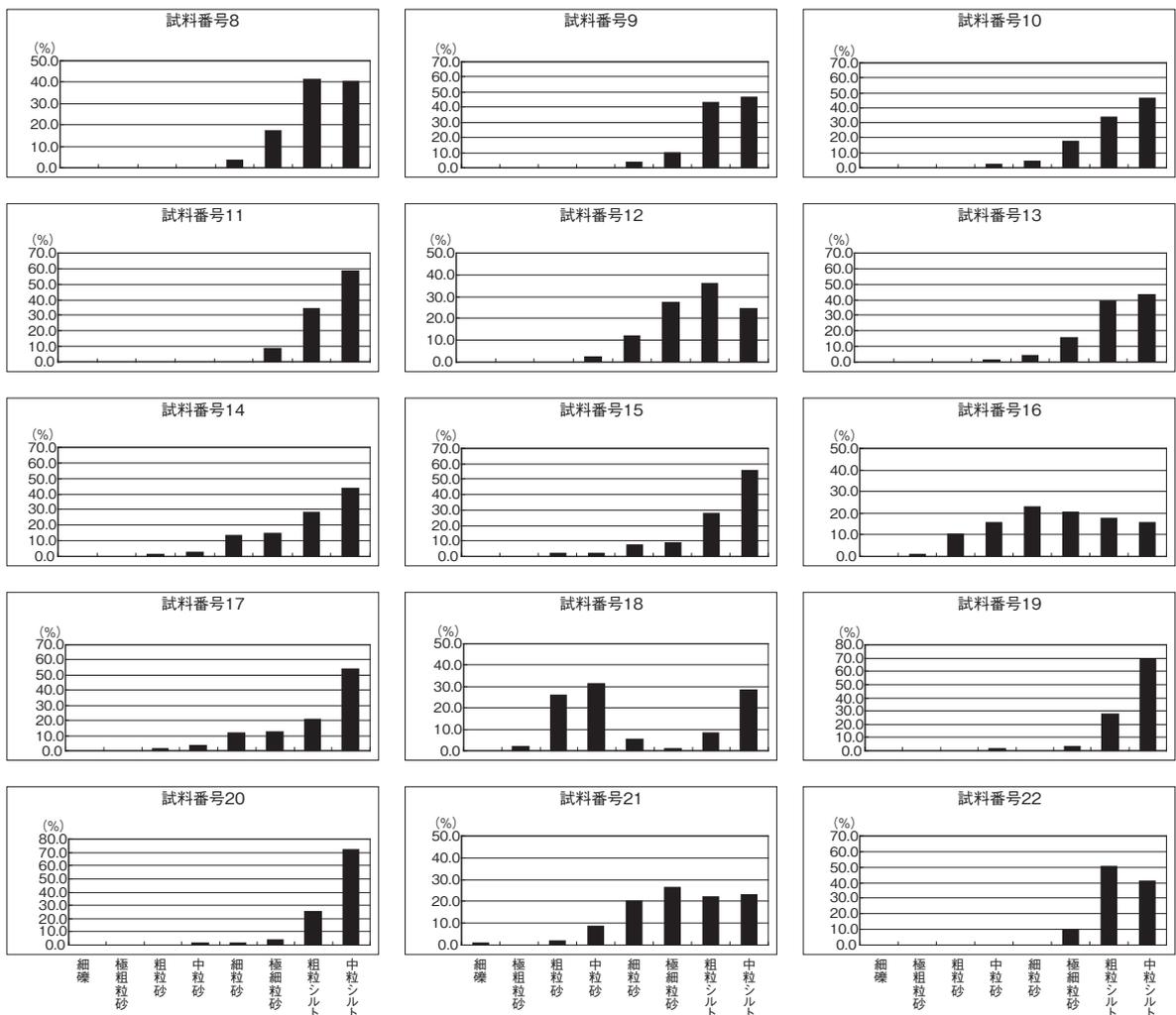


図4-18 胎土中の砂の粒径組成(1)

3. 西野々遺跡から出土した土器の胎土分析 (3) 分析結果

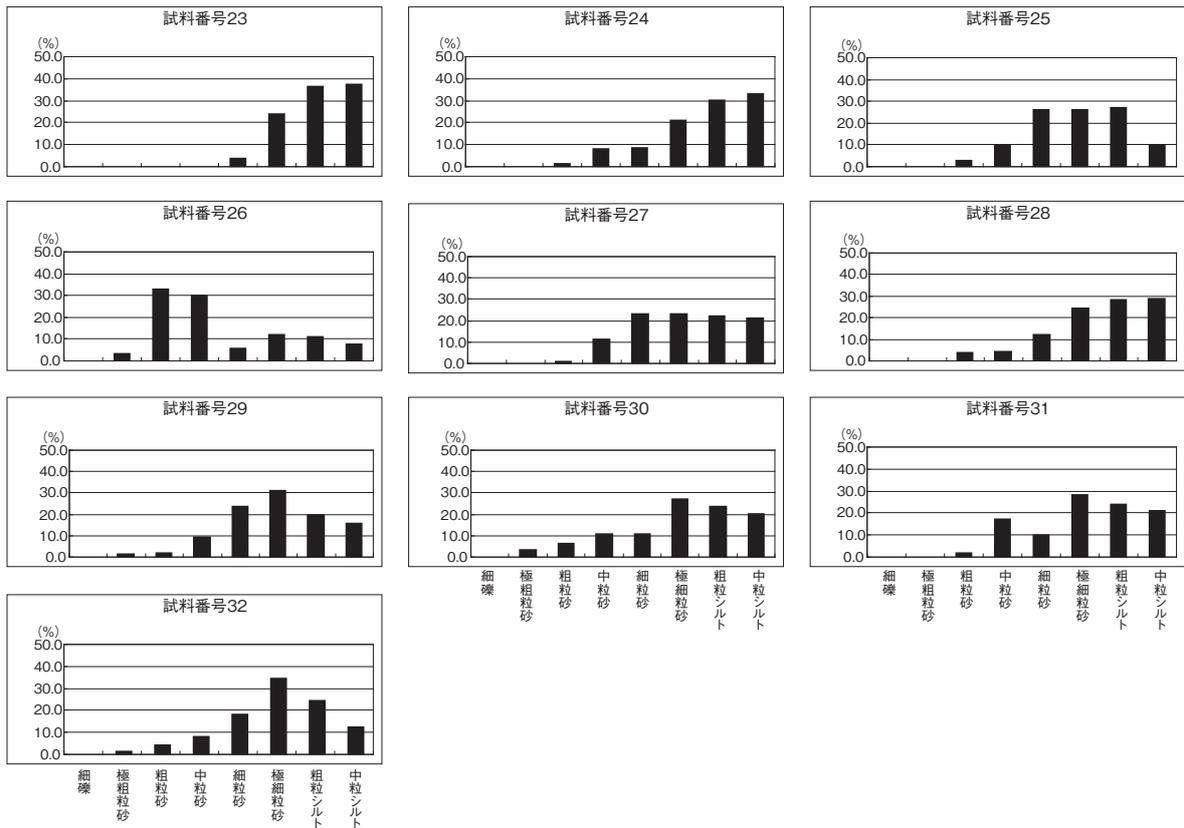


図4-19 胎土中の砂の粒径組成(2)

② 胎土蛍光X線分析

結果を表4-11に示す。ここでは試料間の組成を比較する方法として、以下に示す元素を選択し、それらの値を縦軸・横軸とした散布図を作成した(図4-21~25)。

- ・ 化学組成中で最も主要な元素( $\text{SiO}_2, \text{Al}_2\text{O}_3$ )
- ・ 粘土の母材を考える上で長石類(主にカリ長石, 斜長石)の種類構成は重要である。このことから、指標として長石類の主要元素である  $\text{CaO}$ ,  $\text{Na}_2\text{O}$ ,  $\text{K}_2\text{O}$  の3者を選択し、長石全体におけるアルカリ長石およびカリ長石の割合を定性的に見る。実際には、長石類全体におけるアルカリ長石の割合  $(\text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O}) / (\text{CaO} + \text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O})$  を横軸とし、アルカリ長石におけるカリ長石の割合  $\text{K}_2\text{O} / (\text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O})$  を縦軸とする。
- ・ 輝石類や黒雲母, 角閃石など有色鉱物における主要な元素。この場合、指標としてこれらの有色鉱物の主要な元素のうち、 $\text{TiO}_2$ ,  $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ,  $\text{MgO}$  を選択し、 $\text{Fe}_2\text{O}_3$  を分母とした  $\text{TiO}_2$ ,  $\text{MgO}$  の割合を見る。
- ・ 各微量元素を選択する。組み合わせは、Rb-SrとZr-Baとする。

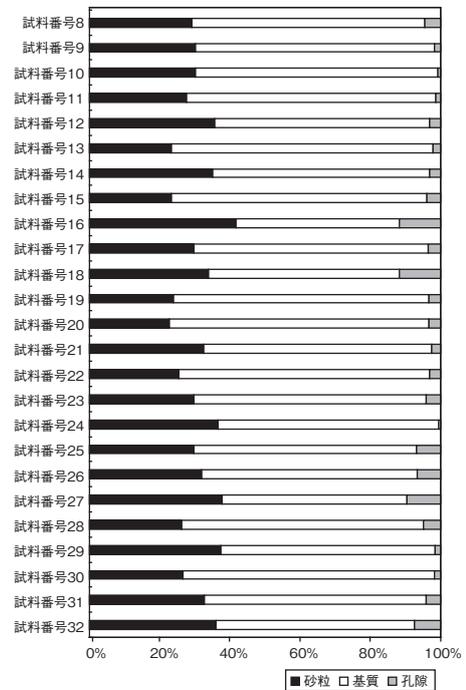


図4-20 胎土の砂粒・基質・孔隙の割合

表4-15 土器胎土の蛍光X線分析結果(化学組成)

試料番号	主要元素												微量元素			
	SiO <sub>2</sub> (%)	TiO <sub>2</sub> (%)	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	MnO (%)	MgO (%)	CaO (%)	Na <sub>2</sub> O (%)	K <sub>2</sub> O (%)	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> (%)	Ig.loss (%)	合計 (%)	Rb (ppm)	Sr (ppm)	Zr (ppm)	Ba (ppm)
No.8	59.95	1.06	18.32	4.70	0.13	0.78	0.50	1.56	2.15	0.45	10.40	100.00	86	120	243	542
No.9	61.05	1.04	17.62	4.57	0.03	1.39	0.53	1.81	2.30	0.30	9.36	100.00	131	124	237	555
No.10	62.10	1.14	18.39	5.88	0.03	1.67	0.29	1.41	1.84	0.52	6.73	100.00	71	92	239	367
No.11	56.26	1.28	20.91	6.19	0.01	0.86	0.21	1.30	1.56	0.56	10.86	100.00	48	77	250	320
No.12	68.54	1.02	16.67	4.52	0.04	2.33	0.36	0.95	1.54	0.04	3.99	100.00	72	66	227	369
No.13	61.32	1.00	19.67	2.83	0.01	0.56	0.29	0.88	2.44	1.28	9.72	100.00	124	97	253	611
No.14	63.12	0.89	17.38	3.92	0.02	0.94	0.42	1.10	1.02	0.20	10.99	100.00	52	72	216	362
No.15	57.89	0.91	19.77	7.16	0.00	0.29	0.41	0.71	2.06	0.18	10.62	100.00	83	98	197	601
No.16	60.54	0.82	17.16	5.29	0.02	0.91	0.40	1.22	1.99	0.91	10.74	100.00	59	126	209	462
No.17	65.64	1.09	17.34	2.12	0.00	0.17	0.19	0.31	1.45	0.15	11.54	100.00	75	59	272	593
No.18	57.88	0.81	18.42	7.06	0.02	0.38	0.91	1.23	1.94	0.08	11.27	100.00	84	119	125	663
No.19	62.04	1.13	19.03	4.03	0.02	1.48	0.18	1.51	2.07	0.05	8.46	100.00	122	87	208	400
No.20	59.47	1.16	19.18	4.76	0.48	1.39	0.45	1.42	2.27	0.22	9.20	100.00	110	100	211	485
No.21	59.68	1.03	14.71	7.81	0.02	3.05	0.32	0.91	1.21	1.14	10.12	100.00	62	58	198	424
No.22	59.67	1.11	18.45	4.20	0.02	1.42	0.18	1.40	2.02	0.49	11.04	100.00	117	88	203	395
No.23	62.16	1.09	20.39	5.27	0.04	2.49	0.34	1.19	2.48	0.13	4.42	100.00	98	107	242	430
No.24	59.95	1.14	21.16	4.59	0.02	0.77	0.24	0.60	1.51	0.15	9.87	100.00	48	66	286	344
No.25	64.10	0.88	13.24	7.44	0.33	1.63	0.62	1.19	1.07	0.48	9.02	100.00	53	83	198	420
No.26	69.04	0.42	14.45	2.64	0.08	0.48	0.84	1.87	2.42	0.06	7.70	100.00	379	118	168	620
No.27	66.67	0.90	13.26	5.01	0.32	1.63	0.57	1.11	1.12	0.21	9.20	100.00	69	77	200	367
No.28	63.90	0.95	21.80	8.03	0.01	0.91	0.19	0.55	1.64	0.04	1.98	100.00	82	56	232	378
No.29	66.36	0.89	14.75	5.29	0.03	0.84	0.27	1.03	1.20	0.58	8.76	100.00	48	72	222	356
No.30	60.52	1.02	17.51	5.23	0.09	1.65	0.41	1.59	2.28	0.57	9.13	100.00	92	113	223	505
No.31	74.20	0.94	14.07	3.38	0.02	0.86	0.33	0.32	1.81	0.07	4.00	100.00	91	50	270	377
No.32	56.43	1.48	16.40	8.36	0.10	1.31	3.08	1.62	0.78	0.13	10.31	100.00	38	88	214	245

作成した5つの散布図を概観すると、器種ごとに組成が明瞭に分離するという状況ではないが、器種によって分散する範囲にまとまりがあり、それらの範囲どうしは重複する部分もあるが、その重心は、器種ごとにずれていることが看取される。以下に各散布図における各器種の状況を述べる。

#### i 土師器

SiO<sub>2</sub>-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>の散布図では、ほとんどの試料は、SiO<sub>2</sub>55~65%、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>15~20%の範囲に分布するが、試料番号26は、他の試料よりもSiO<sub>2</sub>が多く、70%に近い値を示す。長石類主要元素の散布図では、どの試料も比較的良好なまとまった範囲に分布しており、また、有色鉱物主要元素の散布図においても、分散はしているが、特に他の試料から離れた位置にあるものはないといえる。

Rb-Srの散布図では、試料番号26が明らかに他の試料とは異なる組成を示す。また、他の試料は、Rbが50~150ppm、Srが60~120ppmの範囲に分布するが、詳細にみればSrの比較的多い試料番号8, 9, 16, 18, 30のグループとSrの比較的小さい試料番号11, 14, 21のグループおよび両者の中間的な組成に位置する試料番号10とに分かれる傾向が窺える。Zr-Baの散布図では、ほとんどの試料はZrが200~250ppm、Baが300~600ppmの範囲に分布するが、この範囲からはずれて、Baが高く、Zrの少ない方向に試料番号18と26が位置する。

#### ii 土師質土器

SiO<sub>2</sub>-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>の散布図では、SiO<sub>2</sub>60%前後、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>18~20%の範囲に分布する試料番号13, 15, 19, 20, 22のグループとSiO<sub>2</sub>65%前後、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>13%付近の試料番号25, 27のグループおよび両者の中間的な位置にある試料番号17とに分けられる。長石類主要元素の散布図では、試料番号17は、上記の前者の

3. 西野々遺跡から出土した土器の胎土分析 (3) 分析結果

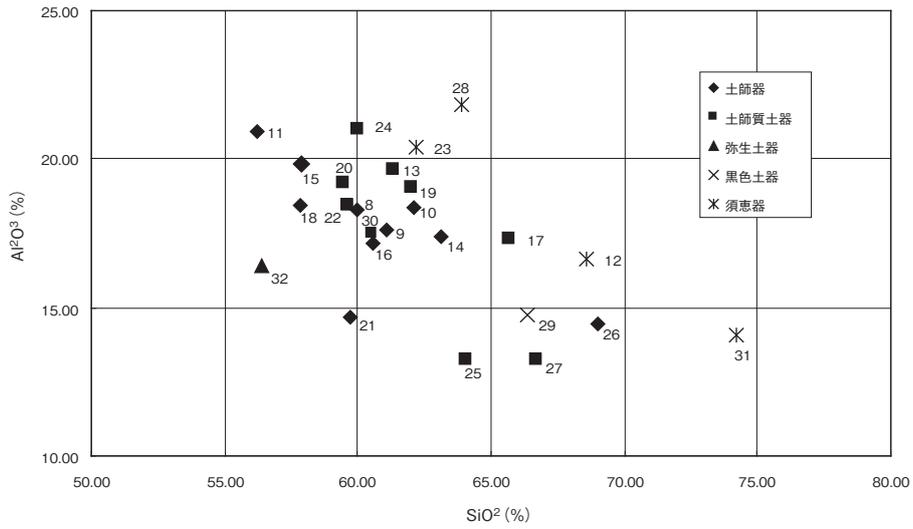


図4-21 西野々遺跡出土試料のSiO<sub>2</sub>-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>散布図

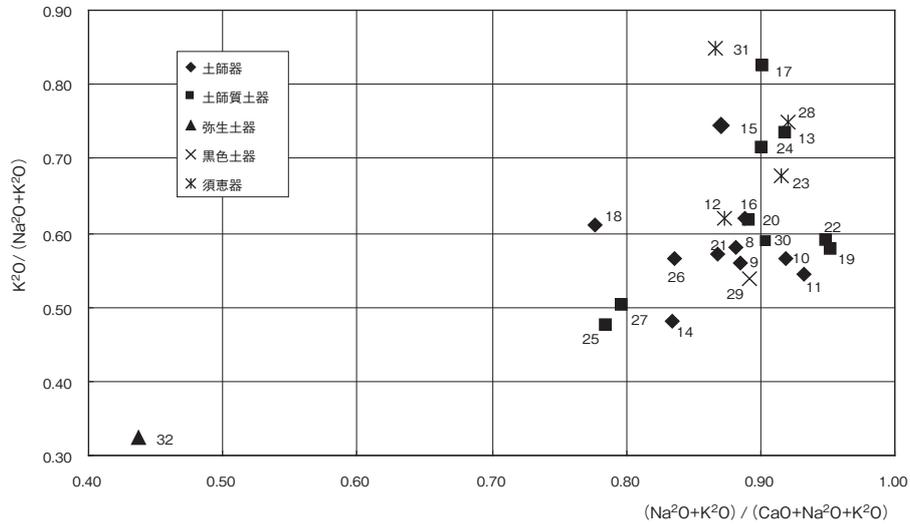


図4-22 西野々遺跡出土試料の長石類主要元素の散布図

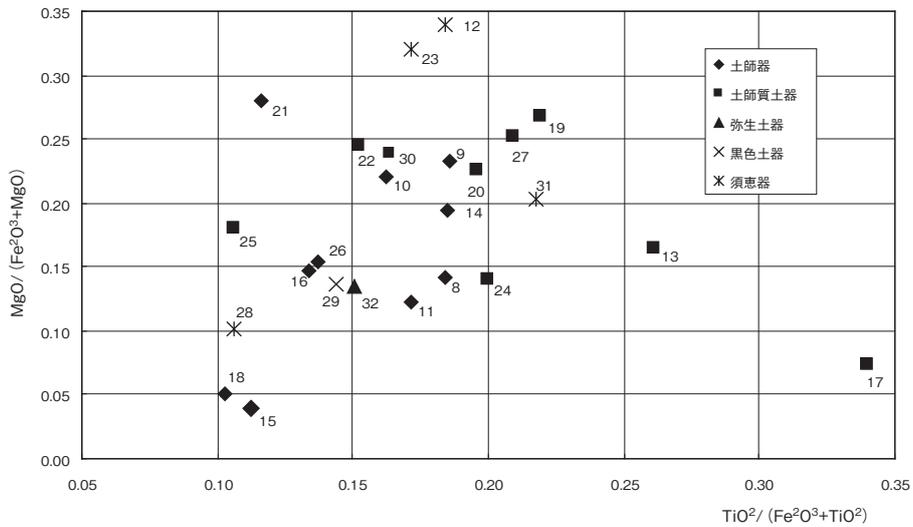


図4-23 西野々遺跡出土試料の有色鉱物主要元素の散布図

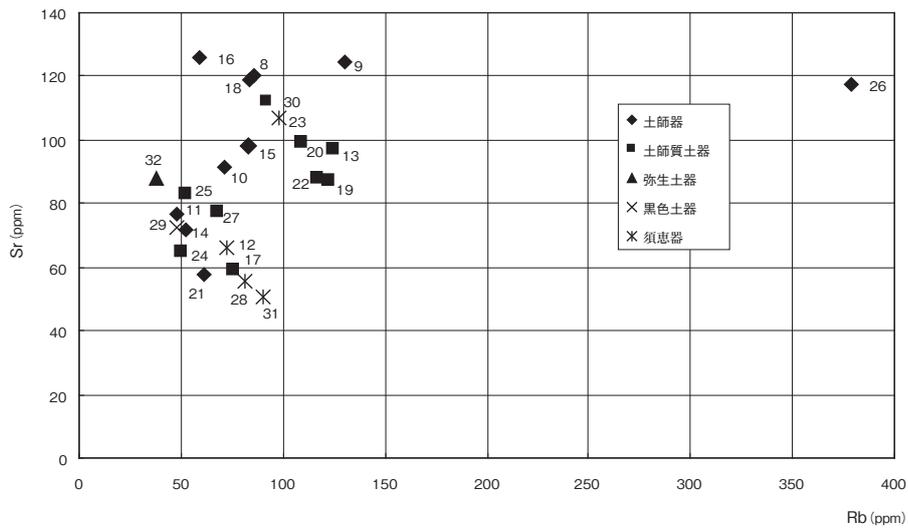


図4-24 西野々遺跡出土試料のRb-Sr散布図

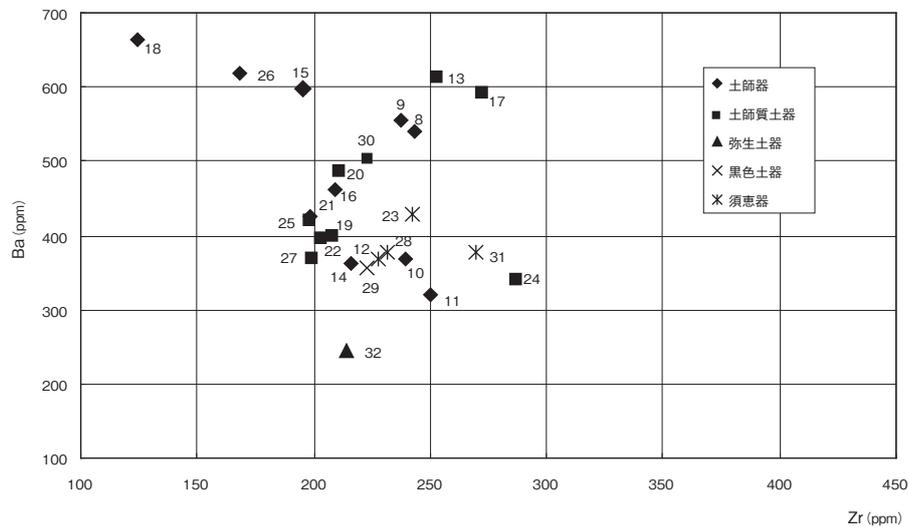


図4-25 西野々遺跡出土試料のZr-Ba散布図

グループに近い位置にあるが、試料番号25と27は、やはり他の試料とは離れた位置に分布する。一方、有色鉱物主要元素の散布図では、各試料とも分散しており、特にグループ分けすることはできないが、試料番号17は、他の試料との距離がやや大きい。

Rb-Srの散布図では、Rbが80~120ppm、Srが80~100ppmの範囲に分布する試料番号13、15、19、20、22のグループとRbが50~80ppm、Srが60~80ppmの範囲に分布する試料番号17、25、27のグループに分けられる。これに対してZr-Baの散布図では、Baが600ppm前後を示す試料番号13、15、17と他の試料のグループとに分けられる可能性がある。

### iii 須恵器

SiO<sub>2</sub>-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>の散布図では、SiO<sub>2</sub>60~65%、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>20~22%の範囲に試料番号23、24、28がまとまって分布し、試料番号12はこれらよりもSiO<sub>2</sub>が多く、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>の少ない位置に離れており、試料番号31は試料番号12よりもさらにSiO<sub>2</sub>が多く、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>の少ない位置に離れている。長石類主要元素の散布図では、上述した試料番号23、24、28のグループが認められ、試料番号12はこれらよりもK<sub>2</sub>Oの少な

い位置にあり、試料番号31はこれらよりも $K_2O$ の多い位置にある。一方、有色鉱物主要元素の散布図では、各試料とも分散しており、特にグループ分けすることはできない。

Rb-Srの散布図では、Rbが50~100ppm, Srが50~70ppmの範囲に試料番号23以外の4点が分布し、試料番号23はこれらよりもSrが多く、100ppmを超えている。Zr-Baの散布図では、特に離れて位置する試料は認められず、5点の試料はZrが220~300ppm, Baが350~450ppmの範囲に分布する。

#### iv 黒色土器(内黒)

$SiO_2-Al_2O_3$ の散布図では、土師器の試料番号26や土師質土器の試料番号25, 27と近い組成を示し、長石類主要元素の散布図では、土師器の試料が分布する範囲に接しており、有色鉱物主要元素の散布図においても土師器試料と近い位置にある。

Rb-Srの散布図では、土師器においてSrの比較的少ない試料のグループと同じ位置にあり、Zr-Baの散布図では、土師器や須恵器の試料に近い位置にある。

#### v 弥生土器(搬入品)

$SiO_2-Al_2O_3$ の散布図では、試料番号26以外の土師器試料が分布する範囲内に位置するが、長石類主要元素の散布図では、自身を除く今回の全ての試料から、CaOが多く、 $K_2O$ の少ない方向にかけ離れた位置にある。含有量でみると、本試料はCaOが約3%含まれており、他の試料が全て1%未満であることに比べると明らかに高い。

一方、有色鉱物主要元素の散布図およびRb-Srの散布図では、土師器や土師質土器試料と近い位置にある。また、Zr-Baの散布図では、他の試料に比べてBaが低い方向にやや離れて位置する。

### (4) 考察

#### ① 胎土と地質との関係

西野々遺跡は物部川が形成した沖積扇状地の末端付近に位置することから、西野々遺跡の地質学的背景は、物部川流域に分布する地質ということになる。物部川流域の地質については、甲藤ほか(1968)や日本の地質「四国地方」編集委員会編(1991)などにより概観することができる。物部川の兩岸の山地を構成する地質は、物部川層群とよばれる秩父累帯に属する地質であり、主に砂岩、泥岩、礫岩からなり、礫岩を構成する礫種はチャートと砂岩からなるとされている。物部川層群の南側には、秩父累帯の南帯とされる地質が東西方向に長く帯状に分布している。高知平野の東側では、清水ヶ森から三宝山に至る山地に分布し、西側では、鉢伏山や五台山を通り、佐川盆地を囲む山地に分布し、愛媛県側の山地にまで伸びている。秩父累帯南帯を構成する岩石は、主に砂岩、泥岩、礫岩、石灰岩、チャートおよび酸性凝灰岩であり、礫岩を構成している礫種は主に石灰岩、チャート、砂岩、泥岩であるとされているが花崗岩類も少量含まれている。このような地質学的背景は、試料番号32を除く西野々遺跡出土土器試料の胎土に認められた岩石片の種類構成とほぼ整合する。したがって、試料番号32を除く西野々遺跡出土土器試料は、高知平野西部に分布する砂や粘土が材料として使用されている可能性が高いと考えられる。

ただし、岩石片の量比までみると、試料によってチャートがやや多いもの(試料番号16, 25, 27, 29)や流紋岩・デイサイトが多いもの(試料番号18)、花崗岩類が多いもの(試料番号18, 26)などが認められる。また、他の多くの試料がシルトを主体とする砂の粒径組成を示すのに対して、これらは、いずれも砂の粒径組成が異なっていることも指摘できる。すなわち、上述したように材料の採取地は、高知平野西部という範囲では一つであるが、その範囲内でおそらく複数の材料採取地と複数の素地土の調整

(複数の製作者につながる可能性があると考えられるが)があった可能性がある。これについては、器種・器形との関係でも検討する。

ところで、試料番号32における主たる岩石片の結晶片岩および緑色片岩は、四国の中央部北側を東西に横切る三波川帯に由来すると考えられる。三波川帯は、高知県北部にも広く分布するが、その南側には秩父帯、さらに南側には四万十帯といういずれも堆積岩類からなる地質によって占められていることから、高知県内を流れる主要な河川の中流域から下流域に堆積する碎屑物を想定した場合に、堆積岩類が全く含まれないという地域はほとんど存在しない。したがって、試料番号32の材料採取地は、高知県内にはない可能性が高い。これは、元素組成においてCaOの含有量が、他の試料と全く異なる

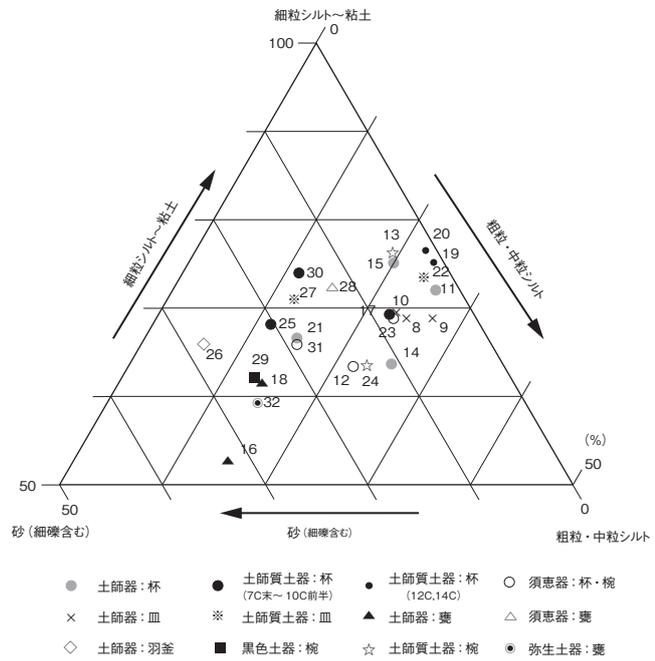


図4-26 胎土の粒度組成三角ダイアグラム

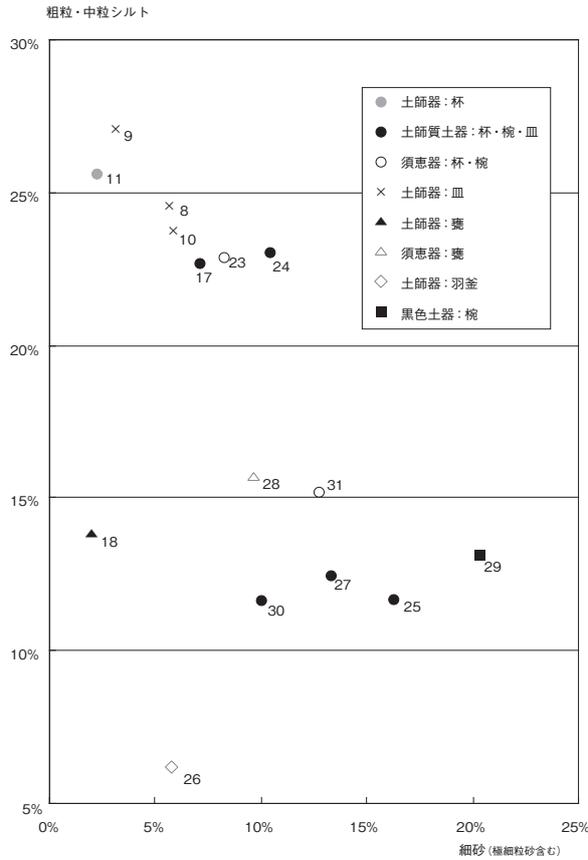


図4-27 9世紀後半～10世紀前半の試料器種・器形別の粒度組成

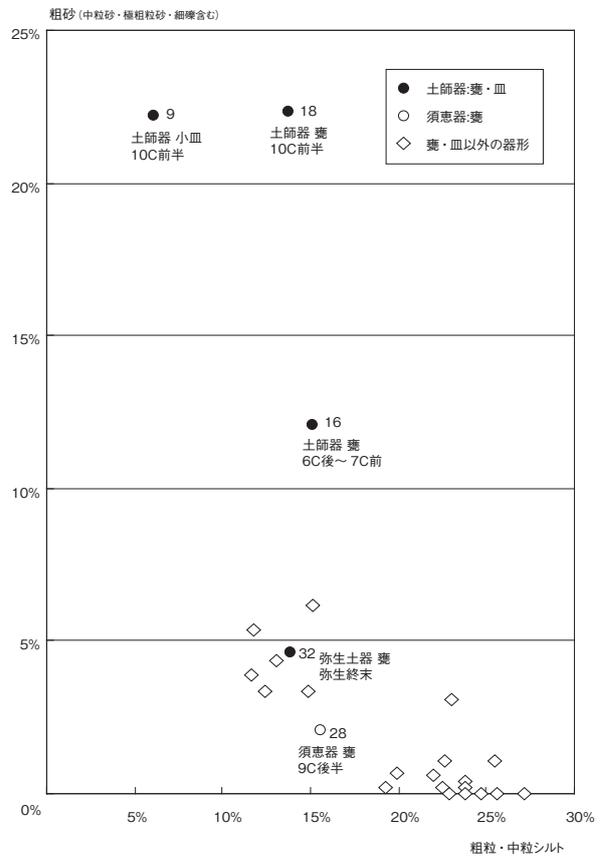


図4-28 甕およびそれ以外の試料の粒度組成

### 3. 西野々遺跡から出土した土器の胎土分析 (4) 考察

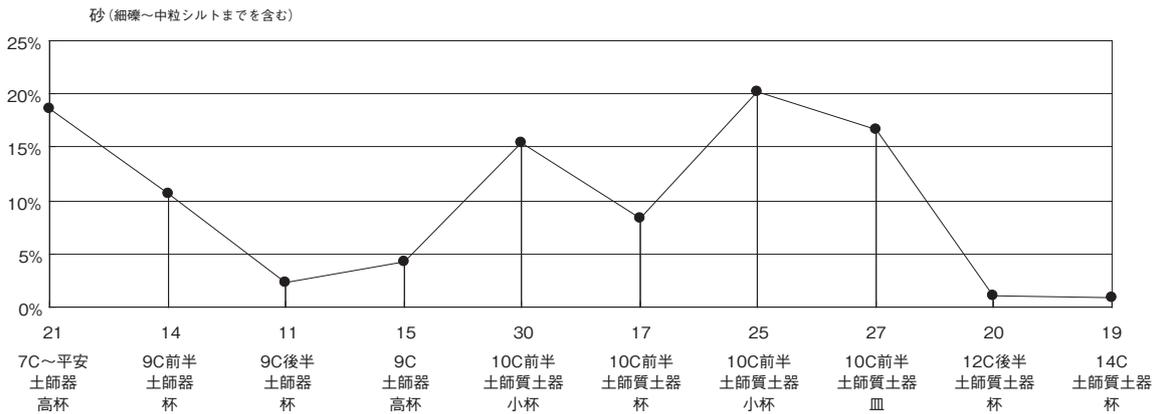


図4-29 杯・皿の砂含有量の時期別変化

ことから支持される。現時点では、その地域を特定することはできないが、地質分布からみれば、三波川帯からなる山地に接している徳島平野の南縁部などの地域が推定される。

#### ② 胎土と器種・器形との関係

分析結果で述べたように、薄片観察においても化学組成においても、土師器、土師質土器、須恵器、黒色土器の4器種間における胎土の違いは、それほど明瞭ではない。しかし、胎土の粒度組成においては、器種、器形による違いを比較的明瞭に認めることができる(図4-26)。

9世紀後半～10世紀前半の試料では、煮炊き用土器の羽釜、甕には粗砂(細礫・極粗粒砂・粗粒砂・中粒砂までの砂)が含まれるが、それ以外の器種には粗砂がほとんど含まれない(図4-27)。この傾向は、今回の試料では特に10世紀代の土器で顕著である(図4-28)。煮炊き用土器が非煮炊き用土器に比べ砂が多く含まれる傾向は、小林(1999)の弥生土器胎土のポイント・カウンティング法による分析により、既に明らかにされている。

非煮炊き用土器では、皿と杯で粒度組成に差異が認められ、杯が皿よりも細粒砂(極細粒砂)を多く含む傾向がうかがえる。なお、杯については、土師器、土師質土器に比べて須恵器は極細粒砂以下の割合が高く、細粒傾向を示すことが確認される。また、土師器、土師質土器の杯は、相対的に細粒砂を多く含むが、試料番号17の土師質土器杯、試料番号11の土師器杯は、須恵器杯と類似した粗粒シルト・中粒シルトの多い粒度組成を示しており、他の土師器および土師質土器の杯とは明瞭に異なる点が着目される。この点については、杯の考古学的検討をふまえ、さらに考察を加えていくことが必要と認識される。

次に、分析試料が揃っている杯についての時期別の胎土粒度組成変化をみていきたい。杯の砂含有量(細礫～中粒シルトまでを含む)では、上述の須恵器胎土の粒度組成に近似する試料番号11、17や試料番号15で10%未満と少ないが、それ以外の7世紀後半から10世紀前半の試料で10～20%前後を示す(図4-29)。これに対し、12世紀および14世紀の試料では、0.9～1%と非常に少ない砂含有量となる。このような分析結果については、10世紀前半以降の分析点数が2点と少なく全体的な傾向を示しているかどうか現段階でかなり不確かであるが、同一器形の胎土の時期的変化として興味深い。

胎土の粒度組成に関する問題については、小林(1999)により以下のような砂粒混入による効果が上げられ、土器の製作および機能に深く関わる問題であることが述べられている。砂粒混入の利点としては、器壁の熱伝導率を高める、耐熱性を高める、製作時の乾燥、焼成工程での破損を防ぐ、紐

積み成形を容易にする、ケズリ調整を容易にするなどがあげられており、一方、砂粒が一定量以上に混入した際のマイナス面としては、物理的衝撃に対する耐久性が弱まる、ミガキ調整において光沢を出しにくい、生粘土の可塑性が高くない場合の成形のしにくさなどが指摘されている。本分析で確認された煮炊き用土器の粗砂の含有量の相対的な多さは、小林(1999)が指摘するように耐熱性を高めることを目的とした胎土の製作に起因するものと認識される。また、9世紀後半～10世紀前半の試料で認められた皿、杯、椀の細粒砂の含有量の差異は、成形や乾燥・焼成などの製作工程における胎土の選択性に関係することが推測される。さらに、杯で認められた12世紀以降の細粒化についても、土器製作事情に関わるなんらかの時期的変化を示唆する可能性がある。これらの点については、土器製作に関わる考古学的検討をふまえた上でさらに考察を進めていくことが課題であると認識される。

### ③ 小結

土器胎土分析結果からは、以下のような可能性が示唆される。

- ・ 試料番号32を除く西野々遺跡出土土器試料は、高知平野西部に分布する砂や粘土が材料として使用されている可能性が高い
- ・ 試料番号32は、徳島平野の南縁部などの地域が推定される。
- ・ 煮炊き用土器である羽釜、甕では、非煮炊き用土器よりも粗砂の含有量が非常に多く、その傾向が10世紀代の試料で顕著である。
- ・ 9世紀後半～10世紀前半の試料では、杯が皿よりも細砂(極細粒砂)を多く含む傾向がうかがえる。
- ・ 9世紀後半～10世紀前半の杯では、須恵器は土師器、土師質土器よりも細粒である。
- ・ 土師器、土師質土器の杯は、相対的に細粒砂を多く含むが、試料番号17の土師質土器杯および試料番号11の土師器杯は、須恵器杯と類似した細粒の粒度組成を示す。
- ・ 杯の砂含有量(細礫～中粒シルトまでを含む)は、12世紀および14世紀の試料で非常に少量となる傾向がうかがえる。
- ・ 器種、器形による胎土の粒度組成の違いは、土器の用途および土器製作事情に関わる問題と関連することが予想される。

### 引用文献

- 安藤一男1990「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理42』73-88.
- Asai, K. & Watanabe, T.,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2)Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10, 35-47.
- 千木良雅弘1995『風化と崩壊』近未来社204p.
- 江口誠一1994「沿岸域における植物珪酸体の分布千葉県小櫃川河口域を例にして」『植生誌研究2』19-27.
- 江口誠一1996「沿岸域における植物珪酸体の風化と堆積物のpH値」『ペドロジスト40』81-84.
- ウィリアム J. フリッツ・ジョニー N. ムーア 1999『層序学と堆積学の基礎』原田憲一訳愛智出版386p [Fritz,W. J.and Moore,J.N. (1998) Basics of Physical Stratigraphy and Sedimentology,John Wiley & Sons].
- Fork,R.L.,1954,The distinction between grain size and mineral composition in sedimentary-rock nomenclature.J.Geol.,62,344-359.
- Fork,R.L. and Ward,W.,1957,Brazons river bar,a study in the significance of grain size parameters. J.Sed. Petrol,27,3-26.

3. 西野々遺跡から出土した土器の胎土分析 (4) 考察

- Friedman,1961,Distinction between dune,beach, and river sands from their textural characteristics. J.Sed. Petrol.,31,514-529.
- 原口和夫・三友清史・小林弘1998「埼玉の藻類珪藻類」『埼玉県植物誌』埼玉県教育委員会 527-600.
- 堀内誠示・高橋敦・橋本真紀夫1996「珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について - 混合群集の認定と堆積環境の解釈 -」『日本文化財科学会第13回大会研究発表要旨集』62-63.
- Hustedt, F.,1937-1938, Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra . Nach dem Material der Deutschen limnologischen Sunda-Expedition Teil I ~ III Band.15p.131-506 Band.16p.1-155, 274-394.
- 井上智博2003「目的と概要」『尺度遺跡Ⅱ - 国道165号(南阪奈道路)の建設に伴う発掘調査報告書 -』(財)大阪府文化財センター-153p.
- 石川茂雄1994『原色日本植物種子写真図鑑』石川茂雄図鑑刊行委員会 328p
- 伊東隆夫1995「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料31』京都大学木質科学研究所81-181.
- 伊東隆夫1996「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料32』京都大学木質科学研究所66-176.
- 伊東隆夫1997「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料33』京都大学木質科学研究所83-201.
- 伊東隆夫1998「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料34』京都大学木質科学研究所30-166.
- 伊東隆夫1999「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料35』京都大学木質科学研究所47-216.
- 伊藤良永・堀内誠示1991「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌6』23-45.
- 小林正史1999「ポイント・カウンティング法による土器胎土の粒度組成の分析 - 土器の使い方と製作コストとの関連から -」『北陸の考古学Ⅲ - 石川考古学研究会々誌41 -』石川考古学研究会 73-95.
- 甲藤次郎・小島丈児・須鎗和己・沢村武雄・鈴木堯士1968『高知県地質産図(20万分の1)』高知県商工課
- 国土地理院2006『1:25000土地条件図高知』国土地理院地理調査部防災地理課
- 近藤鍊三1988「植物珪酸体(Opal Phytolith)からみた土壌と年代」『ペドロジスト 32』189-202.
- 近藤鍊三2004「植物ケイ酸体研究」『ペドロジスト 48』46-64.
- 近藤鍊三・ピアスン友子1981「樹木葉のケイ酸体に関する研究(第2報)双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について」『帯広畜産大学研究報告12』217-229.
- 近藤鍊三・佐瀬隆1986「植物珪酸体分析その特性と応用」『第四紀研究25』31-64.
- 小杉正人1988「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究27』1-20.
- 小杉正人1987「北江古田遺跡の珪藻化石群集と古環境」『北江古田遺跡発掘調査報告書(2)』中野区北江古田遺跡調査会419-433.
- 高知県1966『土地分類基本調査高知5万分の1国土調査』経済企画庁
- Krammer, K.,1992,PINNULARIA.eine Monographie der europäischen Taxa.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26. J.CRAMER,353p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1986,Bacillariophyceae.1.Teil: Naviculaceae. In:Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/1. Gustav Fischer Verlag,876p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1988,Bacillariophyceae.2.Teil: Epithemiaceae,Bacillariaceae,Surirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/2. Gustav Fischer Verlag,536p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1991a,Bacillariophyceae.3.Teil: Centrales,Fragilariaceae,Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/3. Gustav Fischer Verlag,230p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1991b,Bacillariophyceae.4.Teil: Achnanthaceae,Kritische Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/4. Gustav Fischer Verlag,248p.
- 公文富士夫・立石雅昭編1998『碎屑物の研究法』地学団体研究会399p.

- 久馬一剛・八木久義監修1989『土壌薄片記載ハンドブック』博友社176p.
- Lowe, R.L.,1974,Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms.334p. In Environmental Monitoring Ser.EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati.
- 松田順一郎2004「古墳時代と江戸時代の畑地堆積物堆積構造の比較－大阪府久宝寺遺跡京都府山崎遺跡の事例－」『日本文化財科学会第21回大会研究発表要旨』日本文化財科学会62-63.
- 松田順一郎・パリノ・サーヴェイ 1996『北島遺跡の耕作地と古環境－寝屋川南部流域植付ポンプ場土木工事に伴う北島遺跡第1次発掘調査報告書－』(財東大阪市文化財協会)157p.
- 松田順一郎・別所秀高1997「大阪府北島遺跡における畑地形成と地形発達」『日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨』日本文化財科学会70-71.
- 松田順一郎・三輪若葉・別所秀高1999「瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－」『日本文化財科学会第16回大会発表要旨集』120-121.
- 増田富士雄1999「透水層・帯水層のトレース：ダイナミック地層学からのアプローチ」『地下水技術41』1-15.
- Miall,A.D.,1992,Alluvial Deposits,in Walker,R.G. and James,N.P. (ed) Facies Models.Geological association of Canada,119-142.
- Miall,A.D.,1996,The Geology of Fluvial Deposits:Sedimentary Facies,Basin analysis,and petroleum Geology. Springer,582p.
- 三宅尚・石川慎吾2004「高知県中村市具同低湿地周辺における完新世の植生変遷」『日本花粉学会誌50』83-94.
- 三宅尚・中村純・山中三男・三宅三賀・石川慎吾2005「高知平野伊達野低地周辺における最終氷期以降の植生史」『第四紀研究44』275-288.
- 宮田雄一郎・山村恒夫・鍋谷淳・岩田尊夫・八幡雅之・結城智也・徳橋秀一1990「淡水生デルタの形成過程－琵琶湖愛知川河口部を例として-2. 地質構成と堆積相」『地質学雑誌96』839-858.
- 森也寸志・滋賀撰子・岩間憲治・渡辺紹裕・丸山利輔1992「土地利用による土壌間隙構造の差異－軟X線による観察を中心として－」『土壌の物理性No. 66』19-27.
- 中村純1965「高知県低地部における晩氷期以降の植生変遷」『第四紀研究4』200-207.
- 中静透2004「日本の森林/多様性の生物学シリーズ①」『森のスケッチ』東海大学出版会236p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志2000『日本植物種子図鑑』東北大学出版会642p.
- 中嶋雅宏・中山勝博・百原新・塚腰実2004「中新統土岐口陶土層の堆積過程と産出する大型植物化石の水理的挙動－岐阜県多治見市大洞地区の例－」『地質学雑誌110』204-221.
- 日本の地質「四国地方」編集委員会1991『日本の地質8四国地方』共立出版266p.
- 日本ペドロジー学会編1997『土壌調査ハンドブック 改訂版』博友社169p.
- 野寄玲児・黒原亜矢子・亀井裕幸2001「ナラガシワ群落について－沖積低地の自然林植生の一型として－」『沖積地植生の研究』奥田重俊先生退官記念論文集23-32.
- 大野啓一1979「西日本における沖積低地の河畔林に関する群落的考察」『横浜植生学会報告16』227-236.
- Reineck,H.E. and Singh,I.B.,1980,Depositional Sedimentary Enviroments (2nd ed.).Springer, 551p.
- Round, F. E., Crawford, R. M. & Mann, D. G.1990,The diatoms. Biology & morphology of the genera. 747p. Cambridge University Press, Cambridge.
- 阪本圭二1987「滋賀県愛知川河辺におけるニレ科樹林の構造」『緑化研究9』50-68.
- 齋藤万之助1971「水田土壌の凝集性」『土木試験所報告56』1-49.
- 齊藤文紀1993「軟X線写真観察法」『第四紀試料分析法2』研究対象分析法日本第四紀学会編東京大学出版会103-108.
- 佐藤幸一1990a「八郎潟干拓地重粘土水田土の粗孔隙の発達とその意義」『農業土木学会誌60』25-30.

### 3. 西野々遺跡から出土した土器の胎土分析 (4) 考察

- 佐藤幸一1990b「八郎潟干拓地における畑地と草地土壌の粗孔隙の発達とその意義」『農業土木学会誌60』287-292.
- Shepard,F.P.,1954,Nomenclature based on sand-silt-clay ratios,Journal of Sedimentary Petrology,24,151-158.
- Stuiver, M., and Reimer, P. J., 1993, Extended <sup>14</sup>C database and revised CALIB radiocarbon calibration program, Radiocarbon 35,215-230.
- Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, F.G., v. d. Plicht, J., and Spurk, M.,1998. INTCAL98 Radiocarbon age calibration 24,000 - 0 cal BP. Radiocarbon 40,1041-1083.
- 杉山真二1986「機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定-古環境推定の基礎資料として-」『考古学と自然科学19』69-84.
- 杉山真二2000「植物珪酸体(プラント・オパール)」辻誠一郎編著『考古学と自然科学3-考古学と植物学-』同成社189-213.
- 須永薫子・平山良二2005「浅間山噴火(1783年)による埋没表層土の土壌構造に認められる埋没前の植生・土地利用の影響」『筑波実験植物園研報24』99-105.
- 鈴木隆介1998「建設技術者のための地形図読図入門」『第2巻低地』古今書院554p.
- Tanimura,Y.,Sato,H.,1997,PSEUDOPODOSIRA KOSUGII:A new Holocene diatom found to be a useful indicator to identify former sea-levels. Diatom Research12,2,357-368.
- 寺沢四郎1971「水田土壌群の物理性特性に関する研究」『農業技術研究所報告22』86-207.
- 寺沢四郎1983「各種インパクトを受けた土壌の物理性」『農業技術研究所報告36』233-267.
- 辻康男・田中義文・馬場健司・松元美由紀・高橋敦2007「介良野遺跡の自然科学分析」『介良野遺跡-県道高知東インター線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター163-194.
- 渡辺仁治2005『淡水珪藻生態図鑑-群集解析に基づく汚濁指数DAIpo pH耐性能-』内田老鶴圃666p.
- Wentworth,C.K.,1922,A scale of grade and class terms for clasticsediments. J.Geol,30,377-392.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].
- Witkowski, A., & Lange-Bertalot, H. & Metzeltin, D.,2000, Iconographia Diatomologica 7. Diatom flora of Marine coast I. A.R.G.Gantner Verlag K.G., 881p.
- 山中三男1978『高知県の植生と植物相』林野弘済会高知支部461p.
- 山中三男・伊藤由美子・石川慎吾1992「高知平野の岡豊低湿地完新世堆積物の花粉分析」『日本生態学会誌42』21-30.

## 第V章 総括

### 1. はじめに

西野々遺跡は、平成16年度から平成19年度にかけて発掘調査が実施され、その様相<sup>(1)</sup>がほぼ明らかになった。遺跡の中心部は各時代とも東約1/4にあり、弥生時代では竪穴建物跡65軒、古代では方形の掘方で構成された掘立柱建物跡71棟、中世では一辺35～44mの溝で区画された屋敷跡が検出されている<sup>(2)</sup>。これらを中心に、東は下田川(Ⅷ区)、西は明見との境(V区)まで遺構が展開する。

今回報告するのは西野々遺跡の西約2/5に当たるⅢ～V区で、西野々遺跡全体からみれば、西の外れに位置する。そのような位置関係にあることから集落に直接関連するものはⅥ区やⅦ区に比べると少なく、間接的に関連する遺構が多い。その代表として溝跡を挙げることができる。弥生時代から中世にかけての溝跡が213条も確認され、その大半がⅢ区に集中しており、5条の溝跡が重複していた箇所もみられた。弥生時代から中世にかけてほぼ同じ場所に繰り返し溝が掘削されており、特別な意味があったものと推察される。溝跡以外に竪穴状遺構1軒、掘立柱建物跡55棟、塀・柵列跡7列、土坑132基、井戸跡2基、畝状遺構29列、性格不明遺構2基、ピット3,657個を確認した。遺構の分布状況は、300頁に掲載している「西野々遺跡Ⅲ～V区 遺構・遺物総数表」のとおり、Ⅲ区を中心に、西の調査区に行くに従って遺構数、遺物数とも減少し、V区の西壁が遺跡の西端に当たるものと考えられる。

本章では、自然科学分析の結果から導き出された古環境や地形の変遷をまとめた上で、Ⅲ～V区でみられる各時代の様相と特徴的な事柄について考察し、総括とする。

なお、遺跡全体に関わる事項や複数の調査区に跨がる遺構および遺物にみられる特徴・変遷などについては西野々遺跡発掘調査報告書の最後の巻となる『西野々遺跡Ⅲ』で考察したい。

### 2. 遺跡周辺の古環境と地形発達史

西野々遺跡は現在の地形からみて、物部川が形成した沖積扇状地末端部に立地すると推測されるものの詳細については判然としなかった。また、前述のとおり、工事路線が香長平野を横断する計画であったことから遺跡の様相をより鮮明にするため古環境復元を念頭に、専門家による現地指導を受けながら放射性炭素年代測定、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析などの自然科学分析を積極的に取り入れた。その結果については第IV章に記しているが、ここではそれを踏まえた上で考古学的な視野を交えてまとめてみたい。

遺構検出面の土層については第II章に記しているが、砂礫層が遺構検出面となっているところもあるように遺構検出面の土層(シルト層～シルト質砂層～砂層)の直下は概ね砂礫層で、深い所でも遺構検出面から約1.0mで砂礫層に達し、3.0m以上掘削すると湧水がある。また、遺跡の北約800mの所を東西に延びる南北バイパスの工事に先立つボーリング調査の結果<sup>(3)</sup>によると、西野々遺跡の北側では現地表下約7.0mの箇所から鬼界カルデラの噴火に伴うアカホヤ火山灰が確認されている。換言すれば約6,300年前の縄文時代早期以降に約7.0mの土砂が堆積したことになる。

この地に人が居着く以前の様相について、V-2区に堆積する腐食質泥層の下層調査で、埋没木が偶然に検出されたことにより、放射性炭素年代測定を行うことができ、その年代が推測することが

### 3. 遺跡の出現と消長 (1) 概要

できるようになった。すなわち、遺跡が立地する沖積扇状地および周辺の氾濫原面はCal BC 4450～BC 3900 前後、縄文時代前期後半頃およびそれ以前に形成されたものと考えられるようになった。当遺跡の西約 1.7 kmにある同じ立地の介良野遺跡からもほぼ同様の結果(高知県 2007)が得られている。

また、この上層からは、新たな流路堆積物や粗粒の氾濫堆積物が認められないことから遅くとも縄文時代前期後半頃には離水し、古代頃まで古土壌が長期に互って形成されたものと考えられ、安定し乾燥した微高地となったとみられる。物部川の沖積扇状地および自然堤防状の高まりに立地する遺跡はほぼ同じ環境下にあったものと考えられるが、人が居着き、その痕跡を地面に残すようになるのは今のところ弥生時代を待たなければならない。なお、人の沖積地への進出は、田村遺跡群から縄文時代後期の遺物(高知県 1986)が出土していることからその頃には始まっていたものと考えられる。

次に、地形を見た場合、すべての調査区が安定し乾燥した微高地を形成していたのではなく、I 区からV 区にかけては起伏し、II 区(高知県 2008)やIII-1 区東側には流路状の凹地がみられ、腐食質の泥層が堆積し、遺構は少なく、人間活動は希薄である。II 区の流路状の凹地最下部に堆積した泥層の腐食からCal BC 1040～BC 830 の年代値が得られていることから地形的に低い部分にみられる腐食質の泥層は縄文時代晩期頃から形成されたものと考えられ、V-2 区で確認した地震跡(図版 134 V-2 区西部下層トレンチセクション(北西より))は正にその部分に遺存していた。

このような地形が形成された要因は、物部川の河川堆積によるものであるが、砂礫層の堆積による高まり(I 区東側からVII 区、II 区西側からIII-1 区東側、III-1 区中央部からV-1 区)とその周囲(I 区南側、II 区東側、III-1 区中央部東寄り、V-2 区)にみられる後背湿地などの凹地や氾濫原が形成されていることから網状流路による堆積と推察される。

つまり、西野々遺跡は、物部川の氾濫でできた網状流路によって縄文時代前期後半までに形成されたと考えられる北東から南西へ舌状に延びた沖積扇状地および自然堤防状の高まり上に立地した遺跡であると言えよう。この中で、遺跡の中心部は微高地が最も広い I 区から東の VII 区までに形成されたことになる。また、今回報告する III 区中央部から IV 区にかけても微高地が形成されており、比較的多くの遺構が検出されている。

## 3. 遺跡の出現と消長

### (1) 概要

遺跡は前述のとおり、沖積扇状地および自然堤防状の高まり上に立地し、人が居着くようになったのは弥生時代の溝跡(SD-3001・3002・401 など)が掘削された中期前半頃と考えられる。それ以降、弥生時代後期後半まで連続と溝が掘削され、その数は 17 条を数え、総延長が 400m を超すものもみられる。古墳時代に入るとその痕跡は忽然と消え、次に現れるのは古墳時代後期、6 世紀末から 7 世紀前半頃の溝跡である。しかし、後世の溝跡によってその大半が掘り込まれていた。

古代には官衙関連とみられる掘立柱建物がみられるようになる。数棟で構成されたものが概ね 5カ所に点在する。建物の棟方向に近い SD-3022などはほぼ同時期に掘削されたものとみられる。また、円形のピットで構成された掘立柱建物もみられ、SB-309 はお堂のような建物ではなかったかと推測される。

古代後半から中世にかけても引き続き、溝がほぼ同じ場所を踏襲して掘削されると共にⅢ-4区の山際とⅣ区に溝で区画された屋敷跡が出現し、Ⅲ-1区東側にはⅡ区から続く屋敷跡の建物がみられる。ただし、『西野々遺跡Ⅲ』で報告するⅥ区とⅦ区で見られるような屋敷を溝が囲繞したものではなく、これらには明瞭な較差が看取される。また、Ⅳ区で検出した屋敷の周辺には畝跡とみられる畝状遺構が検出されており、屋敷の周りで畑作を行っていたものもみられる。全般に出土遺物が少なく、時期を明確にすることができないものも多いが、溝跡の中には遺物が比較的まとまって出土したものもみられる。それらの出土遺物からすると古代後半から中世前半に属するものが目立ち、14世紀後半以降のものは限られる。

また、屋敷に隣接して土坑墓がみられ、二重の周溝で区画されたものも確認されている。

14世紀後半以降は目立った遺構は見られなくなり、耕作地となったものとみられる。以後、近世後半以降のものが散見される程度である。

## (2) 溝跡について

確認された溝跡は前述のとおり全部で213条を数え、本項ではその概要を記す。これら溝跡はその性格から二つに分かれそうである。すなわち、灌漑用水路の機能を有するものと屋敷などの区画に関連するものである。中にはSD-3055のように両方の機能を有していたのではないかと見られるものもある。

これら溝跡は弥生時代中期前半から後期後半、古墳時代後期、古代、中世に大きく分かれ、中世のものの中には古代後半に掘削されたものも多いと考えられる。また、設置箇所に特色があり、時代を問わずその多くがⅢ-1区中央部東寄りにある南東から北西に延びる流路状の凹地の西側斜面部から頂部に設けられていた。これらはいずれも溝浚えが全般によく行われており、管理が行き届いたものと判断されることから灌漑用水路としての機能を果たしていたと考えられる。また、Ⅲ-2～4区でも同様の性格の東西溝跡がみられる。

一方、SD-3058やSD-3088は配置状況が矩形を呈しており、屋敷の区画溝であったものと判断され、Ⅳ区で確認したSD-421やSD-425など南北方向や東西方向に直線的に延びる溝跡は屋敷などの区画に関連しているものと考えられる。そして、これら溝跡は屋敷の廃絶と共にみられなくなる。

## 4. 弥生時代の様相

### (1) 概要

弥生時代は、人が初めて居着いた時代であると共に灌漑用水路が設けられた時期で、約300m東には当時の集落がみられる。溝以外ではⅢ-4区で検出した土坑(SK-301～303)の配置に特徴がみられる。すなわち、楕円形ないし不整楕円形を呈する3基の土坑が意図したかのように、東にSK-301、南にSK-302、西にSK-303が長軸ラインを内側に向けて掘削されている。北にも掘削されていたとすれば、土坑の長軸ラインが一辺約9.0mの矩形のライン上に揃う。時期的には中期前半頃とみられ、溝が最初に掘削された時期のものと考えられる。SK-301からは壺、甕、叩石、磨石、石斧の未成品がみられ、一応生活用品が一式揃っており、検出状況から土坑に囲まれた内側が一時的な生活空間であった可能性も考えられ、これら土坑は貯蔵穴的な性格ではなかったかと思われる。これ以外に掘立柱建物を1棟復元しているが、全容が不明で判然としない。

## 6. 古代の様相 (1) 概要

### (2) 溝跡について

灌漑用水路として機能したとみられるこの時代の溝跡は、その掘削箇所によって、先述のとおり大きく3グループに分かれる。すなわち、流路状の凹地の西斜面に設置された一群と南東部から北に向う一群および同じ南東部から西に向かう一群である。斜面に設けられたものは、全般に小規模で、途中で終わっている。一方、北と西へ延びる溝跡はほぼ同規模であり、向かう方向に違いがみられるのみである。

これら溝跡は、重複関係と出土遺物から最初に掘削されたのはSD-3001で、SD-3002、SD-3004・3008、SD-3003と続く。SD-3002とSD-3003は途中で交差するものの全く同じ用途で掘削されており、SD-3003はSD-3002の掘り返しと判断され、V-2区で網状流路化して終わっている。確認したのは西端部から約400mで、実際は総延長が400mを超し、起点が現在の下田川付近とすれば1.0km近くに及ぶ可能性もある。また、SD-3004とSD-3008もその掘削状況から全く同じ用途のものとみられ、北西方向にさらに延びる。

## 5. 古墳時代の様相

### (1) 概要

古墳時代は低調で、前述のとおり痕跡が確認できるのは古墳時代後期、6世紀末から7世紀前半頃の溝跡数条と竪穴状遺構1軒である。この竪穴状遺構の性格については、付属遺構や出土遺物が限られ判然としないが、仮住まい的なものであった可能性も考慮される。今回の調査ではこの時期の集落は確認されていないが、周辺に古墳が築造されていること<sup>(4)</sup>から付近には集落が存在したものと考えられる。これに続く7世紀後半の白鳳期については、遺物が散見されるものの明確な遺構はほとんど見られない。

### (2) 溝跡について

Ⅲ-1区の流路状の凹地の東側の緩斜面と西側の斜面部から検出されている。東側のSD-3020・3021は同じ方向を向いていることから関連性が窺えるが、小規模でその性格は判然としない。SD-3020からは珍しい須恵器の椀(3161)が出土しており、7世紀後半のものとみられる。

一方、西側の斜面部からは2条を検出しているが、溝の大半は後世の溝に掘削され、遺存部分が限られる。その中でSD-3018からは比較的多くの遺物が出土しており、6世紀末から7世紀前半にかけて存続したことが窺え、当時の様子を僅かではあるが留めている。注目されることは、10世紀前半から12世紀後半にかけて存続したとみられるSD-3034がSD-3018のルートを踏襲するかのようにはほぼ同じ場所に掘削されている点である。このことは、時代を問わず、地形的にそのルートが灌漑用水路の設置に最も有効な経路であったことを物語っている。弥生時代以降、北西方向に延びる溝跡が多数あることからその先には生産遺構が遺存している可能性が考えられる。

## 6. 古代の様相

### (1) 概要

この時期の遺構からの出土遺物は限られるため、時期を明確にすることはできないが、後世の遺構に混入した遺物から判断すると8世紀後半頃以降のものではなかろうか。この時期の代表的な遺構として後述する方形の掘方の柱穴で構成された掘立柱建物跡の一群がみられる。前述のようにこ

れら掘立柱建物の棟方向に近いSD-3022などはこの時期に掘削されたものとみられるが、出土遺物を見る限り埋没時期は12世紀頃と考えられる。また、SD-3034など多くの溝が掘削されているが、埋没時期は12～13世紀頃とみられる。

## (2) 掘立柱建物について

方形の掘方の柱穴で構成された掘立柱建物跡は前述のとおり大きく5ヵ所から検出されている。この内、SB-302は唯一梁行が3間となる古相の建物で、柱穴の掘方も他の建物跡に比べ大きく、中心的な建物であったものとみられ、最初に建てられたのではなかろうか。SB-303は棟方向がやや異なるものの位置的に同期のものと考えられる。Ⅲ-4区で検出された一群は、棟方向と並びからSB-304～306とSB-307・308に分けることができ、2時期の変遷が窺えるものの、新旧は判然としない。Ⅳ区では3ヵ所にまとまりがあり、西端の一群は4棟で構成され、東に開くコの字形を呈している。また、東側には南北に並列する2棟がみられ、この間にSB-403が単独で建つ。棟方向が微妙に異なるものの概ね同時期ではないかとみられ、時期的には8世紀後半から9世紀前半のものとして推測される。

## 7. 中世の様相

### (1) 概要

中世前半の遺構が中心で、溝跡は古代に掘削されたものも多い。その多くは灌漑用水路として機能したと考えられるが、前述のように屋敷の区画をなしていたものもみられる。Ⅲ-4区ではSD-3088で区画された屋敷(南北約10m, 東西約20m)とSD-3058で区画された屋敷(南北約11m, 東西約17m)がみられ、Ⅳ区ではSB-408を切ったSD-421とSD-429で区画された屋敷(南北約22m, 東西約22m)がみられる。いずれも出土遺物が少なく明確な時期は判然としないが、Ⅳ区の屋敷は13世紀代とみられるSB-408を切ってSD-421が掘削されていることから概ね14世紀前半、Ⅲ-4区の屋敷は13世紀後半から14世紀前半頃ではないかと考えられる。なお、建物構造等については報告書の最後の巻に譲ることとする。

### (2) 方形区画墓について

Ⅲ-4区から管見では類例をみない土坑墓が検出された。一般的にはSK-357のような土坑墓が単独で検出される。ところが、SK-356には主体部(土坑墓)を周溝が巡っており、一見「方形周溝墓」のような形態をなす。川西北・原遺跡(香川県2000)から同じような周溝を持つ中世墓が2基検出されているが、周溝の内側からは主体部(土坑墓)は検出されず、陸橋が1ヵ所に設けられている。また、上台の山遺跡(横浜市2002)からも陸橋が付き、かつ周溝を持つ中世墓が検出され、周溝の内側からは4個の蔵骨器が確認されている。

いずれも周溝を持つ点では共通するものの、主体部の有無・形態、陸橋の有無、周溝の数で異なり、同一のものとは言い難い。上台の山遺跡では「方形環濠墓」と呼称しているが、今回検出した周溝は環濠という規模ではないことから「環濠」を「周溝」と呼び代えたいところではあるが、すでに「方形周溝墓」の名称が弥生時代の墓の名称として定着していることからそれと区別するために「方形区画墓」という名称にした。また、主体部からは副葬品と考えられる土師質土器杯1・小皿3(3207～3210)が出土しており、14世紀前半頃のものではないかとみられる。なお、この小皿の成形技法には特色がみられるが、それらについては西野々遺跡発掘調査報告書の最後の巻の土師器と土師質土器の変遷についての項で詳述したい。

## 8. おわりに

本章では、Ⅲ～Ⅴ区で検出した遺構について、時代ごとにその様相をみてきたが、やはりこの調査区は溝跡に特徴付けられると思われる。弥生時代から中世まで長期に亘って溝がほぼ同じ場所を踏襲して掘削されており、灌漑の要所であったことが窺える。

また、古代では官衙関連と見られる建物跡、中世では小規模な屋敷跡および類例をみない周溝を持つ中世墓が確認され、西野々遺跡の西部の様相を垣間みることができた。これらは西野々遺跡を評価する上で、貴重な資料となろう。

一方、論じ残した部分も多々あるような気がする。それらについては、西野々遺跡報告書の最後の巻で触れることができればと思う。

種々の理由により、発掘調査から数えて7年が経過して本報告を刊行することができた。立場上、Ⅳ区とⅤ区については調査担当者に代わって記述したため、調査担当者の意図した内容になったかどうか判然としない。しかし、ここまでの記述をもって調査担当者と代役の責を果たしたことにしたい。

最後に、現地調査、その後の整理作業、報告書作成に関わったすべての方々に感謝申し上げ、本書の結びとする。

## 註

- (1) 発掘調査は道路建設に伴うものであったため西野々遺跡を横断する形で、東西約 1.0 kmに亘って行われ、約 43,000 m<sup>2</sup>(調査面積は、Ⅰ区:6,048 m<sup>2</sup>、Ⅱ区:6,396 m<sup>2</sup>、Ⅲ区:6,470 m<sup>2</sup>、Ⅳ区:6,495 m<sup>2</sup>、Ⅴ区:4,870 m<sup>2</sup>、Ⅵ区:6,430 m<sup>2</sup>、Ⅶ区:5,071 m<sup>2</sup>、Ⅷ区:1,258 m<sup>2</sup>、合計:43,038 m<sup>2</sup>で下層確認トレンチ等を含んだ調査総面積ではない。)を調査した。遺跡自体は前述のとおり南北にさらに広がっており、南北は少なくとも 100m以上あるものとみられ、遺跡の面積は 100,000 m<sup>2</sup>を下らないと推測される。このことから遺跡の 4 割程度を調査したものと考えられる。確認された遺構は弥生時代から近世に至るもので、古墳時代が希薄であることを除けば、連綿と人の痕跡を辿ることができる。この中で、弥生時代中期前半から後期後半、8 世紀後半から 14 世紀までの遺構が中心となる。
- (2) これらの遺構については平成 23 年 2 月に刊行する『西野々遺跡Ⅲ』(高知南国道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅲ)で報告する。
- (3) 遺跡の調査に並行して、ボーリング調査の結果を四国地方整備局土佐国道事務所から提供して頂いた。
- (4) 北西約 500m に住吉山 1～4 号墳(現存するのは住吉山 1 号墳のみ)、北約 500m には吾岡山古墳(消滅)の存在が知られており、付近には一定規模の集落の存在が考えられる。

## 引用文献

- 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団 2000.3 『川西北・原遺跡府中地区』  
高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2007.3 『介良野遺跡』  
高知県教育委員会 1986.3 『田村遺跡群』  
高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2008.3 『西野々遺跡Ⅰ』  
中世墓資料集成研究会 2004.3 『中世墓資料集成－四国編－』  
財団法人横浜市ふるさと歴史財団・横浜市教育委員会 2002.3 『上台の山遺跡』

# 遺物觀察表

### 凡例

1. 図版番号は、Ⅲ区が3001～3549, Ⅳ区が4001～4135, Ⅴ区が5001～5143である。
2. 法量は土器を基準にcmで示しているが、土製品、石製品の場合は口径が全長(cm), 器高が全幅(cm), 胴径が全厚(cm), 底径が重量(g), 古銭は銭径(cm), 内径(cm), 銭厚(cm), 量目(g)と読み替えている。それ以外の値については、特徴または本文中に記している。なお、カッコ付きの数値は残存値を表している。
3. 遺存状態については、遺存部が1/6に満たないものは「破片」, 1/10に満たないものは「細片」と表記している。

番号	遺構層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
3001	第Ⅰ層	土師器 甕	17.6	(4.0)	-	-	暗灰黄色 にぶい赤褐色	良	口頸部の破片, 器面は摩耗
3002	〃	〃 甕	-	(10.7)	-	-	橙色 〃	良好	口縁部から胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 他はナデ調整
3003	〃	〃 小皿	7.6	1.3	-	5.6	にぶい橙色 にぶい黄橙色	良	約1/2が残存, 成形は手づくね, 内面はナデ調整, 外面は摩耗
3004	〃	土師質土器 杯	-	(1.4)	-	6.2	にぶい黄橙色 にぶい褐色	〃	底部約1/4が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3005	〃	〃 〃	-	(1.5)	-	7.6	にぶい橙色 〃	〃	底部約1/3が残存, 成形はB技法, 内面は回転ナデ調整, 外面は未調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3006	〃	〃 〃	-	(1.8)	-	7.0	〃 〃	〃	底部約1/2が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3007	〃	〃 〃	-	(2.4)	-	8.0	〃 〃	〃	底部から体部の破片, 成形はB技法, 内面は回転ナデ調整, 外面は未調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3008	〃	〃 小皿	6.5	1.3	-	4.2	明赤褐色 〃	良好	約2/5が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3009	〃	〃 〃	8.1	1.5	-	5.6	にぶい橙色 〃	良	約1/5が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3010	〃	〃 〃	7.5	1.8	-	5.8	明赤褐色 橙色	〃	口縁部から底部の破片, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 外底面は摩耗
3011	〃	須恵器 杯身	-	(1.5)	-	6.2	灰白色 〃	〃	底部約1/4が残存, 内外面ともヘラ磨き, 底部の切り離しは静止ヘラ切り
3012	〃	〃 高杯	-	(6.8)	-	-	褐灰色 〃	〃	脚柱上部が残存, 杯部は摩耗, 脚柱部は回転ナデ調整, 内面にしほり目が残存
3013	〃	青磁 皿	-	(0.7)	-	5.4	灰黄色 灰白色	良好	底部の破片, 同安窯系, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
3014	〃	肥前系陶器 碗	-	(3.0)	-	5.9	灰黄色 〃	〃	高台の大半を欠くが底部が残存, 透明釉を施釉, 見込にコンニャク判, 畳付は釉ハギ
3015	〃	〃 〃	-	(2.1)	-	(3.3)	灰白色 〃	〃	畳付以外底部が残存, 器面には乳白色の釉を施釉, 畳付周辺は釉ハギ
3016	〃	肥前系磁器 碗	8.8	(1.6)	-	-	〃 〃	〃	口縁部の破片, 界線と草花文
3017	〃	〃 皿	-	(2.1)	-	4.0	〃 〃	〃	口縁部が欠損, 見込は蛇ノ目状の釉ハギ, 畳付も釉ハギ
3018	〃	〃 稜花鉢	-	(5.2)	-	-	白色 〃	〃	口縁部の破片, 内面には花文, 外面には2条の界線と唐草文
3019	〃	能茶山焼 広東茶碗	-	(5.1)	-	-	灰黄色 灰白色	〃	口縁部の破片, 外面に草花文, 器面は摩耗
3020	〃	〃 〃	-	(4.6)	-	6.4	にぶい黄橙色 灰白色	〃	口縁部が欠損, 見込に「寿」, 外底面に「サ」と能茶山焼の窯印, 器面は摩耗
3021	〃	近世陶器 碗	-	(2.2)	-	5.7	灰オリーブ色 灰褐色	〃	底部が残存, 底部は削り出し高台で露胎
3022	〃	石製品 石臼	33.0	(16.8)	9.5	(6.4kg)	-	-	下臼の約1/2が残存, 上面に細かい摺目が残存
3023	第Ⅲ層	弥生土器 壺	19.2	(2.6)	-	-	にぶい褐色 〃	良	口縁部の破片, 口唇部はヨコナデ調整, 内面はハケ調整, 外面はタタキ
3024	〃	土師器 甕	11.1	(4.6)	-	-	〃 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 他はナデ調整
3025	〃	〃 杯	-	(1.6)	-	9.6	にぶい赤褐色 にぶい橙色	〃	底部と体部の破片, 左手手法, 内底面にヘラ磨き, 外面はナデ調整

Ⅲ区 遺物観察表2 (3025～3050)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
3026	第Ⅲ層	土師器 杯	13.8	(3.5)	-	-	にぶい橙色 〃	良	一部が残存, 手づくね, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面は指押え, 製作技法が瓦器に似る。
3027	〃	須恵器 皿	-	(1.0)	-	12.6	灰黄褐色 〃	〃	底部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切り
3028	〃	〃 短頸壺	11.8	(3.3)	-	-	褐灰色 〃	良好	口頸部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 頸部外面はハケ調整
3029	〃	土師質土器 杯	-	(1.9)	-	7.2	にぶい橙色 〃	良	底部約1/4が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3030	〃	〃 〃	-	(2.2)	-	8.2	にぶい橙色 橙色	やや不良	底部から体部の破片, 成形はA技法, 器面は摩耗, 底部の切り離しは回転糸切り
3031	〃	〃 〃	-	(2.2)	-	6.8	にぶい橙色 〃	良	底部から体部の約1/4が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整とヘラ磨き
3032	〃	〃 椀	-	(3.1)	-	5.5	褐灰色 灰白色	不良	底部から体部の約1/2が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗, 高台も摩耗
3033	〃	〃 小皿	-	(1.1)	-	5.2	にぶい橙色 にぶい黄褐色	良	底部約1/5が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
3034	〃	瓦器 椀	-	(3.1)	-	-	にぶい褐色 にぶい赤褐色	不良	口縁部の破片, 口縁部と内面はヨコナデ調整, 外面は指押え, 在地産とみられる。
3035	〃	瓦質土器 三足釜	(19.8)	(7.0)	-	-	黄灰色 〃	やや不良	中胴部から鐏にかけての約1/4が残存, 胴部外面は指押えで, 鐏から下に煤が付着
3036	〃	青磁 碗	15.7	(3.6)	-	-	灰黄色 〃	良	口縁部の破片, 全面に施釉, 口縁部外面に釉たれの痕が残存
3037	〃	〃 〃	-	(1.7)	-	-	灰オリーブ色 〃	良好	口縁部の細片, 全面に薄い青磁釉を施釉
3038	〃	〃 〃	-	(2.0)	-	5.8	暗灰黄色 灰色	〃	底部が残存, 底部は削り出し高台, 皿付から内側は釉ハギ, 見込の文様は赤褐色に変色
3039	〃	〃 〃	-	(2.1)	-	6.0	灰色 〃	〃	底部の破片, 底部は削り出し高台, 内面から高台外側に施釉, 全面に貫入
3040	〃	〃 皿	-	(0.9)	-	4.5	〃 〃	〃	底部約1/3が残存, 同安窯系, 外面は回転ヘラ削り, 内面から外面に施釉
3041	〃	青花 皿	-	(1.8)	-	-	灰白色 〃	〃	口縁部の細片, 全面に透明釉を施釉, 雷文は形骸化
3042	第Ⅳ層	弥生土器 鉢	-	(1.8)	-	1.6	暗灰色 にぶい黄橙色	良	底部の破片, 内面と外面はヘラ磨き, 外底面はナデ調整
3043	〃	土師器 甕	3.5	3.1	1.9	-	- にぶい橙色	〃	片方の把手がほぼ完存, 小型の甕の把手で, 器面はナデ調整
3044	〃	〃 〃	4.2	4.2	3.5	-	〃 〃	〃	片方の把手がほぼ完存, 器面はナデ調整
3045	〃	須恵器 杯蓋	-	(2.2)	-	-	黄灰色 灰黄褐色	良好	天井部約1/5が残存, 器面は回転ナデ調整で, 天井部に回転ヘラ削り, 外面は自然釉がかかりハダ荒れ
3046	〃	〃 杯身	-	(1.5)	-	9.2	褐灰色 〃	〃	底部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 内面にナデ調整を加える。底部外面は回転ヘラ切りの後にナデ調整
3047	〃	〃 〃	-	(1.8)	-	8.6	灰黄色 〃	不良	底部約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整, 高台は摩耗, 底部の切り離しは回転糸切り, 高台高0.8cm
3048	〃	〃 〃	-	(1.6)	-	10.4	〃 〃	やや不良	底部約1/3が残存, 外面は回転ナデ調整, 内面は剝離, 高台はヨコナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
3049	〃	〃 提瓶	6.4	(4.1)	-	-	灰色 〃	良好	口縁部約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整
3050	〃	〃 短頸壺	11.6	(3.2)	-	-	黄灰色 〃	不良	口縁部の破片, 器面は回転ナデ調整

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
3051	第Ⅳ層	須恵器 甕	18.8	(5.0)	-	-	灰黄色 〃	不良	口縁部から上胴部の破片、器面は摩耗するが、肩部外面に回転カキ目調整の痕が残存
3052	〃	土師質土器 小皿	8.0	(1.3)	-	5.0	にぶい黄橙色 にぶい橙色	良	底部の一部と口縁部約1/5が残存、成形はA技法、口縁部から内面は回転ナデ調整、体部外面は未調整
3053	〃	〃 杯	-	(1.5)	-	4.6	赤橙色 にぶい橙色	やや不良	底部約1/3が残存、成形はA技法、器面は摩耗、底部の切り離しは回転糸切り
3054	〃	〃 〃	-	(1.6)	-	7.0	にぶい黄橙色 〃	良	底部約1/2が残存、成形はB技法、内面は回転ナデ調整、外面は未調整、底部の切り離しは回転糸切り
3055	〃	〃 椀	-	(1.4)	-	6.0	〃 〃	〃	底部約1/2が残存、成形はA技法、器面は回転ナデ調整、高台はヨコナデ調整、底部の切り離しは回転糸切り
3056	〃	〃 〃	-	(2.1)	-	5.2	にぶい橙色 〃	〃	底部から体部の約1/3が残存、成形はA技法、内面はヘラ磨き、外面は回転ヘラ削り
3057	〃	瓦器 小皿	7.4	(1.2)	-	-	黄灰色 灰褐色	〃	口縁部から体部の約1/5が残存、口縁部はヨコナデ調整、体部外面は指押え
3058	〃	東播系須恵器 片口鉢	20.0	(6.5)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口縁部から体部の破片、器面は回転ナデ調整で、内面にはナデ調整を加える。
3059	〃	青磁 碗	-	(2.7)	-	-	灰オリーブ色 〃	良好	口縁部の破片、全面に青磁釉を施釉、器面には貫入
3060	〃	〃 〃	-	(2.9)	-	5.4	暗灰黄色 〃	〃	底部約1/3が残存、底部は削り出し高台、底部以外に青磁釉を施釉、器面には細かな貫入、見込に釉溜り
3061	第Ⅵ層	弥生土器 壺	18.8	(3.7)	-	-	にぶい橙色 橙色	良	口頸部の破片、口縁部はヨコナデ調整、頸部内外面はハケ調整
3062	〃	〃 〃	-	(4.4)	-	-	橙色 〃	〃	口頸部の細片、口縁部はヨコナデ調整、頸部内面はナデ調整、外面はハケ調整
3063	〃	石製品 叩石	13.3	5.6	4.3	448.4	-	-	完存、石材は細粒砂岩、両端に僅かに敲打痕が残存
3064	SK-301	弥生土器 壺	-	(7.7)	(23.0)	-	灰黒色 にぶい橙色	良	上胴部約3/4が残存、外面はハケ調整の後にクシ描きによる施文、内面はヘラナデ、ナデ調整
3065	〃	〃 〃	-	(7.2)	-	-	にぶい褐色 〃	〃	上胴部の破片、外面はクシ描きによる波状文と直線文、内面はナデ調整とみられるが摩耗
3066	〃	〃 〃	-	(3.7)	-	-	灰黄褐色 にぶい橙色	やや不良	上胴部の破片、器面は摩耗するが、ヘラ描沈線とクシ状工具による刺突文
3067	〃	〃 甕	15.0	(9.2)	13.0	-	にぶい橙色 にぶい褐色	良	口縁部から中胴部の破片、口縁部はヨコナデ調整、内外面はナデ調整で、肩部外面にヘラ状工具による列点文
3068	〃	〃 〃	15.6	(4.3)	-	-	にぶい褐色 〃	〃	口縁部から上胴部の約1/3が残存、器面は摩耗
3069	〃	〃 〃	(18.8)	(8.8)	16.2	-	明赤褐色 にぶい赤褐色	〃	口縁部から中胴部の破片、器面は外面を中心に摩耗するが、肩部外面にヘラ描沈線を挟んで、列点文
3070	〃	〃 〃	-	(14.8)	26.0	-	褐灰色 にぶい黄橙色	〃	頸部から上胴部の破片、内面はナデ調整と指ナデで、ハケ目が一部に残存、頸部外面はハケ調整
3071	〃	〃 壺	-	(4.0)	-	8.0	灰黄褐色 にぶい橙色	〃	底部が残存、器面はナデ調整で、内底面に指頭圧痕が残存
3072	〃	〃 〃	-	(3.2)	-	8.0	褐灰色 にぶい橙色	〃	底部の破片、内面は摩耗、外面はナデ調整で、外端に部分的に指頭圧痕が残存
3073	〃	〃 〃	-	(2.4)	-	8.4	褐灰色 にぶい黄橙色	〃	底部約1/3が残存、内面は摩耗、外面は比較的丁寧なナデ調整
3074	〃	〃 〃	-	(1.9)	-	9.8	オリーブ黒色 褐色	〃	底部の破片、器面はナデ調整
3075	〃	〃 〃	-	(1.1)	-	5.7	にぶい褐色 灰褐色	〃	底部の破片、器面はナデ調整、ミニチュア土器の可能性あり。

Ⅲ区 遺物観察表4 (3076～3100)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
3076	SK-301	石製品 小型蛤刃石斧	9.5	5.2	2.6	253.3	-	-	ほぼ完存, 未製品, 石材は緑泥片岩
3077	〃	〃 叩石	13.6	6.1	2.9	356.3	-	-	完存, 石材は細粒砂岩, 表面は平滑で, 一方の端部に強い敲打痕が残存
3078	〃	〃 磨石	11.9	8.8	4.7	699.4	-	-	完存, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕
3079	〃	〃 〃	13.2	10.7	6.1	1.2kg	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 側面に弱い敲打痕が残存
3080	〃	〃 〃	(13.6)	9.9	3.7	(719.4)	-	-	一部欠損, 石材は粗粒砂岩, 表面は比較的平滑で, 側面に弱い敲打痕
3081	SK-302	弥生土器 甕	14.8	(3.8)	-	-	にぶい橙色 にぶい褐色	良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はナデ調整, 外面はタテ方向のハケ調整
3082	〃	〃 壺	-	(9.1)	-	10.4	褐灰色 にぶい黄褐色	〃	底部が残存, 内面は指ナデ, 外面は下から上へのヘラ磨き, 外底面はナデ調整
3083	〃	〃 〃	-	(6.5)	-	13.0	にぶい橙色 にぶい褐色	〃	底部が残存, 内面は指押えとナデ調整, 外面はヘラ磨き, 外底面はナデ調整, 外端部に指頭圧痕が残存
3084	SK-303	〃 ミニチュア土器	-	(1.4)	-	5.2	灰黄褐色 にぶい褐色	〃	底部約1/4が残存, 器面はナデ調整
3085	SK-304	〃 壺	-	(11.6)	-	4.6	にぶい橙色 〃	〃	底部が残存, 内面は指ナデ, 外面はタタキの後にハケ調整, 外底面はナデ調整
3086	SK-307	〃 甕	-	(2.9)	-	-	橙色 にぶい橙色	〃	口頸部の細片, 内面はハケ調整の後に内外面にヨコナデ調整
3087	SD-3001	〃 壺	-	(3.3)	-	6.2	灰褐色 〃	〃	底部が残存, 外底面はナデ調整, 他は摩耗
3088	〃	〃 〃	-	(2.1)	-	8.0	褐灰色 にぶい赤褐色	〃	底部約1/2が残存, 内面はヘラナデとナデ調整, 外面はハケ調整, 外底面はナデ調整
3089	SD-3002	〃 〃	-	(4.7)	-	-	にぶい黄褐色 〃	やや不良	頸部から上胴部の破片, 内面はナデ調整, 外面にはクシ描きによる波状文と直線文
3090	〃	〃 甕	17.0	(5.4)	-	-	にぶい黄褐色 にぶい橙色	良	口頸部約1/3が残存, 頸部外面はハケ調整, 他は摩耗, 口縁端部にヘラ状工具による刻目と刺突文
3091	〃	〃 〃	17.1	(11.1)	(21.3)	-	にぶい橙色 にぶい黄褐色	〃	口頸部約1/2と胴部の一部が残存, 口唇部から口縁部内面はヨコナデ調整, 頸部内外面はハケ調整
3092	〃	〃 〃	-	(7.3)	(18.0)	-	にぶい褐色 にぶい黄褐色	〃	上胴部約1/6が残存, 器面はナデ調整で, 外面に棒状浮文, 微隆起突帯, 円形ないし楕円形浮文を貼付
3093	〃	〃 〃	-	(2.1)	-	-	にぶい褐色 〃	不良	口縁部の細片, 器面は摩耗, 口縁外面に微隆起突帯を貼付
3094	〃	〃 壺	-	(8.9)	-	5.8	明赤褐色 にぶい橙色	良	底部約1/3が残存, 内面はヘラナデと指ナデ, 外面はヘラ磨き, 外底面はナデ調整
3095	〃	〃 〃	-	(9.1)	-	7.3	灰色 にぶい橙色	〃	底部がほぼ完存, 内面は指押えの後にヘラナデとナデ調整, 外面から外底面はナデ調整で, 2カ所にヘラ磨き
3096	〃	〃 〃	-	(5.9)	-	7.4	にぶい褐色 にぶい橙色	〃	底部約1/5が残存, 内面は指押えの後にナデ調整, 外面はヘラ磨き, 外底面はナデ調整
3097	〃	〃 ミニチュア土器	5.2	5.0	-	4.8	にぶい褐色 〃	〃	口縁部の多くと裾部4/5が欠損, 内面は指ナデ, 他は指押えの後にナデ調整
3098	〃	石製品 石庖丁	10.2	4.8	0.8	65.9	-	-	ほぼ完存, 石材は粘板岩, ほぼ全面を研磨し, 紐孔を2カ所設ける。
3099	〃	〃 投弾	6.5	4.7	4.3	182.1	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑
3100	〃	〃 磨石	10.8	8.4	3.1	429.9	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 両面は摩滅

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
3101	SD-3002	石製品 磨石	16.6	11.4	5.7	2.0kg	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 端部に擦痕と敲打痕が残存
3102	SD-3003	弥生土器 壺	-	(22.1)	27.4	-	にぶい黄橙色 橙色	良	頸部から中胴部約1/3が残存, 頸部内面はナデ調整, 外面はハケ調整, 胴部内面は一部にハケ目が残存
3103	〃	〃 甕	12.0	(3.6)	(11.6)	-	赤褐色 にぶい赤褐色	〃	口縁部から上胴部の破片, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面はナデ調整, 外面はタタキの後にナデ調整
3104	〃	〃 〃	12.0	(4.5)	(12.9)	-	赤褐色 明赤褐色	〃	口縁部から上胴部の約1/2が残存, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面は粗いハケ調整, 外面はナデ調整
3105	〃	〃 〃	14.0	(3.5)	-	-	にぶい赤褐色 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面はハケ調整, 外面は摩耗, 搬入品
3106	〃	〃 〃	9.3	(12.5)	16.1	-	〃 〃	〃	口頸部の一部と胴部約1/4が残存, 器壁が極めて薄い, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面は下半にヘラ削り
3107	〃	〃 〃	-	(5.5)	-	3.6	にぶい褐色 〃	〃	底部約1/3が残存, 器面は摩耗するが, 内面に指頭圧痕が部分的に残存
3108	〃	〃 〃	-	(7.7)	-	4.0	黒褐色 にぶい赤褐色	〃	底部の大半が残存, 内面は指押えの後にハケ調整とナデ調整, 外面は細かいハケ調整, 外底面はナデ調整
3109	〃	〃 鉢	26.0	(7.3)	-	-	橙色 〃	〃	口縁部から体部の破片, 口唇部から内面はナデ調整, 外面には成形時皺が残存
3110	SD-3004	〃 壺	15.3	(11.8)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口頸部約1/3が残存, 口縁部は内面にハケ調整を施してからヨコナデ調整, 頸部内面は指押えとナデ調整
3111	〃	〃 甕	13.1	(3.8)	-	-	にぶい橙色 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面はヘラ削り, 外面はハケ調整
3112	〃	〃 壺	-	(4.5)	-	5.8	にぶい橙色 にぶい黄橙色	〃	底部約1/2が残存, 内面は摩耗, 外面と外底面はナデ調整
3113	SD-3007	〃 〃	-	(14.5)	27.0	-	黄灰色 にぶい橙色	〃	胴部約1/3が残存, 内面はハケ調整の後にナデ調整, 外面はタタキの後に下胴部にハケ調整を加える。
3114	SD-3008	〃 〃	15.8	(4.9)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口縁部の一部と頸部約1/2が残存, 口縁部は内面にハケ調整を施してからヨコナデ調整
3115	〃	〃 〃	-	(5.2)	-	-	にぶい褐色 にぶい黄橙色	〃	頸部の破片, 内面はナデ調整でしまり目が残存, 外面はハケ調整
3116	〃	〃 〃	-	(5.0)	-	-	にぶい橙色 〃	〃	頸部から上胴部の破片, 内面には指頭圧痕, 外面にはハケ目が残存
3117	〃	〃 〃	-	(1.1)	-	-	〃 〃	〃	口縁部の細片, ヨコナデ調整で内面にヘラ磨きを加える。端部に竹管文, 搬入品
3118	〃	〃 甕	13.8	(4.8)	-	-	〃 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はハケ調整とナデ調整, 外面はナデ調整
3119	〃	〃 〃	15.0	(10.5)	16.8	-	にぶい赤褐色 〃	〃	口縁部と胴部の約1/3が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 他は指押えとナデ調整
3120	〃	〃 〃	-	(2.7)	-	2.2	にぶい黄橙色 〃	〃	底部約2/3が残存, 内外面ともハケ調整の後にナデ調整
3121	〃	〃 壺	-	(10.5)	-	6.0	黄灰色 にぶい黄橙色	〃	底部約1/2が残存, 内面はハケ調整の後に指ナデ, 外面はハケ調整の後にヘラ磨き, 外底面はナデ調整
3122	〃	〃 鉢	13.1	5.5	-	4.0	にぶい黄橙色 〃	〃	底部と口縁部約1/5が残存, 内面と外底面はナデ調整, 口縁部から体部外面は未調整
3123	P-301	石製品 磨石	9.2	(5.6)	2.9	(217.7)	-	-	約1/2が残存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で縁辺部を中心に擦痕
3124	SD-3018	弥生土器 甕	-	(5.8)	(21.4)	-	にぶい橙色 〃	良	上胴部約1/5が残存, 器面はナデ調整で, 肩部外面にハケ目が残存
3125	〃	〃 〃	-	(10.7)	-	4.0	にぶい黄橙色 〃	〃	底部約2/3が残存, 内面と外底面はナデ調整, 外面はタタキ, ただし, 大半で器面が剥離

Ⅲ区 遺物観察表6 (3126～3150)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
3126	SD-3018	弥生土器 壺	-	(9.0)	(24.0)	-	褐灰色 にぶい赤褐色	良	下胴部約1/2が残存, 器面は摩耗と剥離がみられるが, 外面に細かなハケ目が残存
3127	〃	土師器 甕	13.6	9.6	13.7	-	にぶい褐色 〃	やや 不良	底部の一部が欠損, 口縁部から内面肩部はヨコナデ調 整, 内面はナデ調整, 肩部外面はハケ調整
3128	〃	〃 〃	12.1	(3.6)	-	-	明赤褐色 〃	不良	口縁部から上胴部の破片, 口縁部にヨコナデ調整の痕跡 が残るものの, 器面は摩耗
3129	〃	〃 〃	15.0	(3.1)	-	-	赤褐色 にぶい赤褐色	良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 他はナデ調整
3130	〃	〃 〃	15.5	(4.9)	-	-	にぶい橙色 にぶい褐色	不良	口縁部から上胴部の約1/3が残存, 器面は全般に摩耗
3131	〃	〃 〃	16.3	(2.5)	-	-	橙色 明赤褐色	〃	口縁部の破片, 器面は摩耗
3132	〃	〃 〃	16.6	(14.0)	21.0	-	にぶい褐色 〃	良	口縁部から中胴部約1/5が残存, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面はハケ調整とヘラ削り, 外面はナデ調整
3133	〃	〃 〃	16.8	(14.5)	19.2	-	にぶい褐色 明赤褐色	〃	口縁部から胴部約1/2が残存, 器面は剥離と摩耗
3134	〃	〃 〃	17.8	(2.8)	-	-	橙色 〃	〃	口縁部の破片, 口縁部はヨコナデ調整
3135	〃	〃 〃	18.0	(3.2)	-	-	にぶい褐色 〃	〃	〃
3136	〃	〃 〃	18.3	(5.0)	-	-	〃 〃	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 他はナデ調整
3137	〃	〃 〃	19.9	(3.4)	-	-	〃 〃	〃	口縁部の破片, 器面は摩耗
3138	〃	〃 〃	-	(5.5)	-	-	明赤褐色 にぶい褐色	〃	口縁部の細片, 口唇部はヨコナデ調整, 口縁部はハケ調整
3139	〃	〃 〃	25.4	(6.2)	-	-	にぶい褐色 〃	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はヘラ 削り, 外面はナデ調整
3140	〃	須恵器 杯蓋	11.3	(2.4)	-	-	灰色 〃	良好	口縁部から天井部の破片, 口縁部は回転ナデ調整, 天井 部外面は回転ヘラ削り
3141	〃	〃 〃	12.7	3.6	-	-	灰色 褐灰色	〃	1/2弱が残存, 器面は回転ナデ調整, 天井部外面は回転 ヘラ削り, 内面はナデ調整
3142	〃	〃 〃	12.4	(3.5)	-	-	黄灰色 灰色	良	約1/5が残存, 器面は回転ナデ調整, 天井部外面はヘラ 起こし, 内面はナデ調整
3143	〃	〃 杯身	10.4	(1.9)	-	-	灰黄褐色 暗灰黄色	不良	口縁部の破片, 器面は回転ナデ調整, 受部径12.4cm, たち 上がり高0.7cm
3144	〃	〃 〃	10.9	(2.3)	-	-	灰色 〃	良好	口縁部から体部の破片, 器面は回転ナデ調整, 受部径 13.2cm, たち上がり高0.8cm
3145	〃	〃 〃	10.8	3.6	-	-	〃 〃	〃	約1/2が残存, 器面は回転ナデ調整, 底部はヘラ起こし, 受部径12.9cm, たち上がり高0.6cm
3146	〃	〃 〃	10.9	(3.8)	-	-	〃 〃	〃	約1/6が残存, 器面は回転ナデ調整, 底部外面は回転ヘ ラ削り, 受部径13.2cm, たち上がり高0.6cm
3147	〃	〃 〃	11.1	4.0	-	-	青灰色 〃	〃	一部欠損, 器面は回転ナデ調整, 内底面はナデ調整, 底 部外面は回転ヘラ削り, 受部径13.6cm
3148	〃	〃 〃	(11.2)	(2.8)	-	-	灰色 〃	〃	口縁部から底部の破片, 底部外面は回転ヘラ削り, 受部 径13.9cm, たち上がり高(0.8cm)
3149	〃	〃 〃	11.3	3.7	-	-	青灰色 〃	〃	ほぼ完存, 器面は回転ナデ調整, 内底面はナデ調整, 底 部外面はヘラ削りの後にヘラ起こし, 受部径13.7cm
3150	〃	〃 〃	11.7	3.6	-	-	〃 〃	〃	約4/5が残存, 器面は回転ナデ調整, 内底面にナデ調整, 底部内外面に十字のヘラ記号, 受部径14.0cm

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
3151	SD-3018	須恵器 杯身	11.9	(3.1)	-	-	灰色 褐灰色	良好	約1/6が残存, 器面は回転ナデ調整, 底部外面は回転ヘラ削りで, 自然釉がかかりハダ荒れ, 受部径14.4cm
3152	〃	〃 〃	12.6	(3.1)	-	-	褐灰色 灰褐色	良	約1/5が残存, 器面は回転ナデ調整, 底部外面は回転ヘラ削りで, ハダ荒れ, 受部径15.0cm, たち上がり高0.9cm
3153	〃	〃 高杯	-	(5.1)	-	11.0	灰黄色 〃	不良	脚部の大半が残存, 器面は摩耗
3154	〃	〃 壺	7.2	(4.6)	-	-	灰色 〃	良好	口頸部約1/2が残存, 器面は回転ナデ調整, 外面は自然釉がかかり, ハダ荒れ
3155	〃	〃 提瓶	7.9	25.6	20.0	-	灰色 褐灰色	〃	胴部1/2弱が欠損, 器面は回転ナデ調整, 胴部外面に回転カキ目調整
3156	〃	〃 甕	-	(3.8)	-	-	灰色 褐灰色	〃	上胴部の破片, 器面は回転ナデ調整, 内面は同心円文のタタキとナデ調整, 外面は回転カキ目調整, ハダ荒れ
3157	〃	石製品 磨石	7.2	5.3	1.9	110.2	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑
3158	〃	〃 叩石	18.5	10.3	5.9	1.8kg	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 敲打痕が2ヵ所, 側面に擦痕と摩滅痕が残存
3159	〃	金属製品 刃鎌	(10.6)	(9.0)	2.5	(41.3)	-	-	刃先が欠損, 刃部は摩滅し, 全面に錆化
3160	SD-3019	須恵器 甕	-	(21.4)	-	-	灰黄褐色 灰黄色	不良	胴部の破片, 内面に同心円文のタタキ, 外面はタタキの後に回転カキ目調整
3161	SD-3020	〃 椀	10.3	6.8	-	3.4	灰色 〃	良	約1/2が残存, 口縁部は回転ナデ調整, 体部内外面はナデ調整, 底部外面は静止ヘラ削り, 内面にヘラ記号
3162	〃	土師器 甕	-	(2.7)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口縁部の細片, 口縁部はヨコナデ調整
3163	SB-304	弥生土器 甕	-	(4.4)	-	-	〃 〃	〃	口頸部の破片, 口頸部はヨコナデ調整で, 外面にはタテ方向のハケ目が残存
3164	SB-307	〃 〃	13.4	(2.3)	-	-	明赤褐色 〃	不良	口縁部の破片, 器面は摩耗するも刻目が2ヵ所残存
3165	〃	須恵器 鉢	-	(2.6)	-	10.8	黄灰色 褐灰色	良好	底部から体部の破片, 外底面はナデ調整, 他は回転ナデ調整で, 自然釉がかかりハダ荒れ
3166	SB-308	〃 高杯	-	(3.1)	-	12.8	灰黄色 〃	不良	裾部約1/5が残存, 器面は摩耗
3167	〃	〃 甕	-	(2.4)	8.4	-	黄灰色 〃	良好	胴部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整, 中胴部外面に回転ヘラ削り
3168	SB-309	木製品	(32.7)	(5.2)	(4.2)	-	-	-	柱根の芯のみ残存, 樹種はヒノキ
3169	SB-310	〃	(48.9)	(10.4)	(3.0)	-	-	-	〃
3170	SB-312	土師質土器 小皿	6.9	1.7	-	4.6	にぶい橙色 橙色	良	約1/5が残存, 成形はA技法, 口縁部から内面は回転ナデ調整, 体部外面は未調整
3171	〃	〃 〃	7.4	2.0	-	5.5	橙色 〃	〃	口縁部から底部の破片, 成形はA技法, 口縁部から内面は回転ナデ調整, 体部外面は未調整
3172	〃	〃 〃	7.5	1.5	-	4.5	にぶい橙色 〃	〃	約2/3が残存, 成形はB技法, 口縁部から内面は回転ナデ調整, 内底面にナデ調整, 体部外面は未調整
3173	〃	〃 〃	8.3	1.5	-	4.3	〃 〃	〃	底部から口縁部の破片, 成形はB技法, 口縁部から内面は回転ナデ調整, 体部外面は未調整
3174	SB-314	〃 椀	-	(1.3)	-	7.0	〃 〃	〃	底部約1/4が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3175	SB-316	〃 杯	11.8	(3.1)	-	-	橙色 〃	やや不良	口縁部から体部の破片, 成形はA技法, 器面は摩耗

Ⅲ区 遺物観察表8 (3176～3200)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
3176	SB-316	瓦器 小皿	8.9	(3.4)	-	-	灰黄褐色 にぶい黄橙色	不良	口縁部から体部の破片, 器面は全般に摩耗, 体部外面に 指頭圧痕が僅かに残存
3177	SB-319	土師質土器 杯	-	(2.4)	-	-	浅黄橙色 にぶい橙色	やや不良	口縁部から体部の細片, 成形はA技法, 口縁部から内面 は回転ナデ調整, 体部外面は未調整
3178	SB-320	〃 〃	12.9	(2.9)	-	-	灰褐色 〃	良	口縁部から体部の破片, 成形はA技法, 器面は回転ナデ 調整
3179	〃	瓦器 椀	13.0	(3.5)	-	-	褐灰色 〃	〃	口縁部から体部の破片, 口縁部から内面はヨコナデ調 整, 体部外面には指頭圧痕が残存
3180	〃	〃 小皿	8.0	1.1	-	6.0	灰色 〃	〃	約1/3が残存, 口縁部はヨコナデ調整で, 内面にナデ調 整の後に細かいヘラ磨きを施す。底部外面は指押え
3181	SB-325	土師質土器 杯	13.1	4.1	-	8.0	にぶい橙色 〃	〃	口縁部約1/3が欠損, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調 整, 底部の切り離しは回転糸切り
3182	〃	〃 〃	-	(1.4)	-	8.1	〃 〃	〃	底面の大半と体部の一部が残存, 成形はA技法, 器面は 回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整を加える。
3183	〃	〃 小皿	6.9	1.8	-	4.2	〃 〃	良好	完存, 成形はA技法, 口縁部は回転ナデ調整, 内底面は ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3184	〃	〃 〃	7.5	1.2	-	6.6	にぶい橙色 橙色	不良	約1/5が残存, 成形はB技法, 器面は摩耗, 底部の切り離 しは回転糸切り
3185	〃	瓦器 椀	-	(3.9)	-	-	灰色 〃	良好	口縁部から体部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面は ヘラ磨き, 外面は指押え, 搬入品とみられる。
3186	SB-329	土師質土器 小皿	7.1	1.4	-	5.3	にぶい橙色 〃	良	口縁部の一部が欠損, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調 整で内底面にナデ調整を加える。
3187	SB-330	〃 杯	12.8	3.7	-	7.6	〃 〃	〃	一部が残存, 成形はB技法, 口縁部から内面は回転ナデ 調整, 体部外面は未調整
3188	SB-331	〃 〃	-	(1.0)	-	6.0	橙色 にぶい橙色	〃	底部の破片, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部 の切り離しは回転糸切り
3189	SA-301	〃 〃	11.5	(3.3)	-	-	にぶい橙色 〃	やや不良	口縁部から体部の破片, 成形はB技法, 内面は回転ナデ 調整, 外面は未調整でロクロ目が残存
3190	〃	瓦器 椀	14.2	3.4	-	6.0	にぶい橙色 橙色	不良	1/2弱が残存, 器面は摩耗するが, 体部外面に指頭圧痕 が残存, 在地産とみられる。
3191	SK-310	土師質土器 杯	14.8	(2.4)	-	-	灰褐色 にぶい黄橙色	良	口縁部の破片, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整
3192	SK-311	〃 〃	13.0	4.6	-	6.8	にぶい橙色 〃	〃	約1/2が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部 の切り離しは回転糸切り
3193	SK-315	〃 〃	-	(1.0)	-	6.4	にぶい黄橙色 〃	〃	底部約1/4が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整 で, 内底面にナデ調整を加える。
3194	SK-328	〃 椀	-	(2.0)	-	6.4	にぶい褐色 〃	〃	底部約1/5が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整 とナデ調整, 高台はヨコナデ調整
3195	SK-329	須恵器 鉄鉢	-	(7.8)	24.0	-	褐灰色 灰白色	良好	中胴部から下胴部の破片, 内面は回転ナデ調整, 外面は ナデ調整で, 下胴部に回転ヘラ削り
3196	〃	土師質土器 椀	-	(1.7)	-	6.0	にぶい黄褐色 〃	良	底部約1/2が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整 とナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3197	SK-331	〃 〃	14.7	(4.5)	-	-	にぶい橙色 〃	やや不良	口縁部から体部の破片, 成形はA技法, 口縁部から内面 は回転ナデ調整, 外面はナデ調整
3198	SK-335	須恵器 壺	-	(2.5)	-	10.2	灰白色 灰色	良好	底部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 外面にハダ荒れ
3199	SK-339	土師質土器 椀	14.4	(3.8)	-	-	にぶい黄褐色 〃	良	口縁部から体部の破片, 成形はB技法, 口縁部から内面 は回転ナデ調整, 体部外面は未調整
3200	〃	〃 杯	-	(3.7)	-	6.6	浅黄褐色 褐灰色	〃	体部の大半と底部が残存, 成形はB技法, 内面は回転ナ デ調整, 外面は未調整

番号	遺構層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
3201	SK-340	土師質土器 杯	13.7	4.6	-	6.8	にぶい黄橙色 〃	良	口縁部約1/4と底部の大半が残存、成形はB技法、口縁部から内面は回転ナデ調整、体部外面は未調整
3202	SK-342	〃 〃	14.8	4.7	-	7.1	浅黄橙色 〃	〃	約2/5が残存、成形はB技法、口縁部から内面は回転ナデ調整で、内底面にナデ調整、外面は未調整
3203	SK-347	瓦器 椀	13.6	(4.1)	-	-	にぶい黄橙色 灰黄色	不良	口縁部から体部の破片、口縁部から内面はヨコナデ調整、体部外面は指押え
3204	SK-349	土師質土器 杯	-	(1.1)	-	6.2	黄灰色 灰黄色	やや 不良	底部約1/4が残存、成形はB技法、内面は回転ナデ調整、外面は未調整、底部の切り離しは回転糸切り
3205	SK-355	土師器 羽釜	-	(4.4)	-	-	にぶい褐色 〃	良	鏝付近の破片、器面はナデ調整で、鏝の上半と胴部外面に煤が付着
3206	SK-356	須恵器 杯身	12.0	(3.3)	-	-	灰黄色 〃	やや 不良	口縁部から底部の破片、器面は回転ナデ調整、受部径13.6cm
3207	〃	土師質土器 杯	11.4	3.9	-	6.1	にぶい黄橙色 〃	良	約2/3が残存、成形はB技法、口唇部から内面は回転ナデ調整、外面は未調整
3208	〃	〃 小皿	7.0	1.8	-	4.6	〃 〃	良好	完存、成形はB技法、器面は回転ナデ調整で、内底面にナデ調整、底部の切り離しは回転糸切り
3209	〃	〃 〃	7.1	1.6	-	5.0	〃 〃	〃	完存、成形はA2技法、口縁部は回転ナデ調整、内底面はナデ調整、底部の切り離しは回転糸切り
3210	〃	〃 〃	7.3	1.4	-	5.4	灰黄褐色 〃	良	部分的に欠損、成形はA2技法、器面は回転ナデ調整で、内底面にナデ調整、底部の切り離しは回転糸切り
3211	SK-357	〃 杯	12.9	3.9	-	7.6	にぶい黄褐色 〃	良好	完存、成形はB技法、口唇部から口縁部は回転ナデ調整、外面は未調整、底部の切り離しは回転糸切り
3212	〃	〃 〃	-	(2.0)	-	4.8	〃 〃	良	底部約1/2が残存、成形はB技法、器面は回転ナデ調整、底部の切り離しは回転糸切り
3213	〃	〃 小皿	7.7	1.6	-	4.3	〃 〃	〃	約2/3が残存、成形はA2技法、器面は回転ナデ調整で、内底面にナデ調整、底部の切り離しは回転糸切り
3214	〃	〃 〃	7.6	1.6	-	4.3	〃 〃	〃	口縁部の一部が欠損、成形はA2技法、器面は回転ナデ調整で、内底面にナデ調整
3215	〃	〃 〃	7.3	1.6	-	4.4	〃 〃	〃	ほぼ完存、成形はA2技法、器面は回転ナデ調整で、内底面にナデ調整、底部の切り離しは回転糸切り
3216	〃	〃 〃	7.2	1.7	-	4.4	灰黄色 にぶい橙色	〃	約1/2が残存、成形はA2技法、器面は回転ナデ調整、底部の切り離しは回転糸切り
3217	SD-3022	弥生土器 甕	19.2	(2.3)	-	-	にぶい褐色 〃	〃	口縁部の破片、口縁部はヨコナデ調整
3218	〃	須恵器 高杯	-	(3.2)	-	9.6	褐灰色 黄灰色	良好	裾部の破片、器面は回転ナデ調整、外面には自然釉がかりハダ荒れ
3219	〃	黒色土器 椀	-	(1.8)	-	8.2	暗オリーブ灰色 橙色	不良	底部の破片、器面は摩耗
3220	〃	土師質土器 杯	11.6	(3.6)	-	-	にぶい黄褐色 にぶい橙色	良	口縁部から体部の破片、成形はA技法、器面は回転ナデ調整
3221	〃	〃 〃	12.0	(3.3)	-	-	にぶい橙色 〃	〃	口縁部から体部の破片、成形はB技法、口縁部から内面は回転ナデ調整、外面は摩耗
3222	〃	〃 〃	13.0	(2.7)	-	-	〃 〃	〃	口縁部から体部の破片、成形はB技法、口縁部から内面は回転ナデ調整、体部外面は未調整
3223	〃	〃 〃	13.6	(4.0)	-	-	〃 〃	〃	口縁部から体部の破片、成形はB技法、器面は回転ナデ調整
3224	〃	〃 〃	-	(1.5)	-	7.0	〃 〃	〃	底部約1/4が残存、成形はA技法、器面は回転ナデ調整で、内底面にナデ調整を加える。
3225	〃	〃 〃	-	(1.8)	-	7.0	にぶい黄褐色 〃	〃	底部約1/3が残存、成形はA技法、器面は回転ナデ調整、底部の切り離しは回転糸切り

Ⅲ区 遺物観察表10 (3226～3250)

番号	遺構層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
3226	SD-3022	土師質土器 杯	-	(2.0)	-	7.4	にぶい橙色 〃	良好	底部約1/2が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3227	〃	〃 〃	-	(1.5)	-	8.2	にぶい橙色 にぶい黄橙色	良	底部の破片, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
3228	〃	〃 〃	-	(1.3)	-	7.6	にぶい黄橙色 〃	良好	体部の破片, 成形はB技法, 内面は回転ナデ調整, 外面は回転ヘラ削り, 白色系
3229	〃	〃 〃	-	(2.1)	-	8.0	〃 〃	良	底部から体部の破片, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3230	〃	〃 〃	-	(1.0)	-	8.0	〃 〃	〃	底部約1/5が残存, 成形はB技法, 内面は回転ナデ調整, 外面は未調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3231	〃	〃 〃	-	(1.2)	-	8.8	〃 〃	〃	底部の破片, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3232	〃	〃 〃	-	(1.3)	-	9.0	灰黄褐色 にぶい橙色	〃	底部約1/4が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3233	〃	〃 小皿	7.8	1.5	-	5.6	にぶい橙色 〃	〃	約1/6が残存, 成形はB技法, 口縁部から内面は回転ナデ調整, 体部外面は未調整
3234	〃	〃 〃	7.5	2.2	-	4.4	にぶい赤橙色 〃	〃	約1/3が残存, 成形はB技法, 口縁部から内面は回転ナデ調整, 体部外面は未調整
3235	〃	〃 椀	-	(1.5)	-	6.6	浅黄褐色 〃	〃	底部約1/6が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3236	〃	〃 〃	14.4	5.9	-	6.0	にぶい黄褐色 にぶい橙色	〃	約1/3が残存, 成形はA技法, 口縁部から内面は回転ナデ調整, 体部外面は回転ヘラ削り
3237	SD-3023	弥生土器 甕	15.4	(7.6)	17.8	-	暗灰黄色 にぶい黄褐色	不良	口縁部から胴部約1/3が残存, 器面は摩耗するも, 内面には指頭圧痕, 外面にはタタキ目とハケ目が残存
3238	〃	土師質土器 小皿	8.5	1.2	-	6.4	橙色 〃	良	口縁部約1/6が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは不明
3239	SD-3024	土師器 甕	4.0	4.3	(2.5)	-	橙色 明赤褐色	〃	片方の把手がほぼ完存, 器面はナデ調整
3240	〃	須恵器 甕	20.6	(4.4)	-	-	褐灰色 〃	良好	口縁部の破片, 器面は回転ナデ調整, 外面にハケ状工具による刺突文, 内面に自然釉
3241	〃	〃 〃	26.8	(1.8)	-	-	黄灰色 褐灰色	〃	口縁部の破片, 器面は回転ナデ調整, 内面は自然釉
3242	〃	土師質土器 杯	13.7	3.2	-	8.0	にぶい黄褐色 浅黄褐色	やや不良	底部約1/2と口縁部の一部が残存, 成形はA技法, 口縁部から内面は回転ナデ調整, 体部外面は未調整
3243	〃	〃 〃	(13.5)	(3.6)	-	6.2	灰褐色 にぶい橙色	良	底部から体部の破片, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 内面に煤が付着, 底部の切り離しは回転糸切り
3244	〃	〃 〃	-	(1.3)	-	5.4	橙色 にぶい橙色	〃	底部約1/2が残存, 成形はB技法, 内面は回転ナデ調整, 外面は未調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3245	〃	瓦器 椀	15.1	3.1	-	-	灰黄褐色 にぶい橙色	やや不良	口縁部から体部の約1/5が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 体部外面に指押え, 煤が付着
3246	〃	白磁 碗	12.2	(2.8)	-	-	灰黄色 〃	良好	口縁部の破片, 全面に白磁釉を施釉
3247	SD-3025	弥生土器 細頸壺	6.8	(6.2)	-	-	にぶい黄褐色 橙色	良	口頸部約1/5が残存, 口唇部から口縁部内面はヨコナデ調整, 頸部内面は指押えの後にナデ調整
3248	〃	須恵器 杯身	12.9	(2.9)	-	-	灰色 褐灰色	良好	口縁部から底部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 底部外面に回転ヘラ削り, 受部径15.0cm, たち上がり高0.9cm
3249	SD-3028	〃 〃	10.0	(2.1)	-	-	灰色 〃	〃	口縁部の破片, 器面は回転ナデ調整, 受部径12.6cm, たち上がり高0.5cm
3250	SD-3029	土師器 甕	5.5	3.5	2.2	-	にぶい黄褐色 〃	良	片方の把手がほぼ完存, 器面はナデ調整

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
3251	SD-3029	須恵器 甕	23.0	(4.0)	-	-	灰色 〃	良好	口縁部から上胴部の破片, 口頸部は回転ナデ調整, 胴部はナデ調整, 外面には自然釉がかかる。
3252	〃	土師質土器 杯	12.0	(3.7)	-	8.2	にぶい黄橙色 灰白色	良	約1/2が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
3253	〃	〃 小皿	8.3	1.5	-	4.6	にぶい黄橙色 〃	〃	1/2弱が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3254	〃	瓦器 椀	-	(1.7)	-	5.2	黄灰色 にぶい黄橙色	〃	底部約1/3が残存, 内面はナデ調整の後にヘラ磨き, 外面は指押え
3255	SD-3030	須恵器 甕	17.0	(3.0)	-	-	灰黄色 〃	不良	口縁部の破片, 器面は回転ナデ調整
3256	〃	瓦器 椀	14.8	(3.0)	-	-	暗灰色 暗オリーブ灰色	良	口縁部から体部の破片, 口唇部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整の後にヘラ磨き, 体部外面にもヘラ磨き
3257	〃	瓦質土器 壺	14.1	(3.0)	-	-	にぶい黄橙色 〃	不良	口縁部の破片, 器面は摩耗
3258	SD-3032	須恵器 壺	12.2	(3.9)	-	-	灰色 〃	良好	口頸部の破片, 器面は回転ナデ調整
3259	SD-3034	土師器 甕	15.5	(2.3)	-	-	にぶい黄橙色 〃	良	口縁部の破片, 器面は摩耗
3260	〃	〃 〃	15.6	(3.8)	-	-	にぶい褐色 〃	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はハケ調整, 他はナデ調整
3261	〃	〃 〃	16.6	(2.2)	-	-	にぶい赤褐色 〃	〃	口縁部の破片, 口縁部はヨコナデ調整
3262	〃	〃 〃	16.9	(2.6)	-	-	明赤褐色 にぶい赤褐色	〃	〃
3263	〃	〃 〃	-	(3.3)	-	-	橙色 〃	〃	口縁部の細片, 器面は摩耗
3264	〃	〃 〃	(2.6)	(3.0)	(3.8)	-	にぶい褐色 〃	〃	片方の把手がほぼ完存, 器面はナデ調整
3265	〃	〃 〃	(3.4)	(4.0)	(2.0)	-	にぶい黄橙色 〃	〃	片方の把手がほぼ完存, 把手上半はナデ調整, 下半はハケ調整, 内面にもハケ調整
3266	〃	〃 〃	(4.7)	(4.0)	(2.3)	-	明赤褐色 橙色	不良	片方の把手がほぼ完存, 器面は指押えとナデ調整, 胴部は摩耗
3267	〃	〃 〃	14.9	(4.0)	(18.2)	-	にぶい黄橙色 にぶい褐色	良	口縁部から上胴部の破片, 器面は摩耗する。
3268	〃	〃 〃	-	(3.6)	-	-	明赤褐色 〃	〃	口縁部から上胴部の細片, 口頸部から内面はヨコナデ調整, 胴部外面はハケ調整
3269	〃	〃 〃	-	(2.3)	-	-	灰褐色 〃	〃	口縁部の細片, 内面にハケ調整の後でヨコナデ調整, 外面に煤が付着
3270	〃	〃 羽釜	19.6	(6.0)	(21.7)	-	にぶい褐色 灰褐色	〃	口縁部から上胴部の破片, 口縁部と鐔はヨコナデ調整, 胴部内面はナデ調整, 外面は指ナデとハケ調整
3271	〃	〃 〃	(19.6)	(3.3)	-	-	にぶい褐色 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 口縁部から内面と鐔はヨコナデ調整, 外面はハケ調整
3272	〃	〃 〃	21.0	(2.7)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口縁部の破片, 口縁部と鐔はヨコナデ調整, 内面にハケ目が残存
3273	〃	〃 〃	21.8	(6.8)	(22.7)	-	灰黄褐色 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 鐔から内面はヨコナデ調整, 鐔下半は指押えとナデ調整, 胴部外面はハケ調整
3274	〃	〃 〃	21.6	(6.9)	(23.0)	-	灰黄褐色 にぶい褐色	〃	口縁部から上胴部の約1/6が残存, 口縁部と鐔上半はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 胴部外面はハケ調整
3275	〃	〃 〃	22.0	(5.7)	(24.3)	-	灰褐色 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 口縁部と鐔はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 胴部外面は未調整

Ⅲ区 遺物観察表 12 (3276～3300)

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
3276	SD-3034	土師器 羽釜	24.6	(6.1)	(24.0)	-	灰黄褐色 にぶい褐色	良	口縁部から上胴部の破片、口縁部と鋳はヨコナデ調整、内面はナデ調整、胴部外面は指ナデとハケ調整
3277	〃	〃 高杯	-	(3.3)	-	-	にぶい赤褐色 〃	〃	杯底部と脚柱上部が残存、器面はナデ調整、脚柱部内面は指ナデ
3278	〃	須恵器 杯蓋	11.2	(3.1)	-	-	灰色 〃	良好	口縁部から天井部の破片、器面は回転ナデ調整、天井部外面は回転ヘラ削り
3279	〃	〃 〃	13.8	(3.9)	-	-	褐灰色 〃	〃	口縁部から天井部の破片、器面は回転ナデ調整
3280	〃	〃 杯身	10.7	(2.8)	-	-	灰色 〃	〃	口縁部から底部の破片、器面は回転ナデ調整、受部径12.6cm、たち上がり高0.7cm
3281	〃	〃 〃	11.2	(2.7)	-	-	灰黄褐色 〃	やや不良	口縁部から底部の破片、器面は回転ナデ調整、外底面は回転ヘラ削り、受部径14.0cm、たち上がり高0.8cm
3282	〃	〃 〃	-	(3.2)	-	-	にぶい黄褐色 〃	〃	口縁部の細片、器面は回転ナデ調整、内面に火摺の痕跡が残存
3283	〃	〃 〃	-	(1.6)	-	8.0	褐灰色 灰色	良	底部約1/3が残存、器面は回転ナデ調整、外端部に回転ヘラ削り、底部の切り離しは回転ヘラ切り
3284	〃	〃 椀	14.8	5.7	-	7.0	にぶい黄褐色 灰黄褐色	〃	完存、成形はB技法、器面は回転ナデ調整、内外面に火摺が残存、底部の切り離しは回転糸切り
3285	〃	〃 〃	15.1	5.8	-	7.0	灰白色 〃	不良	約1/2が残存、成形はB技法、口縁部から内面は回転ナデ調整、体部外面は未調整、内面に火摺
3286	〃	〃 〃	15.6	5.2	-	7.4	〃 〃	〃	約2/3が残存、成形はB技法、口縁部から内面は回転ナデ調整、体部外面は未調整
3287	〃	〃 〃	-	(2.3)	-	6.5	灰黄色 〃	〃	底部が残存、成形はB技法、器面は摩耗、底部の切り離しは回転糸切り
3288	〃	〃 高杯	16.0	(4.2)	-	-	褐灰色 〃	良好	杯部約1/3が残存、器面は回転ナデ調整、内底面にナデ調整、体部外面に回転ヘラ削りで自然釉が付着
3289	〃	〃 〃	-	(7.4)	-	10.0	黄灰色 〃	やや不良	脚台部が残存、器面は回転ナデ調整、杯部内底面はナデ調整
3290	〃	〃 短頸壺	12.8	(5.9)	-	-	灰色 〃	良好	口縁部と上胴部の破片、器面は回転ナデ調整、胴部内面は同心円文のタタキ、外面は平行のタタキ
3291	〃	〃 長頸壺	-	(7.8)	-	10.1	褐灰色 〃	〃	底部約2/3が残存、器面は回転ナデ調整、内底面には自然釉、外底面はナデ調整、高台はヨコナデ調整
3292	〃	〃 甕	15.0	(3.4)	-	-	灰黄褐色 〃	不良	口頸部の破片、器面は摩耗
3293	〃	〃 〃	18.4	(4.2)	-	-	黄灰色 〃	良	口頸部から上胴部の破片、器面は回転ナデ調整、胴部内面はナデ調整
3294	〃	〃 〃	21.2	(4.2)	-	-	〃 〃	良好	口縁部の破片、器面は回転ナデ調整で、自然釉がかかる。
3295	〃	〃 〃	21.2	(1.3)	-	-	〃 〃	〃	口縁部の破片、器面は回転ナデ調整で、上方を向く面には自然釉がかかる。
3296	〃	土師質土器 小杯	9.6	2.8	-	6.4	にぶい橙色 橙色	〃	約3/4が残存、成形はA技法、器面は回転ナデ調整、底部の切り離しは回転ヘラ切り
3297	〃	〃 〃	9.8	2.7	-	6.7	にぶい黄褐色 〃	やや不良	口縁部の一部が欠損、成形はB技法、器面は摩耗、底部の切り離しは回転ヘラ切り
3298	〃	〃 〃	9.8	3.2	-	6.4	明赤褐色 にぶい赤褐色	良	約2/3が残存、成形はB技法、器面は回転ナデ調整、底部の切り離しは回転ヘラ切り
3299	〃	〃 〃	9.8	3.3	-	6.4	にぶい橙色 橙色	良好	底部と体部から口縁部の約1/2が残存、成形はA技法、器面は回転ナデ調整、底部の切り離しは回転ヘラ切り
3300	〃	〃 〃	9.9	2.9	-	6.4	にぶい黄褐色 〃	良	約3/4が残存、成形はA技法、器面は回転ナデ調整、底部の切り離しは回転ヘラ切りでナデ調整を加える。

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
3301	SD-3034	土師質土器 小杯	10.0	2.7	-	6.6	にぶい赤褐色 橙色	不良	約1/2が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
3302	〃	〃 〃	10.0	2.7	-	6.2	橙色 〃	〃	口縁部約2/3が欠損, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
3303	〃	〃 〃	(10.2)	(3.0)	-	6.2	にぶい黄橙色 橙色	良	底部約3/4が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 内底面はナデ調整を加える。
3304	〃	〃 〃	10.8	3.1	-	7.0	橙色 〃	不良	約1/5が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
3305	〃	〃 〃	11.3	3.9	-	7.8	にぶい橙色 〃	良	完存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 内底面にミズビキの痕跡が残存
3306	〃	〃 〃	11.6	3.4	-	6.8	橙色 〃	〃	約1/2が残存, 成形はB技法, 器面は全般に摩耗, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
3307	〃	〃 〃	11.6	3.7	-	7.4	〃 〃	〃	約2/3が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切りでナデ調整を施す。
3308	〃	〃 〃	11.8	3.7	-	7.5	にぶい橙色 〃	〃	約1/2が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切りでナデ調整を施す。
3309	〃	〃 杯	14.2	(3.8)	-	(8.7)	にぶい黄橙色 〃	やや不良	口縁部から体部の破片, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整
3310	〃	〃 〃	-	(1.3)	-	6.3	にぶい橙色 〃	良	底部の破片, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
3311	〃	〃 〃	-	(1.6)	-	6.6	にぶい黄橙色 〃	〃	底部約1/4が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
3312	〃	〃 〃	-	(2.2)	-	6.0	にぶい橙色 〃	〃	底部が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3313	〃	〃 〃	-	(2.2)	-	6.6	にぶい橙色 にぶい黄橙色	〃	底部と体部の破片, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
3314	〃	〃 〃	-	(2.0)	-	6.8	にぶい橙色 〃	〃	底部が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
3315	〃	〃 〃	-	(1.1)	-	6.6	にぶい黄橙色 〃	〃	底部が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切りで, 板状圧痕が残存
3316	〃	〃 小杯	-	(1.1)	-	7.0	にぶい橙色 〃	〃	底部約1/5が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 内底面はナデ調整
3317	〃	〃 皿	9.6	2.2	-	6.0	にぶい黄橙色 にぶい黄褐色	不良	約1/2が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 内底面はナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
3318	〃	〃 〃	10.2	2.5	-	7.4	にぶい橙色 〃	やや不良	約2/3が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切りでヘラナデを施す。
3319	〃	〃 〃	10.6	2.4	-	7.0	にぶい橙色 橙色	良	約1/2が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
3320	〃	〃 〃	11.3	2.3	-	7.0	橙色 〃	やや不良	口縁部の一部と底部約1/2が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
3321	〃	〃 〃	11.4	2.2	-	7.2	〃 〃	不良	口縁部から体部の破片, 成形はA技法, 器面は摩耗, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
3322	〃	〃 〃	13.0	(3.1)	-	-	〃 〃	〃	口縁部から底部の破片, 成形はA技法, 器面は摩耗, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
3323	〃	〃 〃	13.2	3.2	-	8.6	にぶい褐色 〃	やや不良	約1/3が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
3324	〃	〃 小皿	(7.7)	(1.4)	-	5.2	にぶい橙色 〃	良	底部約1/4が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3325	〃	〃 〃	7.4	1.4	-	5.8	〃 〃	不良	ほぼ完存, 成形はA技法, 器面は摩耗, 底部の切り離しは回転ヘラ切り

Ⅲ区 遺物観察表 14 (3326～3350)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
3326	SD-3034	土師質土器 椀	14.5	5.8	-	6.4	灰黄褐色 〃	やや不良	口縁部の一部が欠損、成形はB技法、器面は回転ナデ調整、底部の切り離しは回転糸切り
3327	〃	〃 〃	15.5	5.8	-	7.0	灰黄色 〃	〃	完存、成形はB技法、口唇部から内面は回転ナデ調整、底部の切り離しは回転糸切り
3328	〃	〃 〃	14.2	(5.0)	-	(5.6)	にぶい赤褐色 〃	良	口縁部から体部の約1/4が残存、成形はB技法、器面は回転ナデ調整
3329	〃	〃 〃	15.4	(3.4)	-	-	にぶい黄橙色 〃	不良	口縁部の破片、成形はB技法、器面は摩耗
3330	〃	〃 〃	15.6	(3.4)	-	-	〃 〃	〃	〃
3331	〃	〃 〃	16.0	(4.5)	-	-	灰黄色 〃	〃	口縁部から体部の破片、成形はB技法、器面は回転ナデ調整
3332	〃	〃 〃	16.0	(3.7)	-	-	にぶい褐色 〃	良	口縁部から体部の破片、成形はB技法、口縁部から内面は回転ナデ調整、外面には煤が付着
3333	〃	〃 〃	-	(1.7)	-	5.8	にぶい黄橙色 〃	不良	底部約1/3が残存、成形はA技法、器面は摩耗、底部の切り離しは回転ヘラ切り
3334	〃	〃 〃	-	(1.4)	-	6.4	にぶい橙色 〃	良	底部約1/5が残存、成形はA技法、内面はヘラ磨き、底部の切り離しは回転糸切りで後にヘラ磨き
3335	〃	〃 〃	-	(1.6)	-	7.6	にぶい黄橙色 〃	不良	底部約1/4が残存、成形はA技法、器面は摩耗、底部の切り離しは回転糸切り
3336	〃	〃 〃	-	(1.7)	-	4.8	にぶい赤褐色 〃	〃	底部の破片、成形はA技法、器面は摩耗
3337	〃	〃 〃	-	(2.4)	-	5.2	にぶい橙色 〃	〃	底部約2/3と体部の一部が残存、成形はA技法、器面は回転ナデ調整で、体部外面に回転ヘラ削り
3338	〃	〃 〃	-	(1.5)	-	6.0	灰黄褐色 にぶい橙色	〃	底部約1/4が残存、成形はA技法、器面は外面を中心に摩耗、内面はナデ調整の後にヘラ磨き
3339	〃	〃 〃	-	(1.3)	-	(6.1)	にぶい褐色 にぶい橙色	良	底部約1/5が残存、成形はA技法、器面は外面を中心に摩耗、内面は回転ナデ調整、外底面はナデ調整
3340	〃	〃 〃	-	(1.4)	-	7.0	灰褐色 にぶい橙色	〃	底部の破片、成形はA技法、器面は回転ナデ調整、高台はヨコナデ調整
3341	〃	〃 〃	-	(2.6)	-	6.9	明赤褐色 〃	不良	底部が残存、成形はA技法、器面は摩耗
3342	〃	黒色土器 椀	-	(2.3)	-	7.4	褐灰色 にぶい褐色	良	底部約1/2が残存、成形はA技法、内面はナデ調整の後にヘラ磨き、在地産の黒色土器か？
3343	〃	〃 〃	-	(2.8)	-	8.4	オリーブ黒色 明赤褐色	不良	底部約1/5が残存、内面にはヘラ磨きの痕跡が僅かに残存、外面は摩耗
3344	〃	瓦器 椀	13.8	(2.6)	-	-	灰黄褐色 〃	良	口縁部から体部の破片、口縁部はヨコナデ調整、内面は平行線のヘラ磨き、体部外面は指押え
3345	〃	東播系須恵器 椀	-	(1.6)	-	6.4	灰黄褐色 灰黄色	良好	底部の破片、器面は回転ナデ調整で、内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切り
3346	〃	石製品 投弾	6.3	5.4	4.4	192.1	-	-	完存、石材は粗粒砂岩、表面は平滑
3347	〃	〃 叩石	14.9	5.4	4.6	544.4	-	-	完存、石材は粗粒砂岩、表面は平滑で、両端と側面に敲打痕が残存
3348	〃	〃 〃	7.9	7.5	3.0	253.1	-	-	完存、石材は粗粒砂岩、表面は平滑で、両面に弱い敲打痕が残存
3349	〃	〃 砥石	(11.1)	(7.4)	(1.3)	(176.9)	-	-	一部が残存、石材は細粒砂岩、2面を砥石として使用
3350	SD-3036	弥生土器 甕	17.0	(3.0)	-	-	にぶい黄橙色 〃	良	口縁部の破片、器壁が薄い、口唇部はヨコナデ調整、口縁部はハケ調整、搬入品とみられる。

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
3351	SD-3050	土師器高杯	-	(8.4)	-	-	にぶい橙色 〃	良	脚柱部が残存、外面は9面に面取りされる。内面にはしほり目が残存
3352	〃	瓦器椀	-	(1.2)	-	4.6	にぶい黄褐色 にぶい橙色	やや不良	底部が残存、内面には僅かにへら磨きの痕跡が残存、外面は摩耗
3353	SD-3053	土師器羽釜	-	(2.5)	-	-	にぶい褐色 〃	良好	口縁部の破片、口縁部と銜上半はヨコナデ調整、銜下半はナデ調整
3354	〃	〃 〃	-	(3.4)	-	-	にぶい橙色 にぶい褐色	良	口縁部の破片、口縁部と銜上半はヨコナデ調整、銜下半はナデ調整で、煤が付着
3355	〃	須恵器杯蓋	16.2	(2.0)	-	-	灰色 オリーブ灰色	良好	口縁部の破片、器面は回転ナデ調整
3356	〃	〃 杯身	-	(3.1)	-	-	灰色 〃	〃	口縁部から体部の破片、器面は回転ナデ調整
3357	〃	〃 壺	-	(2.6)	-	10.4	褐灰色 〃	〃	底部約1/4が残存、内面は回転ナデ調整、外面は回転へら削り、外底面はナデ調整、底面に焼成時の歪み
3358	〃	灰釉陶器椀(転用硯)	-	(2.2)	-	7.7	灰白色 〃	〃	底部が完存し、体部の一部が残存、内面は摩滅し、墨痕が残存、高台はヨコナデ調整、底部切り離しは回転糸切り
3359	〃	土師質土器杯	12.4	3.9	-	6.8	にぶい橙色 〃	やや不良	約3/4が残る。成形はB技法、器面は回転ナデ調整で、内底面にナデ調整を加える。底部切り離しは回転糸切り
3360	〃	〃 椀	-	(1.0)	-	5.8	にぶい黄褐色 〃	良好	底部が残存、成形はA技法、器面は回転ナデ調整、底部切り離しは回転糸切り
3361	〃	〃 〃	-	(1.7)	-	5.9	〃 〃	不良	底部が残存、成形はA技法、器面は摩耗、底部切り離しは回転糸切り
3362	〃	〃 〃	-	(2.9)	-	4.4	にぶい橙色 〃	良	底部から体部の約1/2が残存、成形はB技法、器面は回転ナデ調整、底部切り離しは静止糸切り
3363	〃	〃 小皿	8.0	1.6	-	5.2	〃 〃	〃	約3/4が残存、成形はB技法、器面は回転ナデ調整で、内底面にナデ調整を加える。底部切り離しは回転糸切り
3364	〃	〃 〃	-	(0.9)	-	5.4	〃 〃	〃	底部約1/2が残存、成形はB技法、器面は回転ナデ調整、底部切り離しは回転糸切り
3365	〃	〃 椀	-	(3.0)	-	5.6	にぶい黄褐色 にぶい橙色	〃	底部約1/3が残存、成形はA技法、器面は回転ナデ調整、内底面にナデ調整、体部外面は回転へら削り
3366	〃	〃 〃	-	(2.1)	-	6.0	灰黄褐色 にぶい黄褐色	〃	底部約1/2が残存、成形はA技法、内面は回転ナデ調整で、煤が付着、体部外面は回転へら削り
3367	〃	〃 〃	-	(2.3)	-	6.0	にぶい黄褐色 〃	〃	底部約1/2が残存、成形はA技法、内面は回転ナデ調整、体部外面は回転へら削り
3368	〃	〃 〃	-	(1.9)	-	6.2	灰褐色 にぶい橙色	〃	底部が残存、成形はA技法、内面は回転ナデ調整の後にナデ調整、体部外面は回転へら削り
3369	〃	〃 〃	-	(2.6)	-	6.8	灰褐色 にぶい褐色	〃	底部から体部の約1/4が残存、成形はA技法、体部外面に回転へら削り、高台はヨコナデ調整
3370	〃	〃 〃	16.1	5.8	-	6.1	にぶい橙色 〃	〃	約1/3が残存、成形はA技法、口縁部は回転ナデ調整、内面はへら磨き、外面は摩耗、底部切り離しは回転糸切り
3371	〃	〃 〃	-	(3.0)	-	4.8	にぶい黄褐色 〃	不良	底部から体部の約1/4が残存、成形はA技法、体部外面は回転へら削り
3372	〃	〃 〃	-	(3.0)	-	5.2	〃 〃	〃	底部から体部の約2/3が残存、成形はA技法、器面は摩耗
3373	〃	〃 〃	-	(2.8)	-	5.7	にぶい褐色 〃	良	口縁部が欠損、成形はA技法、器面は回転ナデ調整で、内底面にナデ調整、体部外面は回転へら削り
3374	〃	白磁碗	-	(3.6)	-	7.4	灰白色 〃	良好	底部から体部の約1/3が残存、体部から内面に白磁釉を施釉、体部外面は回転へら削り、底部は削り出し高台
3375	〃	青磁皿	11.0	(1.7)	-	-	灰オリーブ色 〃	〃	口縁部の破片、同安窯系、青磁釉を施釉

Ⅲ区 遺物観察表 16 (3376～3400)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
3376	SD-3054	土師器 皿	14.4	1.8	-	10.0	にぶい褐色 〃	良	一部が残存, 外面を中心にヨコ方向のヘラ磨き
3377	〃	須恵器 杯身	-	(1.3)	-	(7.3)	褐灰色 〃	良好	底部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 内面にナデ調整を加える。
3378	〃	〃 皿	16.8	2.4	-	-	灰黄褐色 灰黄色	やや不良	約1/5が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切り, 火襷
3379	〃	〃 高杯	-	(5.8)	-	-	灰黄色 〃	不良	脚台基部から中央部が残存, 内面は回転ナデ調整, 外面は摩耗
3380	SD-3055	〃 杯身	-	(1.8)	-	9.0	灰色 〃	良好	底部約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整, 高台はヨコナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
3381	〃	〃 高杯	-	(4.3)	-	10.0	黄灰色 〃	良	裾部約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整
3382	〃	〃 甕	-	(4.3)	-	-	灰黄褐色 〃	良好	頸部から上胴部の破片, 頸部は回転ナデ調整, 胴部内面は同心円文のタタキ, 外面は回転カキ目調整
3383	〃	〃 台付長頸壺	-	(8.0)	16.6	-	褐灰色 灰黄褐色	良	胴部の破片, 器面は回転ナデ調整
3384	〃	瓦器 椀	15.2	5.6	-	4.9	黒褐色 黄灰色	不良	口縁部が一部欠損, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はヘラ磨き, 体部外面は4段に指頭圧痕が残存
3385	〃	石製品 磨石	9.0	9.4	5.3	609.2	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑, 亀裂
3386	SD-3058	土師器 甕	-	(3.4)	-	-	にぶい褐色 〃	良	口縁部の破片, 器面は摩耗
3387	〃	須恵器 高杯	-	(2.5)	-	-	褐灰色 灰色	良好	杯底部と脚基部が残存, 器面は回転ナデ調整
3388	SD-3070	土師質土器 杯	14.3	(2.6)	-	-	黒褐色 灰褐色	良	口縁部の破片, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内面に煤が付着し, 灯明皿として使用
3389	SD-3071	土師器 甕	29.6	(4.5)	-	-	にぶい赤褐色 灰褐色	良好	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 他は指押えの後にナデ調整
3390	〃	瓦器 椀	13.0	(3.6)	-	-	にぶい黄橙色 〃	不良	口縁部から体部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 体部外面は指押え
3391	SD-3072	土師質土器 杯	13.8	(2.7)	-	-	にぶい黄橙色 橙色	〃	口縁部の破片, 成形はB技法, 器面は摩耗
3392	〃	〃 〃	-	(1.4)	-	6.0	灰黄褐色 にぶい黄橙色	良	底部約1/4が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3393	〃	〃 小皿	8.9	1.4	-	5.8	にぶい黄橙色 〃	不良	約1/4が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3394	〃	瓦器 椀	-	(1.2)	-	5.0	にぶい黄橙色 黄灰色	良	底部の破片, 内面はヘラ磨き, 外面は指押え, 高台はヨコナデ調整
3395	SD-3073	白磁 碗	-	(2.1)	-	-	灰白色 〃	良好	口縁部の破片, 白磁釉を施釉
3396	SD-3076	須恵器 台付長頸壺	-	(3.6)	-	11.4	黄灰色 灰色	〃	底部の破片, 器面は回転ナデ調整, 高台はヨコナデ調整
3397	〃	土師質土器 杯	10.4	2.4	-	7.5	にぶい黄橙色 〃	不良	口縁部から底部の破片, 成形はA技法, 器面は摩耗
3398	〃	瓦器 椀	-	(4.2)	-	-	灰色 〃	〃	口縁部から体部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 体部外面は指押え
3399	〃	瓦質土器 三足鍋	(7.5)	(2.5)	-	-	灰黄色 灰色	やや不良	脚部基部が残存, 器面は摩耗するが, 指頭圧痕が残存
3400	〃	青磁 碗	-	(2.0)	-	6.2	灰色 〃	良好	底部が残存, 高台は削り出し高台, 見込に劃花文

番号	遺構層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
3401	SD-3076	石製品 磨石	9.2	9.6	2.5	311.0	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕
3402	SD-3080	土師質土器 杯	(10.1)	(3.9)	-	5.8	にぶい橙色 〃	良	約1/5が残存, 成形はB技法, 内面は回転ナデ調整, 外面は未調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3403	〃	〃 〃	-	(1.0)	-	8.0	にぶい黄橙色 〃	〃	底部約1/4が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗, 底部の切り離しは回転糸切り
3404	SD-3082	土師器 甕	-	(2.8)	-	-	にぶい赤褐色 黒褐色	〃	頸部の破片, 器面はヨコナデ調整とナデ調整, 外面に煤が付着
3405	SD-3084	土師質土器 杯	-	(2.5)	-	-	にぶい橙色 〃	〃	口縁部の破片, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整
3406	SD-3086	黒色土器 椀	-	(1.3)	-	4.6	黄灰色 灰黄褐色	〃	高台部約1/3が残存, 器面は摩耗
3407	SD-3088	須恵器 杯蓋	-	(1.8)	-	-	青灰色 オリーブ黒色	〃	口縁部の破片, 器面は回転ナデ調整
3408	〃	〃 杯身	-	(1.5)	-	-	暗灰色 灰色	良好	たち上がりと受部の破片, 器面は回転ナデ調整
3409	〃	〃 杯蓋	12.0	(1.8)	-	-	褐灰色 〃	〃	口縁部から天井部の破片, 器面は回転ナデ調整, 天井部外面はヘラ削りの後にナデ調整
3410	〃	土師質土器 杯	11.4	(3.0)	-	-	にぶい橙色 〃	良	口縁部から体部の破片, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 器壁が薄く, 体部の器壁は2mm
3411	〃	〃 〃	-	(1.1)	-	6.2	灰褐色 にぶい褐色	〃	底部から体部の破片, 成形はB技法, 内面は回転ナデ調整, 外面は未調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3412	〃	〃 小皿	7.5	1.7	-	4.9	にぶい黄橙色 〃	〃	体部・口縁部の一部・底部が残存, 成形はA技法
3413	〃	瓦器 椀	-	(4.0)	-	-	暗灰黄色 〃	やや不良	口縁部から体部の破片, 口縁部外面はヨコナデ調整, 内面はヘラ磨き, 体部外面は指押え
3414	〃	瓦質土器 羽釜	-	(2.0)	-	-	灰色 灰黒色	不良	口縁部と鐙の一部が残存, 器面は摩耗
3415	SD-3097	土師器 甕	-	(3.3)	-	-	にぶい褐色 〃	良	口縁部の破片, 器面はヨコナデ調整, 外面には指頭圧痕が部分的に残存
3416	SD-3102	土師質土器 杯	-	(2.5)	-	7.2	橙色 にぶい橙色	不良	底部から体部の約1/5が残存, 成形はB技法, 器面は摩耗, 底部の切り離しは回転糸切り
3417	SD-3104	石製品 磨石	10.2	10.0	3.5	520.4	-	-	ほぼ完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は比較的平滑で, 側面を中心に敲打痕が残存
3418	SD-3115	土師質土器 杯	-	(3.0)	-	7.3	橙色 〃	良	約1/4が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切りで, 板状圧痕が残存
3419	SU-309	須恵器 高杯	-	(4.8)	-	-	黄灰色 〃	良好	脚台基部約1/2が残存, 器面は回転ナデ調整
3420	P-377	土師器 皿	16.8	2.2	-	11.5	にぶい褐色 〃	良	口縁部から底部の破片, 器面はヨコナデ調整の後にヘラ磨き
3421	P-368	〃 小皿	9.0	1.6	-	5.8	にぶい橙色 〃	〃	約1/3が残存, 手づくね, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面は指押え
3422	P-342	〃 甌	24.0	(7.8)	-	-	橙色 〃	〃	口縁部から体部の破片, 口縁部から内面はヨコナデ, 体部外面はナデ調整
3423	P-339	須恵器 杯蓋	11.9	(2.1)	-	-	灰色 黄灰色	〃	口縁部の破片, 器面は回転ナデ調整
3424	P-343	〃 杯身	11.0	(2.0)	-	-	灰色 〃	良好	口縁部の破片, 器面は回転ナデ調整, 外面はハダ荒れ, 受部径13.1cm, たち上がり高0.9cm
3425	P-341	〃 杯	-	(1.5)	-	9.6	灰黄褐色 〃	良	底部の破片, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り

Ⅲ区 遺物観察表 18 (3426～3450)

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
3426	P-363	須恵器 杯身	-	(2.4)	-	10.1	黄灰色 灰黄色	良	底部約1/3が残存、器面は回転ナデ調整で、内面はナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切り
3427	P-319	〃 椀	-	(2.1)	-	6.4	灰白色 〃	良好	底部約1/5が残存、器面は回転ナデ調整、高台はヨコナデ調整
3428	P-350	〃 高杯	-	(4.7)	-	11.0	褐灰色 〃	〃	杯底部と脚柱部約1/2と裾部が残存、器面は回転ナデ調整で、杯部内面にナデ調整を加える。
3429	P-366	〃 鉢	-	(2.5)	-	12.1	暗灰黄色 灰黄褐色	不良	底部の破片、器面は摩耗するが、回転ナデ調整の痕跡が一部に残存、外底面は指押えとナデ調整
3430	P-356	〃 甕	-	(2.4)	-	-	黄灰色 灰色	良好	口縁部の破片、器面は回転ナデ調整
3431	P-372	〃 〃	-	(2.9)	-	-	灰色 〃	〃	頸部から上胴部の破片、頸部は回転ナデ調整、胴部内面は同心円文のタタキ、外面は平行のタタキ
3432	P-348	〃 壺	-	(3.6)	-	6.8	浅黄色 〃	不良	底部約1/3が残存、内面は回転ナデ調整、外面は摩耗
3433	P-351	〃 〃	-	(5.7)	-	14.0	黄灰色 〃	良	底部約2/3が残存、内面は指ナデ、ナデ調整、ヨコナデ調整、外面は回転ヘラ削り、外底面はヘラナデとナデ調整
3434	P-353	土師質土器 杯	11.2	(3.0)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口縁部から体部の破片、成形はA技法、器面は回転ナデ調整
3435	P-332	〃 〃	11.0	(2.7)	-	-	〃 〃	〃	口縁部から体部の破片、成形はB技法、口縁部から内面は回転ナデ調整、体部外面は未調整
3436	P-314	〃 〃	11.4	(3.7)	-	-	灰褐色 〃	〃	〃
3437	P-311	〃 〃	12.0	(3.0)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	〃
3438	P-305	〃 〃	12.4	3.4	-	7.6	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃	口縁部約1/3が残存、成形はA技法、器面は回転ナデ調整
3439	P-311	〃 〃	12.6	(2.4)	-	-	にぶい橙色 〃	〃	〃
3440	P-306	〃 〃	13.0	(2.8)	-	-	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃	口縁部から体部の破片、成形はB技法、口縁部から内面は回転ナデ調整、体部外面は未調整
3441	P-378	〃 〃	12.4	(2.0)	-	-	浅黄橙色 〃	〃	口縁部から体部の約1/3が残存、成形はB技法、口縁部から内面は回転ナデ調整、体部外面は未調整
3442	P-313	〃 〃	13.0	(2.6)	-	-	にぶい橙色 〃	〃	口縁部から体部の破片、成形はB技法、器面は回転ナデ調整
3443	P-316	〃 〃	13.0	(2.2)	-	-	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃	口縁部から体部の破片、成形はB技法、口縁部から内面は回転ナデ調整、体部外面は未調整
3444	P-319	〃 〃	13.2	(2.8)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	〃
3445	P-374	〃 〃	13.8	3.0	-	9.0	〃 〃	〃	口縁部から底部の破片、成形はB技法、口縁部から内面は回転ナデ調整、体部外面は未調整
3446	P-315	〃 〃	13.9	(3.0)	-	-	にぶい黄橙色 灰黄褐色	〃	口縁部から体部の破片、成形はB技法、口縁部から内面は回転ナデ調整、体部外面は未調整
3447	P-365	〃 〃	14.0	4.5	-	7.0	にぶい橙色 〃	〃	口縁部約1/3が欠損、成形はA技法、器面は回転ナデ調整で、内底面にナデ調整を加える。
3448	P-345	〃 〃	14.2	(2.5)	-	-	橙色 〃	不良	口縁部から体部の破片、成形はB技法、器面は摩耗
3449	P-318	〃 〃	14.4	3.5	-	8.4	〃 〃	良	約1/5が残存、成形はA技法、器面は回転ナデ調整、底部の切り離しは回転糸切り
3450	P-338	〃 〃	14.9	(3.1)	-	-	にぶい橙色 にぶい黄橙色	〃	口縁部から体部の破片、成形はB技法、口縁部から内面は回転ナデ調整、体部外面は未調整

番号	遺構層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
3451	P-337	土師質土器 杯	15.2	(3.1)	-	-	橙色 〃	良	口縁部から体部の破片, 成形はB技法, 口縁部から内面は回転ナデ調整, 体部外面は未調整
3452	〃	〃	-	(3.0)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口縁部から体部の細片, 成形はB技法, 口縁部から内面は回転ナデ調整, 体部外面は未調整
3453	P-307	〃	-	(2.8)	-	-	〃 〃	〃	口縁部の破片, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整
3454	P-315	〃	-	(4.3)	-	-	〃 〃	やや不良	口縁部から体部の細片, 成形はA技法, 口縁部から内面は回転ナデ調整, 体部外面は未調整
3455	P-334	〃	-	(1.1)	-	6.4	暗赤褐色 明赤褐色	良	底部約1/4が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 内面には煤が付着, 底部の切り離しは回転糸切り
3456	P-311	〃	-	(1.7)	-	6.6	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃	底部約1/3が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3457	P-375	〃	-	(1.5)	-	6.8	にぶい赤褐色 〃	〃	底部約1/4が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3458	P-376	〃	-	(1.2)	-	6.9	にぶい褐色 灰黄褐色	〃	底部約1/3が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3459	P-320	〃	-	(2.4)	-	7.2	にぶい橙色 〃	やや不良	底部から体部の破片, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3460	P-331	〃	-	(1.5)	-	7.2	にぶい褐色 にぶい橙色	良	底部の破片, 成形はA技法, 内面は回転ナデ調整, 外面は未調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3461	P-361	〃	-	(1.6)	-	7.2	橙色 〃	〃	底部の破片, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3462	P-328	〃	-	(0.9)	-	7.4	灰黄褐色 〃	〃	底部約1/4が残存, 成形はB技法, 内面は回転ナデ調整, 外面は未調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3463	P-344	〃	-	(2.2)	-	7.4	〃 〃	〃	底部約1/3が残存, 成形はB技法, 内面は回転ナデ調整, 外面は未調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3464	P-311	〃	-	(2.5)	-	7.5	にぶい橙色 〃	〃	底部から体部の破片, 成形はA技法, 器面は摩耗
3465	P-330	〃	-	(1.0)	-	7.6	灰褐色 黄灰色	〃	底部約1/5が残存, 成形はB技法, 内面は回転ナデ調整, 外面は未調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3466	P-312	〃	-	(1.7)	-	6.0	にぶい黄橙色 〃	〃	底部約1/4が残存, 成形はA技法, 内面は回転ナデ調整, 外面は未調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3467	P-327	〃	-	(2.5)	-	6.5	〃 〃	やや不良	底部の破片, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられる。
3468	P-362	〃	-	(2.5)	-	7.2	灰褐色 橙色	良	底部から体部の一部が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3469	P-335	〃	-	(2.3)	-	7.2	灰黄褐色 〃	〃	底部から体部の破片, 成形はA技法, 内面は回転ナデ調整, 外面は未調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3470	P-326	〃	-	(1.6)	-	7.3	にぶい黄橙色 〃	〃	底部の破片, 成形はA技法, 内面は回転ナデ調整, 外面は摩耗, 底部の切り離しは回転糸切り
3471	P-311	〃	-	(1.6)	-	7.4	にぶい橙色 〃	〃	底部約1/4が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3472	P-336	〃	-	(2.6)	-	7.4	にぶい黄橙色 〃	〃	底部約2/3と体部約1/4が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3473	P-357	〃	-	(1.7)	-	7.8	にぶい橙色 〃	〃	底部約1/2が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 外面に煤が付着, 底部の切り離しは回転糸切り
3474	P-307	〃	-	(2.5)	-	8.0	〃 〃	〃	底部から体部の破片, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3475	P-322	〃 小皿	7.3	1.4	-	6.1	橙色 〃	やや不良	口縁部の約2/3が欠損, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り

Ⅲ区 遺物観察表20 (3476～3500)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
3476	P-311	土師質土器 小皿	7.5	1.2	-	6.2	にぶい橙色 〃	良	約1/4が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3477	P-325	〃 〃	7.6	1.3	-	6.6	〃 〃	〃	約1/5が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3478	P-307	〃 〃	7.9	1.8	-	6.2	〃 〃	〃	完存, 成形はA技法, 口縁部は回転ナデ調整, 内面はナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3479	P-352	〃 〃	6.5	1.5	-	4.4	〃 〃	〃	口縁部約1/4と底部約1/2が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3480	P-312	〃 〃	6.9	1.5	-	4.5	にぶい黄橙色 〃	〃	完存, 成形はA技法, 口縁部は回転ナデ調整, 内面はナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3481	P-315	〃 〃	7.2	1.4	-	4.8	橙色 〃	〃	約1/2が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切り
3482	P-360	〃 〃	7.4	1.3	-	5.0	〃 〃	不良	約2/3が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 内面は摩耗, 底部の切り離しは回転糸切り
3483	P-334	〃 〃	7.5	1.4	-	5.0	にぶい黄橙色 〃	良	約1/5が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切り
3484	P-333	〃 〃	7.5	1.5	-	5.2	にぶい黄褐色 灰黄褐色	〃	約1/3が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切り
3485	P-336	〃 〃	7.2	1.8	-	4.8	にぶい橙色 〃	やや不良	約1/2が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切り
3486	P-316	〃 〃	7.4	1.8	-	4.8	〃 〃	良	約1/2が残存, 成形はA2技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3487	P-338	〃 〃	7.6	1.7	-	5.0	にぶい黄褐色 〃	〃	約1/5が残存, 成形はA2技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3488	〃	〃 〃	8.4	1.9	-	5.4	にぶい橙色 〃	〃	約3/5が残存, 成形はA2技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切り
3489	P-354	〃 〃	8.0	2.3	-	4.5	にぶい黄褐色 〃	〃	約2/5が残存, 成形はA2技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは不明
3490	P-317	〃 〃	6.7	1.3	-	4.8	橙色 にぶい橙色	〃	約1/5が残存, 成形はB技法, 口縁部から内面は回転ナデ調整, 体部外面は未調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3491	〃	〃 〃	6.6	1.5	-	3.8	橙色 〃	〃	約1/4が残存, 成形はB技法, 口縁部から内面は回転ナデ調整, 体部外面は未調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3492	P-316	〃 〃	8.2	1.6	-	6.0	にぶい黄褐色 〃	〃	〃
3493	〃	〃 〃	8.1	1.0	-	5.8	〃 〃	〃	口縁部から底部の破片, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3494	P-311	〃 〃	8.4	1.4	-	6.0	橙色 〃	〃	約1/4が残存, 成形はB技法, 口縁部から内面は回転ナデ調整, 体部外面は未調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3495	P-309	〃 〃	8.8	1.7	-	6.0	にぶい橙色 〃	〃	口縁部約1/5が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整
3496	P-306	〃 〃	-	(0.9)	-	4.0	〃 〃	〃	約1/2が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3497	P-330	〃 〃	-	(0.7)	-	4.4	にぶい橙色 にぶい黄褐色	〃	底部約1/3が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3498	P-329	〃 〃	-	(0.7)	-	4.4	灰褐色 にぶい褐色	〃	底部約1/2が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
3499	P-309	〃 〃	-	(1.0)	-	5.1	黄灰色 〃	〃	〃
3500	P-355	〃 〃	-	(1.6)	-	6.0	にぶい黄褐色 〃	〃	底部から体部の一部が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り

番号	遺構層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
3501	P-369	土師質土器 椀	14.6	(2.9)	-	-	にぶい黄橙色 〃	良	口縁部から体部の破片、成形はA技法、口縁部から内面は回転ナデ調整、体部外面はナデ調整
3502	P-370	〃 〃	15.5	(3.6)	-	-	にぶい橙色 〃	不良	口縁部から体部の破片、成形はA技法、器面は摩耗
3503	P-316	〃 〃	15.0	(2.9)	-	-	にぶい褐色 〃	良	口縁部の破片、成形はA技法、器面は回転ナデ調整
3504	P-364	〃 〃	15.0	(3.9)	-	-	黒褐色 にぶい黄橙色	やや不良	口縁部から体部の約1/3が残存、成形はA技法、口縁部から内面は回転ナデ調整で、タールが付着
3505	P-303	〃 〃	(18.2)	(6.4)	-	8.8	にぶい橙色 にぶい黄橙色	〃	底部から体部約1/5が残存、成形はA技法、器面は摩耗、底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕が残存
3506	P-371	〃 〃	15.2	5.2	-	5.8	橙色 にぶい黄橙色	〃	完存、成形はA技法、器面は摩耗するが、体部外面に回転ヘラ削りの痕跡が残存
3507	P-370	〃 〃	-	(1.4)	-	5.8	にぶい黄橙色 〃	良	底部約3/4が残存、成形はA技法、内面はナデ調整、高台はヨコナデ調整、底部の切り離しは静止糸切り
3508	P-349	〃 〃	-	(1.8)	-	4.6	〃 〃	〃	底部約1/4が残存、成形はA技法、内面はナデ調整の後にヘラ磨き、高台はヨコナデ調整
3509	P-340	〃 〃	-	(1.7)	-	6.6	にぶい褐色 〃	〃	底部約1/3が残存、成形はA技法、高台はヨコナデ調整、外底面はナデ調整、他は摩耗
3510	P-367	瓦器 椀	16.1	5.7	-	6.5	黒褐色 〃	良好	ほぼ完存、口縁部はヨコナデ調整、内面全面と外面四段にヘラ磨き、外底面はナデ調整
3511	P-359	〃 〃	-	(2.7)	-	-	灰色 〃	良	口縁部から体部の細片、口縁部はヨコナデ調整、内面は部分的にヘラ磨き、体部外面は指押え
3512	P-334	〃 〃	14.6	(4.0)	-	-	〃 〃	やや不良	口縁部から体部の約1/4が残存、口縁部はヨコナデ調整、体部外面は指押え
3513	P-310	〃 〃	15.0	(3.2)	-	-	褐灰色 〃	良	口縁部から体部の破片、口縁部はヨコナデ調整、内面は圏状のヘラ磨き、体部外面は指押え
3514	〃	〃 〃	14.8	(2.2)	-	-	灰色 黄灰色	やや不良	口縁部から体部の破片、口縁部はヨコナデ調整、体部外面は指押え
3515	P-358	〃 〃	13.0	(2.2)	-	-	灰黄褐色 〃	良	口縁部から体部の破片、口縁部はヨコナデ調整、内面は部分的にヘラ磨き、外面は指押え
3516	P-347	〃 〃	14.9	2.9	-	-	灰黄色 にぶい黄橙色	やや不良	口縁部から体部の約1/5が残存、口縁部から内面はヨコナデ調整、体部外面は指押え
3517	P-308	〃 〃	-	(0.9)	-	4.4	灰黄褐色 〃	〃	底部約1/2が残存、内面と高台はヨコナデ調整、外底面はナデ調整
3518	P-319	〃 〃	-	(1.3)	-	5.2	〃 〃	良	底部約1/4が残存、内面はヨコナデ調整の後にヘラ磨き、外面は指押えとナデ調整
3519	P-311	〃 小皿	7.6	1.2	-	5.3	灰白色 〃	不良	約1/6が残存、口縁部から内面はヨコナデ調整、底部と体部外面は指押えとナデ調整
3520	P-325	〃 〃	7.3	(1.3)	-	-	にぶい黄橙色 暗灰黄色	良	口縁部から体部の破片、口縁部から内面はヨコナデ調整で、内底面にナデ調整、体部外面は指押え
3521	P-319	〃 〃	7.3	(1.5)	-	-	灰色 〃	〃	約1/5が残存、口縁部から内面はヨコナデ調整、体部から底部外面は指押えとナデ調整
3522	P-346	〃 〃	9.4	(1.7)	-	-	褐灰色 〃	〃	口縁部から体部の破片、口縁部から内面はヨコナデ調整で、内面に部分的にヘラ磨き、体部外面は指押え
3523	P-360	東播系須恵器 片口鉢	-	(3.2)	-	8.2	黄灰色 灰黄褐色	やや不良	底部約1/4が残存、器面は回転ナデ調整で、外面下端に煤が付着、外底面はナデ調整
3524	P-376	〃 〃	-	(4.7)	-	11.0	黄灰色 〃	良好	底部から体部の破片、内面はナデ調整、外面は指押えとナデ調整、外底面はヨコナデ調整とナデ調整
3525	P-321	瓦質土器 羽釜	18.9	(4.0)	-	-	褐灰色 〃	良	口縁部から鑊の破片、口縁部と鑊はヨコナデ調整、内面はナデ調整、鑊径22.3cm

Ⅲ区 遺物観察表22 (3526～3549)

番号	遺構層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
3526	P-316	瓦質土器 羽釜	-	(1.5)	-	11.0	灰色 にぶい黄橙色	良	底部の破片, 器面はナデ調整で, 外面に煤が付着
3527	P-373	青磁 碗	-	(2.3)	-	-	灰色 〃	良好	口縁部の細片, 外面に鎬蓮弁文, 全面に青磁釉を施釉
3528	P-316	〃 〃	-	(5.1)	-	-	〃 〃	〃	体部の破片, 外面に鎬蓮弁文, 全面に施釉, 貫入はみられない。
3529	P-323	土製品 土錘	(4.4)	1.2	1.1	(4.4)	橙色 〃	やや 不良	端部が一部欠損, 紡錘形, 表面には指頭圧痕が残存, 孔径0.3cm
3530	P-324	〃 〃	5.0	1.5	1.3	6.5	にぶい黄橙色 〃	良	ほぼ完存, 管状, 表面はナデ調整, 孔径0.5cm
3531	P-304	木製品	(29.0)	(3.5)	(2.2)	-	-	-	柱根の芯, 樹種はヒノキ
3532	SK-364	肥前系磁器 碗	10.2	(3.3)	-	-	明緑灰色 〃	良好	口縁部の破片, 内面に雷文, 外面に区画と花文
3533	〃	〃 〃	-	(3.8)	-	3.3	〃 〃	〃	口縁部欠損, 底部は削り出し高台, 外面に文様と界線, 全面に施釉し, 畳付は釉ハギ
3534	〃	〃 瓶	-	(6.1)	5.6	-	灰白色 明緑灰色	〃	頸部から胴部約1/2が残存, 外面に蛸唐草文, 外面のみに施釉, 内面は露胎
3535	〃	奈半利焼 蓋	9.2	(2.1)	-	-	灰黄褐色 暗緑灰色	〃	口縁部の一部欠損, 天井部のみに施釉, 口縁部は回転ナデ調整, 天井部内面はナデ調整, 受部径7.0cm
3536	〃	石製品 扁平片刃石斧	7.6	(3.4)	1.2	(55.2)	-	-	側面が部分的に欠損, 石材は蛇紋岩, ほぼ全面を研磨
3537	SK-367	須恵器 甕	-	(3.0)	-	-	褐灰色 灰黄褐色	良好	頸部から上胴部の破片, 頸部は回転ナデ調整, 胴部内面は同心円文のタタキの後にナデ調整
3538	〃	近代磁器 皿	-	(1.8)	-	6.0	灰白色 〃	〃	底部約1/6が残存, 全面に透明釉を施釉, 見込は銅板焼付による草花文, 高台外面に2条の界線
3539	SK-372	土師器 甕	-	(3.8)	-	-	灰褐色 にぶい赤褐色	〃	口縁部の破片, 外面にハケ調整の後に口縁部にはヨコナデ調整
3540	〃	土師質土器 椀	-	(2.0)	-	5.5	灰黄褐色 にぶい黄橙色	良	底部約1/2と体部の一部が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整
3541	〃	肥前系陶器 皿	-	-	-	-	灰黄褐色 にぶい赤褐色	良好	底部の破片, 内面はハケ目文, 外面は回転ヘラ削り
3542	SK-377	白磁 合子	4.9	1.7	-	5.2	灰白色 〃	〃	約1/6が残存, 底部以外に白色釉を施釉し, 口唇部は釉ハギ, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
3543	SK-378	石製品 磨石	12.1	8.5	2.7	429.1	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕が残存
3544	SD-3120	肥前系磁器 皿	-	(1.8)	-	7.4	灰白色 明緑灰色	良好	底部約1/4が残存, 底部は削り出し高台, 全面に施釉, 畳付は釉ハギ, 見込は蛇ノ目状の釉ハギ
3545	〃	肥前系陶器 壺	-	(5.2)	-	-	黄灰色 黒褐色	〃	胴部の破片, 外面を中心に鉄釉を施釉, 外面にはハケ目文と回転ヘラ削り
3546	〃	近世以降陶器 碗	10.7	(4.1)	-	-	灰黄褐色 〃	〃	口縁部の破片, 全面に施釉
3547	〃	石製品 砥石	(7.8)	4.1	0.8	(38.9)	-	-	一部が残存, 石材は泥岩, 表面と側面に使用痕が残存
3548	SE-302	白磁 小壺	-	(3.7)	-	5.4	灰白色 明オリーブ灰色	良好	底部から胴部の約1/4が残存, 外面は回転ヘラ削りの後に施釉し, 畳付は釉ハギ, 内面にヘラ削りの痕跡
3549	P-380	近世磁器 稜花皿	7.0	1.8	-	4.2	明緑灰色 〃	〃	約1/4が残存, 型作り, 見込に草文, 全面に施釉し, 畳付は釉ハギ

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
4001	第I層	須恵器高杯	-	(2.6)	-	-	灰色 〃	良好	口縁部から底部の破片, 口縁部から内面は回転ナデ調整, 底部外面は回転ヘラ削り
4002	〃	須恵質土器播鉢	-	(3.1)	-	-	〃 〃	〃	口縁部の細片, 器面は回転ナデ調整, 内面には5本以上の単位の条線
4003	〃	土師質土器杯	-	(2.5)	-	-	橙色 淡赤橙色	良	口縁部の細片, 成形はB技法, 口縁部から内面は回転ナデ調整, 体部外面は未調整
4004	〃	青磁碗	-	(2.7)	-	-	オリーブ灰色 〃	良好	口縁部の細片, 全面に青磁釉を施釉, 貫入あり, 内面に割花文
4005	〃	近世陶器碗	10.8	(6.3)	-	-	黒褐色 〃	〃	口縁部から体部の約1/5が残存, 口縁部から内面に鉄釉を施釉, 体部外面以下は露胎
4006	〃	肥前系磁器皿	-	(1.6)	-	4.4	明緑灰色 〃	〃	底部の破片, 底部は削り出し高台, 全面に透明釉を施釉, 畳付以内は釉ハギ, 見込は蛇ノ目状に釉ハギ
4007	〃	瀬戸・美濃系皿	11.2	2.1	-	6.6	オリーブ色 〃	〃	約1/5が残存, 全面に施釉, 貫入あり, 高台は貼付け高台
4008	〃	石製品石鏃	(2.4)	1.6	0.3	(1.9)	-	-	先端と基部が欠損, 石材はサヌカイト
4009	〃	〃石帯	3.8	4.2	1.2	41.4	-	-	ほぼ完存, 未成品, 表面は部分的に研磨, 裏面は未調整, 側面は研磨され, 一側面に擦痕が残存
4010	第II層	瓦質土器羽釜	22.8	(4.7)	26.2	-	灰色 暗灰色	やや不良	口縁部から胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 体部内面は摩耗, 外面はナデ調整, 鋳以下に煤が付着
4011	第III層	弥生土器甕	-	(5.9)	(12.1)	5.5	にぶい黄橙色 橙色	良	底部1/2弱が残存, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整の後にヘラ磨き, 外底面はナデ調整
4012	〃	須恵器短頸壺	(10.4)	(4.2)	-	-	灰白色 〃	不良	頸部から上胴部の破片, 器面は回転ナデ調整, 胴部外面は回転カキ目調整と1条の凹線
4013	〃	土師質土器杯	9.0	4.5	-	5.1	橙色 〃	やや不良	約2/3が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは静止糸切り
4014	〃	〃	8.6	4.9	-	4.8	〃 〃	〃	約1/3が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは静止糸切りで, 板状圧痕が残存
4015	〃	〃	9.0	4.6	-	5.4	〃 〃	〃	約2/3が残存, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは静止糸切り
4016	第IV層	弥生土器壺	-	(3.0)	-	7.8	にぶい黄橙色 〃	良	底部約1/2が残存, 器面はナデ調整
4017	SD-401	〃	21.4	(10.5)	-	-	にぶい黄橙色 橙色	〃	口頸部約1/3が残存, 口頸部はハケ調整, 頸部外面下端に4本単位のクシ描直線文
4018	〃	〃	13.6	(19.5)	22.6	-	灰白色 浅黄橙色	〃	口縁部の一部と上胴部約2/3が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はハケ調整の後にナデ調整
4019	〃	〃	16.8	(10.6)	(22.6)	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口縁部から上胴部が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はヘラナデ, 外面はハケ調整
4020	〃	〃	15.5	33.1	20.8	6.8	暗灰色 にぶい黄橙色	〃	部分的に欠損, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はヨコ方向, 外面はタテ方向のハケ調整
4021	〃	〃	17.7	(11.6)	-	-	浅黄橙色 橙色	やや不良	口頸部約1/5が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はハケ調整, 口縁部下端にヘラ状工具による刻目
4022	〃	〃	21.5	(11.5)	-	-	橙色 〃	〃	口頸部約1/3が残存, 頸部外面はタテ方向のハケ調整, 口縁部下端にヘラ状工具による刻目, 他は摩耗
4023	〃	〃	14.9	(4.9)	-	-	橙色 にぶい黄橙色	良好	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はハケ調整の後にヘラ磨き, 外面はタテ方向のハケ調整
4024	〃	〃	17.8	(5.5)	-	-	浅黄橙色 〃	やや不良	口頸部約1/3が残存, 口唇部はヨコナデ調整, 他は不明
4025	〃	〃	18.5	(4.0)	-	-	にぶい黄橙色 〃	良	口頸部約2/3が残存, 内面はハケ調整の後にナデ調整, 外面はタテ方向のハケ調整

## IV区 遺物観察表2 (4026~4050)

番号	遺構層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
4026	SD-401	弥生土器 壺	18.3	(23.8)	22.9	-	褐灰色 にぶい黄橙色	良	口縁部から中胴部の約1/2が残存、口縁部内面はハケ調整、頸部内面は指ナデとナデ調整、外面はハケ調整
4027	〃	〃	19.3	(3.5)	-	-	にぶい橙色 にぶい褐色	やや 不良	口頸部の破片、口唇部はヨコナデ調整、他はハケ調整
4028	〃	〃	21.4	(4.8)	-	-	橙色 〃	〃	口頸部の破片、口縁部は摩耗、頸部内面はハケ調整の後にヘラ磨き、外面はハケ調整
4029	〃	〃	23.2	(6.1)	-	-	にぶい橙色 にぶい褐色	良	口頸部約1/5が残存、内面はハケ調整の後に部分的にヘラ磨き、外面はハケ調整の後にヨコナデ調整
4030	〃	〃	16.2	(1.5)	-	-	にぶい黄橙色 にぶい褐色	〃	口頸部の破片、口縁部はヨコナデ調整、頸部内面はナデ調整、外面はハケ調整
4031	〃	〃	20.0	46.3	33.5	10.3	にぶい橙色 灰黄褐色	〃	約3/4が残存、口縁部はヨコナデ調整、頸部内面はハケ調整、胴部内面は指ナデとナデ調整で、内底面に指押え
4032	〃	〃	12.4	(19.7)	19.0	-	にぶい黄橙色 にぶい褐色	〃	口縁部から中胴部の約1/2が残存、口唇部はヨコナデ調整、口頸部内面は指押えの後にヘラ磨き、外面はハケ調整
4033	〃	〃	6.9	(10.0)	11.2	-	明赤褐色 〃	〃	口縁部から胴部の約1/3が残存、口唇部はヨコナデ調整、内面は指ナデとナデ調整、外面はヘラナデ
4034	〃	〃	10.6	(7.3)	-	-	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃	口頸部の破片、内面は指ナデとナデ調整、外面はハケ調整の後にナデ調整
4035	〃	〃	-	(5.8)	(19.0)	-	にぶい黄橙色 〃	良好	頸部から上胴部約1/5が残存、内面は指押えとナデ調整、外面は一面にクシ描きによる直線文と波状文
4036	〃	〃	-	(16.3)	26.4	-	浅黄褐色 橙色	良	胴部上半約1/2が残存、内面は指押えとナデ調整、外面はハケ調整の後に肩部に施文、中胴部以下にヘラ磨き
4037	〃	〃	-	(7.8)	(28.0)	-	褐灰色 橙色	〃	上胴部の破片、内面は指ナデとナデ調整、外面はハケ調整の後に施文
4038	〃	〃	-	(5.2)	-	-	灰色 橙色	不良	上胴部の細片、器面は摩耗するが、外面にクシ描きによる簾状文と波状文
4039	〃	〃	-	(3.5)	-	5.1	にぶい黄橙色 橙色	良	底部約1/2が残存、内面は指押えとナデ調整、外面はハケ調整の後にヘラ磨き、外底面はナデ調整
4040	〃	〃	-	(10.9)	14.9	4.9	褐灰色 橙色	〃	胴部以下約2/3が残存、内面は指押えとナデ調整、外面はハケ調整の後にヘラ磨き、下端から外底面はナデ調整
4041	〃	〃	-	(4.8)	-	5.7	黒色 にぶい橙色	〃	底部が残存、内面は指押えとナデ調整、外面はハケ調整の後にヘラ磨き、外底面はナデ調整の後にヘラ磨き
4042	〃	〃	-	(11.2)	(19.3)	6.3	褐灰色 橙色	やや 不良	底部約1/2が残存、内面は指押えの後にナデ調整、外面はヘラナデとナデ調整で、煤が付着、外底面はナデ調整
4043	〃	〃	-	(4.5)	-	6.2	にぶい黄橙色 橙色	良	底部が残存、内面はナデ調整、他は摩耗
4044	〃	〃	-	(4.1)	-	6.4	褐灰色 橙色	〃	底部約1/2が残存、器面は摩耗
4045	〃	〃	-	(4.0)	-	7.0	黄灰色 にぶい黄橙色	〃	底部が残存、器面はナデ調整
4046	〃	〃	-	(5.9)	-	6.7	黄灰色 黄橙色	〃	底部約1/2が残存、内面は指押えとナデ調整、外面は摩耗
4047	〃	〃	-	(8.5)	(15.0)	7.3	灰黄色 黄橙色	やや 不良	底部が残存、器面は摩耗するが、指頭圧痕が部分的に残存
4048	〃	〃	-	(12.1)	(16.5)	8.1	にぶい黄褐色 橙色	良	底部から胴部の破片、内外面はハケ調整の後にヘラ磨き、外底面はナデ調整
4049	〃	〃	-	(5.3)	-	7.5	橙色 にぶい橙色	〃	底部約1/3が残存、内面はナデ調整、外面はハケ調整の後にヘラ磨き、外底面はナデ調整とヘラ磨き
4050	〃	〃	-	(5.9)	(15.6)	8.1	黄灰色 にぶい黄橙色	良好	底部が残存、内面は指押え、外面はハケ調整の後にナデ調整、外底面はナデ調整

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
4051	SD-401	弥生土器壺	-	(7.7)	(17.4)	8.0	にぶい黄橙色 にぶい橙色	良	底部約1/2が残存、内面はナデ調整後にヘラ磨き、外面はヘラ磨き、外底面はナデ調整
4052	〃	〃	-	(32.9)	28.2	9.0	にぶい黄橙色 橙色	〃	底部と胴部約1/4が残存、器面は摩耗と剥離がみられるが、部分的に指頭圧痕が残存
4053	〃	〃	-	(4.3)	-	8.6	にぶい黄橙色 〃	〃	底部約1/2が残存、内面はヘラナデとナデ調整、外面と外底面はナデ調整
4054	〃	〃	-	(17.0)	(28.4)	9.5	にぶい黄橙色 橙色	〃	底部と下胴部2/3弱が残存、内面は摩耗と剥離、外面はハケ調整の後にヘラ磨き
4055	〃	〃	-	(2.7)	-	10.5	にぶい黄橙色 灰黄褐色	〃	底部約1/4が残存、内面は指押えとナデ調整、外面はハケ調整、外底面はナデ調整
4056	〃	〃	-	(9.2)	(22.1)	(10.1)	褐灰色 にぶい橙色	〃	底部の大半が残存、内面は摩耗、外面はヘラ磨き
4057	〃	〃	-	(5.5)	-	10.0	黄灰色 にぶい橙色	良好	底部が残存、内面は指ナデとナデ調整、外面はハケ調整の後にヘラ磨き、外底面はナデ調整
4058	〃	〃	-	(11.2)	(25.4)	10.9	黄灰色 にぶい橙色	良	底部の破片、内面は指押えとナデ調整、外面はハケ調整の後にヘラ磨き、外底面はナデ調整
4059	〃	甕	11.5	11.4	12.8	-	明赤褐色 明褐色	〃	口縁部から中胴部約1/2が残存、口唇部はヨコナデ調整、口頸部内面はハケ調整の後にヘラ磨き
4060	〃	〃	-	(3.0)	-	-	浅黄褐色 にぶい黄褐色	〃	口頸部の細片、口頸部にハケ調整を施した後に口唇部と口縁部内面はヨコナデ調整
4061	〃	〃	-	(3.9)	-	-	にぶい黄褐色 〃	〃	口頸部の細片、口縁部はヨコナデ調整、頸部内面は摩耗、外面はハケ調整
4062	〃	〃	14.4	(8.4)	(19.6)	-	橙色 にぶい橙色	〃	口縁部から上胴部の破片、内面はナデ調整、外面はハケ調整で、煤が付着
4063	〃	〃	-	(2.8)	-	-	にぶい黄褐色 〃	〃	口頸部の細片、内面はヨコナデ調整の後にヘラ磨き、外面はハケ調整で、煤が付着
4064	〃	〃	13.1	(6.9)	(14.5)	-	にぶい黄褐色 橙色	〃	口縁部から上胴部の約1/5が残存、口唇部はヨコナデ調整、口頸部はハケ調整
4065	〃	〃	13.7	(5.7)	-	-	にぶい橙色 〃	〃	口頸部の破片、外面はハケ調整で煤が付着、内面は摩耗
4066	〃	〃	13.5	(5.0)	-	-	浅黄褐色 〃	〃	口頸部の破片、口唇部はヨコナデ調整、内面はハケ調整の後にナデ調整、外面はハケ調整
4067	〃	〃	13.6	(6.5)	-	-	橙色 にぶい赤褐色	〃	口頸部の破片、口唇部はヨコナデ調整、内面はナデ調整、外面はハケ調整の後にナデ調整で煤が付着
4068	〃	〃	14.6	(3.1)	-	-	暗灰色 灰黄褐色	〃	口頸部の破片、口唇部はヨコナデ調整、内面はハケ調整の後にヘラ磨き、外面はハケ調整の後にナデ調整
4069	〃	〃	15.0	(10.7)	(16.1)	-	橙色 〃	〃	口縁部から上胴部の約1/2が残存、口唇部はヨコナデ調整、口頸部はハケ調整
4070	〃	〃	18.2	(3.5)	-	-	浅黄褐色 にぶい黄褐色	〃	口頸部の破片、口唇部はヨコナデ調整、内面はヘラ磨き、外面はナデ調整
4071	〃	〃	18.5	(13.4)	17.9	-	にぶい黄褐色 〃	〃	口縁部から中胴部の約1/2が残存、口唇部はヨコナデ調整、頸部内面はヘラ磨きとナデ調整
4072	〃	〃	19.1	(2.5)	-	-	にぶい橙色 〃	〃	口頸部の破片、口縁部はヨコナデ調整、頸部内外面はハケ調整
4073	〃	〃	21.4	(8.0)	18.6	-	橙色 〃	〃	口縁部から上胴部の破片、口唇部はヨコナデ調整、内面と頸部外面はナデ調整、上胴部外面はハケ調整
4074	〃	〃	26.2	26.4	25.0	12.9	褐灰色 にぶい褐色	〃	約1/2が残存、口縁部はヨコナデ調整、上胴部内面はハケ調整、中胴部以下は指ナデとナデ調整
4075	〃	〃	18.7	(6.0)	-	-	橙色 〃	〃	口頸部の破片、口唇部はヨコナデ調整、口頸部内面はハケ調整の後にヘラ磨き、外面はハケ調整

## IV区 遺物観察表4 (4076~4100)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
4076	SD-401	弥生土器 甕	-	(6.1)	-	-	褐色 〃	やや 不良	上胴部の細片, 器面は摩耗するが, 外面に微隆起突帯と楕円形浮文
4077	〃	〃 〃	-	(6.9)	(18.2)	-	褐灰色 〃	良	上胴部の破片, 内面は指押えとナデ調整, 微隆起突帯の上はココナデ調整, 下はナデ調整, 外面には煤が付着
4078	〃	〃 〃	-	(7.9)	(19.9)	-	にぶい黄褐色 灰黄褐色	〃	頸部から上胴部の破片, 内面は指ナデとナデ調整, 外面はハケ調整で, 突帯貼付部分にココナデ調整
4079	〃	〃 〃	-	(4.8)	-	5.6	にぶい褐色 〃	〃	底部が残存, 内面は指ナデとナデ調整で, 煤が付着, 外面はハケ調整, 外底面はナデ調整
4080	〃	〃 〃	-	(5.0)	-	5.8	黒褐色 にぶい褐色	〃	底部約1/2が残存, 内面はナデ調整, 外面はヘラ磨き, 外底面はナデ調整
4081	〃	〃 〃	-	(3.3)	-	5.9	灰黄褐色 〃	〃	底部約1/2が残存, 器面はナデ調整で, 外面下端に指頭圧痕が残存
4082	〃	〃 〃	-	(5.4)	(12.8)	5.8	にぶい褐色 橙色	〃	底部が残存, 内面は指ナデとナデ調整, 外面はハケ調整の後にヘラ磨きで, 外底面はナデ調整の後にヘラ磨き
4083	〃	〃 〃	-	(5.3)	(12.5)	6.0	黒色 橙色	〃	底部約1/2が残存, 内面は器面が剥離, 外面と外底面はナデ調整で, 外面には煤が付着
4084	〃	〃 〃	-	(11.8)	(14.6)	6.0	橙色 〃	やや 不良	中胴部以下約2/3が残存, 内面は指ナデとナデ調整, 外面は剥離と摩耗, 外底面はナデ調整
4085	〃	〃 〃	-	(15.3)	(16.8)	7.5	橙色 にぶい黄褐色	〃	中胴部以下が残存, 内面は指押えとナデ調整, 外面はハケ調整, 外底面はナデ調整
4086	〃	〃 〃	-	(2.4)	-	7.9	浅黄橙色 〃	良	底部が残存, 器面はナデ調整, ただし, 内底面は剥離
4087	〃	〃 〃	-	(6.9)	(16.1)	7.9	浅黄色 橙色	〃	底部が残存, 内面は指ナデとナデ調整, 外面は摩耗するが, ヘラ磨きの痕跡が残存, 外底面は指ナデとナデ調整
4088	〃	〃 〃	-	(4.4)	-	7.9	橙色 〃	不良	底部約1/2が残存, 内面は指押えとナデ調整, 外面と外底面は摩耗
4089	〃	〃 器台	-	(5.3)	-	20.3	にぶい黄褐色 〃	良	裾部1/2弱が残存, 内面は指押えとナデ調整, 外面はヘラ磨き
4090	〃	〃 ミニチュア土器	-	(1.6)	-	4.4	橙色 にぶい褐色	〃	底部が残存, 内面と外底面はナデ調整, 外面はハケ調整
4091	〃	石製品 石庖丁	8.1	4.7	0.8	(35.6)	-	-	刃部約1/3欠損, 石材は粘板岩, 刃部と両面高所を研磨
4092	〃	〃 小型両刃石斧	7.5	2.1	1.1	32.0	-	-	完存, 石材は緑色片岩, 全面を研磨
4093	〃	〃 太型蛤刃石斧	(17.4)	(8.6)	4.8	1.3kg	-	-	側面と基部が欠損, 石材は緑色片岩, 残部は研磨され, 刃部は摩滅する。
4094	〃	〃 打製石鎌	12.7	14.5	4.3	911.7	-	-	ほぼ完存, 石材は中粒砂岩, 大型で, 片面の自然面には縁辺を中心に擦痕
4095	〃	〃 叩石	(10.4)	7.2	4.7	(509.8)	-	-	一部欠損, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 側面に比較的弱い敲打痕が残存
4096	〃	〃 〃	10.8	5.5	3.6	317.6	-	-	完存, 石材は細粒砂岩, 表面は平滑で, 一方の端部に敲打痕と摩滅痕が残存
4097	〃	〃 〃	14.0	6.2	5.2	(706.2)	-	-	一部欠損, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 一方の端部に弱い敲打痕が残存
4098	〃	〃 磨石	(9.8)	6.7	4.9	(393.6)	-	-	約3/4が残存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕, 片面中央に弱い敲打痕が残存
4099	〃	〃 〃	(11.0)	7.2	2.5	(245.5)	-	-	側面が部分的に欠損, 石材は細粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕
4100	〃	〃 投弾	7.2	5.9	5.1	290.8	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面には弱い敲打痕が残るが, 全般に平滑

番号	遺構層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
4101	SD-401	石製品 投弾	7.5	(6.1)	4.7	(281.8)	-	-	ほぼ完存, 石材は粗粒砂岩, 部分的に欠損と剥離はみられるが, 表面は平滑
4102	SD-402	〃 磨石	11.0	7.3	4.9	556.4	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕があり, 部分的に敲打痕も残存
4103	SB-401	弥生土器 壺	-	(6.2)	(13.1)	6.1	浅黄色 にぶい黄橙色	良	底部約2/3が残存, 内面は指押えとナデ調整, 外面はハケ調整の後にヘラ磨き, 外底面はナデ調整とヘラ磨き
4104	SB-403	石製品 叩石	13.0	7.5	3.5	518.5	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 側面を中心に敲打痕が残存
4105	SK-401	土師質土器 高杯	20.3	(2.1)	-	-	橙色 〃	良	口縁部から体部の破片, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整
4106	SB-408	〃 小皿	6.2	1.3	-	4.4	にぶい黄橙色 〃	不良	口縁部の一部と底部が残存, 成形はB技法, 器面は摩耗, 底部の切り離しは回転糸切り
4107	〃	瓦器 椀	16.6	(4.6)	-	-	オリーブ黒色 〃	〃	口縁部から体部が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面は摩耗, 外面は指押え
4108	SB-411	土師質土器 小皿	7.5	1.4	-	5.1	にぶい赤橙色 〃	やや 不良	約3/4が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
4109	SB-412	〃 〃	7.7	1.5	-	5.3	浅黄褐色 にぶい橙色	良	口縁部の一部と底部1/2弱が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
4110	〃	〃 椀	15.7	(3.3)	-	-	にぶい黄褐色 灰黄褐色	〃	口縁部の破片, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 内外面に煤が付着
4111	〃	〃 〃	-	(3.3)	-	-	灰黄褐色 〃	〃	口縁部の細片, 器面は回転ナデ調整で, 内面に煤が付着
4112	SB-413	〃 杯	-	(3.4)	-	-	浅黄褐色 〃	〃	口縁部の細片, 成形はB技法, 口縁部から内面は回転ナデ調整, 外面は未調整
4113	SB-414	〃 〃	-	(1.5)	-	7.2	浅黄褐色 灰白色	やや 不良	底部約2/3が残存, 内面は回転ナデ調整, 外面は未調整, 底部の切り離しは回転糸切り
4114	SB-416	〃 小皿	6.9	1.3	-	4.1	にぶい橙色 〃	良	約3/4が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
4115	〃	〃 〃	7.2	1.6	-	4.7	〃 〃	〃	約1/4が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
4116	〃	石製品 磨石	9.9	7.0	5.7	548.7	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕が残存
4117	SB-422	土師質土器 杯	12.1	(3.5)	-	-	浅黄褐色 〃	やや 不良	口縁部から体部の約1/3が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整で, 外面には煤が付着
4118	〃	瓦質土器 羽釜	-	(4.0)	-	-	にぶい黄褐色 〃	不良	口縁部付近の細片, 口縁部はヨコナデ調整, 罌下半から煤が付着
4119	SK-402	土師質土器 小皿	7.8	1.4	-	4.1	〃 〃	良	約1/5が残存, 成形はB技法, 口縁部から内面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 体部外面は未調整
4120	SK-407	〃 杯	-	(2.9)	-	-	灰黄色 橙色	〃	口縁部の細片, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整
4121	SK-412	瓦 丸瓦	(17.3)	13.5	2.3	-	灰色 〃	良好	約1/2が残存, 凸面はヘラナデの後にナデ調整, 凹面はヘラナデで布目が残存, 側面はヘラ削り
4122	〃	〃 〃	(16.2)	14.5	2.5	-	銀灰色 〃	〃	約1/3が残存, 凸面はヘラナデの後にナデ調整, 凹面はヘラナデで布目が残存, 側面はヘラ削り
4123	SK-419	土師質土器 小杯	9.8	2.9	-	4.6	にぶい黄褐色 〃	良	ほぼ完存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
4124	〃	〃 〃	10.0	3.4	-	3.9	橙色 〃	〃	完存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
4125	SK-421	〃 杯	12.0	4.0	-	7.7	灰黄褐色 浅黄褐色	〃	ほぼ完存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り

## IV区 遺物観察表6 (4126～4135)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
4126	SK-423	土師質土器 杯	10.6	3.7	-	6.4	にぶい黄橙色 〃	良	約3/4が残存, 成形はB技法, 口縁部から内面は回転ナデ調整, 体部外面は未調整
4127	SD-415	〃 椀	-	(2.8)	-	5.8	橙色 〃	不良	底部が残存, 成形はA技法, 内面は回転ナデ調整, 外面は摩耗, 底部の切り離しは静止糸切り
4128	SD-432	瓦質土器 羽釜	-	(4.8)	-	-	灰白色 灰色	やや 不良	口縁部から胴部の破片, 口縁部と鑿はヨコナデ調整, 胴部はナデ調整, 鑿以下に煤が付着
4129	SD-444	土師質土器 杯	14.7	4.0	-	7.2	にぶい黄橙色 橙色	良	口縁部約1/4と底部が残存, 口縁部から内面は回転ナデ調整, 体部外面は未調整, 内底面は煤が付着
4130	P-404	〃 小杯	-	(1.8)	-	4.0	橙色 〃	〃	底部約2/3が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
4131	P-402	〃 小皿	6.8	1.7	-	4.7	〃 〃	〃	口縁部の一部が欠損, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 体部外面は未調整
4132	P-405	石製品 叩石	11.6	9.2	4.1	541.0	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 側面に敲打痕が残存
4133	P-401	〃 砥石	(10.0)	5.3	4.8	(338.4)	-	-	約1/2が残存, 石材は礫岩, 4面に使用痕が残存
4134	P-403	〃 〃	18.8	8.5	5.9	1.6kg	-	-	一部欠損, 石材は細粒砂岩, 主に3面に使用痕が残存, 側面にタールが付着
4135	SK-434	〃 〃	17.1	5.8	5.4	616.5	-	-	完存, 石材は細粒砂岩, 4面に使用痕が残存

番号	遺構層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
5001	第I層	弥生土器 壺	15.2	(2.0)	-	-	灰褐色 〃	良	口縁部の破片, 口唇部はヨコナデ調整, 内面はハケ調整, 外面はハケ調整の後にヘラ磨き
5002	〃	須恵器 杯蓋	-	(1.6)	-	-	灰色 〃	〃	天井部つまみ部分が残存, つまみはヨコナデ調整, 天井部外面は回転ヘラ削り, つまみ径2.4cm, つまみ高0.9cm
5003	〃	〃 壺	8.5	(4.6)	-	-	〃 〃	良好	口縁部の破片, 器面は回転ナデ調整
5004	〃	〃 〃	-	(5.1)	-	-	灰色 褐灰色	〃	頸部約1/2が残存, 器面は回転ナデ調整で, 外面は自然釉がかかりハダ荒れ
5005	〃	〃 〃	-	(2.3)	(13.0)	-	赤灰色 褐灰色	〃	上胴部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 外面に4条の凹線, また, 外面は自然釉がかかりハダ荒れ
5006	〃	〃 〃	-	(1.7)	-	-	黄灰色 〃	〃	上胴部の細片, 器面は回転ナデ調整とナデ調整, 外面には平行のタタキ
5007	〃	土師器 羽釜	-	(2.8)	-	-	にぶい黄橙色 〃	やや不良	口縁部の破片, 器面は摩耗
5008	〃	〃 〃	-	(2.9)	-	-	橙色 〃	不良	〃
5009	〃	〃 焙烙	-	(5.4)	-	-	にぶい褐色 灰褐色	良好	口縁部から体部の細片, 口縁部から内面はヨコナデ調整, 体部外面はナデ調整
5010	〃	〃 〃	40.2	(4.9)	-	-	にぶい褐色 〃	良	口縁部から体部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はハケ調整の後にナデ調整, 外面は指押え
5011	〃	土師質土器 杯	-	(1.9)	-	-	灰白色 〃	不良	口縁部の細片, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整
5012	〃	〃 〃	-	(1.4)	-	5.0	にぶい橙色 橙色	〃	底部約1/5が残存, 成形はB技法, 器面は摩耗, 底部の切り離しは回転糸切り
5013	〃	〃 〃	-	(1.1)	-	7.3	にぶい橙色 〃	〃	底部の破片, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは静止糸切り
5014	〃	〃 〃	-	(2.2)	-	6.8	にぶい黄橙色 〃	やや不良	底部が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
5015	〃	〃 〃	-	(1.1)	-	7.8	〃 〃	不良	底部の破片, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
5016	〃	〃 小皿	6.1	1.3	-	3.5	にぶい黄橙色 にぶい橙色	良	口縁部の一部と底部約1/2が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
5017	〃	〃 〃	7.5	(1.5)	-	-	にぶい褐色 〃	〃	口縁部から体部の約1/5が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整
5018	〃	東播系須恵器 片口鉢	-	(4.0)	-	-	灰黄色 〃	良好	口縁部の破片, 器面は回転ナデ調整
5019	〃	白磁 碗	-	(2.0)	-	4.3	灰白色 〃	〃	底部約1/3が残存, 底部は削り出し高台, 器面には白色釉を施釉, 見込は蛇ノ目状の釉ハギ
5020	〃	〃 〃	-	(2.1)	-	4.6	〃 〃	〃	底部約1/4が残存, 底部は削り出し高台, 器面には白色釉を施釉, 見込は蛇ノ目状の釉ハギ
5021	〃	〃 〃	-	(2.7)	-	5.0	緑灰色 〃	〃	底部約1/5が残存, 底部は削り出し高台, 器面には白色釉を施釉, 見込は蛇ノ目状の釉ハギ
5022	〃	肥前系陶器 皿	10.9	3.0	-	3.5	暗灰黄色 〃	〃	1/2弱が残存, 唐津焼, 底部は回転糸切りの後に高台を削り出す。口縁部から内面に施釉し, 見込に砂目が残存
5023	〃	〃 〃	-	(2.1)	-	-	にぶい黄褐色 灰黄褐色	〃	口縁部の破片, 唐津焼, 口唇部から内面に白色釉を施釉, 口縁部外面は露胎
5024	〃	〃 〃	-	(3.3)	-	7.8	灰黄褐色 灰褐色	〃	底部から体部の約1/4が残存, 唐津焼, 底部は削り出し高台, 体部外面は回転ヘラ削り, 内面に刷毛目文
5025	〃	肥前系磁器 丸碗	-	(2.0)	-	3.8	灰白色 〃	〃	底部の破片, 全面に透明釉を施釉, 畳付は釉ハギ, 高台外面に2条の界線

## V区 遺物観察表2 (5026～5050)

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
5026	第I層	肥前系磁器 丸碗	10.6	(5.7)	-	-	灰白色 〃	良好	口縁部から体部の破片, 全面に透明釉を施釉, 貫入あり, 外面には界線を挟んで草花文
5027	〃	〃 広東茶碗	-	(3.0)	-	6.5	明緑灰色 〃	〃	底部約1/3が残存, 底部は削り出し高台, 全面に白色釉 を施釉, 高台内を釉ハギ
5028	〃	〃 猪口	6.8	(3.1)	-	-	〃 〃	〃	口縁部から体部の破片, 全面に白色釉を施釉, 体部外面 に施文
5029	〃	〃 紅皿	4.6	1.3	-	1.2	灰白色 〃	〃	約1/3が残存, 底部は削り出し高台, 体部外面に条線, 口 縁部から内面に白色釉を施釉
5030	〃	瀬戸・美濃系 広東茶碗	-	(2.4)	-	6.2	浅黄色 〃	〃	底部約1/2が残存, 底部は削り出し高台, 全面に透明釉 を施釉, 貫入あり, 見込にコンニャク版
5031	〃	〃 〃	-	(1.7)	-	(5.4)	灰黄色 〃	〃	底部の破片, 全面に透明釉を施釉, 内外面に界線
5032	〃	近世陶器 丸碗	8.3	5.0	-	3.0	黄灰色 灰色	〃	約1/2が残存, 底部は削り出し高台で露胎, 外面体部下 端から内面に黄灰色の釉を施釉
5033	〃	〃 蓋	7.4	(1.4)	-	-	にぶい黄橙色 灰黄色	〃	1/4弱が残存, 口縁部内側から内面は露胎, 口縁部外側 に透明釉を施釉
5034	〃	〃 天目茶碗	9.4	(4.7)	-	-	黒褐色 〃	〃	口縁部から体部の破片, 器面には鉄釉を施釉, 外面は摩 滅し, 釉が剥げる。
5035	〃	近世磁器 丸碗	-	(2.7)	-	4.0	灰白色 〃	〃	底部約1/4が残存, 底部は削り出し高台で, 全面に白色 釉を施釉し, 畳付は釉ハギ, 高台内側に砂が付着
5036	〃	近世陶器 碗	-	(2.0)	-	5.0	灰黄色 褐灰色	〃	底部約1/3が残存, 底部は削り出し高台で, 露胎, 見込は 鉄釉を施釉し, 蛇ノ目状の釉ハギ
5037	〃	〃 〃	-	(2.3)	-	5.3	灰褐色 灰オリーブ色	〃	底部約1/5が残存, 削り出し高台で, 露胎, 器面は緑色釉 を施釉, 貫入あり, 見込は露胎
5038	〃	〃 皿	10.6	(1.8)	-	6.0	暗赤灰色 暗赤褐色	〃	口縁部から体部の約1/5が残存, 口縁部から内面は回転 ナデ調整, 体部外面は回転ヘラ削りで, 鉄釉を施釉
5039	〃	〃 〃	12.0	(2.1)	-	-	にぶい黄色 〃	〃	口縁部約1/4が残存, 全面に濃緑色の釉を施釉, 貫入あり。
5040	〃	〃 〃	19.3	(3.0)	-	-	にぶい褐色 〃	〃	口縁部から体部の破片, 器面は回転ナデ調整, 器面には 鉄釉を施釉
5041	〃	〃 甕	-	(6.2)	-	-	暗赤褐色 〃	〃	口縁部の破片, 全面に鉄釉を施釉
5042	〃	〃 播鉢	-	(4.8)	-	-	灰赤色 〃	〃	口縁部から体部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 体部内 面に7本以上の単位の条線, 口唇部に鉄釉を施釉
5043	〃	〃 〃	-	(1.4)	-	-	にぶい赤褐色 〃	〃	底部の破片, 内面はナデ調整の後に18本単位の条線, 外 面は未調整
5044	〃	〃 〃	-	(4.0)	-	15.6	明赤褐色 〃	〃	底部から体部の約1/3が残存, 内面には6本単位の条線, 体部外面は回転ヘラ削りの後にナデ調整
5045	〃	瓦 平瓦	(4.5)	(4.5)	(1.6)	-	浅黄色 〃	良	平瓦の細片, 凹面にナデ調整, 凸面はヘラナデで, 側面 はヘラで面取りする。
5046	〃	〃 〃	(5.7)	(3.8)	(1.6)	-	浅黄橙色 にぶい橙色	不良	〃
5047	〃	石製品 石庖丁	(4.8)	(3.6)	(0.9)	(19.7)	-	-	刃部の破片, 石材は粘板岩, 全面を研磨し, 片刃の刃部 を作り出す。
5048	〃	古銭	2.3	1.9	0.1	2.1	-	-	完存, 新寛永
5049	〃	〃	2.4	1.9	0.1	2.2	-	-	〃
5050	〃	金属製品 煙管	(4.8)	(1.2)	1.0	(8.4)	-	-	雁首の内, 材質は真鍮製, 首と胴, 羅宇の竹が残存, 雁首 は側面で接合

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
5051	第I層	金属製品 煙管	(4.9)	1.5	1.3	(10.4)	-	-	雁首が残存, 材質は青銅製, 胴には彫り込みによる直線文
5052	〃	〃 〃	(5.6)	1.5	0.9	(6.6)	-	-	羅字以外が残存, それぞれ側面で接合, 吸口長 5.9 cm, 小口径 1.1 cm, 吸口径 0.4 cm, 重量 6.0 g
5053	〃	〃 〃	(4.8)	1.0	(0.5)	(4.1)	-	-	吸口が残存, 側面で接合
5054	第IV層	弥生土器 壺	-	(7.3)	(16.4)	-	灰色 にぶい黄橙色	良	頸部から上胴部の破片, 頸部内面はヘラナデ, 胴部内面は指押えとナデ調整, 外面はナデ調整
5055	〃	〃 甕	-	(1.7)	-	-	橙色 にぶい橙色	〃	口縁部の細片, 外面はヨコナデ調整, 内面は不明
5056	〃	須恵器 杯	14.0	(1.7)	-	-	褐灰色 〃	良好	口縁部の破片, 器面は回転ナデ調整
5057	〃	〃 杯身	-	(1.8)	-	8.4	〃 〃	〃	底部約1/4が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面はハダ荒れ, 高台はヨコナデ調整, 外底面はナデ調整
5058	〃	〃 〃	-	(1.3)	-	(8.5)	にぶい黄橙色 〃	不良	底部の破片, 器面は摩耗
5059	〃	〃 壺	-	(4.8)	-	-	にぶい黄橙色 灰色	良	底部の破片, 内面は回転ナデ調整, 外面は回転ヘラ削り
5060	〃	土師質土器 杯	-	(2.8)	-	-	にぶい黄橙色 〃	やや 不良	口縁部の破片, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整
5061	〃	〃 〃	-	(2.0)	-	-	にぶい橙色 〃	良	口縁部の破片, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整
5062	〃	〃 〃	-	(1.2)	-	6.1	明赤褐色 〃	不良	底部約1/4が残存, 成形はB技法, 内面は回転ナデ調整, 外面は未調整, 底部の切り離しは回転糸切り
5063	〃	〃 杯	-	(1.3)	-	-	浅黄色 〃	〃	底部の細片, 成形はB技法, 器面は摩耗
5064	〃	〃 小皿	-	(1.3)	-	-	にぶい橙色 〃	良	口縁部の細片, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整
5065	〃	〃 〃	7.0	1.2	-	4.7	にぶい黄橙色 〃	〃	約1/4が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 口唇部にタールが付着
5066	〃	瓦器 小皿	-	(1.8)	-	-	灰色 〃	不良	口縁部の細片, 器面は摩耗
5067	〃	瓦質土器 羽釜	-	(2.2)	-	-	黄灰色 灰色	〃	〃
5068	〃	〃 〃	-	(3.9)	-	-	灰色 暗灰色	〃	口縁部の細片, 口縁部外面はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 鐔の下は指押え
5069	〃	〃 〃	-	(3.3)	-	-	暗灰色 明灰色	〃	口縁部の細片, 器面は摩耗
5070	〃	〃 鍋	-	(4.3)	-	-	黄灰色 灰黄色	やや 不良	胴部の細片, 内面はハケ調整, 外面は摩耗するが, 指頭圧痕が残存
5071	〃	〃 三足鍋	(4.2)	(2.3)	(2.0)	-	灰黄色 灰黄褐色	良	脚の付根が残存, 内面はナデ調整, 外面はヘラで面取り
5072	〃	青磁 碗	-	(2.1)	-	-	明オリーブ灰色 〃	良好	口縁部の細片, 内面には劃花文, 貫入あり。
5073	〃	肥前系陶器 碗	-	(2.2)	-	3.5	灰黄褐色 にぶい赤褐色	〃	底部から体部の約3/4が残存, 体部外面から内面に施釉し, 見込に砂目が残存, 唐津焼
5074	〃	〃 〃	-	(1.7)	-	5.5	灰黄褐色 〃	〃	底部から体部の約1/5が残存, 体部外面から内面に白色釉を施釉, 高台内に砂が付着, 唐津焼
5075	〃	肥前系磁器 碗	-	(4.7)	-	4.8	灰白色 〃	〃	底部から体部の約1/4が残存, 全面に淡緑色の釉を施釉し, 畳付は釉ハギ, 体部外面には網目文

V区 遺物観察表4 (5076～5100)

番号	遺構層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
5076	第IV層	肥前系磁器 皿	-	(1.6)	-	4.8	明緑灰色 〃	良好	底部の破片, 見込に文様, 全面に白色釉を施釉し, 豊付は釉ハギ
5077	〃	瀬戸・美濃系 菊碗	-	(2.1)	-	5.0	浅黄色 〃	良	底部約1/2が残存, 外面に菊の花弁, 黄色釉を全面に施釉し, 豊付は釉ハギ
5078	〃	近世陶器 碗	14.7	(3.0)	-	-	灰黄褐色 〃	良好	口縁部の破片, 全面に薄い緑色の釉を施釉
5079	〃	〃 皿	18.0	(1.8)	-	-	灰オリーブ色 〃	〃	口縁部の破片, 器面に緑色の釉の上から鉄釉を施釉, 外面に一部の釉ハゲ
5080	〃	〃 〃	-	(1.3)	-	7.4	褐灰色 〃	〃	底部の破片, 見込に鉄釉を施釉, 外面は露胎で胎止目痕が残存, 底部の切り離しは回転糸切り
5081	〃	近世陶磁器 碗	-	(2.8)	-	3.6	灰白色 〃	〃	底部と体部が残存, 体部から内面に透明釉を施釉し, 細かな貫入あり, 底部外面は露胎で, 豊付に砂が付着
5082	〃	〃 天目茶碗	-	(1.8)	-	3.8	暗灰色 褐灰色	〃	底部が残存, 内面は鉄釉を施釉, 外面は削り出し高台で露胎
5083	〃	〃 播鉢	-	(6.8)	-	9.2	にぶい赤褐色 〃	〃	底部から体部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 内面に14本以上の単位の条線, 外面下端に回転ヘラ削り
5084	〃	〃 碗	11.8	(4.1)	-	-	緑灰色 明緑灰色	〃	口縁部の破片, 全面に青色の釉を施釉, 貫入はみられない。
5085	〃	〃 〃	-	(1.7)	-	(5.1)	灰黄色 〃	〃	豊付以外の底部約3/4が残存, 全面に緑色の釉を施釉, 細かな貫入あり。
5086	〃	〃 猪口	5.6	(2.9)	-	-	灰白色 〃	〃	口縁部から体部の破片, 外面に草文, 全面に透明釉を施釉
5087	〃	〃 皿	8.0	(1.5)	-	-	明オリーブ灰色 〃	〃	口縁部から体部の破片, 口縁部から外面に緑色の釉を施釉, 貫入あり, 見込は露胎
5088	〃	〃 〃	-	(2.0)	-	-	灰白色 〃	〃	口縁部の破片, 内面に2条の界線と草花文, 全面に透明釉を施釉
5089	〃	〃 〃	13.6	(3.7)	-	5.4	〃 〃	〃	約1/4が残存, 底部は削り出し高台, 高台外面から見込に淡緑色の釉を施釉, 見込は蛇ノ目状の釉ハギ
5090	〃	石製品 石斧	(9.5)	4.7	1.6	(114.0)	-	-	刃部と基部の一部が欠損, 石材は緑色片岩, 全面を研磨するが, 表面は剝離とキズが目立つ
5091	〃	金属製品 煙管	(4.1)	1.6	(1.0)	(3.9)	-	-	雁首の火皿, 首, 胴の約3/4が残存, 側面に接合痕が残存
5092	第V層	弥生土器 壺	-	(4.0)	-	-	にぶい褐色 〃	良	口頸部の細片, 口縁部から内面はヨコナデ調整, 外面はナデ調整で, 段部を作り出す。
5093	〃	〃 甕	23.3	(8.9)	24.0	-	〃 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 口唇部はヨコナデ調整, 頸部内面はハケ調整の後にナデ調整
5094	〃	石製品 叩石	11.5	8.7	2.5	401.8	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 両端部に敲打痕が残存
5095	SK-501	弥生土器 壺	-	(4.1)	-	-	灰褐色 にぶい橙色	良	胴部の細片, 内面は指ナデとナデ調整, 外面はハケ調整の後に6本単位のクシ描波状文と簾状文
5096	〃	〃 甕	-	(1.1)	-	-	にぶい黄褐色 〃	〃	口縁部の細片, ヨコナデ調整で, 内面にハケ目が残存
5097	SD-501	〃 壺	-	(2.7)	-	-	にぶい赤褐色 〃	〃	上胴部の細片, 器面はハケ調整で, 外面に棒状工具による刺突文と2条のヘラ描沈線
5098	〃	〃 〃	-	(6.2)	-	-	黒褐色 にぶい褐色	〃	胴部の破片, 内面は指ナデとナデ調整, 外面はハケ調整の後にクシ描波状文と6本単位のクシ描直線文
5099	〃	〃 甕	-	(2.8)	-	-	にぶい橙色 橙色	やや不良	口縁部の細片, 器面は摩耗
5100	〃	〃 〃	12.7	(5.4)	-	-	灰白色 〃	良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はナデ調整

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
5101	SD-501	弥生土器 甕	-	(3.5)	-	-	明赤褐色 〃	不良	口縁部の細片, 器面は摩耗
5102	〃	〃 〃	-	(4.8)	-	-	にぶい褐色 〃	良	口頸部の細片, 外面はハケ調整の後にタテ方向のヘラ磨き, 口縁部はヨコナデ調整
5103	〃	〃 〃	-	(6.4)	13.0	-	にぶい黄橙色 〃	〃	上胴部約1/5が残存, 内面は指ナデとナデ調整, 外面は摩耗するが, ハケ目が残存
5104	〃	〃 〃	-	(3.8)	-	4.8	黒褐色 にぶい黄橙色	〃	底部約1/4が残存, 内面は指押えと指ナデ, 外面と外底面はナデ調整
5105	〃	〃 〃	-	(4.4)	-	8.8	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃	底部が残存, 内面は指押えとナデ調整, 外面と外底面はナデ調整
5106	〃	〃 〃	-	(2.9)	-	9.3	にぶい黄橙色 〃	〃	底部約1/4が残存, 器面は摩耗
5107	〃	〃 〃	-	(5.4)	-	10.4	にぶい褐色 〃	〃	底部が残存, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整で, 下端にヘラ状工具による押圧痕が残存
5108	SD-502	〃 壺	16.0	(3.9)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口縁部から頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面は摩耗, 外面はナデ調整で指頭圧痕が残存
5109	〃	〃 〃	-	(16.4)	26.2	-	〃 〃	やや不良	頸部から上胴部が残存, 内面は指ナデとナデ調整, 外面はタタキの後にハケ調整
5110	〃	〃 甕	13.8	(2.9)	-	-	にぶい橙色 灰褐色	良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はハケ調整で, 下端にヘラ描沈線
5111	〃	〃 〃	10.5	(21.6)	17.6	-	にぶい赤褐色 灰褐色	〃	約1/3が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部に円孔, 胴部内面は中胴部以下にヘラ削り, 外面に煤が付着
5112	〃	〃 〃	14.2	(3.5)	-	-	にぶい橙色 にぶい黄橙色	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はハケ調整, 外面はハケ調整の後にナデ調整
5113	〃	〃 〃	-	(2.3)	-	-	にぶい橙色 橙色	〃	口縁部の細片, 器面はヨコナデ調整
5114	〃	〃 壺	-	(17.2)	24.0	2.6	にぶい黄橙色 〃	良好	底部から中胴部の約1/2が残存, 内面中胴部は指ナデ, 下胴部はヘラナデ, 外面にはタタキ目が残存
5115	〃	〃 甕	-	(13.9)	19.0	3.9	灰黄褐色 灰褐色	〃	底部から中胴部の約1/3が残存, 内面は指ナデの後にハケ調整, 外面はタタキの後にハケ調整
5116	SD-504	〃 〃	-	(2.0)	-	-	橙色 〃	不良	口縁部の細片, 器面は摩耗
5117	〃	〃 〃	14.1	(10.7)	16.0	-	にぶい橙色 〃	〃	口縁部から中胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整で, 一部にハケ目が残存
5118	〃	〃 〃	-	(12.7)	(16.8)	5.4	にぶい黄橙色 にぶい赤褐色	良	底部から中胴部の約1/2が残存, 内面はヘラ削り, 外面はハケ調整, 外底面はナデ調整
5119	SD-509	〃 〃	12.1	(11.8)	13.4	-	にぶい橙色 〃	〃	口縁部から中胴部の約1/2が残存, 口唇部はヨコナデ調整, 内面は指ナデとナデ調整
5120	〃	〃 〃	-	(6.7)	-	8.1	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃	底部約1/5が残存, 内面はハケ調整の後にナデ調整, 外面はヘラ磨き, 外底面はナデ調整
5121	〃	〃 〃	-	(5.3)	-	8.0	にぶい黄橙色 〃	〃	底部の破片, 内面はナデ調整, 外面は摩耗
5122	SK-511	土師質土器 杯	-	(0.8)	-	5.6	〃 〃	〃	底部の細片, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
5123	SD-511	〃 〃	-	(1.8)	-	-	にぶい橙色 〃	やや不良	口縁部の細片, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整
5124	〃	瓦質土器 三足鍋	(5.2)	1.6	1.5	-	- 黄灰色	良	脚の先端部が残存, 表面はヘラナデとナデ調整
5125	SD-513	土師質土器 椀	-	(1.4)	-	5.0	にぶい黄橙色 〃	不良	底部約1/5が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗

V区 遺物観察表6 (5126～5143)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
5126	SD-513	土師質土器 小皿	-	(0.7)	-	4.4	にぶい黄橙色 褐灰色	良	底部の破片, 成形はB技法, 器面は摩耗, 底部の切り離しは静止糸切り
5127	〃	〃 〃	-	(0.7)	-	5.8	にぶい黄橙色 〃	やや 不良	底部の破片, 成形はB技法, 器面は摩耗, 底部の切り離しは回転糸切り
5128	SD-514	〃 杯	-	(2.0)	-	-	にぶい橙色 〃	〃	口縁部の破片, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整
5129	SD-519	〃 〃	-	(1.0)	-	6.5	〃 〃	良	底部の破片, 成形はB技法, 器面は摩耗, 底部の切り離しは回転糸切り
5130	〃	〃 〃	-	(1.6)	-	7.4	灰黄色 〃	やや 不良	底部約1/5が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗, 底部の切り離しは回転糸切り
5131	〃	〃 〃	-	(0.9)	-	7.6	にぶい黄橙色 〃	良	底部の破片, 成形はB技法, 器面は摩耗, 底部の切り離しは回転糸切り
5132	〃	〃 〃	-	(1.4)	-	8.0	灰黄色 浅黄色	〃	底部の破片, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
5133	〃	〃 〃	-	(2.3)	-	5.0	にぶい橙色 〃	〃	底部の破片, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
5134	SD-521	弥生土器 壺	-	(5.5)	-	10.3	にぶい褐色 にぶい黄橙色	〃	底部の破片, 内面はハケ調整の後にナデ調整, 外面はヘラナデ, 下端は指押え, 外底面はナデ調整
5135	SD-524	〃 甕	-	(1.1)	-	-	にぶい橙色 にぶい黄橙色	〃	口縁部の細片, 口唇部と内面はヨコナデ調整, 外面はハケ調整
5136	SD-526	瓦質土器 三足鍋	24.3	(9.7)	(27.6)	-	灰黄褐色 〃	やや 不良	口縁部から胴部の破片, 口縁部と鐶はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面は指押え, 脚基部が残存
5137	SD-529	土師質土器 杯	-	(1.8)	-	-	にぶい橙色 〃	不良	口縁部の細片, 成形はB技法, 器面は摩耗
5138	SX-502	須恵器 杯身	-	(1.7)	-	8.6	黄灰色 〃	良好	底部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 自然釉がかかりハダ荒れ
5139	〃	土師質土器 杯	-	(1.4)	-	-	にぶい橙色 〃	不良	底部の細片, 成形はB技法, 器面は摩耗, 底部の切り離しは回転糸切りとみられる。
5140	〃	〃 〃	-	(1.9)	-	-	〃 〃	良	底部の細片, 成形はB技法, 内面は回転ナデ調整, 外面は未調整, 底部の切り離しは回転糸切り
5141	〃	瓦器 椀	12.3	(2.7)	-	-	暗灰黄色 灰色	不良	口縁部から体部の破片, 器面は摩耗するが, 体部外面に指頭圧痕が残存
5142	SD-540	土師質土器 杯	-	(2.7)	-	4.8	橙色 〃	やや 不良	底部から体部の約1/4が残存, 成形はB技法, 器面は未調整, 底部の切り離しは回転糸切り
5143	SD-543	近代磁器 皿	-	(1.7)	-	-	暗緑灰色 灰オリーブ色	良好	口縁部の細片, 内面は緑色からコバルトに発色, 外面は透明釉を施釉, 全面に貫入あり。

# 遺構計測表

遺構計測表

西野々遺跡Ⅲ～Ⅴ区 遺構・遺物総数表

遺 構 数	Ⅲ区	Ⅳ区	Ⅴ区	計
竪穴状遺構	1軒	-	-	1軒
掘立柱建物跡	31棟	24棟	-	55棟
塀・柵列跡	4列	3列	-	7列
土 坑	82基	37基	13基	132基
溝 跡	120条	50条	43条	213条
井 戸 跡	2基	-	-	2基
畝状遺構	12列	11列	6列	29列
性格不明遺構	-	-	2基	2基
ピ ッ ト	2,496個	1,160個	1個	3,657個
遺 構 総 数	2,748	1,285	65	4,098
出土遺物総点数	15,801点	4,060点	1,451点	21,312点
掲載遺物点数	549点	135点	143点	827点

遺構計測表1 Ⅲ区竪穴状遺構(ST-301)

遺構番号	平面形態	規模		床面標高(m)	長軸方向 (NはGN)
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)		
ST-301	不整形	6.10	5.61	7.271～7.402	N-36°-W

遺構計測表2 Ⅲ区掘立柱建物跡1(SB-301～328)

遺構番号	桁行×梁行	規模 桁行(m)×梁行(m) (尺)×(尺)	柱間寸法			面積 (㎡)	棟方向 (NはGN)	備考
			桁 (尺)	梁 (尺)	深さ (cm)			
SB-301	1以上×2	1.80×3.60	1.80	1.80	14～40	6.48	N-31°32'-W	
SB-302	5×3	8.40×5.10 (28)×(17)	1.50・1.80 (5)・(6)	1.50・1.80 (5)・(6)	20～102	42.84	N-77°2'-W	
SB-303	3以上×2	4.80×3.60 (16)×(12)	1.35～1.80 (4.5)～(6)	1.80 (6)	12～74	17.01	N-3°49'-E	
SB-304	2以上×1	4.05×3.90 (13.5)×(13)	1.80・2.25 (6)・(7.5)	3.90 (13)	35～63	14.90	N-1°55'-W	
SB-305	3×2	6.65×4.65 (22)×(15.5)	2.10～2.40 (7)～(8)	2.25・2.40 (7.5)・(8.0)	20～74	30.25	N-87°44'-E	
SB-306	3×2	5.55×3.90 (18.5)×(13)	1.80・1.95 (6)・(6.5)	1.80・2.10 (6)・(7)	23～52	21.35	N-1°2'-W	
SB-307	3以上×2	4.65～4.80×3.90 (15.5～16)×(13)	1.35～1.80 (4.5)～(6)	1.95 (6.5)	19～77	18.23	N-4°34'-E	
SB-308	3×2	4.80×3.60 (16)×(12)	1.50・1.65 (5)・(5.5)	1.50～2.10 (5～7)	18～64	17.28	N-4°26'-E	
SB-309	1×2	3.90×3.70 (13)×(12)	3.90(13)	1.75・1.95 (5.8)・(6.5)	27～63	14.43	N-2°27'-E	張り出し部付き
SB-310	3×1	6.90×3.00 (23)×(10)	2.10～2.40 (7)～(8)	3.00 (10)	45～59	20.40	N-1°9'-E	
SB-311	3×2	7.20×5.55 (24)×(18.5)	1.95～2.85 (6.5)～(9.5)	1.65・1.80 (5.5)・(6)	8～38	39.96	N-77°18'-W	片廂付き
SB-312	2×2	5.00×3.80	2.50	1.90	13～32	19.00	N-17°-E	総柱
SB-313	3×2	6.70×4.00	2.20・2.30	2.00	12～31	26.80	N-73°-W	
SB-314	3×2	5.00×4.40	1.60・1.80	2.10・2.30	7～30	22.00	N-8°-E	
SB-315	2×2	3.60×2.90	1.80	1.40・1.50	12～42	10.44	N-9°-E	
SB-316	4×2	7.30×4.10	1.30～2.20	2.00・2.10	15～36	29.93	N-81°-W	
SB-317	3以上×2	4.90×4.30	1.50～1.90	2.15	13～38	21.07	N-14°-E	総柱
SB-318	2×2	3.60×3.40	1.80	1.40～2.00	5～22	12.24	N-14°-E	
SB-319	2×2	4.40×3.30	2.20	1.50・1.80	7～48	14.52	N-84°-W	
SB-320	4×2	6.90×4.50	1.50・1.80	2.00・2.50	16～37	31.05	N-17°-E	西廂付き
SB-321	3×2	6.70×4.50	2.20・2.30	2.20・2.30	8～33	30.15	N-9°-E	
SB-322	2×2	3.80×3.80	1.50～2.30	1.90	7～26	14.44	N-85°-W	
SB-323	2×1	4.00～4.10×1.80	2.00・2.05	1.80	9～24	7.29	N-82°-W	
SB-324	3×2	5.65×3.60	1.80～1.95	1.80	10～35	20.34	N-77°-W	
SB-325	4×2	5.90×3.90	1.20～1.60	1.90・2.00	13～45	23.01	N-76°-W	
SB-326	5×1以上	9.95×2.00	1.85～2.40	2.00	26～50	19.90	N-80°-W	
SB-327	3×1以上	5.70×0.95	1.90	0.95	25～48	5.42	N-81°-W	
SB-328	4×1以上	7.60×2.50	1.70～2.00	2.50	12～48	19.00	N-72°-W	

遺構計測表3 Ⅲ区掘立柱建物跡2 (SB-329～331)

遺構番号	桁行×梁行	規模	柱間寸法			面積 (㎡)	棟方向 (NはGN)	備考
		桁行(m)×梁行(m) (尺)×(尺)	桁 (尺)	梁 (尺)	深さ (cm)			
SB-329	5×2	9.30×3.90	1.80～2.00	1.90・2.00	12～50	36.27	N-13°-E	総柱
SB-330	3×2	7.40×3.80	1.80～3.30	1.75～2.05	13～45	28.12	N-77°-W	
SB-331	2×1	2.80×1.90	1.40	1.90	14～46	5.32	N-14°-E	

遺構計測表4 Ⅲ区塀・柵列跡 (SA-301～304)

遺構番号	柱穴数(個)	規模		方向 (NはGN)	備考
		全長(m)	柱間寸法(m)		
SA-301	5	7.60	1.60～2.30	N-8°-E	
SA-302	6	3.45	0.65・0.70	N-81°-W	
SA-303	6	3.45	0.65・0.70	N-81°-W	
SA-304	6	3.55	0.70・0.75	N-81°-W	

遺構計測表5 Ⅲ区土坑1 (SK-301～326)

遺構番号	平面形態	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	深さ(cm)		
SK-301	不整楕円形	1.72	1.31	35	N-1°-E	
SK-302	〃	1.52	1.06	23	N-85°-E	
SK-303	楕円形	1.68	1.00	31	N-9°-E	
SK-304	舟形	(3.62)	0.85	34	N-72°-W	
SK-305	方形	(1.52)	(0.79)	11	N-74°-W	
SK-306	不整方形	1.11	0.90	10	N-39°-E	
SK-307	不整楕円形	1.54	1.16	15	N-77°-W	
SK-308	〃	1.18	0.86	7	N-73°-E	
SK-309	不整形	1.92	0.62	5～14	N-56°-E	
SK-310	円形	1.05	1.03	10	-	
SK-311	〃	1.00	0.88	15	-	
SK-312	方形	1.70	1.01	14	N-18°-W	
SK-313	〃	1.38	0.93	15	N-60°-W	
SK-314	〃	1.09	0.68	11	N-5°-E	
SK-315	〃	5.30	(0.84)	14	N-80°-W	
SK-316	円形	0.88	0.87	6	-	
SK-317	方形	0.76	(0.30)	8	N-57°-W	
SK-318	〃	0.85	0.65	16	N-37°-E	
SK-319	舟形	4.23	0.85	26	N-73°-E	
SK-320	不整方形	0.94	0.77	13	N-5°-W	
SK-321	舟形	(1.65)	1.03	5	N-24°-W	
SK-322	方形	1.00	0.99	9	N-31°-W	
SK-323	〃	1.02	0.92	10	N-11°-W	
SK-324	不整楕円形	(2.44)	1.26	7	N-9°-W	
SK-325	方形	1.27	1.08	17	N-80°-E	
SK-326	不整形	3.21	1.14	11	N-65°-W	

遺構計測表6 Ⅲ区土坑2 (SK-327～369)

遺構番号	平面形態	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	深さ(cm)		
SK-327	楕円形	1.17	0.75	9	N - 32° - E	
SK-328	方形	2.24	(1.00)	8	N - 87° - W	
SK-329	〃	1.66	1.41	7	N - 30° - E	
SK-330	不整形	4.12	(3.00)	11	N - 83° - W	
SK-331	不整円形	1.03	0.96	40	-	
SK-332	楕円形	1.20	0.67	25	N - 42° - W	
SK-333	不整形	2.67	(1.26)	14	N - 80° - E	
SK-334	不整楕円形	(2.05)	(0.59)	16	N - 89° - W	
SK-335	〃	1.69	1.07	12	N - 14° - W	
SK-336	楕円形	1.09	0.73	12	N - 7° - E	
SK-337	不整形	1.81	0.67	36	N - 1° - E	
SK-338	舟形	(1.61)	0.67	16	N - 13° - E	
SK-339	不整形	(2.27)	1.98	13～25	N - 83° - E	
SK-340	楕円形	1.64	0.95	4～6	N - 22° - W	
SK-341	不整楕円形	(1.43)	1.23	3～12	N - 85° - W	
SK-342	〃	(1.15)	0.97	16～20	N - 87° - W	
SK-343	楕円形	1.18	0.94	3～5	N - 72° - W	
SK-344	不整形	(1.24)	0.92	3	N - 70° - W	
SK-345	〃	(1.55)	1.04	10	N - 50° - E	
SK-346	〃	(2.34)	1.69	33	N - 77° - E	
SK-347	不整円形	0.87	0.76	10	N - 55° - E	
SK-348	〃	1.28	1.21	12	N - 56° - E	
SK-349	円形	1.01	0.97	12	-	
SK-350	楕円形	0.96	0.70	15	N - 57° - W	
SK-351	隅丸方形	2.03	1.80	42	N - 6° - E	
SK-352	不整形	(0.76)	(1.14)	29	N - 34° - E	
SK-353	不整形	1.70	1.26	12	N - 22° - W	
SK-354	方形	(2.11)	(1.08)	26	N - 58° - W	
SK-355	〃	3.20	(2.12)	88	N - 76° - W	
SK-356	〃	1.60	0.84	34	N - 9° - E	2条の溝が回る
SK-357	〃	1.85	1.03	32	N - 5° - W	
SK-358	舟形	4.50	0.74	4～27	N - 9° - E	
SK-359	〃	(1.54)	0.48	17	N - 65° - W	
SK-360	楕円形	0.70	0.35	8	N - 77° - W	
SK-361	不整楕円形	1.02	0.41	15	N - 18° - E	
SK-362	隅丸方形	1.76	1.17	20	N - 82° - E	
SK-363	方形	0.88	0.70	25	N - 9° - E	
SK-364	不整形	5.60	4.90	157	N - 34° - E	
SK-365	方形	3.06	1.70	74	N - 20° - E	
SK-366	不整形	(3.55)	1.44	66	N - 18° - E	
SK-367	不整円形	2.52	2.24	123	N - 84° - W	
SK-368	円形	1.82	1.72	53	-	
SK-369	不整形	4.16	2.30	30	N - 20° - E	

遺構計測表7 Ⅲ区土坑3 (SK-370~382)

遺構番号	平面形態	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		長辺・長径 (m)	短辺・短径 (m)	深さ (cm)		
SK-370	円形	2.04	1.83	10	-	
SK-371	不整形	0.94	0.88	8	N-73°-W	
SK-372	不整形	3.32	2.70	27	N-15°-E	
SK-373	長楕円形	1.66	0.66	82	N-67°-E	
SK-374	〃	1.72	0.68	35	N-69°-W	
SK-375	不整形	1.68	1.46	26	N-52°-W	
SK-376	隅丸方形	1.43	1.35	13	N-15°-E	
SK-377	長楕円形	(1.48)	0.92	27	N-86°-E	
SK-378	不整楕円形	2.49	0.87	38	N-86°-E	
SK-379	円形	1.47	1.40	26	-	
SK-380	不整形	1.00	0.83	11	N-64°-W	
SK-381	〃	2.01	1.67	39	N-86°-W	
SK-382	〃	1.22	1.07	11	N-89°-W	

遺構計測表8 Ⅲ区溝跡1 (SD-3001~3025)

遺構番号	形状	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		検出長 (m)	幅 (m)	深さ (cm)		
SD-3001	東西溝	17.63	0.87~1.72	15~24	N-60°-W	
SD-3002	〃	100.88	1.06~2.08	42~79	N-74°-W~N-57°-W~N-85°-W	
SD-3003	〃	100.68	0.62~2.12	25~63	N-59°-W~N-88°-W	
SD-3004	南北溝	45.46	1.40~2.22	48~70	N-42°-W	
SD-3005	〃	39.42	0.37~1.03	22~59	N-42°-W	
SD-3006	〃	7.83	(0.88)	45~54	N-42°-W~N-82°-W	
SD-3007	東西溝	19.09	0.80~1.20	40~50	N-61°-W	
SD-3008	南北溝	57.92	1.26~1.69	37~68	N-63°-W~N-42°-W	
SD-3009	〃	8.12	(0.63)	37~51	N-138°-E	
SD-3010	東西溝	1.12	0.52	30	N-89°-E	
SD-3011	南北溝	26.46	0.20~0.50	12~25	N-143°-E	
SD-3012	〃	31.98	0.35~1.12	14~32	N-148°-E	
SD-3013	〃	22.52	0.65~1.49	8~16	N-146°-E・N-133°-E	
SD-3014	〃	37.08	0.38~0.93	8~29	N-150°-E	
SD-3015	〃	4.70	0.35~0.48	2~8	N-12°-W	
SD-3016	〃	4.02	0.38~0.64	8	N-137°-E	
SD-3017	〃	9.36	0.32~0.69	4~12	N-47°-W	
SD-3018	東西溝	72.62	3.00~4.00	32~63	N-122°-E	
SD-3019	南北溝	27.23	0.30~0.66	19	N-115°-E~N-125°-E	
SD-3020	東西溝	21.44	0.28~0.44	13	N-123°-E	
SD-3021	〃	43.17	0.13~0.40	13	N-134°-E	
SD-3022	〃	85.25	0.34~1.00	6~43	N-107°-E	
SD-3023	〃	70.87	0.34~0.68	11~24	N-86°-W	
SD-3024	〃	49.84	0.40~0.74	32~48	N-79°-W	
SD-3025	〃	52.90	0.28~0.75	22~58	N-57°-W	

遺構計測表9 Ⅲ区溝跡2 (SD-3026～3068)

遺構番号	形状	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		検出長 (m)	幅 (m)	深さ (cm)		
SD-3026	東西溝	20.75	0.38～0.69	28～43	N-139°-E	
SD-3027	〃	15.27	0.29～0.46	54～58	N-139°-E	
SD-3028	〃	17.68	1.08～2.22	19～35	N-138°-E	
SD-3029	〃	18.91	0.96～1.07	38～57	N-49°-W	
SD-3030	南北溝	29.05	0.52～0.90	27～54	N-37°-W	
SD-3031	〃	34.71	0.42～0.89	13～32	N-132°-E	
SD-3032	〃	33.44	0.31～1.17	5～9	N-132°-E	
SD-3033	東西溝	10.11	0.74～0.87	36～49	N-144°-E	
SD-3034	〃	88.03	1.23～2.47	29～65	N-110°-E～N-135°-E	
SD-3035	〃	18.39	0.28～0.68	5～14	N-120°-E	
SD-3036	南北溝	7.19	1.33～1.80	45～50	N-44°-E	
SD-3037	〃	5.92	0.20～0.38	4～11	N-158°-W	
SD-3038	〃	2.13	0.18～0.44	3～11	N-149°-W	
SD-3039	〃	5.87	0.37～0.46	16～20	N-31°-E	
SD-3040	〃	5.31	0.24～0.43	4～6	N-177°-W	
SD-3041	〃	5.57	0.41～1.40	4～9	N-169°-W	
SD-3042	東西溝	10.94	0.30～0.92	2～6	N-64°-W	
SD-3043	南北溝	18.38	0.12～0.56	3～13	N-161°-W	
SD-3044	東西溝	8.09	0.31～0.69	6～13	N-56°-W	
SD-3045	〃	5.73	0.20～0.36	3～9	N-59°-W	
SD-3046	〃	8.41	0.20～0.34	2～4	N-74°-W	
SD-3047	南北溝	1.81	0.12～0.20	6～10	N-11°-E	
SD-3048	〃	6.67	0.18～0.50	4～9	N-17°-E	
SD-3049	〃	13.05	0.16～0.64	4～8	N-165°-W	
SD-3050	〃	6.80	0.52～2.20	20～28	N-167°-W	
SD-3051	〃	10.58	0.26～0.60	4～12	N-168°-W	
SD-3052	〃	7.22	0.21～0.45	6～15	N-171°-W	
SD-3053	東西溝	63.94	0.80～1.26	24～51	N-135°-E～N-116°-E	
SD-3054	〃	112.37	0.31～0.74	5～86	N-110°-E～N-80°-E	
SD-3055	〃	82.45	0.37～1.32	14～110	N-83°-99°-W	
SD-3056	〃	17.17	0.14～0.40	2～19	N-79°-W	
SD-3057	南北溝	3.65	0.40～0.66	12～18	N-44°-W	
SD-3058	コの字形	42.66	0.30～0.78	14～34	N-16°-E・N-74°-W	
SD-3059	L字形	7.23	0.20～0.48	2～12	N-19°-E・N-78°-W	
SD-3060	南北溝	5.64	0.10～0.17	2～6	N-16°-E	
SD-3061	東西溝	11.95	0.44～0.62	11～24	N-111°-E	
SD-3062	〃	3.53	0.40	18～27	N-125°-E	
SD-3063	〃	6.20	0.22～0.24	4～17	N-121°-E	
SD-3064	〃	5.10	0.08～0.14	11～18	N-120°-E	
SD-3065	L字形	9.02	0.30～0.60	9～24	N-69°-E～N-116°-E	
SD-3066	南北溝	15.30	(1.32)	26～36	N-12°-E	
SD-3067	〃	25.87	0.48～0.90	10～28	N-14°-E	
SD-3068	東西溝	50.07	(1.58)	24～32	N-74°-W	

遺構計測表 10 Ⅲ区溝跡3(SD-3069~3111)

遺構番号	形状	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		検出長(m)	幅(m)	深さ(cm)		
SD-3069	南北溝	23.24	0.30~0.87	15~29	N-134°-W	
SD-3070	東西溝	13.60	0.36~0.65	8~23	N-81°-E	
SD-3071	〃	13.31	0.28~0.62	4~19	N-89°-E	
SD-3072	南北溝	39.58	0.22~0.96	8~18	N-33°-W	
SD-3073	〃	3.76	0.67	8~10	N-146°-E	
SD-3074	〃	13.21	0.30~0.70	5~8	N-151°-E	
SD-3075	〃	1.03	0.31~0.40	5~9	N-174°-W	
SD-3076	東西溝	38.73	1.00~1.15	52~75	N-80°-W	
SD-3077	〃	54.42	0.40~1.07	5~24	N-94°-E	
SD-3078	〃	2.10	0.38~0.50	11	N-122°-E	
SD-3079	〃	0.94	0.53	14~18	N-84°-W	
SD-3080	南北溝	12.16	0.37~0.87	12~28	N-27°-E	
SD-3081	〃	7.06	0.61~0.80	6~12	N-21°-E	
SD-3082	〃	2.53	0.30~0.56	2~6	N-15°-W	
SD-3083	〃	7.88	0.32~0.44	23~30	N-1°-E	
SD-3084	東西溝	20.45	0.60~1.08	5~16	N-83°-E	
SD-3085	〃	11.36	0.46~1.34	3~14	N-85°-E	
SD-3086	南北溝	22.98	0.36~1.26	14~50	N-151°-W~N-118°-W	
SD-3087	〃	2.18	0.50~0.54	12~14	N-11°-E	
SD-3088	L字形	17.74	0.32~1.17	6~46	N-7°-E・N-73°-W	
SD-3089	南北溝	9.17	0.38~0.63	18~34	N-14°-W	
SD-3090	東西溝	4.11	0.35~0.46	4~16	N-119°-E	
SD-3091	〃	9.32	0.46~0.76	4~13	N-114°-E	
SD-3092	〃	3.45	0.36~0.40	4~8	N-101°-E	
SD-3093	〃	25.99	0.30~1.12	4~23	N-78°-W	
SD-3094	〃	2.72	0.52~0.63	5~7	N-100°-E	
SD-3095	〃	13.18	0.38~0.66	6~16	N-78°-W	
SD-3096	〃	3.75	0.78	8~15	N-127°-E	
SD-3097	〃	11.44	0.40~0.75	4~12	N-107°-E	
SD-3098	〃	5.89	0.24~0.38	7~18	N-77°-W	
SD-3099	南北溝	4.36	0.27~0.35	13~19	N-139°-E	
SD-3100	東西溝	1.92	0.26~0.35	6~9	N-116°-W	
SD-3101	〃	2.98	0.38~0.41	7~14	N-51°-W	
SD-3102	〃	6.40	0.73~0.76	22~26	N-106°-E	
SD-3103	〃	2.72	0.50	18~20	N-106°-E	
SD-3104	南北溝	8.94	0.44~0.72	26~42	N-165°-W	
SD-3105	〃	6.51	0.82~0.96	8~16	N-173°-E	
SD-3106	L字形	10.16	(0.50)	8~12	N-30°-W~N-84°-W	
SD-3107	〃	4.54	0.28~0.38	3~11	N-57°-W~N-5°-E	
SD-3108	東西溝	4.55	0.39~0.53	10~13	N-97°-W	
SD-3109	〃	19.00	1.08~1.44	3~13	N-83°-E	
SD-3110	〃	18.86	0.70~1.26	14~27	N-97°-E	
SD-3111	〃	25.17	0.52~1.06	13~35	N-97°-W	

遺構計測表 11 Ⅲ区溝跡4 (SD-3112～3120)

遺構番号	形状	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		検出長 (m)	幅 (m)	深さ (cm)		
SD-3112	東西溝	21.28	0.45～1.35	6～30	N-80°-W	
SD-3113	南北溝	18.65	0.66～0.84	8～23	N-145°-E	
SD-3114	〃	18.60	0.67～1.24	16～31	N-24°-W	
SD-3115	〃	10.70	0.61～0.77	7～16	N-168°-W	
SD-3116	〃	5.10	0.39～0.54	5～17	N-3°-E	
SD-3117	東西溝	11.88	0.42～1.09	2～16	N-55°-W	
SD-3118	南北溝	4.03	0.62～0.96	10～30	N-142°-E	
SD-3119	〃	3.98	0.34～0.92	9～12	N-28°-E	
SD-3120	コの字形	45.26	0.16～1.30	5～52	-	

遺構計測表 12 Ⅲ区井戸跡 (SE-301・302)

遺構番号	平面形態	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		長辺・長径 (m)	短辺・短径 (m)	深さ (m)		
SE-301	円形	2.68	2.51	1.73	-	
SE-302	隅丸方形	(2.48)	2.41	1.69	N-16°-E	

遺構計測表 13 Ⅲ区畝状遺構 (SU-301～312)

遺構番号	畝跡数 (本)	規模					主軸方向 (NはGN)	備考
		最大長 (m)	畝間間隔 (m)	畝幅 (m)	幅 (cm)	深さ (cm)		
SU-301	3	2.10	0.87～1.31	0.50～1.00	20～40	1～5	N-9°-13°-E	
SU-302	6	9.78	0.60～1.95	0.30～1.60	20～44	1～6	N-37°-41°-E	
SU-303	5	9.40	1.97	1.67	18～32	1～5	N-52°-58°-W	
SU-304	3以上	2.24	0.50～2.90	0.30～2.70	22～44	2～6	N-2°-W～N-5°-E	
SU-305	4以上	5.08	1.75～2.12	1.70～1.79	20～42	1～4	N-26°-33°-E	
SU-306	5以上	4.04	0.60～0.80	0.46～0.60	20～42	1～2	N-15°-E	
SU-307	6	0.89	0.64～0.69	0.40	17～31	1～8	N-10°-14°-E	
SU-308	11	(2.02)	0.66～0.70	0.30～0.34	20～43	2～7	N-15°-22°-E	
SU-309	6	1.02	0.45～0.76	0.25～0.52	19～30	1～5	N-15°-18°-E	
SU-310	3以上	(1.16)	0.83	0.64	28～40	2～5	N-18°-E	
SU-311	5以上	(1.96)	0.68	0.45	20～34	1～6	N-18°-28°-E	
SU-312	5以上	(1.75)	0.65	0.32	28～50	1～8	N-40°-E	

遺構計測表 14 Ⅳ区掘立柱建物跡 (SB-401～403)

遺構番号	桁行×梁行	規模	柱間寸法		深さ (cm)	面積 (㎡)	棟方向 (NはGN)	備考
		桁行 (m)×梁行 (m) (尺)×(尺)	桁 (m) (尺)	梁 (m) (尺)				
SB-401	2×2	3.90×3.30 (13)×(11)	1.95 (6.5)	1.65 (5.5)	21～54	12.87	N-4°29'-E	
SB-402	3×2	4.35×3.60 (14.5)×(12)	1.35・1.50 (4.5)・(5)	1.65・1.95 (5.5)・(6.5)	18～32	15.66	N-11°19'-E	
SB-403	5×2	9.00×4.35 (30)×(14.5)	1.35～2.10 (4.5)～(7)	2.10・2.25 (7)・(7.5)	13～84	39.15	N-83°45'-E	

遺構計測表 15 IV区掘立柱建物跡 (SB-404～424)

遺構番号	桁行×梁行	規模		柱間寸法		深さ (cm)	面積 (㎡)	棟方向 (NはGN)	備考
		桁行(m)×梁行(m) (尺)×(尺)	桁 (尺)	梁 (尺)					
SB-404	3×2	5.70×3.90 (19)×(13)	1.80・1.95 (6)・(6.5)	1.95 (7)	9～37	22.23	N-85°14'-W		
SB-405	2×1	3.90×2.40 (13)×(8)	1.50・2.40 (5)・(8)	2.40 (8)	4～21	9.36	N-4°40'-E		
SB-406	3×2	7.35×4.20 (24.5)×(14)	2.40・2.55 (8)・(8.5)	1.95・2.25 (6.5)・(7.5)	12～49	30.87	N-11°19'-E		
SB-407	3×2	7.65×3.90 (25.5)×(13)	2.55 (8.5)	1.80・2.10 (6)・(7)	20～66	29.84	N-85°44'-W		
SB-408	4×2	7.00～7.10×3.30	1.30～2.10	1.30・2.00	11～45	56.40	N-74°-W	二面廂付き	
SB-409	3×1	8.30～8.40×2.30～2.60	1.60～4.00	2.30・2.60	8～38	20.46	N-75～77°-W		
SB-410	2×1	4.20～4.30×2.30～2.40	2.00～2.30	2.30・2.40	14～29	9.99	N-72～73°-W		
SB-411	2×2	3.80×2.90	1.50～2.30	1.30・1.60	2～19	11.02	N-74°-W		
SB-412	2×2	5.40～5.60×3.80～4.10	2.60～2.90	1.80～2.20	14～27	21.73	N-67～74°-W		
SB-413	2×2	3.70×3.30	1.70・2.00	1.30～2.00	6～38	12.21	N-20°-E		
SB-414	4×1	8.70×2.50	1.80～3.00	2.50	7～32	21.75	N-70°-W		
SB-415	2×2	4.35×3.10	2.15・2.20	1.50・1.60	7～51	13.49	N-79°-W		
SB-416	2×2	6.10×3.70	2.90～3.20	1.70～2.00	13～26	22.57	N-80°-W		
SB-417	3×2	5.70×3.10	1.80～2.00	1.40・1.70	16～29	17.67	N-10°-E		
SB-418	3×2	4.50～4.70×3.00～3.20	1.35～1.70	1.40・1.60	4～45	18.91	N-5～7°-E	片面廂付き	
SB-419	2×2	2.80×2.60	1.30・1.50	1.10・1.50	7～26	7.28	N-86°-W	総柱	
SB-420	3×2	5.00×2.60	1.30～1.90	1.30	6～44	13.00	N-4°-E	〃	
SB-421	4×1	7.10～7.20×2.50～2.60	1.60～1.85	2.50・2.60	5～31	18.23	N-2°-E		
SB-422	2×1	3.70×2.80～2.90	1.60～2.10	2.80・2.90	12～33	10.55	N-0～2°-E		
SB-423	3×1	5.30～5.40×3.50	1.60～2.10	3.50	14～46	18.73	N-89°-W		
SB-424	3×2	5.20～5.30×3.60	1.40	1.60～2.00	8～11	18.90	N-85～86°-E		

遺構計測表 16 IV区塀・柵列跡 (SA-401～403)

遺構番号	柱穴数(個)	規模		方向 (NはGN)	備考
		全長(m)	柱間寸法(m)		
SA-401	4	6.70	2.10・2.50	N-71°-W	
SA-402	4	6.10	1.80～2.40	N-1°-E	
SA-403	4	4.80	1.40～1.80	N-88°-E	

遺構計測表 17 IV区土坑1 (SK-401～406)

遺構番号	平面形態	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	深さ(cm)		
SK-401	不整楕円形	1.42	0.92	8	N-31°-W	
SK-402	溝状	2.29	0.86	11	N-14°-E	
SK-403	不整楕円形	4.31	1.70	8	N-89°-W	
SK-404	〃	2.19	1.04	4	N-7°-W	
SK-405	円形	1.05	0.99	5	-	
SK-406	〃	1.37	1.33	13	-	

遺構計測表18 IV区土坑2(SK-407~437)

遺構番号	平面形態	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	深さ(cm)		
SK-407	不整形	1.26	0.55	11	N-20°-E	
SK-408	不整円形	0.94	0.88	10	-	
SK-409	円形	0.94	0.94	11	-	
SK-410	楕円形	1.07	0.89	48	N-1°-W	
SK-411	隅丸方形	(1.58)	1.98	10	N-87°-W	
SK-412	楕円形	1.09	0.67	17	N-6°-W	
SK-413	隅丸方形	1.52	0.86	10	N-3°-E	
SK-414	円形	1.19	1.15	11	-	
SK-415	隅丸方形	3.10	2.12	9	N-1°-W	
SK-416	不整楕円形	1.28	0.96	12	N-23°-E	
SK-417	隅丸方形	2.22	0.81	30	N-8°-E	
SK-418	不整形	2.47	(1.73)	5	N-11°-E	
SK-419	〃	1.01	0.72	26	N-10°-E	
SK-420	不整円形	1.19	1.14	10	-	
SK-421	不整楕円形	1.25	0.81	7	N-8°-E	
SK-422	楕円形	1.27	0.90	8	N-25°-E	
SK-423	不整楕円形	1.24	0.96	10	N-27°-E	
SK-424	不整形	1.05	0.91	12	N-21°-E	
SK-425	円形	1.51	1.46	8	-	
SK-426	方形	1.41	0.82	8	N-84°-W	
SK-427	円形	1.21	1.21	34	-	
SK-428	方形	1.40	0.56	7	N-81°-W	
SK-429	不整形	1.60	0.83	23	N-82°-W	
SK-430	不整円形	3.04	2.94	15	N-88°-W	
SK-431	楕円形	(1.70)	(1.08)	60	N-48°-E	
SK-432	〃	2.10	(1.31)	58	N-72°-E	
SK-433	方形	2.08	0.56	7	N-86°-E	
SK-434	円形	1.35	1.26	26	-	
SK-435	不整形	1.30	0.85	13	N-10°-E	
SK-436	方形	1.30	0.73	39	N-74°-W	
SK-437	不整形	2.18	1.12	22	N-45°-W	

遺構計測表19 IV区溝跡1(SD-401~407)

遺構番号	形状	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		検出長(m)	幅(m)	深さ(cm)		
SD-401	東西溝	147.54	1.21~2.27	43~71	N-104°-W~N-92°-W	
SD-402	〃	148.51	0.73~1.62	20~39	N-106°-W~N-57°-W	
SD-403	南北溝	18.50	0.72~1.85	21~43	N-34°-W~N-29°-W	
SD-404	〃	8.54	0.53~1.02	2~6	N-9°-E	
SD-405	〃	7.84	0.85	4~7	N-1°-W	
SD-406	〃	3.60	0.74~0.98	3~7	N-178°-W	
SD-407	〃	6.20	0.57~1.02	2~8	N-2°-E	

遺構計測表 20 IV区溝跡2 (SD - 408 ~ 450)

遺構番号	形状	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		検出長 (m)	幅 (m)	深さ (cm)		
SD-408	南北溝	4.63	0.78~0.93	4~7	N - 3° - E	
SD-409	〃	2.33	0.35~0.38	6~9	N - 0° - E	
SD-410	〃	2.00	0.60~0.81	3	N - 173° - E	
SD-411	〃	8.55	0.28~0.51	5~9	N - 10° - E ~ N - 12° - W	
SD-412	東西溝	6.46	0.29~0.45	3	N - 73° - W	
SD-413	〃	7.90	0.23~0.43	4	N - 78° - W	
SD-414	〃	5.60	0.37~0.48	5~7	N - 78° - W	
SD-415	南北溝	9.32	0.45~0.65	4~14	N - 164° - W	
SD-416	〃	6.25	0.25~0.47	2~4	N - 13° - E	
SD-417	〃	10.86	0.18~0.31	2~8	N - 15° - E ~ N - 75° - W	
SD-418	〃	7.82	0.45~1.01	3~14	N - 174° - W	
SD-419	〃	26.55	0.18~0.33	4~10	N - 4° - W	
SD-420	〃	22.78	0.21~0.48	5~11	N - 2° - W	
SD-421	L字形	30.60	0.43~0.95	4~17	N - 2° - W	
SD-422	東西溝	9.31	0.36~0.51	4~7	N - 82° - W	
SD-423	南北溝	5.30	0.43~0.49	7~15	N - 160° - W	
SD-424	〃	8.42	0.23~0.51	4~7	N - 5° - E	
SD-425	L字形	27.80	0.28~0.54	8~14	N - 93° - E	
SD-426	南北溝	10.03	0.36~0.55	4~6	N - 7° - E	
SD-427	〃	12.11	0.47~0.65	5~8	N - 172° - W	
SD-428	東西溝	10.58	0.22~0.44	5~8	N - 88° - W	
SD-429	南北溝	14.60	0.75~0.93	4~8	N - 173° - W	
SD-430	〃	14.82	0.30~0.68	3~15	N - 6° - E	
SD-431	〃	17.76	0.60~1.00	4~17	N - 9° - E	
SD-432	〃	47.10	0.53~1.24	15~31	N - 15° - E	
SD-433	〃	5.00	0.60~0.90	8~19	N - 15° - E	
SD-434	〃	7.62	0.31~0.45	1~4	N - 9° - E	
SD-435	〃	6.98	0.40~0.46	3~6	N - 18° - E	
SD-436	〃	10.22	0.65~0.71	6~9	N - 6° - E	
SD-437	東西溝	41.70	0.29~0.38	7~14	N - 125° - W	
SD-438	〃	27.82	0.30~0.36	2~6	N - 118° - W ~ N - 90° - W	
SD-439	〃	16.80	0.24~0.77	5	N - 75° - W	
SD-440	南北溝	19.70	0.48~0.71	7~10	N - 1° - W	
SD-441	東西溝	10.52	0.20~0.22	4	N - 89° - E	
SD-442	〃	16.10	0.20~0.30	5~10	N - 93° - W	
SD-443	南北溝	9.50	0.21~0.36	4~9	N - 24° - W	
SD-444	〃	29.51	0.67~1.27	5~21	N - 46° - W	
SD-445	〃	12.50	0.39~0.63	9~18	N - 48° - W	
SD-446	〃	6.70	0.35~0.57	7~24	N - 149° - E	
SD-447	〃	1.23	0.30	6	N - 22° - W	
SD-448	〃	3.87	0.30	4~26	N - 31° - W	
SD-449	L字形	7.10	0.27	4	N - 49° - W	
SD-450	東西溝	2.99	0.52	4	N - 75° - E	

遺構計測表21 IV区畝状遺構(SU-401～411)

遺構番号	畝跡数 (本)	規模					主軸方向 (NはGN)	備考
		最大長(m)	畝間隔(m)	畝幅(m)	幅(cm)	深さ(cm)		
SU-401	3	4.60	1.42	1.05	30～50	1～8	N-9°-22°-E	
SU-402	3	6.60	0.76	0.45	20～55	2～9	N-9°-E～N-1°-W	
SU-403	3	3.25	1.50～2.00	0.90～1.60	20～55	2～8	N-82°-W	
SU-404	5	4.05	0.65～1.25	0.30～0.95	22～45	1～6	N-75°-W	
SU-405	8	1.50	0.65～1.15	0.30～0.80	25～36	1～5	N-8～11°-E	
SU-406	4	3.80	0.58	0.30	20～40	1～3	N-73～79°-W	
SU-407	2	5.10	3.93	3.55	30～42	2～3	N-20°-E	
SU-408	30	8.10	0.65	0.36	12～40	1～6	N-1～10°-E	
SU-409	25	4.25	0.48	0.27	13～40	1～7	N-67～78°-W	
SU-410	30	5.70	0.51	0.23	12～50	1～4	N-6～12°-E	
SU-411	3	2.40	0.58	0.33	18～41	1～7	N-79°-E	

遺構計測表22 V区土坑(SK-501～513)

遺構番号	平面形態	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	深さ(cm)		
SK-501	不整楕円形	2.82	1.82	45	N-32°-E	
SK-502	不整形	1.34	1.08	7	N-49°-E	
SK-503	不整楕円形	1.18	0.49	10～11	N-88°-E	
SK-504	〃	11.01	3.28	3～24	N-21°-W	
SK-505	円形	1.02	0.98	9	-	
SK-506	不整形	1.59	0.88	3～11	N-24°-W	
SK-507	〃	1.87	0.71	11～21	N-15°-E	
SK-508	〃	3.48	1.92	1～8	N-83°-E	
SK-509	〃	2.02	0.53	3～7	N-81°-W	
SK-510	〃	(2.52)	0.84	3～6	N-19°-W	
SK-511	不整楕円形	2.65	0.97	14～21	N-4°-W	
SK-512	〃	1.30	0.86	5	N-57°-E	
SK-513	〃	2.55	1.80	9	N-89°-W	

遺構計測表23 V区溝跡(SD-501～514)

遺構番号	形状	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		検出長(m)	幅(m)	深さ(cm)		
SD-501	東西溝	125.90	1.45～4.50	8～52	N-63°-W～N-97°-W	
SD-502	〃	140.90	0.81～5.20	9～56	N-25°-W～N-81°-W～N-95°-W	
SD-503	〃	39.76	0.30～0.91	10～27	N-68°-W	
SD-504	〃	39.84	1.50～5.20	10～36	N-70°-W	
SD-505	〃	15.00	0.90～1.60	10～13	N-53°-W	
SD-506	〃	41.30	2.20～5.26	6～30	N-81°-W	
SD-507	〃	3.87	0.26～0.50	3～7	N-53°-W	
SD-508	南北溝	5.84	0.28～0.95	4～24	N-37°-E	
SD-509	〃	3.83	0.30～0.60	4～15	N-26°-E	
SD-510	〃	4.97	0.39～1.42	3～19	N-1°-E	
SD-511	〃	17.59	0.38～0.52	5～28	N-166°-E～N-175°-W～N-174°-E	
SD-512	〃	21.64	0.67～1.20	22～43	N-161°-E	
SD-513	〃	20.47	0.55～1.10	5～18	N-154°-W	
SD-514	〃	11.11	0.26～0.50	6～12	N-177°-W	

遺構計測表 24 V区溝跡 (SD-515～543)

遺構番号	形状	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		検出長 (m)	幅 (m)	深さ (cm)		
SD-515	南北溝	6.18	0.30～0.50	5～20	N-18°-E	
SD-516	〃	3.99	0.59～0.69	7～14	N-160°-W	
SD-517	〃	7.38	0.56～0.87	4～11	N-162°-W	
SD-518	東西溝	67.16	0.12～0.83	2～15	N-72°-W	
SD-519	〃	73.36	0.20～2.50	12～22	N-75°-W～N-90°-W	
SD-520	南北溝	7.76	0.28～0.40	2～9	N-170°-E	
SD-521	L字形	48.09	0.53～1.18	17～43	N-83°-W～N-22°-W	
SD-522	東西溝	5.53	0.45～0.65	9～30	N-76°-E	
SD-523	南北溝	8.74	0.57～1.00	5～21	N-166°-W	
SD-524	〃	7.21	0.32～0.46	8～24	N-166°-W	
SD-525	〃	3.36	0.31～0.40	7～18	N-175°-W	
SD-526	〃	19.40	1.19～1.55	28～36	N-14°-E	
SD-527	〃	3.13	0.33～0.58	11～20	N-9°-W	
SD-528	〃	14.08	0.45～0.62	4～16	N-15°-E～N-4°-E	
SD-529	東西溝	5.66	0.30～0.64	4～8	N-110°-W	
SD-530	〃	8.11	0.34～0.80	5～11	N-99°-E	
SD-531	〃	4.26	0.42～0.63	9～13	N-80°-W	
SD-532	〃	8.38	0.30～0.53	3～10	N-83°-W	
SD-533	〃	31.46	0.18～0.34	4～17	N-71°-W～N-84°-W	
SD-534	〃	12.30	0.18～0.50	4～21	N-100°-E	
SD-535	〃	7.72	0.18～0.38	4～8	N-80°-W	
SD-536	〃	21.99	0.55～1.65	2～15	N-76°-W	
SD-537	南北溝	2.09	0.79～1.11	3～10	N-168°-W	
SD-538	東西溝	10.64	0.18～0.62	5～18	N-74°-W	
SD-539	南北溝	2.44	0.16～0.57	4～12	N-16°-E	
SD-540	〃	5.18	1.13～2.71	5～10	N-6°-E	
SD-541	東西溝	4.07	1.02～1.55	6～12	N-126°-W	
SD-542	南北溝	1.54	0.10～0.56	3～9	N-15°-E	
SD-543	〃	7.09	0.39～1.20	5～14	N-12°-E	

遺構計測表 25 V区畝状遺構 (SU-501～506)

遺構番号	畝跡数 (本)	規模					主軸方向 (NはGN)	備考
		最大長 (m)	畝間間隔 (m)	畝幅 (m)	幅 (cm)	深さ (cm)		
SU-501	31	11.24	0.78～0.86	0.50～0.56	10～44	1～35	N-9～17°-E	
SU-502	50	3.92	0.40～0.65	0.10～0.53	10～48	1～6	N-7～19°-E	
SU-503	11	5.42	0.51～1.01	0.32～0.85	13～33	1～6	N-68～76°-W	
SU-504	8以上	(0.77)	0.55	0.35	14～44	1～6	N-34°-E	
SU-505	7	(3.41)	0.50	0.32	11～26	2～8	N-50°-E	
SU-506	10以上	3.80	0.28～0.46	0.28～0.40	9～30	1～7	N-59°-W	

遺構計測表 26 V区性格不明遺構 (SX-501・502)

遺構番号	平面形態	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		長辺・長径 (m)	短辺・短径 (m)	深さ (cm)		
SX-501	不整形	7.70	5.30	10～26	-	
SX-502	不整形	16.43	5.02	23	-	

# 図版



## 主な撮影機材

### 1. 現場作業

Mamiya 645 PRO

Mamiya-SEKOR ZOOM 55～110mm F4.5

Mamiya-SEKOR MACRO 80mm F4.5

Mamiya RZ67 PRO II

Mamiya-SEKOR 50mm F4.5

### 2. 整理作業

NikonD3

Ai AF Micro Nikkor 60mm F2.8D

AF-S VR Micro Nikkor ED 105mm F2.8G

AF-S VR Zoom Nikkor ED 24～120mm F3.5～5.6G

AF-S Nikkor ED 70～300mm F1.45～5.6G

TOYO WEIGHT STAND81

COMET CX-124T

COMET CX-25 III H×2(ウェーハー・バンク付)

### 3. 画像処理と補正

現場写真はいずれもフィルムでスキャニングを外注し、自前で画像調整・補正して使用している。遺物写真は上記デジタルカメラで撮影したRAWデータをPhotoshopで現像した上で、画像調整・補正して使用している。

### Ⅲ 区







Ⅲ-1区 調査前全景(東より)



Ⅲ-4区 調査前全景(東より)

図版 2



Ⅲ-1区E 遺構検出状態(東より)



Ⅲ-1区E 遺構完掘状態(東より)



Ⅲ-1区E 遺構検出状態(西より)



Ⅲ-1区E 遺構完掘状態(西より)

図版 4



Ⅲ-1区E 遺構完掘状態(南上空より)



Ⅲ-1区E 遺構完掘状態(西上空より)



Ⅲ-1区E 東壁セクション(西より)



Ⅲ-1区E 下層確認トレンチセクション(南東より)

図版 6



Ⅲ-1区W 遺構検出状態(西より)



Ⅲ-1区W 遺構完掘状態(西より)



Ⅲ-1区W 遺構検出状態(東より)



Ⅲ-1区W 遺構完掘状態(南東より)

図版 8



Ⅲ-1区W 遺構完掘状態(上空より)



Ⅲ-1区W 遺構完掘状態(東上空より)



Ⅲ-1区W 下層確認トレンチセクション(北東より)



Ⅲ-1区W 下層確認トレンチセクション(東より)

図版 10



Ⅲ-3～5区 遺構検出状態(東より)



Ⅲ-3～5区 遺構完掘状態(東より)



Ⅲ-3・4区 遺構完掘状態(上空より)



Ⅲ-3～5区 遺構完掘状態(東上空より)

図版 12



Ⅲ-4区E 遺構検出状態(西より)



Ⅲ-4区E 遺構完掘状態(西より)



Ⅲ-4区E 遺構検出状態(北東より)



Ⅲ-4区E 遺構完掘状態(北東より)

図版 14



Ⅲ-4区E 遺構完掘状態(西上空より)



Ⅲ-4区E 中央バンクセクション(東より)



SK-301 (南より)



SD-3002 (西より)

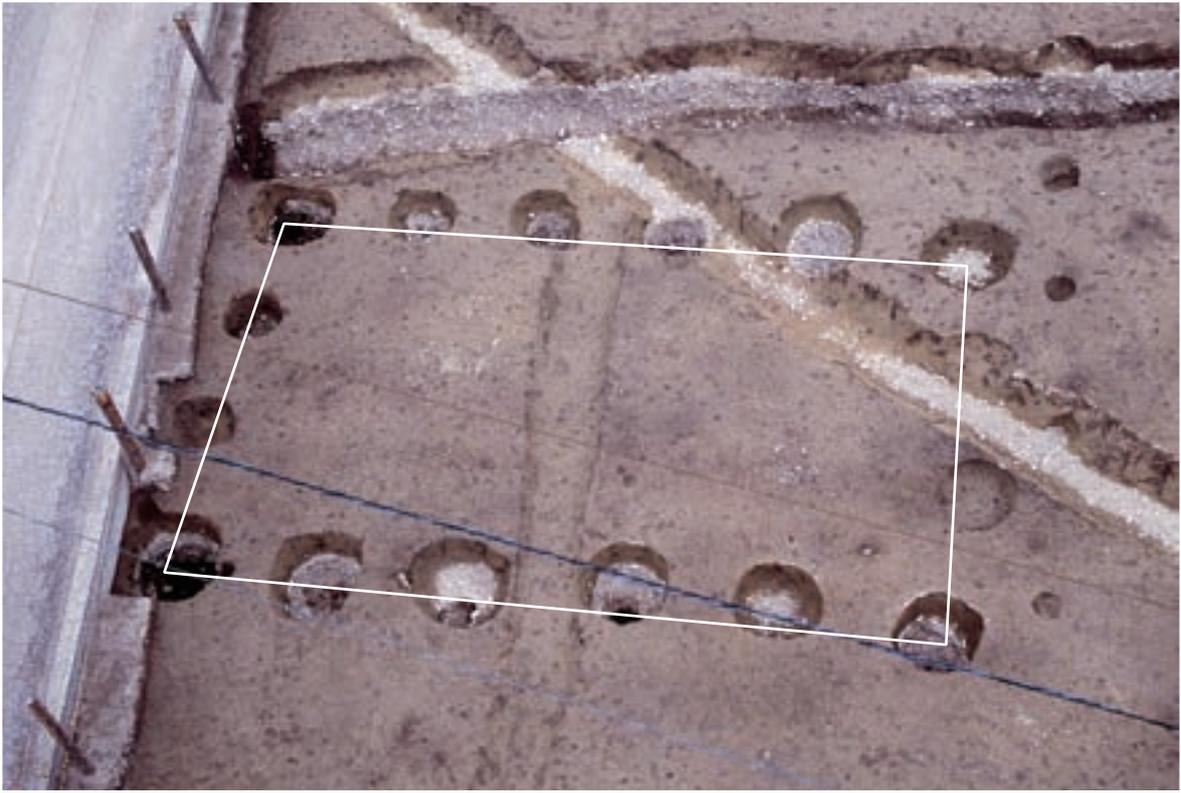
図版 16



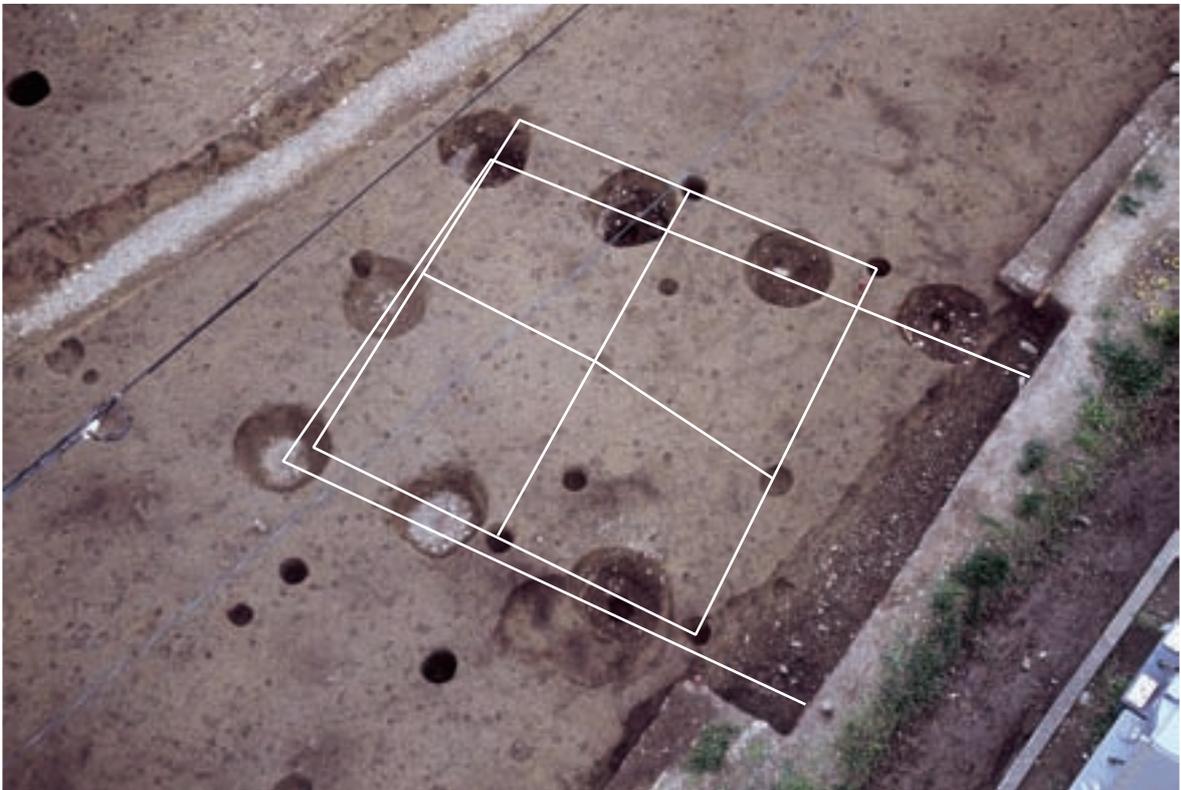
SD-3002・3003 (東より)



SD-3008・3025 (北西より)



SB-302 (南より)



SB-303・322 (南西より)



SB-305 (北西より)



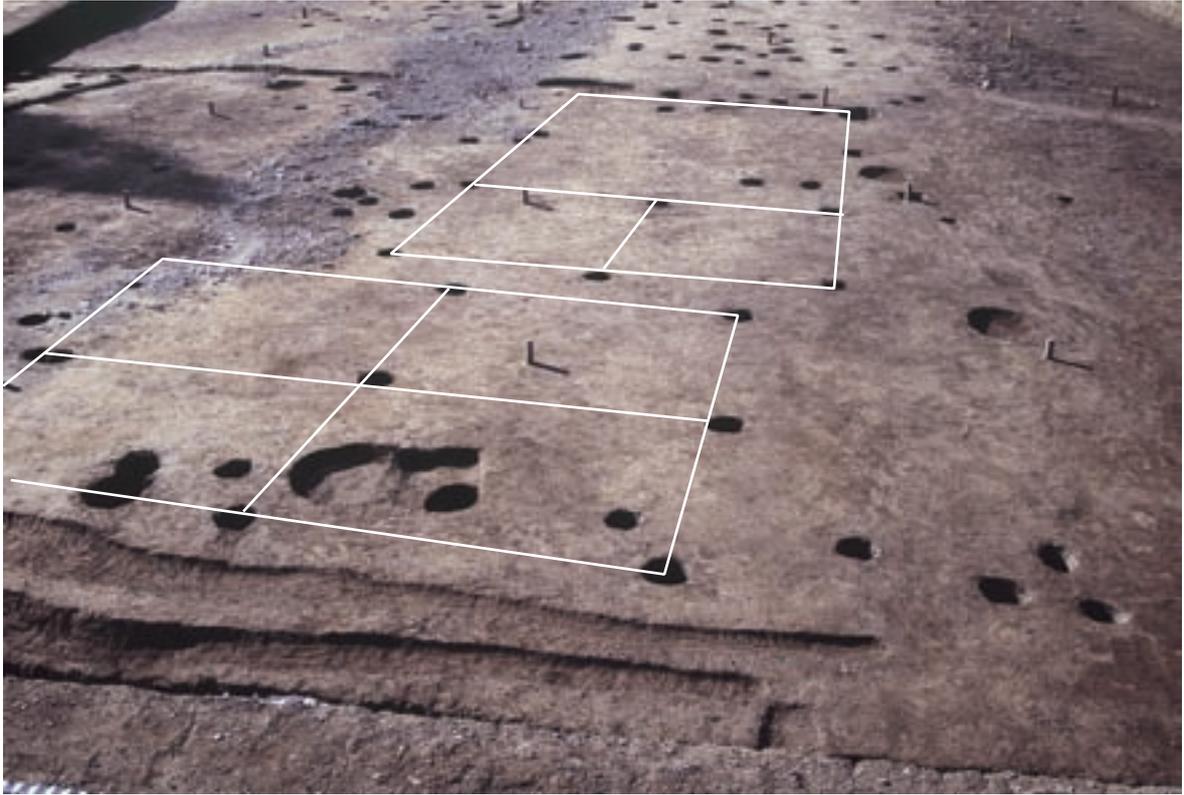
SB-306 (北より)



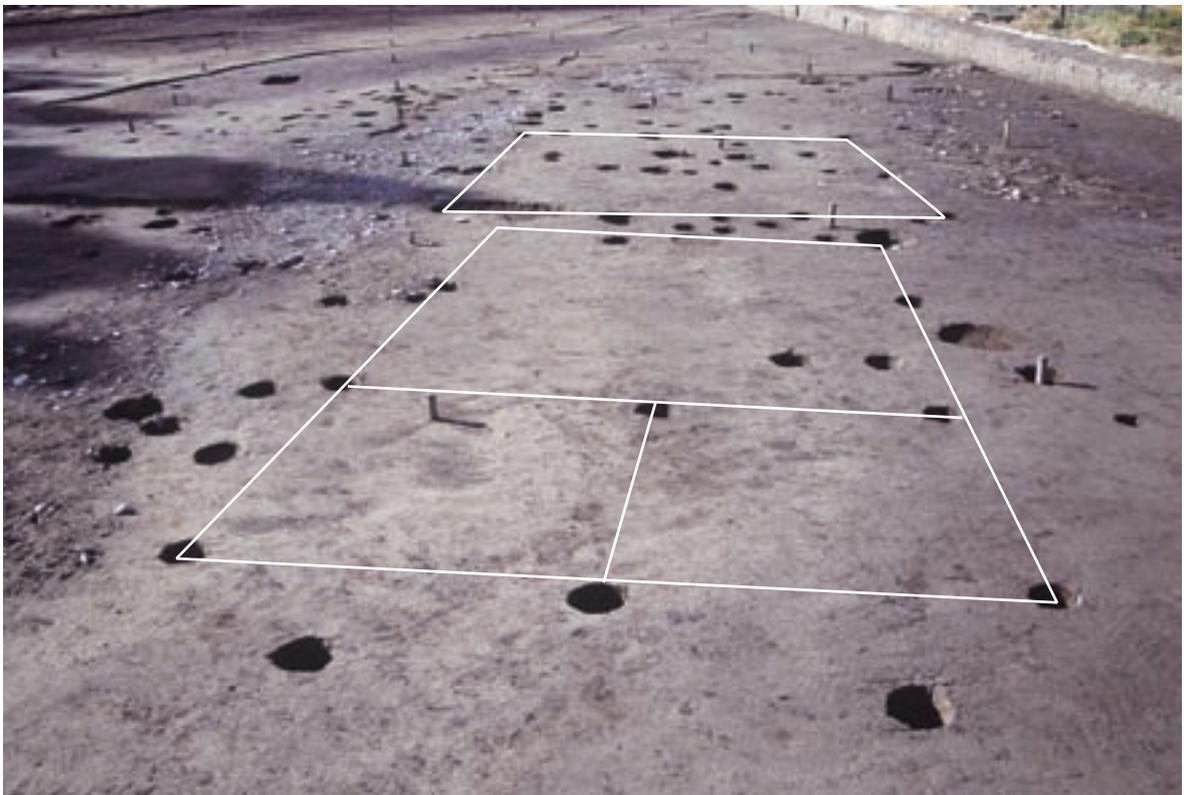
SB-307・308(北より)



SB-308(北より)



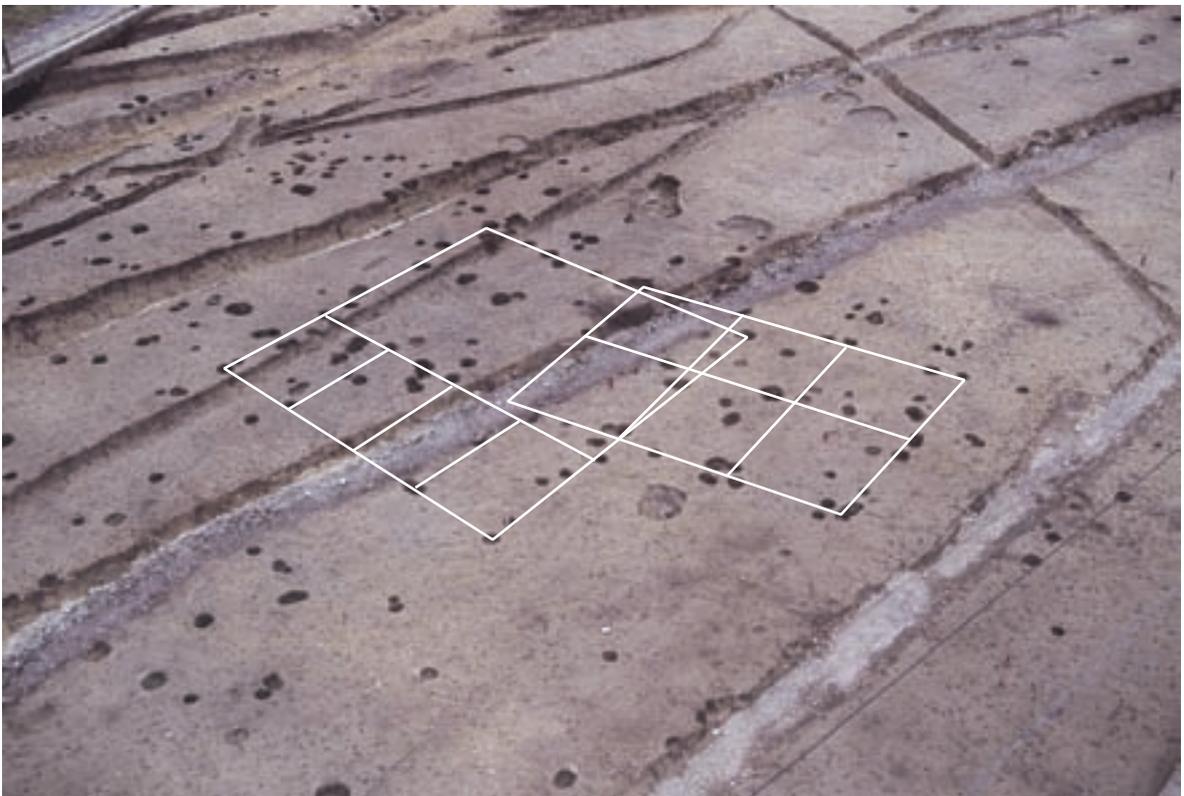
SB-312・313(東より)



SB-313・314(東より)



SB-314 ~ 316 (東より)



SB-320・321 (南西より)



SK-356 (北より)



SK-356 (南より)



SD-3023・3034(西より)



SK-304, SD-3004・3018・3024・3025・3034(西より)

図版 24



SD-3007・3008・3018・3024・3034 (西より)



SD-3054・3084 (東より)



SK-302 (北より)



SK-303 (南より)



SD-3001 (西より)



SD-3002 (東より)



SD-3002・3069 (東より)



SD-3002 弥生土器甕 (3090) 出土状態



SD-3002 ミニチュア土器 (3097) 出土状態



SD-3002 石製品石庖丁 (3098) 出土状態

図版 26



SD-3003 (西より)



SD-3003・3004 (東より)



SD-3003・3022 (西より)



SD-3003・3022・3069 (西より)



SD-3004・3005 (東より)



SD-3004・3025 (東より)



SD-3008 (西より)



SD-3008・3009 (西より)



SD-3018 土師器甕 (3127) 出土状態



SD-3018 土師器甕 (3132) 出土状態



SD-3018 土師器甕 (3133) 出土状態



SD-3018 須恵器杯蓋 (3141) 出土状態



SD-3018 須恵器杯身 (3149) 出土状態



SD-3018 須恵器杯身 (3150) 出土状態



SD-3018 須恵器提瓶 (3155) 出土状態



SD-3020 須恵器椀 (3161) 出土状態



SB-325 土師質土器小皿 (3183) 出土状態



SA-302 ~ 304 (東より)



SK-311, SD-3003 (西より)



SK-311 土師質土器杯 (3192) 出土状態



SK-314 (北より)



SK-322 (南より)



SK-331 (東より)



SK-342 土師質土器杯 (3202) 出土状態



SK-349 (東より)



SK-356 (南より)



SK-356 土師質土器小皿 (3208・3209) 出土状態



SB-307, SK-356 (東より)



SK-356 (南より)



SK-357 (北より)



SK-357 土師質土器杯 (3211) 出土状態



SK-358 (北より)

図版 30



SD-3022 (西より)



SD-3023 (西より)



SD-3024 (東より)



SK-310, SD-3024 (西より)



SD-3026 ~ 3029 (北西より)



SD-3026 ~ 3029 (南より)



SD-3024・3034 (東より)



SD-3018・3034・3072 (西より)



SD-3034 土師器羽釜 (3274) 出土状態



SD-3034 須恵器椀 (3285) 出土状態



SD-3034 須恵器高杯 (3289) 出土状態



SD-3034 須恵器短頸壺 (3290) 出土状態



SD-3034 土師質土器小杯 (3302) 出土状態



SD-3034 土師質土器小杯 (3305) 出土状態



SD-3034 土師質土器椀 (3326) 出土状態



SD-3034 土師質土器椀 (3327) 出土状態

図版 32



SD-3034 土師質土器椀 (3341) 出土状態



SD-3050 土師器高杯 (3351) 出土状態



SD-3053 (西より)



SD-3054 (西より)



SD-3054 (東より)



SD-3054・3056 (西より)



SD-3054・3058・3061 (西より)



SD-3055 須恵器杯身 (3380) 出土状態



SD-3055 (西より)



SD-3055 (西より)



SD-3055・3086 (東より)



SD-3055 (東より)



SD-3055・3088 (西より)



SD-3058 (東より)



SD-3059 (西より)



SD-3067 (南より)

図版 34



SK-316, SD-3069 (西より)



SD-3069 (南より)



SD-3070 (北より)



SD-3031・3071 (北西より)



SD-3076 (東より)



SD-3086 (北東より)



SD-3089 (北より)



SD-3091 (西より)



SD-3093 (東より)



SD-3102・3103 (東より)



SD-3107・3108 (西より)



SD-3111 (西より)



SD-3112 (西より)



SD-3113 (南より)



SD-3114 (南より)



SD-3116 (南より)



P-307 土師質土器小皿 (3478) 出土状態



P-322 土師質土器小皿 (3475) 出土状態



P-365 土師質土器杯 (3447) 出土状態



P-371 土師質土器碗 (3506) 出土状態



SK-364 (西より)



SK-365 (北より)



SE-301 (北西より)



SE-302 (西より)

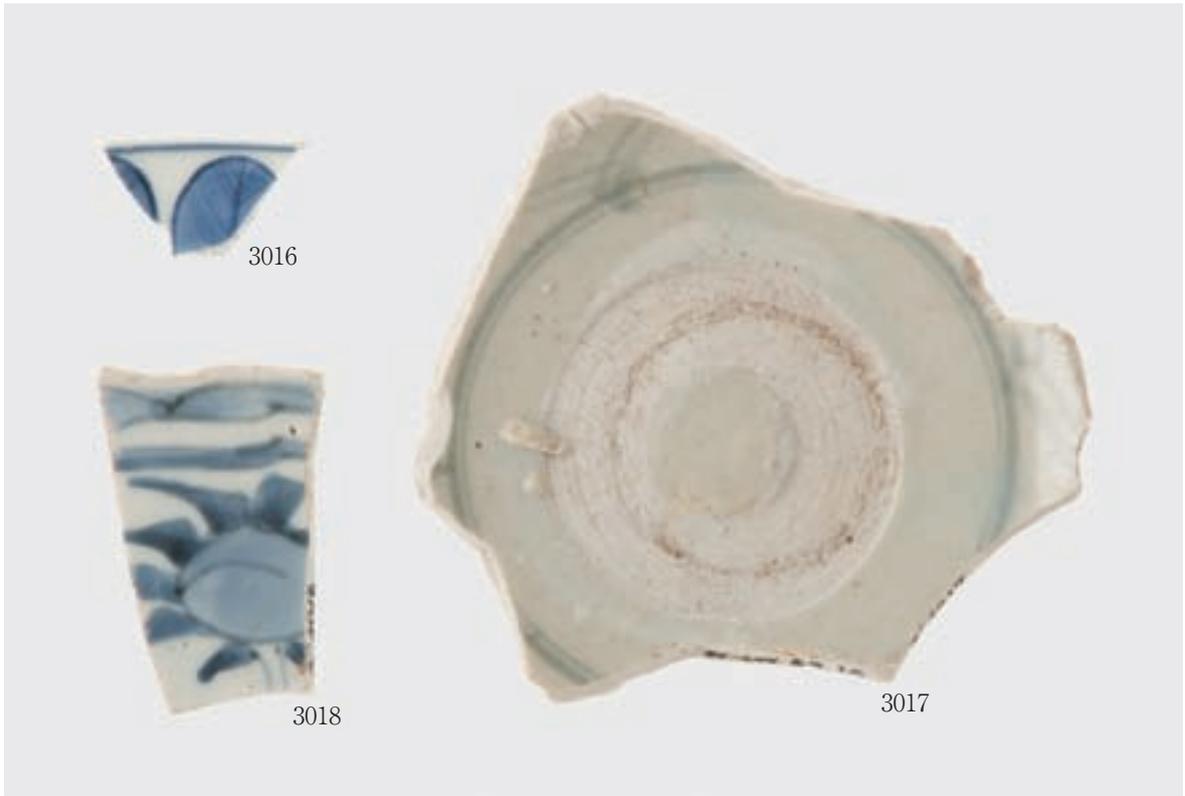


土師質土器(杯・小皿)



青磁(皿), 肥前系陶器(碗)

图版 38



肥前系磁器(碗·皿·稜花鉢)



能茶山焼(広東茶碗), 近世陶器(碗)



弥生土器(壺), 土師器(甕・杯)



土師質土器(杯・小皿)

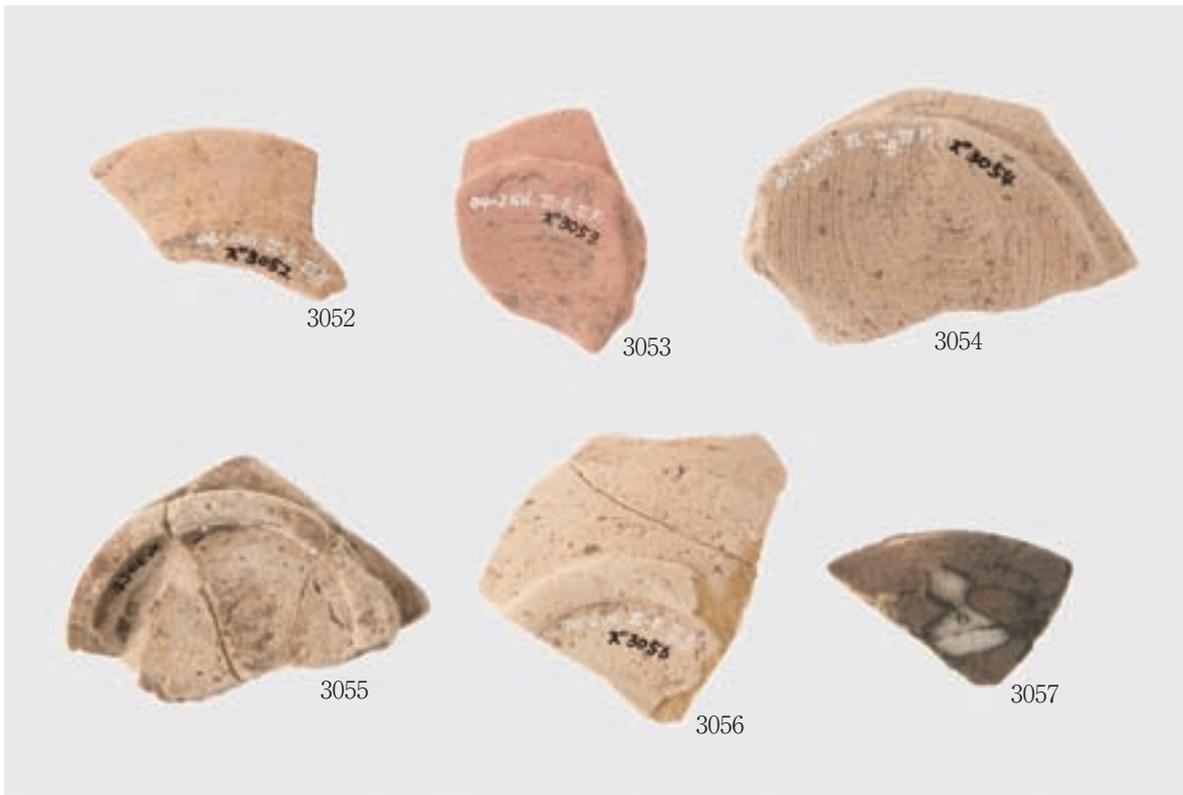
图版 40



青磁(碗·皿), 青花(皿)



須惠器(杯蓋·杯身·提瓶·短頸壺·甕)



土師質土器(杯・椀・小皿), 瓦器(小皿)



弥生土器(壺・甕)



弥生土器 (甕・ミニチュア土器)



弥生土器 (壺・甕)



弥生土器(甕)

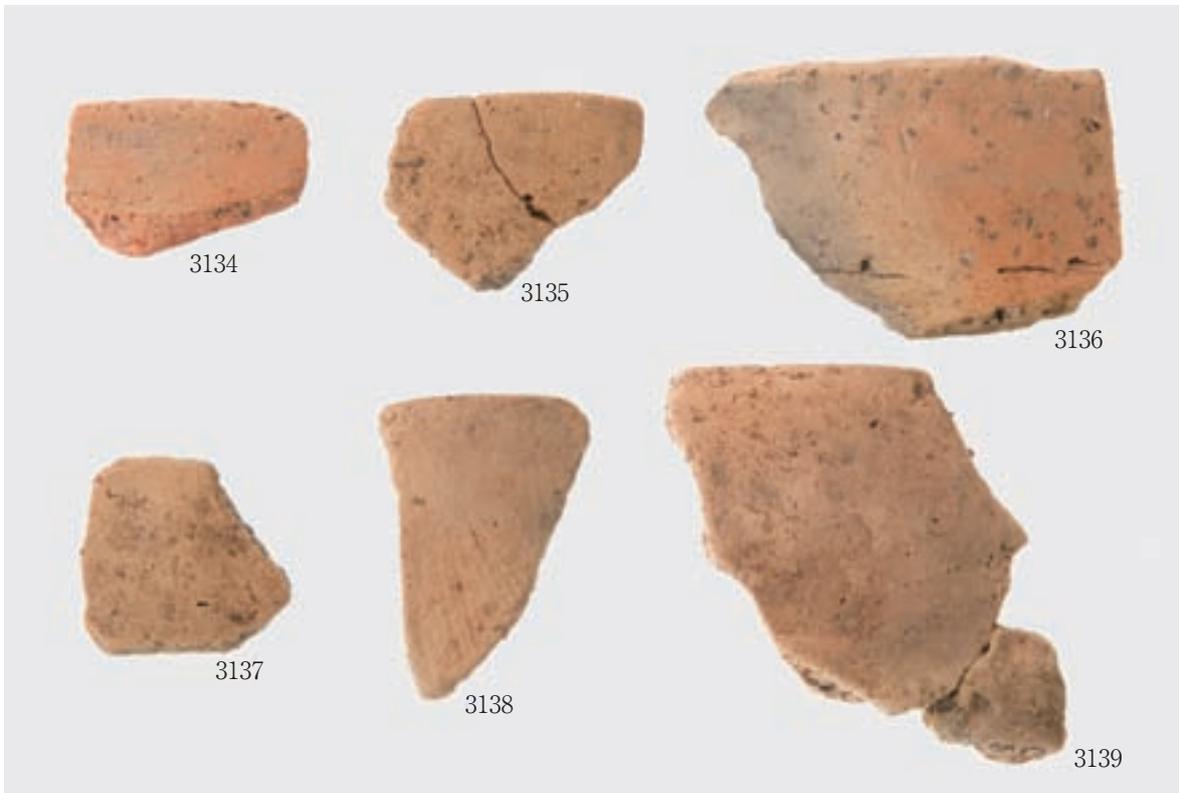


弥生土器(壺・甕)

図版 44



土師器(甕)



土師器(甕)



須恵器 (杯蓋・杯身)



弥生土器 (甕), 須恵器 (高杯・甕・鉢)



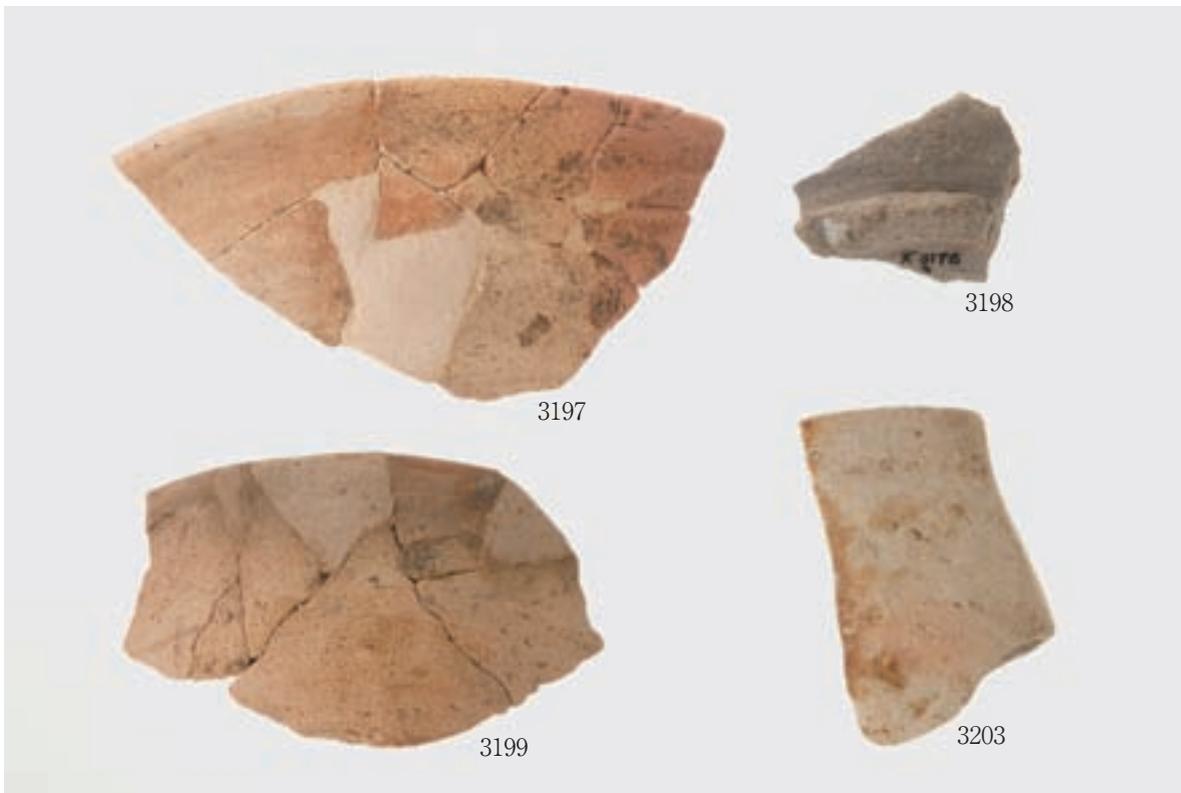
土師質土器(杯・碗・小皿), 瓦器(小皿)



土師質土器(杯・小皿), 瓦器(碗)



土師質土器(杯), 瓦器(椀)



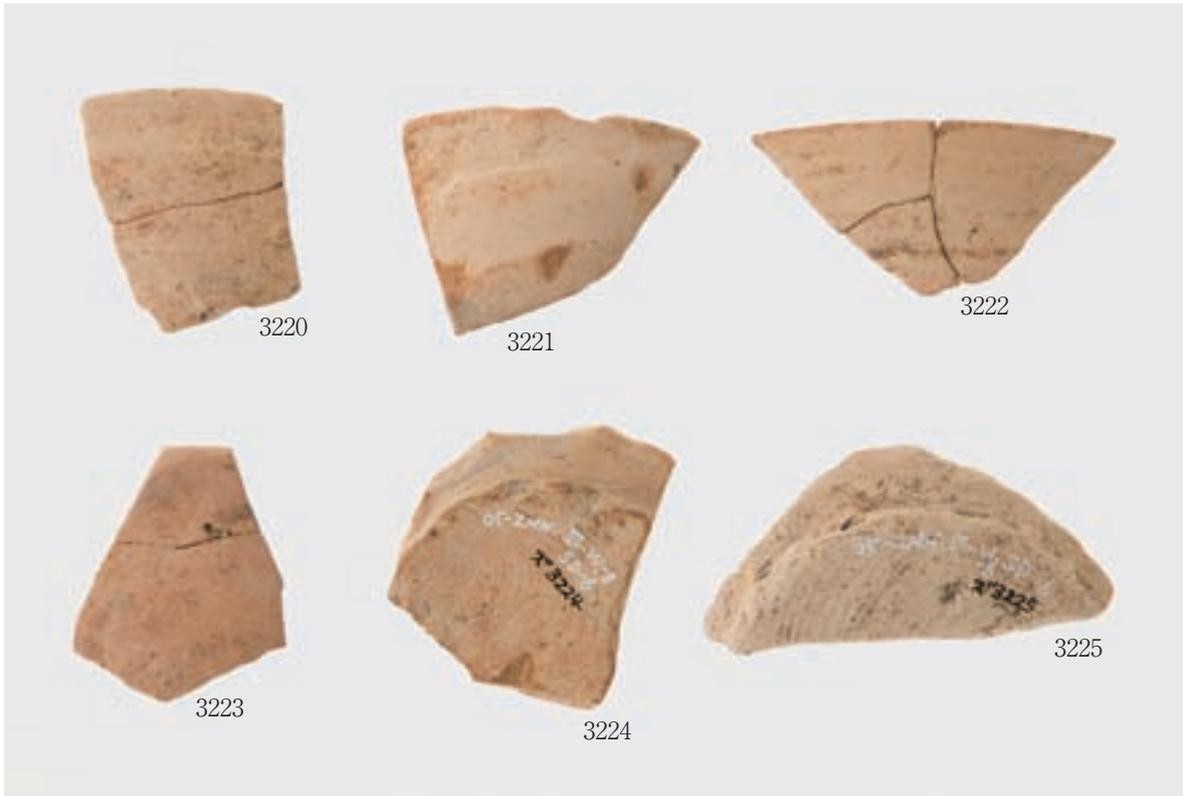
須恵器(壺), 土師質土器(椀), 瓦器(椀)



土師器(羽釜), 須恵器(杯身), 土師質土器(杯)



弥生土器(甕), 須恵器(高杯), 黑色土器(椀)



土師質土器(杯)



土師質土器(杯)



土師質土器(杯・小皿・碗)



土師器(甕), 須恵器(甕)



土師質土器(杯)



土師器(甕), 須恵器(杯身・甕), 瓦器(椀)



須恵器(壺・甕), 瓦器(椀), 瓦質土器(壺)



土師器(甕)



土師器(甕)



土師器(甕・羽釜)

図版 54



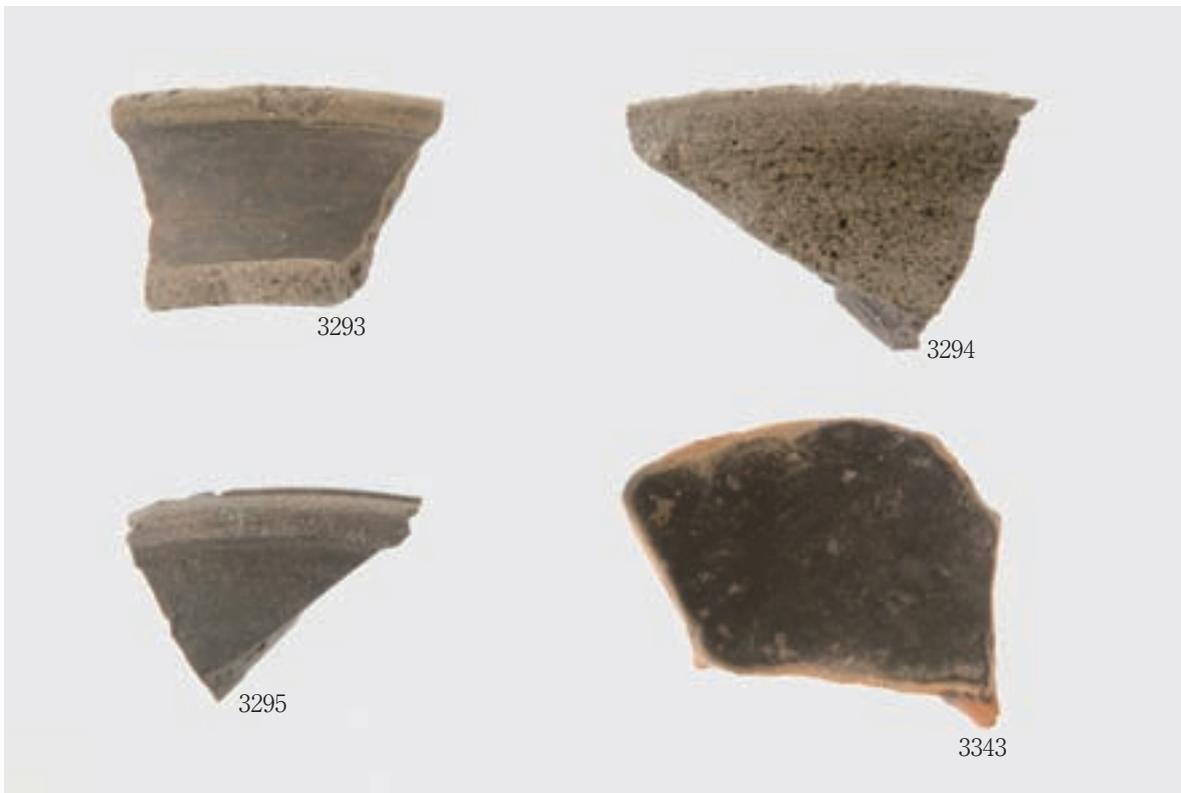
土師器(羽釜)



土師器(高杯・羽釜)



須恵器 (杯蓋・杯身・甕)



須恵器 (甕), 黒色土器 (椀)



土師質土器(杯・小杯)



土師質土器(皿・小皿)



土師質土器(碗)



土師質土器(碗), 黒色土器(碗)

図版 58



須恵器(杯蓋・杯身・壺)



土師質土器(椀・小皿)



土師質土器(碗)



須恵器(高杯・台付長頸壺・甕)

図版 60



須恵器(台付長頸壺), 土師質土器(杯), 瓦器(椀), 瓦質土器(三足鍋), 青磁(碗), 石製品(磨石)



須恵器(杯蓋・杯身), 土師質土器(杯・小皿), 瓦器(椀), 瓦質土器(羽釜)



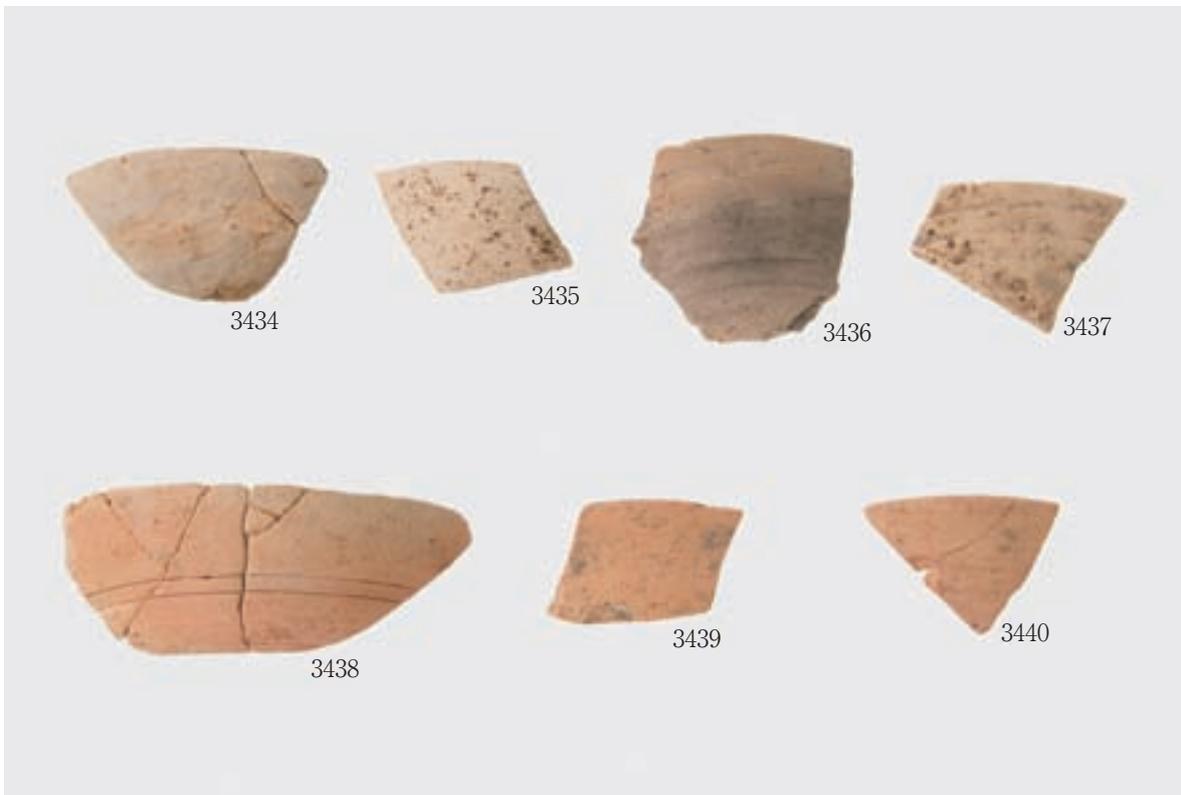
土師器(甕), 土師質土器(杯), 石製品(磨石)



須恵器(杯身・杯・碗・高杯)



須恵器(壺・甕・鉢)



土師質土器(杯)



土師質土器(杯)



土師質土器(杯)

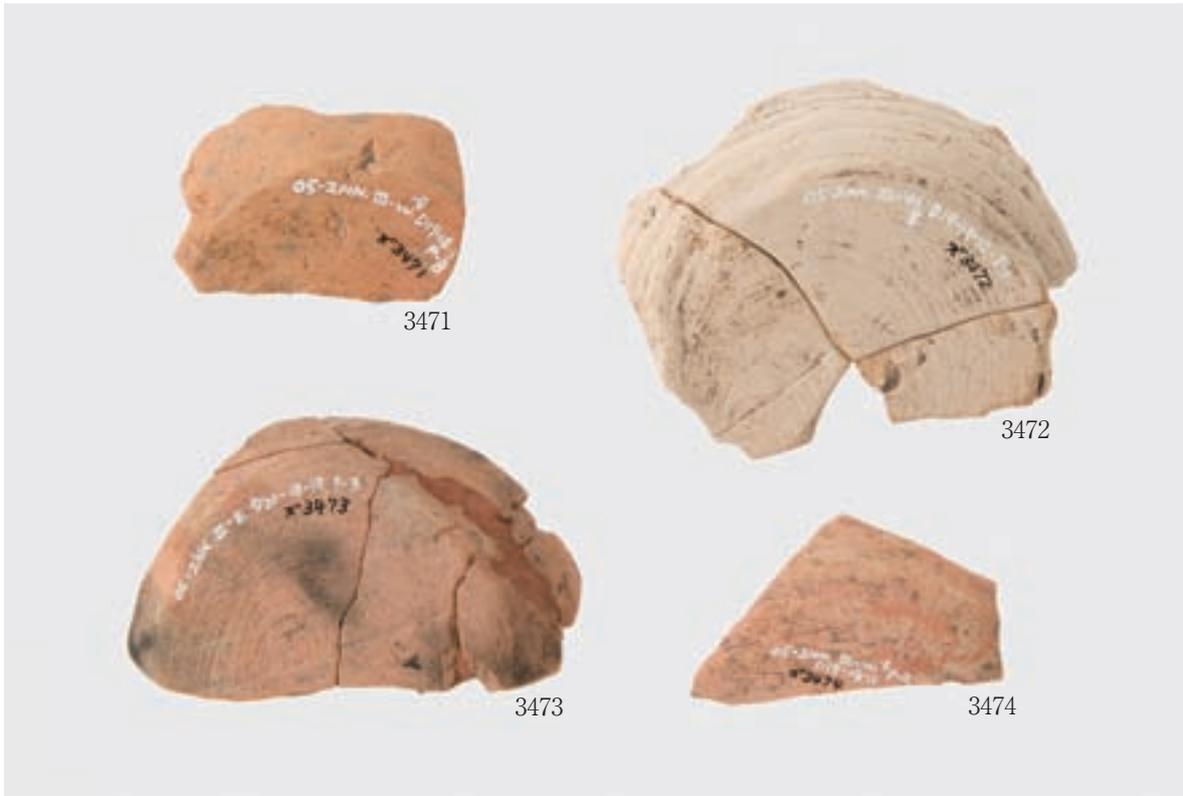
図版 64



土師質土器(杯)



土師質土器(杯)



土師質土器(杯)



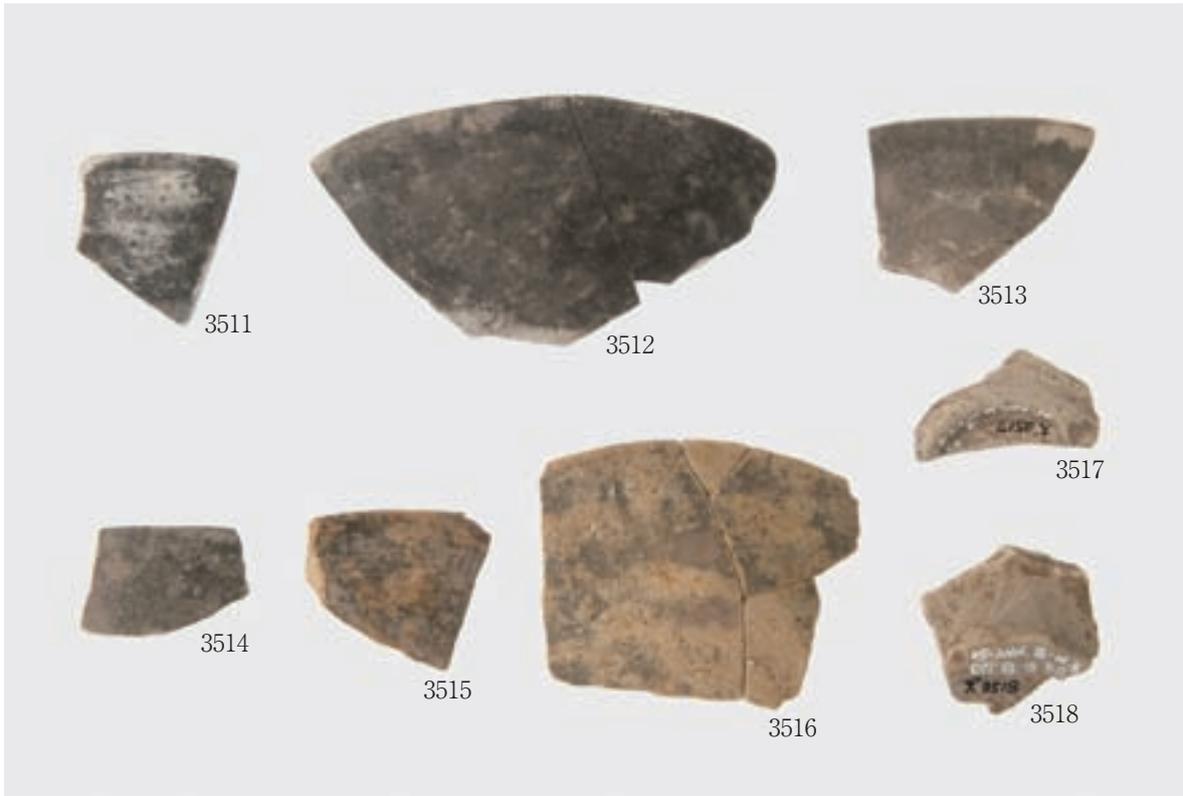
土師質土器(小皿)



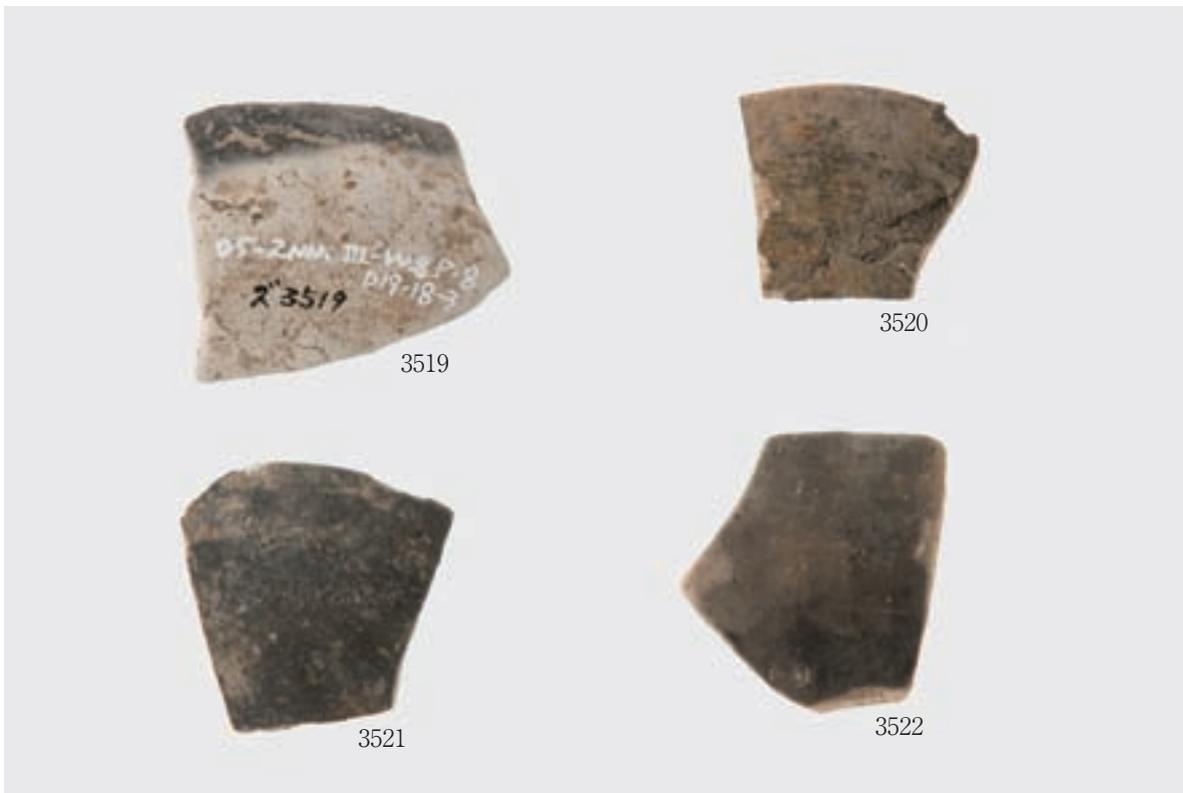
土師質土器(椀)



土師質土器(椀)



瓦器(碗)



瓦器(小皿)



土師器(甕), 土師質土器(椀), 肥前系陶器(皿)



肥前系磁器(皿), 肥前系陶器(壺), 近世以降陶器(碗), 石製品(砥石)



弥生土器(壺・甕・鉢), 土師器(甕), 石製品(小型蛤刃石斧・叩石・磨石)



弥生土器(壺・甕), 土師器(甕)



土師器(甕), 須恵器(提瓶・甕), 石製品(叩石・磨石)



土師器(高杯), 須恵器(椀・高杯), 石製品(扁平片刃石斧・投弾・叩石)



土師器(甕・甌), 須恵器(杯身・高杯), 瓦質土器(三足釜), 石製品(石臼), 木製品

图版 74



弥生土器(壺・甕), 東播系須恵器(片口鉢), 青磁(碗), 石製品(叩石・磨石)



弥生土器(壺・甕・ミニチュア土器), 石製品(投弾・磨石)

图版 76



弥生土器(壺・甕・鉢), 須恵器(高杯), 瓦器(椀), 白磁(碗), 石製品(磨石)



3290



3291



3348

3349



3352



3358



3385



3386

3387



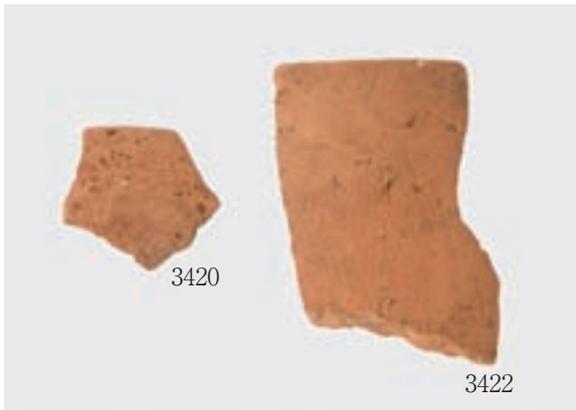
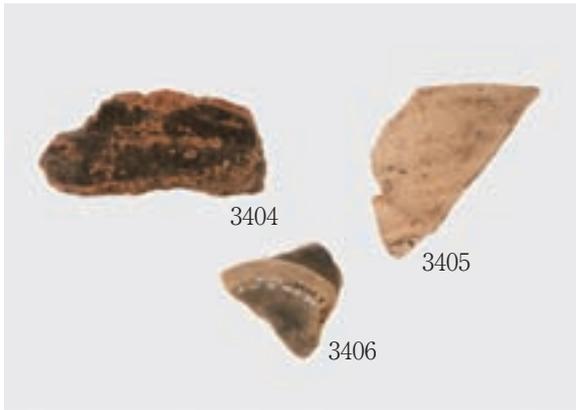
3391

3392

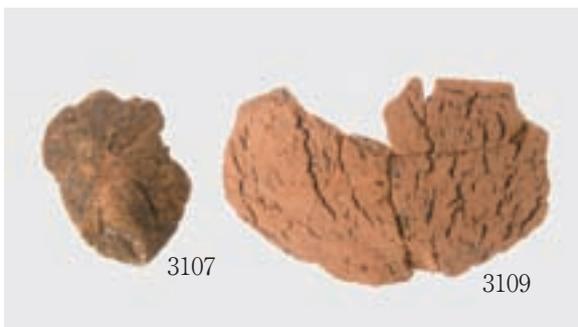
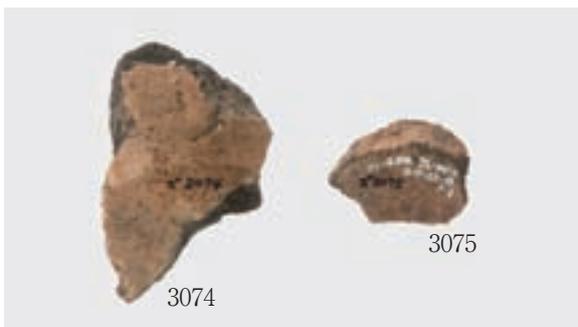
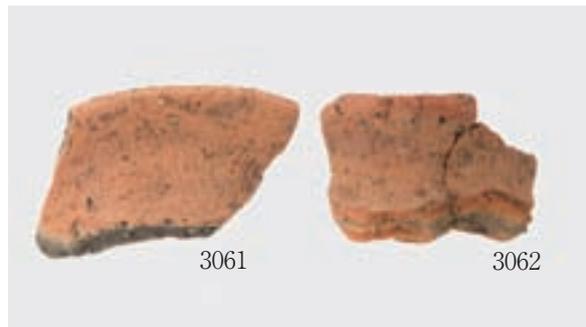
3394

土師器(甕), 須恵器(高杯・長頸壺・短頸壺), 土師質土器(杯), 灰釉陶器(椀), 瓦器(椀), 石製品(叩石・磨石・砥石)

图版 78



土師器(甕・皿・甑), 須惠器(杯蓋・杯身・高杯・壺・甕), 土師質土器(杯), 黑色土器(碗), 瓦質土器(羽釜), 土製品(土錘)



弥生土器(壺・甕・鉢), 土師器(小皿), 須恵器(皿・短頸壺), 土師質土器(椀・小皿), 瓦器(椀), 石製品(石庖丁)

图版 80



弥生土器(壺・甕), 須恵器(杯蓋・杯身・壺・甕), 金属製品(刃鎌)



土師器(甕), 須恵器(鉄鉢), 土師質土器(杯・碗・小皿), 瓦器(碗・小皿)

図版 82



土師質土器(杯・小皿)



弥生土器(細頸壺), 須恵器(杯身・椀), 土師質土器(杯・椀・小皿)



須惠器(碗・高杯), 土師質土器(小杯)



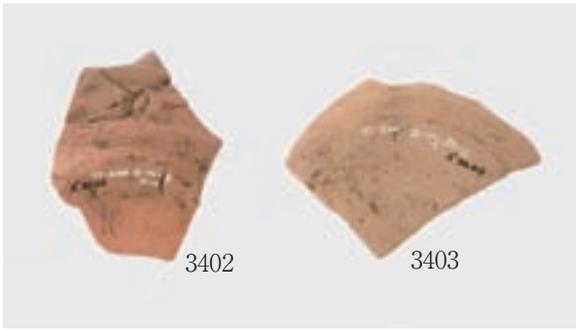
土師質土器(小杯・碗・皿)



弥生土器(甕), 土師器(羽釜), 土師質土器(杯・椀・小皿), 灰釉陶器(椀), 瓦器(椀), 東播系須恵器(椀)



土師器(甕・皿), 須恵器(杯身・皿), 土師質土器(杯・碗・小皿), 瓦器(碗), 白磁(碗), 青磁(皿)



土師質土器(杯·小皿)



土師質土器(小皿)

图版 90



土師質土器(碗), 瓦器(碗), 東播系須恵器(片口鉢), 白磁(合子・小壺), 青磁(碗), 肥前系磁器(碗・瓶), 奈半利焼(蓋), 近世磁器(稜花皿)

# IV 区







IV区E 遺構検出状態(東より)



IV区E 遺構完掘状態(東より)



IV区E 遺構検出状態(西より)



IV区E 遺構完掘状態(西より)



IV区W 遺構検出状態(東より)



IV区W 遺構完掘状態(東より)



IV区W 遺構検出状態(東より)



IV区W 遺構完掘状態(東より)



IV区E 遺構完掘状態(北上空より)



IV区W 遺構完掘状態(北上空より)



SD-401 (西より)



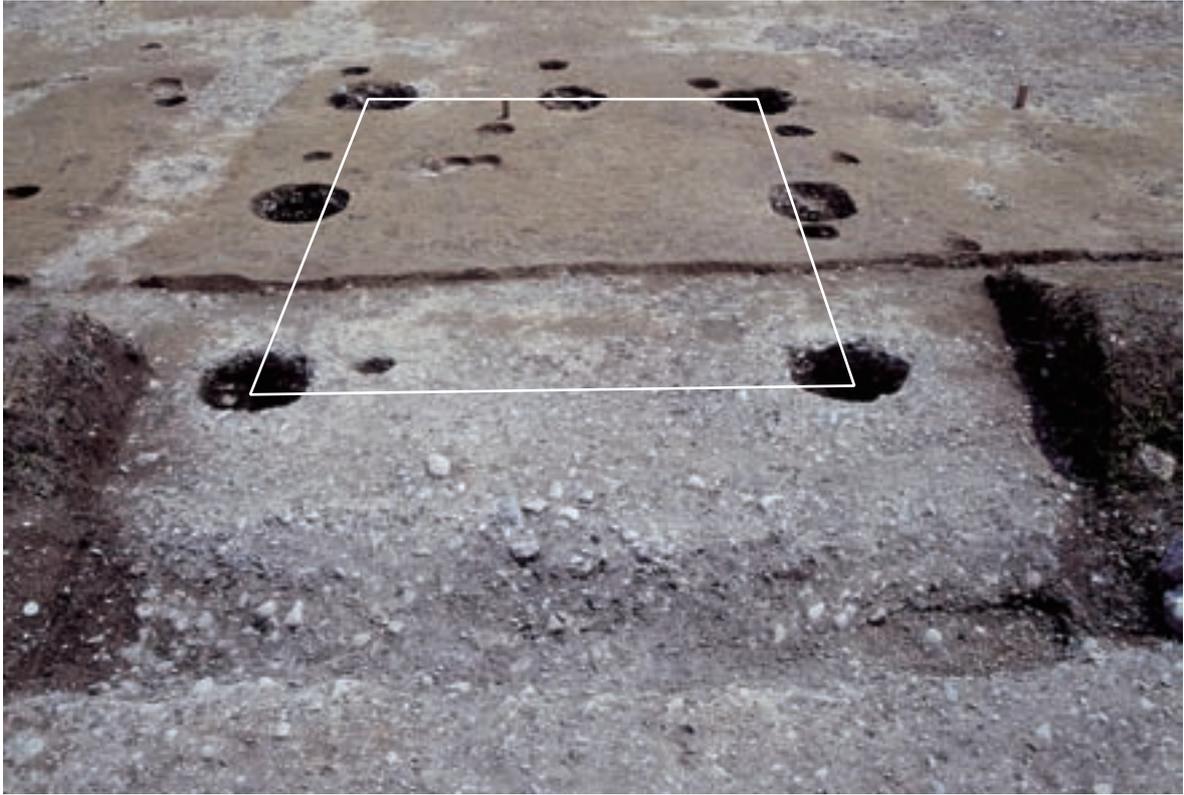
SD-402 (西より)



SD-401 (北より)



SD-401 弥生土器壺(4019) 出土状態



SB-401 (北より)



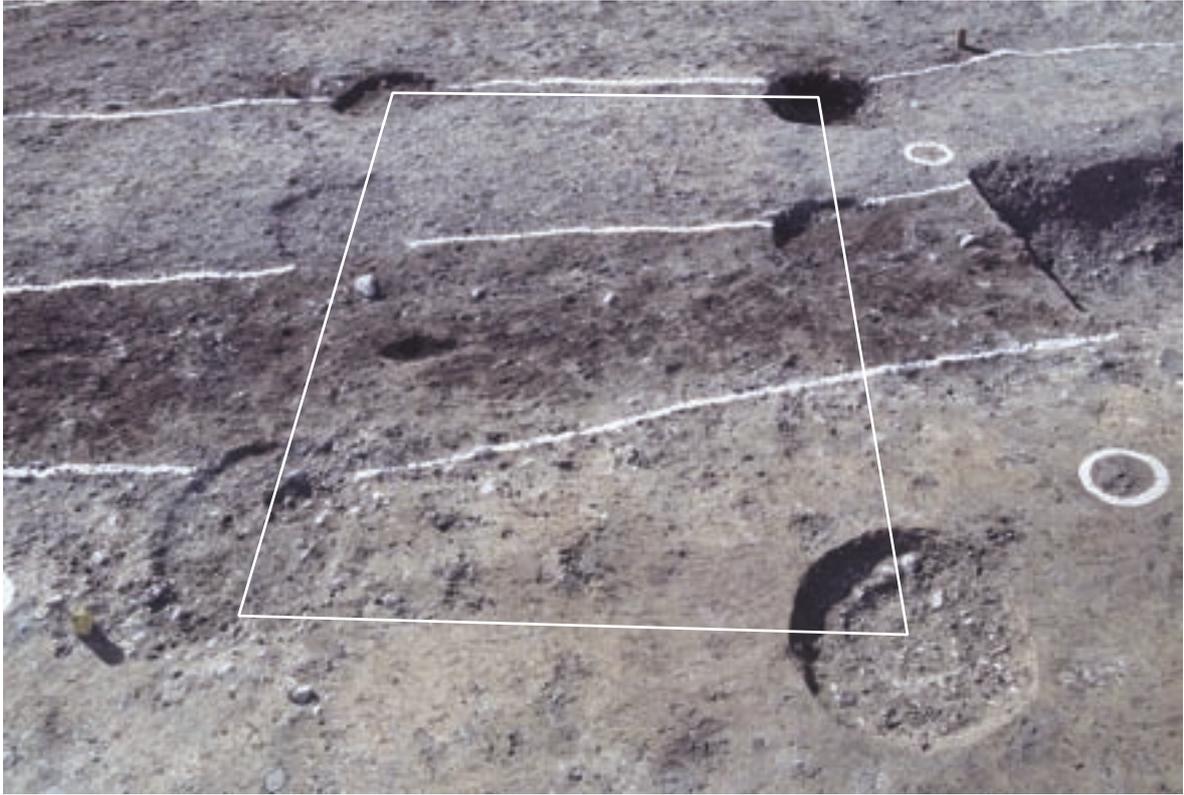
SB-402 (北より)



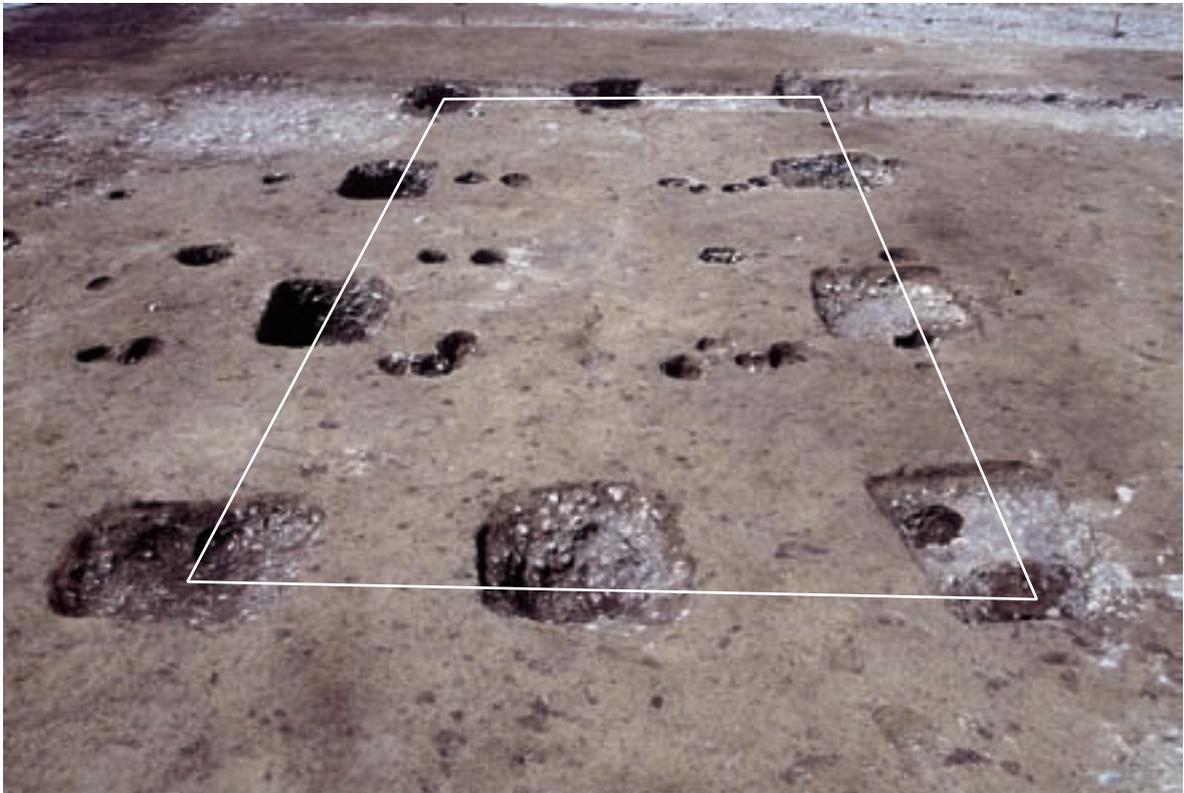
SB-403 (北西より)



SB-404 (西より)



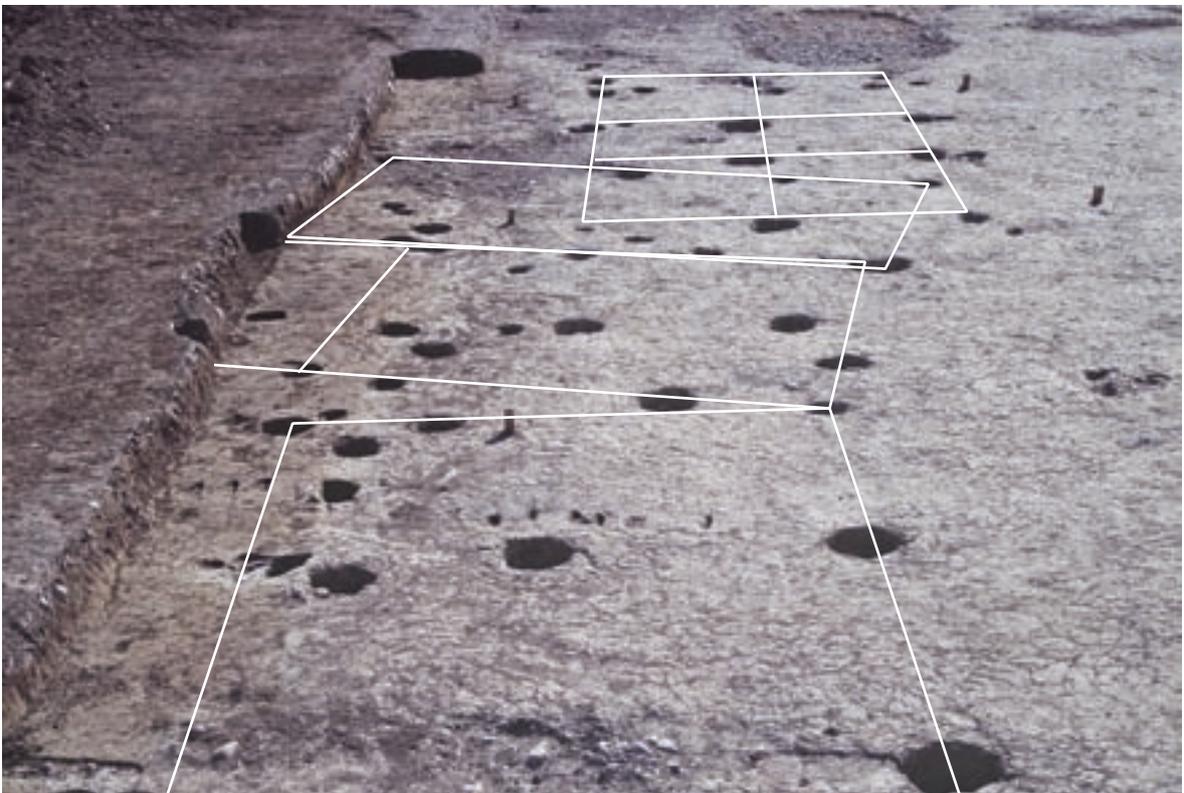
SB-405 (北より)



SB-407 (東より)



SB-411 土師質土器小皿 (4108) 出土状態



SB-409・410・420・421 (北より)



SK-419 土師質土器小杯 (4123・4124) 出土状態



SK-421 土師質土器杯 (4125) 出土状態



SK-423土師質土器杯(4126)出土状態



P-402土師質土器小皿(4131)出土状態

図版 104



IV区E 下層確認トレンチセクション(西より)



IV区W 下層確認トレンチセクション(東より)



SD-402(東より)



SD-402(西より)



SB-415(北西より)



SB-416(北より)



SK-410(南より)



SK-423(南より)



SK-426 (西より)



SK-427 (南より)



SD-405 (南より)



SD-411 (南より)



SD-415 (南より)



SD-418 (南より)



SD-421 (南より)



SD-425 (東より)

図版 106



SD-432 (南より)



SD-432・433 (南より)



SD-440 (南より)



SD-446 (南より)



SD-446 (南より)



SD-448 (南より)



SU-408 (東より)



SU-410 (東より)



土師質土器(杯), 青磁(碗), 肥前系磁器(皿), 瀬戸・美濃系陶器(皿), 近世陶器(碗)



弥生土器(壺)



弥生土器(甕)



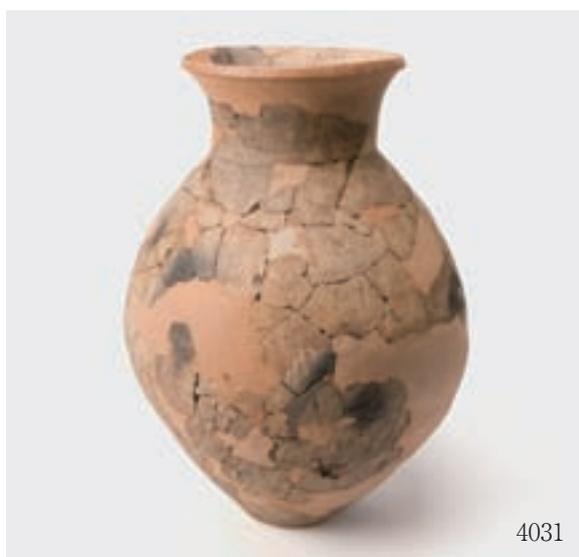
弥生土器(甕)



弥生土器(甕)



土師質土器(杯・椀), 瓦器(椀)



弥生土器(壺)



4033



4036



4052



4059



4069



4071

弥生土器(壺・甕)



弥生土器(甕), 石製品(小型両刃石斧・大型蛤刃石斧・磨石)



石製品(叩石・磨石・砥石)

図版 114



弥生土器(甕), 須恵器(短頸壺), 土師質土器(杯), 瓦質土器(羽釜), 石製品(石鏃・石帯)



弥生土器(壺)

图版 116



弥生土器(壺・甕)



弥生土器(壺・器台), 瓦(丸瓦), 石製品(打製石鎌・投彈・叩石・磨石)

图版 118

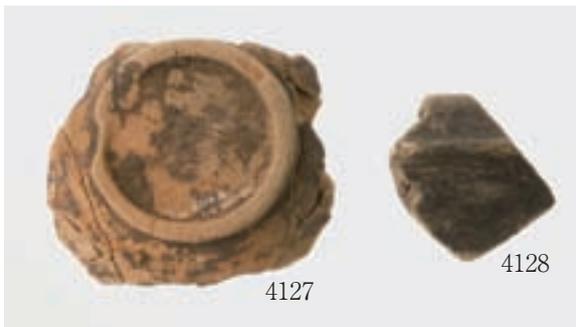


弥生土器(壺・甕), 須惠器(高杯), 須惠質土器(播鉢)



弥生土器(甕), 土師質土器(高杯・小皿), 石製品(石庖丁)

图版 120



土師質土器(杯·小杯·碗·小皿), 瓦質土器(羽釜)

# V 区







V-1区 遺構検出状態(東より)



V-1区 遺構完掘状態(東より)



V-1区 遺構検出状態(西より)



V-1区 遺構完掘状態(西より)



V-1区 南部東壁セクション(西より)



V-1区 東部北壁セクション(南より)



V-1区 北部下層確認トレンチセクション(西より)



V-1区 北部下層確認トレンチセクション(東より)



V-2区 上面遺構検出状態(東より)



V-2区 上面遺構完掘状態(東より)



V-2区 下面遺構検出状態(東より)



V-2区 下面遺構完掘状態(東より)



V-2区 上面遺構完掘状態(上空より)



V-2区 下面遺構完掘状態(北西より)



V-2区 西部南壁セクション(北より)



V-2区ヒノキ出土状態(29地点分析試料)



SK-501 (南より)



SD-501 (北西より)

図版 130



SD-501 (南東より)



SD-501 (西より)



SD-501 網状流路 (東より)



SD-501 網状流路 (北東より)

図版 132



SD-502 (西より)



SD-503・504 (北西より)



SD-502 弥生土器甕 (5115) 出土状態



SD-509 弥生土器甕 (5119) 出土状態



SK-504 (北東より)



SK-506 (南東より)



SD-511・512 (南東より)



SD-512 (南より)



SD-514(南より)



SD-515(南より)



SD-516(南より)



SD-518(西より)



SD-519(西より)



SD-519(西より)



SD-519(西より)



SD-520(南より)

図版 134



SD-522 (南西より)



SD-526 瓦質土器三足鍋 (5136) 出土状態



SD-529 (南西より)



SD-536 (西より)



SU-501 (北東より)



SU-502 (北より)



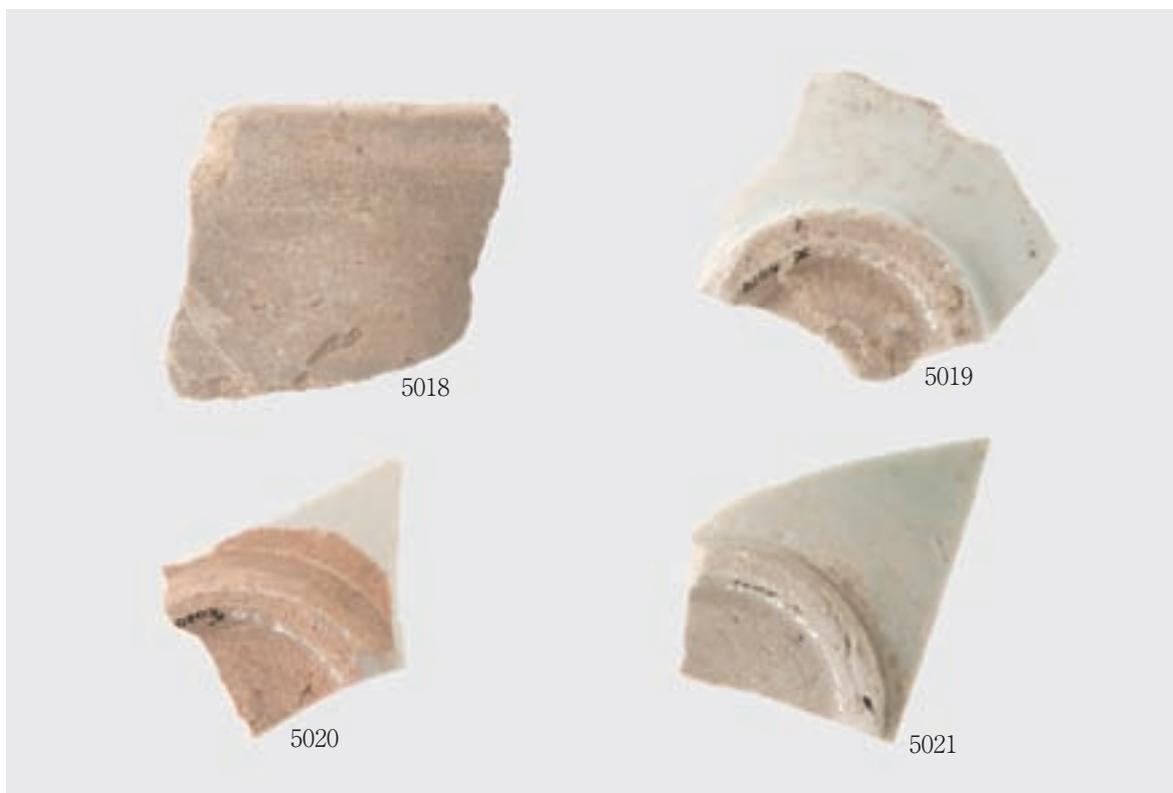
V-2区 西部下層トレンチセクション (北西より)



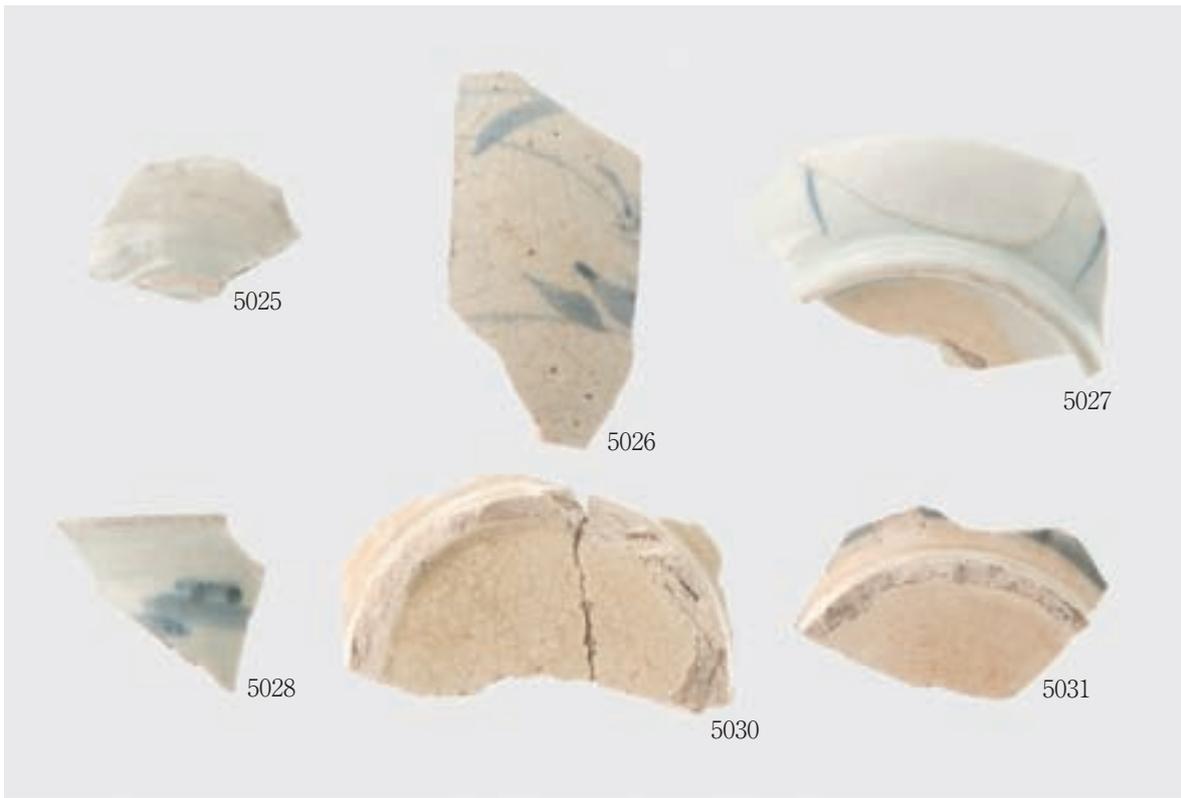
V-2区 西部下層トレンチセクション (北より)



須恵器 (杯蓋・壺)



東播系須恵器 (片口鉢), 白磁 (碗)



肥前系磁器(丸碗・広東茶碗・猪口), 瀬戸・美濃系陶器(広東茶碗)



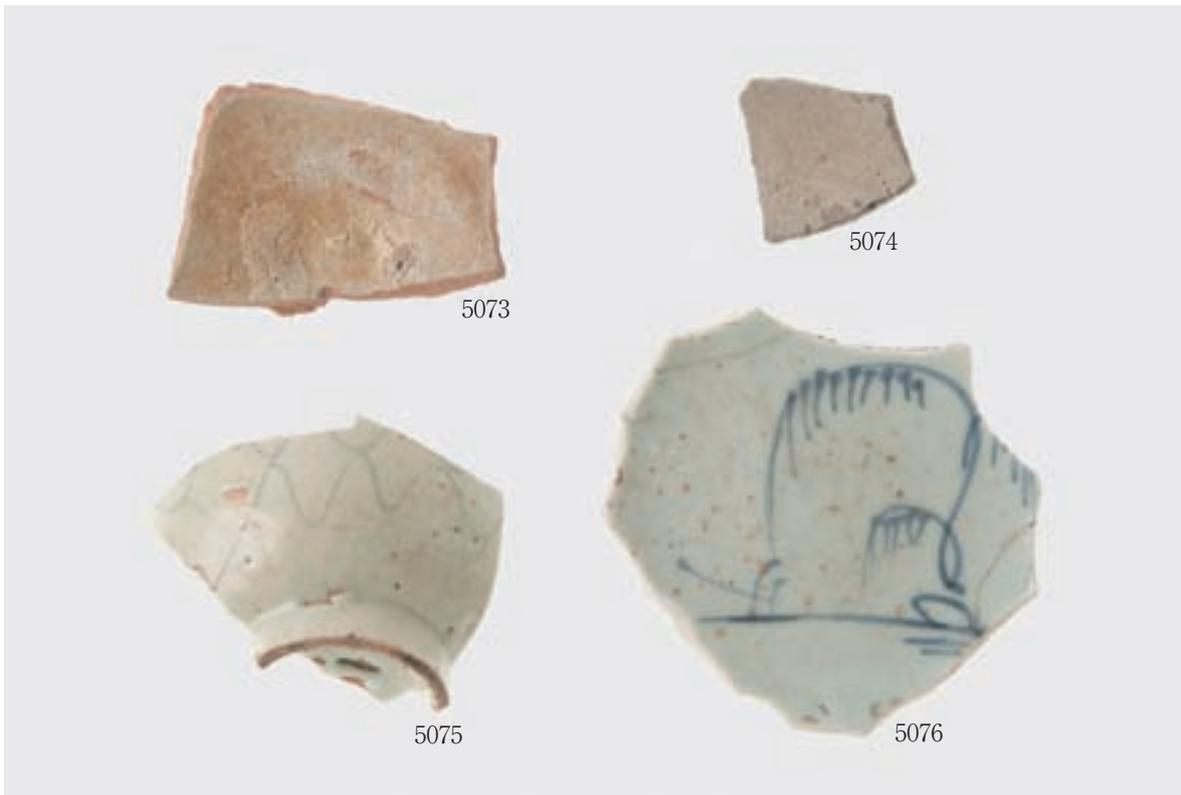
金属製品(煙管)



須恵器 (杯身・杯・壺)



瓦質土器 (鍋・羽釜・三足鍋)



肥前系陶器(碗), 肥前系磁器(碗・皿)



瀬戸・美濃系陶器(菊碗), 近世陶器(碗・皿), 近世陶磁器(碗)



弥生土器(壺・甕)



弥生土器(壺・甕)

図版 140



弥生土器(壺・甕), 土師質土器(杯), 瓦質土器(三足鍋)



須恵器(杯身), 土師質土器(杯), 瓦器(椀)



5010



5022



5090



5094



5111



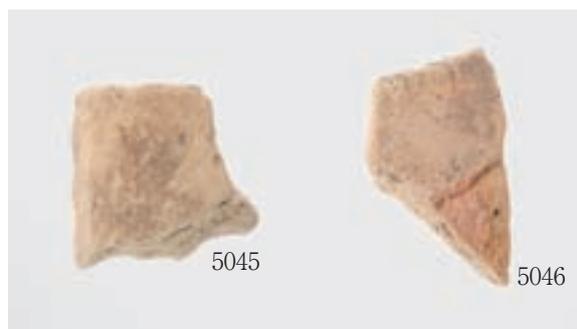
5119

弥生土器(甕), 土師器(焙烙), 肥前系陶器(皿), 石製品(石斧・叩石)

図版 142



弥生土器(壺・甕), 土師質土器(杯), 瓦質土器(三足鍋), 近世陶器(丸碗), 近世陶磁器(天目茶碗・播鉢)



弥生土器(壺), 土師器(羽釜・焙烙), 土師質土器(小皿), 肥前系陶器(皿), 肥前系磁器(紅皿), 瓦(平瓦), 石製品(石庖丁), 古銭

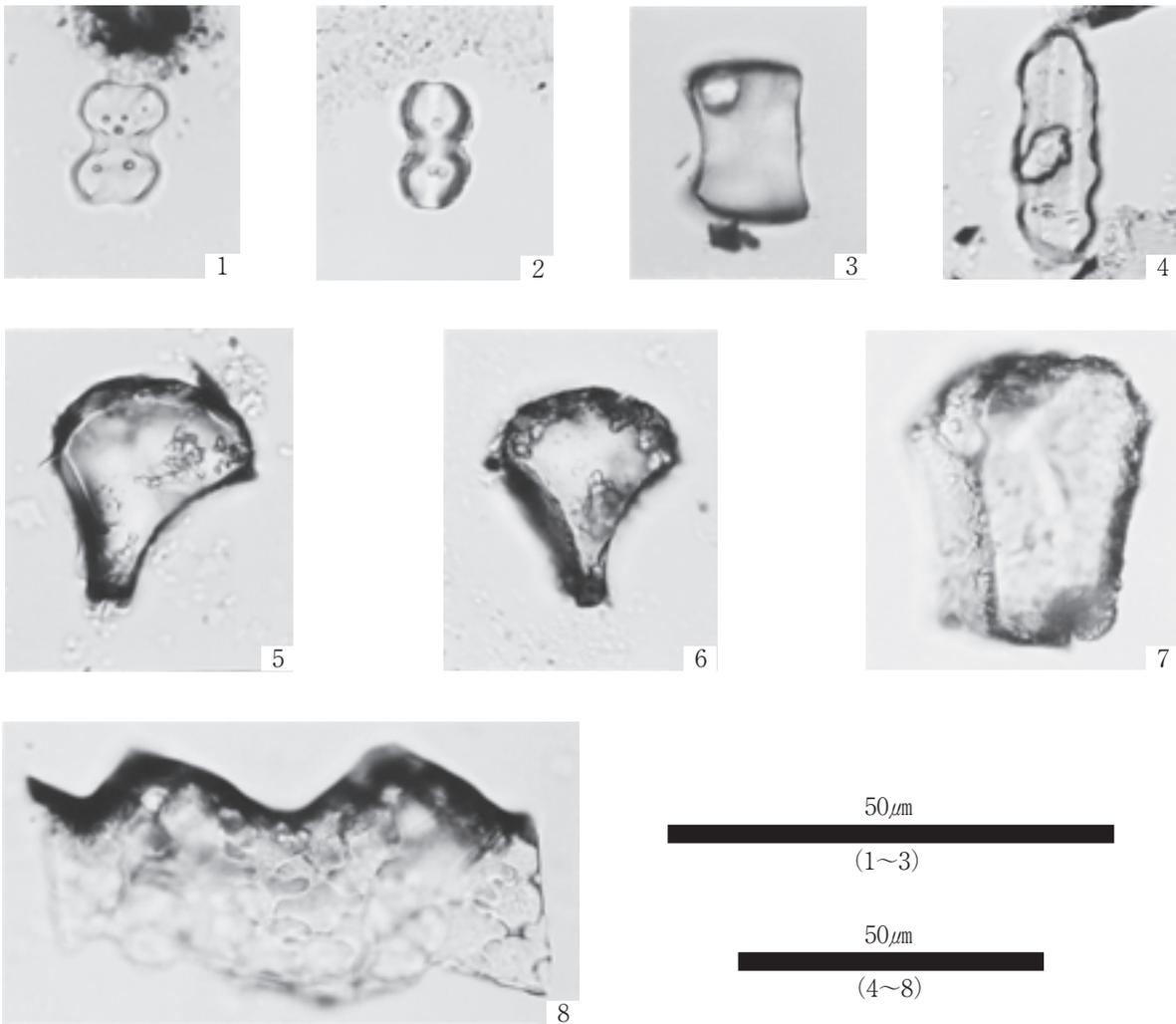
图版 144



弥生土器(壺・甕), 土師質土器(杯・小皿), 青磁(碗), 近世陶磁器(皿), 近代磁器(皿), 金属製品(煙管)

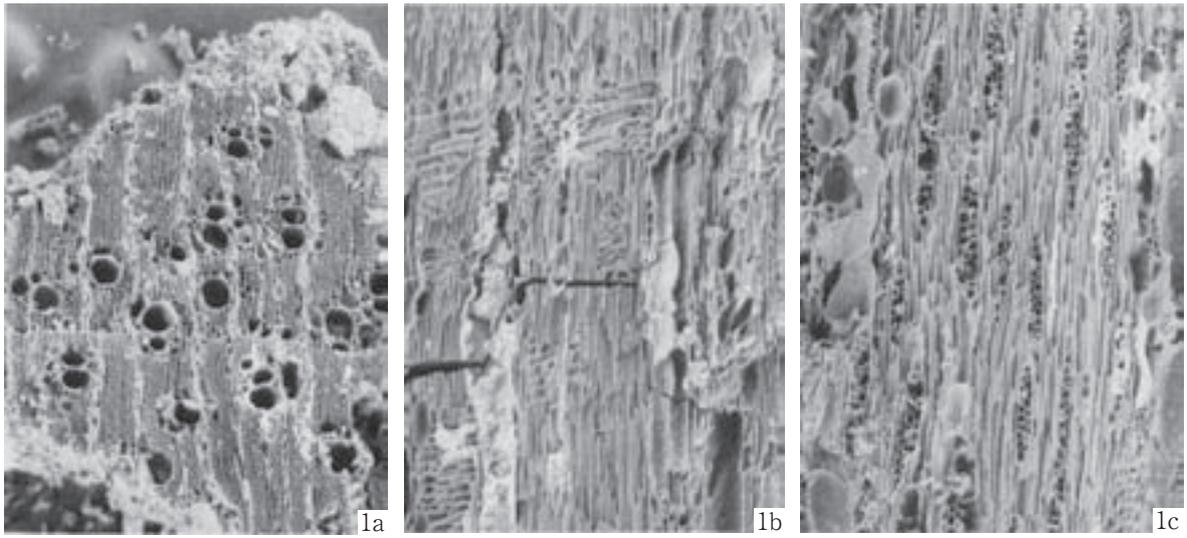
# 自然科学分析





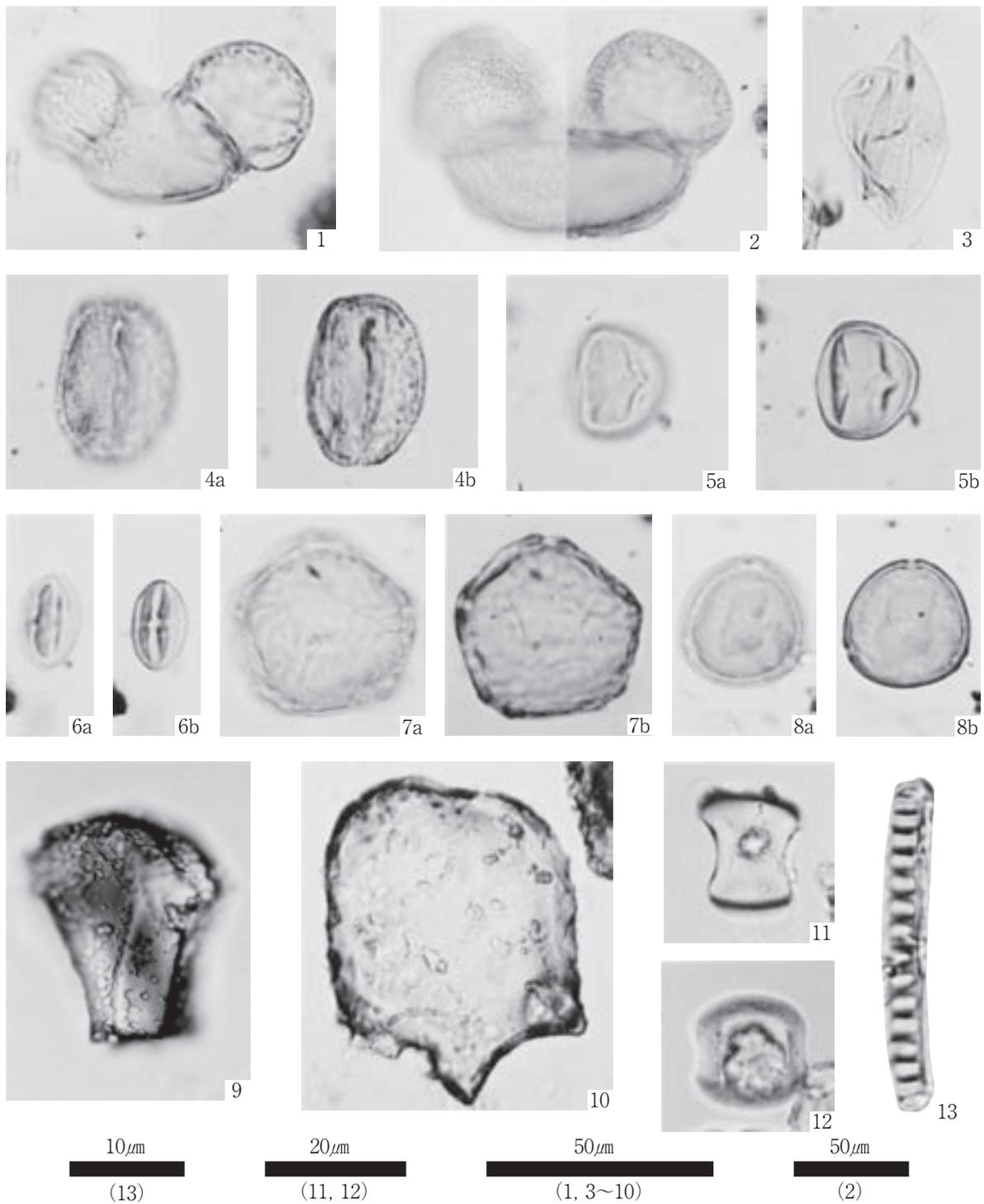
1. イネ属短細胞珪酸体 (Ⅲ区 SD-3025; 4)
2. イネ属短細胞珪酸体 (Ⅲ区 7地点; 1)
3. ネザサ節短細胞珪酸体 (Ⅲ区 7地点; 1)
4. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (Ⅲ区 SD-3025; 4)

5. イネ属機動細胞珪酸体 (Ⅲ区 SD-3025; 4)
6. イネ属機動細胞珪酸体 (Ⅲ区 7地点; 1)
7. ネザサ節機動細胞珪酸体 (Ⅲ区 7地点; 1)
8. イネ属穎珪酸体 (Ⅲ区 SD-3025; 4)



1. タブノキ属 (Ⅲ区:P-379)  
a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 $\mu$ m : a  
200 $\mu$ m : b, c



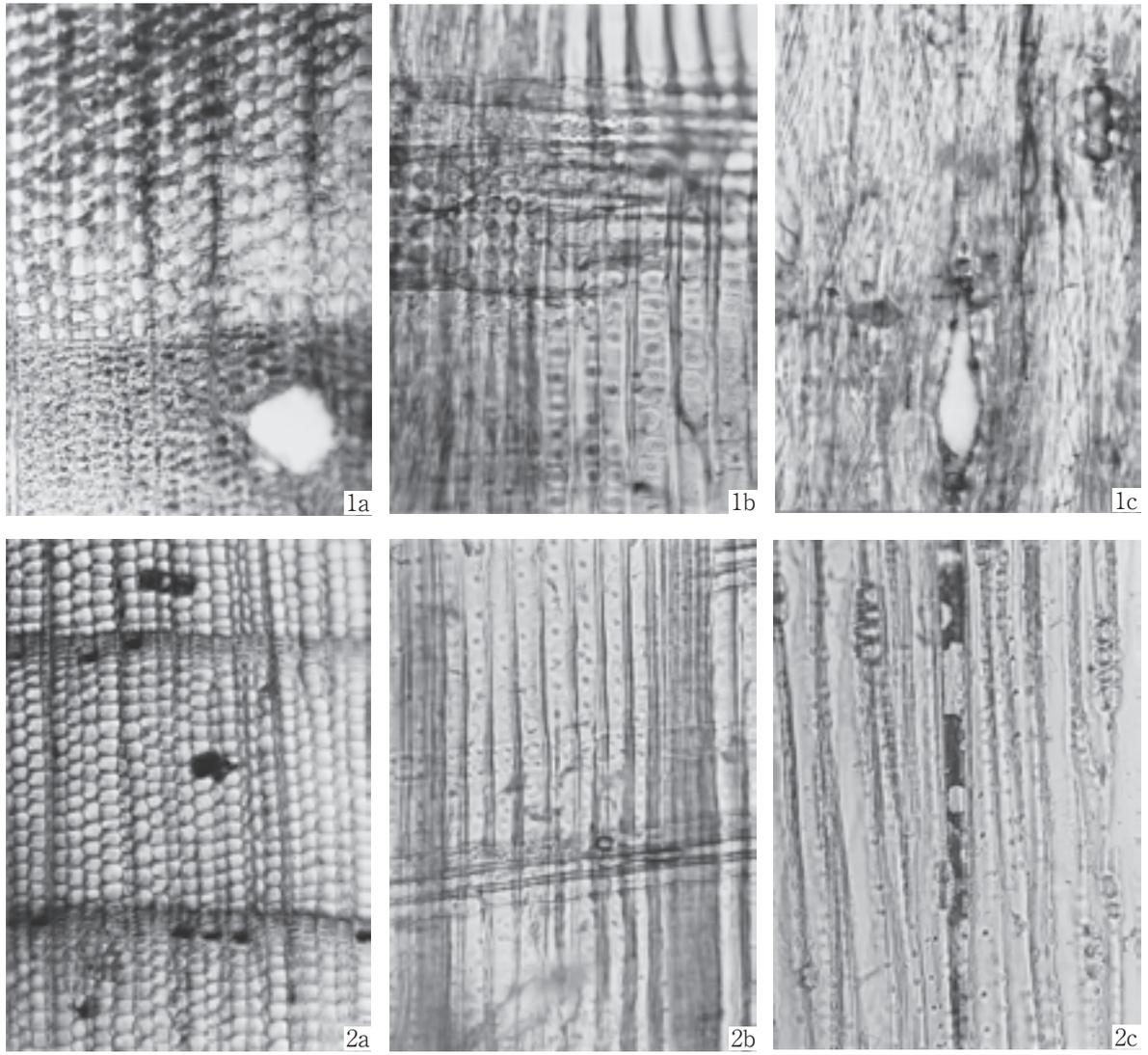
- |                             |   |
|-----------------------------|---|
| 1. マキ属 (V区V層中部)             | 8. エノキ属-ムクノキ属 (V区V層中部)                            |
| 2. モミ属 (V区V層中部)             | 9. ネザサ節機動細胞珪酸体 (V区IVK層)                           |
| 3. イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科 (V区V層中部) | 10. ヨシ属機動細胞珪酸体 (V区IVK層)                           |
| 4. コナラ亜属 (V区V層中部)           | 11. ネザサ節短細胞珪酸体 (V区IVK層)                           |
| 5. アカガシ亜属 (V区V層中部)          | 12. ヨシ属短細胞珪酸体 (V区IVK層)                            |
| 6. シイノキ属 (V区V層中部)           | 13. <i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg (V区IVH層) |
| 7. ニレ属-ケヤキ属 (V区V層中部)        |   |

花粉化石・植物珪酸体・珪藻化石 (平成17年度実施分)

図版 148



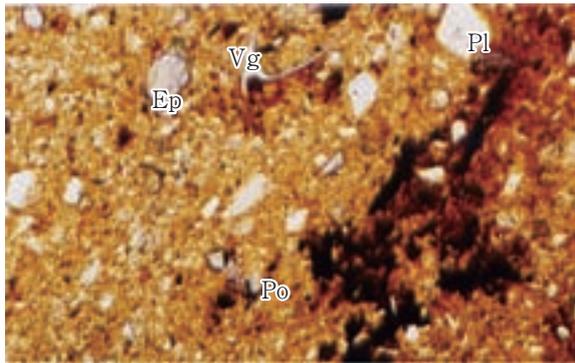
1. ウマ右上顎第3後臼歯 (V区; 攪乱)
2. ウマ右上顎第2後臼歯 (V区; II層1)
3. ウマ右上顎第1後臼歯 (V区; P-501)
4. ウマ左上顎第3前臼歯 (V区; II層2)
5. ブタ左第3中手骨 (I区; P-103)



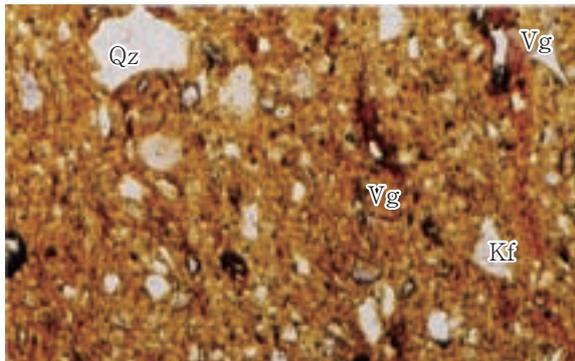
1. アカマツ (Ⅲ区 P-304)  
2. ヒノキ (Ⅴ区Ⅴ層最上部出土木材)  
a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 $\mu$ m : a  
100 $\mu$ m : b, c

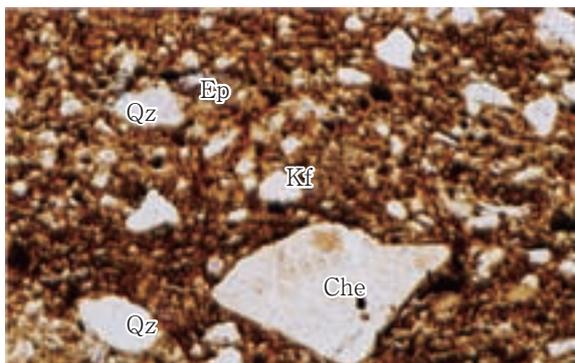
木材 (平成 17 年度実施分)



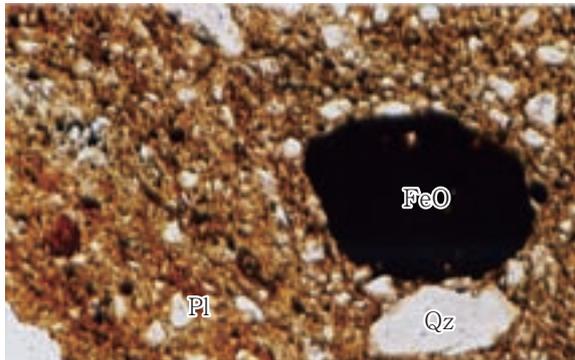
1. 試料番号8 (II区 SB-225 土師器小皿 (2263) 9C後~10C初)



2. 試料番号9 (II区 SB-225 土師器小皿 (2264) 9C後~10C初)



3. 試料番号10 (II区 SD-216 土師器皿 (2187) 9C後半)

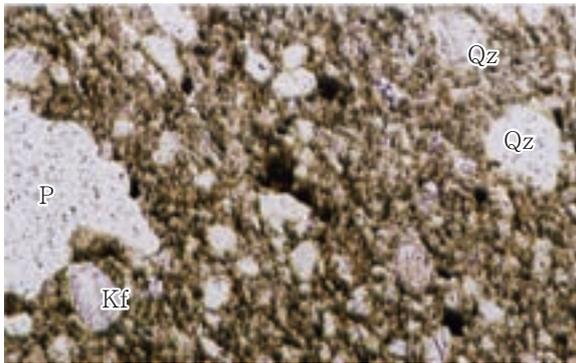


4. 試料番号11 (II区 SD-218 土師器杯 (2205) 9C後半)

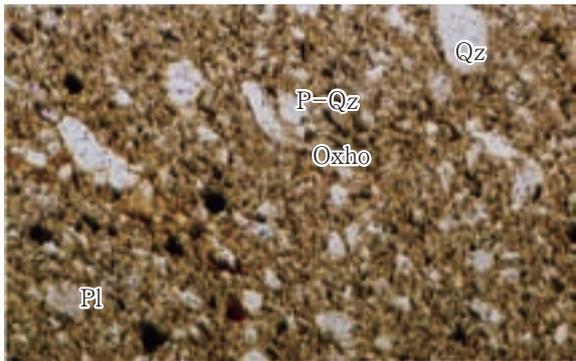
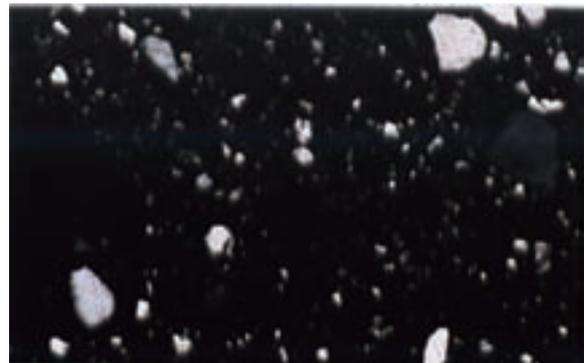
Qz: 石英    Pl: 斜長石    Kf: カリ長石    Ep: 緑レン石  
 Che: チャート    Vg: 火山ガラス    FeO: 酸化鉄    Po: 植物珪酸体

写真左列は下方ポーラー, 写真右列は直交ポーラー  
 胎土薄片1 (平成17年度実施分)

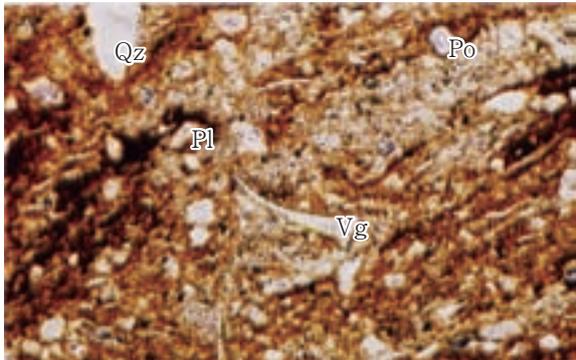
0.5mm (4)    0.2mm (1~3)



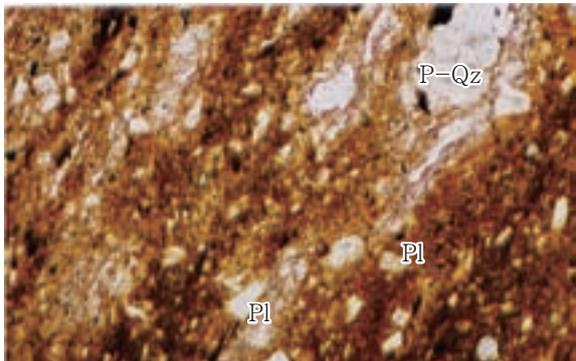
5. 試料番号12 (Ⅱ区 P-222 須恵器高杯 (2237) 9C前半)



6. 試料番号13 (Ⅱ区 P-284 土師質土器碗 (2400) 12C)



7. 試料番号14 (Ⅱ区 SD-215 土師器杯 (2176) 9C前半)



8. 試料番号15 (Ⅱ区 SK-252 土師器高杯 (2269) 9C)

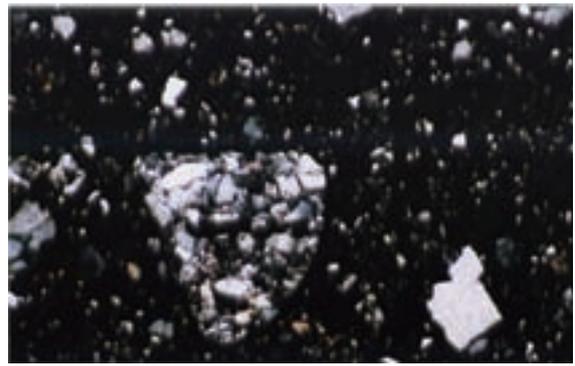
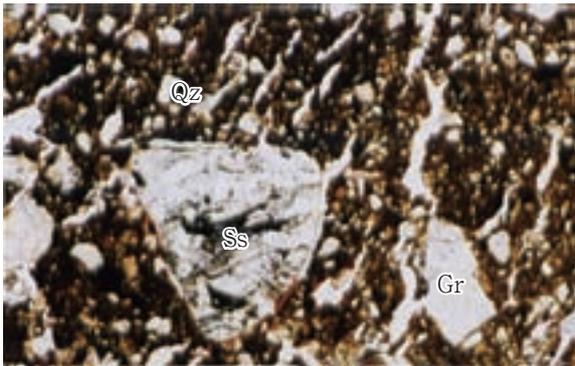


Qz: 石英      Pl: 斜長石      Oxho: 酸化角閃石  
 Vg: 火山ガラス      Kf: カリ長石      Po: 植物珪酸体

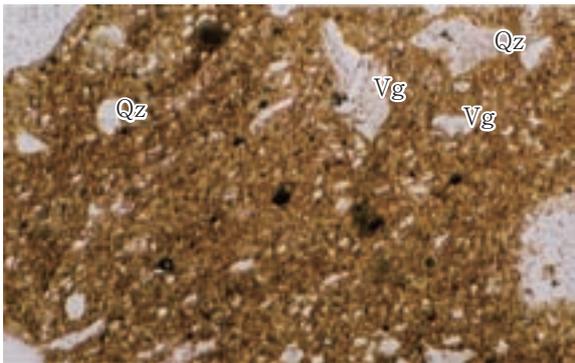
P-Qz: 多結晶石英  
 P: 孔隙

0.5mm

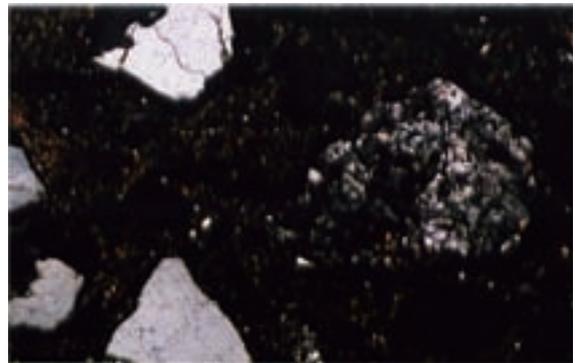
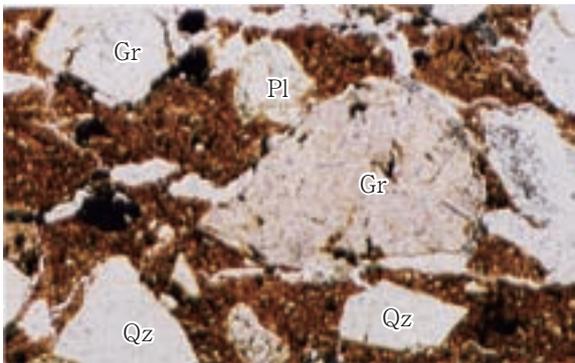
写真左列は下方ポーラー, 写真右列は直交ポーラー下  
 胎土薄片2 (平成17年度実施分)



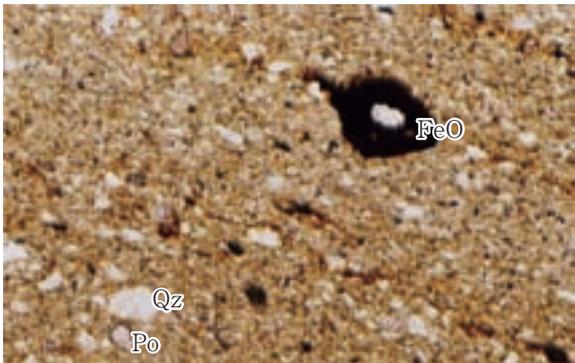
9. 試料番号16 (Ⅲ区 SD-3018 土師器甕 (3133) 6C後~7C前半)



10. 試料番号17 (Ⅲ区 SD-3029 土師質土器杯 (3252) 10C前半)



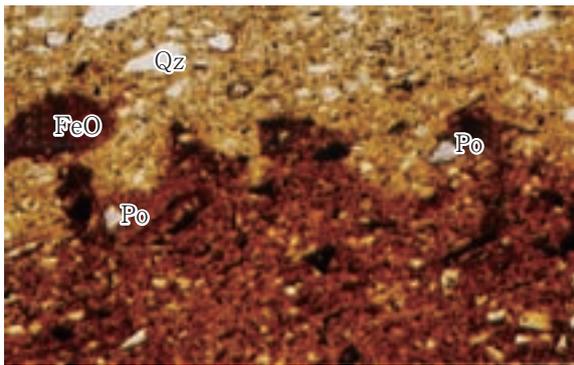
11. 試料番号18 (Ⅲ区 SD-3071 土師器甕 (3389) 10C前半)



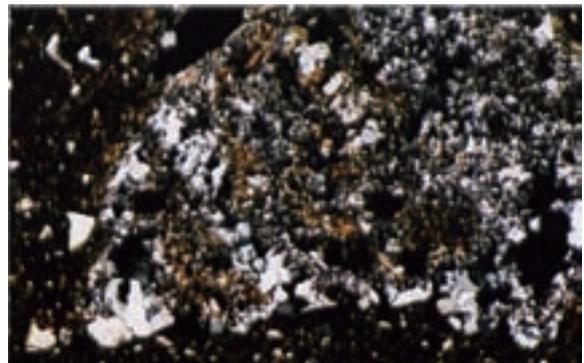
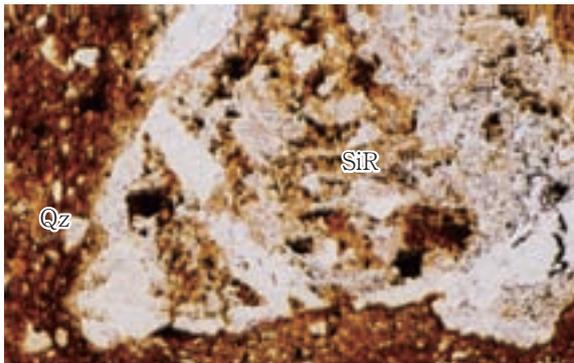
12. 試料番号19 (Ⅲ区 SK-356 土師質土器杯 (3207) 14C前半)

Qz: 石英      Pl: 斜長石      Gr: 花崗岩  
 Vg: 火山ガラス      FeO: 酸化鉄      Po: 植物珪酸体  
 写真左列は下方ポーラー, 写真右列は直交ポーラー下

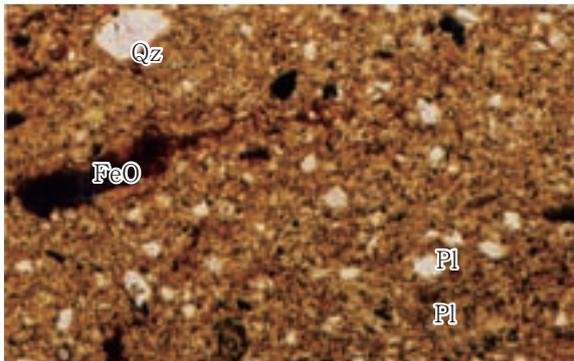
Ss: 砂岩      0.5mm      0.2mm  
 (9~11)      (12)



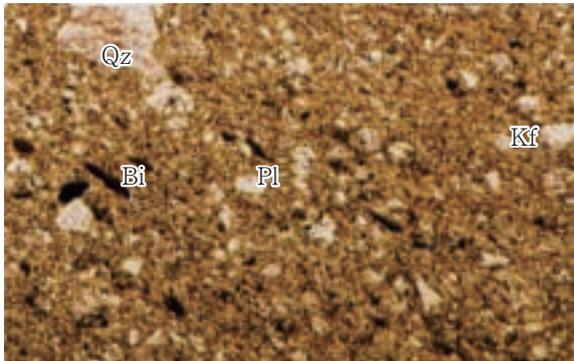
13. 試料番号20(Ⅲ区 SB-325 土師質土器杯(3181) 12C後半)



14. 試料番号21(Ⅲ区 SD-3050 土師器高杯(3351) 9C後半)



15. 試料番号22(Ⅲ区 SK-356 土師質土器小皿(3210) 14C前半)



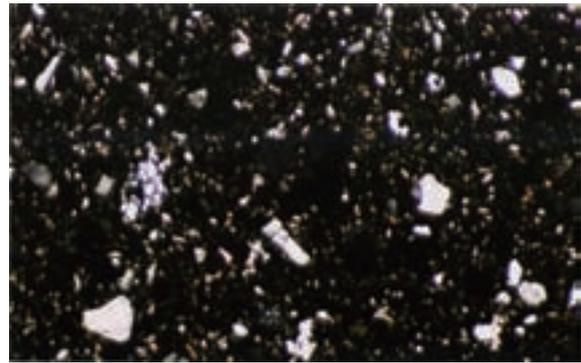
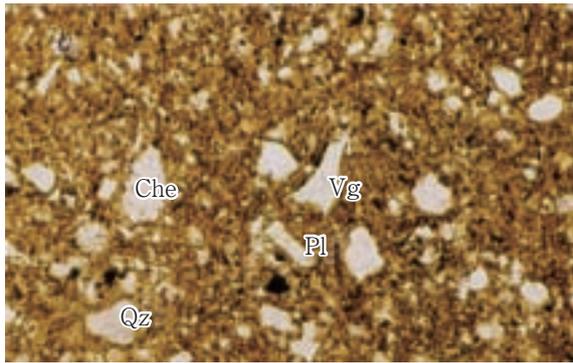
16. 試料番号23(Ⅲ区 SD-3034 須恵器椀(3286) 10C前半)

Qz: 石英      Pl: 斜長石      Kf: カリ長石  
 SiR: 珪化岩      FeO: 酸化鉄      Po: 植物珪酸体  
 写真左列は下方ポーラー, 写真右列は直交ポーラー下

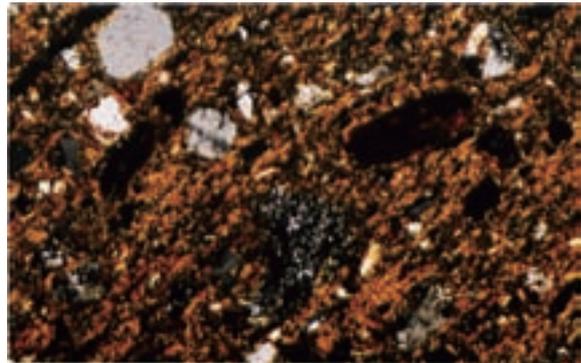
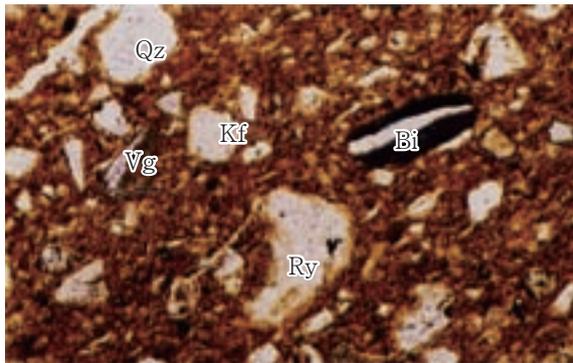
Bi: 黒雲母

0.5mm  
 (14, 16)

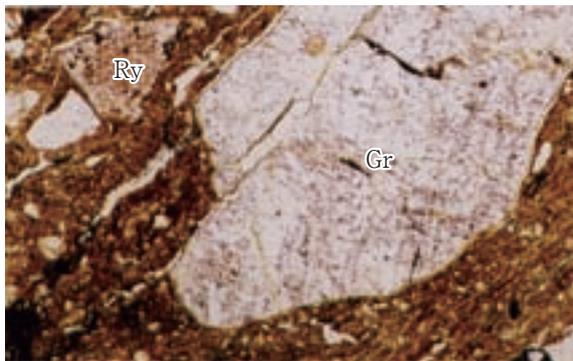
0.2mm  
 (13, 15)



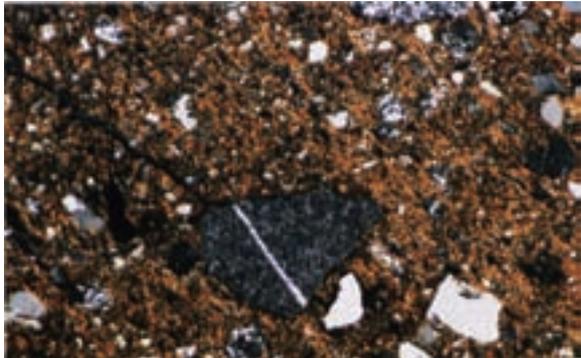
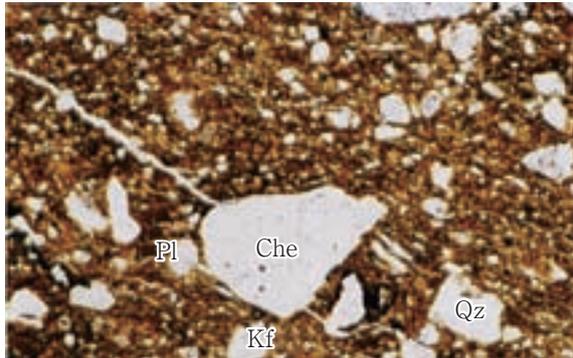
17. 試料番号24 (Ⅲ区 SD-3034 土師質土器碗 (3326) 10C前半)



18. 試料番号25 (Ⅲ区 SD-3034 土師質土器小杯 (3308) 10C前半)



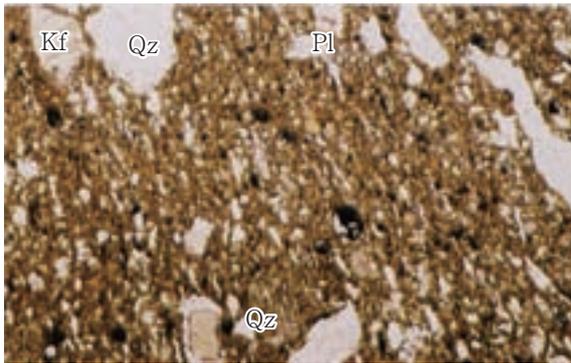
19. 試料番号26 (Ⅲ区 SD-3034 土師器羽釜 (3270) 10C前半)



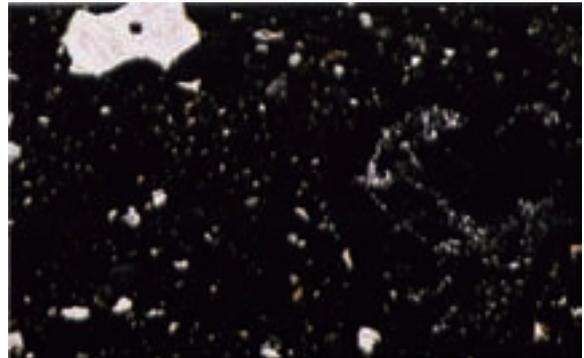
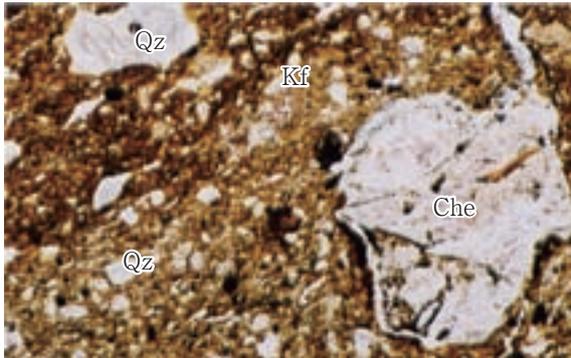
20. 試料番号27 (Ⅲ区 SD-3034 土師質土器皿 (3323) 10C前半)

Qz: 石英      Pl: 斜長石      Kf: カリ長石  
 Gr: 花崗岩      Ry: 流紋岩      Che: チャート  
 写真左列は下方ポーラー, 写真右列は直交ポーラー下

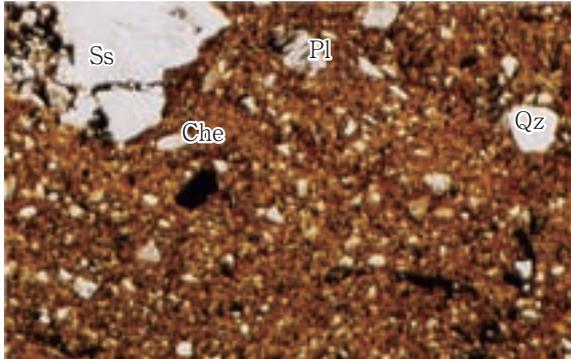
Bi: 黒雲母      0.5mm      0.2mm  
 Vg: 火山ガラス      (19, 20)      (17, 18)



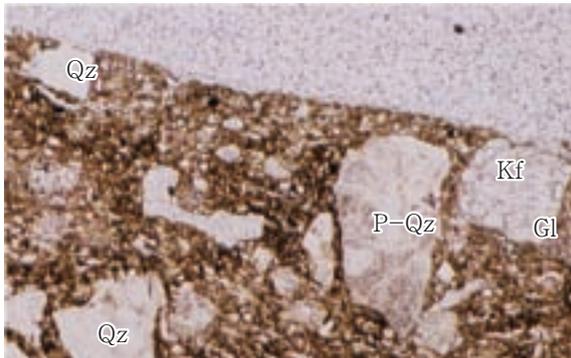
21. 試料番号28 (Ⅲ区 SD-3034 須恵器甕 (3293) 9C後半)



22. 試料番号29 (Ⅲ区 SD-3034 黒色土器碗 (3343) 10C前半)



23. 試料番号30 (Ⅲ区 SD-3034 土師質土器小杯 (3303) 10C前半)



24. 試料番号31 (Ⅲ区 SD-3034 須恵器高杯 (3288) 9C後半)

Qz: 石英    Pl: 斜長石    Kf: カリ長石    Ss: 砂岩

Che: チャート    P-Qz: 多結晶石英    Gl: 熔融ガラス

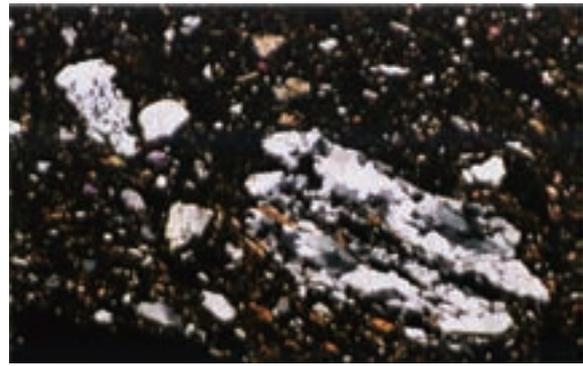
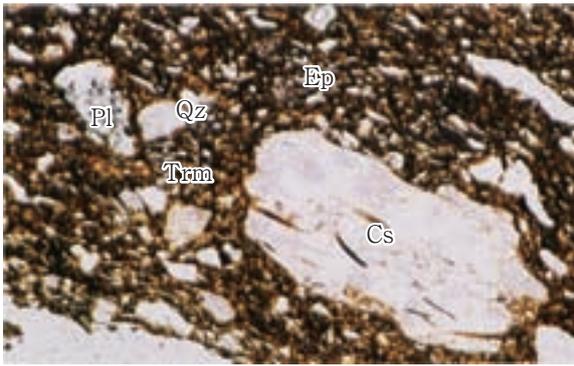
写真左列は下方ポーラー, 写真右列は直交ポーラー下

胎土薄片6 (平成17年度実施分)

0.5mm



図版 156



25. 試料番号32 (Ⅲ区 SD-3003 庄内系礫 (3106) 弥生終末)

Qz: 石英      Pl: 斜長石      Ep: 緑レン石      Trm: 電気石

Cs: 結晶片岩

写真左列は下方ポーラー, 写真右列は直交ポーラー下

0.5mm



## 報告書抄録

ふりがな	にしこのいせきに							
書名	西野々遺跡Ⅱ							
副書名	高知南国道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第117集							
編著者名	廣田佳久, 曾我貴行, 小野由香, パリノ・サーヴェイ株式会社							
編集機関	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	高知県南国市篠原南泉1437-1							
発行年月日	2011年1月21日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
にしこのいせき 西野々遺跡	〒783-0005 高知県南国市 おおそねあざにしこのたけなか 大埴字西野々・竹中	39204	040283	33° 33' 36"	133° 38' 32"	2004.9.13 ～ 2005.3.5 2005.5.9 ～ 2006.1.16	19,681 m <sup>2</sup>	一般国道 55号線自 動車専用道 路建設工事
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
西野々遺跡	集落跡 官衙関連遺跡	弥生時代 古代 中世	竪穴状遺構 1軒 掘立柱建物跡 55棟 塀・柵列跡 7列 土坑 132基 溝跡 213条 井戸跡 2基 畝状遺構 29列 性格不明遺構 2基 ピット 3,657個	弥生土器 土師器 須恵器 土師質土器 灰釉陶器 黒色土器 瓦器 瓦質土器 青磁 近世陶磁器 土製品 石製品	弥生時代から中 世にかけての灌漑 用水路とみられる 多数の溝跡, 奈良 時代末から平安時 代前半の官衙関連 建物群, 中世の屋 敷跡, 周溝を持つ 中世墓などを確認 する。			
要約	<p>西野々遺跡は、物部川の氾濫でできた網状流路によって縄文時代前期後半までに形成されたと考えられる沖積扇状地および自然堤防状の高まり上に立地する弥生時代から中世にかけての遺跡である。この中で、遺跡の中心部は微高地が最も広いⅠ区から東のⅦ区までにみられる。本書で報告するⅢ～Ⅴ区は西野々遺跡の西の外れに位置するが、Ⅲ区中央部からⅣ区にかけても微高地が形成されており、比較的多くの遺構が検出されている。</p> <p>今回の調査区で注目されるのは灌漑用水路として機能したと考えられる多数の溝跡であろう。弥生時代中期前半に設置が始まり、中世まではほぼ同じ場所で繰り返し掘削され、5条の溝跡が重複した箇所もみられた。また、弥生時代の溝跡の中には総延長が400mを越すものもあった。</p> <p>古代には概ね5カ所に官衙関連とみられる掘立柱建物跡が建てられており、中には梁行が3間の建物もみられた。</p> <p>中世には溝で区画された屋敷跡が3カ所から確認されている。溝などで圍繞されたものではなく部分的に溝で区画されたもので、屋敷地は200～400m<sup>2</sup>とみられることから一般百姓層のものと考えられる。一方、周溝を持つ特殊な墓(方形区画墓)がⅢ区で確認されており、その出自が注目される。</p>							



本書作成データ

ハード：MacPro 2×2.8GHz Quad-Core Intel Xeon, iMac2.4GHz Intel Core2 Duo, PowerMacG5/Dual2.0GHz,  
PowerBookPro/2.5GHz

システム：MacOS X (10.6.4)

ソフト：JeditX2.26, Microsoft Excel Mac2008, ProofReader2.1.0, Adobe Photoshop®10.0.1, Adobe  
Illustrator®13.0.3, Adobe Indesign®5.0.4J

フォント：モリサワOTF基本7書体, Times Italic

プリンタ：DocuPrint C3540 (文書校正)

データ：Macintosh Full DTPで入稿

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第117集

## 西野々遺跡Ⅱ

高知南国道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ  
(高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ)

2011年1月21日

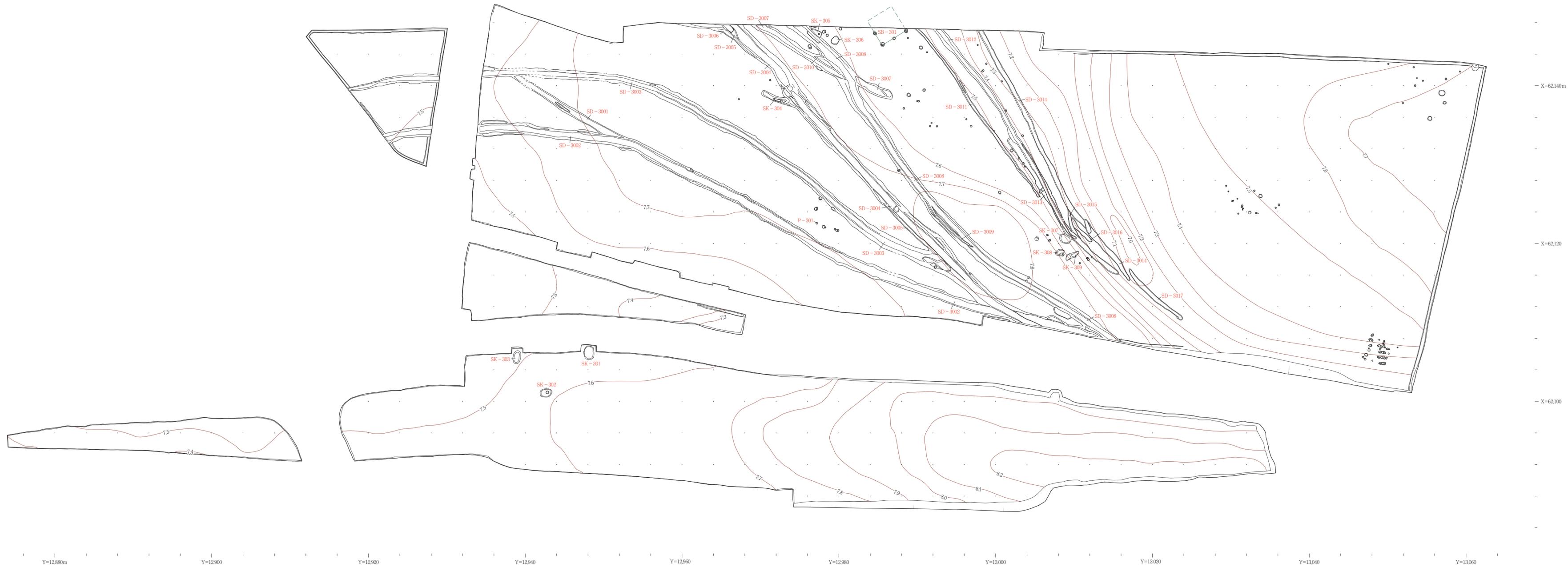
発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県南国市篠原南泉1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 共和印刷株式会社

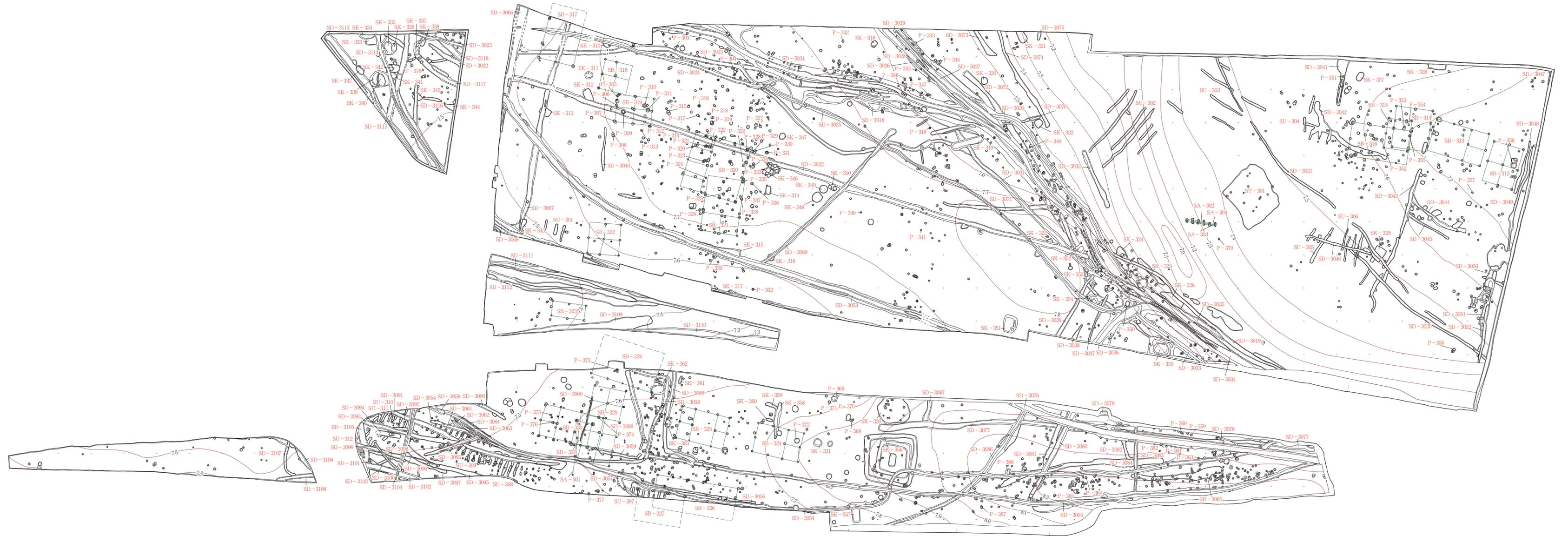




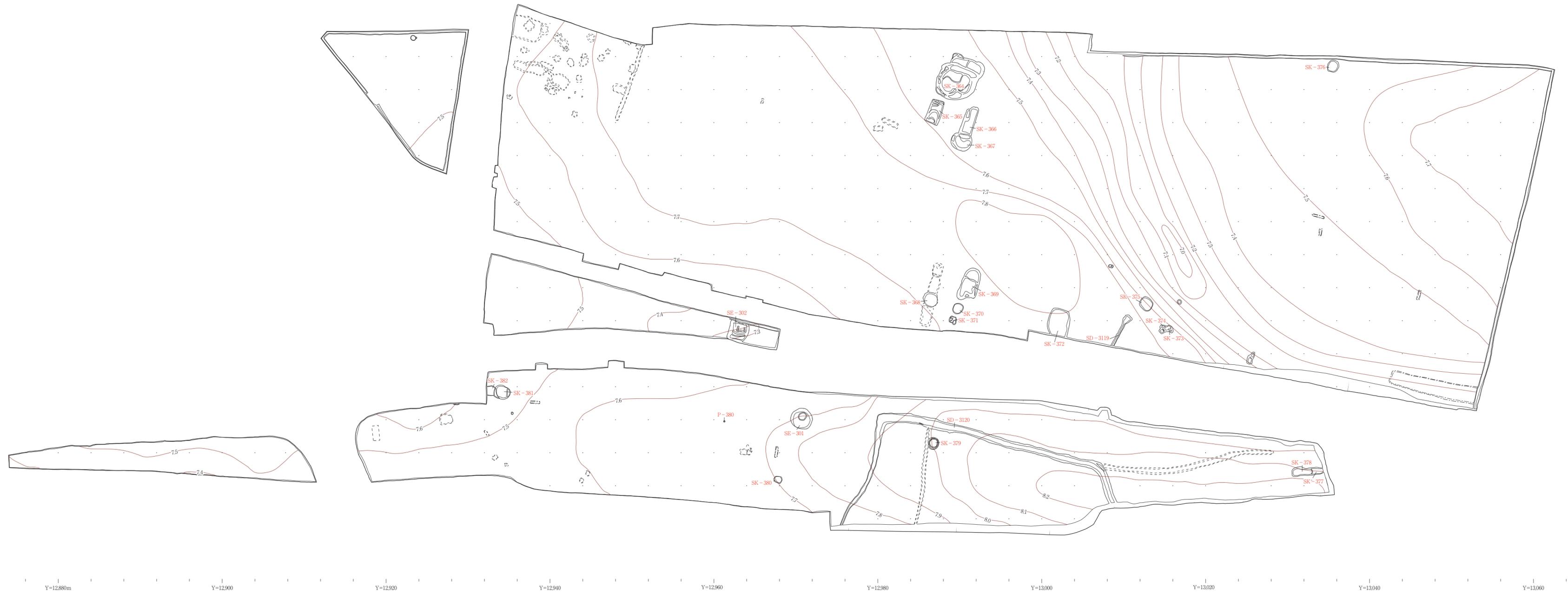
付図1 西野々遺跡第Ⅲ調査地区(Ⅲ区)弥生時代遺構平面図(S=1/300)



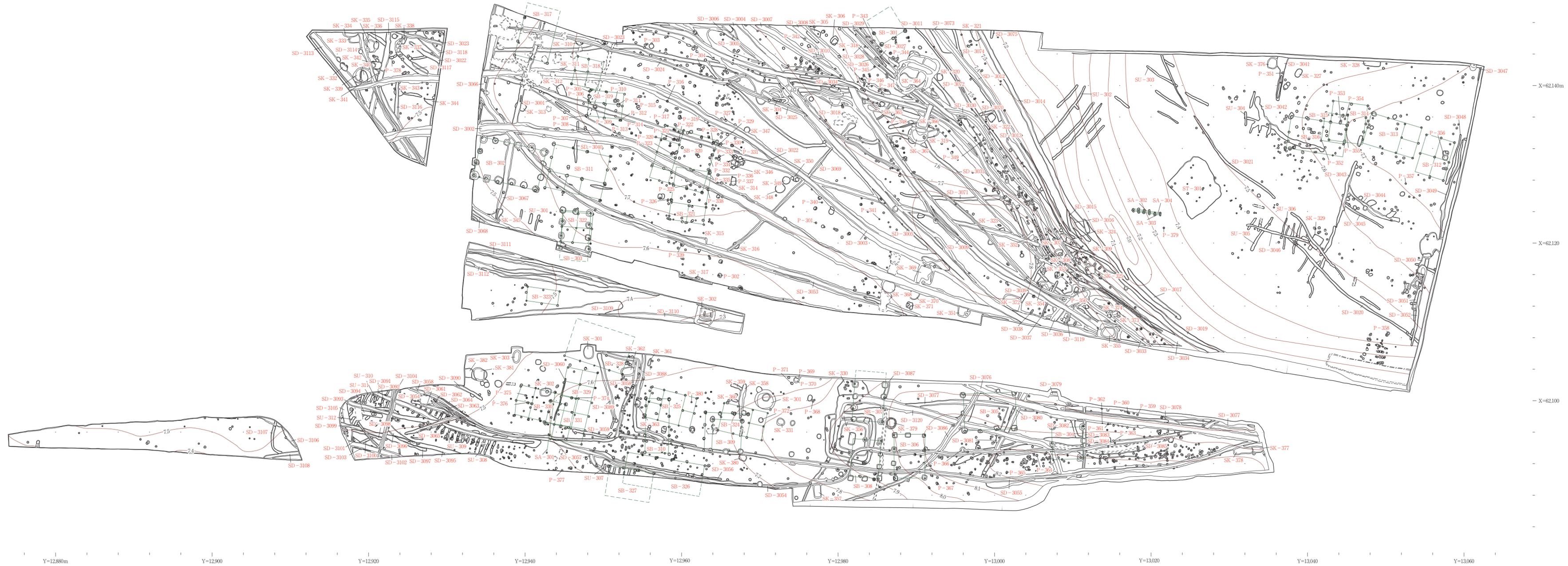
付図2 西野々遺跡第Ⅲ調査地区(Ⅲ区)古代遺構平面図(S=1/300)



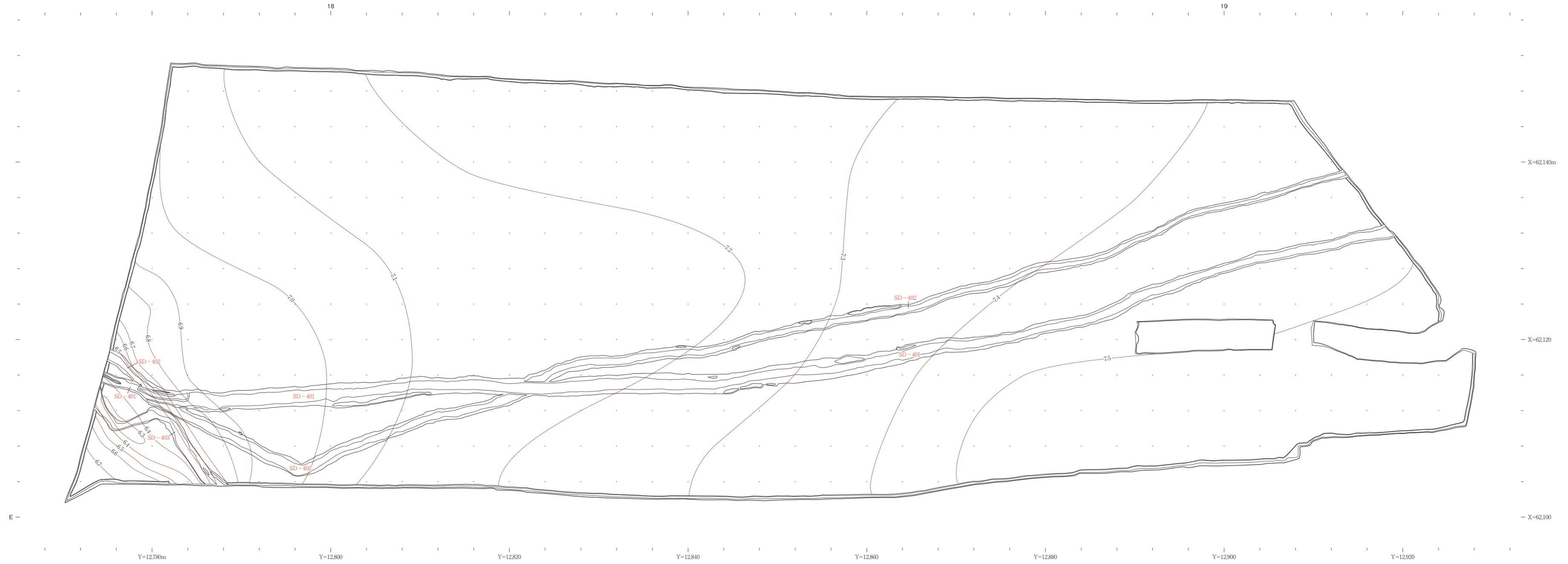
付図3 西野々遺跡第Ⅲ調査地区(Ⅲ区)古墳時代・中世遺構平面図(S=1/300)



付図4 西野々遺跡第Ⅲ調査地区(Ⅲ区)近世以降遺構平面図(S=1/300)



付図5 西野々遺跡第Ⅲ調査地区(Ⅲ区)遺構平面図(S=1/300)



付図6 西野々遺跡第IV調査地区(IV区)弥生時代遺構平面図(S=1/300)

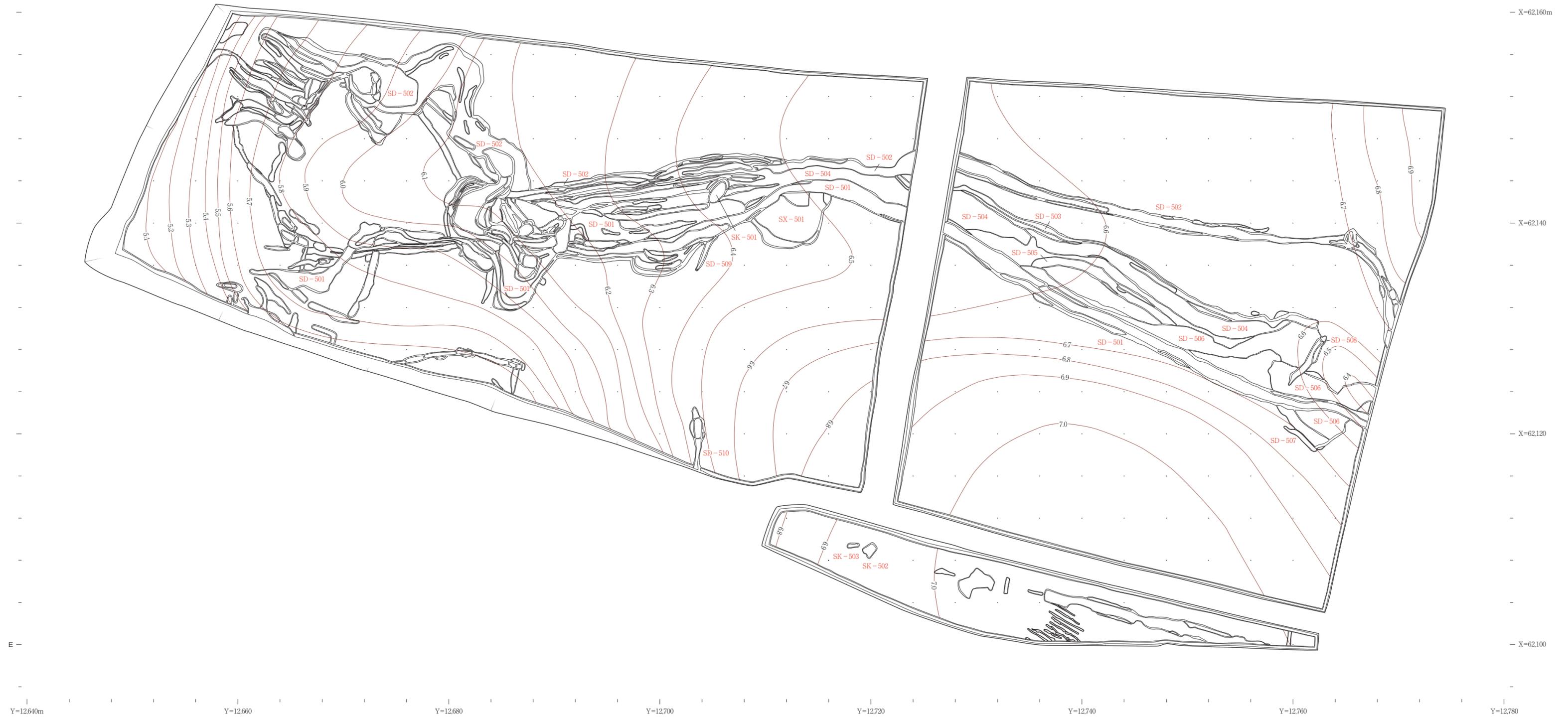


付図7 西野々遺跡第IV調査地区(IV区)古代遺構平面図(S=1/300)





付図9 西野々遺跡第IV調査地区(IV区)遺構平面図(S=1/300)



付図10 西野々遺跡第V調査地区(V区)弥生時代遺構平面図(S=1/300)



